

^む^か^わ
鷓川町

^よ^ね^は^ら 米原 4 遺跡(3)・^み^や^と 宮戸 4 遺跡(3)

—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

鷓川町

米原 4 遺跡(3)・宮戸 4 遺跡(3)

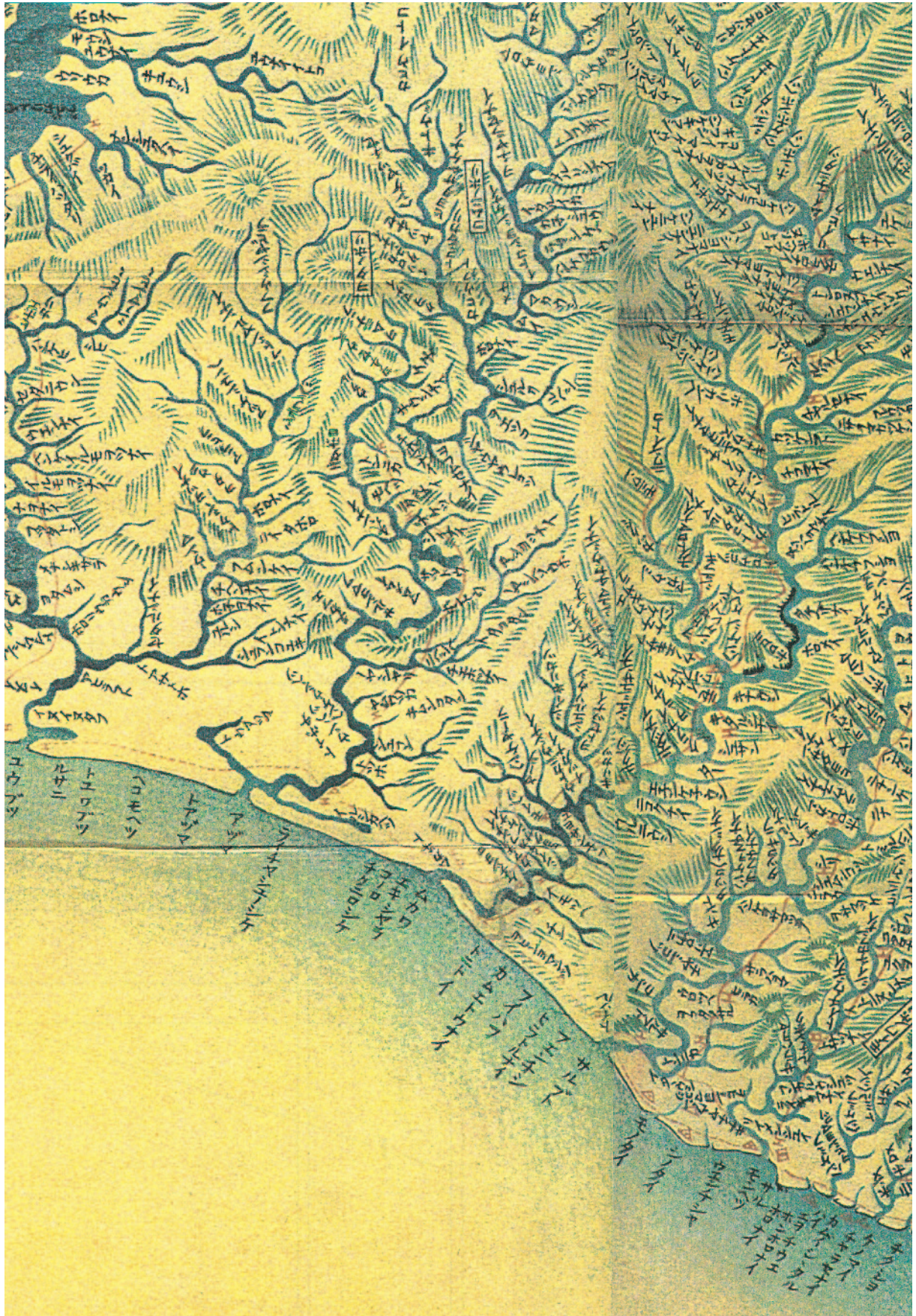
—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 遺跡と遺跡周辺の空中写真（国土地理院発行のものを複製したものである）1975年撮影



1. 東西蝦夷山川地理取調図 五・六 松浦竹四郎 著



1. 米原 4 遺跡調査風景（南東から）



2. 宮戸 4 遺跡樹林部分調査風景（西から）

口絵 4



1. 宮戸 4 遺跡町道部分調査風景（西から）



2. 基本土層



3. 「ヒスイ」製遺物産地分析試料

例 言

1. 本書は国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行なう日高自動車道厚真門別道路工事に伴い財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成15年度に実施した鷓川町米原4遺跡、同宮戸4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。鷓川町内での報告書としては4冊目である。
2. 北海道教育委員会が調査を行った厚真町浜厚真3遺跡の報告についても、室蘭開発建設部の了解を得てここに収録した。
3. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
4. 本書の執筆はⅦ章を除いて遠藤香澄、笠原興、芝田直人、福井淳一、山中文雄が分担した。編集は笠原興が担当し総括した。文責は文末に記してある。
5. 遺物の整理は米原4遺跡の土器を遠藤、石器等を山中が担当した。宮戸4遺跡は土器を芝田、石器等を福井が担当した。
6. 現地調査の写真撮影は担当調査員が各自撮影し、笠原が一括して写真整理を行なった。また、整理作業時の遺物撮影は笠原が行なった。
7. 各種同定、分析などは下記に依頼した。
放射性炭素年代測定：株式会社 地球科学研究所
炭化種子：パリノ・サーヴェイ株式会社
「ヒスイ」製遺物の産地分析：遺物分析研究所
8. 土器、石器等の実測・トレースは藤内まゆみ、河崎まなみが行なった。
9. 調査報告終了後の出土資料および記録類については鷓川町教育委員会が保管する。
10. 調査にあたっては下記の諸機関、各位からご協力、御指導をいただいた。(順不同、敬称略)。
北海道教育委員会、国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部、盛興建設株式会社、相田開発株式会社、株式会社竹田組、鷓川町議会、鷓川町教育委員会 東和博 飛岡雅幸、ウタリ協会鷓川支部、鷓川町四季の館まなびランド図書室、門別町図書館郷土資料館 川内谷修 橋本晋 街道重昭、平取町沙流川歴史館 森岡健治、厚真町教育委員会 長橋政徳 乾哲也 小野哲也、日高山脈館 小野昌子、苫小牧市立博物館 吉田国吉 赤石慎三、苫小牧市教育委員会 兵藤千秋、苫小牧市勇武津資料館 佐藤一夫、松前町教育委員会 前田正憲、釧路市埋蔵文化財調査センター 西幸隆 松田猛 石川朗 加藤春雄、帯広百年記念館 北澤実 山原敏朗 西澤千鶴、国際縄文学会 関俊彦、青海町自然史博物館 宮崎和夫 茨木洋介、フォッサマグナミュージアム 宮島宏 木島勉 山岸洋一、新潟県立歴史博物館 戸根與八郎 宮尾亨、弘前大学 小岩直人

記号等の説明

1. 本文および図表中では、以下に示す記号を使用した。
P：土坑 TP：Tピット F：焼土 S：集石
2. 実測図の縮尺は、原則として以下のとおりであり、すべてにスケールを付けている。
遺構 1：40 遺物出土状況図 1：20 復原土器 1：3 土器拓本 1：3
土製品 1：2 剥片石器 1：2 磨製石斧 1：2 礫石器 1：3
3. 遺構図の出土遺物は下記の記号を使用した。
土器：○ 剥片石器：△ 礫石器：▽ 剥片：□ 礫・礫片：◇
4. 遺構図中の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。
5. 遺構の規模については以下の要領で示した。尚、一部破壊されているものについては現存長を（ ）で記し、不明のものは—で示した。
確認面での長軸長×短軸長／底面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深・最大厚（単位m）
6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。
7. 土層の記述には下記の記号、略称を用いた場合がある。
樽前 a 降下軽石堆積物：T a - a 樽前 b 降下軽石堆積物：T a - b
有珠 b 降下軽石堆積物：U s - b 白頭山—苫小牧火山灰：B - T m
樽前 c 降下軽石堆積物：T a - c 支笏第 1 降下軽石堆積物：S p f a - 1
クッタラ第一軽石流堆積物：K t - 1
8. 土層説明には『新版標準土色帖 19 版』（小山・竹原 1997）と『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロロジー学会編 1997）を引用した。
9. 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」（単位 c m）で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。
また、実測図中でたたき痕は「V-V」、すり痕は「|—|」で範囲を表した。
10. 表はVI章を別表一覧として一括したが、必要に応じて本文中に用いたものがある。

目 次

口絵

例言

記号等の説明

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	2
4 調査の経過と概要	2
5 調査結果の概要	3
(1) 米原4遺跡	3
(2) 宮戸4遺跡	4
II 遺跡の位置と環境	9
1 位置と環境	9
2 歴史的環境	11
3 周辺の遺跡	16
III 調査の方法、遺物の分類	21
1 発掘調査の方法	21
(1) 調査区の設定	21
(2) 調査の方法	21
2 地形と土層の区分	25
3 遺物の分類	31
(1) 土器	31
(2) 石器等	32
(3) 宮戸4遺跡の石器の整理	33
IV 米原4遺跡	35
1 遺構と遺構出土の遺物	35
(1) 概要	35
(2) 土坑	35
(3) Tピット	37
(4) 焼土	37
(5) 集石	39

2 包含層出土の遺物	43
(1) 土器	43
(2) 石器等	59
V 宮戸4遺跡	73
1 樹林部分の遺構と遺構出土の遺物	73
(1) 概要	73
(2) Tピット	73
(3) 焼土	80
2 道路部分の遺構と遺構出土の遺物	95
(1) 概要	95
(2) Tピット	95
(3) 焼土	97
3 包含層出土の遺物	101
(1) 土器	101
(2) 石器等	115
VI 別表一覧	135
VII 自然科学的手法による分析	151
1 宮戸4遺跡出土「ヒスイ」製遺物の産地分析	151
2 宮戸4遺跡 放射性炭素年代測定	157
3 宮戸4・米原4遺跡の種実同定	159
VIII まとめ	161
1 米原4遺跡	161
2 米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡のTピット群	163
3 石器から見た宮戸4遺跡	167
4 イモッペ川流域の遺跡群についてー4年間の調査の総括ー	171
写真図版	175
引用・参考文献	221
報告書抄録	224
附編 厚真町浜厚真3遺跡の調査	225

挿 図 目 次

I 調査の概要

図 I - 1	鷓川町の位置と遺跡位置図	1
図 I - 2	日高自動車道と遺跡の位置	6
図 I - 3	年度別調査範囲	7
図 I - 4	米原4遺跡・宮戸3遺跡・宮戸4遺跡 年度別・調査状況図	8

II 遺跡の位置と環境

図 II - 1	遺跡位置図	10
図 II - 2	50年前の地形図(1)	12
図 II - 3	50年前の地形図(2)	13
図 II - 4	5万分の1地形図	14
図 II - 5	「シモムカワ」周辺の地名	15
図 II - 6	鷓川町の遺跡分布図	19

III 調査の方法、遺物の分類

図 III - 1	調査区設定図	24
図 III - 2	土層断面図及び柱状図	28
図 III - 3	樹林部分の地形と土層	29
図 III - 4	米原4遺跡基本土層	30

IV 米原4遺跡

図 IV - 1	遺構位置図	36
図 IV - 2	P-7・8、TP-9	38
図 IV - 3	F-24~32	40
図 IV - 4	F-33~48	41
図 IV - 5	F-42~45、S-3	42
図 IV - 6	包含層出土土器分布図(1)	44
図 IV - 7	包含層出土土器分布図(2)	45
図 IV - 8	包含層出土の土器(1)	46
図 IV - 9	包含層出土の土器(2)	48
図 IV - 10	包含層出土の土器(3)	50
図 IV - 11	包含層出土の土器(4)	52
図 IV - 12	包含層出土の土器(5)	53
図 IV - 13	包含層出土の土器(6)	55
図 IV - 14	包含層出土の土器(7)	56
図 IV - 15	包含層出土の土器(8) ・土製品・焼成粘土塊	58
図 IV - 16	包含層出土の石器(1)	60
図 IV - 17	包含層出土の石器(2)	62
図 IV - 18	包含層出土の石器(3)	64
図 IV - 19	包含層出土の石器(4)	66
図 IV - 20	包含層出土の石器(5)	68
図 IV - 21	包含層出土の石器(6)	69
図 IV - 22	石器等分布図(1)	70
図 IV - 23	石器等分布図(2)	71
図 IV - 24	石器等分布図(3)	72

V 宮戸4遺跡

図 V - 1	樹林部分遺構分布図	74
図 V - 2	TP-26~28	81
図 V - 3	TP-29~31	82

図 V - 4	TP-32・33	83
図 V - 5	TP-34・35	84
図 V - 6	TP-36・37	85
図 V - 7	TP-38・39	86
図 V - 8	TP-40・41	87
図 V - 9	TP-42・43	88
図 V - 10	TP-44~46	89
図 V - 11	TP-47~49	90
図 V - 12	TP-50・51・53	91
図 V - 13	TP-54~56	92
図 V - 14	F-45~49	93
図 V - 15	F-50~52	94
図 V - 16	町道部分遺構分布図	96
図 V - 17	TP-18・52・57	98
図 V - 18	F-53~58	99
図 V - 19	F-59	100
図 V - 20	包含層出土土器分布図(1)	102
図 V - 21	包含層出土土器分布図(2)	103
図 V - 22	包含層出土土器分布図(3)	104
図 V - 23	包含層出土土器分布図(4)	105
図 V - 24	包含層出土の土器(1)	106
図 V - 25	包含層出土の土器(2)	107
図 V - 26	包含層出土の土器(3)	108
図 V - 27	包含層出土の土器(4)	109
図 V - 28	包含層出土の土器(5)	111
図 V - 29	包含層出土の土器(6)	113
図 V - 30	包含層出土の土器(7)	114
図 V - 31	包含層出土の石器(1)	121
図 V - 32	包含層出土の石器(2)	122
図 V - 33	包含層出土の石器(3)	123
図 V - 34	包含層出土の石器(4)	124
図 V - 35	包含層出土石器分布図(1)	125
図 V - 36	包含層出土石器分布図(2)	126
図 V - 37	包含層出土石器分布図(3)	127
図 V - 38	包含層出土石器分布図(4)	128
図 V - 39	包含層出土石器分布図(5)	129
図 V - 40	包含層出土石器分布図(6)	130
図 V - 41	包含層出土石器分布図(7)	131
図 V - 42	包含層出土石器分布図(8)	132
図 V - 43	包含層出土石器分布図(9)	133

VII 自然科学的手法による分析

VII - 1		
図 1	ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の 原材使用分布圏	155
図 2	ヒスイ原石と石斧の元素比值 Zr/Sr対Sr/Feの分布	156

図3	ヒスイ原石と石斧の元素比值 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布及び分布圏	156
図4	ヒスイ原石と石斧の元素比值 Na/Si 対 Mg/Si の分布及び分布圏	156
図5	原産地分析測定試料 蛍光X線分析結果	156
図6	分析試料	155

VIII	まとめ	
図VIII-1	Tピットの形態分類模式図	163
図VIII-2	Tピット分布図	165
図VIII-3	イモッペ川流域の遺跡群 で出土した土器	173

目 次

I 調査の概要

表I-1	年度別調査遺跡・面積一覧	5
表I-2	米原4遺跡出土遺物点数一覧	5
表I-3	宮戸4遺跡出土遺物点数一覧	5

II 遺跡の位置と環境

表II-1	鶴川町の遺跡一覧(1)	17
表II-2	鶴川町の遺跡一覧(2)	18

IV 米原4遺跡

表IV-1	米原4遺跡層位別出土土器等 点数一覧	45
-------	-----------------------	----

V 宮戸4遺跡

表V-1	宮戸4遺跡層位別出土土器一覧	134
------	----------------	-----

VI 別表一覧

別表VI-1	米原4遺跡検出遺構一覧	135
別表VI-2	米原4遺跡遺構出土 掲載土器一覧	135
別表VI-3	米原4遺跡包含層出土掲載 土器等一覧	136
別表VI-4	米原4遺跡包含層出土掲載 石器一覧	140
別表VI-5	米原4遺跡層位別出土土器等 点数一覧	142
別表VI-6	宮戸4遺跡樹林部分 検出遺構一覧	143
別表VI-7	宮戸4遺跡町道部分 検出遺構一覧	143
別表VI-8	宮戸4遺跡樹林部分遺構 出土遺物一覧	144
別表VI-9	宮戸4遺跡町道部分遺構 出土遺物一覧	144
別表VI-10	F-54 出土掲載土器一覧	145
別表VI-11	T P-35 出土掲載土器一覧	145
別表VI-12	T P-55 出土掲載土器一覧	145
別表VI-13	宮戸4遺跡層位別 出土土器点数一覧(統計)	145

別表VI-14	宮戸4遺跡包含層 出土掲載土器一覧(1)	146
別表VI-15	宮戸4遺跡包含層出土 掲載土器一覧(2)	147
別表VI-16	宮戸4遺跡包含層出土 掲載土器一覧(3)	148
別表VI-17	宮戸4遺跡遺構出土 掲載石器一覧	149
別表VI-18	宮戸4遺跡包含層出土 掲載石器一覧	149
別表VI-19	米原4遺跡Tピット属性表	150
別表VI-20	宮戸4遺跡Tピット属性表	150

VII 自然科学的手法による分析

VII-1

表1	ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(1)	155
表2	ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(2)	155
表3	宮戸4遺跡出土のヒスイ製石斧の元素分析値 と比量の結果	155
表4	宮戸4遺跡出土のヒスイ製石斧の 原材産地分析結果	155

VII-2

表1	宮戸4遺跡の放射性炭素年代測定結果	158
表2	宮戸4遺跡の放射性炭素年代測定分析 試料一覧	158

VII-3

表1	宮戸4遺跡の種実同定結果	159
表2	米原4遺跡の種実同定結果	159

VIII まとめ

表VIII-1	米原4遺跡出土土器等点数一覧	162
表VIII-2	米原4遺跡出土石器等点数一覧	162
表VIII-3	平成12年度宮戸3遺跡 Tピット属性表	164
表VIII-4	遺跡別遺構数一覧	171
表VIII-5	遺跡別土器出土点数一覧	171
表VIII-6	遺跡別石器等出土点数一覧	171

図 版 目 次

<p>口絵 1 遺跡と遺跡周辺の空中写真</p> <p>口絵 2 東西蝦夷山川地理取調図</p> <p>口絵 3 1 米原4遺跡調査風景（南東から） 2 宮戸4遺跡樹林部調査風景（西から）</p> <p>口絵 4 1 宮戸4遺跡町道部調査風景（西から） 2 基本土層 3 「ヒスイ」製遺物産地分析試料</p> <p>図版 1 1 調査風景（南東から） 2 調査区完掘（北西から）</p> <p>図版 2 1 調査風景（西から） 2 調査区完掘（西から）</p> <p>図版 3 1 土層断面（西から） 2 P-7土層断面（南西から） 3 P-7完掘（南西から） 4 P-8土層断面（東から） 5 P-8完掘（南西から）</p> <p>図版 4 1 TP-9土層断面（南東から） 2 TP-9完掘（南東から） 3 S-3検出（南西から） 4 S-3土層断面（東から）</p> <p>図版 5 1 F-26検出（北から） 2 F-26土層断面（南から） 3 F-37検出（東から） 4 F-37土層断面（南から） 5 F-46検出（南東から） 6 F-46土層断面（西から）</p> <p>図版 6 1 P-7出土の土器 2 TP-9出土の土器 3 F-24出土の土器 4 F-28出土の土器 5 F-34出土の土器 6 F-44出土の土器</p> <p>図版 7 1 包含層出土の土器（1）</p> <p>図版 8 1 包含層出土の土器（2）</p> <p>図版 9 1 包含層出土の土器（3）</p> <p>図版 10 1 包含層出土の復元土器（図IV-9-43） 2 包含層出土の土器（4）</p> <p>図版 11 1 包含層出土の土器（5）</p> <p>図版 12 1 包含層出土の復元土器（図IV-11-91 a） 2 包含層出土の土器（6）</p> <p>図版 13 1 包含層出土の土器（7）</p> <p>図版 14 1 包含層出土の土器（8）</p> <p>図版 15 1 包含層出土の土器（9）</p>	<p>図版 16 1 包含層出土の土器（10）</p> <p>図版 17 1 包含層出土の土器（11）</p> <p>図版 18 1 包含層出土の土器（12） 2 包含層出土の土製品 3 包含層出土の焼成粘土塊 4 胎土に混和される繊維（Ⅱ群 a 類）</p> <p>図版 19 1 包含層出土の石器（1）</p> <p>図版 20 1 包含層出土の石器（2）</p> <p>図版 21 1 包含層出土の石器（3）</p> <p>図版 22 1 包含層出土の石器（4）</p> <p>図版 23 1 調査区全景（西から） 2 調査風景（東から）</p> <p>図版 24 1 調査状況（北から） 2 調査区完掘（西から）</p> <p>図版 25 1 TP-26土層断面（南西から） 2 TP-26完掘（東から） 3 TP-27完掘（東から） 4 TP-28土層断面（東から） 5 TP-28完掘（東から） 6 TP-29土層断面（東から） 7 TP-29完掘（東から） 8 TP-30土層断面（南東から） 9 TP-30完掘（南東から）</p> <p>図版 26 1 TP-31土層断面（西から） 2 TP-31完掘（西から） 3 TP-32土層断面（西から） 4 TP-32完掘（西から） 5 TP-33土層断面（東から） 6 TP-33完掘（南東から） 7 TP-34土層断面（東から） 8 TP-34完掘（西から） 9 TP-36土層断面（西から）</p> <p>図版 27 1 TP-36完掘（東から） 2 TP-37土層断面（西から） 3 TP-37完掘（西から） 4 TP-38土層断面（東から） 5 TP-38完掘（東から） 6 TP-40土層断面（東から） 7 TP-40完掘（東から） 8 TP-41土層断面（東から） 9 TP-41完掘（東から）</p> <p>図版 28 1 TP-42・43完掘（西から） 2 TP-44土層断面（東から）</p>
---	--

	3	TP-44 完掘 (東から)
	4	TP-46 土層断面 (南東から)
	5	TP-46 完掘 (西から)
	6	TP-47 土層断面 (南から)
	7	TP-47 完掘 (南から)
	8	TP-48 土層断面 (東から)
	9	TP-48 完掘 (東から)
図版 29	1	TP-49 土層断面 (南西から)
	2	TP-49 完掘 (北東から)
	3	TP-50 土層断面 (北東から)
	4	TP-50 完掘 (南西から)
	5	TP-50 杭跡 (南西から)
	6	TP-50 杭跡断面 (南東から)
	7	TP-53 土層断面 (南西から)
	8	TP-53 完掘 (北東から)
	9	TP-54 土層断面 (東から)
図版 30	1	TP-54 完掘 (東から)
	2	TP-55 土層断面 (北東から)
	3	TP-55 完掘 (北東から)
	4	TP-56 土層断面 (東から)
	5	TP-56 完掘 (東から)
	6	Tピット配列状況 (東から)
	7	Tピット配列状況 (北から)
図版 31	1	町道部分調査風景 (西から)
	2	町道部分調査風景 (南西から)
図版 32	1	V層下位遺物出土状況 (西から)
	2	V層下位遺物出土状況 (西から)
	3	F-53 検出 (西から)
	4	F-59 検出 (西から)
	5	TP-18 完掘 (南から)
	6	TP-52 完掘 (北から)
	7	TP-57 完掘 (南東から)
図版 33	1	TP-33 出土の石器
	2	TP-35 出土の土器
	3	TP-36 出土の石器
	4	TP-55 出土の土器
	5	F-54 出土の遺物
	6	包含層出土の復元土器 (図V-24-2)
	7	包含層出土の復元土器 (図V-24-1)
図版 34	1	包含層出土の土器 (1)
図版 35	1	包含層出土の土器 (2)
図版 36	1	包含層出土の土器 (3)
図版 37	1	包含層出土の土器 (4)
図版 38	1	包含層出土の土器 (5)
図版 39	1	包含層出土の土器 (6)

図版 40	1	包含層出土の土器 (7)
図版 41	1	包含層出土の土器 (8)
図版 42	1	包含層出土の石器 (1)
図版 43	1	包含層出土の石器 (2)
図版 44	1	包含層出土の石器 (3)

附編 厚真町浜厚真3遺跡の調査

図版 1	1	調査区全景 (西から)
	2	調査風景 (西から)
図版 2	1	遺跡完掘 (東から)
	2	TP-94 完掘 (南西から)
	3	TP-136 土層断面 (南西から)
	4	TP-136 完掘 (南西から)
図版 3	1	TP-137 土層断面 (南西から)
	2	TP-137 完掘 (南西から)
	3	TP-175 土層断面 (南から)
	4	TP-175 完掘 (南から)
	5	TP-177 土層断面 (南西から)
	6	TP-177 完掘 (南から)
	7	TP-178 土層断面 (南西から)
	8	TP-178 完掘 (南西から)
	9	TP-179 土層断面 (南から)
図版 4	1	TP-179 完掘 (南から)
	2	TP-180 土層断面 (東から)
	3	TP-180 完掘 (南から)
	4	TP-181 土層断面 (南西から)
	5	TP-180・181 完掘 (東から)
	6	TP-183 完掘 (南東から)
	7	TP-184 土層断面 (西から)
	8	TP-184 完掘 (西から)
図版 5	1	TP-185 土層断面 (北西から)
	2	TP-185 完掘 (北西から)
	3	TP-186 土層断面 (南西から)
	4	TP-186 杭穴検出 (南西から)
	5	TP-186 完掘 (北西から)
	6	TP-187 土層断面 (南西から)
	7	TP-187 完掘 (南から)
	8	包含層出土の土器
図版 6	1	平成14年度調査区全景 (南西から)
	2	平成14年度完掘 (西から)

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

遺跡名	北海道教育委員会登録番号	所在地	調査面積	調査期間
米原4遺跡 <small>よねはら</small>	J-14-42	勇払郡鵠川町字米原400-5ほか <small>ゆうふつぐんむかわちようあざよねはら</small>	1,090 m ²	平成15年8月1日 ～10月31日
宮戸4遺跡 <small>みやと</small>	J-14-40	勇払郡鵠川町字宮戸180-1ほか <small>ゆうふつぐんむかわちようあざみやと</small>	5,940 m ²	

受託期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

整理期間：平成15年11月1日～平成16年3月31日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重楯一	第4調査課長 遠藤香澄 (米原4遺跡発掘担当者)
専務理事 宮崎 勝	主 任 笠原 興 (宮戸4遺跡発掘担当者)
常務理事 畑 宏明	主 任 芝田直人 (宮戸4遺跡発掘担当者)
第1調査部長 畑 宏明 (兼務)	主 任 福井淳一 (宮戸4遺跡発掘担当者)
	文化財保護主事 山中文雄 (米原4遺跡発掘担当者)



図 I-1 鵠川町の位置と遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1:50,000「富川」(NK-54-9-13、昭和63年3月30日発行)と、鵠川町役場の1:50,000「鵠川町全図」(承認番号 平10、道復 第874号)を合成したものである。

3 調査に至る経緯

日高自動車道は北海道縦貫自動車道を苫小牧市から分岐し、日高地方太平洋岸の主要都市を通り浦河町に至る総延長 120km の高規格幹線道路である。厚真^{あつましづない}静内間の 55km が着工準備を含む事業区間で、その先浦河までは計画区間である。建設事業は昭和 63 年（1988）から着手されている。この間平成 10 年（1998）には苫小牧東 I C から厚真 I C に至る 19.7km が開通、引き続き平成 15 年（2003）8 月 10 日には厚真 I C から鶴川 I C 間の約 8.6km が開通し、料金無料の暫定供用区間となっている。現在鶴川門別間（11.4km）で工事が進められている。

この厚真門別間の道路建設にかかる埋蔵文化財包蔵地に関しては、北海道開発局室蘭開発建設部と北海道教育委員会（以下道教委）との間で平成 5 年（1993）6 月に事前協議がなされた。これを受けた道教委では平成 5 年 8 月に所在確認調査を実施、その後平成 8 年（1996）8 月以降順次、厚真町、鶴川町、門別町内の遺跡について範囲確認の試掘調査を行なっている。このうち米原 4 遺跡については、平成 11 年 11 月、宮戸 4 遺跡については平成 11 年 8 月と 11 月、平成 12 年 9 月にそれぞれ試掘調査が実施され、調査を要する範囲が決められている。

範囲確認調査を行なった遺跡で工事計画の変更が困難で発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は鶴川町内 4 か所（宮戸 3 遺跡、宮戸 4 遺跡、米原 3 遺跡、米原 4 遺跡）、厚真町 1 か所（浜厚真 3 遺跡）、門別町 2 か所（チャシコツパナクシナイ遺跡、コムカラ遺跡）の計 7 か所である。

平成 12 年（2000）より、財団法人北海道埋蔵文化財センターが室蘭開発建設部から委託を受け、鶴川町内の遺跡、厚真町内の浜厚真 3 遺跡を調査し、報告書を 4 冊刊行している（北埋調報 153、北埋調報 168、北埋調報 185、北埋調報 186）。このうち宮戸 3 遺跡と米原 3 遺跡の調査は平成 12 年度に終了している。

第 4 年次にあたる平成 15 年度は 8 月 1 日から宮戸 4 遺跡と米原 4 遺跡の調査をおこなった。発掘の方法や調査期間など当初計画を変更し調査を進めた結果、両遺跡ともに工事関連の対象範囲の発掘をすべて終了することができた。これまでの調査遺跡および調査面積は表 I - 1 に示した。

なお、門別町内の遺跡については門別町教育委員会が平成 14 年（2002）にチャシコツパナクシナイ遺跡（2,800 m²）、平成 15 年にコムカラ遺跡（3,900 m²）の調査を実施している。また、平成 15 年 4 月には北海道教育委員会により浜厚真 3 遺跡（414 m²）の工事立会調査が行なわれた（本報告書附編）。

これにより、日高自動車道（門別厚真間）関連の発掘調査はすべて完了したことになる。

4 調査の経過と概要

調査は 8 月から開始した。今年度調査の主要部分となる宮戸 4 遺跡の樹林部分の立木について、立木伐採できる時期がイモッペ川と町道の改修後という条件であったためである。樹林部分は前年度調査予定であったが、先送りになっていた（北埋調報 185）。

当初計画の範囲は宮戸 4 遺跡が宮戸 3 遺跡に連続する樹林部分（85 ラインまで）と町道米原 2 線部分の合わせて 3,800 m²、米原 4 遺跡が町道米原 11 線部分と平成 14 年調査区を挟んで続く北東側の牧草地のあわせて 600 m²である。

調査に先立ち 4 月に室蘭開発建設部苫小牧道路事務所（以下道路事務所）と北海道教育委員会文化課の担当者を交え現地で打ち合わせを行なった。立木伐採および河川と町道の付け替え工事の日程等についての確認である。5 月初旬には道路事務所による地元住民への工事工程の説明会が開かれ、ここで、イモッペ川の改修を待たずに伐採を行なうことが了解された。6 月中旬には再度、米原 4 遺跡の町道部分の路盤の撤去時期を含めた打ち合わせを三者で行ない、8 月からの本格的な調査にむけ準備を進めた。

宮戸 4 遺跡については、7 月中旬から樹林部分のうち 77 ライン以北の約 1,500 m²について工事中重機

により表土、火山灰除去を行なった。樹林部分は平成13年度の試掘結果および隣接する宮戸3遺跡の調査から、上位の包含層（Ⅲ層～Ⅴ層中位）では遺物が極めて少ないことが予想された（北埋調報153）。これをもとに表土除去作業と並行し一部遺物の包含状況を確認したが、同様の結果であった。効率的に調査を進めるため、上位の包含層については重機を使っての調査とし、Ⅴ層下位～Ⅵ層上位（縄文早期・前期の包含層）を人力による調査で行なうこととした。このような調査方法の見直しに伴い、樹林部分の続く範囲（85ライン～2ラインまで）、1,800㎡について今年度の調査範囲に組み込むよう、調査計画を変更した。また、標高の低いR-87区の調査で縄文時代早期中茶路式の土器片がまとまって出土し、包含層がその北東側の工事立会調査範囲にまで広がっていることが判明した。このような実情をもとに85～90ライン間の350㎡が新たに発掘調査範囲となった。

町道米原2線部分はこれまでの調査から成果から判断して遺物の分布が濃い範囲と予想したところである。このためいち早く調査に取り掛かる予定であったが、工事工程との関連から着手時期は9月末になった。さらに、橋脚建設の工事用道路として使用する関係から、調査は付け替え工事を挟んで前後2回に分けて行なうこととなった。後半の調査開始は10月20日以降になることが予想できた。このため、調査期間を10月31日までとし、調査を進めた。樹林部分を含め10月28日には調査を終了した。今年度調査した面積は5,940㎡である。

米原4遺跡は遅れていた町道部分の路盤撤去の終了を待ち、7月下旬に重機により表土、火山灰除去を行なった。町道部分は43～46ライン間にある沢地形部分と南東側の一部を除き、沢を挟む両側の高まりのある部分がⅦ層まで削平されていた。調査は8月18日から開始、9月上旬には終了した。ただし、北東側の牧草地の調査は町道米原11線の再度の切替え後となるため、この段階で米原4遺跡の調査は一旦中断している。9月下旬、町道の再切替が終了したことから、発掘を再開した。牧草地の部分は包含層の残存状態が良好で縄文時代前期、中期の遺物が多く出土し、包含層が北側に接する町道米原1号下まで広がっていることが判明した。米原1号部分の245㎡についても調査範囲に組み入れることとなった。これを含め今年度調査した面積は1,090㎡で、10月21日に終了した。

10月28日、苫小牧道路事務所の担当者と現地で打ち合わせを行なった。調査終了に伴う現場の引渡しについてである。遺構、トレンチなどの埋め戻しをはじめ今年度調査した範囲全域について敷きならし転圧をしていただきたいとの要請を受けた。11月4日から14日まで埋め戻し作業を行い、11月17日に苫小牧道路事務所に引渡した。

5 調査結果の概要

(1) 米原4遺跡

①町道米原11線部分（K～Mライン間）と②北東側の牧草地（G～Kライン間）および③町道米原1号部分（F～Kライン間）の合わせて1,090㎡を調査した。

検出された遺構は土坑2基、Tピット1基、焼土25か所、集石1か所である。

土壌は①町道米原11線下部分から検出された。P-7が43～46ラインの沢地形部分に、もう1基（P-8）は調査区の南東端にある。P-7は円形、P-8は半分以上が平成12年度調査区に及んでいるため全体の様相は知られない。いずれも覆土から出土した遺物等から判断して縄文時代早期後半期のものとみられる。Tピット（TP-9）は底面の形状が溝状のもの。東側に10mほど離れた平成14年度調査のTP-7と同様の形態で、いずれもイモッペ川へ向う沢の緩斜面にあり長軸方向をほぼ同じくする。焼土（F）は沢地形部分から9か所検出されている。ほかに①の調査区南西端、J-43区周辺、沢地形の肩部分にそれぞれ4、5か所のまとまりがある。沢地形部分の焼土は平成14年調査のものの一連であろう。

これらは早期後半、前期前半、中期後半、後期初頭の各期に形成されたものとみられる。沢地形部分から検出された集石（S-3）は前期前半の可能性がある。

遺物は土器が5,345点（包含層5,316点、遺構29点）、石器等が10,954点（包含層）の合わせて16,299点出土した。遺物の6割以上はV層下位から出土し、V層中位からのものが2割程ある。土器は中期後半（Ⅲ群b類）の北筒式、柏木川式のもの半数近くを占める2,641点で、次いで前期前半（Ⅱ群a類）の綱文式とそれに伴う土器が1,567点と続く。ほかに早期後半（Ⅰ群b類）の東釧路Ⅲ式およびコッタロ式が810点、後期初頭（Ⅳ群a類）の土器は178点あり、タブコブ式の1個体分の破片が出土している。また、ごくわずかであるが前期の春日町式に相当するものや、撚糸文の施された土器片がある。

石器等には石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、ピエス・エスキュー、石核、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石・石皿がある。石鏃、石槍・ナイフが多い。砥石にはスコリア製の溝のあるものがある。ほかに礫、礫片、黒曜石の加工痕・使用痕のあるフレイク、早期の土器を用いた土製円盤、一握りほどの大きさの焼成粘土塊がある。

（2）宮戸4遺跡

①樹林部分（5,150 m²）と②町道米原2線部分（800 m²）の合わせて5,950 m²を調査した。

①樹林部分

検出された遺構はTピット30基、焼土8か所である。Tピットは調査区南側の平坦面や沢に向う緩斜面から検出されている。数例を除き、検出面がVI層上位で底面の形状が溝状を呈し、確認面での長軸長が1.5 m～3 m前後に収まるものである。このうち、TP-50は底面に杭穴を1本有する。TP-41、36のように長軸長が3 mを超えるものもある。Ⅷ層で検出されたTP-47、49は壙口部の長さが1 mをわずかに上回るほどのものである。ほかに底面の形状が長楕円形で、杭穴が10本あるものが1基ある（TP-50）。なお、TP-32とTP-35の覆土検出の炭化材について放射性炭素による年代測定（AMS）を行なった。この結果、3,860 ± 40 y B P、3,900 ± 40 y B Pが得られている（Ⅶ章第2節参照）。焼土（F）は調査区北側の標高20 mほどの平坦面にまとまりがあり（7か所）、F-50がやや離れた緩斜面から検出されている。いずれもVI層上位で確認されたもので、出土した遺物から縄文時早期後半のもの判断される。

②町道米原2線部分

検出された遺構はTピット3基（TP-18、52、57）と焼土7か所である。Tピットは底面形態が溝状のもので、このうちTP-18は平成13年度調査した続きの部分である。焼土は平成13年度調査区のもの一連のもの見られ、周辺から出土する遺物、遺構から判断し、縄文時代前期前半のもの見られる。遺物は樹林部分、町道部分合わせて土器5,590点（包含層5,521点、遺構69点）、石器が8,260点（包含層8,087点、遺構173点）、あわせて13,850点出土した。土器は縄文時代早期後半の東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式のもの合わせて4,651点で最も多く、なかでもコッタロ式が1,512点と多い。次いで前期前半の綱文式を含む土器群が634点、ほかに中期後半の天神山式、柏木川式、北筒式が292点ある。石器は石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、ピエス・エスキュー、石核、石斧、たたき石、すり石、砥石がある。石鏃、スクレイパーが多く、礫石器は少ない。また、長軸方向を打ち欠いた石錘が1点出土している。他に礫・礫片、黒曜石の加工痕・使用痕のあるフレイクがある。

なお、平成13年度の樹林部分の試掘調査で出土した縄文早期後半期の「蛇紋岩製」磨製石斧について（北埋調報168）石材の同定を行なった。「日高ヒスイ」に伴って生成された変成岩の可能性が高いとの結果が得られている（Ⅶ章第1節参照）。（遠藤）

表 I - 1 年度別調査遺跡・面積一覧

遺跡名・調査年度	面 積 (単位㎡)				
	平成 12 年度	平成 13 年度	平成 14 年度	平成 15 年度	合 計
宮戸 3 遺跡	3,600				3,600
宮戸 4 遺跡	600	5,310	4,550	5,950	16,410
米原 3 遺跡	7,400				7,400
米原 4 遺跡	2,311		975	1,090	4,376
浜厚真 3 遺跡			3,390		3,390
合 計	13,911	5,310	8,915	7,040	35,176

表 I - 2 米原 4 遺跡出土遺物点数一覧

土器			石器等					
分類	点数		分類	点数		分類	点数	
	遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層
I 群 b - 1・2 類	18	792	石鏃		226	石斧		166
II 群 a 類	5	1562	石槍・ナイフ		49	たたき石		29
II 群 b 類		5	石錐		27	すり石		57
III 群 b - 2・3 類	6	2635	つまみ付ナイフ		34	砥石		74
IV 群 a 類		178	スクレイパー		57	台石		4
分類不明		141	ピエス・エスキーユ		5	石皿		2
土製品		1	R フレイク		147	加工痕のみられる礫		18
焼成粘土塊		2	U フレイク		87	礫・礫片		7204
小計	29	5316	フレイク・チップ		2760			
			石核		6			
			原石		2			
			小計					10954
			合計					16299

表 I - 3 宮戸 4 遺跡出土遺物点数一覧

土器			石器等					
分類	点数		分類	点数		分類	点数	
	遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層
I 群 b - 1 類		1135	石鏃	9	193	石斧	1	20
I 群 b - 2 類	2	1511	石槍・ナイフ		6	たたき石		13
I 群 b - 3 類	6	1002	石錐	1	24	凹石		5
I 群 b - 4 類	60	606	石錘		1	すり石		8
I 群 b 類細分不能		329	つまみ付ナイフ	1	32	砥石		15
II 群 a 類	1	633	スクレイパー		70	礫・礫片	63	3280
II 群 b 類		12	ピエス・エスキーユ	2	56	加工痕のある礫片		1
III 群 b 類		292	R フレイク	1	80	不明		2
分類不明		1	両面調整石器		2			
小計	69	5521	フレイク	95	4258			
			石核		21			
			小計				173	8087
			合計					13850

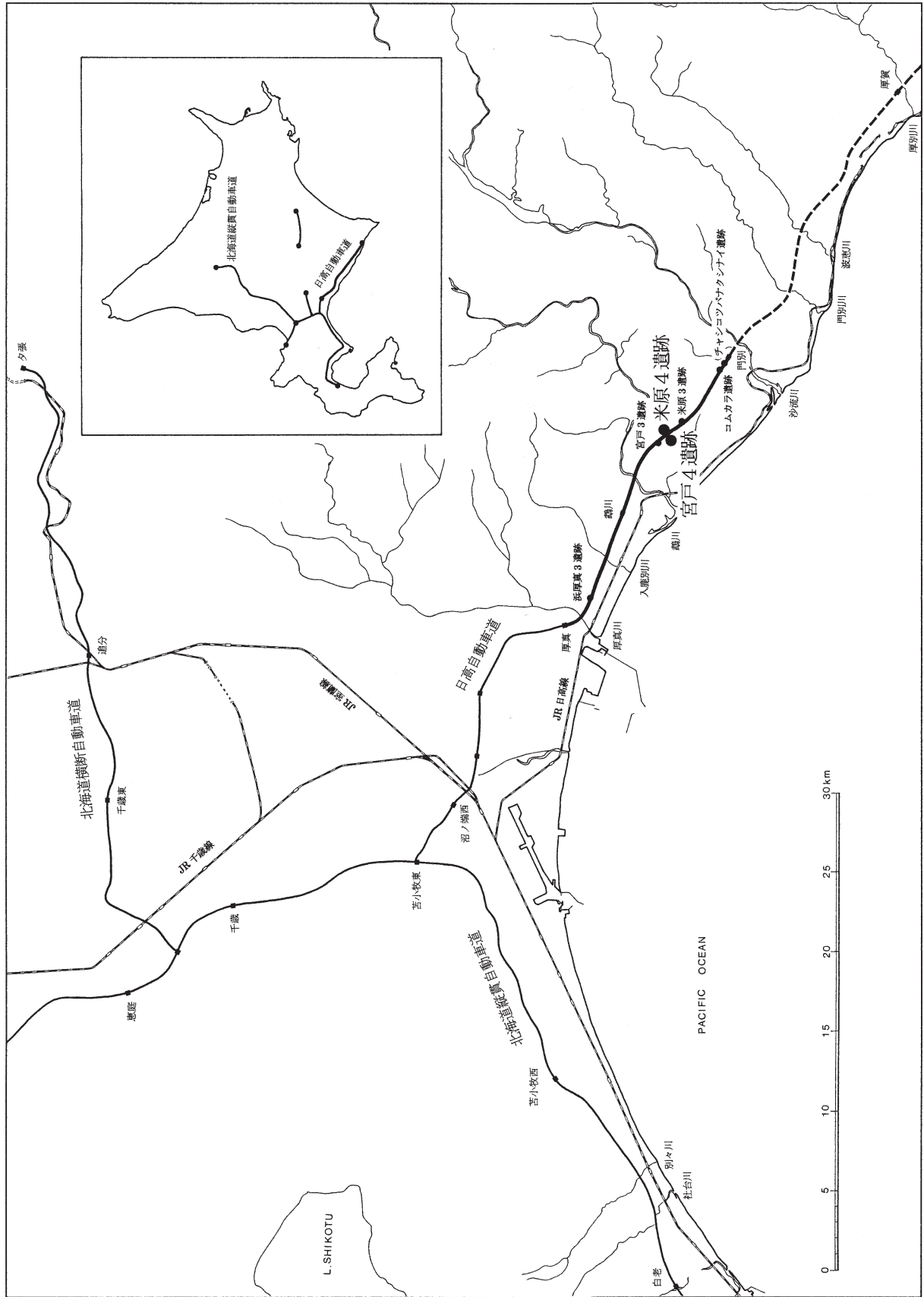
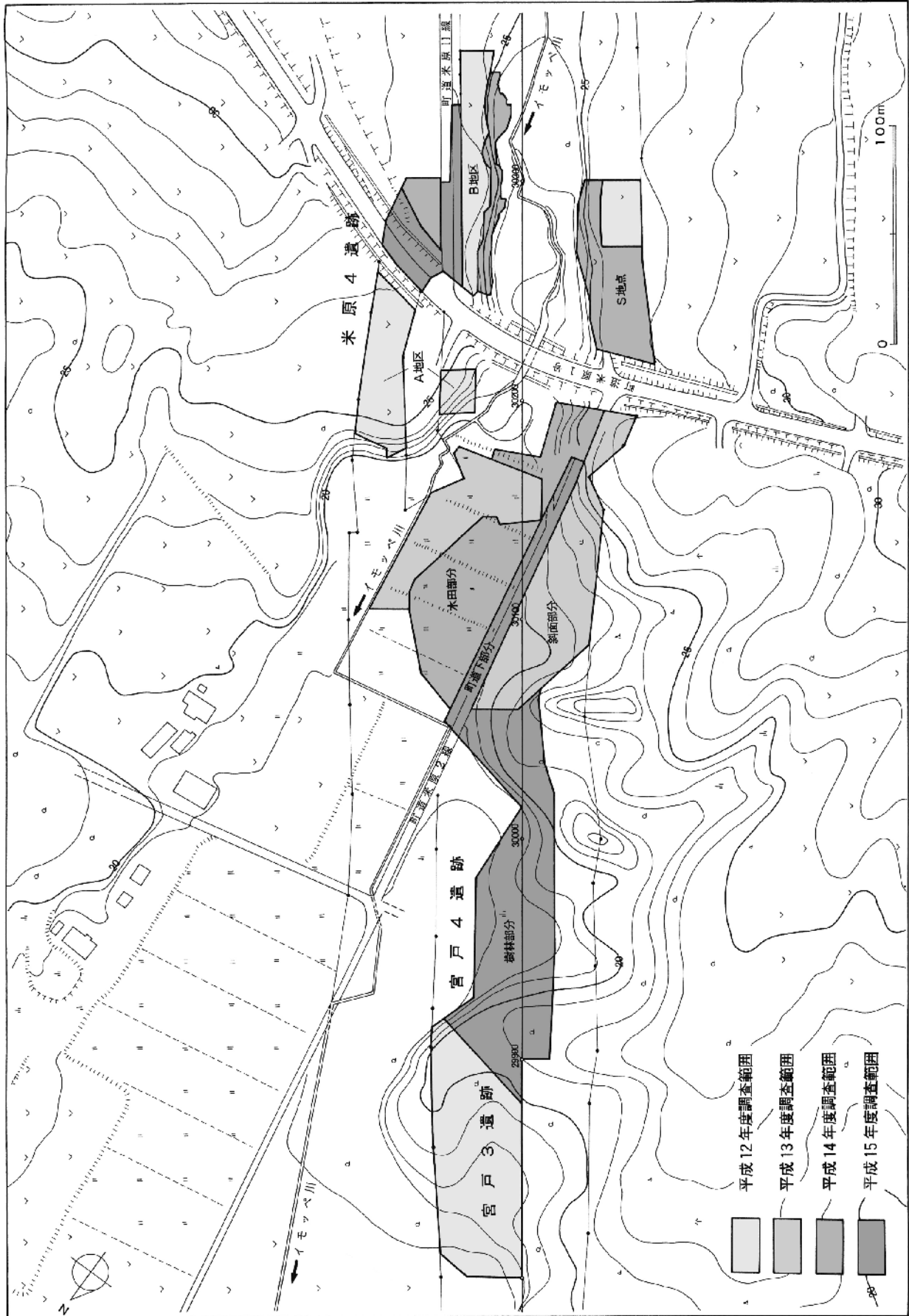


図 I - 2 日高自動車道と遺跡の位置



図I-3 年度別調査範囲

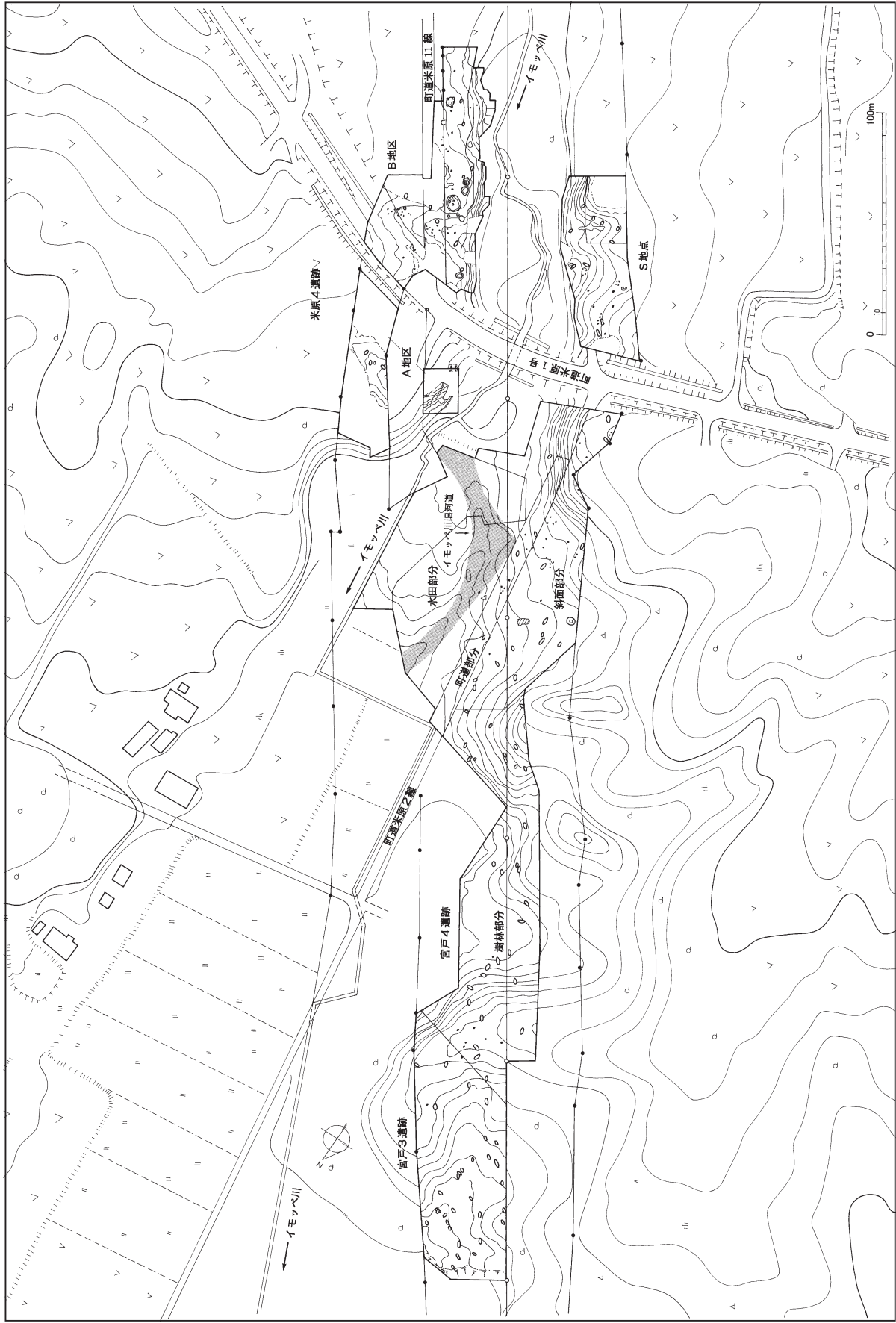


図 I-4 米原4遺跡・宮戸3遺跡・宮戸4遺跡調査状況図

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

日本海から苫小牧市に抜ける地域は、地理学上の呼称として「札幌・苫小牧低地帯」または「道央低地帯」と呼ばれている。遺跡のある鶴川町は北緯四十二度三十一分、東経百四十一度五十九分にある。苫小牧市から東へ約 30 km、道央低地帯の南東端の太平洋に面し、一級河川鶴川の下流域にある。

鶴川町の北西には厚真町があり、勇払原野をへ経て苫小牧市に接している。北東側は穂別町が隣接し、南東側には日高国境のなだらかな丘陵地帯を越えて沙流川河口域の門別町とその上流に隣する平取町がある。苫小牧市から車で東へ三十分ほど進むと、鶴川町を境にして地勢は変わり、東側と北側に丘陵地が現れる。東方の遙かかなたには日高山系の山々が雄姿を見せ、北方には丘陵を隔てて夕張山脈の山並みをわずかに見る事ができる。この両山系にいだかれて流れ出るのが河川鶴川である。

一級河川鶴川は日高山脈の奥、狩勝国境の占冠村字トマムの谷に源を發し、山間部を開折して南下する流路 135 km、流域面積 1,251km²を有する河川である。

川名の鶴川には諸説があるがアイヌ語の「ムッカ・ペツ」（塞がる川）からきたもので、「鶴川が上潮のために砂で河口が塞がれるからである」という説や、「ムカプ」「M u k - a p」（羊乳草（ツルニンジン）^{ツルニンジン}羊乳草・ある・所）が鶴川（ムカハ）^{ムカハ}鶴川となった説等がある。（山田 1983）。

もうひとつ、上原熊次郎著「蝦夷地名考并里程記」によれば、「夷語ムカなり。則、水の涌くといふ事。此水上平原にして所ここに水の涌き出て、源水となる故、地名になすといふ」という解釈もある。（山田 1983）。

この鶴川の東側約 5 kmには、ほぼ並行して南西へ流れる沙流川があり、沙流川（男川）と鶴川（女川）は古来より夫婦川としてアイヌ伝承等も伝えられている。

鶴川町は河川鶴川の流れによって川東と川西の二つに分けられている。川東の最も上流にあるのが有明地区で、これを遙か海岸までの日高国境の丘陵と河川鶴川の間位置するのが川東七地区である。上流から有明・生田・花岡・米原・曙・宮戸・汐見地区である。同様に川西を上流から順に、有明・キキンニ・旭岡・春日・豊城地区と続き、ここから河口までの右岸一帯が市街地の所在地である。この河川沿いの地区の他に厚真町との境に二宮地区、市街地の西部に田浦地区がある。

現在では、この川東地区と川西地区をつなぐ大きな橋が三本架けられているが、明治以前は丸木舟以外にこの大川を渡る事はできなかった。兩岸に住むコタンの人々は、各自が軒下に丸木舟を用意していたという現地の古老達の語り伝えが残っている。

鶴川は古くからシシャモが遡上する事でも知られており、10月中旬から11月上旬が漁期である。また、河口域では草原と干潟が発達しており、ここは草原性の鳥や海岸性の鳥がよく見られることから探鳥会の場所としても知られている。渡り鳥にとっては重要な中継地の一つである。「北海道野鳥愛護会」が1971年秋から1999年までに行った探鳥会記録（2001年6月）には多くの渡り鳥が報告されている。なかでも春と秋に北上、南下するシギ、チドリ類は多くの種が確認され、当遺跡の上空を渡る姿も稀に見る事ができる。

（笠原）



図Ⅱ-1 遺跡位置図

2 歴史的環境

米原4遺跡、宮戸4遺跡はJR鵠川駅の東南東約5kmの丘陵末端部に立地している。緩やかな沢地形が繰り返し入り込む場所で、鵠川の支流イモツペ川の両岸にある。標高は約20mの段丘上である。

「イモツペ」は宮戸の古名で、語義については諸説がある。『北海道蝦夷語地名解』には次のように記してある。 I m o k p e イモクペ 陥(ヲトシ)ノ餌(エバ)ヲ置處 井目戸(井モクベ)村

イモツペとは魚を釣る「餌」などのことで、このあたりでは昔よくミミズを掘ったといわれている(永田 1891)。

鵠川橋から国道を東へ約500m進んだ南側に「井目戸(イモツペ)地蔵尊」があり、戦前は子受け地蔵として人気があり、戦時中は弾丸除け地蔵、戦後は大漁地蔵となり、霊験あらたかなことから1943(昭和18)年の字名改正時に「宮戸(みやと)」と呼ぶようになった。

宮戸は古くから鵠川の河口に続くチンコタン(現在の汐見二区)とともにアイヌの人々が多く住むコタンがあった所であった。会津常蔵による「胆振管内概要」によれば、「コシャマインの反乱により、各方面より旧土人が鵠川へ集結し、そのまま住して今に至れり」と記されている。

これは現在の汐見、宮戸両地区を指しているものと思われる。また、松浦武四郎の「東蝦夷日誌」に書かれている鵠川河口のコタン、渡し場などという場所もこのあたりを示している。

「東蝦夷日記」に記載されているコタンの状況を集約すると以下のようである。

ムカワプト(鵠川)四戸、チン(汐見)十戸、イモクペ(宮戸)六戸、ケナショロ(豊城)四戸、カアナイ(春日)四戸、モエペツ(春日)七戸、オサネツ(米原)一戸、キリカチ(花岡)四戸、ユクペツ(旭岡)八戸、キナウス(有明)五戸、の計53戸である。

ムカワプトとチンはムカワの河口に位置し、胆振日高の要路にあつて、漁労を中心に生活が営まれていた。特に秋に遡上するシシャモは重要な食料資源でこの地区をはじめとした一部の地域にだけ漁業権があり、他の部落の人々は宝物等をもってわけてもらうほか無かった。鵠川の河口近くでは現在でもシシャモカムイノミが行なわれている。

イモクペコタンには幕府直轄で蝦夷地の警護と開拓にあつた先駆者、八王子千人同心らの畑作場があり、「エンドトノ(江戸の武士)がコタンの近くで色々なものを耕作していた。」という古老の言い伝えが残っている。

ケナショロコタンは(林の中の部落)と言うような意味で、鵠川の市街地の北方にあり廃線となつた富内線豊城駅の北東側の丘陵あたりにあつた。

カアナイコタンは萌別川沿い、モエペツコタンは鵠川を見おろす南斜面あたりに位置していた。

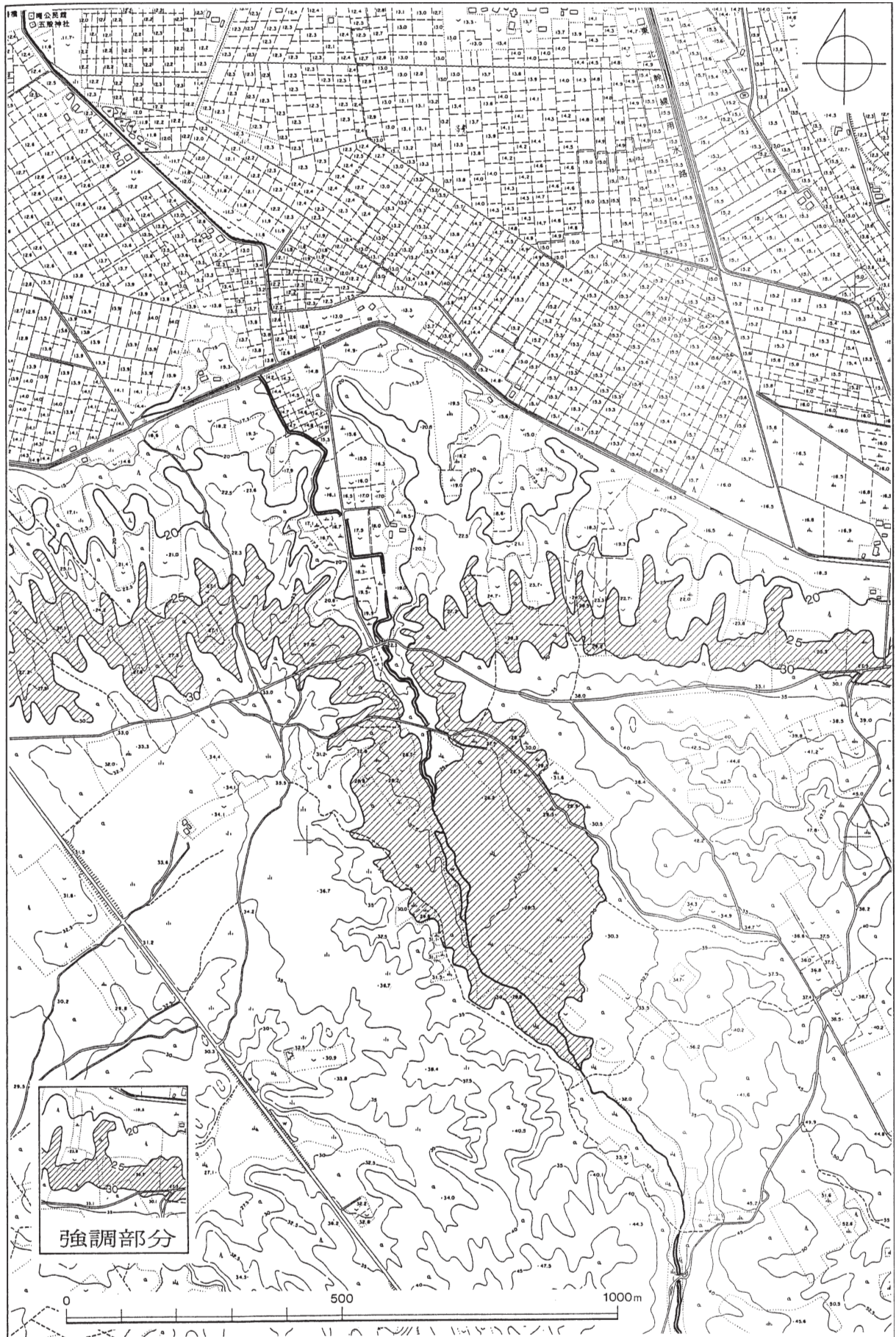
オサネツコタンはイモツペ川の東側丘陵沿いで、現在の米原地域である。昭和18年の字名改正までは「オサネツ」と呼ばれていた地域である。アイヌ語で「熊が流れ出る程いる」という意味や、また「魔物のいるところ」などと呼ばれていた。開拓当初のこのあたりはニレ、カツラ、ヤチダモなどの巨木が昼なお暗い程生い茂っていた所であった。また、川向かいの現在の春日集落あたりで犬の吠える声を密林越しに聞いて、向う岸にも部落があるらしいと想像する有様だったということである。これらのことから、この時期にはあまり人は住み着いていなかったようである。

ユクペツコタンは鵠川の支流バロ沢の河口域にあつた。バロ沢は声望高いアイヌであつたバロウカトクから付けられたもので、ここで行なわれた熊祭りには各コタンから大勢の人々が集まり賑わつたという。平成12年度からはじまった本遺跡の調査結果から見ても、鵠川町内には縄文時代早期から各時期に渡って人々が存在していた事が解つた。人々は大川鵠川の恩恵の元で、古くから集落、あるいはコタンを営んでいた。

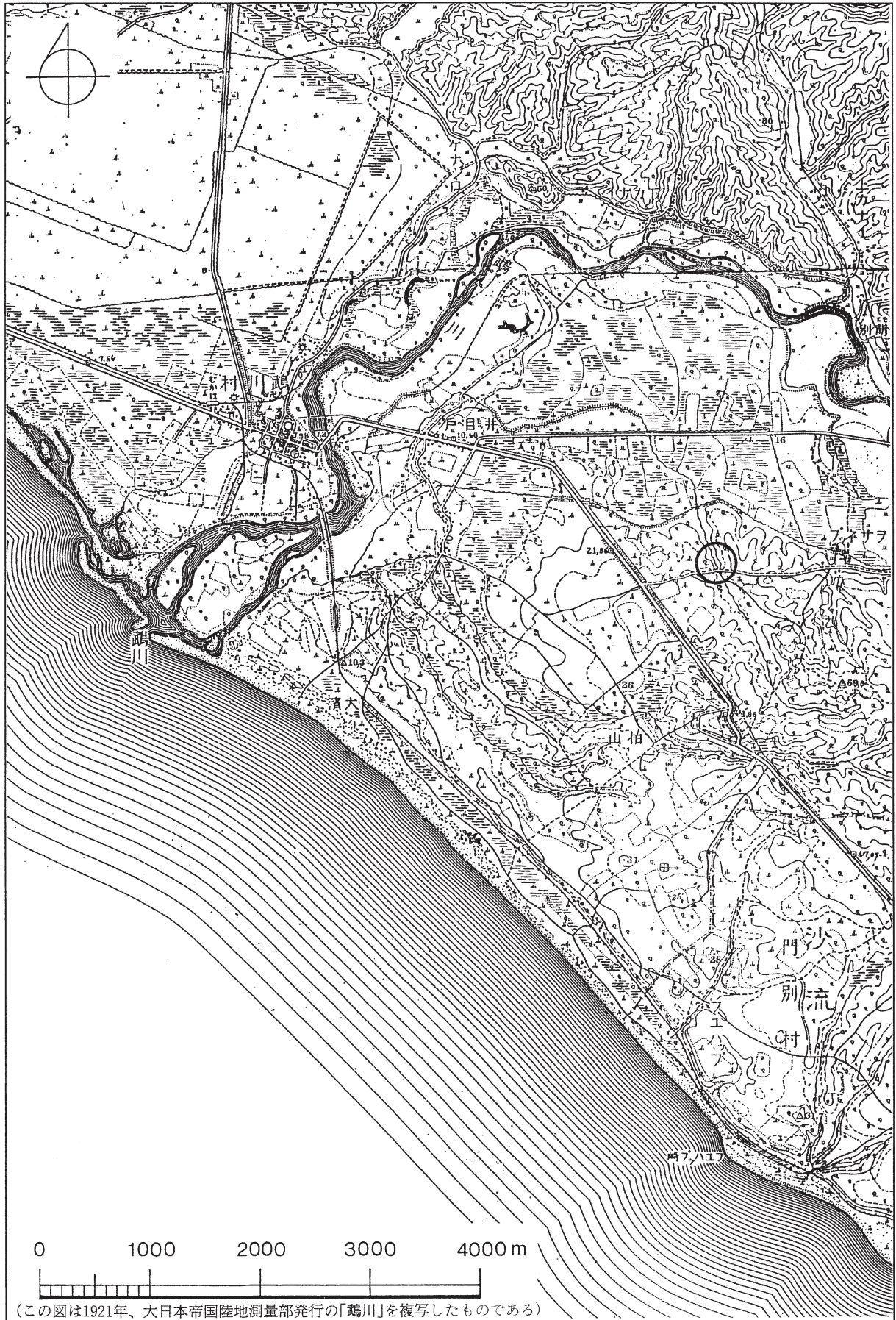
(笠原)



図Ⅱ-2 50年前の地形図(1)



図II-3 50年前の地形図(2)



図Ⅱ-4 5万分の1地形図



図Ⅱ-5 「シモムカワ」周辺の地名

(「蝦夷全図」(伝 1822 年) をもとにした小林和夫作成の河川名図)

3 周辺の遺跡

鵠川町の遺跡は北海道教育委員会による埋蔵文化財分布調査によれば、現在 43 ヶ所の遺跡が登録されている。その多くは鵠川の本流とその支流の河岸段丘に分布している。

昭和 30 年代に花岡、汐見、春日、二宮の所在確認調査や、鵠川盛土墳墓群、花岡 1 遺跡の調査が行なわれている。昭和 50 年代には、町内の遺跡所在確認調査や鵠川盛土墳墓群の範囲確認調査が行われてきた。そして平成 12 年度から日高自動車道建設に伴う、宮戸 3 遺跡、宮戸 4 遺跡、米原 3 遺跡、米原 4 遺跡の発掘調査と米原 5 遺跡の工事立会調査が行われた。

時代別に見ると、縄文時代に属する遺跡は 38 ヶ所ある。縄文時代早期 18 ヶ所、前期 21 ヶ所、中期 21 ヶ所、後期 3 ヶ所、晩期 8 ヶ所である。続縄文時代の遺跡は 8 ヶ所で、擦文時代の遺跡は 6 ヶ所、アイヌ文化期の遺跡が 6 ヶ所である。これらのほとんどの遺跡は時期が重複する複合遺跡である。

縄文時代早期の遺跡は花岡 1 遺跡、二宮遺跡、春日遺跡、花岡 3 遺跡、トンニカ遺跡、宮戸遺跡、花岡 2 遺跡、パンケニウキナイ 1 遺跡、パンケニウキナイ 2 遺跡、ニクトンナイ 1 遺跡、ニクトンナイ 2 遺跡、ピタルシナイ 2 遺跡、豊城 4 遺跡、米原 3 遺跡、宮戸 3 遺跡、宮戸 4 遺跡、米原 4 遺跡、米原 5 遺跡がある。このうち二宮遺跡からは小型で深鉢形の甍式土器などが出土している。

縄文時代前期の遺跡の遺跡には、花岡 1 遺跡、春日遺跡、柏山遺跡、花岡 3 遺跡、チン川左岸 2 遺跡、豊城 2 遺跡、パンケヤラ遺跡、モイベツ遺跡、トンニカ遺跡、宮戸遺跡、花岡 2 遺跡、パンケニウキナイ 1 遺跡、パンケニウキナイ遺跡、オブスケ遺跡、チン川左岸 3 遺跡、豊城 4 遺跡、二宮 2 遺跡、米原 3 遺跡、宮戸 3 遺跡、宮戸 4 遺跡、米原 4 遺跡がある。このうち柏山遺跡からは縄文時代前期の静内中野式や植苗式系の土器等が出土している。

縄文時代中期の遺跡には、花岡 1 遺跡、春日遺跡、花岡 3 遺跡、チン川左岸 1 遺跡、豊城 2 遺跡、トンニカ遺跡、サツペサ遺跡、オルイカチャシ跡、花岡 2 遺跡、パンケニウキナイ 1 遺跡、パンケニウキナイ遺跡、ピタルシナイ 1 遺跡、オブスケ遺跡、米原第 1 遺跡、米原第 2 遺跡、米原 3 遺跡、宮戸 4 遺跡、米原 4 遺跡がある。平成 12 年度に調査した米原 3 遺跡の調査では、中期末葉の竪穴式住居跡が 2 軒と土壇 1 基、焼土 12 ヶ所を検出した。遺物は円筒土器上層式のほか、萩ヶ岡 1 式、柏木川式、北筒式土器等が出土した。(北埋調報 153)。

縄文時代後期の遺跡は花岡 1 遺跡、パンケニウキナイ 1 遺跡、米原 3 遺跡、宮戸 4 遺跡がある。昨年度に調査した宮戸 4 遺跡からは土器囲い炉のあるタブコブ式に相当する住居跡が 1 軒検出された。(北埋調報 185)。

縄文時代晩期の遺跡は花岡 1 遺跡、二宮遺跡、豊城 2 遺跡、豊城 3 遺跡、藤高沼遺跡、トンニカ遺跡、パンケニウキナイ 2 遺跡がある。花岡 1 遺跡は鵠川の左岸河岸段丘の標高約 25 m に位置している。1963 (昭和 38) 年 4 月に鵠川町教育委員会によって調査が行われ、縄文時代晩期から続縄文時代初頭にかけての土壇墓が 20 基検出された。遺物は早期後半の東釧路Ⅲ式から前期前半の綱文式、静内中野式、中期後半の北筒式、晩期後葉のタンネトウ L 式など、各時期のものが出土している。

続縄文時代の遺跡には、鵠川盛土墳墓群、花岡 1 遺跡、春日遺跡、トンニトイ遺跡、豊城 3 遺跡、藤高沼遺跡、パンケニウキナイ 1 遺跡、米原 3 遺跡がある。鵠川盛土墳墓群はチン川とライパチン川の合流地点の東、標高約 20 m の河岸段丘上に位置している。1963 (昭和 38) 年に鵠川町教育委員会によって調査が行われた。その結果、周溝をもつ墳墓内から 6 基の土壇墓が検出され、土壇墓内には続縄文時代初頭の土器や石器、菅玉、平玉などが副葬されていた。

擦文時代とアイヌ文化期が主体である汐見 2 遺跡は、多数の住居跡があることが想定されており、ムカワプトコタンである可能性が示唆されている。(笠原)

表Ⅱ-1 鵜川町の遺跡一覧(1)

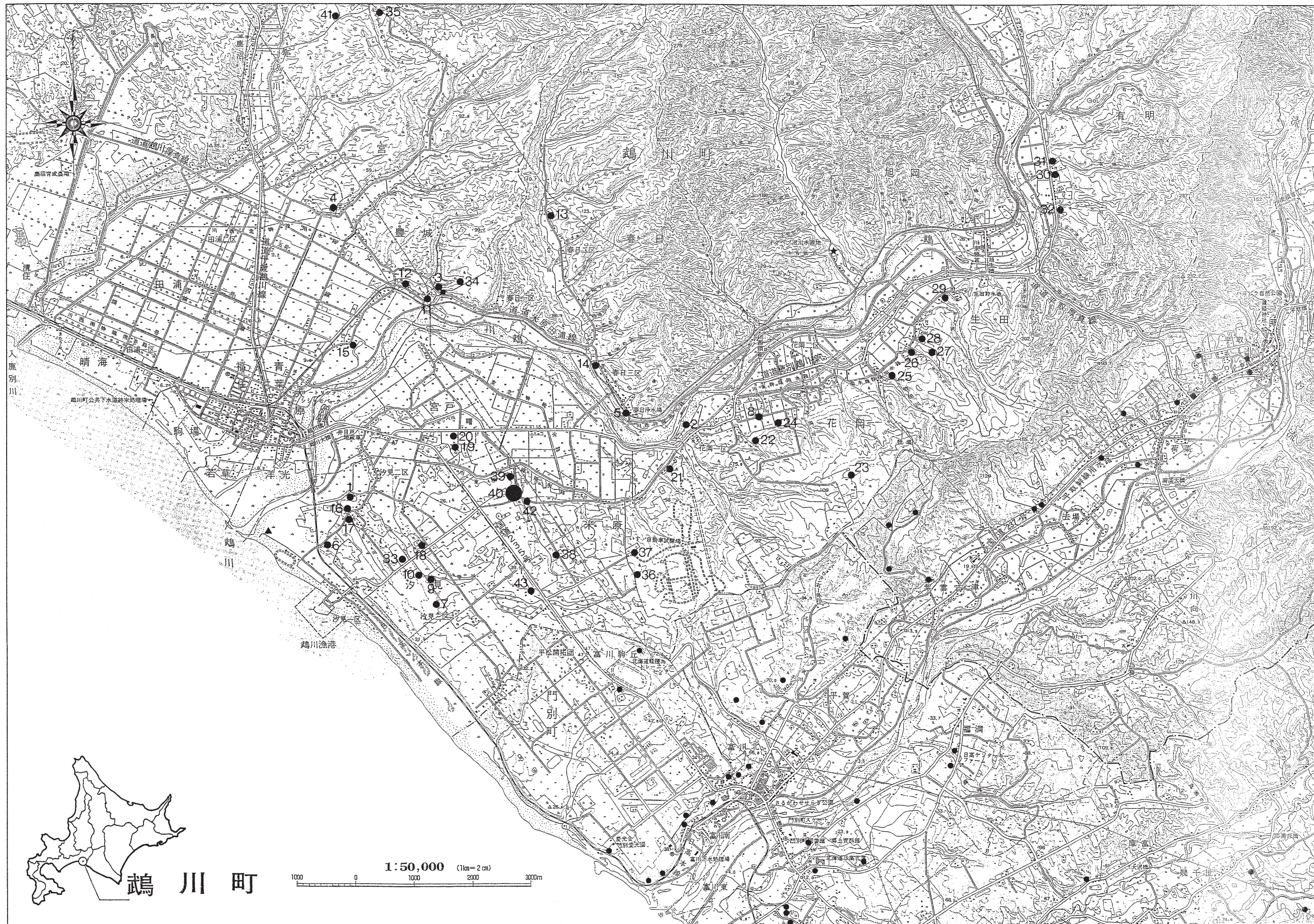
番号	名 称	種 別	所在地	立 地
1	鵜川盛土墳墓群	墳 墓	汐見 189 - 1・6	鵜川左岸、チン川・ライパチン川合流点東位段丘
2	花岡 1 (旧花岡) 遺跡	墳 墓	花岡 10	鵜川左岸段丘
3	豊城 1 (旧豊城) 遺跡	遺物包含地	春日 70 - 1	鵜川右岸、ケナシロ川左岸の舌状台地
4	二宮遺跡	遺物包含地	二宮 117 - 2 ほか	ニタチナイ川右岸台地の南向き傾斜地
5	春日遺跡	遺物包含地	春日 245 - 1 ほか	鵜川右岸台地先端～河川敷
6	トンニトイ (旧汐見 1 区) 遺跡	遺物包含地	汐見 94 - 1・2	鵜川左岸、海岸段丘の西端
7	柏山 (旧汐見団地) 遺跡	遺物包含地	汐見 243 - 1 ほか	ライパチン川右岸段丘緩斜面
8	花岡 3 遺跡	遺物包含地	花岡 236 - 17	鵜川左岸、ポンハルオマナイ左岸段丘
9	チン川左岸 1 遺跡	遺物包含地	汐見 302 - 1	チン川左岸段丘舌状台地
10	チン川左岸 2 遺跡	遺物包含地	汐見 230 - 1	チン川左岸段丘舌状台地
11	豊城 2 遺跡	遺物包含地	豊城 347	鵜川右岸、オコツ山南斜面
12	豊城 3 遺跡	遺物包含地	豊城 347	鵜川右岸、オコツ山南斜面
13	パンケヤラ遺跡	遺物包含地	春日 308 - 128	鵜川右岸、モイベツ川左岸山裾
14	モイベツ遺跡	遺物包含地	春日 176	鵜川右岸、モイベツ川・鵜川合流点南東舌状台地
15	藤高沼遺跡	遺物包含地	豊城 176	鵜川右岸、藤高沼 (鵜川旧河床) 西岸
16	汐見 2 遺跡	遺物包含地	汐見 197・198	ライパチン川左岸段丘
17	汐見 3 遺跡	遺物包含地	汐見 204 - 2	ライパチン川右岸段丘
18	トンニカ遺跡	遺物包含地	汐見 316 ほか	チン川右岸、人口池の北側台地
19	サツベサ遺跡	遺物包含地	宮戸 157 - 2～5	鵜川左岸沖積地の舌状台地
20	宮戸遺跡	遺物包含地	宮戸 263	鵜川左岸沖積地の舌状台地先端
21	ケナシロシケオマナイ遺跡	遺物包含地	米原 490 - 1・2	鵜川左岸段丘
22	オリイカチャシ跡	チャシ跡	花岡 285 - 8	鵜川左岸。オリイカ川右岸台地舌状先端部
23	ルベシナイ遺跡	遺物包含地	花岡 308	鵜川左岸。ルベシナイ水源東位
24	花岡 2 遺跡	遺物包含地	花岡 288 - 1 ほか	鵜川左岸段丘
25	パンケニウキナイ 1 遺跡	遺物包含地	生田 240 - 22	鵜川左岸段丘
26	パンケニウキナイ 2 遺跡	遺物包含地	生田 241 - 1～3	鵜川左岸段丘、ニクトンナイ川岸
27	ニクトンナイ 1 遺跡	遺物包含地	生田 244 - 12	鵜川左岸。ニクトンナイ川北東
28	ニクトンナイ 2 遺跡	遺物包含地	生田 244 - 13	鵜川左岸。ニクトンナイ川北東
29	パンケニウキナイ遺跡	遺物包含地	生田 167	鵜川左岸。パンケニウキナイ川西の台地下
30	ピタルシナイ 1 遺跡	遺物包含地	有明 87	鵜川左岸。オブスケ川とアリアケ川の間
31	ピタルシナイ 2 遺跡	遺物包含地	有明 47 - 1	鵜川左岸。アリアケ川右岸
32	オブスケ遺跡	遺物包含地	有明 15 ほか	鵜川左岸。オブスケ川南岸の台地
33	チン川左岸 3 遺跡	遺物包含地	汐見 225 - 4	チン川左岸段丘
34	豊城 4 遺跡	遺物包含地	春日 70 - 13	鵜川右岸台地上
35	二宮 2 遺跡	遺物包含地	二宮 435 - 3	入鹿別川支流、イリシカベツ川右岸台地
36	米原第 1 遺跡	遺物包含地	米原 585 - 1 ほか	チン川源流部の丘陵、南北に伸びる舌状台地
37	米原第 2 遺跡	遺物包含地	米原 517 ほか	オサネツ川源流部の丘陵
38	米原 3 遺跡	遺物包含地	米原 449 - 1 ほか	イモツペ川上流右岸の台地
39	宮戸 3 遺跡	遺物包含地	宮戸 183 - 1	イモツペ川中流左岸の台地
40	宮戸 4 遺跡	遺物包含地	宮戸 179 - 1 ほか	イモツペ川中流左岸の台地
41	二宮 3 遺跡	遺物包含地	二宮 487 - 6 ほか	入鹿別川左岸の台地
42	米原 4 遺跡	遺物包含地	米原 394 ほか	イモツペ川中流右岸の台地上
43	米原 5 遺跡	遺物包含地	米原 704 ほか	チン川上流右岸の台地

文献

- 大場利夫・扇谷昌康 1964 「勇払郡鵜川遺跡」『北方文化研究報告』第 19 輯
- 鵜川町史編纂委員会 1968 『鵜川町史』鵜川町
- 扇谷昌康 1977 『鵜川町遺跡分布調査報告書』鵜川町教育委員会
- 赤石慎三 1983 「鵜川町パンケニウキナイ遺跡出土資料について」『北海道考古学』第 19 輯
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 2001 『鵜川町 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』(北埋調報第 153 集)
- 兵藤千秋 2001 『北海道勇払郡鵜川町 米原3遺跡』鵜川町教育委員会
- 田才雅彦・宗像公司・今村繁吉 2002 『米原5遺跡』鵜川町教育委員会
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 2002 『鵜川町 宮戸4遺跡』(北埋調報第 168 集)
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 2003 『鵜川町 米原4遺跡 (2) 宮戸4遺跡 (2)』(北埋調報第 185 集)

表Ⅱ-2 鷓川町の遺跡一覧(2)

番号	時 期					アイヌ文化期	特徴・その他	文献		
	文								擦文	
	早期	前期	中期	後期	晩期					
1					○	◎	昭和38年、大場・扇谷ほかの調査により盛土墳墓(縄文初頭)確認。1号墳墓で墓壇6基検出。昭和41年、道指定。標柱あり。	1・2・3		
2	○	○	○	○	◎	○	○	昭和38年、大場・扇谷ほかの調査により墓壇(縄文晩期)20基検出。昭和43年造田工事で包含層は破壊され畦に若干残存。遺構は現存。	1・3	
3	時 期 不 明						豊城2遺跡と沢ひとつ隔てた北東岸舌状台地。			
4	○				○			晩式土器。中央部は土取りにより消滅。 高田氏宅裏手から二宮公民館に至る範囲で遺物採取。	3	
5	○	○	○			○	○	川西幹線用水路が中央を貫通。	3	
6						○	○	遺跡北側70×50mが土砂採取のため消失。これにより包蔵地消失。	3	
7		○						苦東開発に伴う住宅団地予定地。標柱あり。	3	
8	○	○	○					ほとんどの部分が削平され造田されているが、一部現地形を残す。	3	
9			○					農道カット面に遺構。標柱あり。		
10		○						削平され腐植土露出。標柱あり。		
11		○	○		○				3	
12					○	○			3	
13		○							3	
14		○						中央部を道路貫通。	3	
15					○	○			3	
16							○	○	相当数の堅穴を有する住居跡群。ムカワプト・コタン跡地の可能性大。 八王子千人同心の開拓用水路が付近にある。	3
17	時 期 不 明						造田工事により土砂採掘された崖面から黒曜石細片多数出土。	3		
18	○	○	○		○			○	トンニカ・コタンの跡地。	3
19			○					○	サッペサ・コタン跡地。	3
20	○	○							白樺を植林し保護しているので保存状態良好。	3
21							○		東方にアイヌ墓地、土葬墓現存。「米原遺跡」は墓地付近一帯と推定。	3
22			○					○	弧状の溝が東西各一本残存。	3
23	時 期 不 明								3	
24	○	○	○						昭和40年の農地改善事業でほとんど破壊され丘陵の一部に残存。	3
25	○	○	○	○		○			近年の農地改良で攪乱を受けている。	3・4
26	○				○				3	
27	○								3	
28	○								3	
29		○	○						土取りによりほとんど壊滅。背後にアイヌ墓地あり。	3
30			○						3	
31	○								アリアケ川を挟み、ピタルシナイ1遺跡と対峙。背後にアイヌ墓地あり。	3
32		○	○						周囲を沢が囲む。	3
33		○							長年の心土破碎により、攪乱されている。破壊に近い状況。	
34	○	○							保存状態良好。	
35		○							保存状態良好。	
36			○						南端部～南東側緩斜面で土器・石斧片出土。台地中央部にTピット。	
37			○						丘陵の頂部付近でTピット確認。	
38	○	○	○	○		○			縄文時代早期後半の焼土、中期末の堅穴住居跡。平成12・13年調査。	5・6
39	○	○							縄文時代のTピット、焼土。平成12年発掘調査。	5
40	○	○	○	○			○		縄文時代早期の石器制作址。縄文時代のTピット。平成12・13・14年調査。	8・9
41	時 期 不 明						隣接地の農地造成事業に伴う表面踏査により石槍片採集。			
42	○	○	○						縄文時代中期後半の堅穴住居跡。平成12・14年発掘調査。	5・9
43	○								縄文時代のTピット。早期の遺物。平成13年発掘調査。	7



図Ⅱ-6 鷓川町の遺跡分布図

Ⅲ 調査の方法、遺物の分類

1 発掘調査の方法

(1) 調査区の設定

基本図

基本図には国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が作成した「日高自動車道鶴川町田浦米原間用地測量業務現況平面図 1,000 分の 1 図」を使用した。

調査区設定

通常、高速道路あるいは高規格道路の建設に伴う発掘調査では、道路予定センターラインを基線の M ラインとして調査区を設定する。M はアルファベット文字列のちょうど真中に位置しており、工事用地内の調査範囲全体を覆うのに都合がいいからと考えられる。実際に平成 12 年度、米原 3 遺跡、宮戸 3 遺跡ではそのようにして調査した。ところが、米原 4 遺跡、宮戸 4 遺跡の調査に着手するにあたって、以下の 2 つの問題点が判明した。①基線となる M ラインが調査区域と高低差のあるイモッペ川の河川敷に入ってしまう、調査区から見通すことができずに不便である。②H ラインがちょうど遺構番号に「H」を冠する堅穴住居跡の検出が予想される付近にあたり、調査に混乱が生じる恐れがある。このため、米原 4 遺跡 B 地区の調査範囲のうち町道米原 11 線に沿う線がセンターラインと平行することから M ラインとし、予定される調査範囲全体を覆うように 5 m 方眼の調査区を設定した。センターライン上から 90° 北東に振った線と M ラインの交点は、STA. 30100 では M 9、STA. 30200 では M 29、STA. 30300 では M 49 となる。また、センターラインは R ラインと S ラインの中心を通ることになる。

この調査区の方眼は北東端交点にあるアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称する。さらに調査上の必要に応じて（主に遺物の取り上げで）2.5 m 方眼に 4 分割した。これらの小調査区は北東端から反時計回りに a、b、c、d と呼ぶ。

米原 4・宮戸 4 遺跡は、昨年度まで平成 12 年度に設定した調査区を踏襲してきた。しかし、平成 13 年度の試掘調査により、宮戸 4 遺跡が 0 ラインの外側に拡張されることになった。これが樹林部分である。今年度樹林部分を調査するにあたって、苦肉の策として本来の 0 ラインを 100 ラインと見なしこれより遡る数字の調査区を設定することとした。これによれば、樹林部分が 65 ラインから始まり、米原 4 遺跡が 61 ラインまでであるため、調査区の重複は避けられた。一方、平成 12 年度調査の宮戸 3 遺跡は樹林部分と接しているが、調査区は整合していない（図Ⅲ-1）。

座標値

平面直角座標系第 X II 系の各座標は以下の通りである。

STA. 29900 : X = -159379.53181 / Y = -22035.50910	STA. 30000 : X = -159464.08158 / Y = -21982.11119
STA. 30100 : X = -159548.63135 / Y = -21928.71328	STA. 30200 : X = -159633.18112 / Y = -21875.31537
STA. 30300 : X = -159717.73089 / Y = -21821.91746	STA. 30400 : X = -159802.28066 / Y = -21768.51955

(2) 調査の方法

今年度の調査範囲は、大きく 3 つの地区に分かれる。町道米原 11 線下、旧町道米原 1 号下および法面部分が「米原 4 遺跡」、平成 12 年度調査の宮戸 3 遺跡より南側、平成 13 年度調査の斜面部分までの山林が「宮戸 4 遺跡樹林部分」、旧町道米原 2 線下が「宮戸 4 遺跡町道部分」である。工事の工程上、米原 4 遺跡と宮戸 4 遺跡樹林部分の調査を先行し、宮戸 4 遺跡町道部分を最後に調査した。

包含層調査

限られた期間内で効率的に調査するため、遺構や遺物の濃淡などから主な出土層位を吟味し、地区によ

って異なる包含層調査の方法をとっている。以下、地区ごとに説明する。

①米原4遺跡、宮戸4遺跡町道部分

道路部分は、最初にアスファルトや砂利などで舗装された路盤を重機により撤去した。ほかに厚さ60～80cmの表土（Ⅰ層）、17世紀中葉に降下した樽前b火山灰層および有珠b火山灰層（Ⅱ層）も同じく重機で除去した。人力による調査は、その下の黒色土層（Ⅲ層）からである。まず、グリッド杭打設後に、Ⅲ層上面に残った厚さ1～5cm程の火山灰をジョレンで除去した。この際に、攪乱や削平による埋土も取り除き、本来の自然堆積層が表出するようにした。Ⅲ層以下はほぼ全面に25%調査を実施し、遺構や遺物の分布を把握することに努めた。遺物が多く出土した部分は、調査区ごとに土層の変化を見極めながら移植ゴテで2～3cmずつ掘り下げた。遺物が少なかった部分は、移植ゴテと三角ホーを併用して5cmずつ掘り下げた。遺物が出土しなかった部分は、スコップにより深さ5～10cmの細かい刻み目を入れた後、遺物の有無を再確認しながら三角ホーまたはジョレンで土を除去するという方法により調査した。

遺物包含層の主体であるⅤ層は、上位・中位・下位の3段階に分け調査した。地点によりⅤ層の厚さが異なることから、客観的に上面から3分割して分層した。Ⅵ層は、昨年度までの調査により、上部5cmまでは縄文時代早期の遺物が出土するが、下部は無遺物層であることが予想されていた。よって、Ⅵ層下部～Ⅶ層を一括し、旧石器確認のためのトレンチ調査（深さ約1m）を実施した。

②宮戸4遺跡樹林部分

平成12年度の宮戸3遺跡の調査、平成13年度の試掘調査の結果から、この部分は遺構がTピット、遺物が縄文時代早・前期を主体とし、Ⅲ層～Ⅴ層中位はきわめて遺物が少ないことが予想されていた。今年度、重機による表土・火山灰除去の際に、平成13年度に立木のために試掘できなかった地点にトレンチ調査を実施して遺物の有無を確認したところ、同様の傾向が見られた。よって、調査の効率化を計るため、Ⅲ層～Ⅴ層中位を重機による調査へと切り替え、段階的に約10cmずつ掘り下げた。

Ⅴ層下位より人力による調査を開始した。まず、遺構や遺物の傾向を把握するため、調査区全体に25%調査を実施した。この結果、Tピットが多数検出された一方で、遺物の分布に偏りがあることが明らかになった。ほとんど遺物が出土しない部分については遺構確認調査とし、再び重機を導入してⅥ層上位まで掘削した。遺物が出土した部分は、調査区ごとに移植ゴテで2～3cmずつ掘り下げた。

以上のような方法により調査したため、樹林部分の遺物の大半は、Ⅴ層下位およびⅥ層上位より出土している。これより下部については、町道部分や米原4遺跡と同様に、一括して旧石器確認のためのトレンチ調査（深さ約1m）を実施した。

遺構調査

今年度検出された遺構は、土坑、Tピット、焼土、集石などがある。

土坑、Tピットは落ち込みの範囲を確認し、最も適当と思われる軸で半截して掘り下げた。内部に堆積した土層の断面を観察し、写真や実測図などで記録した後、遺物出土状況図、横断図、平面図などを作成し、完掘した。Tピットについては、大部分が中央部の短軸で半截したが、一部は長軸で半截する「縦割り調査」を行った。

焼土は、できるだけ形成面での検出に努めた。微細遺物や骨片、炭化物などが比較的良好に残存しているものについては、土壌のサンプルを採取し、フローションによりこれらを抽出した。検出面で規模を記録し、トレンチなどにより焼土の断面を観察した。また、その周囲の形成面と考えられる包含層より出土した遺物から、関連性や時期などを推測した。

集石は、礫・礫片の状態や周囲の遺物などを観察してから、出土状況図を作成した。また、形成や拡散過程が分かるように、集石とその下部の土層を断面調査した。

遺物の取り上げ

包含層の遺物は、遺跡名、出土地点、層位、種別、日付を記録し取り上げた。出土地点は、2.5 m×2.5 mの小発掘区を単位とし、層位は遺跡の基本土層に対応している。種別は現場で大まかに土器、剥片石器類、磨製・礫石器類、礫・礫片に分けた。

遺構の遺物は、出土位置、層位、標高を記録して取り上げた。詳細な出土状況が必要と判断した場合は、写真や微細図などを用いた。

遺物整理の方法

出土した遺物は、野外調査と並行して現地で水洗作業、大まかな遺物の分類、カード作成、遺物収集帳作成、注記を行った。現場での調査終了後、遺物を江別市の当センター本部へと搬送した。

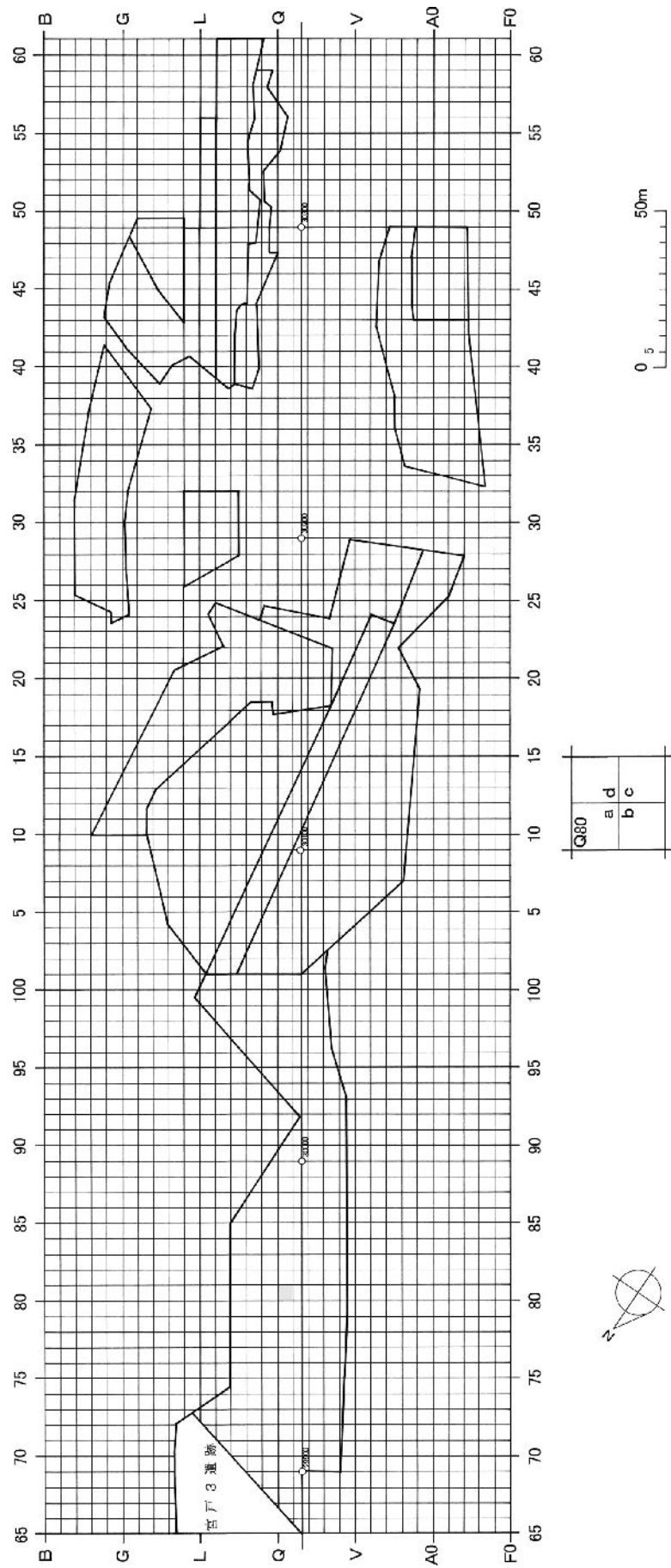
11月以降の室内作業では、遺物の分類変更、土器の個体識別、接合・復元、拓本・実測・製図、石器や剥片・礫片の接合、実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。

整理が終了した遺物は、各遺跡の土器、石器等それぞれについて、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、調査区、遺物番号などの基準で分別して収納した。また、遺跡毎の遺物収納台帳も作成した。

注記作業の実際

一定以上の大きさの遺物を対象とした。遺跡略号（ヨネ4、ミヤ4）、遺構名または調査区（小発掘区）、遺物番号、層位の順に、白のポスターカラーで記入し、その上にラッカーを塗布した。例えば、米原4遺跡のP-7の覆土2層から出土した遺物番号1の遺物は「ヨネ4. P-7. 1. フク2」、宮戸4遺跡のU16調査区b小発掘区のV層下位から出土した遺物番号11の遺物は「ミヤ4. U-16-b. 11. V下」と記入される。10円玉大以下の土器片や微細なフレイク・チップは注記せず、小さなビニール袋に「未注記」と必要事項を記入して収納した。

(芝田直人)



図III-1 調査区設定図

2 地形と土層の区分

宮戸4遺跡のVI層上面の地形と土層断面図を図III-3に示した。調査区は南西-北東方向に緩やかに傾斜する丘陵の末端で、イモツペ川に注ぐようなかたちで複数の沢状地形が形成されている。

土層の記載は、『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編2000）を参考にし、土色、土性、粘着性、堅密度、含有物とその含有率について記載した。土色については『新版標準土色帖』（小山・竹原2002）を用いた。

- I層 表土**：2.5Y2/1。黒色。砂壤土。粘着性弱。堅密度すこぶるしょう。極小軽石50%含む。腐植土。耕作によりほとんど攪乱されている。部分的に下部に軽石層がみられたが、1739年降下の樽前a軽石層(Ta-a)である。
- II層 火山噴出物層**：表土下に堆積する火山噴出物を一括し、6層に細分した。II a～d層が樽前b降下軽石層(Ta-b)、II f層が有珠b降下軽石層(Us-b)。
- II a層：7.5YR4/4。褐色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。極小軽石50%、中軽石7%、砂粒極小40%。軽石層。漸移的。
- II b層：10YR8/3。浅黄橙色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。極小軽石50%、極小砂粒50%。軽石層。漸移的。II a層との間に部分的に黄褐色(10YR5/6、砂壤土、粘着性弱、堅密度しょう、極小軽石50%)の土層あり。
- II c層：10YR8/3。浅黄橙色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。極小軽石・極小砂粒で95%、小～中軽石5%。軽石層。漸移的。
- II d層：10YR8/2。灰白色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。極小軽石・極小砂粒で100%。軽石層。漸移的。
- II e層：10YR4/2。灰黄褐色。砂壤土。粘着性弱。堅密度しょう。極小軽石5%。上面に腐植土。
- II f層：10YR8/2。灰白色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。小～中軽石100%。軽石層。
- III層 クロボク土**：10YR1.7/1。黒色。埴壤土。粘着性中。堅密度しょう。腐植土。
- IV層 白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)**：7.5YR4/3。褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度しょう。細粒火山灰。
- V層 クロボク土**：黒色の腐植土。軽石の含有と色調から2分された。
- V a層：10YR1.7/1。黒色。埴壤土。粘着性弱。堅密度しょう。腐植土。
- V b層：7.5YR2/1。黒褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。極小軽石2%含む。腐植土。
- VI層 漸移層**：10YR3/4。暗褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～中軽石5%含む。低地部では図III-3のTP30・29・48・31・54の断面で観察すると、漸移層より下位に水成堆積物が認められた。
- VII層 ローム層**：10YR6/6。明黄褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。軽石極小～中多く含む。宮戸3遺跡側の尾根上で見られた。
- VIII層 支笏第1降下軽石層(Spfa-1)**：橙色の軽石層。土性により四分した。
- VIII a層：7.5YR6/1。橙色。砂土。粘着性なし。堅密度堅。極小～中軽石95%、大～極大軽石5%、極小砂粒1%。軽石層。
- VIII b層：10YR6/6。黄褐色。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。砂粒1%含む。ローム質。
- VIII c層：10YR6/8。黄褐色。砂土。粘着性なし。堅密度堅。極小～中軽石100%。軽石層。
- VIII d層：10YR6/8。黄褐色。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。ローム質。層厚約1cm。
- IX層 ローム層**：黄褐色土層。色調と土性で2分した。
- IX a層：10YR3/3。暗褐色(最上部、部分的に10YR1.7/1。黒色)。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。ローム。

IX b 層：10YR4/3。にぶい黄褐色。堅密度固結。粘土状のものが固結。

IX' 層：10YR8/4。淡黄色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶる堅。極小～小軽石 100%。軽石層。

X 層 **クッタラ第 1 降下軽石層 (Kt-1)**：淡黄色の軽石層。色調と軽石の粒度により四分した。

X a 層：10YR8/3。淡黄色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。極小～小軽石 50%、極小砂粒 50%。軽石層。

X b 層：7.5YR4/6。褐色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。小～中軽石 50%、極小砂粒 50%。腐植土。

X c 層：10YR7/8。黄色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。小～中軽石 50%、極小砂粒 50%。軽石層。

X d 層：10YR8/1。灰白色。砂土。粘着性なし。堅密度すこぶるしょう。極小～小軽石 50%、極小砂粒 50%。軽石層。

X I 層 **銭亀女那川テフラ (Z-m) ?** : 7.5YR5/2。灰褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。細粒火山灰。角閃石、石英含む。

X II 層 **水成堆積物** : 7.5YR。にぶい橙～黄橙色（下半 10YR3/4 暗褐色～10BG3/1 暗青灰色の砂層挟む）。埴土。粘着性弱。堅密度上半軟、下半しょう。上半は軽石層の再堆積物主。最下部で斑状に固結したマンガン集積。

ほかに低地部では以下のような土層が見られた。

II' 層：5YR3/6。暗赤褐色。II 層に褐鉄鉱が沈積し、全面酸化したもの。A - A' 断面左側。

III' 層：10YR2/1。黒色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。III 層に極小～小ローム粒 3% 含むもの。

V a' 層：5YR1.7/1。黒色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。V a 層に酸化鉄が集積したもので、高師小僧 20% 含む。

V b' 層：5YR2/1。黒褐色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。V b 層に酸化鉄が集積したもので、高師小僧 20%、極小～小軽石 3% 含む。

V' - VI' 層：5YR2/4。極暗赤褐色。堅密度固結。褐鉄鉱が沈積し、固結した層。

VI' 層：2.5Y7/3。浅黄色～5/。黄褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。極小～中軽石 7%、高師小僧 2～5% 含む。後述の 23' と同じ。

1：7.5Y6/2。灰黄色。埴土。粘着性弱。堅密度軟。極小軽石 3%、高師小僧 1% 含む。後述の 4 と同じ。

2：2.5Y3/1。黒褐色。埴土。粘着性弱。堅密度軟。極小軽石 3%、高師小僧 1% 含む。後述の 22' と同じ。

3：10YR3/1。黒褐色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。V b 層相当。

4：10YR6/2。灰黄褐色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 5% 含む。

5：10YR5/1。褐灰色。堅密度堅。V b 層相当。

6：5Y4/1。灰色。砂壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～中軽石 3% 含む。

7：5Y4/1。灰色。砂壤土。粘着性中。堅密度堅。極小～中軽石 45% 含む。ラミナ発達。

8：5Y4/1。灰色。砂土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。極小～中軽石部分的濃集。極小砂粒 50% 含む。ラミナ発達。

9：5Y4/1。灰色。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。極小～小軽石 10% 含む。

10：5Y5/1。灰色。埴壤土。粘着性弱。堅密度軟。

11：5Y4/1。灰色。埴土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 10% 含む。

12：5Y4/1。灰色。埴土。粘着性中。堅密度しょう。

13：5Y4/1。灰色。埴壤土。粘着性中。堅密度しょう。クロボク（土層 14）ブロック 40% 含む。

- 14 : 5Y2/1. 黒色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小軽石 5 % 含む。
- 15 : 5Y4/1. 灰色。埴壤土。粘着性弱。堅密度しょう。
- 16 : 5Y4/1. 灰色。壤土。粘着性弱。堅密度しょう。
- 17 : 5Y3/1. オリーブ黒色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小軽石 3 % 含む。
- 18 : 5Y5/1. 灰色。壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 5 % 含む。
- 19 : N2/. 黒色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。
- 20 : 10BG4/1. 暗青灰色。砂土。粘着性弱。堅密度すこぶる堅。極小砂粒 100%。
- 21 : 10YR1. 7/1. 黒色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。中軽石 3 % 含む。V b 相当層。
- 22 : 10YR2/1. 黒色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 3 % 含む。VI相当層。
- 22' : 2. 5Y4/1. 黄灰色。埴壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 3 % 含む。VI相当層。
- 23 : 2. 5Y5/4. 黄褐色。壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 3 % 含む。VI相当層。
- 23' : 2. 5Y6/4. にぶい黄色。壤土。粘着性弱。堅密度堅。極小～小軽石 3 % 含む。VI相当層。
- 24 : 2. 5Y7/4. 浅黄色。壤土。粘着性弱。堅密度軟。極小～中軽石 5 % 含む。VII相当層。

この内土層 1・2・5～20 が旧河道の堆積物で、ほかは、基本土層がグライ化し、褐鉄鉱が沈積したことにより色調が変化したもの。

旧河道は、平成 14 年度水田部分とした地区で確認されていたが、今年度その続きが確認された。さらに 1950 年前後の航空写真を参考にすると、現在の町道米原 1 号線から川下側では、宮戸 3・4 遺跡が存在する丘陵末端に沿うような流路であったことが想定される。

VI層（漸移層）上面では、帯状の褐鉄鉱の沈積が低地部と乾燥部を画するように観察できた（図Ⅲ－2 上及びⅢ－3 左図スクリーントーン）。この褐鉄鉱の沈積より低地側の土層には高師小僧が見られるだけでなく、グライ化しており、土壌が水分で飽和し還元状態にあったものとみられる。A－A' の土層断面を見て明らかなおり褐鉄鉱沈積層は堆積層界に沿わずに斜めに上下層においてもみられ、Tピットの壁面では南西側に行くにしたがいさらに下位の層位で確認された。したがって、地下水位は時を経るにしたがい南西から北東へ後退していったものと理解される。またトレンチ C の湧水点付近にはマンガンの集積も見られた。

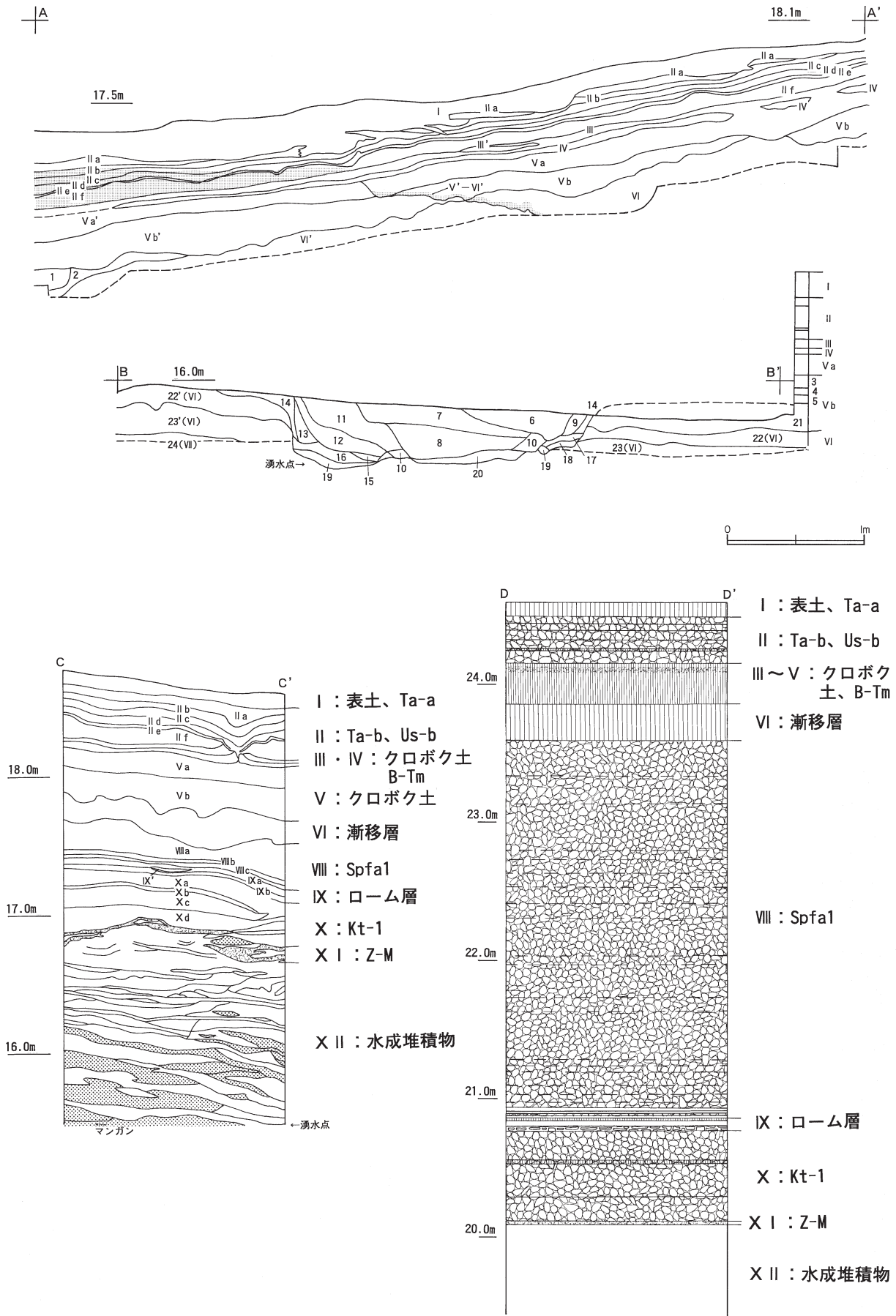
今回、丘陵を横断するように Tピットの壁面、深掘り試掘坑を観察し、遺跡の地形の形成過程を推定しうるデータを得ることができた（図Ⅲ－3）。それを参考に、現地地形と X層降下後の地形を比較すると、低地部に比べ丘陵上に厚く VIII層（支笏第 1 降下軽石）が堆積し、約 1 m 以上高低差が増加していることが分かった。これは、X層堆積以前は地形の凹凸が不明瞭であったものが、クッタラ、支笏両火山からの降下軽石が厚く覆い、低地部では速やかに軽石が侵食されたものと考えられる。

また、低地部では、VI層漸移層下位に水成堆積物が見られ、Spfa1 や Kt-1 の堆積は二次堆積以外に観察されなかった。写真を見る限り平成 13 及び 14 年度の報告書でいう礫層とは、この水成堆積物中に見られるものと考えられる。

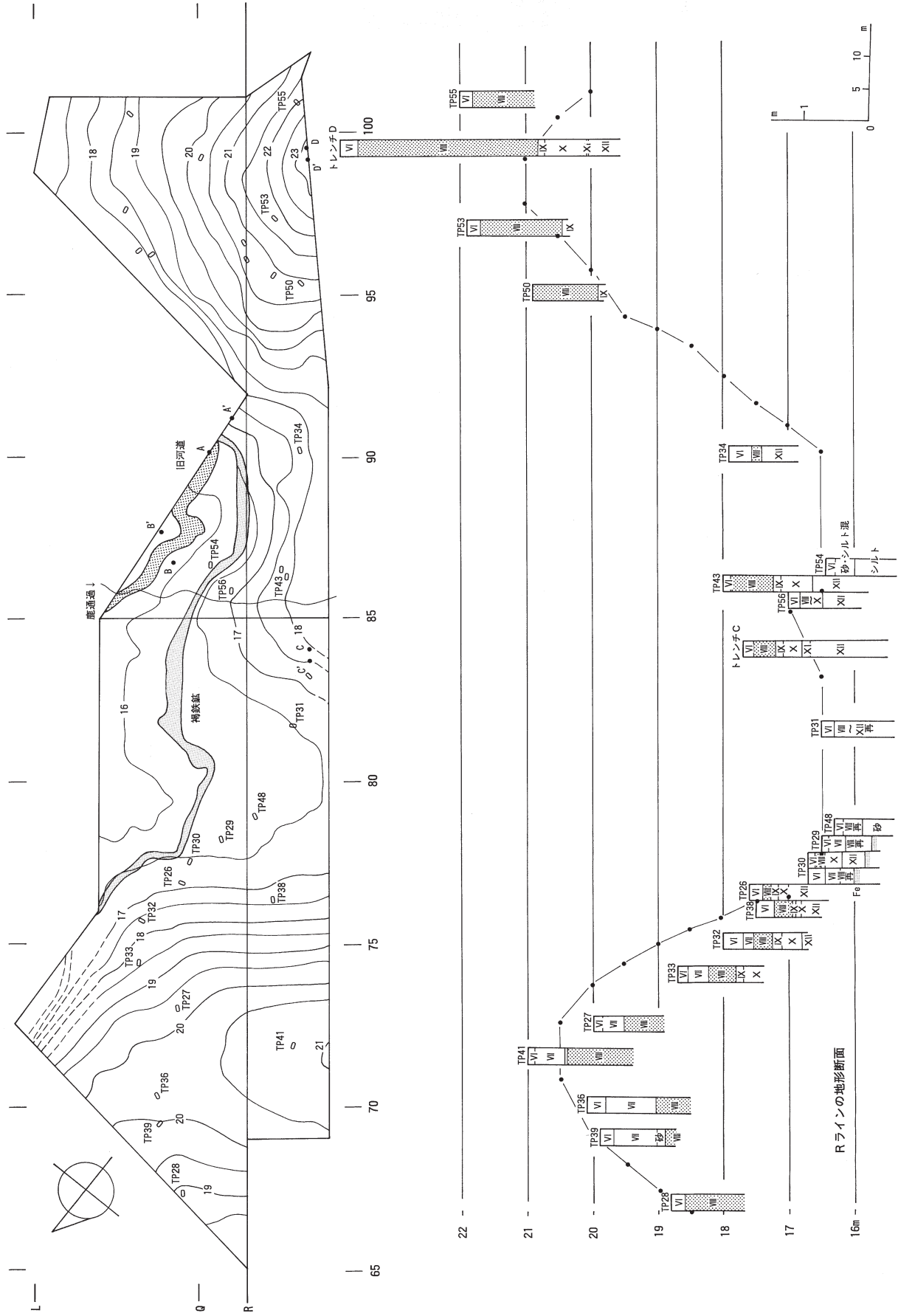
さらに、VII層ローム層については、北西側の宮戸 3 遺跡に隣接する部分では明瞭に確認されるものの、南西側では全く確認することができなかった。平成 13 年度調査時の写真を見る限り、宮戸 3 遺跡では Spfa1 の上位に Spfa1 及び Kt-1 の水成二次堆積層が見られる。

最後に今回 X層とした Kt-1 は、平成 13 年度宮戸 4 遺跡報告書 22 頁で砂礫層とされていることを付け加えておく。

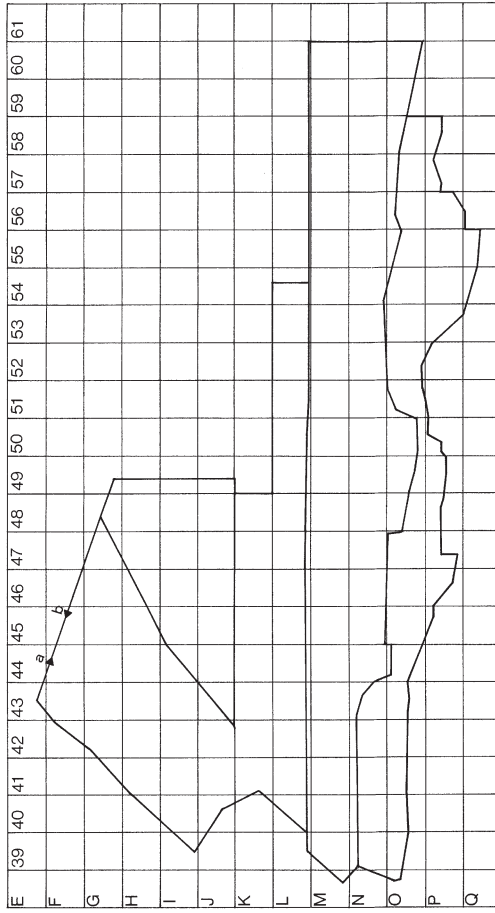
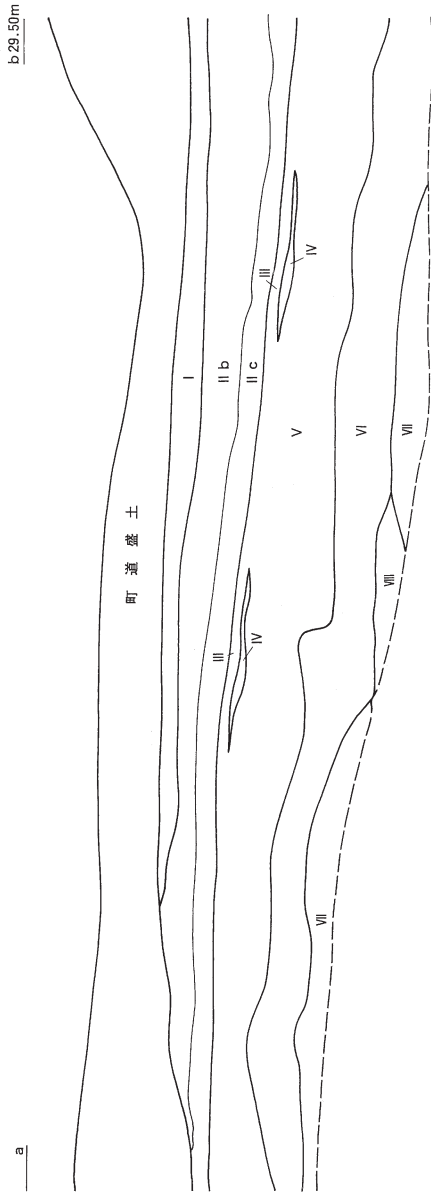
（福井）



図Ⅲ-2 土層断面図及び柱状図



図III-3 樹林部分の地形と土層
(等高線はIV層上面)



土層注記

- I：黒褐色 (10YR3/1)。中にテフラ層があり、その上位は壤土、下位は砂壤土。粘着性中。堅密度軟～堅。
- II b：樽前b 階下テフラ。径2mm前後の軽石が多い。最大は1cm程。上位10cmほどは酸化して褐色を呈する。II c層との間に厚さ約2cmの腐植層が認められる。腐植層の下部には褐色のテフラが認められる。
- II c：有球b 階下テフラ。径2mm～1cmの軽石が多い。
- III：黒色 (10YR1.7/1) 堆積土。粘着性弱～中。堅密度軟。
- IV：褐色 (7.5YR4/3) 重粘土。粘着性中。堅密度軟。
- V：黒褐色 (10YR3/1) 堆積土。粘着性弱～中。堅密度軟。
- VI：新移層。堅密度堅。
- VII：褐色 (10YR4/4) 堆積土。粘着性中。堅密度堅。
- (M)：M層の二次堆積物。明黄褐色 (10YR6/6)。径5mm以下の軽石が多い。堅密度堅。

図III-4 米原4遺跡基本土層

3 遺物の分類

(1) 土器

縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。平成15年度の調査ではⅠ群～Ⅳ群土器が出土している。基本的にはこれまでの4冊の調査報告書の分類を踏襲しているが、Ⅱ群土器とⅢ群土器の細分類に若干の変更がある。

Ⅰ群 縄文時代早期に属するもの

- a 類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群
- b 類：縄文、撚糸文、縄の側面圧痕、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施される土器群
 - b-1 類：東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの
 - b-2 類：コッタロ式に相当するもの
 - b-3 類：中茶路式に相当するもの
 - b-4 類：東釧路Ⅳ式に相当するもの

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの

- a 類：縄文の施された丸底・尖底の土器群
 - a-1 類：いわゆる網文土器に相当するものおよびこれに伴うとみなされる横走縄文、斜行縄文、縦行縄文、組紐回転文、羽状縄文の施された土器群
 - a-2 類：春日町式、静内中野式など縄文の施された土器群
- b 類：円筒土器下層式、植苗式、大麻Ⅴ式に相当するもの

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの

- a 類：円筒土器上層式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式および萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式に相当するもの
- b 類：円筒土器に後続する土器群
 - b-1 類：天神山式、萩ヶ岡3式に相当するもの
 - b-2 類：柏木川式、萩ヶ岡4式に相当するもの
 - b-3 類：北筒式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの

- a 類：余市式、タプコプ式、手稲砂山式、入江式、白坂3式に相当するもの
- b 類：ウサクマイC式、手稲式、鯨潤式、エリモB式に相当するもの
- c 類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの

- a 類：大洞B式、大洞B-C式に相当するもの
- b 類：大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの
- c 類：大洞A式、大洞A'式およびタンネトウL式に相当するもの

Ⅵ群 続縄文時代に属するもの

- a 類：大狩部式、トニカ式、東歌別式に相当するもの
- b 類：恵山式に相当するもの
- c 類：後北式に相当するもの

Ⅶ群 擦文時代に属するもの

(遠藤)

(2) 石器等

石器は剥片石器群、磨製石器群、礫石器群、自然遺物に大別し、さらに器種分類を行った。定形的な石器については形態、製作方法により細分類を行ったものもある。大きさについてはmmを単位として用い、小数点第一位まで測った。長さ、幅については定形的なものについては長軸を基準に、不定形なものについては剥片剥離軸を基準に長方形を想定し測定した。厚さについては最大厚を測った。重量についてはgを単位として用い、小型のものについては小数点第二位、大型のものについては体重計を用いたため100g単位まで量った。また、礫石器に付した記号については、|—|はすり痕、V—Vは敲打痕を示す。スクリーントーンについては、使用による光沢が見られたものを示している。なお、文中で石器という場合は剥片、礫以外の石器類を示すこととした。

剥片石器群

石鏃 押圧剥離により両面が剥離され、尖頭形を呈す5cm未満のもの。

石槍又はナイフ 押圧剥離や平坦剥離によって両面が剥離され、尖頭形を呈す5cm以上のもの。

石錐 錐状の突出部が作り出されたもの。

つまみ付ナイフ 原則として素材長軸端部につまみ部が作り出されたもの。

スクレイパー 既報告の宮戸・米原遺跡群の報告で用いられているため以下の器種についてまとめて扱うことにする。ただし、記載や分布については以下の器種ごとに行う。

筐状石器 両面が調整された石器で、一端に直線状ないし弧状の刃部が形成されるもの。

ラウンドスクレイパー 急角度の剥離が素材周縁に連続的に加えられたもの。

エンドスクレイパー 急角度の剥離が素材端部に連続的に加えられたもの。

サイドスクレイパー 剥離が素材の側縁に連続的に加えられたもの。

抉入石器 抉り状の刃部が細部調整で加えられたもの。

両面調整石器 剥離が素材の両面に施されるが尖頭形でないもの。

ピース・エスキュー（楔形石器） 対向する小剥離が素材の両端部にあるもの。また、いわゆる両極剥離打法により発生する各種の割れの特徴を持つもの。

Rフレイク 散漫な剥離が加えられた不定形のもの。既報告の宮戸・米原遺跡群の報告ではRフレイクとUフレイクに分けられているが、その基準が明瞭でないため一括して扱うこととした。

フレイク（剥片） 石核、石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

石核 石器の素材となりうる大きさ・形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

磨製石器群

石斧 打ち欠き・研磨などにより棒状、短冊状に整形されたもの。

石斧片 上記定義により認定された石斧の破片資料とみられるもので、想定される器体長の3分の1以下のもの。

石斧原材 打ち欠き・研磨により棒状、短冊状に整形されるが、斧状の刃部が認められないもの。擦り切り技法により生じた、擦り切り残片含む。分類は石斧と同じ。

礫石器群

たたき石 敲打痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

凹石 敲打による明瞭な凹みが見られるもの。

すり石 すり痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

石錘 扁平な円礫の長軸両端に打ち欠きによる抉りが入れられるもの。

砥石 凹んだ砥面を持つもの。

台石・石皿 擦り痕若しくは敲打痕があるものの内、受動的と考えられるもの。

加工痕のある礫 加工痕を持つものの定形的な石器としては認定しがたいもの。

自然遺物

礫・礫片 遺跡に搬入された礫のうち加工痕、使用痕の見出せないもの。礫石器の原石も含まれる。人為的とはみなせない割れ面のあるものを礫片とする。

石材等

石材

石材については、黒曜石、頁岩、緑色泥岩、砂岩のほか、安山岩、チャート、玉髓、蛇紋岩、凝灰岩、珪岩、礫岩、泥岩、粘板岩、片麻岩と特定したが、厳密な岩石学的分類とは一致しない場合もある。

なかでも蛇紋岩としたものは、カルシウムが多く元素組成では蛇紋岩とは認定できないものであるが、通常考古学では蛇紋岩と認定される石材であることから「蛇紋岩」として記載した。

また、宮戸4遺跡出土の黒曜石についてはフレイク、Rフレイク以外の374点、1169gの石質を記録した。石質は肉眼観察で、①縞の入るもの、②モヤの入るもの、③梨肌のもの、④花十勝、⑤球顆の入るもの、⑥その他に分け、原石面のあるものは角礫か円礫かを記載した。

光沢

筥状石器の刃部周縁に見られたもので、使用に伴って形成されたものとみられる。詳細については『野田生4遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター 1992）を参照願いたい。

（3）宮戸4遺跡の石器の整理

冬季の整理は、器種ごとに細分類を行った。並行して器種とその細分類を代表するものを選択し、実測した。また手書きの遺物収集帳を、器種、石材、重量、被熱、欠損、使用痕、付着物について台帳に記録した。定形的な器種については、さらに長さ、幅、厚さも計測した。遺物台帳は、マイクロソフトエクセルに入力し集計等を行った。特徴的なものについては接合を試みたものもある。

収納は、掲載遺物は図面に対応するように、1点ずつ小袋に入れた後、図ごとに中袋に収納した。未掲載遺物については、器種ごとに1点ずつ小袋に入れた後、グリッド数字ラインごとに中袋に収納した。フレイクについては遺物番号ごとに小袋に入れた後、グリッド数字ラインごとに石材別に中袋に収納した。

（福井）

IV 米原4遺跡

1 遺構と遺構出土の遺物

(1) 概要

今年度調査された遺構は、土坑2基（P-7・8）、Tピット1基（TP-9）、焼土25カ所（F-24～48）、集石1カ所（S-3）である。調査範囲のうち町道米原11線部分では、かつての道路工事により地形が削平されていたため、遺構の多くは周囲より標高の低い沢部分で検出されている。町道米原1号部分では、昨年度の調査区で検出された焼土数カ所のまとまりが引き続き認められた。

土坑は沢の内側に1基（P-7）、調査区南側の浅い沢地形内にもう1基（P-8）がある。両者は、形態、規模のほか覆土の堆積状況も似通っており、出土遺物等から、時期は縄文時代早期後半の可能性がある。

Tピット（TP-9）は削平部分で確認されたが、周囲の地形からみて沢へ下る緩斜面に掘られたものであろう。形態は溝状を呈し、杭痕は認められない。形態の類例から、縄文時代中期後半～後期初頭の時期が想定される。

焼土（F-24～48）はいくつかがまとまった在り方をすることが多い。検出された層内における高さの違いを周囲の遺物と合わせて考えると、縄文時代早期後半、前期前半、中期後半、後期初頭の各時期のものがあると判断される。

集石（S-3）は沢へ下る緩斜面において、礫片85点が90×80cm程の範囲にまとまっていた。一部の礫には熱を受けた痕跡がみられる。検出された層位と周囲の遺物から、時期は縄文時代前期前半と考えられる。（山中）

(2) 土坑

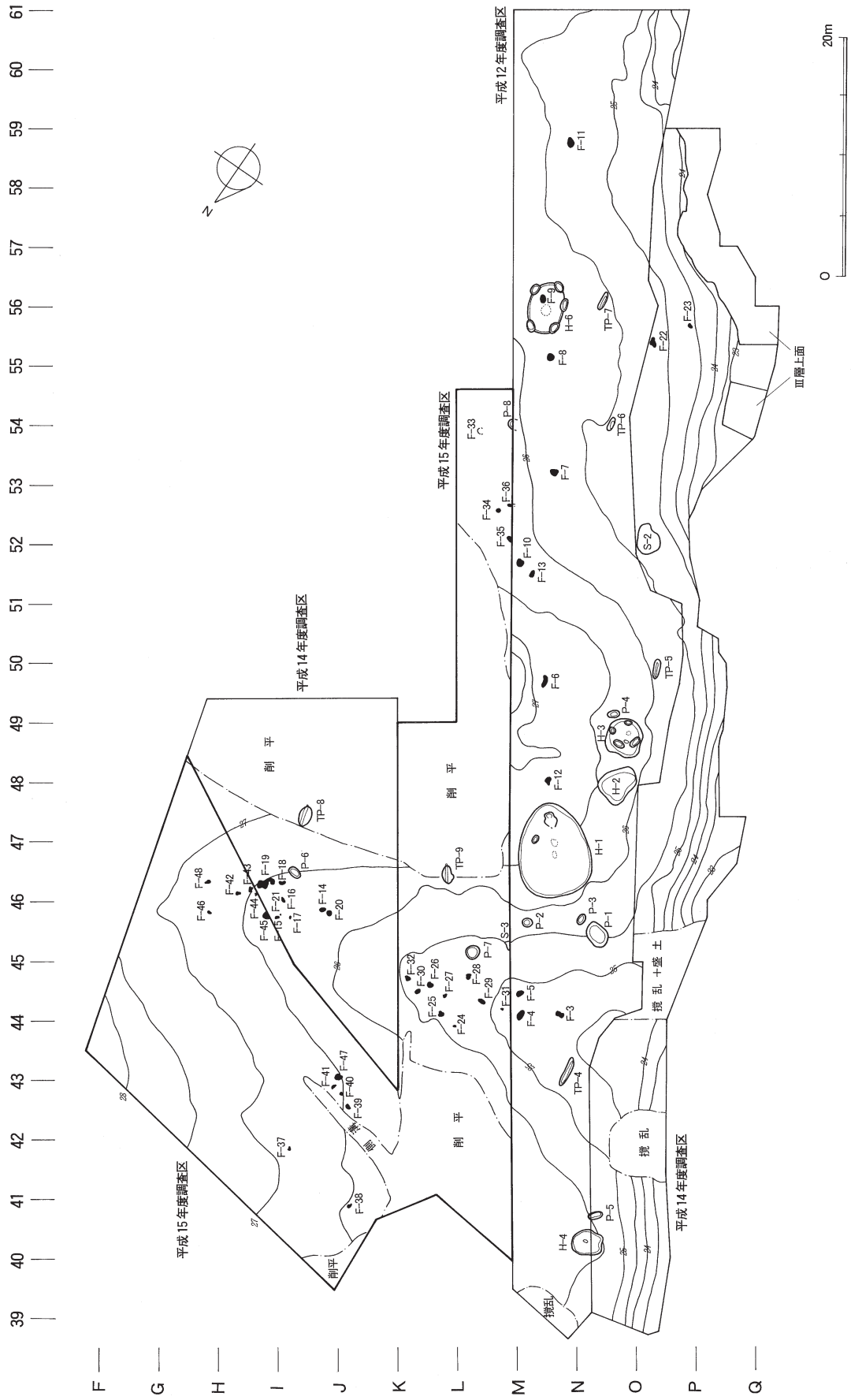
P-7（図IV-2／別表VI-1・2／図版3-2・3、6-1）

沢へと下る西向きの緩斜面に位置する。VII層の面でV～VII層の混じった円形の輪郭が確認された。その南西側半分をVII層が現れるまで掘り、断面や形態等を観察したところ、V～VII層の混在する状況が断面でもみられたうえ、形態も整っていることから土坑と判断した。平面形は円形に近く、南西側の立ち上がりは他の部分に比べて緩やかである。遺物は覆土2層から土器片4点がまばらに出土している。時期は覆土中の遺物等から、縄文時代早期後半の可能性がある。（山中）

1、2はI群b-1類、東釧路Ⅲ式に相当するものである。1はやや波状を呈する口縁部で、口唇断面は丸みを帯びた角形。器面は摩滅しているが2段の縄の側面圧痕が2条観察できる。2は縄線文が複数施された間に短縄文が加えられている。（遠藤）

P-8（図IV-2／別表VI-1／図版3-4・5）

調査区南側の浅い沢地形内に立地する。西側の一部は平成12年度調査区に含まれる。平成12年度の調査では、メインセクションのラインに切られているためトレンチで掘削されてしまったか、あるいは掘り込みが浅いため自然地形と誤認された可能性もある。VI層上位で半円状の黒色土の輪郭を確認した。平面形は不整な円形または楕円形と考えられ、断面は皿型を呈する。覆土の上部はV層土の落ち込みで、下部は黒色土とロームの混合である。時期を判別できる遺物は内部より出土しなかったが、立地・形状・覆土などが類似するP-7よりI群b-1類に属する土器片が出土していることから、ほぼ同時期の縄文時代早期後半と考えられる。覆土中より黒曜石製のフレイク2点、礫片5点が出土した。（芝田）



図IV-1 遺構位置図

(3) Tピット

TP-9 (図IV-2/別表VI-1・2/図版4-1・2、6-2)

上部は削平されていたが、周囲の地形からみて沢へと下る北西向きの緩斜面に掘られたものであろう。長軸方向は等高線とほぼ直交する。形態は長径(底面)1.76mの溝状である。底面は平坦ではなく、杭痕は認められない。短軸の断面は、壁面の崩壊により下位から上位へ緩やかに広がっている。長軸の断面は南東側が大きくオーバーハングする。覆土の土層断面をみると、黒色土の堆積と壁面の崩壊が繰り返されており、少なくとも確認された面までは自然に埋没したと判断される。遺物は覆土2層から土器片3点が出土している。形態の類例から、縄文時代中期後半～後期初頭の時期が想定される。(山中)

1はI群b-1類、東釧路Ⅲ式に相当するもの。底部の張り出しに指頭でなされたとみられる窪み状の刻みがある。縄線文が2条めぐっている。2はII群a-1類。横走縄文が施されている。3はIII群b-3類とみられるもので、LR原体による斜行縄文が施されている。(遠藤)

(4) 焼土

F-24～48 (図IV-3～5/別表VI-1/図版5、6-3～6)

焼土は25ヵ所検出された。先にも触れたが、検出された層内における高さの違いと周囲の遺物からみた限りでは、縄文時代早期後半、前期前半、中期後半、後期初頭の各時期のものがあると考えられる。すなわち、V層下位の上部では縄文時代中期後半と後期初頭、V層下位の下部では前期前半、VI層では早期後半である。分布はまとまった在り方をすることが多く、単独のものは少ない。なお、F-30(町道米原11線部分)は調査区壁面の崩壊により断面図を作成できなかった。

F-24～32は町道米原11線部分の沢部分にある。V層下位の下部で検出されたもの(F-25～31)と、VI層で検出されたもの(F-24・32)がある。検出された高さや周囲の遺物から、F-25～31は縄文時代前期前半、F-24・32は早期後半の時期と推測される。次節の遺物分布図で表したように、沢部分の包含層からは多くの遺物が出土している。土器ではII群a類、石器等では石鏃、つまみ付きナイフ、すり石の他、黒曜石のフレイク・チップや礫・礫片も突出した点数である。(山中)

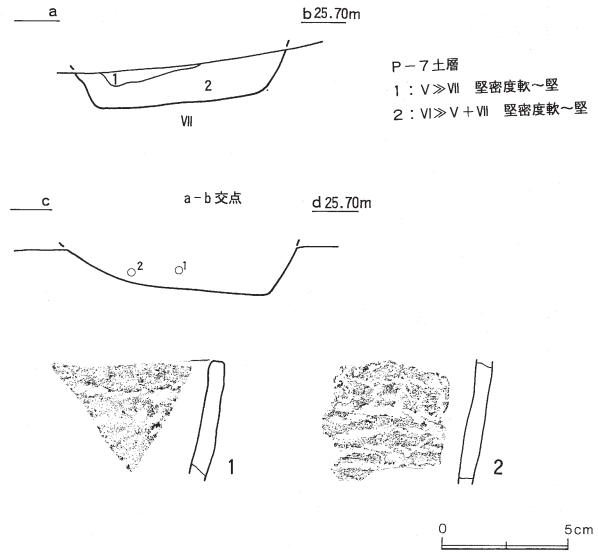
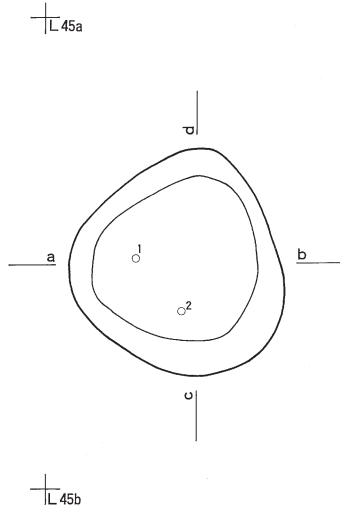
F-33～36は調査区南側の浅い沢へ下る緩斜面上に立地する。平成12年度に調査されたF-10・13などと同じまとまりを形成する可能性がある。F-33は南東側を町道の側溝に壊されており、VI層中で確認された。F-34～36はV層下位の調査中に、形成面より少し掘り下げてから確認した。F-36は南東側の一部が平成12年度調査区に含まれる。P-8と同様の原因により検出できなかったものと推測される。断面観察ではV～VI層が赤褐色化するほど明瞭なものであるが、その中でもF-34はやや不明瞭である。いずれも上部の灰層が流失している。また、形成時期は、検出面よりF-33が縄文時代早期後半、周辺の遺物よりF-34～36が同前期前半と推測される。F-34は周辺よりIII群b類土器2点、礫6点が出土している。これらは出土状況や断面観察などから、植物の根穴による攪乱で埋没した後世の遺物である可能性が高い。F-36は焼土中より礫7点が出土している。これらは焼土形成以前にV層中に存在した古い遺物である。また、やや離れてはいるが、形成面とほぼ同じと推測される面(V層下位)よりII群a類土器、断面三角形のすり石などが出土している。(芝田)

F-39～41・47はイモツペ川へ下る西向きの緩斜面にある。F-39～41はVI層に近い高さで検出されており、時期は縄文時代早期後半から前期前半の可能性がある。F-47はV層中位で検出されており、周囲の遺物と合わせて考えると、縄文時代中期後半とみてよいであろう。なお、F-39は町道の側溝により一部が失われている。

F-42～48は平成14年度調査区の北東側にある。V層下位のF-42～44は、平成14年度の調査で検

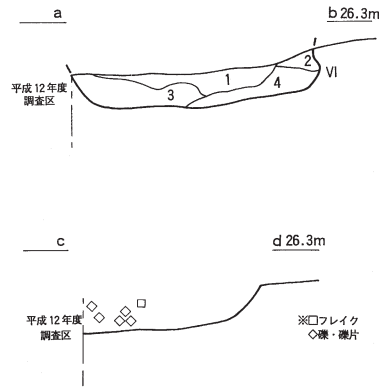
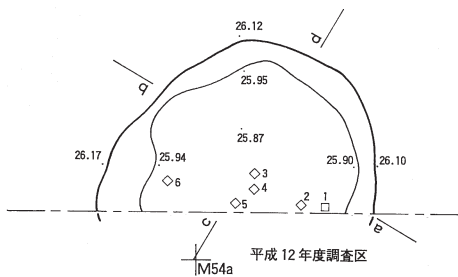


P-7



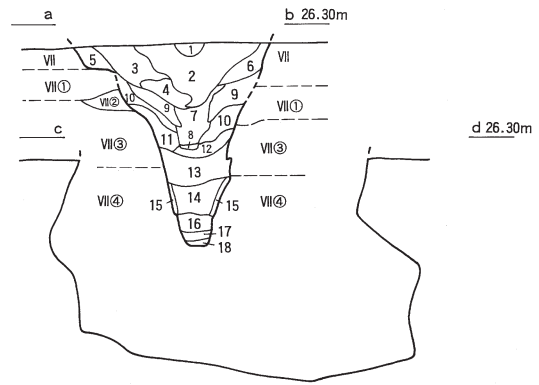
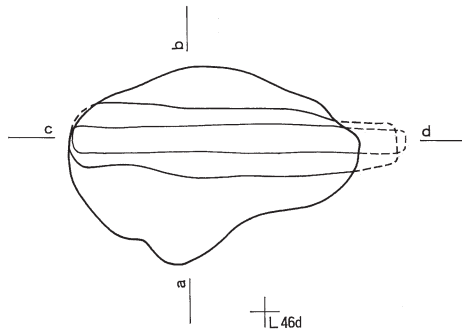
P-7 土層
 1: V>VII 堅密度軟~堅
 2: VI>V+VII 堅密度軟~堅

P-8

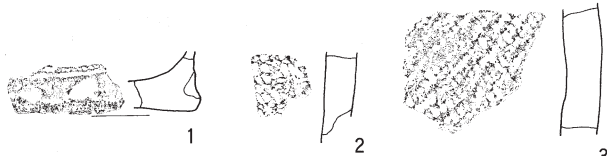


P-8 土層
 1: 10YR 1.7/1 黒色 埴壤土 粘着性中 堅密度堅 V層腐植土主体 径1~10mm次の黄褐色パミスが少量混ざる
 2: 10YR 5/4 にぶい黄褐色 壤土 粘着性中 堅密度堅 VI層土主体 壁際の崩落土が木根による攪乱が見られる
 3: 10YR 4/4 褐色~10YR 3/3 暗褐色 埋め戻し土が非常にやわらかい
 4: 10YR 3/2 黒褐色 軽埴土 粘着性强 堅密度軟 黒色土とロームの混合 埋め戻し土がやわらかくねっとりしている

TP-9



TP-9 土層
 1: VII>V 堅密度堅
 2: V>VII 堅密度堅
 3: VII+V~VI 堅密度堅
 4: VII>V~VI 堅密度堅
 5: VII>VI 堅密度堅
 6: VII>V 堅密度堅
 7: VII+V~VI 堅密度堅
 8: V主体 堅密度軟~堅
 9: VII主体 堅密度堅
 10: VII①主体 堅密度堅
 11: VII②主体 堅密度堅
 12: VII③主体 堅密度軟~堅
 13: VIIにVの薄層がラミナ状に混じる 堅密度軟
 14: VII③主体 堅密度軟
 15: VII+V~VI 堅密度軟~堅
 16: VII+V~VI 堅密度軟
 17: VII③主体 堅密度軟
 18: V主体 堅密度しょう
 VII①にぶい黄褐色 重埴土 堅密度すこぶる堅
 VII②明黄褐色 径5mm以下の軽石 堅密度堅
 VII③明黄褐色 埴土 堅密度堅
 VII④褐色 重埴土 堅密度堅



0 5cm

0 1m

図IV-2 P-7・8, TP-9

出された焼土（F-15～19）のまとまりの一部で、炭化材（1cm前後）の散らばりがみられるなど、その時の調査と同様な確認状況であった。時期はIV群a類土器の伴出から、縄文時代後期初頭と推測されており、放射性炭素年代測定では $3,520 \pm 40$ （B.P.）という値が得られている（北埋文2003）。なおF-43は、半截して断面を観察したところ焼土粒等の集積であり、その場所が熱を受けたものではない。F-45は平成14年度調査区との境界にあたり、壁面崩壊のおそれがあったためおよそ半分については調査できなかった。VI層で検出されている。中央がくぼんでおり、熱を受ける以前に掘り込まれていたと考えられる。縄文時代早期後半から中期後半のいずれかの時期と想定される。F-46・48はV層下位で検出され、周囲の遺物からみて縄文時代中期後半の可能性が高い。

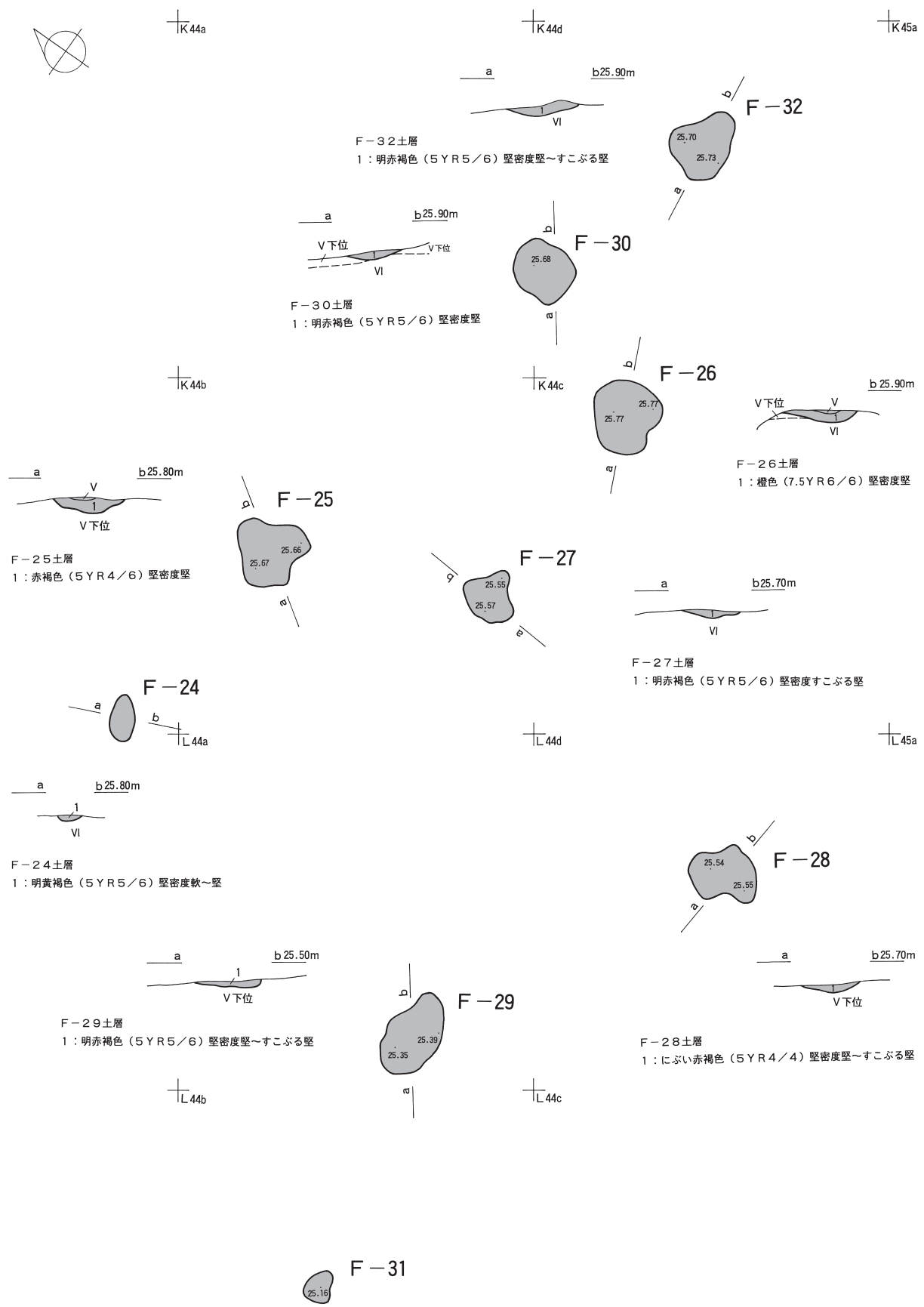
F-37・38は町道米原1号部分の西向き緩斜面において、それぞれ単独に位置する。両者ともV層下位の検出であるが、F-37はVI層により近い高さにある。周囲の遺物と合わせて考えると、F-37は縄文時代前期前半、F-38は縄文時代中期後半の時期であろう。（山中）

（5）集石

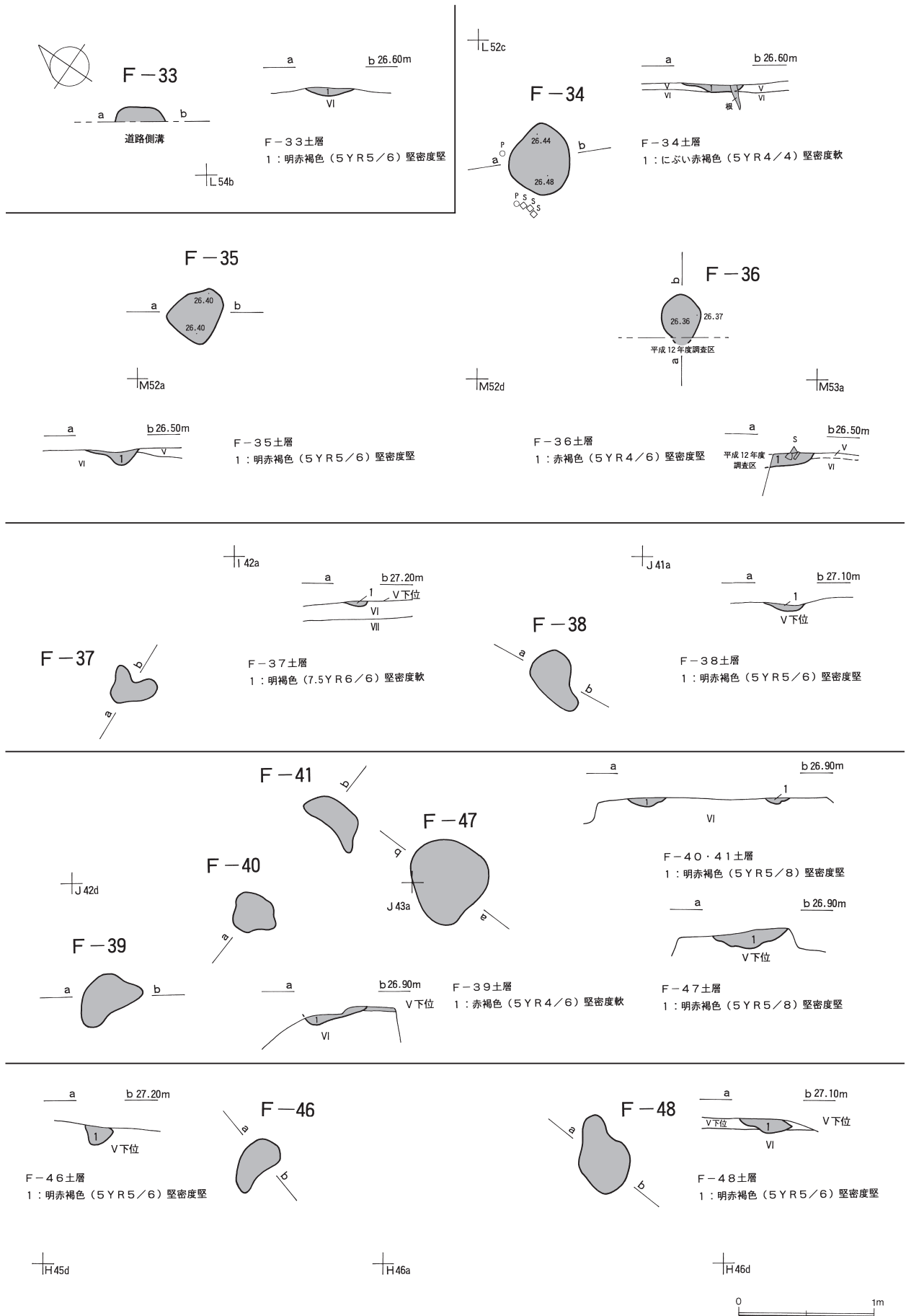
S-3（図IV-5／別表VI-1／図版4-3・4）

調査区中央の沢へ向う緩斜面上に立地する。V層下位で約90×80cmの範囲に礫片が集中しているのを検出した。被熱により割れているが、焼土は見られなかった。泥岩や砂岩、流紋岩の垂角礫が多い。隣接するL-46調査区では、平成12年度に調査されたH-1の掘り上げ土の一部と考えられる暗褐色土が確認された。この部分の断面観察では、掘り上げ土が3～8cmの厚さでV層中位に堆積していた。一方でS-3の上部あるいは下部にこの掘り上げ土は見られなかった。同一地点ではないので、あくまで推測ではあるが、S-3はH-1が営まれた縄文時代中期後半より以前、同一面から出土した土器片から推測して同前期前半の所産と考えられる。周辺で検出された同様の遺構は、昨年度調査区のS-2や、対岸に位置する宮戸4遺跡S地点のS-1～3がある。集石を構成している礫片は85点である。礫片以外では、II群a類に属する土器片1点、砂岩製の砥石小片1点が出土している。（芝田）

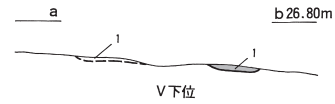
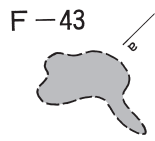
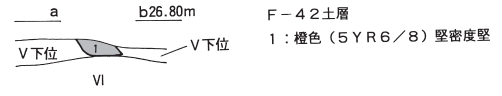
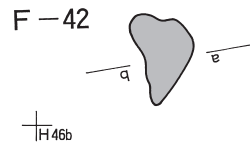
礫片が本来どのような大きさ、形状であったかを知るため、S-3で取り上げられた礫片について接合作業を行った。その結果、礫片85点中12件の接合があり、おおよその大きさ、形状までわかるものは4件であった。4件中3件は、大きさ（長さ×幅×厚さ）が約8×6×5cmの垂円礫、1件は大きさ約15×8×8cmの垂角～垂円礫である。礫片全体をみると、割れ方は不規則で意図的な打撃が加えられたとは考え難い。さらに表面の一部が赤みを帯びているものもあり、熱せられた可能性がある。焼土が検出されていないことも考え合わせると、S-3は他の場所で被熱によって破碎した礫片が集め置かれた場所と推測される。礫片の重量は合計3,565gである。なお「石礫の形状」の判定にあたっては、ペドロジスト懇談会1984『土壌調査ハンドブック』を参照した。（山中）



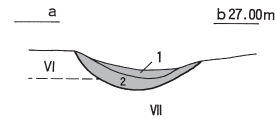
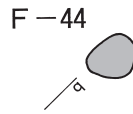
図IV-3 F-24~32



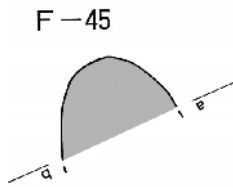
図IV-4 F-33～48



F-43土層
1: 橙色(7.5YR6/8) 堅密度軟
F-44土層
1: 橙色(7.5YR6/8) 堅密度軟~堅



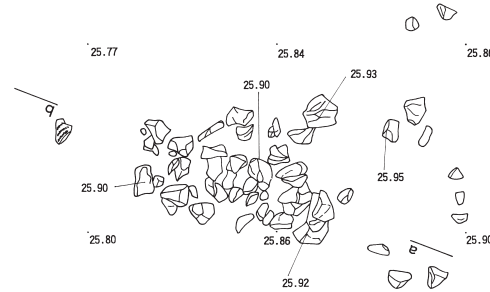
F-45土層
1: 灰黄褐色(10YR4/2) 埴壤土 径1cm前後の炭化材が多量に混じる
2: 橙色(5YR6/8) 堅密度堅



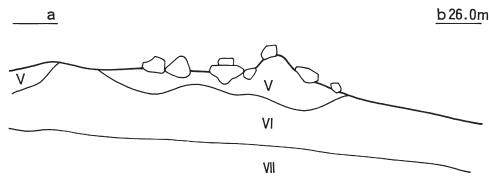
H46a



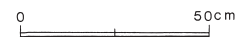
S-3



M45a



M45b



図IV-5 F-42~45, S-3

2. 包含層出土の遺物

平成15年度の調査では土器が5,316点、石器等が10,954点、合わせて16,270点が出土した。図IV-6の上段に3次にわたる調査で得られた遺物の分布を示した(平成12年度調査のA地区は除く)。

(1) 土器(図IV-6～15/表IV-2、別表VI-3/図版6～18)

概要

縄文早期(I群)から縄文後期(IV群)までの各時期のものがある。北筒式を主体とする中期後半(III群b類)の土器が半数以上を占める。次いで前期前半(II群a類)のもの、早期後半(I群b類)のものが続く。後期前葉(IV群a類)のものは少ない。VI層下位からの出土が最も多く、IV層中位のもの合わせて80%以上を占める。層別分類別出土点数は表IV-2に示してある。

縄文時代早期後半の土器はK-44、L-44・45区の沢地形部分から多く得られている。Jラインよりも東側では全く出土していない発掘区がある。沢地形内からこの時期の土壌(P-7)、焼土が検出されている。前期前半の土器は今年度調査区のほぼ全域から出土している。早期のものと同様、沢地形部分からその半数以上が検出され、この時期の焼土の分布域(F-25～31)と重なる。北東側のI-42区でもやや多く検出されているが、イモツペ川から離れるに従い遺物は減少するようである。中期後半は本遺跡の主となる時期である。この時期の土器はほぼ全域から出土している。ただし、沢地形部分からの検出が早期、前期に比べて少ない。イモツペ川に臨む段丘縁辺の住居跡(H-1～4・6)のある周辺が分布の主体部であろう。後期前葉(IV群a類)の土器は焼土(F-42～44)が検出された周辺地区のG～H-43～45区からほぼ1個体分の破片がまとまって検出されている。

なお焼土出土の遺物、土製品、焼成粘土塊についてもここで図示している。

縄文時代早期の土器(図IV-8-1～37/別表VI-3/図版7・8)

792点出土した。I群b-1類とb-2類に属するものがある。器形のわかるもの、全体の文様構成が分かるものはほとんど無い。破片の多くは小片であったため、両者の分類が難しく集計では細分していない。口縁部の破片は図示したほかに、縄線文や短縄文、無文の小破片が18点あった。同じく底部の破片は9点である。破片のうち文様の分かるものでは、1段の縄による縄線文があるものが14点、2段の縄による縄線文のもの54点、短縄文のあるものは10点、縄線文と短縄文の施されたものは10点あった。組紐圧痕文の施されたものは図示したものの他に2点ある。同様に縄文の認められる破片は187点で、小片のため明瞭に羽状縄文と識別されるものは少ない。この他の破片は無文または文様の判別できないものである。東釧路Ⅲ式に相当するものが多いとみなされる。

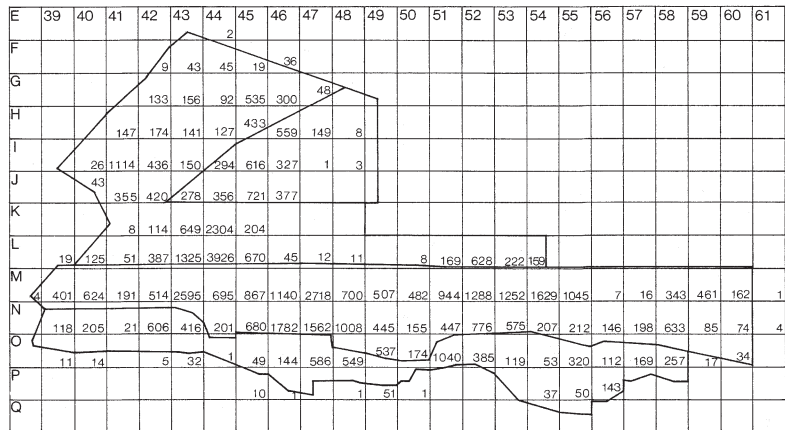
I群b-1類(1～23)

東釧路Ⅲ式に相当するものである。1a～eは沢地形内のK-44・45区のV層下位～VI層からまとまって出土した。破片は130点ほどあったが大半が摩滅しており接合できなかった。かろうじて口縁部の文様が分かるものである。口径は20cmを超えるとみられる。口唇断面は丸みを帯びた角形。緩やかな波状口縁で波頂部を肥厚させている(1a・b)。口縁の無文部に2段LR原体の縄線文が3条めぐり、その下位に短縄文が施されるが2段になっているところもある(1b)。短縄文は原体を折り曲げた端がループ状になっている。体部には0段多条のLR原体を横位と縦位に回転することによる羽状縄文がある。重複施文されているところもある。施文後はナデ調整されている。内面は凹凸が著しく、胎土には径数mmの小礫を多く含むため、器面にその抜け落ちた跡が無数に観察される。

2～4は口縁部に縄線文が施されるものである。2は2段、3・4は1段の縄である。3aと3bは20mほど離れた地点の破片であるが同一個体とみられる。4は横位の縄線文が重複している。

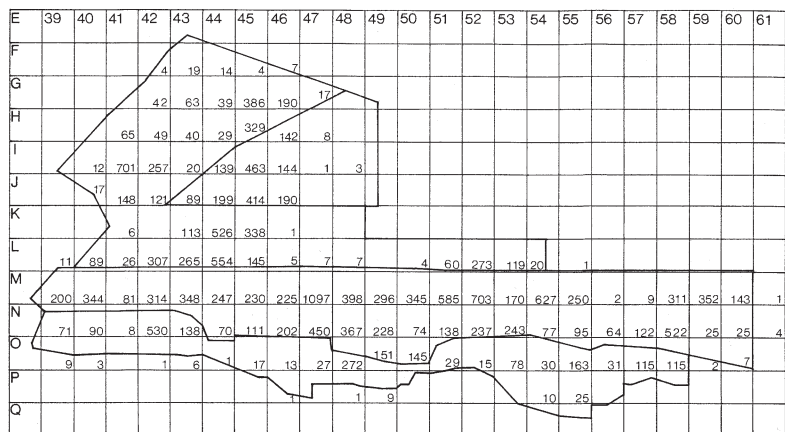
遺物の分布(土器・石器等)

平成 15 年度 土器 5,316 点 石器等 11,954 点



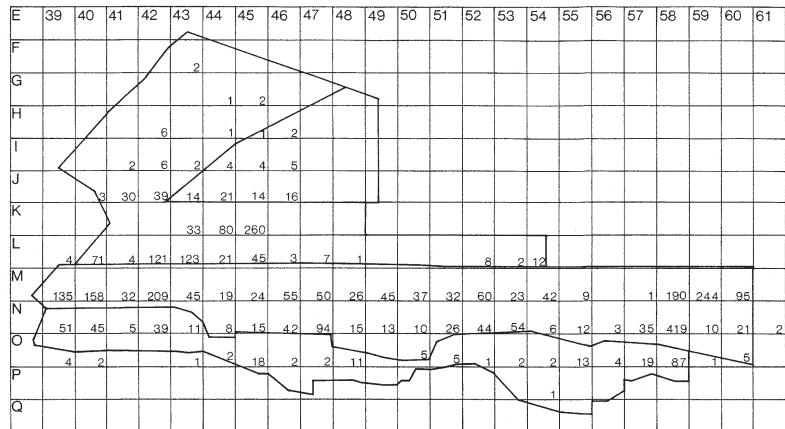
土器の分布

平成 15 年度 5,316 点 (土製品1、焼成粘土塊2を含む)



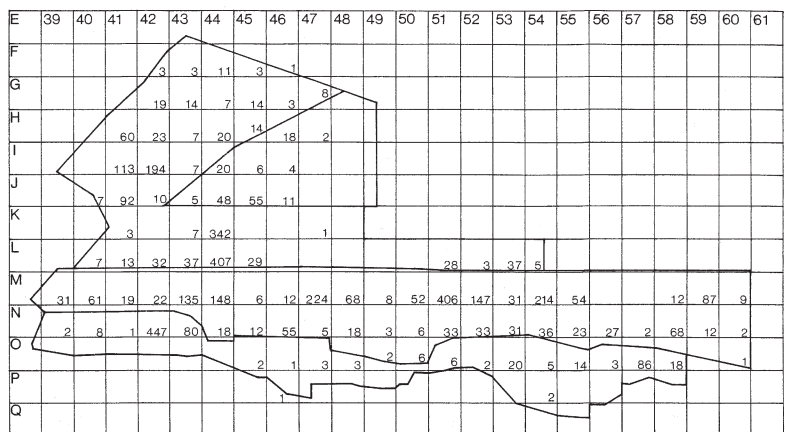
縄文時代早期の土器分布

I 群b類 平成 15 年度 792 点



縄文時代前期の土器分布

II 群a類 平成 15 年度 1,562 点



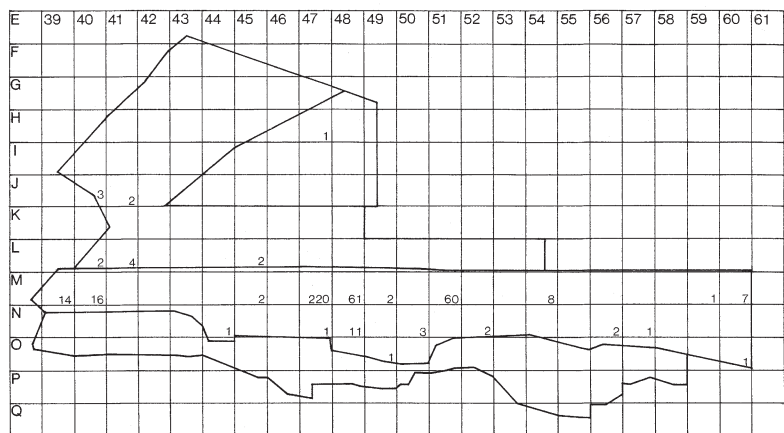
図IV-6 包含層出土土器分布図(1)

表IV-1 米原4遺跡別層位別出土土器等点数一覧

分類	V層	V層			VI層	VI層 下位	H-1 掘上土	攪乱	表採	不明	計
		上位	中位	下位							
縄文時代早期											
I群b-1・2類		1	18	407	337			7	17	5	792
縄文時代前期											
II群a類	31	9	228	1193	68	17		8	7	1	1562
II群b類				5							5
縄文時代中期											
III群b類	4	80	839	1556	108	5	3	29	11		2635
縄文時代後期											
IV群a類		2	8	160				8			178
分類不明		1	4	72	14			13	37		141
土製品					1						1
焼成粘土塊				2							2
合計	35	93	1096	3395	528	22	3	65	72	6	5316

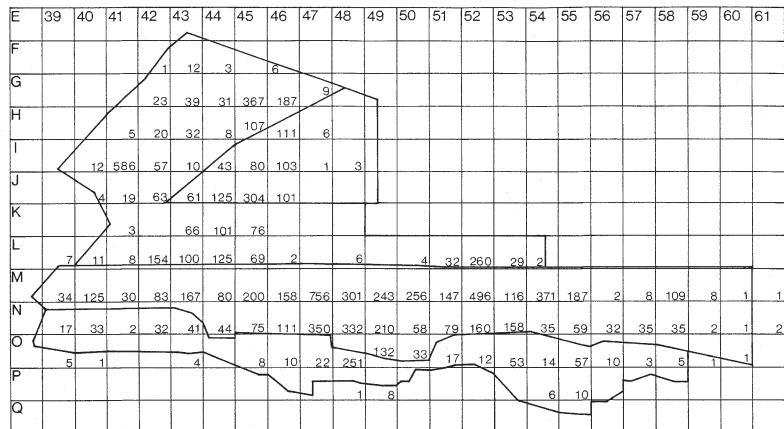
縄文時代前期の土器分布

II群b類 平成15年度 5点 (燃糸文のもの)



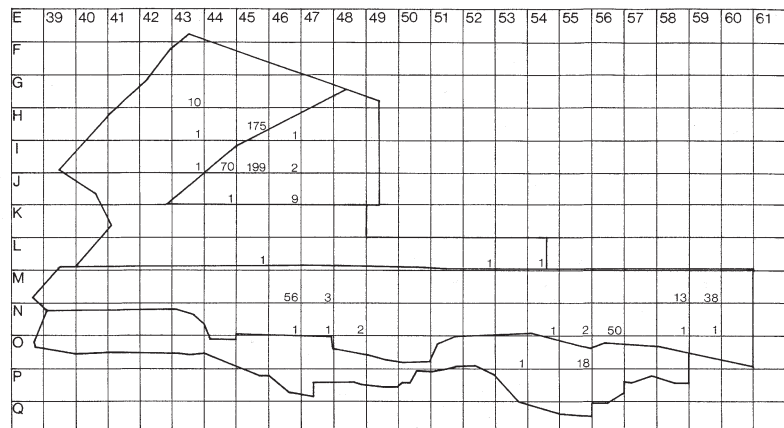
縄文時代中期の土器分布

III群b類 平成15年度 2635点

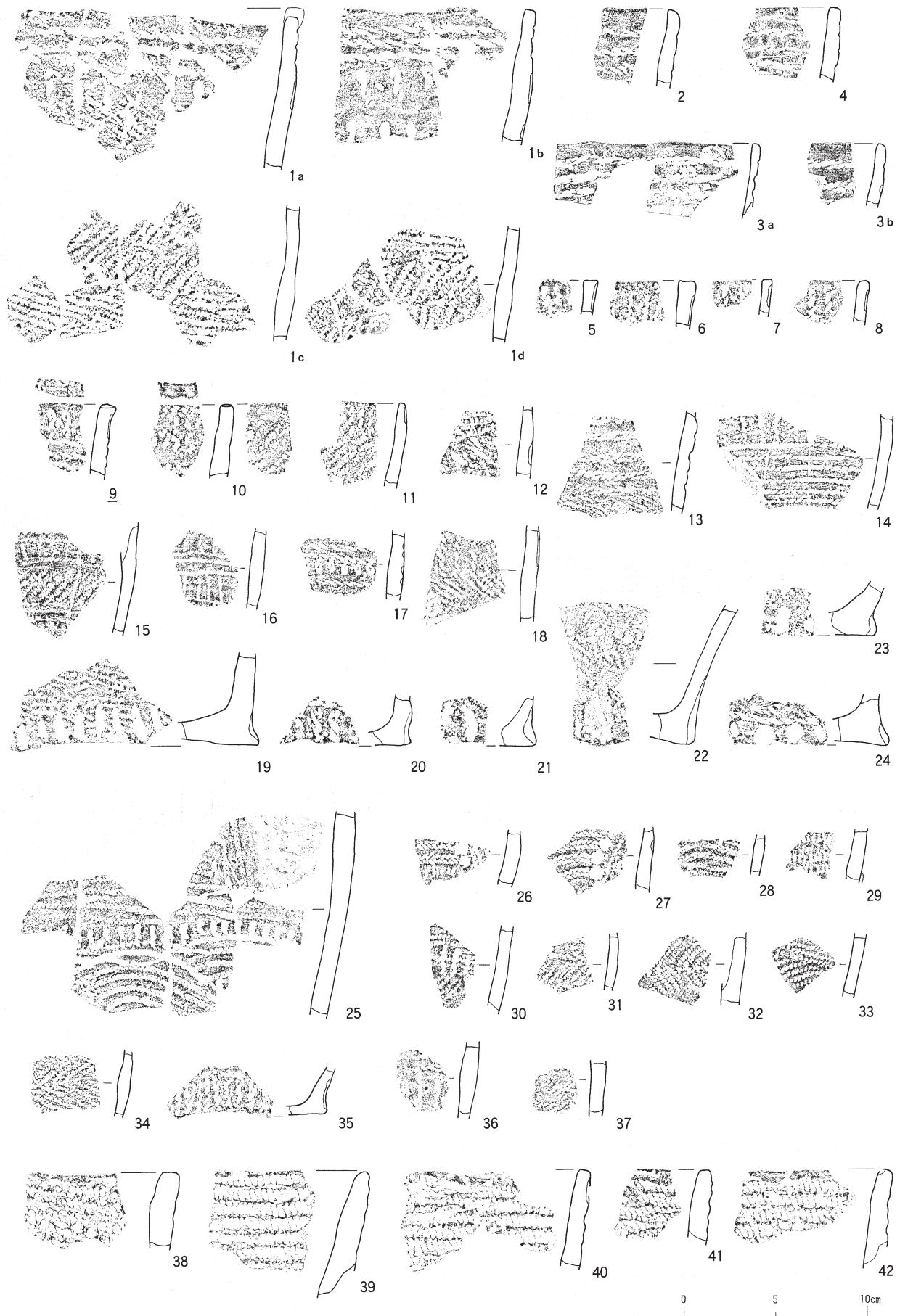


縄文時代後期の土器分布

IV群a類 平成15年度 178点



図IV-7 包含層出土土器分布図 (2)



図IV-8 包含層出土の土器 (1)

5～11は口縁部に短縄文、縄線文が施されているもの。5、6、9は口唇の断面がやや張り出すものである。6は縦位に付けられているのは縄線文である。9の短縄文はループ状になっている。口唇上は縄による刻みがある。10は口唇直下に縄文が浅く施され、内面にも施文がある。口唇上に指頭を押し付けることでごく浅い波状となっている。11は薄手で口唇断面が尖り気味のもの。LR原体による斜行縄文が施され、口唇直下のごく狭い範囲に短縄文がある。

12～18は胴部の破片。これらは横位に施された縄線文の間に縦位の短縄文を施すような構成をもつものである。13・14には内面にヘラによる調整痕が残る。15、16は同一個体。細い1段の縄を使用している。15では縄線文の間に縄文が施されている。18の縦位のものは縄線文と呼べそうなものである。

19～24は底部の破片。19～21は底部の張り出し部に縄による長めで深い圧痕がある。19は底部付近まで横走る縄文が、21には斜行縄文が施されている。22はLR原体を、方向を変えて施文することにより羽状縄文となっている。底部には指頭による幅のある長い窪み状の刻みがある。施文後に棒工具で縦に調整したとみられ、縦位の浅いくぼみも観察される。23は斜行縄文が施されており、棒状工具による刻みがある。24は底部付近に2段の縄線が1条めぐり、指頭の圧痕様の窪みがある。

36、37は焼土(F-24)出土のもの。いずれもI群b-1類である。36は2段の原体による縄線文と短縄文、37には細い原体による斜行縄文が施されている。

I群b-2類 (25～35)

コッタロ式に相当するものである。25～28は体部に組紐圧痕文のあるもの。いずれも原体は3本平組紐である。25は無文地に弧線をつなぐ文様が描かれ、その間には短縄文が施されている。焼成が良いもので、胎土に1、2mmほどの小礫を多く含む。内面は丁寧に調整され平滑で炭化物が付着する。26、27は同一個体。組紐の結び目の端部を深く押捺することで、円形の刺突文のような効果をもつものである。26には絡条体圧痕文、27には1条、縄線文が認められる。28は厚さが4mmと薄手のもの。29は唯一、貼付帯とみられる貼り付けがあるもので絡条体圧痕文が施されている。30～35は羽状縄文が施された体部の破片である。30にはやや長めの短縄文、31は2段の原体による縄線文が1条施されている。32は結末部にあたる部分に刺突文が加えられるもので、コッタロ式に特徴的なものである。35は底部の破片。細い原体による短縄文が密に施されている。

縄文時代前期の土器 (図IV—8～11—38～90 / 別表VI—3 / 図版6・8～12)

1,567点出土している。II群a類とb類に属するものがある。II群a-1類とII群a-2類が合わせて1,562点である。このうちII群a-2類に相当するものは6点である。II群b類は5点である。

II群a-1類 (38～81,85～88)

器形の全体を知ることのできるものは復元された1個体を含めほかに2、3あるだけである。口縁部の破片は図示したものの他に13点あった。底部あるいは底部付近の破片は図示したものがすべてである。破片資料で知られる限りは丸底である。口唇上は平坦に調整され、口唇の断面形は角形のものやや丸みを帯びるものである。口唇内側を削ぐように調整するものがあり、その部分に縄文が施されるものがある。平縁のほか穏やかな波状口縁になるものがある。施文原体はRL原体、LR原体のもので0段多条のものが多い。器壁は厚さ6mmほどの薄手のものから10mmを超えるものや15mm前後の厚手のものがある。これらの破片から推定するかぎりでは大きさには大小様々なものとみられる。胎土には混和材としていわゆる「繊維」が混入する。「苧わら様のもの」の痕跡が明瞭に観察できる破片が多い(図版18-4)。このような混和材を含め文中では「繊維」と表現する。

口縁部と胴部の文様によりA類～D類に区分される。口縁部を先に図示し、胴部片はまとめて後ろに図示してある。



図IV-9 包含層出土の土器 (2)

A類：横走縄文の施されるもの (38～42、44～52、67～73)

断面形が角形のもの(38、40～42、44～49)、やや丸みを帯びるもの(50～52)、口唇内側を内削ぎ気味に調整し平坦面をつくりだすもの(39、48、49)がある。条の中をナデ調整し節が磨り消されるものがある(44a・b、48、49、67a～c)。

38は横走縄文の下位に縦行縄文が施されているようである。44a・bは破片が広範囲(G-45、H-41、H-43～45区)から出土した。胴部～底部付近の破片が50点ほどあった。幅14mmほどの太い原体のもので、口縁部から底部までほぼ均一な厚みを持つものである。条のなかの節はほとんどすり消されている。内面の底部周辺に炭化物が付着する。器表面の剥落した部分には「苧わら様のもの」が観察できる。45～47は厚さ6mm前後の薄手のもの。45は口縁部にかけて薄くなっている。48、49は同一個体の可能性があるもので、口唇上から内面にかけて施文がある。50(G-42区)、51(L-45区)、52(H-44区)は出土地点が互に10～20mほど離れているが、同一個体の可能性がある。ほかのものと比較し胎土に繊維の混入は少ない。口唇断面はやや丸みを帯びた角形で、内面から口唇直下の狭い範囲はナデ調整され無文である。細い原体による横走、やや斜行気味の縄文が浅く施されている。緩やかな波状(52)になるのかもしれない。67～73は胴部、底部付近の破片である。67a～cは内面に幅3mmほどのヘラ状工具による調整痕が観察できる。73は丸底を呈する底部付近の破片。

B類：斜行縄文の施されるもの (43、53～62、74～76)

53～62はRL原体による縄文のもの。53～55は口唇断面形がやや丸みを帯びるものである。53、55、60は口唇内面に内削ぎ気味の調整があるもので、55ではその部分に施文がある。56が調整の際の粘土が外側にはみ出し、特徴的な断面となっている。59はほかのものと同色調、胎土が異なるものである。黄橙色を呈し、胎土に繊維の混入が少なく、径1mmほどの小礫が多く混じる。

43、61、62、74～76はLR原体による縄文のもの。43は唯一口縁から底部まで復元できたものである。全体の2分の1ほどが残存する。推定口径14cm、高さ13.8cmの小型のもの。緩やかな波状口縁を呈する丸底のもので、底部から口縁に向かって開き気味に立ち上がる。口唇内側の狭い範囲が調整されている。幅6mmほどの原体で底部付近は縦行・横走気味となっている。61は細い撚り紐を原体とするもの。62は調整の際の粘土が外側にはみ出している。74～76は胴部の破片。76は色調が明橙色を呈し、他とやや趣を異にするものである。胎土に「苧わら様のもの」が明瞭に観察できる(図版18-4)。

C類：羽状縄文の施文されたもの (63、77～81)

63、77～79は結束羽状縄文のある胴部破片。78は一方が無節である。80は撚りの異なる2種類の原体、81はRL原体を縦横に回転させ、羽状を構成するものである。

D類：縦行縄文の施されたもの (64・65a・b)

64は口唇直下に部分的に横走縄文が観察できる。65aは口縁部、65bはその胴部破片である。幅10mm程のLR原体によるもので、同じ原体で口縁部内面には斜行、胴部では横走気味に施文されている。

E類：その他原体の不明なもの (66a・b)

同一個体である。不規則な向きの節が観察できるもので、66bでは縦行する条が認められる。丸組紐の回転文に別の原体を重複施文したものかと推測したが、原体を明らかにすることができなかった。

85～88は焼土から出土したものである。いずれもII群a-1類。85(F-28)は斜行縄文、86(F-34)、87・88(F-44)は横走縄文のもので、88は節がナデ調整されている。

II群a-2類 (82a・b～84)

82a・bは緩やかな波状口縁になるものとみられる。LR原体による斜行縄文が施され、口唇直下では部分RL原体の縄文も加えられ、また口唇上にも施文がある。口縁部に刺突文が2条めぐり、上位のもの



図IV-10 包含層出土の土器 (3)

は縄の端部、下位のもは棒状工具によるものである。83 a・bは太さの異なる2種類の原体により帯状に斜行縄文が施されている。84はRL原体を使用し方向を変えて施文している。これらの胎土はa-1類に比べ繊維の混入が顕著ではなく、硬くしまった焼成が共通するものである。春日町式に相当するものと見られる。

Ⅱ群b類 (89 a～c・90)

いずれも燃糸文の施されているものである。今年度の調査では5点出土している。胎土に繊維を含み、内面は平滑に調整されている。比重が軽いものである。Ⅲ群b土器にも燃糸文の土器が存在することは知られているが、明らかに胎土、内面調整が異なる。苫小牧市植苗貝塚の第1群土器(佐藤 1976)に類するもので、円筒下層式に相当するものと捉えておきたい。

縄文時代中期の土器 (図IV-11～14-91～158/別表VI-3/図版12～17)

2,635点出土している。Ⅲ群b-2類とⅢ群b-3類に属するものがある。斜行縄文のみのものが多いことから集計では細分はしていない。口縁部の破片から推測するとⅢ群b-3類が大半を占めるとみられる。

Ⅲ群b-2類 (91～102)

柏木川式に相当するもの。91 a～cは沈線文と貼付帯により文様が描かれるものである。口縁部から胴部下半部までの3分の1ほどが残存する。器形の傾きは図面上で復元した。推定口径23cm、現存する高さは26.5cmで、4か所に小突起を有するものとみなされる。突起部の破片はほかに2個(91 b)ある。器面には0段多条のLR原体による斜行縄文が施されている。口縁部文様帯には半截竹管状工具の背面による沈線文が間隔をあけ3条施され、上位の沈線文間には2条一組で連続した山形の文様を描いている。突起部には縦位に粘土を貼付し、その左右にも沈線を添わせている。突起下にあたと推定される位置には垂下する貼付帯が2条施されている(図左側、断面B)。口唇上と突起の貼付文上およびその側縁には先が2つに分かれている棒状工具での刺突文がある。内面にも縦行縄文が施されている。胎土に小礫を含むもので焼成は良好である。

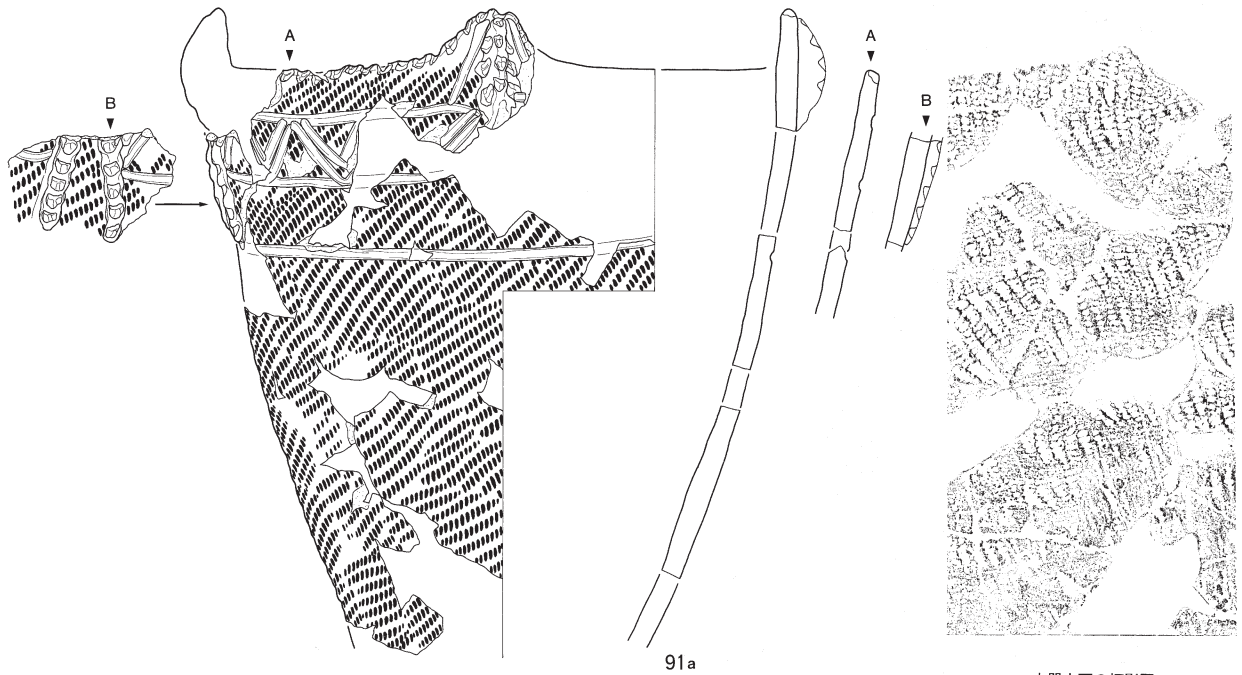
92、93は突起部の破片。92は粘土を積み上げ形成したと見られる突起で口唇上には半截竹管状工具による刺突文がある。いずれにも斜行縄文が認められる。

94～96、100は口唇上に施文があるもの。94 a～eは全体は知られないが、貼付帯による文様があるもの。口唇断面が丸みを帯びた角形で、口唇部にはへら状工具での刻み(94 a・c)と幅のある棒状工具での刻み(94 b)が併用されている。体部には太いLR原体により斜行縄文が施されるが縦行気味のところもある。内面では横走する縄文となっている。貼付帯は厚みの無い幅広のもので、指頭による圧痕(94 d)、へら状工具での刻み(94 e)がある。95は肥厚させた口縁から口唇上にかけて半截竹管状工具による刺突文がある。96は半截竹管状工具の凹面による沈線文があるもので、口唇上には棒状工具で斜めに施した刺突が2条ある。97は無文地に棒状工具で斜めに施した大小の刺突文がある。98は口唇直下の無文部に棒状工具での刺突文が2列ある。99は斜行縄文に結節の回転文を加えている。100は口唇断面が切り出しに近いもの。

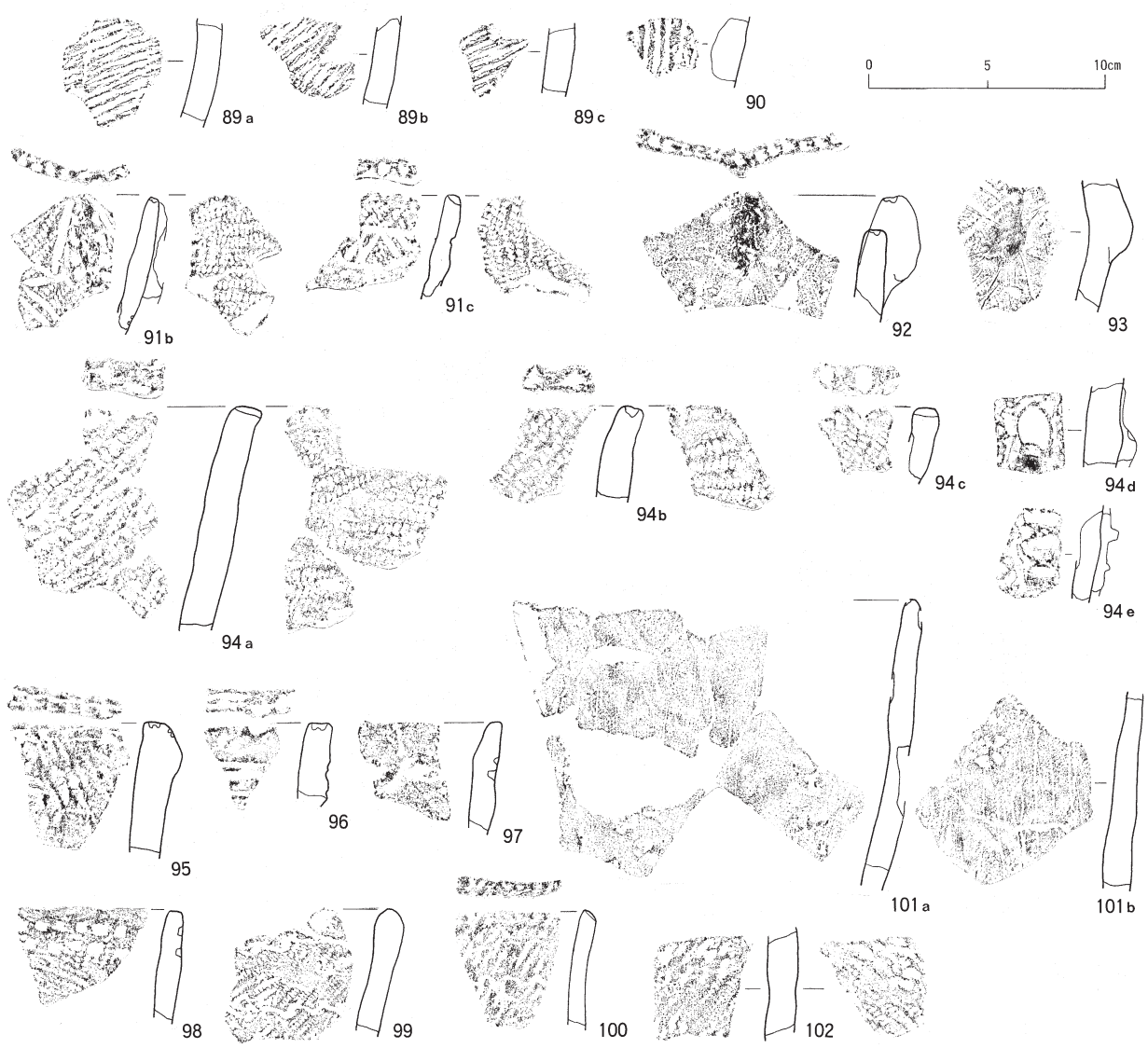
101 a・bは無文地にごく細い施文具による沈線が縦位に不規則にある。内面の凹凸が著しい破片である。25mほど西側にある住居跡H-4(平成14年度調査)の覆土から出土した破片と同一個体の可能性がある(北埋調報185)。102は内面に施文がある胴部の破片。

Ⅲ群b-3類 (103～158)

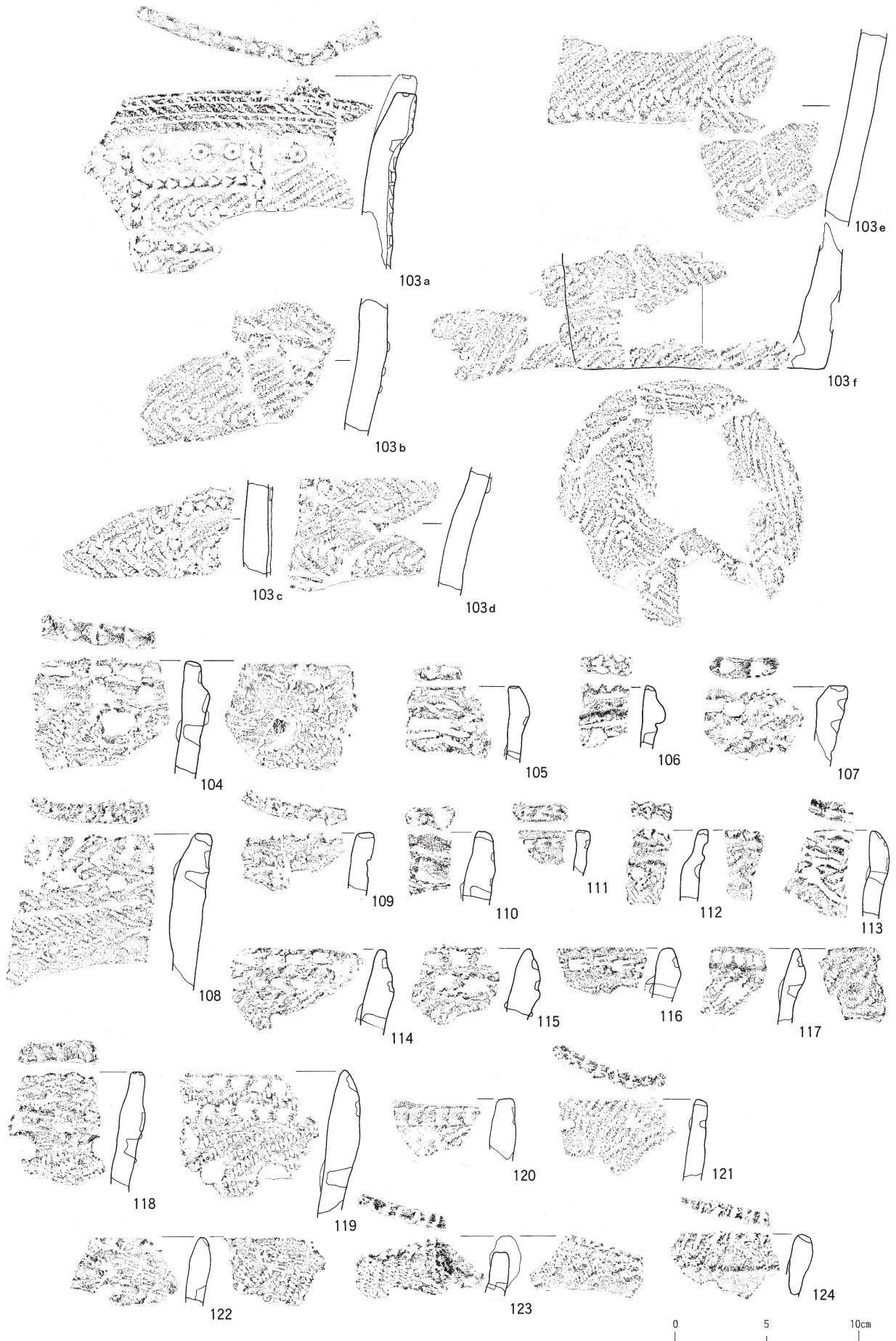
北筒式に相当するものである。今年度の調査で最も多く出土した。器形の全体が分かるものはほとんどない。口縁部に肥厚帯をもつものと肥厚帯を形成しないものがある。前者では口唇の断面が三角形状になるもの、切り出し方になるものがある。また、口唇のやや下に細い粘土紐を貼り付け膨らみを持たせるも



土器内面の拓影図



図IV-11 包含層出土の土器 (4)



図IV-12 包含層出土の土器 (5)

の、口唇にそって粘土紐を貼り付けるものもある。口縁部には押し引き文が施されるのが一般的である。ほかに刺突文が施されるもの、口唇上にのみ施文が認められるもの、縄文のみのものもある。施文具はへら状工具、棒状工具、半截竹管状工具などがある。地文の縄文は斜行縄文、結束第2種の斜行縄文、斜行縄文に結節の回転文を加えるもの、羽状縄文があり、内面に施文されるものもある。円形刺突文は様々な大きさのものがあり、突瘤が形成されないものや貫通しているものも認められる。胎土は繊維を含むものや小礫が目立つほど混入するものがある。

ここでは主に口縁部の資料をもとに、施文の位置によりA～D類に区分した。E類は縄文のみのもの、F類は胴部、底部の破片である。図示したもののほかに口縁部の破片は29点あった。このうち円形刺突文があるものが17点である。底部は図示したものの他に9点ある。

A類：器面に貼付帯による文様が施されているもの（103 a～f）

103はG-45・46、H-45・46区を中心に比較的広範囲から破片が出土した。400点近くあったが表裏が剥れているものが多く、10個の大きな破片に接合できたものである。破片から推定すると口径は20cmを超えるとみられる。口縁部がやや外反する、筒形に近い器形である。三角形の突起部がある。口唇断面は平滑に調整され角形、中空の工具による刺突文がめぐる。口縁部の肥厚帯に浅く縄文が施され、半截竹管状工具の凹面を使用した押し引き文が2条あるが沈線文のようになっている(103 a)。円形刺突文は肥厚帯下の無文部にあるが、内面をよくナデ調整しているため突瘤を形成していない。器面には結束第1種の原体による羽状縄文が底部まで施され、底面にも施されている。体部に細い貼付帯を横位と縦位に施すことで梯子状の文様を構成するかとみられる。貼付帯上には棒状工具により押し引き文風の刺突文が加えられている。曲線的に貼付する部分も認められる(103 c)。貼付帯の交わる部分には口唇上のものと同じ施文具による円形の刺突文がある。色調は黄褐色で部分的に黒褐色のところもある。胎土には石英、輝石等の鉱物が多量に混入し、表面に浮き出るものが多い。

B類：口縁部と口唇上に施文があるもの（104～113、118）

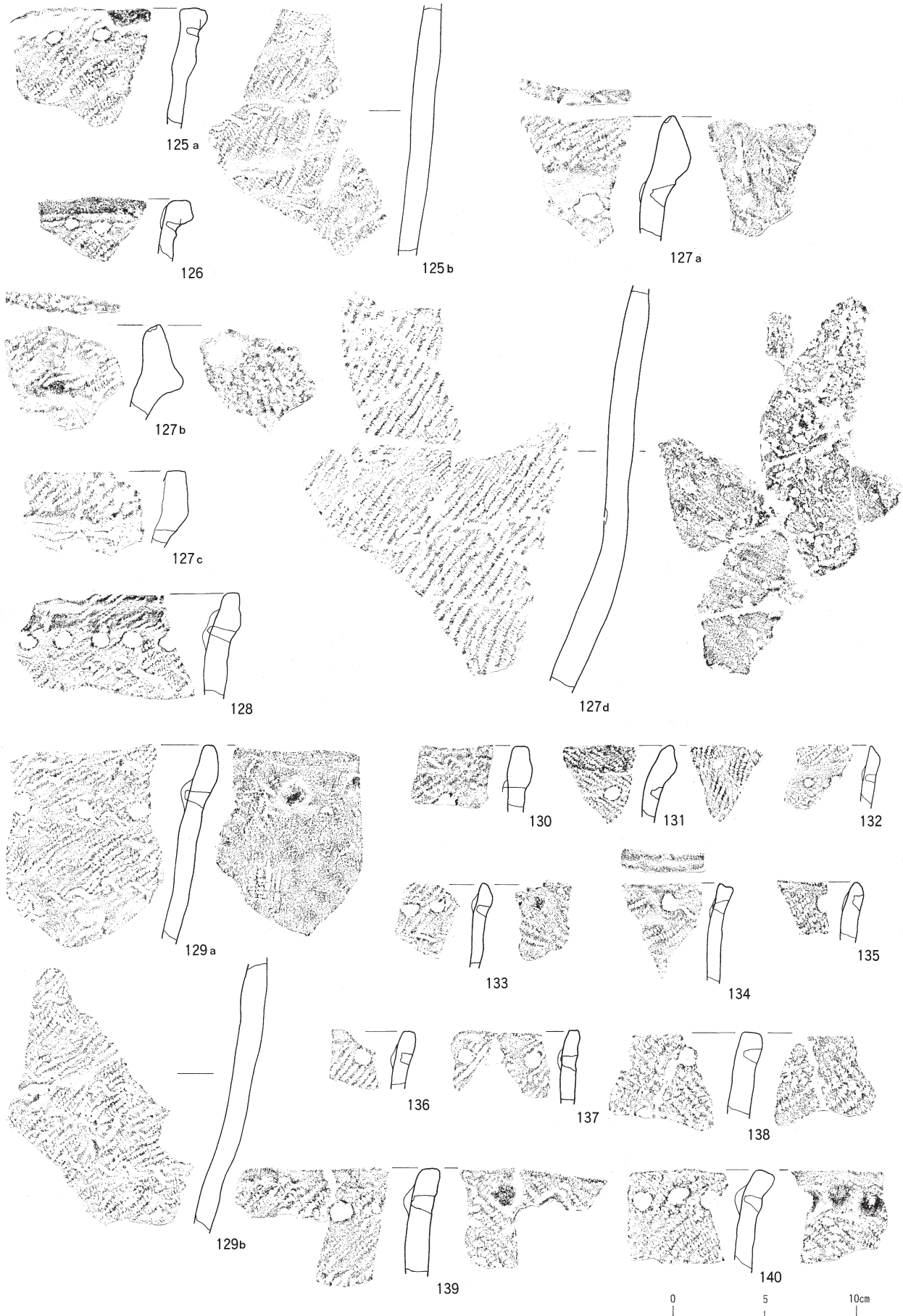
104～106・118は口縁が肥厚するもの。104、105、118はへら状工具による押し引き文がある。104は口縁のやや下に隆帯状に粘土紐を貼り付け肥厚帯を形成するもので上位に刺突文がめぐる。口唇上は棒状工具による刺突がある。内面は凹凸が著しく、縄文が施されている。105は原体の縦位、横位の回転による縄文のもの。縄の押捺もある。106の口唇は先端が2つに分かれた工具で深く刻まれている。118は口縁のやや下に薄く粘土紐を貼り付けるもので、内面はナデ調整され突瘤を形成しない。

107～113は肥厚帯のないもの。107は棒状工具による押し引き文風の刺突文がある。円形刺突文のないものである。108、109、111は先端の2つに分かれた工具による押し引き文。108は胎土に径5～7mmの小礫が多く混じる。器面の縄文は無節の斜行縄文に結節の回転文を加えている。口唇のものは刻み状になっている。110の口唇には指頭による圧痕がある。112の押し引き文は連続して幅の広い沈線文のようになっている。口唇上には先端が3つに分かれた工具による施文がある。円形刺突文は浅い。113はやや内湾気味のもの。口唇と口縁部文様帯が分化せず連続したようになっている。

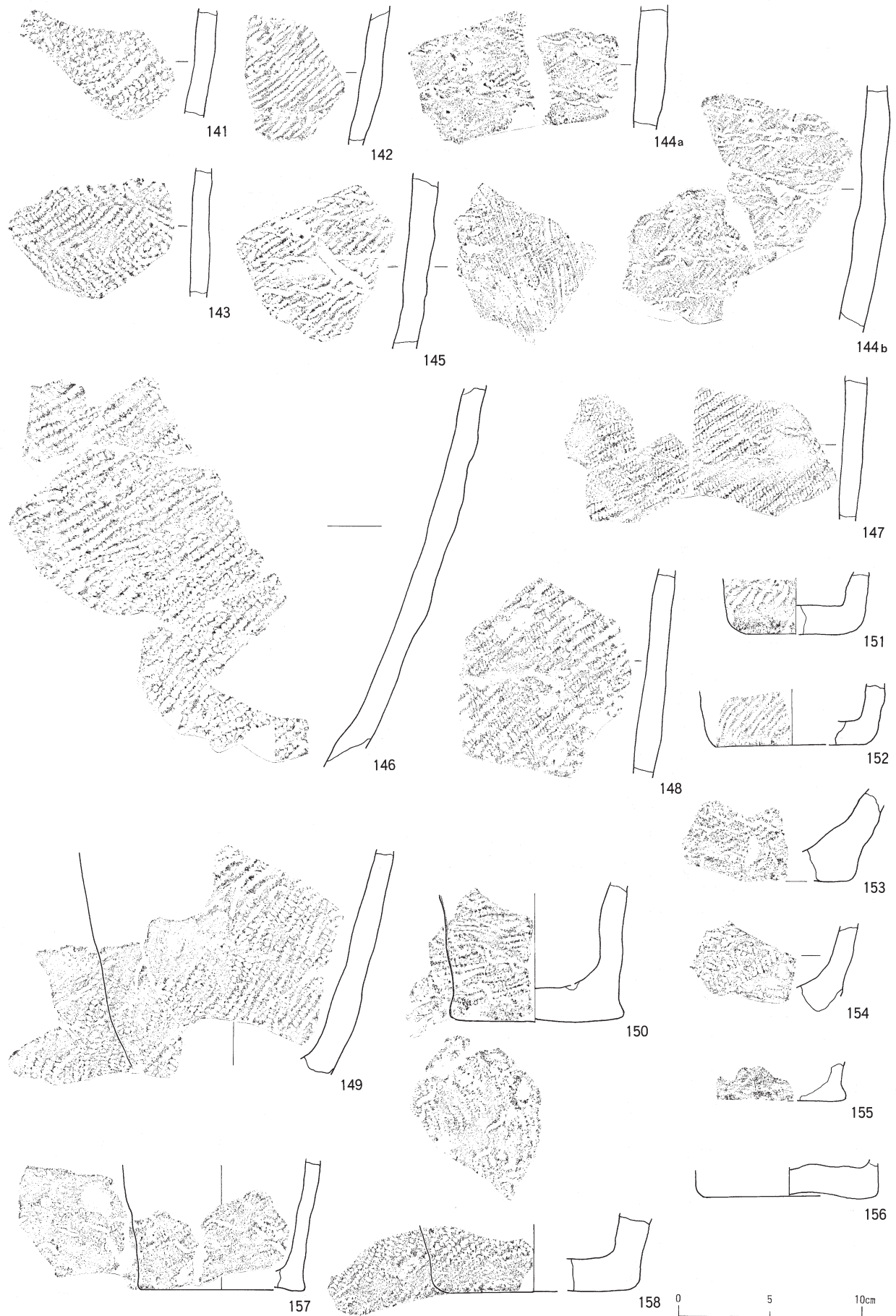
C類：口縁部に施文のあるもの（114～117、119、120）

114～117は口縁が肥厚するもの。114～116は薄い粘土紐を貼り付け肥厚帯を形成しているもの。116・117を除きへら状工具での押し引き文である。114・115は胎土に3～5mmほどの小礫が混じる。多量に炭化物が付着している。20m以上離れた地点から出土したものであるが、同一個体の可能性がある。116は口唇直下に浅く縄文がある。先端が2つに分かれた工具による押し引き文である。117は口唇断面形が三角形に近いもので、内面にも縄文が認められる。押し引き文はやや幅のある施文具である。

119・120は肥厚帯の無いもの。119は胎土に繊維が多量に混入している。また、径1、2mmの小礫も混



図IV-13 包含層出土の土器 (6)



図IV-14 包含層出土の土器 (7)

じる。口唇断面が尖り気味で内面から口唇直下をナデ調整している。体部には0段多条のLR原体による縄文が浅く施され、先端部がささら状になったへら状工具による押し引き文が2条ある。

D類：口唇部に施文のあるもの（121～124）

121は先端の二つに分かれた棒状工具で口唇上に深く施文がある。0段多条の縦行気味の縄文があるもので、径の小さい円形刺突文が浅くつけられている。122～124はへら状工具での刻みがある。123は突起部を肥厚させるもので、縦行気味の縄文があり、内面にも縄文がある。122は胎土に長さ1、2cmの「苧わら様のもの」の混入が顕著である。124は口縁部をやや肥厚させるものである。123と124は同一個体の可能性がある。

E類：縄文のみのもの（125～140）

体部の縄文には斜行縄文（126、128、130～132、135～137、139～140）、結束第2種の斜行縄文（129）、斜行縄文に結節の回転文を加えるもの（125、127、133、134）、羽状縄文のもの（138）がある

125・126・134は口唇にそって貼付帯をめぐらせるものである。いずれも貼付帯上はナデ調整されやや窪んでいる。125は縄文を施した後に粘土紐を貼り付けている。125aの内面は凹凸があり、部分的に縄文がある。134は口唇直下に粘土紐を貼りつけ口唇部が広がっているようにみえる。

127～133は口縁の肥厚するものである。127はL-52区でまとまって出土した。体部にややくびれがあり（127d）、口縁部が外反する器形になるとみられる（127a）。口唇の断面が三角形を呈するもので、口縁部と体部が肥厚帯により区分される。円形刺突文は肥厚帯下の無文部に施される。口唇上には部分的に縄端の圧痕が認められる。突起部では鏝状に粘土を貼り付けている。体部には0段多条のLR原体による縄文が深く施され、結節の回転文が加えられている。口縁部付近の内面にも縄文があり、先端がささら状となった工具による調整痕が認められる（127d）。128は口唇のやや下に細く粘土紐を貼り付け、肥厚帯を形成するものである。129aは内面の所々に縦位の縄文がある。129bは体部の破片。131は口縁がやや外反するもので、円形刺突文は浅い。131は内面に縦行縄文がある。132は切り出し方に近い断面のもの。133は内面にも施文がある。

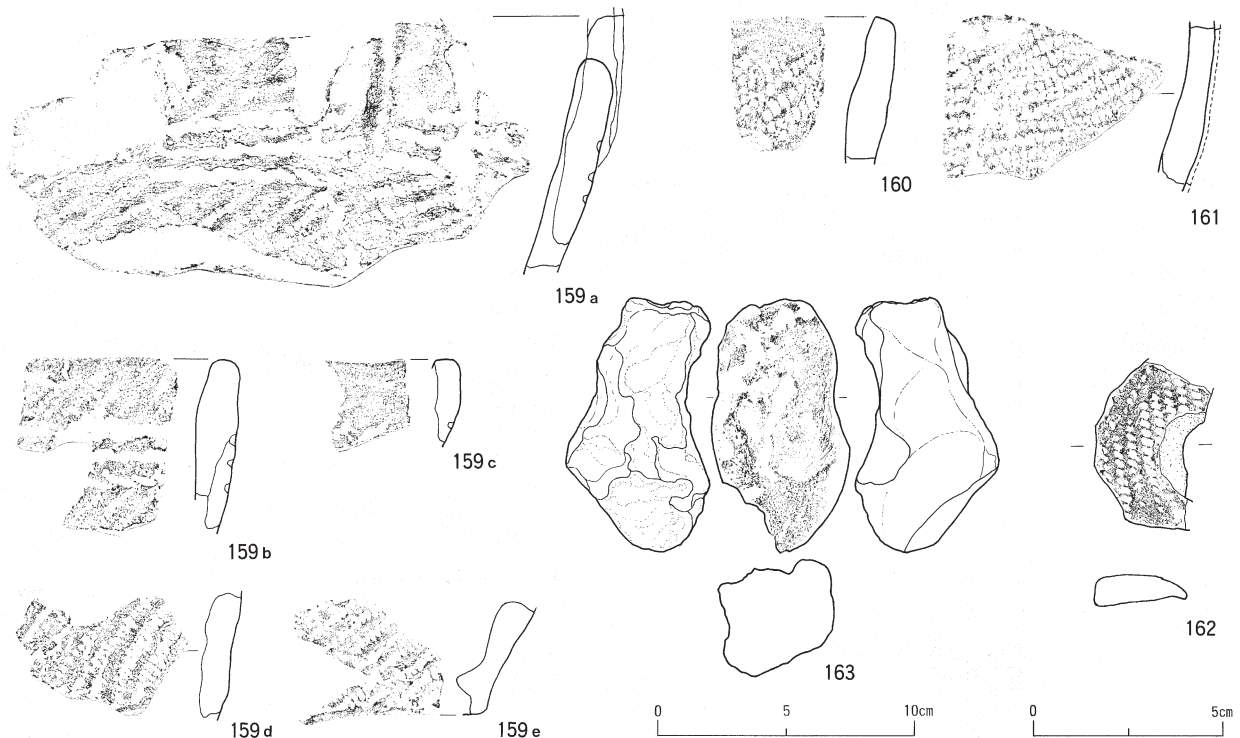
135～140は口縁に肥厚帯のないものである。135は口唇断面が尖り気味、136～138は口唇上を平坦に調整している。136・137は無節の縄文が施されている。140は口縁部が外反する。138～140には内面にも縄文がある。

F類：胴部、底部の破片（141～158）

141はLR L原体による複節、142は結束第1種の無節の縄文、143は0段の条の数が異なる原体を結束した第1種羽状縄文のものである。これらの原体のものは少ない。144a・b、145は斜行縄文に結節の回転文が加えられているものである。いずれも胎土に径5～10mm前後の小円礫が多量に混じる。144bでは長さが1.5cmのものが混入していた。146は平成12年度に調査した住居跡H-1の掘上げ土から出土したものである。内面には幅1cmの先端がささら状になった工具による調整痕が残る。146～149は斜行縄文の施されたもの。146はI-41区のV層中位・下位から同一個体の破片が200点近く出土したが接合されなかった。胎土に繊維、小礫を含む。150～158は底部の破片。150は底面に縄文がある。154は太い原体による縄文が認められる。158は整った斜行縄文のもの。

縄文時代後期の土器（図IV-15-159～161／別表VI-3／図版18）

178点出土した。これらはタブコブ式、余市式に相当するものである。図示したもののほか、厚手で太目の0段多条の原体による縄文のものがL-52、54区から出土しているが図示していない。



図IV-15 包含層出土の土器(8)・土製品・焼成粘土塊

IV群a類 (159～161)

159、160はタブコブ式に相当するもの。159 a～fは150点ほどの破片がG-43区、H-45区、I-45区の広範囲から出土した。ほとんどの破片が表裏に剥れていた(159 bの断面)。胎土は緻密で焼成が非常に良い。細かい礫や長さ3cmほどの「苧わら様のもの」が混入する。159 aの割れ面にはこれらの炭化した痕跡が観察できる。器面の厚さは口縁部付近で15mm、口径は20cm以上になるとみられる大型のもの。先端を欠損しているが口縁部に突起を有するものである(159 a)。口唇断面は丸みを帯び、突起部には縦に粘土を貼り付け肥厚させている。器面には太い0段多条のLR原体による縄文が底部付近まで粗く施されている。施文後はナデ調整され縄文がつぶれているところが多い。口縁部の比較的広い範囲を無文としこの部分に3条の縄線文を巡らせている。突起部にも縦位に1条に押捺されている。図示していないが内面にも部分的に縄文が認められる。口唇上から内面にかけて幅10mmほどのヘラ状工具により調整されており、このため縄文のほとんどが消えている。口縁部に炭化物が付着する。160は胎土に繊維を含む。口唇直下が無文で、太い原体による斜行縄文が施されている。161は横走気味の縄文があり、幅1cmほどの貼付帯が剥落した痕跡が横位、縦位に認められる。

円盤状土製品 (図IV-15-162 / 別表VI-3 / 図版18)

162は羽状縄文が施された早期I群b-2類の土器片を利用したものである。

焼成粘土塊 (図IV-15-163 / 別表VI-3 / 図版18)

163は胎土がIII群b類土器と共通する。親指を図正面にあてがい、掌で握って粘土の塊をまとめとみられる凹凸が観察される。重さは204gである。(遠藤香澄)

(2) 石器等

今回の調査では、包含層等から石器等 10,984 点が出土している。これらのうち、加工痕や使用痕の観察されるものは、素材、製作技術、使用痕等によって、剥片石器群、磨製石器群、礫石器群に大別され、石器等全体のうち 3,750 点 (34.2%) を数える。この他、加工痕、使用痕の認められない礫が 7,204 点 (65.8%) 得られている。

包含層では、これまでの調査と同様に V 層の下位と中位から出土したものが多く、それぞれ 4,642 点 (42.3%)、3,632 点 (33.2%) と、合わせて全体の 80% 近くを占める。今年度の調査範囲について、グリッドごとの出土点数から分布の傾向をみると、町道米原 11 線部分の沢にかかるグリッド (K・L-44 区等) に多い。とりわけ石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、すり石、フレイク・チップ、礫・礫片について顕著である。一方、町道米原 1 号部分では、緩斜面を上がるにつれて点数の減少が認められる。

石器群の中から、点数の多い器種を順に挙げると、石鏃 226 点、砥石 74 点、スクレイパー 57 点、すり石 57 点、石槍またはナイフ 49 点、つまみ付きナイフ 34 点、磨製石斧 30 点、たたき石 29 点、石錐 27 点、台石 4 点、石皿 2 点となる。この点数は、たとえ接合するものがあっても破片を一つ一つ数えたものであるが、個体数はおおむね反映されているであろう。

石材は、剥片石器では黒曜石が主体でわずかに頁岩等がみられる。磨製石器では緑色泥岩が主体で、片岩等も少数ある。礫石器では、砂岩、泥岩、片麻岩等が用いられている。

石器等は平成 12 年度に 23,497 点、同 14 年度に 4,406 点出土しており、今年度分を含めると出土点数の合計は 38,887 点となる。

*各器種の記述中にある () は、別表 IV-5 の細分類記号と対応するものであり、当センターの「石器等の分類基準」(昭和 56 年) のものを一部細分して用いている。

剥片石器群

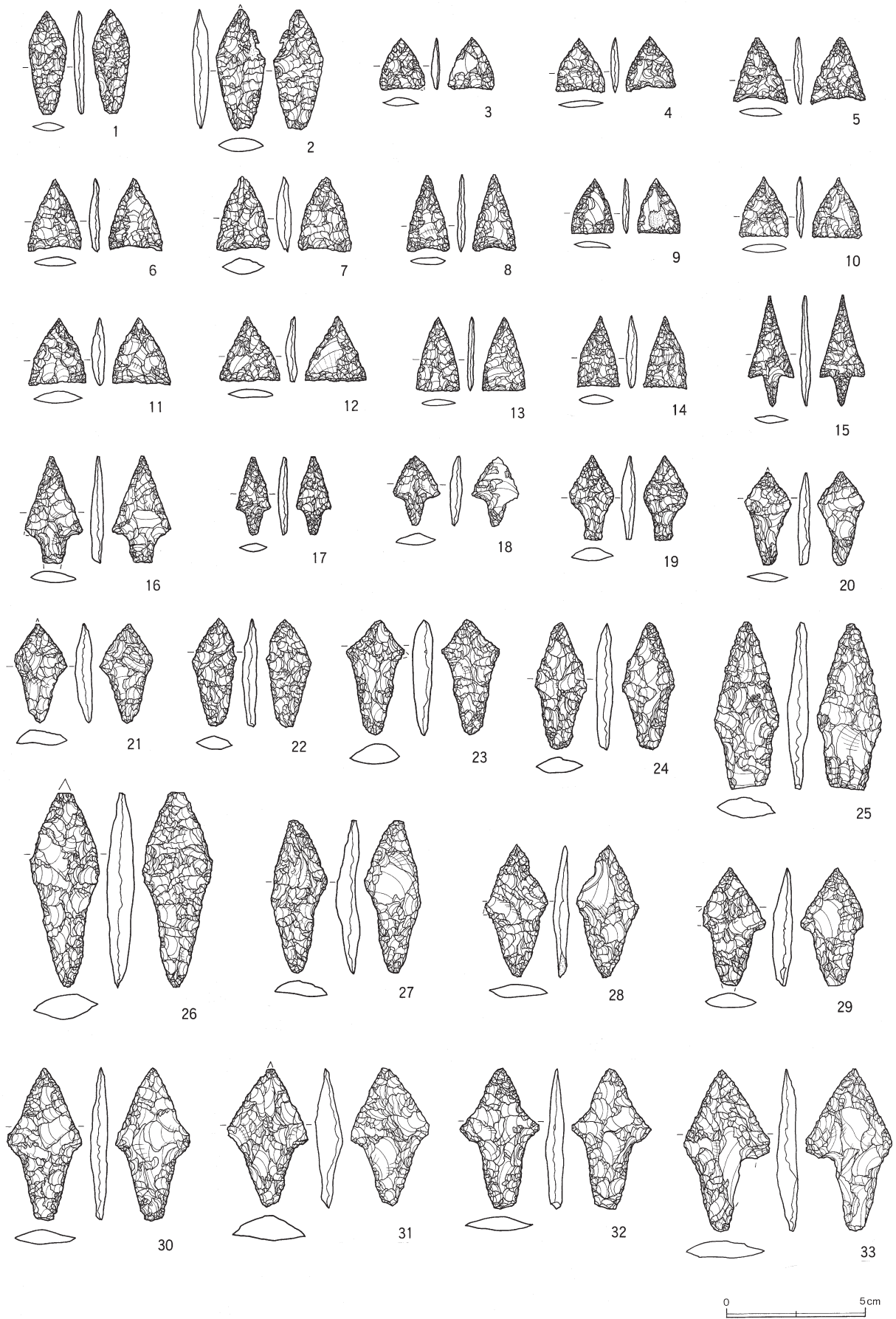
剥片を素材とした石器群で、3,400 点得られている。二次加工による形態差等から、石鏃 226 点、石槍またはナイフ 49 点、石錐 27 点、つまみ付きナイフ 34 点、スクレイパー 57 点、ピエス・エスキュー 5 点、R フレイク (二次加工痕のある剥片) 147 点に分類される。二次加工痕の認められないものは、U フレイク (微細剥離痕のある剥片) 87 点、フレイク・チップ 2,760 点、石核 6 点、原石 2 点に分類される。

用いられる石材は大半が黒曜石である。頁岩は 19 点と少なく、器種では、石鏃に 3 点、つまみ付きナイフに 1 点、スクレイパーに 5 点がみられる程度である。黒曜石製の各器種と R フレイクについて、肉眼で観察される石自体の特徴を大まかに分けると、1) はっきりとした挟雑物の認められないものが約 60%、2) 挟雑物の混じっているものが約 30% (このうちの約 30% は肉眼で認められる特徴から赤井川産の可能性が高い)、3) 赤みを帯びる部分のあるものが約 10% である。いわゆる「梨肌」のものはみられなかった。なお本来は 3) の黒曜石であっても、たまたま素材の剥片に赤みを帯びた部分が含まれていなければ、1) に分けられてしまうこともあり得る。あくまで大まかな傾向である。

剥片の記述にあたっては、「背面」・「腹面」が判断できないものに限り、「表面」・「裏面」と呼び分けている。また二次加工 (痕) は、石器の整形・調整のための加工痕を、微細剥離痕とは長さ 2 mm 以下の剥離痕を指すときに用いている。

石鏃 (図 IV-16-1~22 / 別表 VI-4 / 図版 19)

226 点出土している。茎の有無で大別され、さらに形態の違いにより細分される。無茎のものは、柳葉形 4 点 (2 a)、五角形 2 点 (2 b)、三角形凹基 52 点 (3 a)、三角形平基 43 点 (3 b)、有茎のものは、基部が不明瞭なもの 5 点 (5)、凹基 2 点 (5 a)、平基 8 点 (5 b)、凸基 26 点 (5 c) である。この他、



図IV-16 包含層出土の石器 (1)

小破片のため本来の形態まで知り得ないものが23点(8)、未成品と判断されるものが61点ある。分布をみると、沢部分にあたるK-44区で51点、L-44区で55点と比較的多い。分布図には分けて図示していないが、未成品がそれぞれに20点と6点含まれている。分類の際には、便宜的に長さ5cm以下を石鏃、以上を石槍またはナイフとしたが、重さや茎部の作りを考慮したうえで、5cm以下でも石槍またはナイフとしたものがある。

1～14は無茎鏃。1は細身で薄く、柳葉形。2は最大幅が中央より先端部側にある。3～8は三角形凹基で、3のように正三角形のものや、8のように二等辺三角形のものがある。4は片方の縁辺中央がやや外に張り出す。7は、三角形をした石鏃の厚さ(図示した3～6・8～14)が平均で2.9mmなのに比べ厚みがある。9～14は三角形平基で、凹基と同様に正三角形の12や、二等辺三角形の13がある。10は両縁辺の基部側がやや外に張り出す。15～21は有茎鏃で、15は凹基、16・17は平基、18～21は凸基。22は基部が不明瞭。茎部に比べ先端部が小さい。石材は15が頁岩、他は黒曜石である。

石槍またはナイフ(図IV-16-23～33、IV-17-34～37/別表VI-4/図版19)

49点出土している。茎部が明瞭なものが32点(1)、不明瞭なものが1点(2)である。この他、小破片のため本来の形態を知り得ないものが13点(8)、未成品と判断されるものが3点ある。今年度の調査範囲では、出土点数の多いグリッドは特に認められない。

23～36は茎部が明瞭なもの。23は石鏃とした22と同様、茎部に比べ先端部が小さい。本器種の中には同形態の茎部をもつものもあることからみて、先端部が再加工された可能性がある。25は他に比べて幅広の茎部である。27は一方の基部の張り出しが弱い。28の表面先端部の右縁辺には微細剥離痕が連続する。29～36は基部が凸基である。32は先端部から基部にかけての両縁辺が内湾する。36は先端部から基部にかけての一縁辺が内湾する。37は茎部が不明瞭なもの。両面とも全面調整されている。表面の上部には鱗形のひびが多く観察される。図示したものの石材は全て黒曜石である。

石錐(図IV-17-38～47/別表VI-4/図版19)

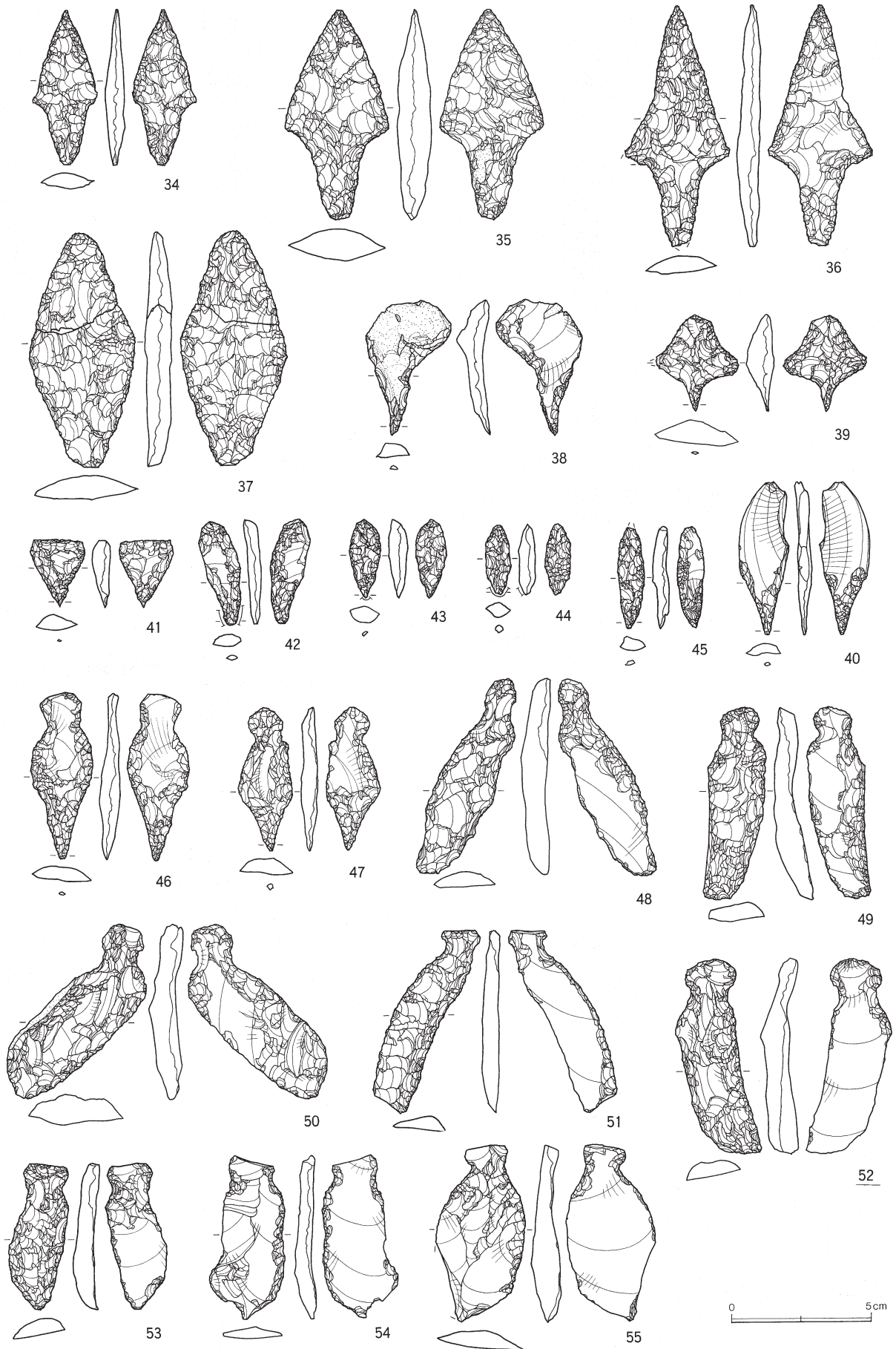
27点出土している。沢部分(K・L-44区等)から出土したものが比較的多い。

38～40のように、素材の一端に錐部を作り出すものが9点(1)、42～45のように、棒状のものが14点(2)ある。この他、46・47のように、つまみ付きナイフを転用したとみられるものなどが4点(9)ある。38は二次加工痕と比べ素材腹面の風化がすすんでいる。この面には様々な方向からの細かい線状の傷が認められる。腹面左縁辺の上部には階段状の剥離痕が密集し、潰れたようにみかけられる。39はほぼ全面に二次加工痕が認められる。40は素材の剥片を折断し、蝶番状の末端部分に二次加工がなされる。41は三角形平基の石鏃と同形態であるが、厚みがあるため石錐とした。42は棒状の一端に、43～45は棒状の両端に錐部が作り出される。42は錐部の二稜に、44は錐部の三稜に磨耗が認められる。ルーペ(20倍)による観察では、どちらも形態軸に対して直交方向の細かな線状痕が観察される。図示したものの石材は全て黒曜石である。

つまみ付きナイフ(図IV-17-48～55、IV-18-56～63/別表VI-4/図版20)

34点出土している。沢部分(K・L-44区等)から出土したものが多く、全て縦型で、二次加工の部位や程度により大まかに分けられる。刃部を側面からみると直線的なものが多い。

48～51は素材の背面全面と腹面の右縁辺に二次加工痕が認められる(1)。48は背腹両面に風化のすすんだ部分がみられる。刃部の断面は両縁辺とも急角度である。49・50は片側に側面があり、二次加工痕は認められるものの刃部は作り出されていない。51の刃部は左縁辺に比べ右縁辺が急角度である。52・53は背面全面加工のもの(2)。52の刃部は右縁辺に比べ左縁辺が急角度である。両縁辺は収束して切り出し形を呈する。53の刃部は左縁辺に比べ右縁辺が急角度である。54～61・63は二次加工が背面全面



図IV-17 包含層出土の石器 (2)

に及ばず縁辺にとどまるもの(3)。54・55は背面の右縁辺に刃部が作り出される。54は背面の末端左側に抉入部が認められる。56は背面の右縁辺と左下の縁辺に刃部が作り出され、両縁辺は収束して切り出し形を呈する。背面の左縁辺には微細剥離痕が連続する。57・58は背面の両縁辺に刃部が作り出される。57は両縁辺が収束して先端形をなしている。59・60は背面の両縁辺と腹面の一縁辺に二次加工がなされる。59は二次加工痕に比べ、素材の背面と腹面の風化がすすんでいる。61は両縁辺の両面に二次加工がなされる。石錐とした46・47ほど顕著ではないが、先端形に調整されている。つまみ部の背面側右縁辺に階段状の剥離が密集し、稜の潰れが顕著である。62は両面に二次加工痕が認められる(4)。表面の中央と裏面の大部分に「曇り」が観察される。63は緑色泥岩の剥片を素材としている。背面の右縁辺等に二次加工がなされる。この他、小破片のため本来の形態を知り得ないものが10点(8)ある。図示したものの石材は50が頁岩、63が緑色泥岩、他は黒曜石である。

スクレイパー (図IV-18-64~72/別表VI-4/図版20)

57点出土している。今年度の調査範囲では、出土点数の突出したグリッドは特に認められない。形態、二次加工の部位や程度により大まかに分けられる。原礫面を残すものが多い。

64は石篋(1)。両面のほぼ全周に二次加工痕が認められる。65~72は素材の長軸に刃部が作り出される(4)。65は原礫面が広範にみられ、素材を角礫状の原石から剥離したことがわかる。66は背面の両縁辺に刃部が作り出される。67は刃部が外湾する。68は刃部が内湾する。腹面右縁辺には二次加工痕が認められるが、その裏にあたる背面左縁辺の剥離痕は小さく不連続である。69・70は先端形となるもの。69は背面の両縁辺と腹面の一部に二次加工がなされる。両縁辺は長軸両端で収束し、どちらも先端形を呈する。70は背面の両縁辺に二次加工痕が認められ、一端が先端形をなす。71・72は横長剥片を素材としている。いずれも剥片の下端に刃部が作り出される。この他、小破片のため図示していないが、素材の下端に急角度の二次加工がなされるものが1点(3)、小破片のため本来の形態を知り得ないものが19点(8)ある。図示したものの石材は69・70が頁岩、71が珪質頁岩、他は黒曜石である。

ピエス・エスキュー (図IV-18-73・74/別表VI-4/図版20)

5点出土している。分布のまとまりは特に認められない。

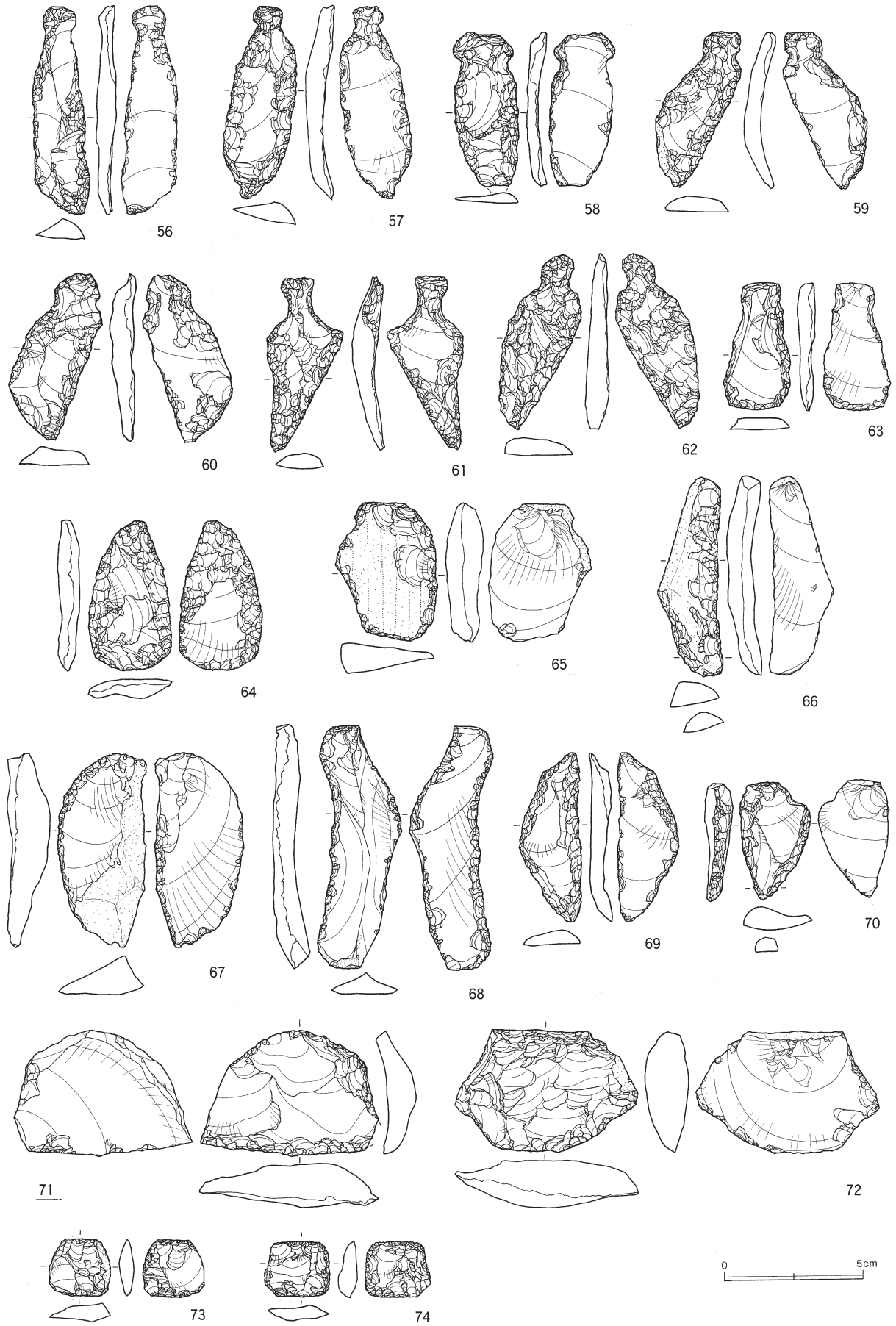
73・74とも、方形で刃部間の断面は紡錘形を呈する。73は相対する二辺に、74は四辺全てに階段状の剥離痕が観察される。73には円礫の原礫面がみられる。石材はどちらも黒曜石である。

Rフレイク

図示はしていない。147点出土している。含まれるものは、1)形態的特徴は判然としないが、二次加工痕が認められ未成品の可能性のあるもの、2)本来は完形の器種であったが、形態的特徴をつかみ難い破片となっているもの、などである。

Uフレイク、フレイク・チップ、石核、原石

これらは図示していない。Uフレイク87点、フレイク・チップ2,760点、石核6点、原石2点が出土している。Uフレイクは剥片の縁辺に微細剥離痕が連続するものである。先にも触れたが、ここでは剥離痕の長さを2mm以下としている。この中には使用によって生じる「微小(細)剥離痕(刃こぼれ)」を有するものの他に、剥片剥離時に石核と剥片縁辺とが接触して発生する「偶発剥離痕」を有するものも含まれている。フレイクは二次加工痕、微細剥離痕とも認められないもので、大きさなどによってチップと分けることはしていない。素材となる剥片と二次加工によって生じる整形・調整剥片とが含まれる。ほとんどが黒曜石で、他には頁岩7点、珪質頁岩4点があるに過ぎない。今年度の調査範囲では沢部分からの出土が特に多い。石核は全て黒曜石であり、大きさはおおむね3cm前後である。原石は2点とも角礫の黒曜石である。



図IV-18 包含層出土の石器 (3)

磨製石器群

製作に研磨を用いる石器群で、196点が得られている。磨製石斧30点、研磨の認められない未成品7点、磨製石斧の打ち欠き片133点、原材3点がある。磨製石斧の多くは泥岩の中でも緑みを帯びた「緑色泥岩」を用いて製作されているが、青みを帯びた片岩もみられる。

磨製石斧（図IV-19-75～80／別表VI-4／図版21）

23点出土している。今年度の調査範囲では、出土点数の多いグリッドはみられない。研磨に、打ち欠き、敲打が組み合わさって製作されている。擦切り技法（1）によるものはない。なお、記述中の「右側」・「左側」とは実測図主面の右側・左側である。

75・76には敲打痕が認められる（2）。75は両側縁に敲打痕があり、研磨はほぼ全面に及んでいる（2）。刃は両刃で、刃縁は円刃である。刃縁を下方向から見ると、弧状をしている。76は右側の主面に多くの敲打痕が認められる（2）。刃は両刃で、刃縁は偏刃ぎみである。基部の中央付近で破損しており、折れた面を観察すると、左側の主面に打撃が加わったことによるものと推測される。また、左側の主面上で破片が接合している。破片は本来の緑みを帯びた色調とは異なる茶褐色を呈しており、被熱の可能性もある。77・78は打ち欠きで整形されている（3）。77の刃は片刃で、刃縁は偏刃ぎみである。基部中央で破損している。78は最大幅が刃部にあり撥形を呈する。（3）。刃は両刃で、刃縁は偏刃である。79は全面に研磨がなされている（5）。刃部は両端にあり、どちらも片刃である。幅の狭い方の刃縁は偏刃である。80の素材は、打ち欠きで生じたとみられる横長剥片である。ほぼ全面に研磨がなされ、刃部や側面が作り出されている（5）。この他、打ち欠き、敲打ともみられず、刃部のみ研磨されるものが1点（4）、小破片のため本来の形態を知り得ないものが14点（8）ある。図示したものの石材は75・80が緑色泥岩、76・78が泥岩、77・79が片岩である。

磨製石斧未成品、打ち欠き片、原材

これらは図示していない。磨製石斧未成品7点、打ち欠き片133点、原材3点が出土している。研磨の認められないものを磨製石斧の未成品とした。打ち欠き片は緑色泥岩がほとんどで、片岩のものは1点である。なお、研磨の認められる小片は完成品の破片とも考えられるため、ここには含めていない。緑色泥岩の礫・礫片は原材の可能性があるので磨製石器群に含めてある（少数ではあるが、たたき石、すり石にも緑色泥岩は用いられている）。なお磨製石器群の分布図は、平成12年度報告（北埋調報153）のものを細分し、今年度の分類と整合させて作成してある。

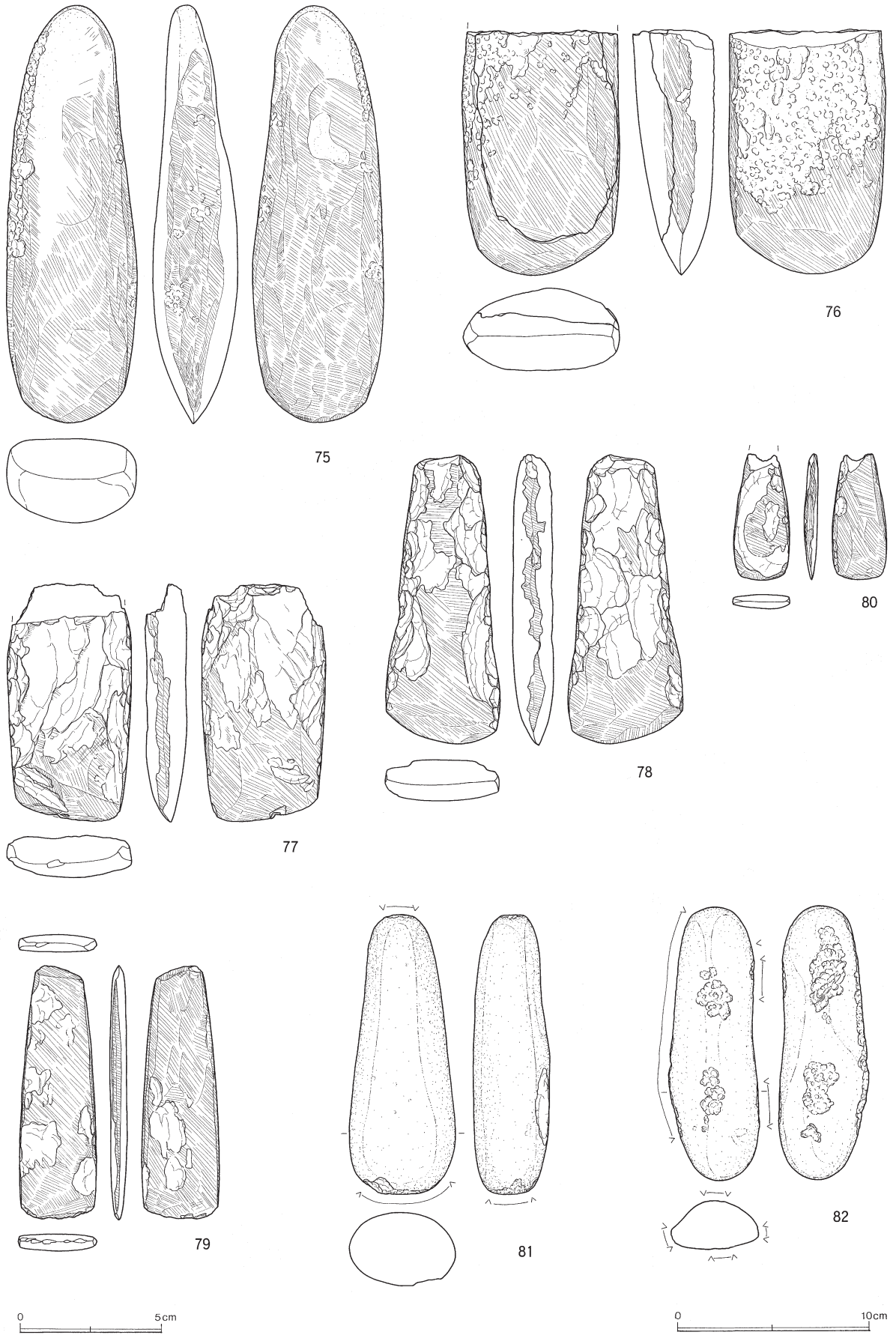
礫石器群

自然面を広範にとどめる石器群で、184点が得られている。加工の度合いが低いとも言い換えられ、用いられる礫の形態や、使用痕によって各器種が判断される。たたき石29点、すり石57点、砥石74点、台石4点、石皿2点、加工痕のみみられる礫18点がある。使用痕と加工痕の区別は容易ではない部分もあるが、その部位や程度によって判断している。石材には安山岩、砂岩、泥岩、片麻岩等が用いられている。

たたき石（図IV-19-81・82、IV-20-83～85／別表VI-4／図版21）

29点出土している。今年度の調査範囲では、沢部分（K・L-44区等）の出土点数が比較的多い。

81・82は棒状礫に使用痕が認められるもの（1）。81はたたき痕が長軸両端に認められる。赤みを帯びており、被熱の可能性もある。82は両面の上下2ヵ所と両側縁にたたき痕が認められる。83・84は扁平礫の縁辺に使用痕が認められるもの（2）。84は破損しているが、扁平礫の一端等にたたき痕が認められる。たたき痕には黒色物質の付着がみられる。85は円礫の一端が打ち欠かれ、その端部にたたき痕が観察される（4）。この他、扁平礫の主面にたたき痕のみみられるもの（3）があるが、図示していない。図示したものの石材は全て砂岩である。



図IV-19 包含層出土の石器 (4)

すり石 (図IV-20-86~92、IV-21-93・94 / 別表VI-4 / 図版21・22)

すり石は57点出土している。今年度の調査範囲では沢部分(K・L-44区等)の出土点数が特に多い。北海道式石冠(4、5)は出土していない。

86は半円状の礫の弦と左側の主面にすり面が認められる(6)。弦部分のすり面は他と比べ幅が広く、最大で4cmを測る。長軸両端等にはたたき痕も観察される。87~90は断面が三角形状をした礫の稜にすり面が認められる(1)。87・89・90は一稜に、88は二稜にすり面がある。87のすり面は、泥岩という石質を反映して非常に滑らかである。他の一稜の角にはたたき痕がみられるが、保持し易くするための敲打調整の可能性もある。88の下側のすり面には打ち欠きがいくつかみられる。長軸の一端が被熱により赤みを帯びているが、上側のすり面はこの被熱痕をすり消しており、被熱後に用いられたものと判断される。下側のすり面では、被熱痕のすり消しは判然としない。90のすり面には打ち欠きがみられる。91~94は扁平礫の側縁をすったもの(2)。91は側縁が両側から打ち欠かれ、稜の一部が潰れている。92は側縁の片側から、93は側縁の両側から打ち欠かれている。94は扁平礫の側縁にすり面と剥離痕がみられる。主面の中央にはたたき痕がある。図示したものの石材は86が花崗岩、87が緑色泥岩、88~93が砂岩、94が片麻岩である。なお今回出土はしていないが、北海道式石冠の出土点数も分布図に図示している。今年度の分類と整合させて図示しているため、平成12年度の分布図(北埋調報153)とは点数が異なっている。平成12年度調査区の南東側、M-52区周辺にまとまりがみられる。

砥石 (図IV-21-95~97 / 別表VI-4 / 図版22)

74点出土している。沢部分(K・L-44区等)で多いうようにみかけられるが、同一個体が破片化したものが大半とみられる。

95・96は研磨面に溝が複数認められる(1)。97は板状の砥石破片(2)。本来の形態の中央に向かって傾斜している。表面の縁には打ち欠きがいくつか認められる。図示したものの石材は1・3が砂岩、2はスコリアである。

台石 (図IV-21-98 / 別表VI-4 / 図版22)

台石は4点出土している。分布の傾向は特に認められない。

98は表裏の主面中央に平滑な部分が認められる。図示した主面には小孔が穿たれている。側縁のほぼ全周に剥離痕が観察される。赤みを帯びる部分があり、被熱の可能性もある。石材は砂岩である。

石皿

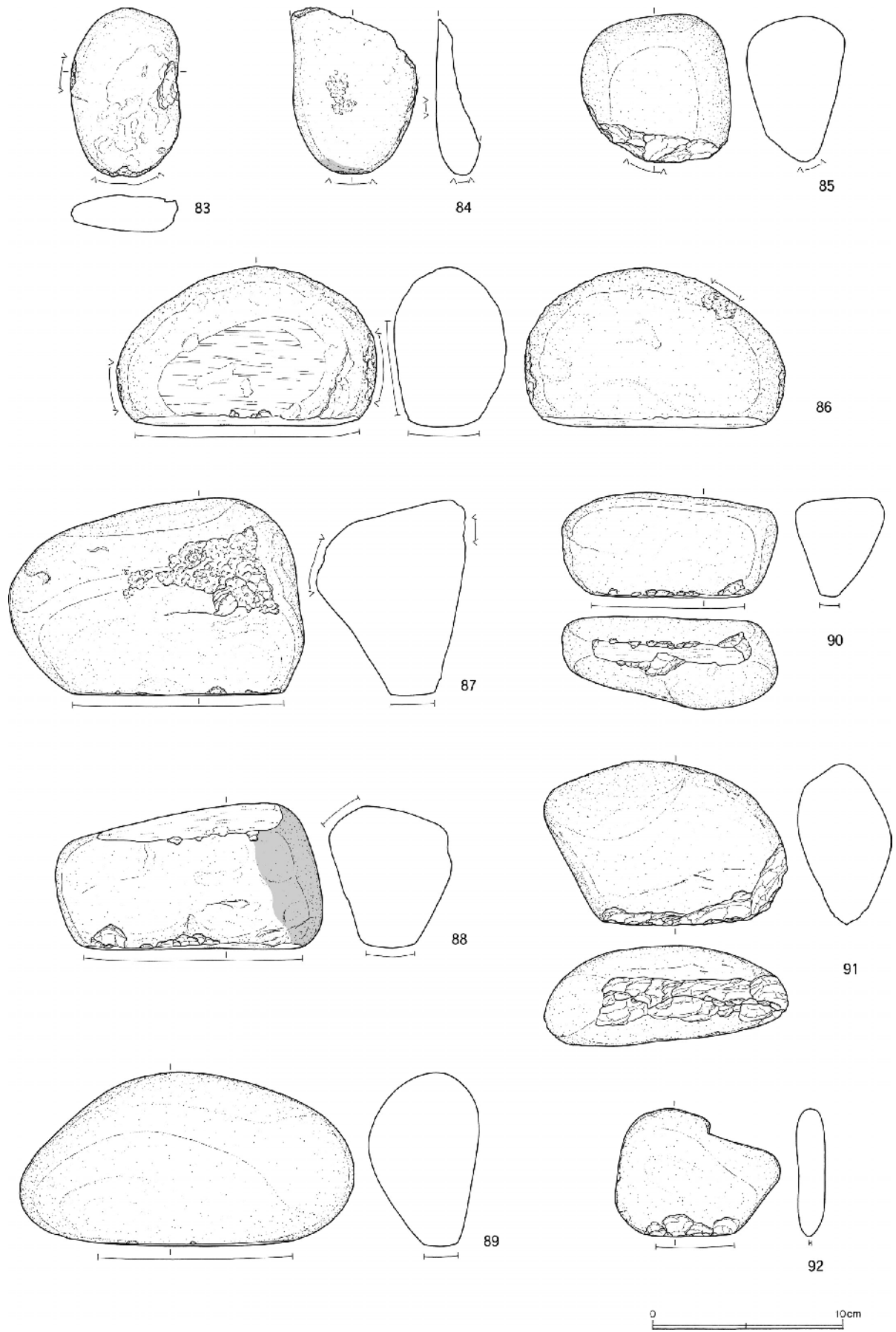
石皿に分類されたものは2点あるが、破片のため図示していない。

加工痕のある礫・礫片

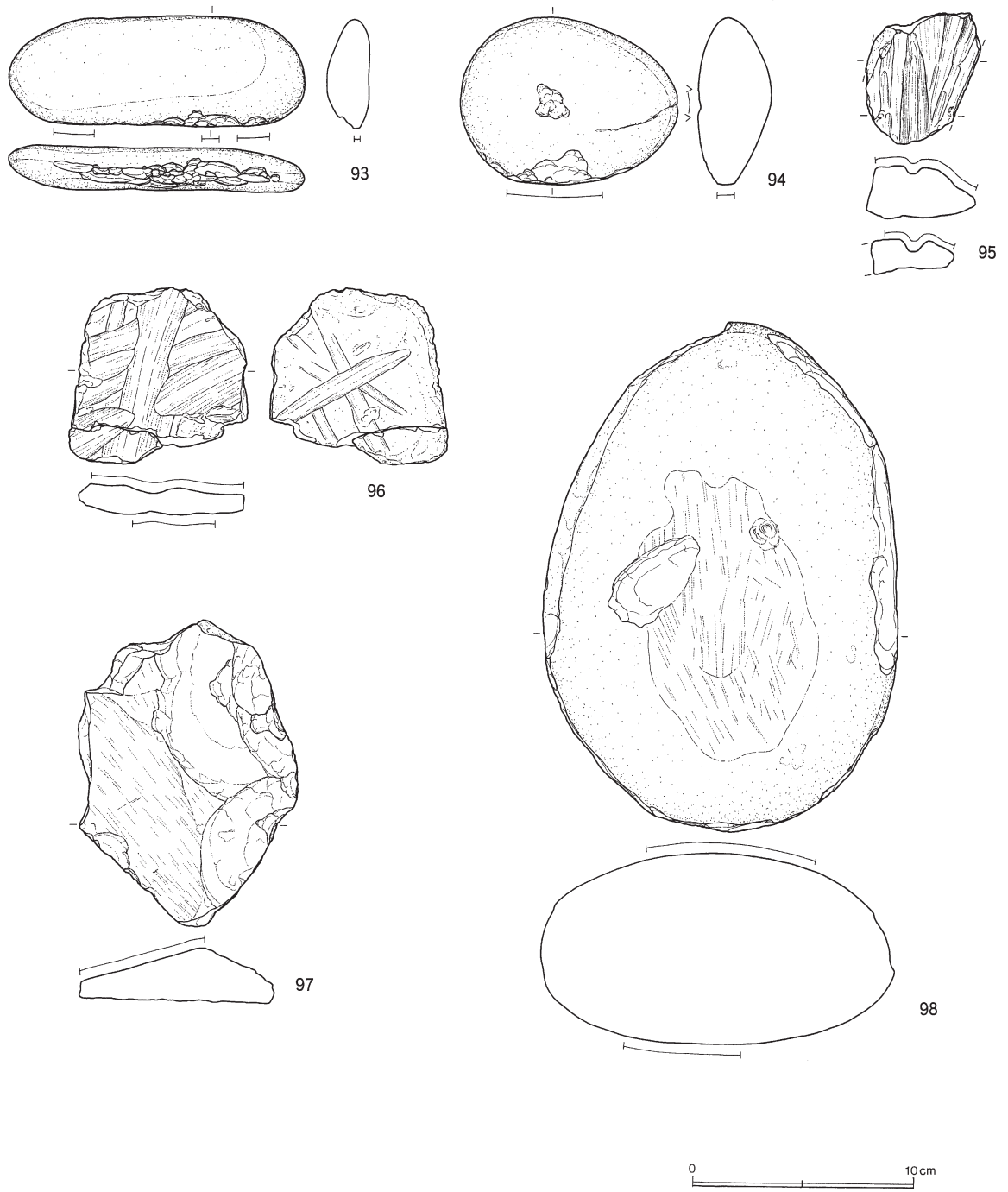
図示していないが18点出土している。分布のまとまりは特にみられない。扁平で細長い砂岩の礫に打ち欠きの認められるものが多い。緑色泥岩に打ち欠きの認められるものは、磨製石斧未成品にしている。

礫・礫片

図示はしていない。これまでの調査と同様に石器等の半分以上を占め、今回は7,204点出土している。これらの中には赤みを帯びたものもあり、被熱による破損を推定させる。沢部分のL-44区の点数が突出しているが、V層中位において、平均径2cm程の小礫がまとまって検出されたためである。このまとまりには部分的にVII層が混じるため、風倒木等によりVII層から掘り起こされたものと考えられる。このため集石として扱ってはいない。(山中)

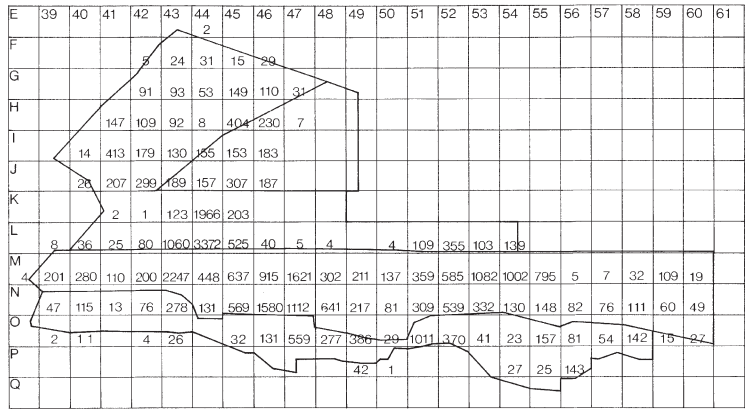


図IV-20 包含層出土の石器 (5)

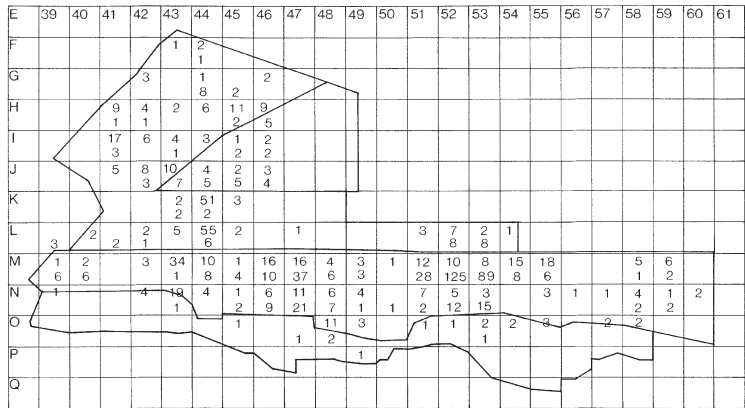


図IV-21 包含層出土の石器 (6)

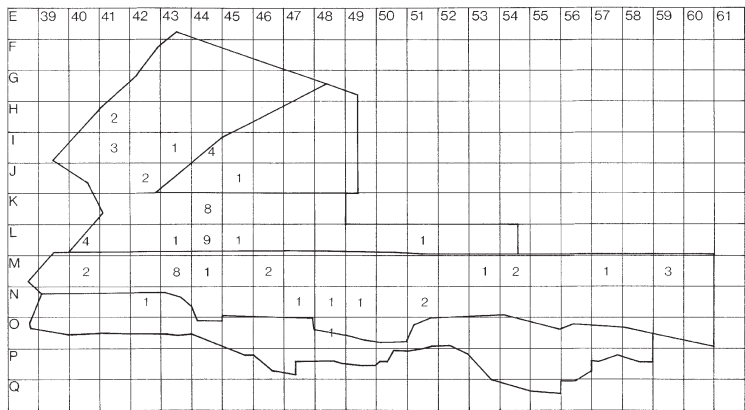
石器等全体



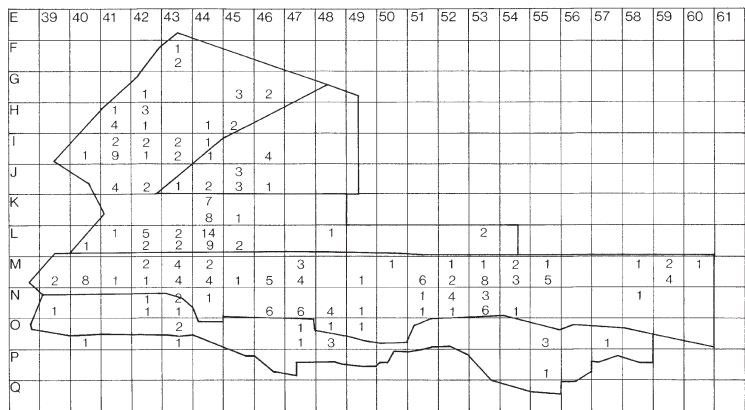
上：石 鏃
下：石槍またはナイフ



石 錐

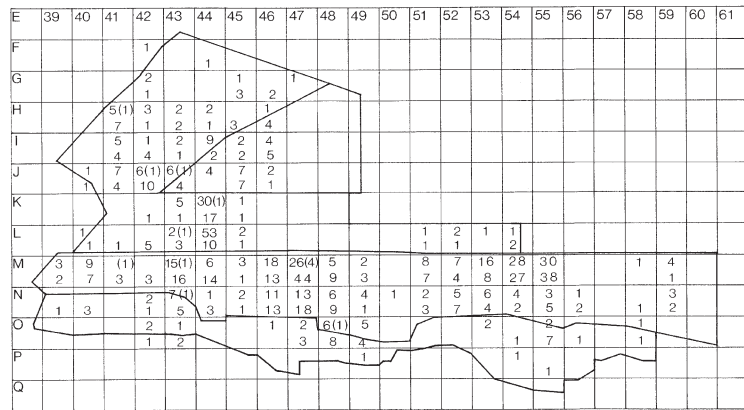


上：つまみ付きナイフ
下：スクレイパー

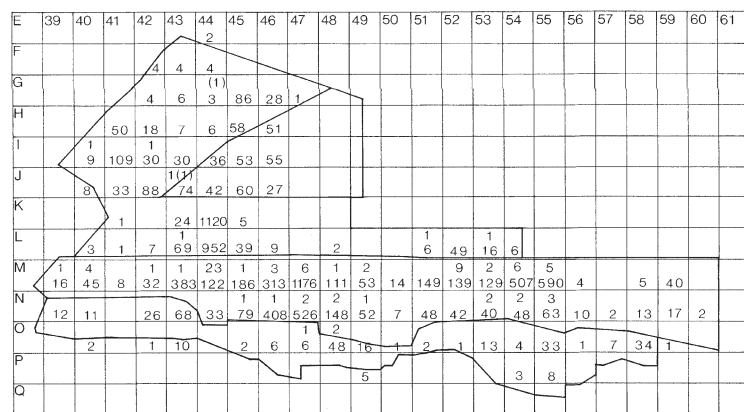


図IV-22 石器等分布図 (1)

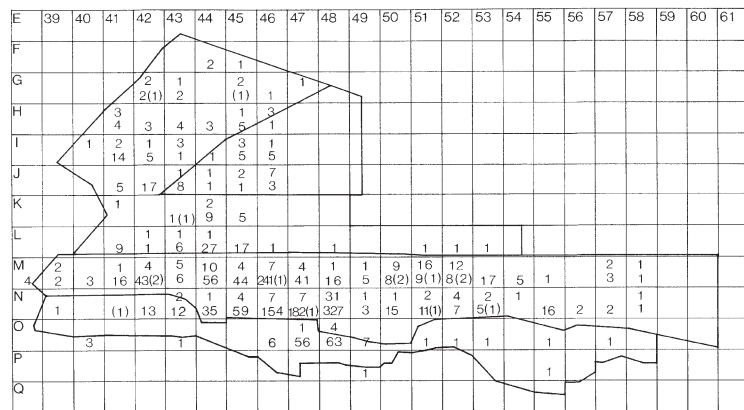
上：Rフレイク
 下：Uフレイク
 () はピエス・エスキュー



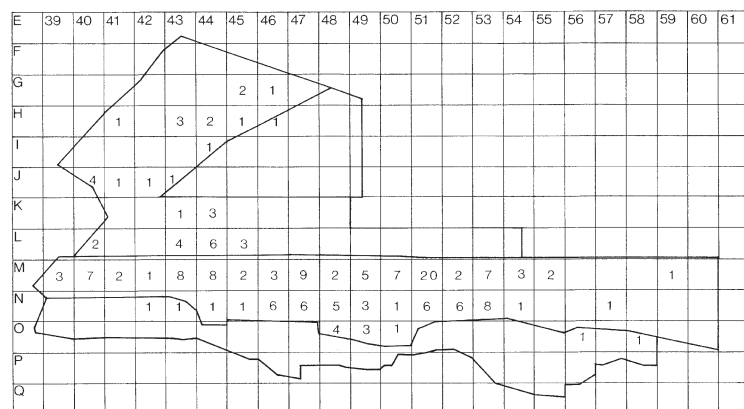
上：石 核
 下：フレイク・チップ
 () は原石



上：石 斧
 下：打ち欠き片
 () は原石

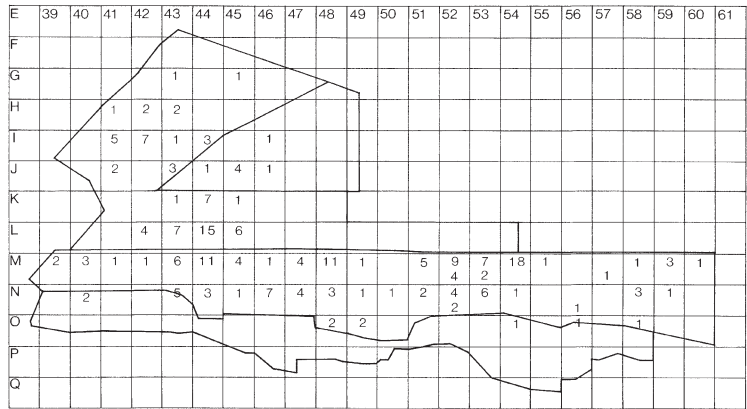


たたき石

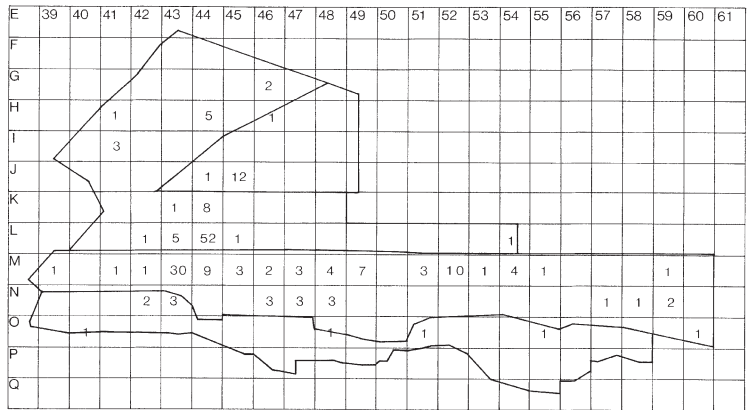


図IV-23 石器等分布図(2)

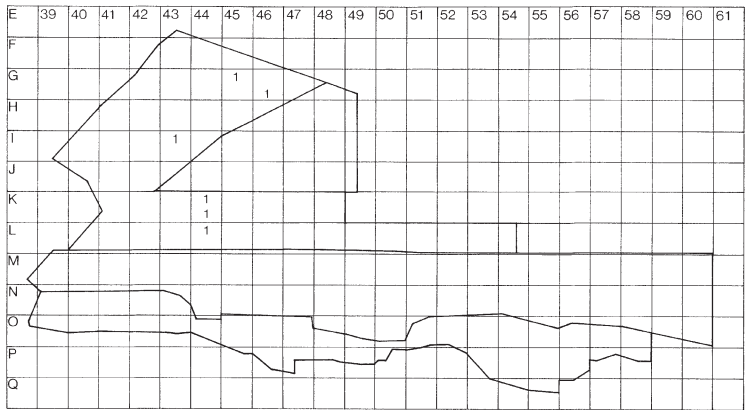
上：すり石
下：北海道式石冠



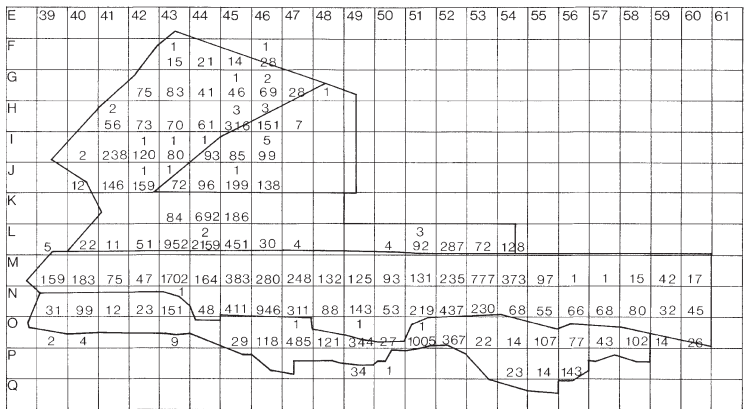
砥石



上：台石
下：石皿



上：加工痕のみられる礫
下：礫



図IV-24 石器等分布図(3)

V 宮戸4遺跡

1 樹林部分の遺構と遺構出土の遺物

(1) 概要

樹林部分は平成12年度に調査した宮戸3遺跡の南側に隣接し、町道米原2線までの5,150 m²を調査した。検出した遺構はTピットが30基、焼土8か所である。

Tピットは尾根上の地形が緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上で多く検出した。沢地形を意識して構築されており、台地から低地部へと変化する地形の境界部分に立地している。時期は検出された層位から縄文時代中期後半～後期初頭と考えられる。今回検出されたTピットには切り合うものは無く、他の遺構との重複関係もないため、新旧関係や同時性等は明らかにできなかった。(別表VI-6 樹林部分検出遺構一覧・別表VI-20 Tピット属性表 VIII章-2)。

焼土は調査区北側のほぼ平坦な尾根上のVI層上面でまとまって検出され、検出層位や周辺の遺物などから縄文時代早期後半頃の所産と推定できる。

(2) Tピット

TP-26 (図V-2/別表VI-6・8・20/図版25-1・2)

特徴：尾根上の地形が緩やかに傾斜しながら低地部に至る緩斜面上に立地し、等高線とはやや直交するように構築されている。P76グリッドのV層調査後に、VI層上位で長楕円形をした黒色土のまとまりを確認した。確認面の平面形は楕円形を呈する。坑底は溝状で縦断面の東側は緩やかにオーバーハングしている。横断面の壁面は、坑底からほぼストレートに立ち上がり、中斷からV字状に広がる。

覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位は褐色をした崩落土、上位は落ち込みに堆積したV層を主体としている。(笠原)

遺物

石器：礫片12点が覆土から出土している。内4点が同一母岩で、石材は不明。残りはIXb層に含まれる凝灰岩。(福井)

TP-27 (図V-2/別表VI-6・20/図版25-3)

特徴：尾根上の平坦部に立地し、等高線と直交するように構築される。P72・73グリッドの包含層を調査中に、VI層上位から細く溝状を呈した黒色土のまとまりを確認した。風倒木痕の可能性もあったが、Tピットを想定し掘り下げを行なった。約30cm程掘り下げたところで、腐植土の混じらない橙色の堅くしまるローム質土に達した。更に掘り下げたところで、腐植土の混じる溝状の落ち込みを確認したためTピットであると判断し、調査を続行した。調査の結果、平面形は長楕円形で坑底は溝状を呈する。縦断面の東側が大きくオーバーハングしながら立ち上がる。横断面の壁面は緩やかに立ち上がり、中斷からややY字状に広がる。覆土は坑底にわずかに黒色腐植土が堆積し、中位は褐色をした崩落土で、上位が落ち込みに堆積したV層で構成されている。(笠原)

TP-28 (図V-2/別表VI-6・20/図版25-4・5)

特徴：調査区の北端、平成13年度調査区との境で検出した。尾根上の平坦部に立地し、等高線に直交するように構築される。P67グリッドの包含層を調査中に、VI層上位から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。平面形が長楕円形を呈し、坑底は溝状である。縦断面の両端は坑底部からの立ち上がり部分が特にオーバーハングする。横断面の壁面は、坑底から緩やかに立ち上がり、中斷からV字状に広がる。覆土は坑底に黒色の腐植土がわずかに堆積し、中位はVIII層を主体とした崩落土で、上位は落ち込みに堆積したV層を主体としている。(笠原)

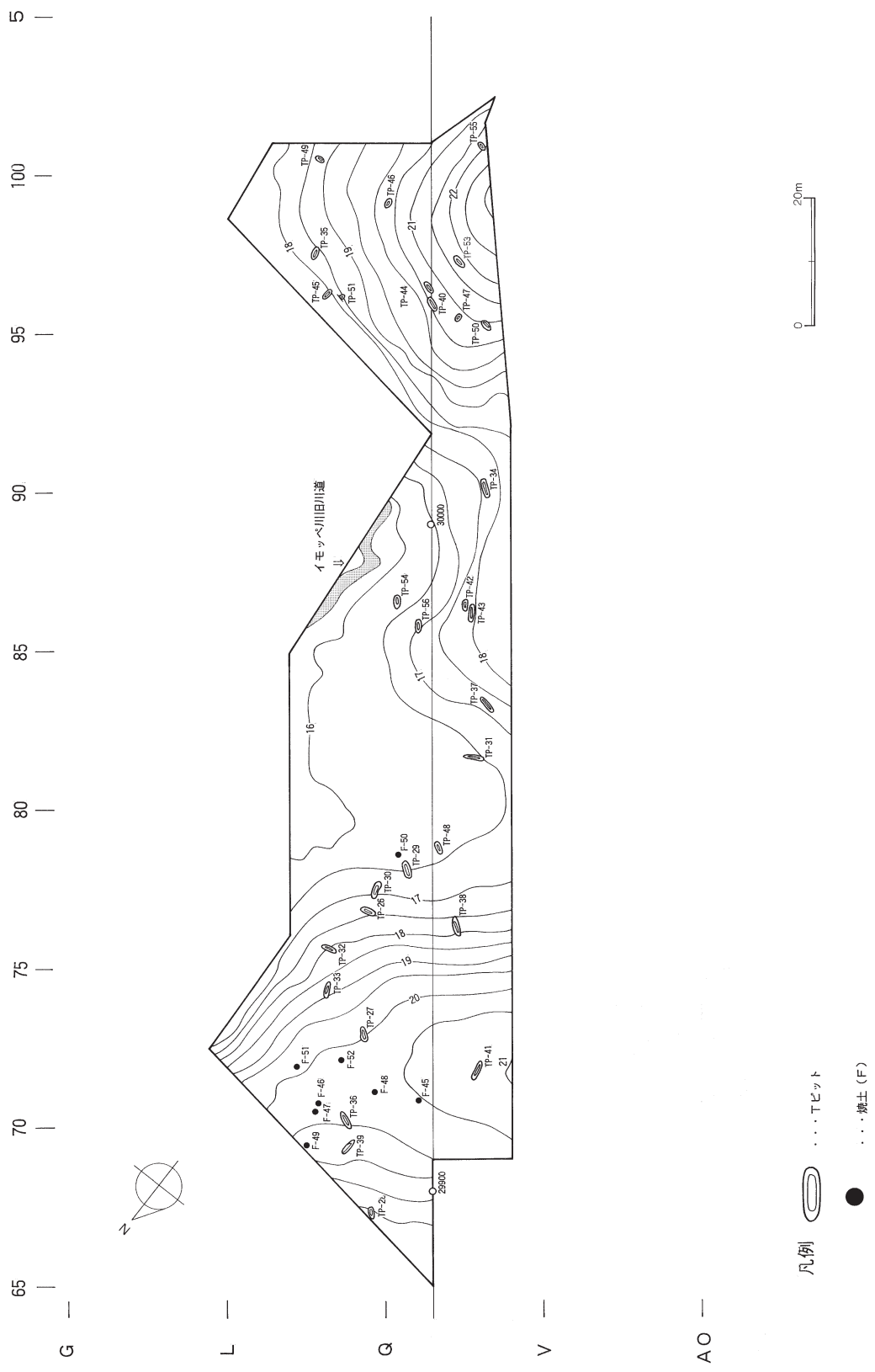


図 V - 1 樹林部分遺構分布図

TP-29 (図V-3/別表VI-6・8・20/図版25-6・7)

特徴：沢地形が緩やかに傾斜しながら低地部に至るわずかな斜面上に立地し、等高線と直交するように構築されている。Q 77・78 グリッドの包含層を調査中に、VI層上位から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。平面形は長楕円形を呈し、坑底は溝状である。縦断面の両端はフラスコ状にオーバーハングしている。横断面の壁面は、坑底から緩やかに立ち上がり、V字状に広がる。覆土は坑底に黒色の腐植土がわずかに堆積し、中位は崩落土で大型の赤色チャートが1点混入する。覆土8層は固結しており、掘削が困難なほど堅くしまっている。覆土9層は赤色で、褐鉄鋼で覆われていた。上位は落ち込みに堆積したV層を主体としている。(笠原)

遺物

石器：礫1点が覆土から出土している。赤色チャートの人頭大の礫。(福井)

TP-30 (図V-3/別表VI-6・8・20/図版25-8・9)

特徴：TP-29の北側に隣接し、等高線に直交するように構築されている。P 77 グリッドの包含層を調査中に、VI層上位から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。平面形が長楕円形を呈し、坑底は溝状である。縦断面の両端は坑底部からの立ち上がり部分がやや円くオーバーハングし、坑口に向かってほぼ垂直に立ち上がる。横断面の壁面は、坑底から緩やかに立ち上がる。覆土は坑底に黒色の腐植土がわずかに堆積し、中位は褐色の崩落土である。覆土9層は固結し、10・11層が赤色の褐鉄鋼で覆われている。上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

遺物

石器：フレイク4点が出土している。1点がメノウ質頁岩の縦長剥片(長さ約3cm)で、ほかは黒曜石のチップ。(福井)

TP-31 (図V-3/別表VI-6・20/図版26-1・2)

特徴：調査区中央、沢地形内部の平坦面に立地する。VI層上位で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中と推測され、底面はVII層(ローム)の下約1mに達している。検出面における上端の平面形は、中央部がやや広がった長楕円形である。中端は所々に凹凸があり、波打っている。底面はほぼ平坦であるが、東側へやや高くなっている。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため外側へ開くが、下部は細い溝状が良好に残存している。底面の幅と覆土の堆積状況から推測すると、壁面の崩落は比較的小さかったと考えられる。縦断面は船底型で、両端はオーバーハングしていない。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、中～下位が壁面からの崩落と考えられるロームと腐植土の混合あるいは互層となっている。(芝田)

TP-32 (図V-4/別表VI-6・8・20/図版26-3・4)

特徴：南東向きの斜面中腹(O 75区)に位置する。長軸方向は概ね等高線に沿うようである。形態は長径(底面)1.68mの溝状を呈し、底面は斜面下方にやや傾く。杭の痕跡などはみられなかった。長軸東側の壁面がオーバーハングする。短軸北側の壁面は、崩落のため中位から上位へ「Y」字状に広がる。土層断面の観察から、覆土は壁面の崩落や土壌母材の流入によって自然に堆積したと考えられる。覆土13層では炭化物が多量にみとめられた。Tピットが埋没するのにかかる時間を想定すると(例えば北埋調報186の143頁)、これらの炭化物はTピットを放棄した時点から掛け離れたものではないと考えられたため、採取して放射性炭素年代測定を依頼したところ、 $3,900 \pm 40$ (B.P.) という値が得られている(VII章第2節参照)。(山中)

遺物

石器：礫2点が覆土から出土している。2点とも同質の砂岩。(福井)

TP-33 (図V-4/別表VI-6・8・20/図版26-5・6)

南東向きの斜面中腹(O74区)に位置し、長軸方向は等高線と直交する。形態は長径(底面)2.86mの溝状を呈し、底面は斜面下方にやや傾く。杭の痕跡などはみられなかった。長軸両端の壁面がオーバーハングする。短軸の下位から中位にかけての壁面は垂直に近い。土層断面の観察から、覆土は壁面の崩落や土壌母材の流入によって自然に堆積したと考えられる。(山中)

遺物

石器: ピエス・エスキュー 1点が出土しており、図示した。剥片素材で対向する二側縁に剥離が見られる。残る二側縁は折損している。使用後被熱しており、その後一面が剥離している。(福井)

TP-34 (図V-5/別表VI-6・20/図版26-7・8)

特徴: 浅い沢地形が南西から北東へ緩やかに傾斜しながら低地部にいたる斜面に立地し、等高線に平行する様に構築される。V層を除去後、VI層上面で長楕円形の黒色土のまとまりにより確認した。平面形は長楕円形で、断面V字形。覆土は土層1~7がV層起源の黒色土、土層8はVI層の崩落土、土層9・10はVII層相当の崩落土、土層11・12・14・15・16・19・21はVIII層の崩落土、土層17はVII層相当+VIII層の崩落土、土層22は水成堆積層の崩落土、土層13が根による攪乱、土層18、20が腐植土の堆積。(福井)

TP-35 (図V-5/別表VI-6・8・20)

特徴: 尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の殆ど平坦な面に立地し、等高線に直交するように構築される。V層を除去後、VI層上面で不明瞭な黒色土のまとまりを確認したため、さらに5cm掘り下げて確認した。平面形は楕円形、断面はY字形。覆土は、土層1・2がV層起源の黒色土、土層3がVIII層の崩落土、土層4が腐植土、土層5がVIII層ないしIX層の崩落土、土層6がXI層に腐植土が混じるもの。なお、土層4に含まれた炭化材について¹⁴C年代測定を行ったところ、3900±40y. B. P (Beta-186226 未補正值)の年代値が得られた。(福井)

遺物

土器: 1はI群b-3類土器の胴部片である。横位と斜位の細貼付帯が組み合わされる。細貼付帯は部分的に剥落している。細貼付帯の間は短縄文で充填される。内面は横方向にナゲ調整される。色調は外面が褐色、内面が黒褐色である。胎土は緻密で砂を多量に含む。中茶路式に相当する。(芝田)

TP-36 (図V-6/別表VI-6・8・20/図版26-9、27-1)

特徴: 調査区北端の平坦部に立地し、等高線に直交するように構築されている。069・70グリッドの包含層を調査中に、VI層上位から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。平面形が長楕円形で、坑底は溝状である。大型で長軸が3mを計る。縦断面の東側はやや深くオーバーハングする。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり、中段からV字状に広がる。覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位は褐色の崩落土で構成される。上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

遺物

石器: 石鏃1点、フレイク2点、礫片1点が覆土から出土している。石材は礫片が泥岩のほかは黒曜石。1は石鏃で、横長剥片の背面周縁を調整したもの。未成品。フレイクは長さ約1.6cm、幅約3cmの横長剥片。(福井)

TP-37 (図V-6/別表VI-6・20/図版27-2・3)

特徴: 調査区中央、沢地形に面した緩斜面上に立地する。VI層上位で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中と推測され、底面はVIII層(パミス)の下約40~50cmに達している。検出面における上端の平面形は、東側がやや湾曲した長楕円形である。底部はほぼ直線状であるが、幅が一定ではない。底面は東側へ次第に低くなる。横断面はY字型である。壁面の上部は崩落のため少し外側

へ開くが、下部は垂直に掘り込まれた形状を残している。縦断面は船底型で、両端がオーバーハングする。東側は底部から大きく外側へ広がり、西側は壁面の中端でやや窄まりぎみに突き出ている。覆土は上位から下位まで腐植土とローム・パミスの互層である。(芝田)

TP-38 (図V-7/別表VI-6・20/図版27-4・5)

特徴：沢地形が緩やかに傾斜しながら低地部に至る斜面上に立地し、等高線に直交するように構築されている。S 76 グリッドのVI層中から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。

平面形は長楕円形で、坑底が極めて細い溝状を呈している。縦断面の両端は緩やかにオーバーハングしている。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり、南西側の壁面の方がやや外側に傾斜している。覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位はVIII層主体の崩落土で構成されている。上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

TP-39 (図V-7/別表VI-6・20)

特徴：調査区北端の平坦部に立地し、等高線に直交するように構築されている。TP-36と隣接する。069・P69 グリッドのVI層中から溝状の黒色土のまとまりを確認した。平面形、坑底共に溝状で、長軸は約3mを計る。縦断面の両端は緩やかにオーバーハングしている。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり、中段がやや内傾し、そこからV字状に広がる。覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位は褐色の崩落土で構成されている。上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

TP-40 (図V-8/別表VI-6・20/図版27-6・7)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上に立地し、等高線に平行するように構築される。V層を除去後、VI層上面で長楕円形の黒色土のまとまりにより確認した。平面形は長楕円形、断面はV字形。覆土は土層1がV層起源の黒色土、土層2がV層+VI層の崩落土、土層3・5・6がV層+VIII層の崩落土、土層4がVI層+VIII層の崩落土、土層7がVIII層の崩落土、土層8・10がIX層の崩落土、土層9がVIII層ないしX層の崩落土。(福井)

TP-41 (図V-8/別表VI-6・8・20/図版27-8・9)

特徴：調査区北西端の平坦部に立地し、等高線とほぼ平行するように構築されている。

S・T 71・72 グリッドのVI層上位から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。

平面形は長楕円形で、長軸は3mを超え大型である。坑底は溝状を呈する。縦断面の両端は坑底から緩やかに立ち上がり、坑口付近で外側を開く。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり、中段よりやや下位からV字状に広がる。覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位はVIII層主体の崩落土で構成され、上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

遺物

石器：チップサイズのフレイク5点が覆土から出土している。いずれも黒曜石。(福井)

TP-42 (図V-9/別表VI-6・20/図版28-1)

特徴：調査区中央、イモッペ川旧河道を臨む微高地上に立地する。TP-43と隣接する。VI層上位で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中と推測され、底面はVIII層(パミス)の下約30~40cmに達している。検出面における上端の平面形は、北西側がやや窄まった楕円形である。南西側の上部が木根と推測される攪乱によって大きく崩落している。当初はこの攪乱をTピットと誤認し、3基が切りあっていると予想していた。検出面から推測される新旧関係から、TP-42の長軸での半截が最適であると判断し、いわゆる縦割り調査を行った。ところが、覆土下部の主体が脆弱なパミスであったことから、雨水の流入や人為的な衝撃により土層断面の大部分が崩壊してしまい、土層断面を記録できなかった。現場で観察したところ、覆土は上位が腐植土、下位がパミスと腐植土の混合または互層であっ

た。底面はほぼ平坦で、南東側が二股に広がっている。横断面はU字型である。縦断面は船底型で、両端の中端が若干オーバーハングする。底面の幅と覆土の堆積状況から推測すると、壁面の崩落は比較的大きかったと考えられる。(芝田)

TP-43 (図V-9/別表VI-6・20/図版28-1)

特徴：調査区中央、イモッペ川旧河道を臨む微高地上に立地する。TP-42と隣接する。VI層上位で黒色土が楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中と推測され、底面はVIII層(パミス)の下約50～60cmに達している。検出面における上端の平面形は、北東側がやや突き出た楕円形である。南東側の上部が木根と推測される攪乱によって大きく崩落している。TP-42と同様の理由により土層断面を記録できなかった。現場で観察したところ、覆土は上位が腐植土、下位がローム・パミスと腐植土の互層であった。底面はほぼ平坦で、直線状である。横断面は中央部ではY字型であるが、両端では下部が膨らみぎみの「8」の字を呈する。掘り込まれているVI・VII層は未風化パミスがブロック状に混在する脆弱なロームであり、壁面は崩落しやすかったと考えられる。底部と比較して開口部が大きく広がった形状は、崩落の規模が大きかったことを窺わせる。(芝田)

TP-44 (図V-10/別表VI-6・20/図版28-2・3)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上に立地し、等高線に平行するように構築される。V層を除去後、VI層上面を5cm削ったところで長楕円形の黒色土のまとまりにより確認した。平面形は長楕円形、断面はV字形。底部が確認面のプランに比べ北西側にずれている。覆土は土層1がV層起源の黒色土、土層2がVI層の崩落土、土層3がVII層の崩落土、土層4・7・9・11が腐植土、土層5がVI層+VII層の崩落土、土層6が根による攪乱、土層8・10・12がVIII層の崩落土。(福井)

TP-45 (図V-10/別表VI-6・20)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上に立地し、等高線に直交するように構築される。VI層を除去後、VII層相当上面で黒色土のまとまりが見られたが、B調査試掘坑、風倒木痕が周囲に見られたことからトレンチを入れ確認した。平面形は長楕円形、断面はY字形。覆土は、土層1がV層起源の黒色土、土層2はVI層+V層の崩落土、土層3はVI層+VII層の崩落土、土層4は腐植土+VIII層の崩落土、土層5はVIII層の崩落土、土層6・8は腐植土、土層7はVIII層+ローム層の崩落土。(福井)

TP-46 (図V-10/別表VI-6・20/図版28-4・5)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上に立地し、等高線に平行するように構築される。V層を除去後、VI層上面で長楕円形の黒色土のまとまりとして確認した。平面形は長楕円形、断面はU字形。覆土は、土層1はV層起源の黒色土、土層2はVI層の崩落土、土層3はVI層+VII層の崩落土、土層4はVII層+VIII層の崩落土、土層5・7は腐植土、土層6・8はVIII層+X層の崩落土。(福井)

TP-47 (図V-11/別表VI-6・20/図版28-6・7)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上に立地し、等高線に直交するように構築される。VI層を除去後、VIII層上面で黒色土の楕円形のまとまりとして確認した。平面形は長楕円形、断面はY字形。覆土は、いずれも腐植土を含むVIII層の崩落土。(福井)

TP-48 (図V-11/別表VI-6・20/図版28-8・9)

特徴：沢地形が緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端のほぼ平坦な面に立地し、等高線に直交するように構築されている。R78グリッドのVI層上位から楕円形の黒色土のまとまりを確認した。

平面形は長楕円形で、坑底は溝状を呈する小型のものである。縦断面の両端は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり、坑口付近で外傾する。

覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位は腐植土の混じる崩落土で構成されている。上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

TP-49 (図V-11 / 別表VI-6・20 / 図版29-1・2)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端の緩斜面上に立地し、等高線に直交するように構築される。VI層を除去後、VII層上面で楕円形の黒色土のまとまりとして確認した。平面形は楕円形、断面はV字形。覆土は、土層1がV層起源の黒色土、土層2がVI層の崩落土、土層3・4がVII層の崩落土、土層5がVIII層の崩落土、土層6がVII層+VIII層の崩落土、土層7・9が腐植土、土層8がIX層の崩落土。(福井)

TP-50 (図V-12 / 別表VI-6・20 / 図版29-3~6)

特徴：調査区南端の尾根上に立地し、等高線とほぼ平行するように構築されている。

VI層調査後のT95グリッドにおいて、V層腐植土の混じる大型の風倒木痕を確認した。

遺構と重複している可能性があったため、南北方向にトレンチを入れ調査した。その結果、風倒木痕によって上部が一部壊されていたが、明らかな黒色土のまとまりが見られたためにTピットであると判断した。平面形は楕円形で、坑底は長楕円形を呈し底面が幅広である。底面の長軸方向に沿って10本の杭跡も確認した。いずれもクッタラ起源の軽石層に達している。縦断面の両端は坑底から緩やかに立ち上がる。横断面の壁面は、坑底からU字型に立ち上がり、坑口付近で外傾する。VIII層を掘り込んで構築されているので崩れ易く、結果的に断面の形状が丸みを帯び、坑口が広がったものと考えられる。覆土は坑底に褐灰色の腐植土が堆積し中位はVIII層の崩落土で構成されている。上位は落ち込みに堆積した腐植土が主体である。(笠原)

TP-51 (図V-12 / 別表VI-6・20)

特徴：尾根上の地形が南から北へ緩やかに傾斜しながら低地部に至る、丘陵末端のほぼ平坦な面に立地し、等高線とは平行するように構築されている。

TP-45の西側で風倒木痕を確認した。遺構との重複が考えられたため、東西方向にトレンチを入れ調査した。その結果、南側の土層断面で、U字状の黒色土のまとまりを確認したためTピットとして調査した。北側は風倒木痕によって壊されており、残っていない。覆土は坑底に褐灰色の砂質土が堆積し、中位はVIII層と腐植土の混入土、上位は落ち込みに堆積した腐植土が主体である。(笠原)

TP-53 (図V-12 / 別表VI-6・8・20 / 図版29-7・8)

特徴：尾根状の緩やかな斜面上に立地し、等高線とは平行するように構築されている。

S97グリッドのVIII層上面で風倒木痕を確認した。遺構との重複が考えられた為、トレンチを入れ調査した。その結果、幅広の溝状のまとまりが確認できた。平面形は長楕円形で、坑底は溝状を呈する。底面の西端から杭跡を1ヶ所検出した。杭穴の深さは約8cmでクッタラ起源の軽石層に達している。

縦断面の両端は坑底からオーバーハングしながら立ち上がる。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり中段からY字状に広がる。覆土は坑底に黒色の腐植土が堆積し、中位はVIII層を主体とした崩落土で構成されている。上位は落ち込みに堆積したV層が主体である。(笠原)

遺物

石器：礫4点はIXb層に含まれる凝灰岩。(福井)

TP-54 (図V-13/別表VI-6・20/図版29-9,30-1)

特徴: イモッペ川旧河道の西側低地部に立地する。等高線とはほぼ直交するように構築されている。低地部のVI層調査中に黒色土のまとまりを確認した。やや小型で平面形は楕円形を呈し、坑底が溝状である。縦断面の両端は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、中段から外傾する。横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がりY字状に広がる。覆土は坑底に黒色腐植土が堆積し、中位は崩落土に褐鉄鋼が混じる。上位は落ち込みに堆積した腐植土が主体である。(笠原)

TP-55 (図V-13/別表VI-6・8・20/図版30-2・3)

特徴: 調査区の南端、尾根状の緩やかな斜面上に立地する。等高線とは直交するように構築されている。VI層調査後のVIII層上面で黒色土のまとまりを確認した。平面形は楕円形を呈し、坑底が溝状である。縦断面の両端は坑底からの立ち上がりやや円くオーバーハングし、西側が外傾する。横断面の壁面は、坑底から緩やかに立ち上がり坑口付近で大きく広がる。覆土は坑底に黒色腐植土が堆積し、中位はVIII層主体の崩落土で構成される。上位は落ち込みに堆積した腐植土が主体である。(笠原)

遺物

土器: 1はI群b-4類土器の胴部片である。自縄自巻RLとLRの原体による羽状縄文が施されている。内外面の色調はにぶい黄褐色である。内面は横方向にナデ調整される。胎土は砂礫を多量に含む。包含層出土の図V-3-9-78は同一個体である。東釧路IV式に相当する。(芝田)

石器: フレイク3点(内2点チップ)が覆土から出土している。石材は黒曜石。(福井)

TP-56 (図V-13/別表VI-6・20/図版30-4・5)

特徴: イモッペ川旧河道の西側低地部に位置し、TP-54の西隣に立地する。等高線とはほぼ直交するように構築されている。VI層調査中に黒色土のまとまりを確認した。平面形は楕円形を呈し、坑底が細長い溝状である。縦断面の両端は緩やかにオーバーハングし、横断面の壁面は、坑底からほぼ垂直に立ち上がり中段付近でY字状に広がる。覆土は坑底に黒色腐植土が堆積し、中位は褐色土にVIII層が混じる崩落土で構成される。上位は落ち込みに堆積した腐植土が主体である。(笠原)

(3) 焼土

F-45~52 (図V-14・15/別表VI-6・8)

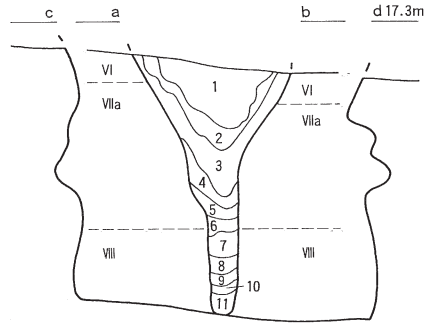
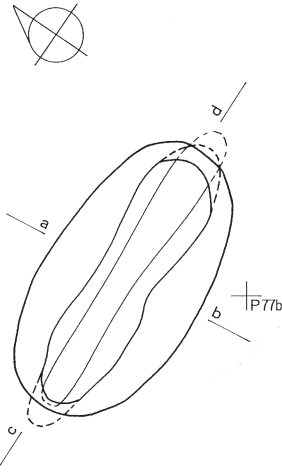
特徴: 8か所検出した。F-45~49、F-51・52は調査区北側の尾根上の平坦部にほぼ集中している。F-50は沢地形が緩やかに傾斜しながら低地部に至る丘陵末端のほぼ平坦な面にある。これら焼土群はすべて同一面から検出されており、同時期に形成されたものと推測される。規模は小型のものが多く、F-47・50・51は他のものよりやや広範囲に渡って焼けており、長径が約60cm~80cmを計る。焼成の程度には多少の違いがあるものの、使用目的などを示唆させるようなものはない。

遺物

石器: フレイクがF-46から2点(内1点チップ)、F-47から4点(内2点チップ)、F-50から2点(すべてチップ)出土している。石材はいずれも黒曜石。(福井)

時期: 検出層位や焼土層直上から出土した遺物、また周囲の包含層出土の遺物などからいずれも縄文時代早期後半頃に形成されたものと考えられる。(笠原)

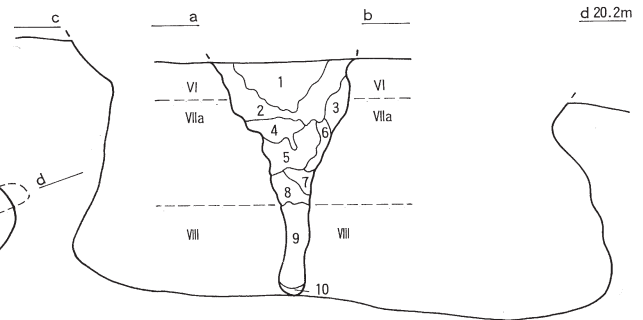
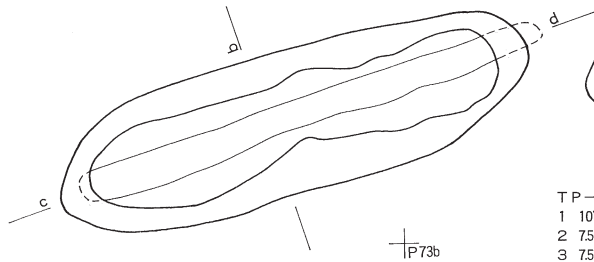
TP-26



TP-26

1	N2/	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層腐植土主体
2	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VI主体
3	7.5YR4/3	褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体
4	5YR4/8	赤褐色	軽石	粘着性なし	堅密度堅	VII層主体
5	7.5YR4/2	灰褐色	壤土	粘着性弱	堅密度しやう	VII+V主体
6	10YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しやう	V+VI主体
7	5YR4/6	赤褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しやう	VII層主体
8	5YR3/1	黒褐色	壤土	粘着性弱	堅密度しやう	V+VII主体
9	7.5YR2/1	黒色	埴土	粘着性なし	堅密度軟	V主体
10	7.5YR6/6	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度しやう	VII層主体
11	7.5YR2/1	黒色	埴土	粘着性中	堅密度軟	V主体

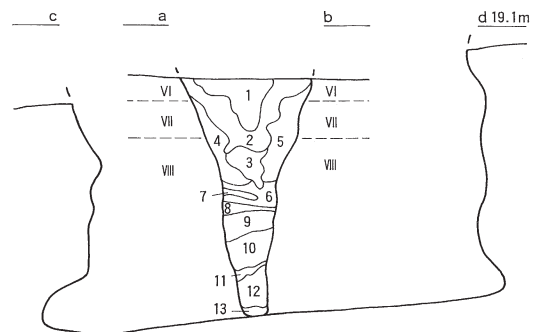
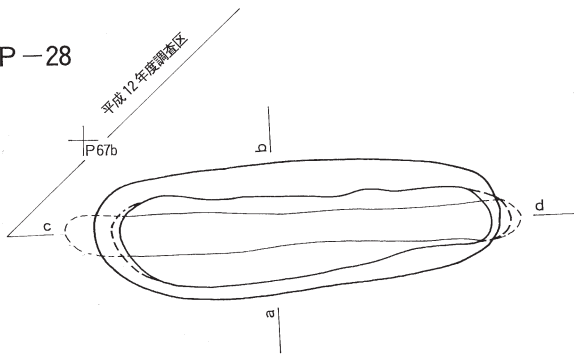
TP-27



TP-27

1	10YR1.7/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	7.5YR4/3	褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層
3	7.5YR6/6	橙色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体
4	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VI層
5	7.5YR6/8	橙色	壤土	粘着性弱	堅密度堅	VI+VII層
6	7.5YR5/6	明褐色	壤土	粘着性弱	堅密度堅	VI層主体
7	7.5YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
8	7.5YR5/4	にぶい褐色	壤土	粘着性弱	堅密度堅	VI+VII層
9	7.5YR4/4	褐色土	壤土	粘着性弱	堅密度しやう	VII層主体
10	10YR1.7/1	黒色土	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体

TP-28



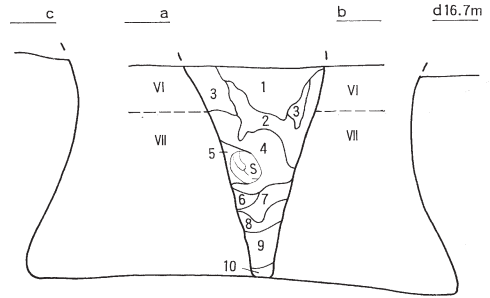
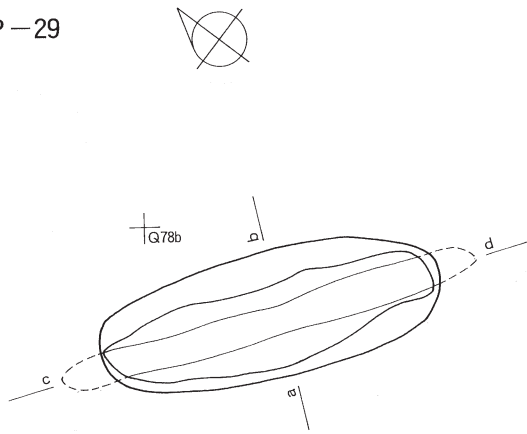
TP-28

1	7.5YR1.7/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
3	7.5YR5/6	明褐色	壤土	粘着性弱	堅密度堅	VI+VII層
4	5YR5/8	明赤褐色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
5	7.5YR6/6	橙色	軽石	粘着性中	堅密度軟	VII層主体
6	7.5YR1.7/1	黒色	砂壤土	粘着性中	堅密度軟	V層主体
7	7.5YR6/6	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VII層主体
8	7.5YR6/6	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VII層主体
9	7.5YR5/2	灰褐色	壤土	粘着性中	堅密度軟	V+VIII層
10	5YR6/8	橙色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VII+V層
11	7.5YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
12	5YR6/8	橙色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
13	7.5YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体



図V-2 TP-26~28

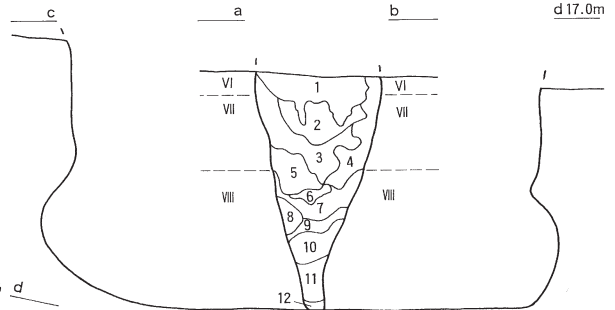
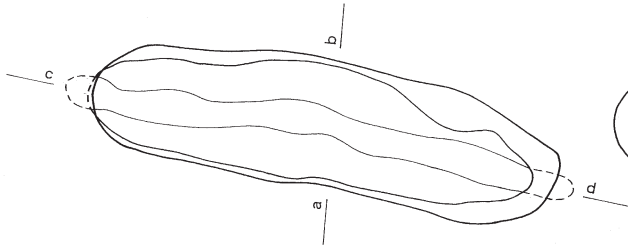
TP-29



TP-29

1	7.5YR2/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しろう	V層主体
2	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体
3	7.5YR4/3	褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体
4	7.5YR5/4	にぶい褐色	砂壤土	粘着性中	堅密度軟	VII層主体
5	7.5YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しろう	赤色チャートの犬円礫
6	7.5YR4/2	灰褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII+V層
7	7.5YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII+V層
8	N1.5/	黒色		粘着性なし	堅密度固結	硬化する
9	10R4/6	赤色		粘着性なし	堅密度すこぶる堅	褐鉄鉱
10	7.5YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体

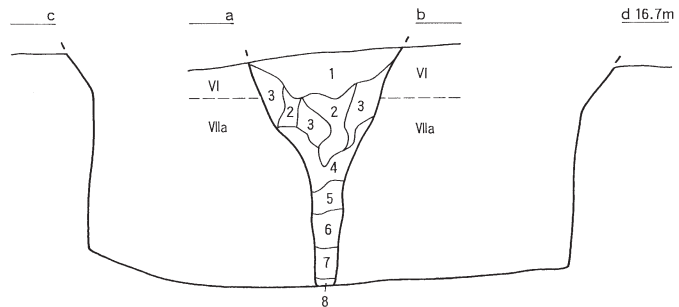
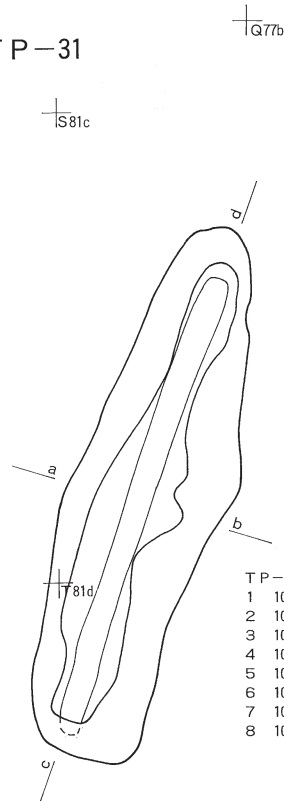
TP-30



TP-30

1	7.5YR1.7/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	7.5YR5/6	明褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+VII層
3	7.5YR2/2	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VI層
4	7.5YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性中	堅密度軟	V+VI層
5	7.5YR4/4	褐色	砂壤土	粘着性中	堅密度軟	VI+V層
6	10YR2/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
7	10YR4/6	褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+VII層
8	5YR4/8	赤褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しろう	VII層主体
9	N1.5/	黒色		粘着性なし	堅密度固結	
10	10R3/6	暗赤色		粘着性なし	堅密度すこぶる堅	褐鉄鉱
11	2.5YR4/8	赤褐色		粘着性なし	堅密度すこぶる堅	褐鉄鉱
12	7.5YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体

TP-31



TP-31

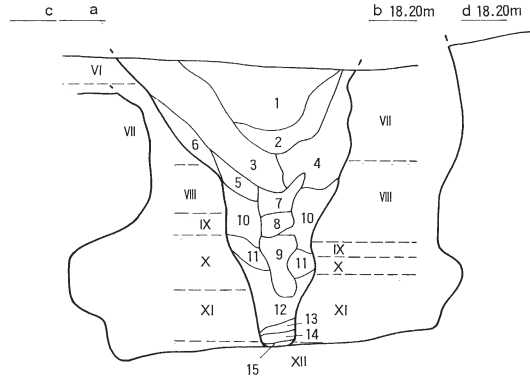
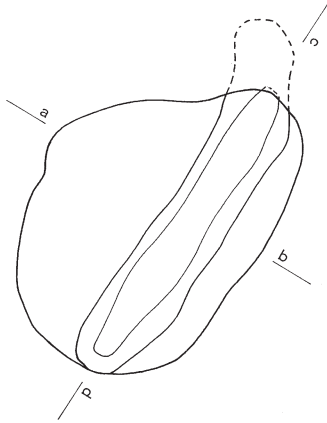
1	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性中	堅密度軟	V層腐植土主体	落ち込みの自然堆積
2	10YR3/2	黒褐色	壤土	粘着性中	堅密度軟	V+VI	黒色土とロームが斑状に混ざる
3	10YR3/3 暗褐色~10YR4/4 褐色	壤土	粘着性強	堅密度軟	VI層土主体	汚れたローム	
4	10YR5/6	黄褐色	軽壤土	粘着性強	堅密度軟	VII層土主体	混じりの少ないローム やわらかい
5	10YR5/6 黄褐色~10YR2/3 黒褐色	壤土	粘着性強	堅密度軟	VII>腐植土	ふかふかしている	
6	10YR6/6	明黄褐色	壤土	粘着性中	堅密度しろう	VII層ローム	に直径1~5mm大の明黄褐色バミスが多量に混ざる もろい
7	10YR2/2 黒褐色~10YR5/8 黄褐色	壤土	粘着性中	堅密度しろう	VI層と同じだが、腐植土がブロック状に混在する	もろい	
8	10YR2/1	黒色	埴壤土	粘着性強	堅密度しろう	腐植土主体	直径1~10mm大の黄褐色バミスが少量混ざる ねっとりした感触

0 1m

図V-3 TP-29~31

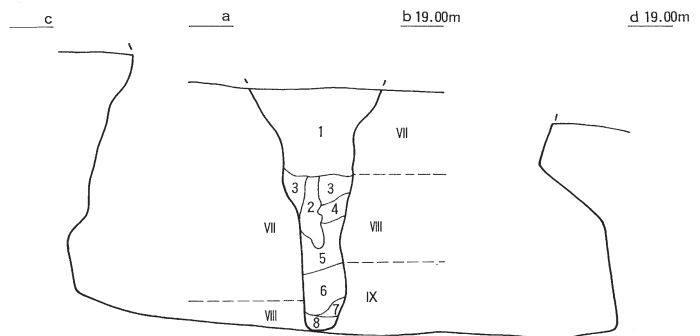
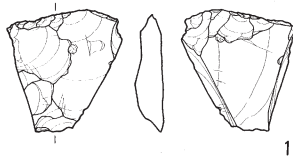
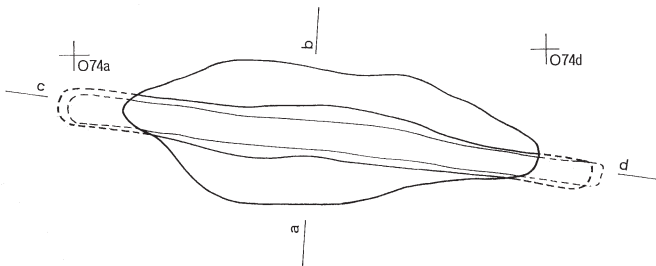
TP-32

1075d

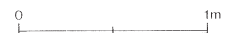


- TP-32
- 1 堅密度軟～堅 V>>VII
 - 2 堅密度軟～堅 VII主体
 - 3 堅密度軟～堅 VI>>VII
 - 4 10YR5/2 灰黄褐色 堅密度堅
 - 5 堅密度軟 VII主体
 - 6 堅密度堅 VI～VII主体
 - 7 堅密度軟 VI～VII主体
 - 8 堅密度軟～堅 V>>VI～VII、VIII
 - 9 堅密度軟 VI～VII+VIII
 - 10 堅密度軟 VIII主体
 - 11 堅密度堅 IX主体
 - 12 堅密度軟 XとXIの互層
 - 13 堅密度軟 V主体 炭化材混じる
 - 14 堅密度軟 XI主体
 - 15 堅密度軟 V主体

TP-33

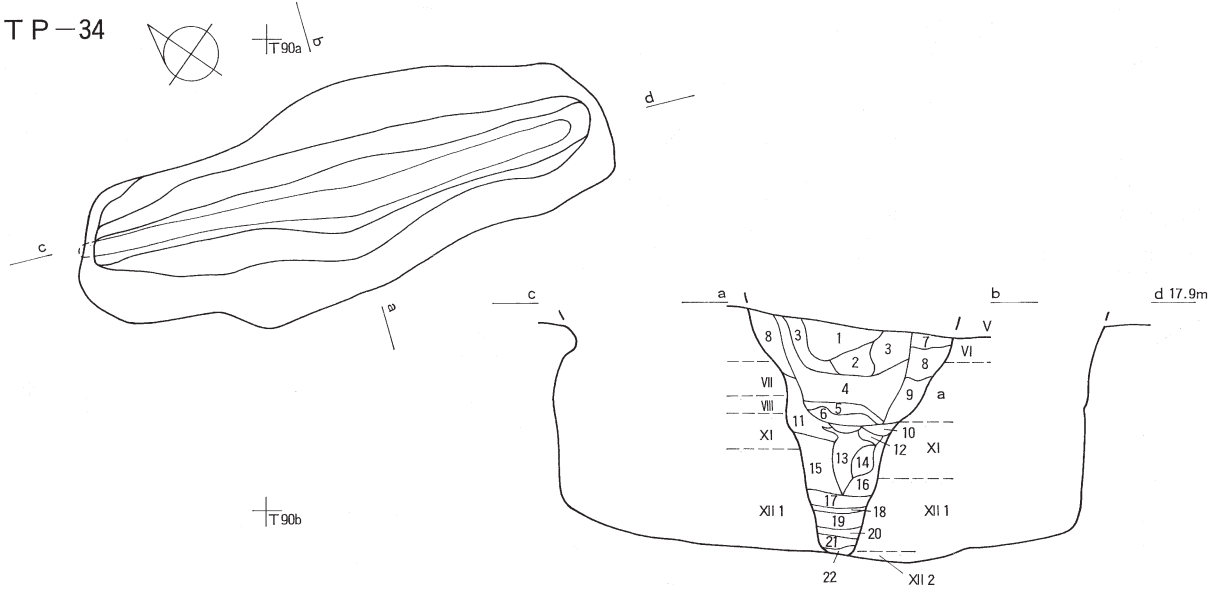


- TP-33
- 1 堅密度堅 V主体
 - 2 10YR4/1 灰褐色土 堅密度堅
 - 3 堅密度堅 (図右側は軟) VII>>V
 - 4 堅密度軟 VII>>V+VII
 - 5 堅密度堅 VII>>VIII
 - 6 堅密度軟 V>>VIII
 - 7 堅密度軟 IX主体
 - 8 堅密度軟 V+VIII



図V-4 TP-32・33

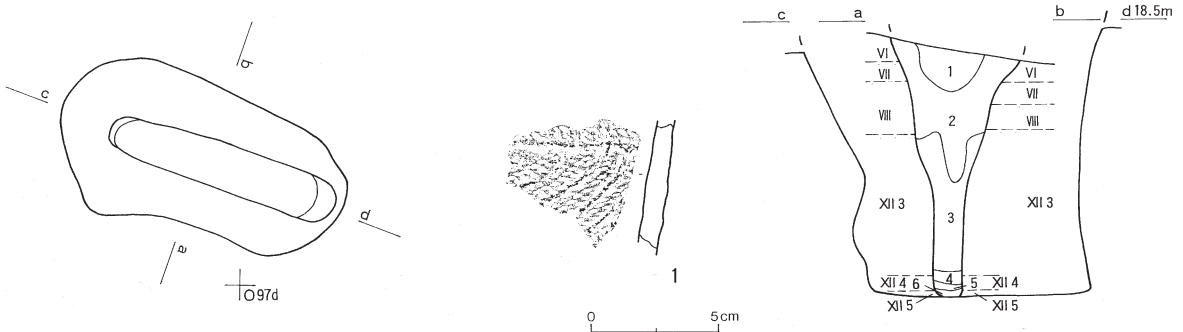
TP-34



TP-34

1	10YR2/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度し	よう	バミス極小〜小7%含む	腐植土
2	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小5%含む	腐植土
3	10YR3/1	黒褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小7%含む	腐植土
4	10YR3/2	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小10%含む	漸移的な腐植土層
5	10YR6/4	にぶい黄褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟		ロームブロック50%含む	VI層の崩落土か
6	10YR3/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度し	よう	バミス極小〜小3%含む	腐植土層
7	10YR4/1	褐灰色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小5%含む	
8	10YR5/4	にぶい黄褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス中5%含む	VI層の崩落土
9	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス中10%含む	a層の崩落土
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅		バミス小7%含む	a層の崩落土
11	10YR6/6	明黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜中50%以上含む	VII層を主とする崩落土
12	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小50%以上含む	VII層を主とする崩落土
13	10YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		部分的にバミス中含む	根痕か
14	10YR5/6	黄褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜中50%以上含む	VII層を主とする崩落土
15	10YR5/6	黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜中50%以上含む	クロボクブロック10% VII層を主とする崩落土
16	10YR6/6	明黄褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜中50%以上含む	VII層を主とする崩落土
17	10YR5/6	黄褐色	砂土	粘着性弱	堅密度軟		砂粒、バミス極小〜小50%含む	VII層+a層の崩落土
18	10YR3/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小50%含む	腐植土層 VII層由来
19	10YR5/8	黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		バミス極小〜小50%含む	VII層を主とする崩落土
20	10YR3/1	黒褐色	壤土	粘着性弱	堅密度堅		バミス極小〜小50%含む	腐植土層 VII層由来
21	10YR5/8	黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度堅		バミス極小〜小50%以上含む	VII層を主とする崩落土
22	5GY3/1	暗オリーブ灰色	砂土	粘着性弱	堅密度堅		砂粒、バミス極小〜小50%以上含む	a層の崩落土
a	10YR5/4	にぶい黄褐色	壤土	粘着性弱	堅密度堅		バミス極小〜中7%含む	(VII層相当)
XI 1	10YR5/6	黄褐色	埴土	粘着性弱	堅密度すこぶる堅		部分的に5GY3/1暗オリーブ灰、砂土、粘着性弱、堅密度 堅の砂質土混	
XI 2	10YR5/6	黄褐色	壤土	粘着性なし	堅密度堅		バミス極小〜中50%	

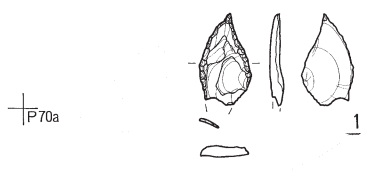
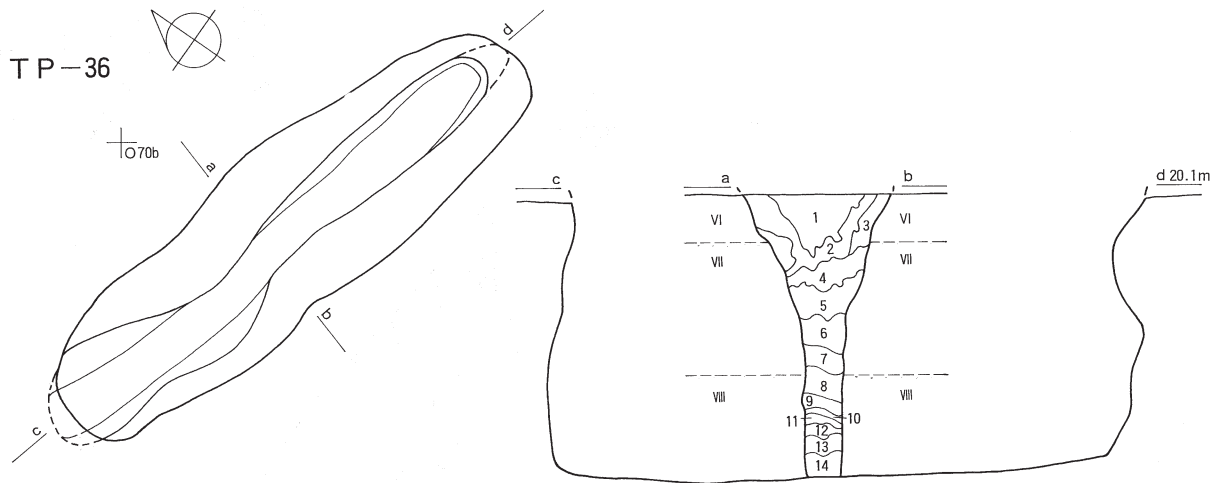
TP-35



TP-35

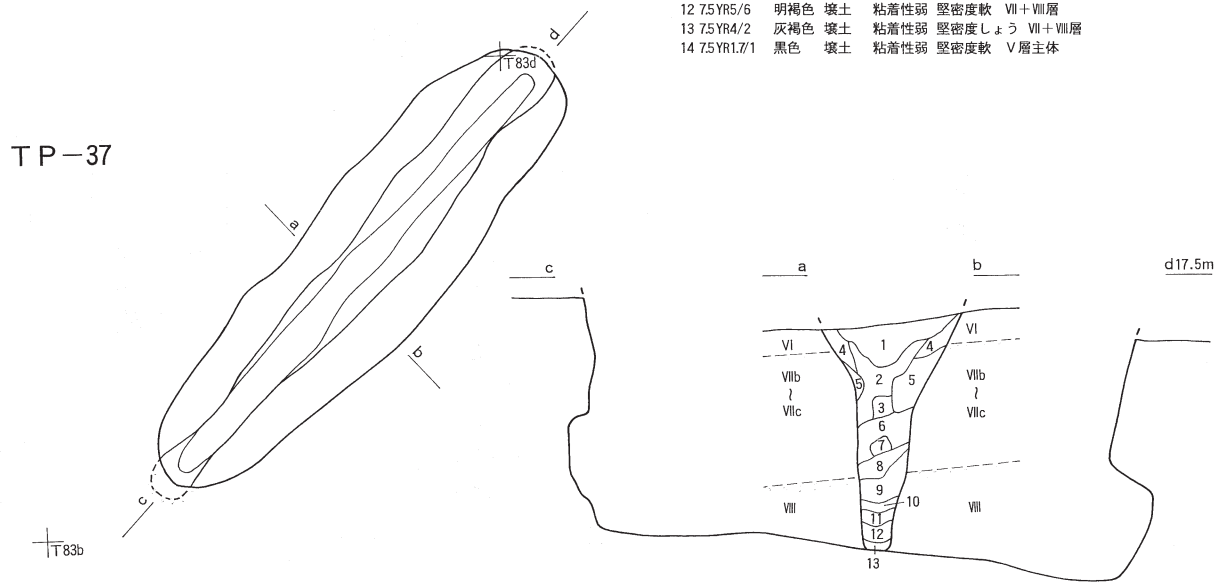
1	10YR2/1	黒色	埴土	粘着性中	堅密度堅		極小バミス2%含む	V層起源
2	10YR3/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度し	よう	極小・小バミス3%含む	
3	10YR6/6	明黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟		極小〜中バミス50%以上、クロボクブロック5%含む	主にVIIIの崩落土
4	10YR3/2	黒褐色	埴土	粘着性中	堅密度軟		炭代材わずかに混 極小・小バミス含む	腐植土
5	10YR5/6	黄褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟		極小バミス50%以上含む	VII層ないしIX層の崩落土
6	10YR4/4	褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度し	よう	直径1cm弱のレキ多含	XI 5層+腐植土
XI 3			水成堆積物				ロームと青灰を砂層の細かな互層	
XI 4	10YR5/6	黄褐色	壤土	粘着性弱			直径3mmの小レキ、軽石含む	
XI 5	7.5YR4/4	褐色	砂土	粘着性なし	堅密度し	よう	直径1cm弱小レキ多含	

図V-5 TP-34・35



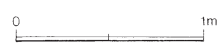
TP-36

1	75YR2/1	黑色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	フレイク1点
2	75YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層	礫片1点
3	75YR4/6	褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体	フレイク1点
4	75YR5/2	灰褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層	石鏡1点
5	75YR6/6	橙色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII+VI層	
6	75YR4/4	褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体	
7	75YR4/3	褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体	
8	75YR4/6	褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度し	よう VII層主体	
9	75YR3/4	暗褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度し	よう VII+V層	
10	75YR3/2	黒褐色	壤土	粘着性弱	堅密度し	よう VII+V層	
11	75YR4/6	褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII+VIII層	
12	75YR5/6	明褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII+VIII層	
13	75YR4/2	灰褐色	壤土	粘着性弱	堅密度し	よう VII+VIII層	
14	75YR1.7/1	黑色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	



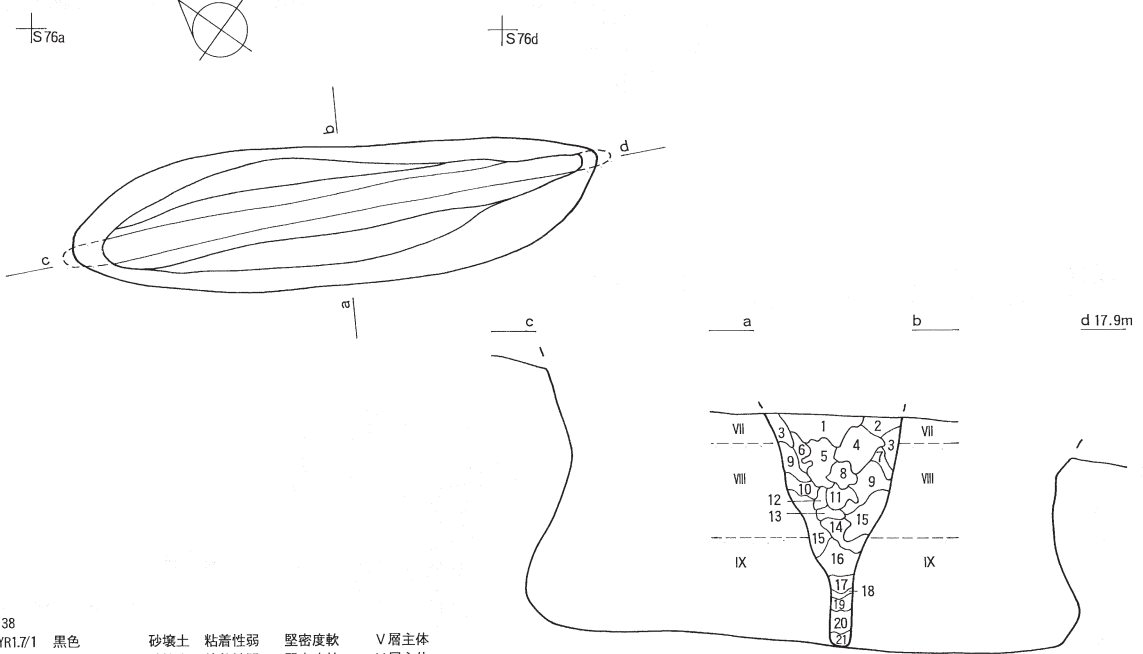
TP-37

1	10YR1.7/1	黑色	軽埴土	粘着性中	堅密度軟	V層腐植土主体	直径1~10mm大の黄褐色バミスが少量混入する
2	10YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性强	堅密度軟	V+VI	1層と同じバミスが多量混入する
3	10YR2/1	黑色	軽埴土	粘着性强	堅密度軟	腐植土主体	ふかふかしている
4	10YR3/4	暗褐色	重埴土	粘着性强	堅密度堅	VI層土主体	
5	10YR5/8	黄褐色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VIII層未風化バミス主体	もろい
6	10YR3/2	黒褐色	壤土	粘着性中	堅密度軟	黒色土とロームの混合	ふかふかしている
7	10YR2/1	黑色	軽埴土	粘着性强	堅密度し	よう 腐植土主体	やわらかい
8	10YR4/3	にぶい黄褐色	軽埴土	粘着性强	堅密度し	よう 腐植土にロームが少量混入する	やわらかい
9	10YR5/6	黄褐色	軽石	粘着性なし	堅密度し	よう VIII層未風化バミス主体	もろい
10	10YR2/3	黒褐色	壤土	粘着性中	堅密度軟	腐植土にバミスが多量混入する	
11	10YR6/8	明黄褐色	軽石	粘着性なし	堅密度し	よう VIII層未風化バミス主体	もろい 腐植土が少量混入する
12	25Y5/4	黄褐色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VIII層未風化バミス主体	
13	75YR1.7/1	黑色	重埴土	粘着性强	堅密度し	よう 腐植土主体	ねっとりしている



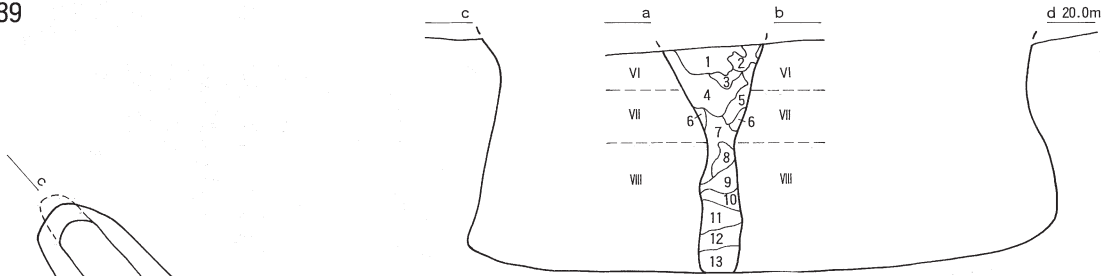
図V-6 TP-36・37

TP-38



TP-38						
1	10YR1.7/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	10YR2/2	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
3	10YR4/6	褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
4	10YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
5	10YR3/2	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
7	10YR4/2	灰黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
8	10YR3/3	暗褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
9	5YR5/8	明赤褐色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VII層主体
10	10YR4/2	灰黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度堅	IX+VIII層
11	2.5Y2/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
12	10YR4/4	褐色	砂壤土	粘着性なし	堅密度軟	VIII層主体
13	10YR2/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
14	10YR3/2	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
15	2.5Y4/2	暗灰黄	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VIII層主体
16	10YR4/3	にぶい黄褐色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VIII層主体
17	10YR4/4	褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しよう	VIII+IX層
18	10YR3/1	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
19	10YR4/2	灰黄褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	IX+VIII層
20	10YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しよう	V+VIII層
21	10YR2/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しよう	V+VIII層

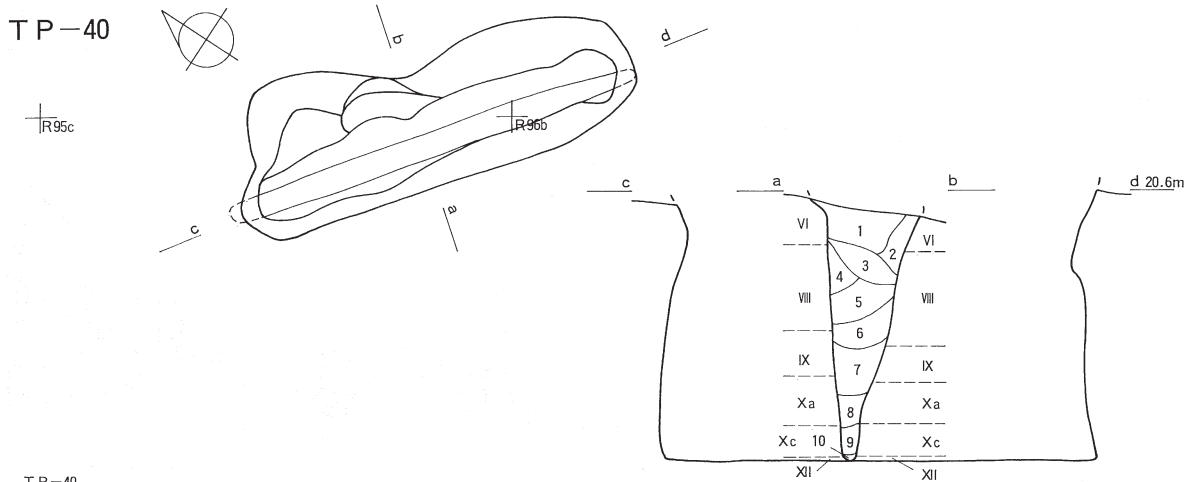
TP-39



TP-39						
1	7.5YR2/1	黒色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	7.5YR4/3	褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VI層
3	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度堅	V+VI層
4	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VI層
5	7.5YR3/2	灰褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+VII層
6	7.5YR6/6	橙色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体
7	7.5YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層
8	7.5YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+VIII層
9	10YR3/1	黒褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しよう	VI+VIII層
10	10YR2/2	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
11	7.5YR2/2	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VIII層
12	7.5YR2/2	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しよう	V+VIII層
13	7.5YR2/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VIII層



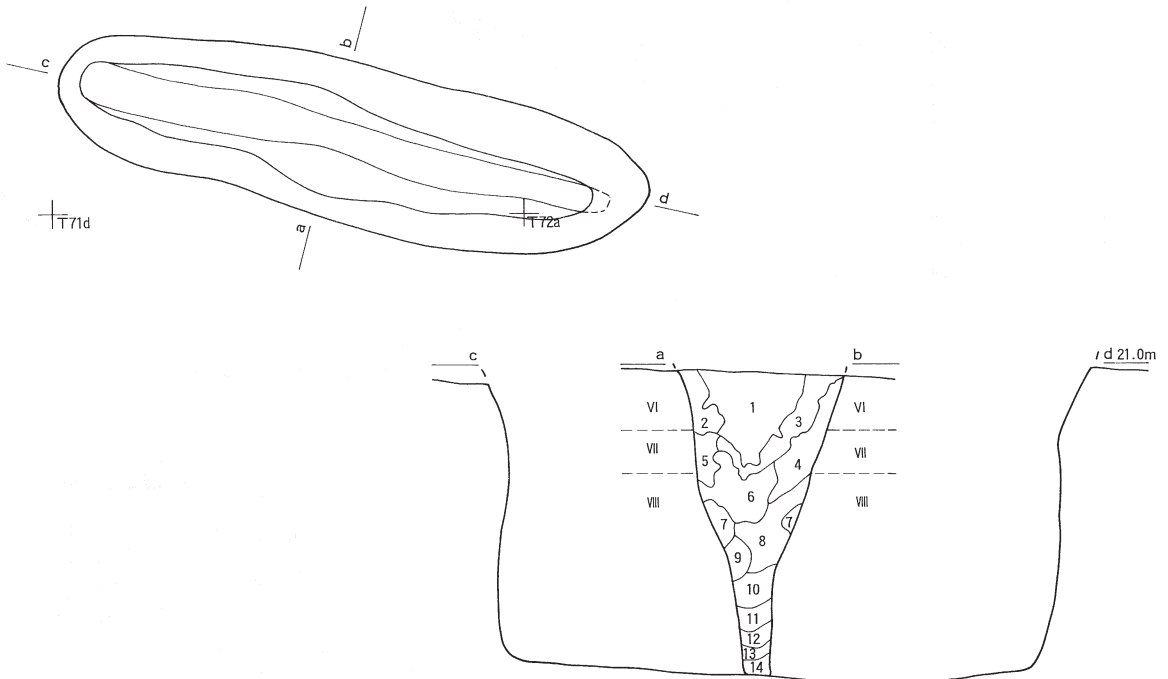
図V-7 TP-38・39



TP-40

1	10YR2/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度すこぶる堅	バミス極小〜小 20%含む	V層起源
2	10YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	バミス極小〜小 15%含む	V層+VI層の崩落土
3	10YR3/3	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	ボソボソ バミス極小〜小 10%	V層+VIII層の崩落土
4	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中 部分的に濃集	VI層+VIII層の崩落土
5	7.5YR4/2	灰褐色	埴壤土	粘着性中	堅密度堅	水分多含 バミス極小〜小 50%	V層+VIII層の崩落土
6	7.5YR3/2	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	水分多含 バミス極小〜中 50%	V層+VIII層の崩落土
7	10YR5/8	黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス小〜中	VIII層の崩落土
8	2.5Y7/4	浅黄色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス小	Xaの崩落土
9	10YR6/8	明黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス小〜中	VIIIないしXbの崩落土
10	2.5Y7/6	明黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス小	Xaの崩落土

TP-41



TP-41

1	7.5YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	フレイク5点
2	7.5YR4/1	褐灰色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層	
3	7.5YR4/2	灰褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層	
4	7.5YR6/6	橙色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+V層	
5	7.5YR5/4	にぶい褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	VII層主体	
6	7.5YR4/3	褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	VII+VIII層	
7	2.5YR4/8	赤褐色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VII層	
8	7.5YR5/3	にぶい褐色	埴壤土	粘着性中	堅密度堅	小礫混じる	
9	5YR4/1	褐灰色	埴壤土	粘着性中	堅密度軟	VII+VIII層	
10	2.5YR4/3	にぶい赤褐色	埴壤土	粘着性中	堅密度軟	VII層主体	
11	5YR4/3	にぶい赤褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VII層主体	
12	5YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V+VIII層	
13	5YR3/2	暗赤褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VIII+V層	
14	5YR2/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	



図V-8 TP-40・41

TP-42·43

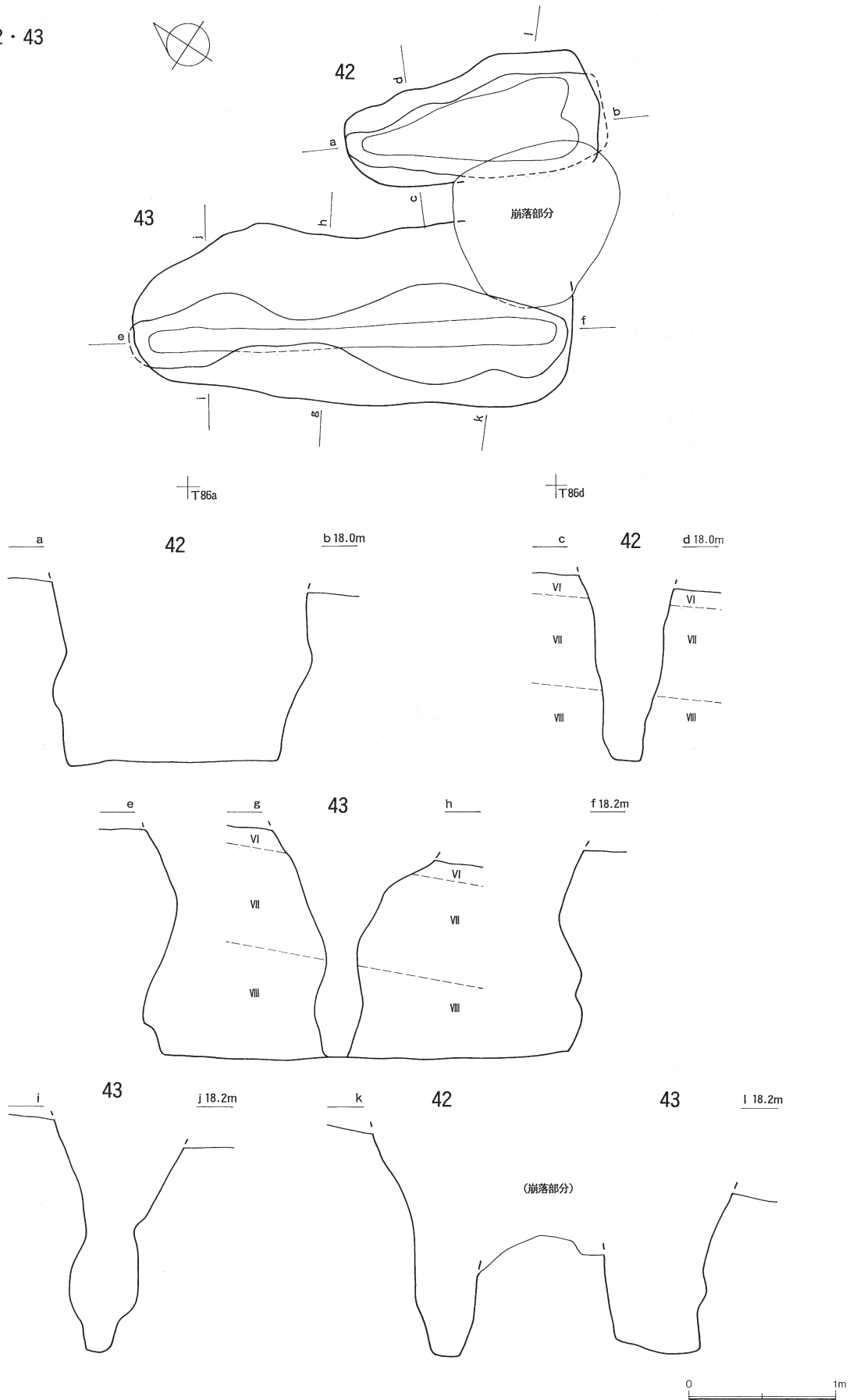
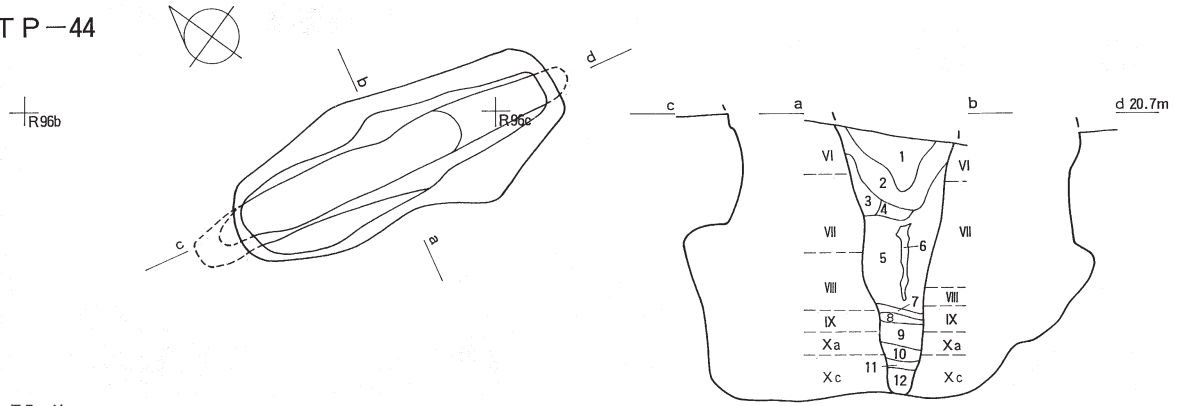


图 V-9 TP-42·43

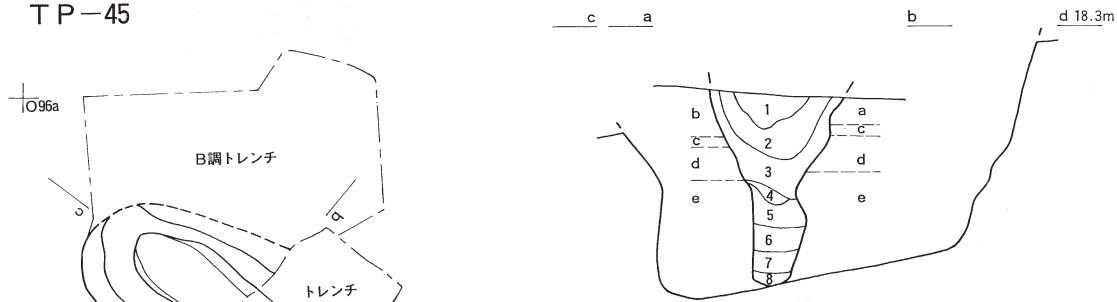
TP-44



TP-44

1	10YR1.7/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	バミス極小〜中3%含む	V層起源クロボク
2	25Y3/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜中5%含む	VI層の崩落土
3	25Y4/3	オリーブ褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜小3%含む	VII層の崩落土
4	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小含む	腐植土
5	10YR6/6	明黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜中多含	VI層+VII層の崩落土
6	10YR1.7/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度しろう	根痕か	
7	10YR2/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中含む	腐植土
8	10YR5/6	黄褐色	砂土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中多含	VIII層の崩落土
9	10YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中多含	水分多含 腐植土
10	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス極小〜中多含	VII層の崩落土
11	10YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度すこぶる堅	バミス極小〜中含む	水分多含 腐植土
12	10YR6/8	明黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス極小〜中含む	VII層の崩落土

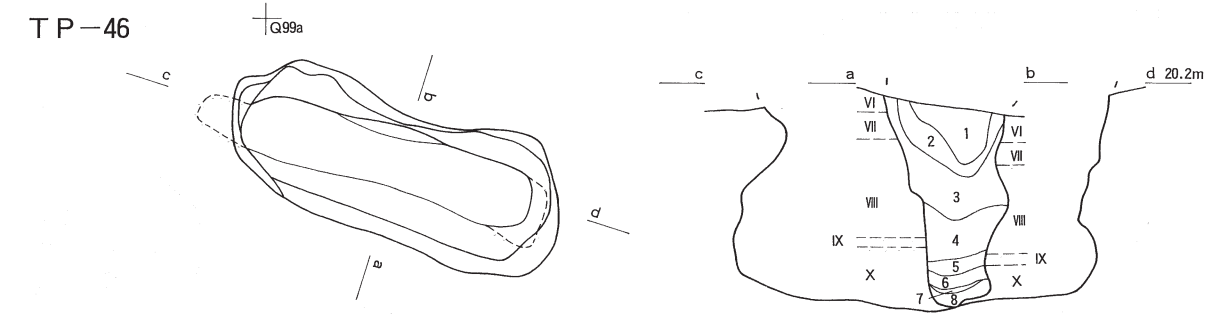
TP-45



TP-45

1	10YR1.7/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	バミス極小〜小2%含む	V層起源
2	10YR2/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	バミス極小〜小10%含む	VI層+V層の崩落土
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	バミス極小〜小50%含む	VI層+VII層の崩落土
4	10YR4/2	灰黄褐色	埴土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜小50%含む	腐植土+VIII層
5	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜中100%	VII層の崩落土
6	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜小3%含む	腐植土
7	10YR6/6	明黄褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中50%含む	VIII層+IX層の崩落土
8	10YR3/3	暗褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜小多含	腐植土
a	10YR6/8	明黄褐色	砂土	粘着性なし	バミス極小〜中100%	VIII層+IX層の再堆積層	
b	10YR6/6	明黄褐色	埴壤土	粘着性弱	ローム	IX層+VIII層の再堆積層	
c	25Y7/6	明黄褐色	砂土	粘着性なし	バミス極小〜小100%	軽石層	X層の再堆積層
d	10YR6/8	明黄褐色	砂土	粘着性なし	バミス極小〜中100%	軽石層	VIII層の再堆積層
e			砂層とロームの互層				

TP-46



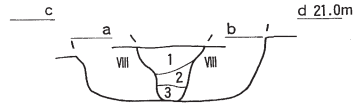
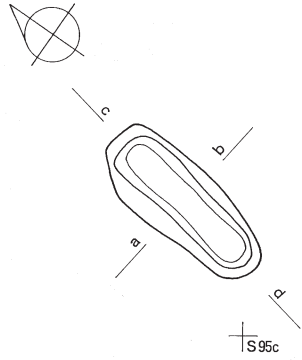
TP-46

1	10YR2/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中7%含む	V層起源
2	10YR3/2	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小〜中3%含む	VI層の崩落土
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	バミス極小〜中3%含む	VI層+VII層の崩落土
4	10YR7/8	黄褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜中90%含む	VII層+VIII層の崩落土 ほとんどバミス
5	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度しろう	バミス極小〜中多含	腐植土
6	10YR7/8	黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度軟	バミス極小〜中100%	VIII層+X層の崩落土
7	10YR1.7/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度すこぶる堅		腐植土
8	10YR7/4	にぶい黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度すこぶる堅	バミス極小〜中100%	VIII層+X層の崩落土



図V-10 TP-44~46

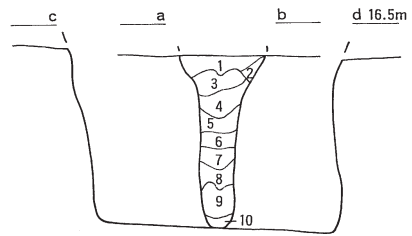
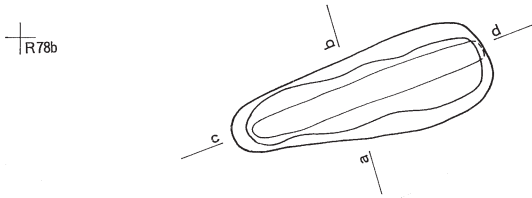
TP-47



TP-47

1	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	バミス極小~小10%含む	腐植土
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂土	粘着性なし	堅密度堅	バミス極小~中100%	やや腐植
3	10YR2/1	黒色	砂壤土	粘着性なし	堅密度堅	バミス極小~中多含	腐植土

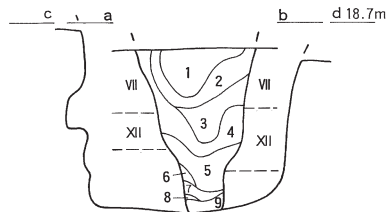
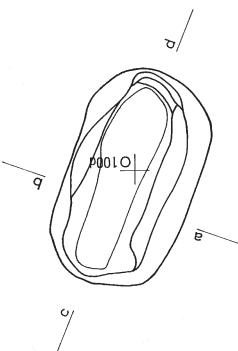
TP-48



TP-48

1	10YR1.7/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	5YR2/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度しろう	V層主体
3	5YR5/6	明赤褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体
4	5YR2/1	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
5	7.5YR3/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V+VI層
6	7.5YR2/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
7	7.5YR3/1	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
8	7.5YR4/2	灰褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
9	7.5YR2/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
10	7.5YR1.7/1	黒色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体

TP-49



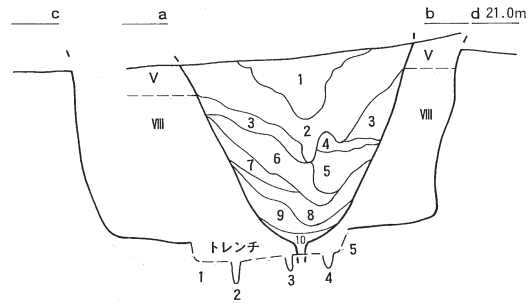
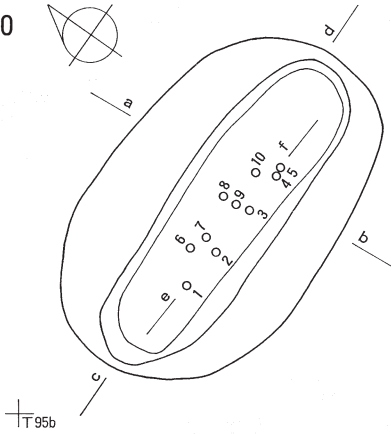
TP-49

1	10YR2/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	バミス・ローム粒極小~中10%	V層起源
2	10YR3/2	黒褐色	埴土	粘着性弱	堅密度堅	VII層の崩落土	
3	10YR5/4	にぶい黄褐色	埴土	粘着性弱	堅密度堅	VII層のブロック状の崩落土か	しまるがボソボソした状態
4	10YR5/6	黄褐色	埴土	粘着性弱	堅密度軟	VII層の崩落土	しまらずボソボソした状態
5	N3/0	暗灰色	砂壤土	粘着性中	堅密度すこぶる堅	砂層	バミス+砂粒 5mm大レキ15%含む VII層の崩落土
6	10YR6/6	明黄褐色	砂壤土	粘着性中	堅密度軟	バミス極小50%以上含む	VII層+VIII層の崩落土
7	10YR2/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土	XII層起源
8	10YR4/2	灰黄褐色	埴土	粘着性中	堅密度軟	XII層の崩落土	
9	10YR2/1	黒色	埴土	粘着性中	堅密度軟	腐植土	XII層起源



図V-11 TP-47~49

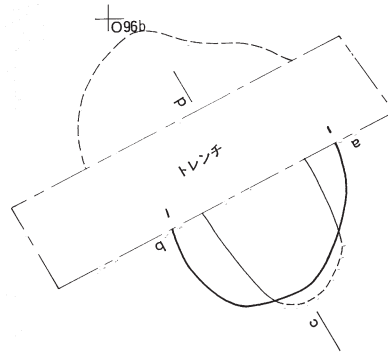
TP-50



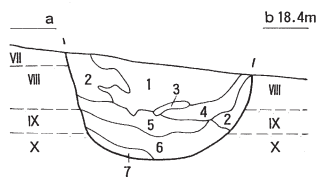
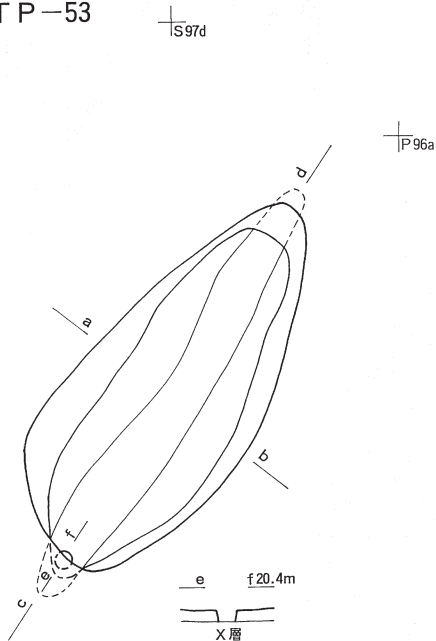
TP-50

1	75YR1.7/1	黒色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	5YR1.7/1	黒色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
3	75YR6/6	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度しろう	VIII層主体
4	75YR6/8	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度しろう	VIII層主体
5	75YR4/1	褐灰色	軽石	粘着性弱	堅密度しろう	VIII+腐植土
6	5YR3/2	暗赤褐色	砂壤土	粘着性弱	堅密度軟	VIII+腐植土
7	75YR6/6	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度しろう	VIII層主体
8	5YR3/1	黒褐色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	VIII+腐植土
9	75YR6/6	橙色	軽石	粘着性なし	堅密度しろう	VIII層主体
10	10YR4/1	褐灰色	砂壤土	粘着性弱	堅密度しろう	V+VIII層

TP-51



TP-53

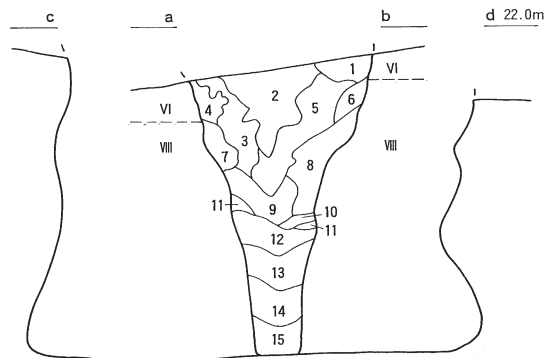


TP-51

1	10YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	75YR6/8	橙色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VIII層主体
3	75YR7/4	にぶい橙色	軽石	粘着性弱	堅密度しろう	VIII層主体
4	75YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性中	堅密度軟	V+VIII層
5	75YR5/6	明褐色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VIII+V層
6	10YR4/1	褐灰色	砂土	粘着性弱	堅密度堅	IX層+VIII層
7	25Y5/1	黄灰色	砂土	粘着性なし	堅密度しろう	IX層

TP-53

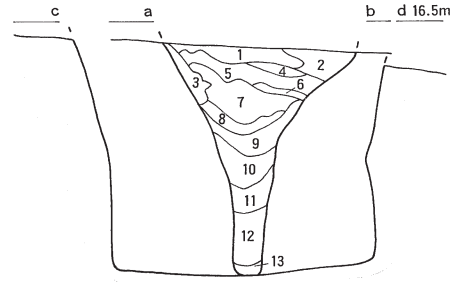
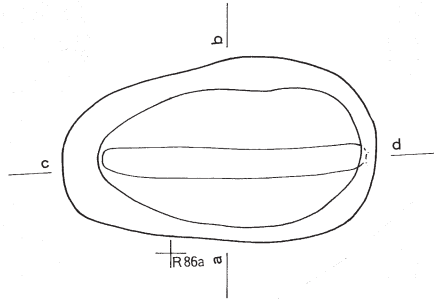
1	75YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	75YR2/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
3	75YR3/3	暗褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	V+VI層
4	75YR4/4	褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	VI+VIII層
5	75YR3/1	黒褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
6	75YR3/4	暗褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度堅	腐植土主体
7	5YR4/4	にぶい赤褐色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VIII+腐植土
8	5YR4/8	赤褐色	軽石	粘着性弱	堅密度軟	VIII+腐植土
9	5YR3/2	暗赤褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土+VIII層
10	5YR3/3	暗赤褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土+VIII層
11	5YR5/6	明赤褐色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VIII層主体
12	5YR4/2	灰褐色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土主体
13	25YR5/6	明赤褐色	軽石	粘着性なし	堅密度軟	VIII層主体
14	25YR3/1	暗赤灰色	壤土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土+VIII層、礫4点
15	5YR1.7/1	黒色	埴壤土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体



図V-12 TP-50・51・53

Q86d

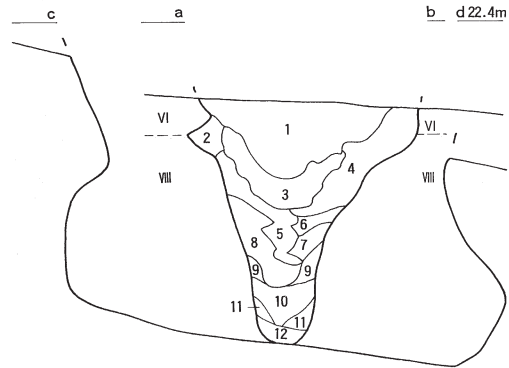
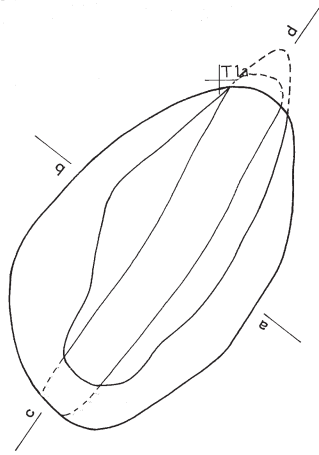
TP-54



TP-54

1	N2/	黑色	粘着性中	堅密度堅	V層主体	褐鉄鉱混じる
2	10YR1.7/1	黑色	粘着性中	堅密度軟	V層主体	褐鉄鉱混じる
3	7.5YR7/3	にぶい橙色	粘着性弱	堅密度軟	VI層主体	褐鉄鉱わずかに混じる
4	7.5R3/4		粘着性なし	堅密度堅	褐鉄鉱主体	
5	7.5YR1.7/1	黑色	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	褐鉄鉱微量混じる
6	7.5R3/4	暗赤色	粘着性なし	堅密度堅	褐鉄鉱	
7	10YR1.7/1	黑色	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	
8	10YR4/1	褐灰色	粘着性弱	堅密度軟	腐植土少量混じる	
9	10YR5/3	にぶい黄褐色	粘着性弱	堅密度軟	ローム主体	
10	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘着性弱	堅密度軟	ローム主体	
11	7.5YR6/4	にぶい橙色	粘着性弱	堅密度軟	ローム主体	
12	7.5YR6/3	にぶい橙色	粘着性弱	堅密度軟	ローム主体	
13	7.5YR1.7/1	黑色	粘着性弱	堅密度軟	V層主体	

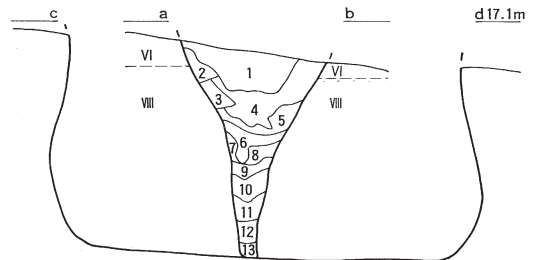
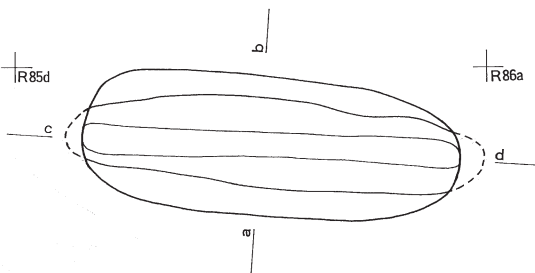
TP-55



TP-55

1	7.5YR1.7/1	黑色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	10YR3/2	黒褐色	壊土	粘着性弱	堅密度堅	VI+VIII層
3	7.5YR3/1	黒褐色	壊土	粘着性弱	堅密度堅	腐植土+VIII層
4	7.5YR4/1	褐灰色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土+VIII層
5	7.5YR4/4	褐色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	腐植土+VIII層
6	7.5YR5/8	明褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しよう	VIII層主体
7	7.5YR4/3	にぶい褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しよう	VIII層主体
8	7.5YR5/6	明褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しよう	VIII層主体
9	7.5YR5/8	明褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しよう	VIII層主体
10	10YR3/1	黒褐色	砂壊土	粘着性弱	堅密度軟	V+VIII層
11	7.5YR5/8	明褐色	軽石	粘着性なし	堅密度しよう	VIII層主体
12	7.5YR3/1	黒褐色	砂壊土	粘着性弱	堅密度軟	V+VIII層

TP-56



TP-56

1	7.5YR1.7/1	黑色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体
2	7.5YR6/6	橙色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	ローム主体
3	7.5YR2/1	黑色	堆壊土	粘着性弱	堅密度しよう	V層主体
4	7.5YR3/1	黒褐色	堆壊土	粘着性弱	堅密度堅	V層主体
5	7.5YR4/2	灰褐色	堆壊土	粘着性弱	堅密度堅	腐植土+VIII層
6	5YR1.7/1	黑色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	V層+VIII層
7	7.5YR5/3	にぶい褐色	粘着度弱	堅密度堅	VIII層主体	V層わずかに混
8	5YR4/1	褐灰色	粘着性弱	堅密度軟	V+VIII層	
9	7.5YR4/6	褐色	粘着性弱	堅密度軟	VIII層主体のV層ラミナ状に混	
10	5YR5/6	明赤褐色	粘着性弱	堅密度軟	VIII層主体	
11	7.5YR6/6	褐色	粘着性弱	堅密度軟	VIII層主体	
12	7.5YR5/4	にぶい褐色	粘着性弱	堅密度軟	VIII層主体	
13	7.5YR2/1	黑色	堆壊土	粘着性弱	堅密度軟	V層主体

0 1m

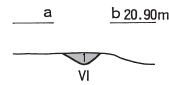
F-45

R70d



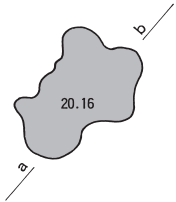
R71a

F-45



F-45
1 10R4/8 赤色 粘着性弱 堅密度軟 炭化物微量

F-47



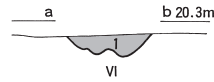
O70d

F-46



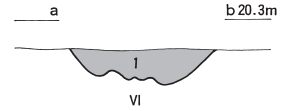
O71a

F-46



F-46
1 25YR5/8 明赤褐色 粘着性弱 堅密度軟 フレイク2点(被熱痕1)

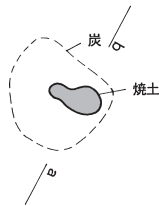
F-47



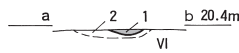
F-47
1 25YR4/8 赤褐色 粘着性弱 堅密度軟 フレイク4点

F-48

P71b



F-48



F-48
1 5YR5/6 明赤褐色 砂壤土 粘着性弱 堅密度堅 直径2mm炭化材2%含む 焼土(VI層が被熱)
2 VI層 直径2mm炭化材3%含む

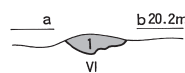
Q71a

F-49



N69c

F-49



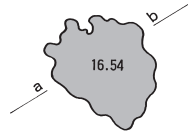
F-49
1 10R5/8 赤色 粘着性弱 堅密度軟



図 V-14 F-45 ~ 49

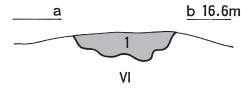


F-50



IG78c

F-50

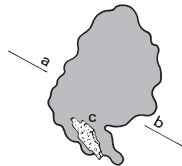


F-50
1 10R4/8 赤色 粘着性弱 堅密度軟 1 b-2 2点、フレイク2点

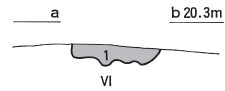
F-51

IN71d

IN71a



F-51



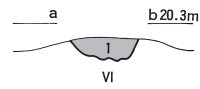
F-51
1 10R4/8 赤色 粘着性弱 堅密度軟

F-52

IO72b



F-52



F-52
1 10R5/8 赤色 粘着性弱 堅密度軟



図V-15 TP-50~52

2 町道部分の遺構と遺構出土の遺物

(1) 概要

宮戸4遺跡町道部分は、平成13・14年度調査の斜面部分・水田部分に挟まれた細長い調査区である。昨年度までに、これらの隣接する調査区からは、住居跡1軒(H-1)、Tピット15基(TP-5～18・25)焼土27か所(F-1～26・44)、フレイク・チップ集中1か所(FC-1)、集石1か所(S-4)が調査されている(北埋調報168・北埋調報185)。平成15年度は、町道部分よりTピット2基、焼土7か所が検出された。また、平成13年度検出のTP-18も完掘することができた。これらの遺構は、地区は分かれているが、イモッペ川旧河道の氾濫原とその周辺の沢地形に立地する同じまとまりを形成すると見なされる。

今年度検出されたTピット2基(TP-52・57)は、いずれも立地が昨年度までと異なる点が注目される。すなわち、これらはイモッペ川旧河道に近接しており、屈曲部分の滞水域を臨む位置にある。これまで検出されたTピットが、河道よりやや離れた沢の内部や斜面上、台地上に掘り込まれているのと比較して、まさに水際の立地と言えよう。用途は従来どおり鹿猟の陥し穴を想定している。平成13・14年度に考察したように、包含層出土の遺物や周辺の遺構の時期などから、縄文時代中期後半～後期初頭の所産と考えている。

焼土は、沢地形の内部(F-53・54)と緩斜面上(F-55～59)に形成されている。平成13年度調査の斜面部分より連続した分布である。遺物を伴うものは少ないが、ほぼ形成面で検出されたF-54出土の遺物から、縄文時代前期前半に形成されたものが多いと考えられる。(芝田)

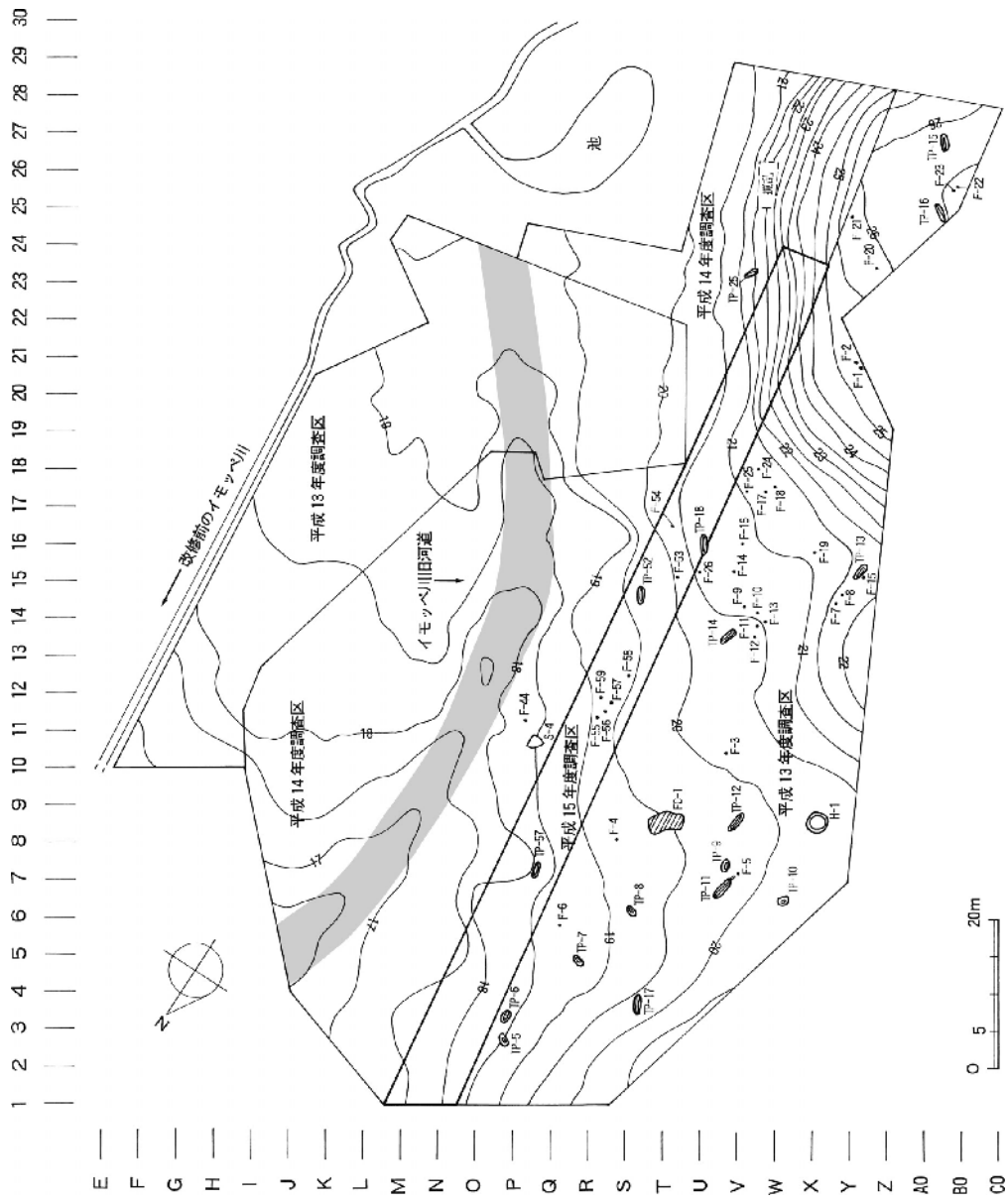
(2) Tピット

TP-18 (図V-17 / 別表VI-7・20 / 図版32-5)

特徴: 調査区南側、イモッペ川旧河道へ向う浅い沢地形の内部に立地する。平成13年度に西側の大部分を調査していたが、町道米原2線の現道下に一部が含まれるため、未完掘のまま埋戻していた。今年度、町道米原2線の切り替えに伴い道路下の調査が可能となり、再び検出することができた。検出面はVI層上位で、黒色土が長楕円形に落ち込んでいた。掘り込み面は、上部に堆積した土層の観察からV層中位と推測される。調査区内で自然礫が最も多く出土する部分に位置し、径1～20cm大の亜円礫・亜角礫が混在するV～VII層を掘り抜いている。底面はVIII層(礫)の下約5mに達する。調査区内の他のTピットと比較して掘り込みがやや浅いのは、このような地盤のために掘削が非常に困難であったからと考えられる。検出面における上端の平面形は、やや不整な長楕円形である。底面はほぼ直線状ではあるが、凹凸が見られる。横断面はV字型である。壁面の上部は崩落のため少し外側へ開くが、地盤が強固なためか崩落は小さかったと推測される。縦断面は船底型で、両端はオーバーハングしている。覆土は上位がV層を起源とする腐植土、下位が壁面からの崩落と考えられるローム主体で、礫が混在している。底部にはロームがブロック状に混入する腐植土が見られる。(芝田)

TP-52 (図V-17 / 別表VI-7・20 / 図版32-6)

特徴: 調査区南側、イモッペ川旧河道に面する緩斜面上に立地する。VI層上位で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面は上部に堆積した土層の観察からV層中位と推測される。V～VII層を掘り抜き、底面はVII層(ローム)の下約60～70cmに達している。検出面における上端の平面形は、南東側が若干窄まった長楕円形である。底面は直線状で、南東側へ徐々に低くなる。横断面はV字型である。壁面上部は崩落のため外側へ開くが、下部は細い溝状が良好に残存している。縦断面は船底型で、両端がわずかにオーバーハングする。覆土は上位から下位まで腐植土とロームの混合あるいは互層となっている。(芝田)



図V-16 町道部分遺構分布図

TP-57 (図V-17 / 別表VI-7・20 / 図版32-7)

特徴：調査区北側、イモッペ川旧河道より突出した滞水域を臨む急斜面上に立地する。VI層上位で黒色土が長楕円形に落ち込んでいるのを検出した。掘り込み面はV層中と推測される。V～VIII層を掘り抜き、底面はVIII層（礫）の下約10～20cmに達している。検出面における上端の平面形は、中央部がやや窪んだ長楕円形である。底部は両端がわずかに湾曲する。底面は中央部がやや深くなっている。横断面は歪んだY字型である。斜面の高位部分に掘り込まれた西側壁面は、抉れたような凹凸が見られる。これに対して東側壁面は上部が少し外側へ開くほかは、ほぼ垂直な掘り込みを残している。縦断面は船底型で、両端がオーバーハングする。覆土は上位が腐植土とロームの混合または互層、下位は腐植土主体で底部に礫が多量に混入する。 (芝田)

遺物：石器 覆土から礫42点が出土しているが、砂岩、チャートなどの河川堆積礫。 (福井)

(3) 焼土

F-53 (図V-18 / 別表VI-7・9 / 図版32-3)

特徴：V層下位の調査中、調査区南側の浅い沢内部で、褐色土の疎らなまとまりを確認した。半截の結果、熱を受け赤褐色化した部分が見られたことから、焼土と判断した。ほぼ形成面での検出と考えられる。被熱の程度は部分的に強弱があり一様ではない。内部および周囲に炭化物を伴っている。

遺物：焼土中より黒曜石製のフレイク2点が出土した。 (芝田)

F-54 (図V-18 / 別表VI-7・9・10 / 図版33-5)

特徴：V層下位の調査中、調査区南側の浅い沢内部で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、被熱により赤褐色化した部分が見られたことから、焼土と判断した。ほぼ形成面での検出と考えられる。中央が強く焼けている。出土遺物から、石器製作などの作業が行われた可能性がある。 (芝田)

遺物

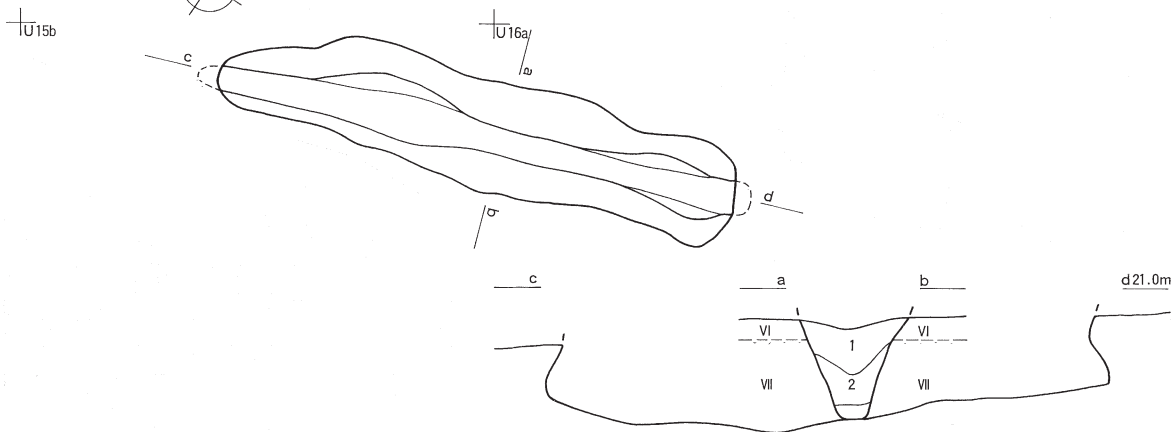
土器 1はII群a-1類土器の胴部片である。磨滅により不鮮明ではあるが、RLと推測される原体を用いた横走縄文が施す。外面の色調は黒褐色である。内面は剥落が著しく、器面はほぼ失われている。胎土は繊維と黄白色鉱物に富む。網文式に相当する。 (芝田)

石器 石鏃8点、フレイクが71点、石錐、つまみ付きナイフ、ピエス・エスキーユ、Rフレイク、石斧原材、礫が各1点出している。石材は石斧原材とフレイク2点が緑色泥岩、礫が砂岩のほかは、全て黒曜石。2・3は石鏃でいずれも被熱している。3は三角形を呈する無茎平基のもの。2は欠損品で、縦長剥片両面の周縁の剥離している。図示していないものも形態の分かるものは三角形を呈する無茎平基のもの。4は石錐で黒曜石製。棒状を呈し、一端が磨耗する。つまみ付きナイフは、つまみ部の破片。ピエス・エスキーユは対向する四辺に剥離が見られるもの。石斧原材は緑色泥岩の剥片を素材に、両側面、刃部側を敲打により整形したもの(図版33中段右に示した)。一部研磨されるが、刃部を形成するままでに至っていない。写真だけ掲載した。 (福井)

F-55・56・57 (図V-18 / 別表VI-7)

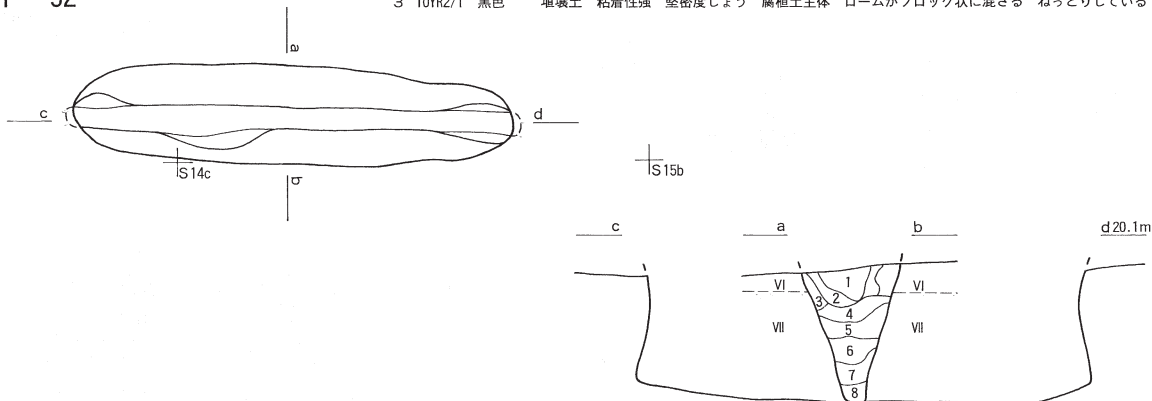
特徴：V層下位の調査中、調査区中央の緩斜面上で、橙色に焼けた土のまとまり3か所を確認した。これらを半截したところ、V層土がレンズ状に赤褐色化していた。土層断面の観察から、形成面より1～2cm掘り下げて検出したと考えられる。F-55・57は強く、F-56は弱く焼けている。F-55～57はほぼ直線状に並んでおり、同時期に形成されたと推測される。 (芝田)

TP-18



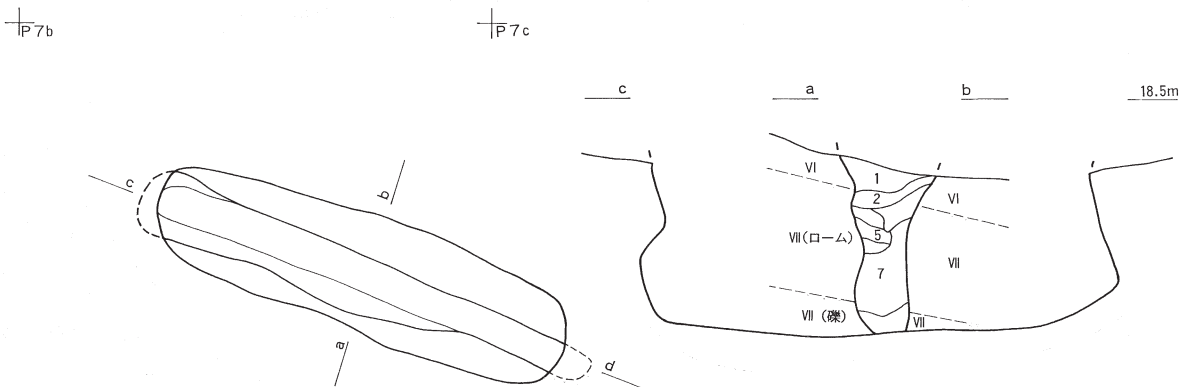
- TP-18
 1 10YR2/2 黒褐色 埴壌土 粘着性中 堅密度堅 V層腐植土主体
 2 10YR3/3 暗褐色 壤土 粘着性中 堅密度軟 ローム主体 腐植土が少量混ざる やわらかい
 3 10YR2/1 黒色 埴壌土 粘着性强 堅密度しよう 腐植土主体 ロームがブロック状に混ざる ねっとりしている

TP-52



- TP-52
 1 10YR1.7/1 黒色 埴壌土 粘着性中 堅密度軟 V層腐植土主体
 2 10YR3/2 黒褐色~10YR3/3 暗褐色 埴壌土 粘着性中 堅密度軟 V+VI
 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 軽埴土 粘着性强 堅密度堅 VI層土主体
 4 10YR2/1 黒色 軽埴土 粘着性强 堅密度軟 腐植土主体 もろい
 5 10YR4/4 褐色 重埴土 粘着性强 堅密度軟 VI+VII やわらかい
 6 10YR2/1 黒色~10YR3/4 暗褐色 埴壌土 粘着性强 堅密度しよう VII層土主体 腐植土がブロック状に混入する
 7 10YR5/6 黄褐色 壤土 粘着性强 堅密度しよう VII層土主体 やわらかい
 8 10YR1.7/1 黒色 軽埴土 粘着性强 堅密度しよう 腐植土主体 ふかふかしている

TP-57



- TP-57
 1 10YR2/2 黒褐色 埴壌土 粘着性中 堅密度堅 V層腐植土主体 黄褐色バミスが少量混ざる
 2 10YR3/3 暗褐色 壤土 粘着性中 堅密度堅 V+VI 黄褐色バミスが多量混ざる
 3 10YR2/1 黒色 埴壌土 粘着性中 堅密度軟 腐植土主体 ロームが斑状に混入する
 4 10YR3/4 暗褐色 軽埴土 粘着性强 堅密度軟 VI層土主体 腐植土が混ざる やわらかい
 5 10YR2/1 黒色 軽埴土 粘着性强 堅密度軟 腐植土主体 ロームが混ざる やわらかい
 6 10YR4/3 にぶい黄褐色 埴壌土 粘着性强 堅密度軟 VII層土主体 腐植土が少量混ざる やわらかい
 7 10YR2/1 黒色 軽埴土 粘着性强 堅密度軟 腐植土主体 ロームが少量混ざる ねっとりしている
 8 10YR1.7/1 黒色 軽埴土 粘着性强 堅密度堅 腐植土主体 礫が多量に混ざる



図 V-17 TP-18・52・57

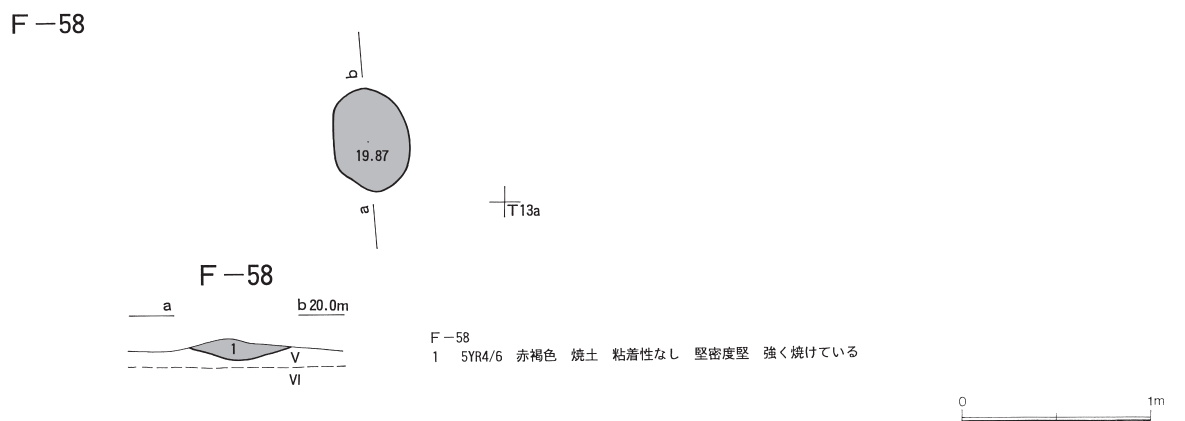
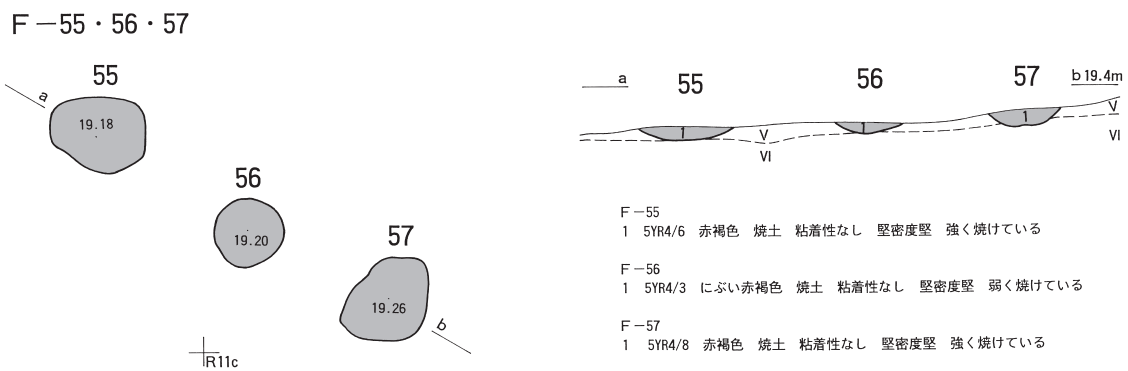
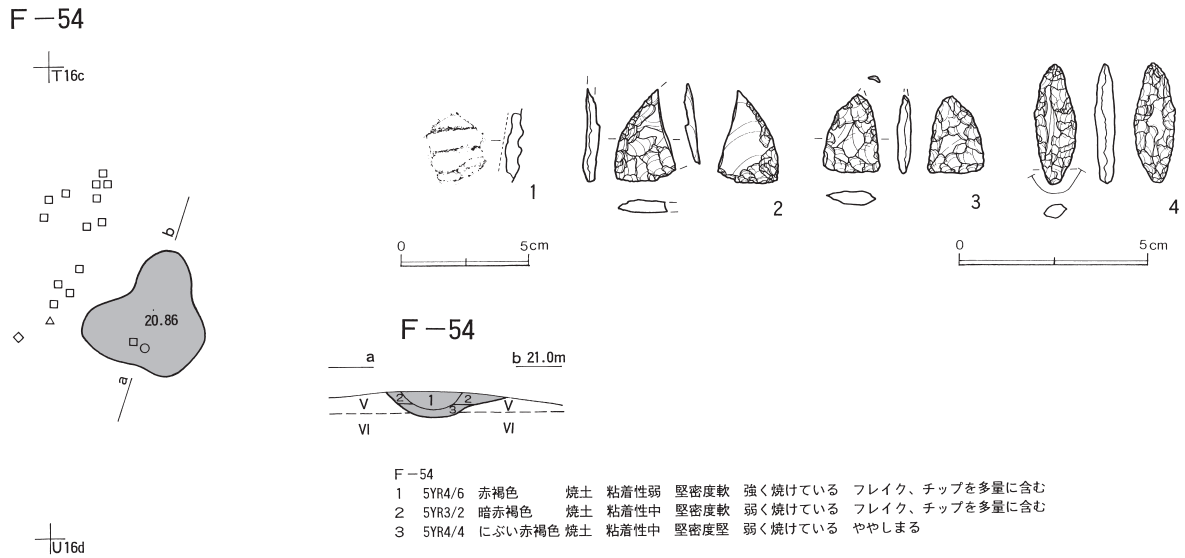
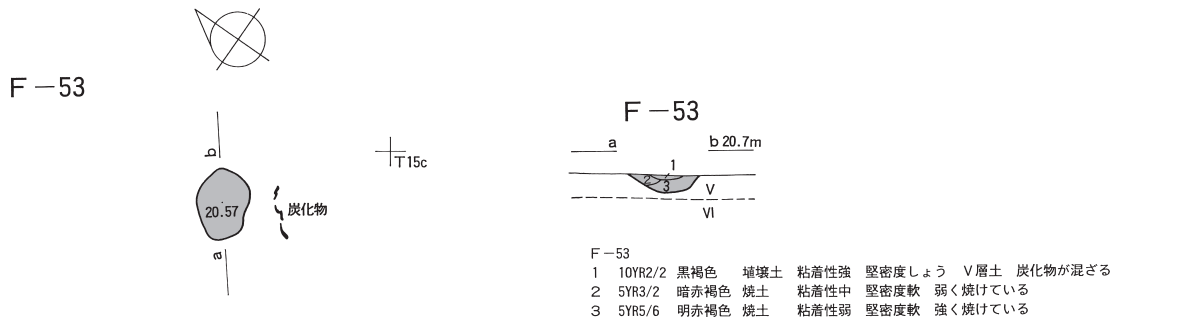
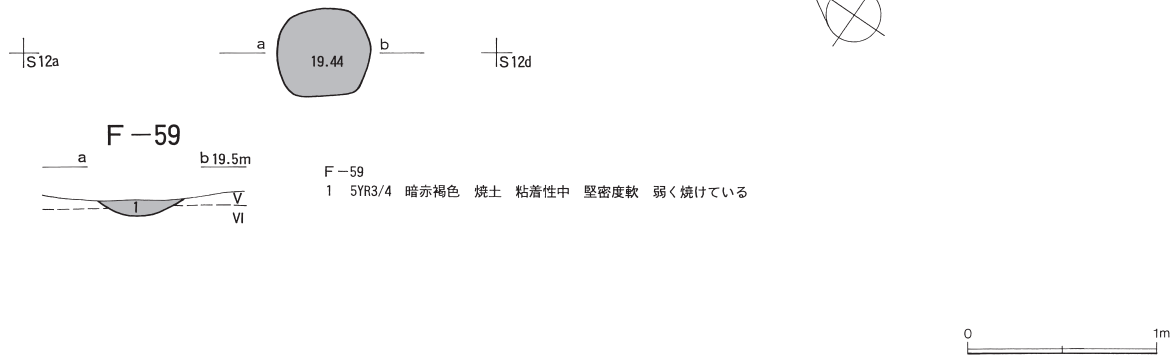


図 V-18 F-53 ~ 58

F-59



図V-19 F-59

F-58 (図V-18 / 別表VI-7)

特徴: V層下位の調査中、調査区中央の緩斜面上で、橙色の土のまとまりを確認した。半截の結果、被熱により赤褐色化した部分が見られたことから、焼土と判断した。土層断面の観察から、形成面より1~2cm掘り下げて検出したと考えられる。全体的に強く焼けている。(芝田)

F-59 (図V-18 / 別表VI-7 / 図版32-4)

特徴: V層下位の調査中、調査区中央の緩斜面上で、不明瞭な褐色土の広がりを確認した。半截の結果、被熱により赤褐色化した部分が見られたことから、焼土と判断した。土層断面の観察から、形成面より1~2cm掘り下げて検出したと考えられる。焼けは弱い。(芝田)

3 包含層出土の遺物

(1) 土器

概要

平成15年度、宮戸4遺跡では遺物包含層より5,521点の土器が出土した。このうち樹林部分(5,150㎡)より出土したものが2,032点、町道部分(800㎡)より出土したものが3,489点である。出土点数と調査面積の比率は、樹林部分が0.39点/㎡、町道部分が4.36点/㎡というように、町道部分の方が高い。以下、地区別に出土状況の概要を述べる。

樹林部分では、包含層の調査方法のために土器の大部分がV層下位～VI層より出土している(Ⅲ章第1節参照)。そのうち時期別では縄文時代早期後半のもの(I群b類)が1,990点と大半を占め、他は同前期前半のもの(Ⅱ群a類)41点、時期不明1点と非常に少ない。I群b類の中ではI群b-2類が1,075点と最も多く、これ以外のI群b-1類が297点、I群b-3類が256点、I群b-4類が298点とほぼ同数である。また、表面が剥離・磨滅しているために細分不明とした破片が64点ある。平面分布を見ると、I群b-1類はQ・R-81調査区付近の平坦部よりまとまって出土している。I群b-2類はO・P-72～76調査区付近の急斜面、R-77～80調査区付近の斜面下に集中が見られるが、調査範囲の北側から中央にかけて全体に広がっている。I群b-3類は調査区中央のイモッペ川旧河道に近い緩斜面、I群b-4類は西側の急斜面にやや多いが、いずれも同一個体の破片が多く、分布は散漫である。Ⅱ群a類は主に調査範囲の北側より疎らに出土している。

町道部分では、IV層を除くⅢ～VI各層より土器が出土した。層位別では、V層下位よりの出土が2,270点と最も多く、V層中位710点、VI層341点と続く。Ⅲ層およびV層上位よりの出土は少ない。時期別では、I群b類が2,593点と過半数を占める。その中にはI群b-1類が838点と最も多く、I群b-3類が746点で次ぐ。他にI群b-2類が436点、I群b-4類が308点、細分不明が265点出土している。この出土量の比は、平成13・14年度に調査された周辺部分(水田部分・斜面部分)とほぼ同様である。

宮戸4遺跡では、I群b-1類とI群b-2類の施文や器形に類似する点が多く、明確に区分できない個体も見られた。このことから両者は漸移的に変化する一群を形成すると考えられる。出土量から判断すると、町道部分およびその周辺ではI群b-1類(東釧路Ⅲ式)、樹林部分ではI群b-2類(コッタロ式)の要素が強いと言える。平面分布は、平成13～15年度の調査範囲全体で見ると、I群b-1類・I群b-2類は西側の斜面部とそれに続く沢地形内部より多く出土しているのに対して、I群b-3類・I群b-4類は東側のより低位のイモッペ川旧河道の両岸付近に分布のまとまりが認められる。Ⅱ群a類は592点出土し、T～V-12～18調査区付近の浅い沢地形内に多い。I群b類・Ⅱ群a類については、周辺より縄文時代早期後半～前期前半の多数の焼土やフレイク・チップ集中が検出されており、関連が想定される。Ⅲ群b類は292点出土し、U～W-16～18調査区、Y-20調査区付近にまとまりが見られ、南側の急斜面上から沢地形内部にかけて多い。出土状況や接合関係は流れ込みの様相を示しており、調査範囲内で同時期の遺構は検出されていないが、後背地にあたる標高25～26mの台地上に主体部があると推測される。

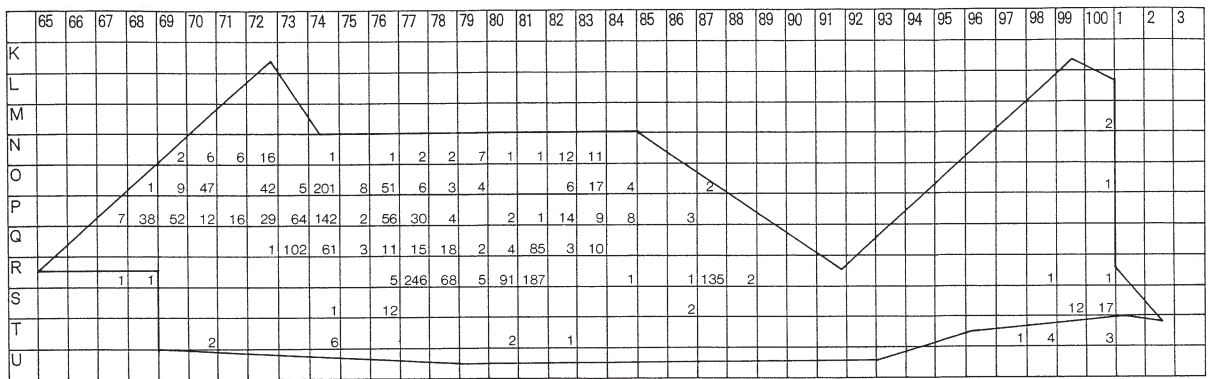
縄文時代早期の土器

I群b-1類(図V-24～26/別表VI-14/図版33～36)

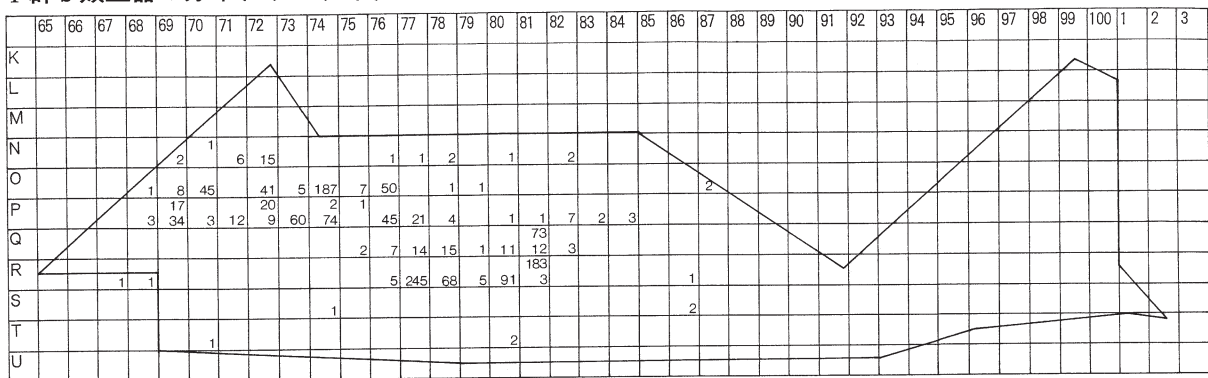
A 縄の側縁圧痕をもつもの(3～12)

3は口縁部に縄線文をもつもの。磨滅により不鮮明ではあるが、口唇には縄の押圧によると考えられる凹みが見られる。4～6は短めの縄による縦位の側縁圧痕文をもつもの。5は口唇が押し潰されたように

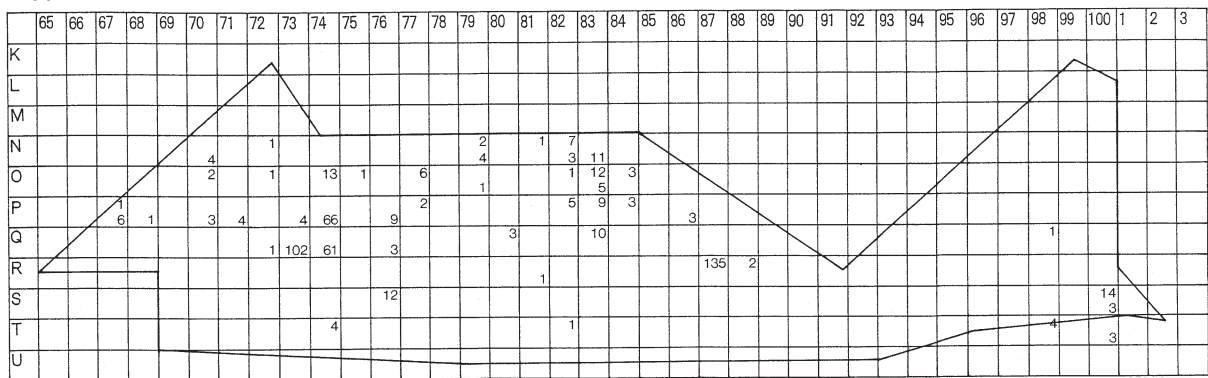
全体の土器分布



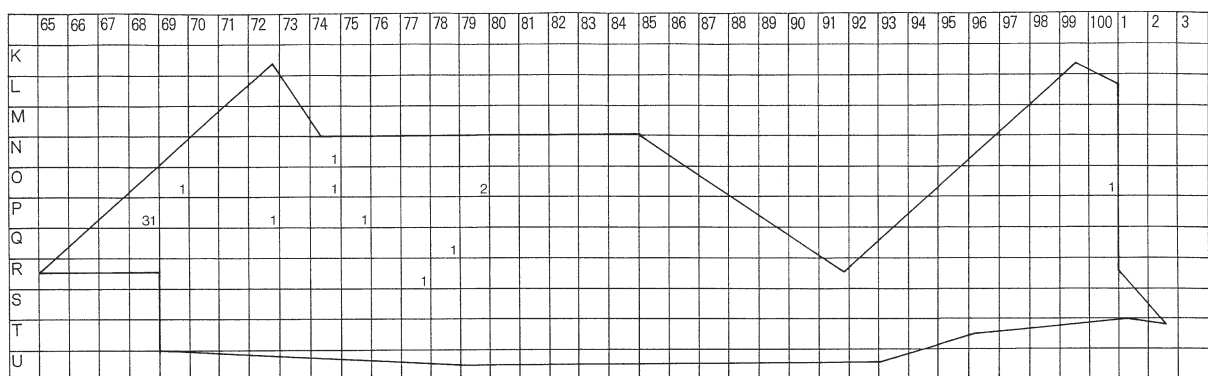
I 群 b 類土器の分布(1) (上段: I 群 b-1 類、下段: I 群 b-2 類)



I 群 b 類土器の分布(2) (上段: I 群 b-3 類、下段: I 群 b-4 類)

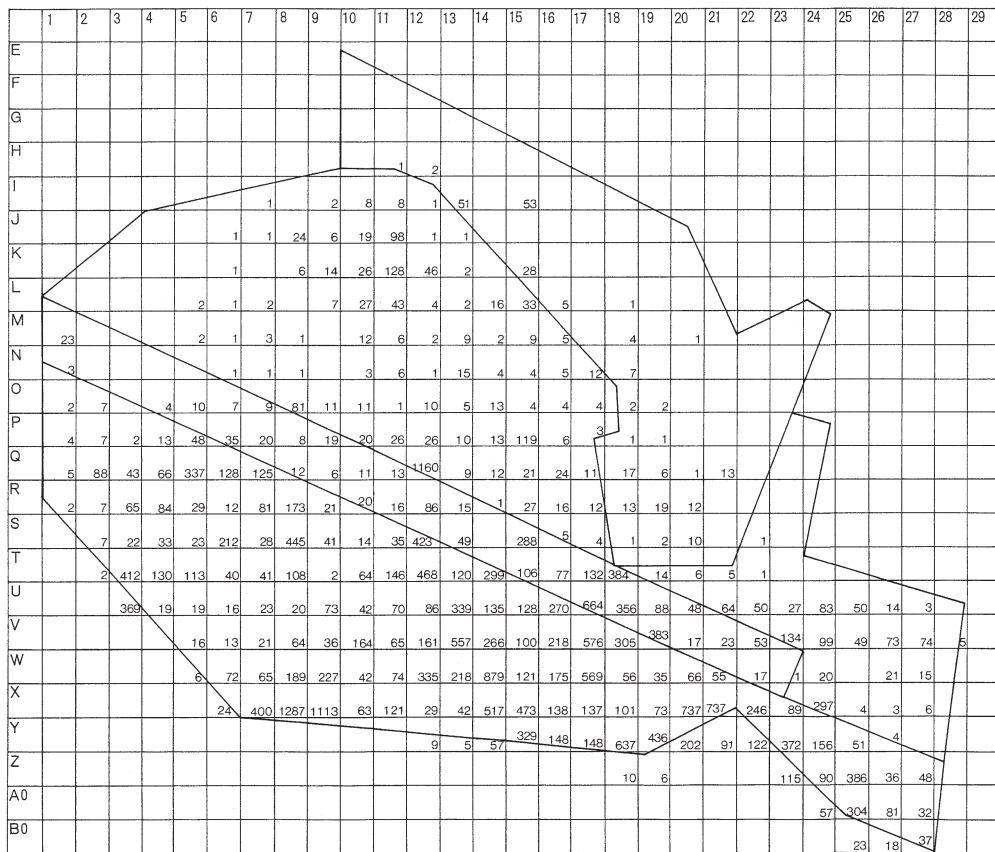


II 群 a 類土器の分布

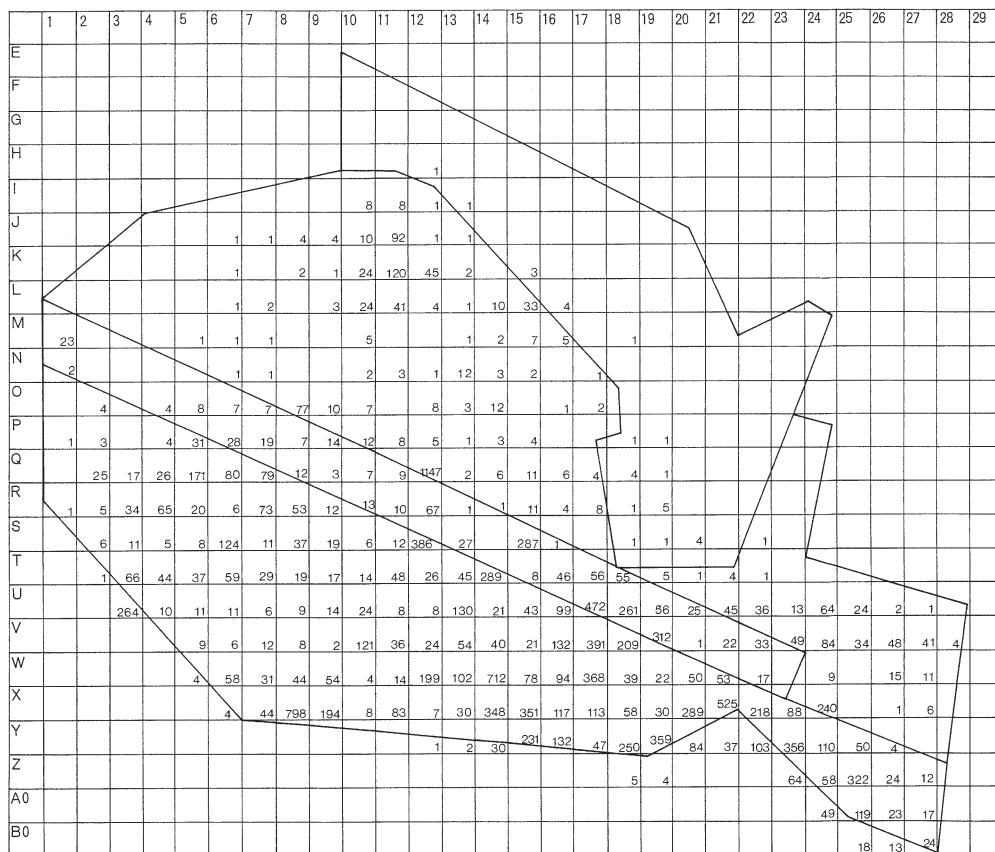


図V-20 包含層出土土器分布図(1)

全体の土器分布

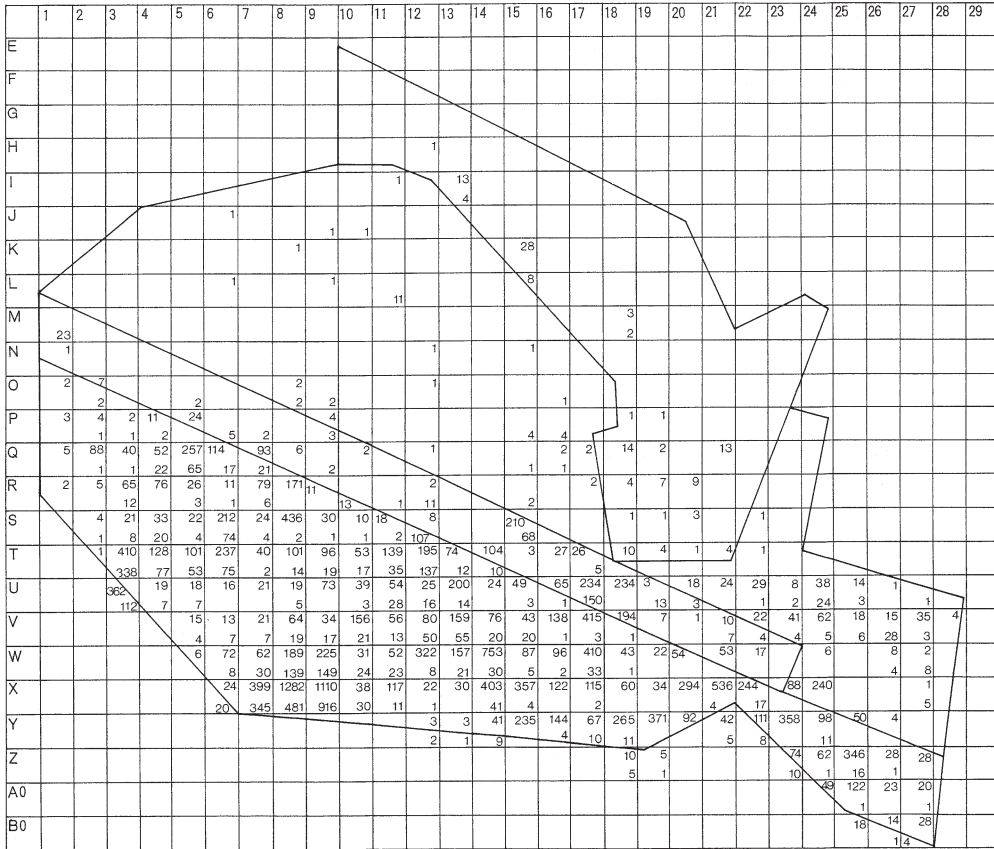


I 群 b 類土器の分布(1) (全体)



図V-21 包含層出土土器分布図(2)

I 群 b 類土器の分布(2) (上段: I 群 b-1 類、下段: I 群 b-2 類)



I 群 b 類土器の分布(3) (上段: I 群 b-3 類、下段: I 群 b-4 類)

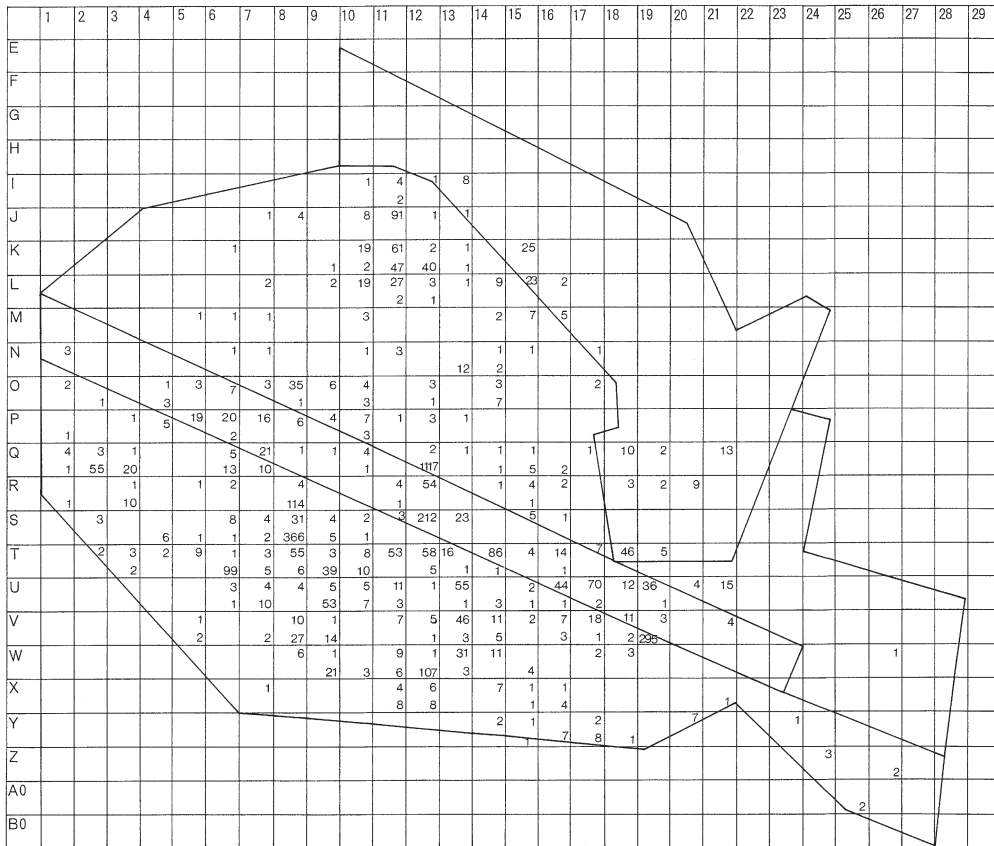
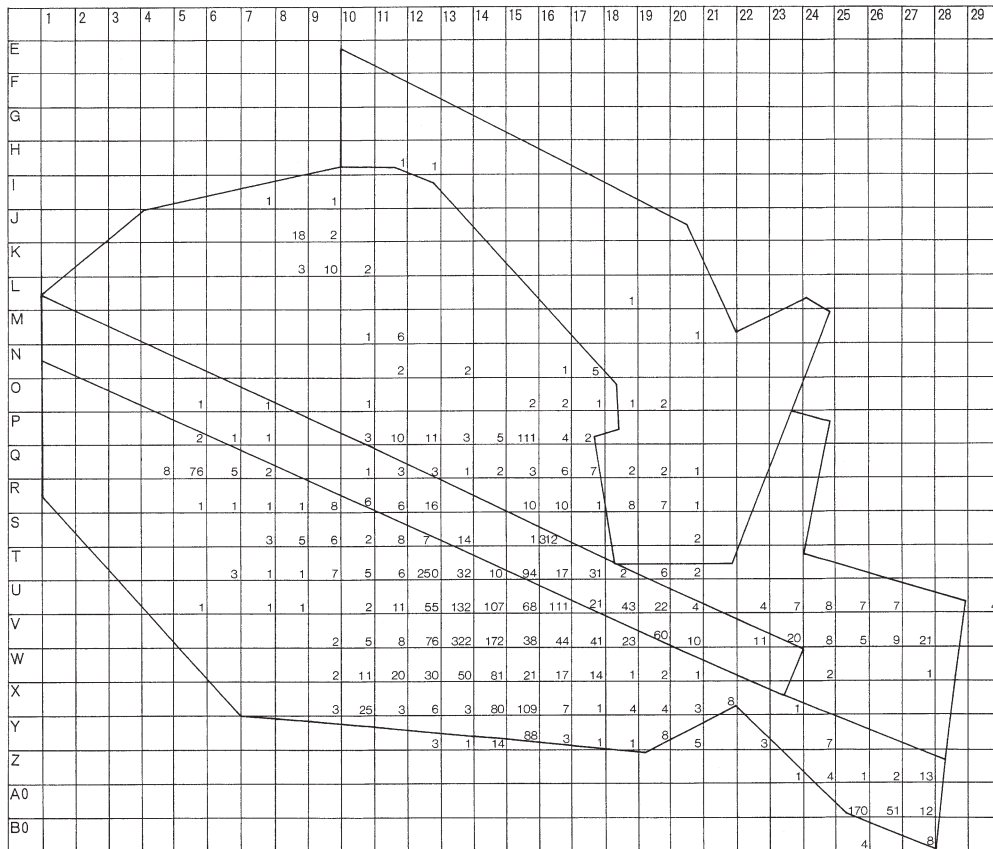
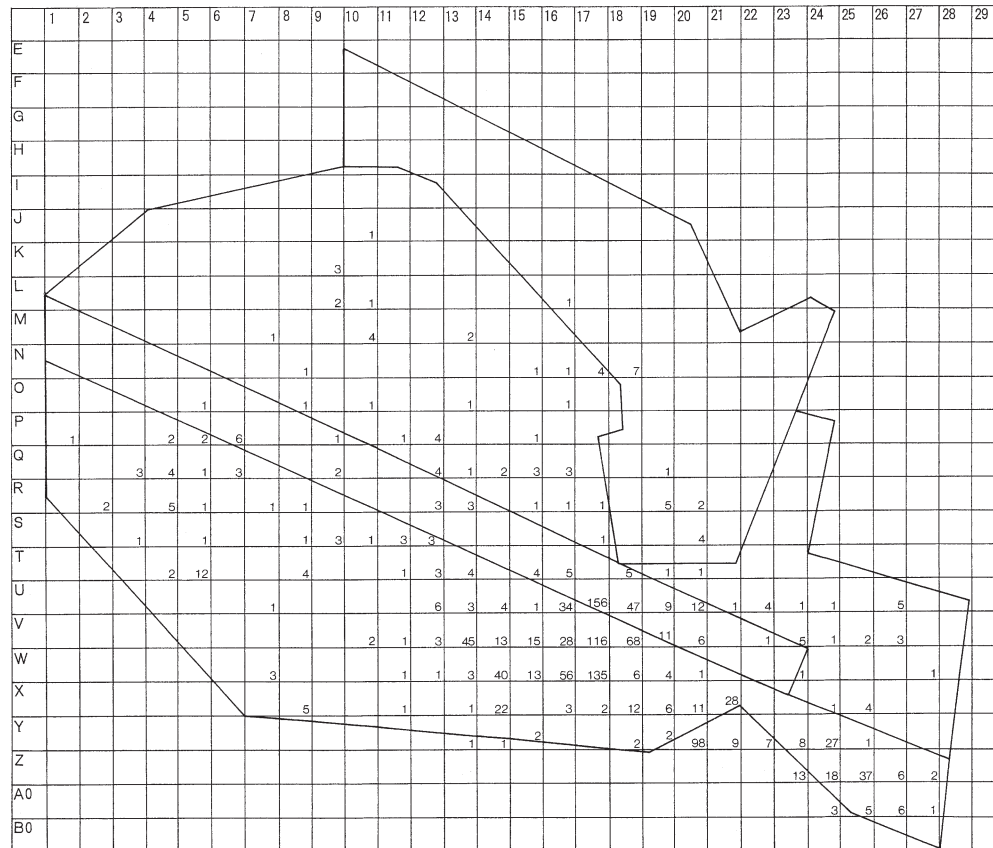


図 V - 22 包含層出土土器分布図 (3)

II群a類土器の分布



III群b類土器の分布



図V-22 包含層出土土器分布図(4)

外側へ広がっている。縄端による縦位の刺突が2列見られ、その内外に組紐圧痕文が施される。6は口唇が縄端により刻まれる。胴部には1段Lと2段RLの2種類の原体による横位の側縁圧痕が見られる。内面にも斜位の縄文が疎らに施されている。7・8は長めの縄による斜位の側縁圧痕文をもつもの。7は口唇が爪先により刻まれる。口唇断面は、3～6・8が角状、7が半円状である。9～12は胴部片である。9は『北埋調報168』の図VI-1-43-35(166P)と同一個体である。11・12は施文が重複している。胎土は緻密で細砂・黄白色火山灰を含む。4・8は砂礫が多い。

B 組紐圧痕文をもつもの (13～17)

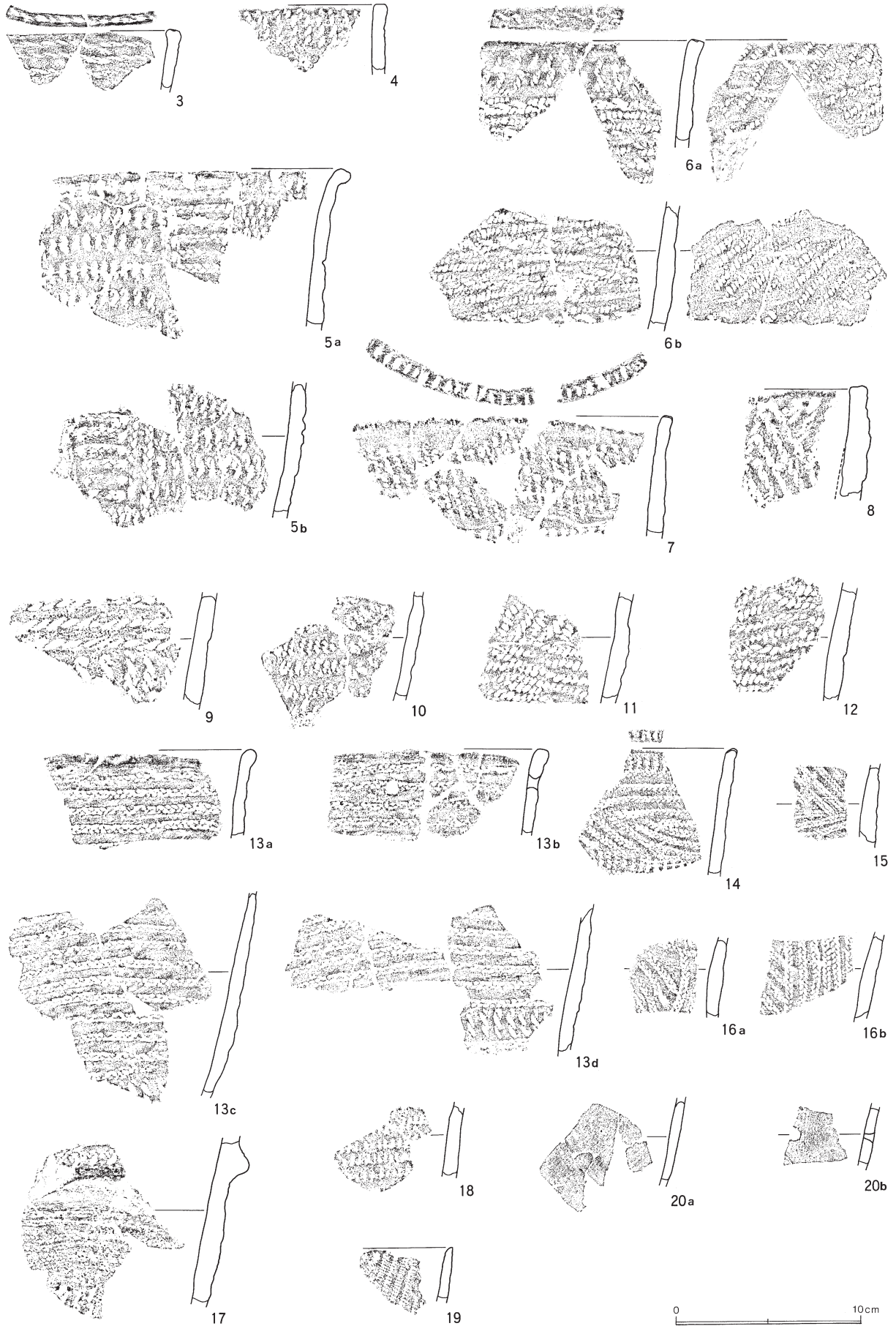
13は横位の組紐圧痕文が施されるもの。口唇断面は丸みを帯び、外側へ張り出している。口縁に補修孔が見られ、胴部では組紐圧痕文の間に短縄文が充填される。14・15は横位と斜位の組紐圧痕文が組み合わさったもの。14の口唇は、断面が角状で縄端により刻まれる。口唇直下および組紐圧痕文下には短縄文が施される。16は縦位に弧状の組紐圧痕文をもつもので、施文が重複する。17は貼付帯をもつもの。貼付帯は厚く、断面三角形を呈しており、縄端の刺突列が刻まれている。横位の組紐圧痕文の下には短縄文が施される。胎土は緻密で細砂を含む。14・15は砂礫が多い。

C 絡条体圧痕文をもつもの (18・19)

18は絡条体圧痕文が横位に施されるもの。やや太めの丸形の軸に巻いた縄が疎らに圧痕されている。19は絡条体圧痕文が縦位に施されるもの。細い角形の軸に巻いた縄が密に圧痕されている。胎土は18が黄白色火山灰、19が砂礫を多く含む。



図V-24 包含層出土の土器 (1)



図V-25 包含層出土の土器(2)

D 無文のもの (1・20)

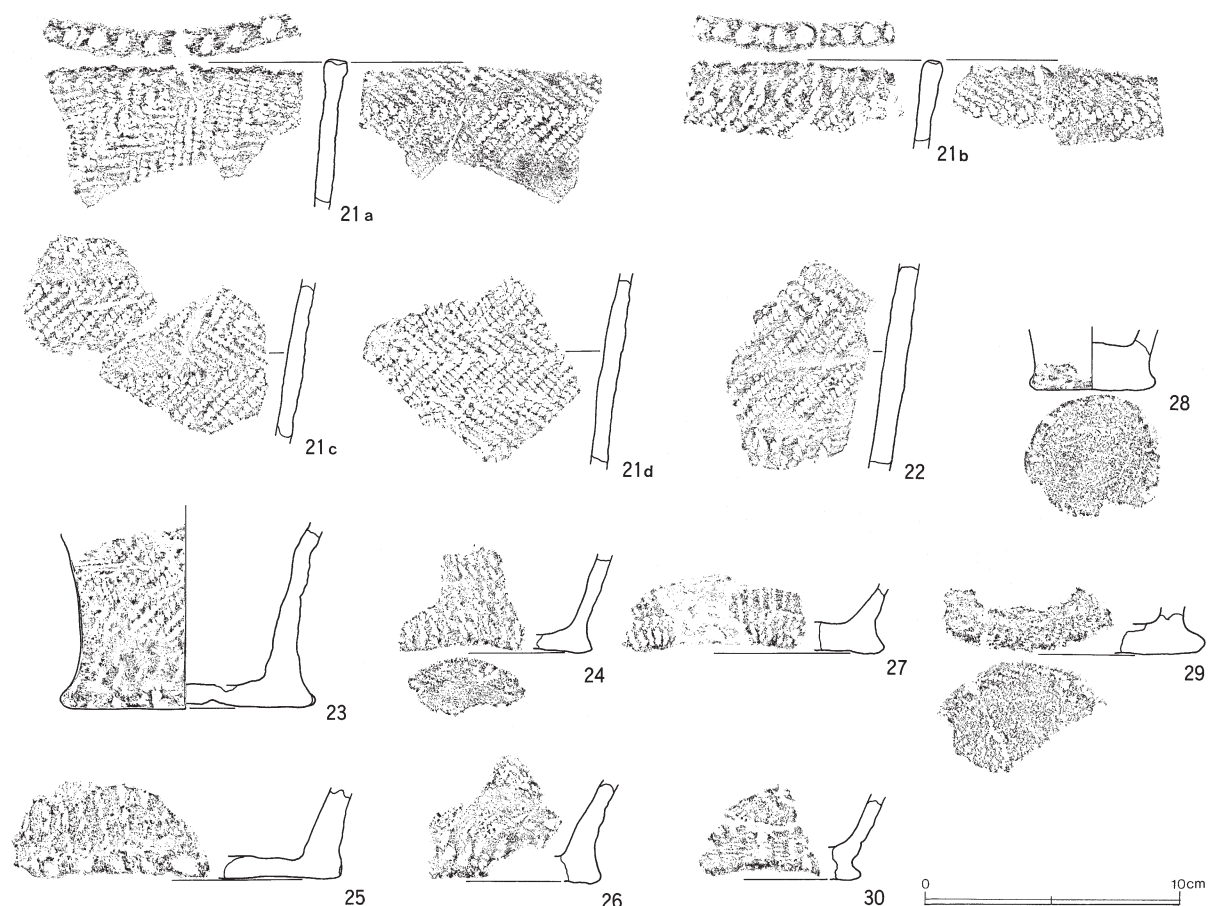
1は器高8.4cm、推定口径8.5cm、推定底径6.8cmを測るミニチュアの深鉢形土器である。外面はナデ調整されており、部分的に指頭痕が残る。底部は張り出す。胎土は細砂・黄白色火山灰を含む。20は胴部片。補修孔が見られる。内外面は磨きにより滑らかになっている。非常に堅く締まっており、色調は明赤褐色を呈する。胎土は緻密で混入物が非常に少ない。他のI群b類土器よりも下位のVI層中位より出土し、焼成や胎土が異なることから、やや古手の時期のI群a類に属する可能性がある。破片数が少なく、器面に明瞭な貝殻文や条痕が認められなかったことから、ここに含めた。

E 縄文を主要な文様とするもの (2・21・22)

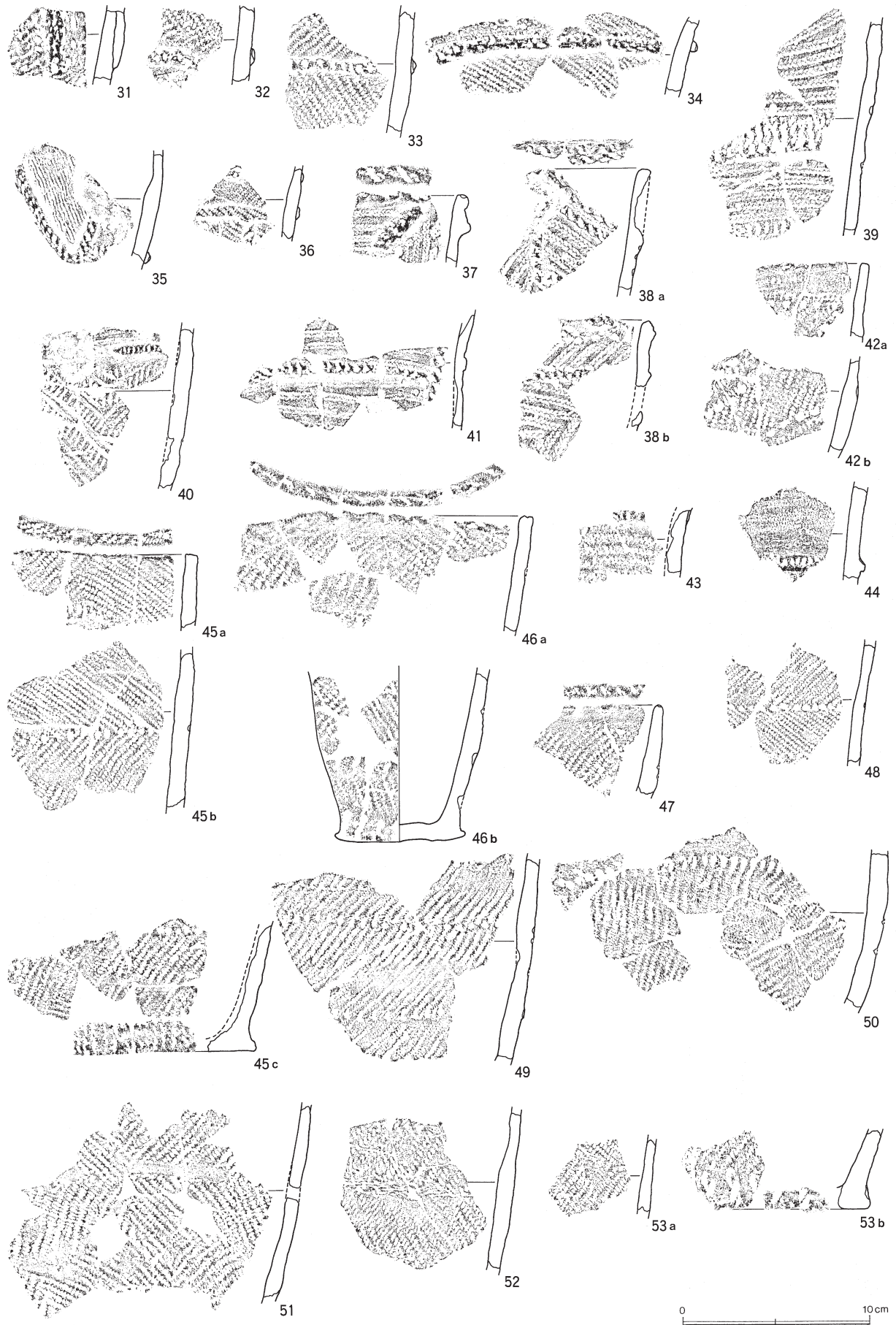
2は現存器高24.0cm、口径24.5cmを測る深鉢形土器である。口唇断面は概ね角状であるが、部分的に丸みを帯び、縄端によって刻まれる。口縁部はわずかに外側へ開く。外面にはRLとLRの結束羽状縄文が不整に横還する。内面は横方向にナデ調整される。胎土は細砂・黄白色火山灰を含む。21はRLとLRの結束羽状縄文が外面には斜位に、内面には横位に施される。口縁には部分的に短縄文が見られる。口唇は爪先によって刻まれる。外面の羽状縄文は胴部では横位に変化する。胎土は緻密で細砂を多く含む。『北埋調報168』の図VI-1-45-82(170P)と同一個体である。22はLRの斜行縄文を2方向から施文することにより、羽状縄文を模している。下部には縄端の刺突列が見られる。胎土は砂・黄白色火山灰を含む。

F 底部 (23～30)

いずれも外側への張り出しが見られる。底部の「くびれ」の大きさは様々で、I群b-2類とほぼ同じである。23～27は張り出し部分に短縄文が施されるもの。23は底部直上にLR斜行縄文が施される。28・29は無文のもの。29は短縄文をナデ消した痕跡があり、底面の縁辺に縄文が見られる。30は丸形の軸に巻いた絡条体圧痕文が縦位に施される。胎土は砂礫を多く含む。24・25は特に黄白色火山灰が目立つ。



図V-26 包含層出土の土器(3)



図V-27 包含層出土の土器(4)

I 群 b-2 類 (図 V-27 / 表 VI-14・15 / 図版 36～38)

A 貼付帯をもつもの (31～36)

31 は縦位の貼付帯をもつもの。貼付帯の断面は半円状で、爪先による整形痕が残る。地文は無文である。32～34 は横位の貼付帯をもつもの。いずれも貼付帯の断面は半円状であるが、32・33 は縄端により刻まれて潰れている。地文は斜行縄文で、33 は節の大きさの異なる RL と LR 2 種類の原体を用いて羽状縄文を施し、結束にあたる部分に粘土紐を貼り付けている。34 は貼付帯の接合部分に縄端による刺突列が見られる。35 は横位と斜位の貼付帯が組み合わさったもの。地文は無節 R の斜行縄文である。貼付帯の断面は角状で、縄端により刻まれる。36 は横位と縦位の貼付帯が格子状に組み合わされるもの。貼付帯の断面は角状で、地文の斜行縄文を施す際に押し潰されて扁平になっている。いずれも胎土は緻密で砂を含む。33・34 は特に砂礫が多く見られる。

B 組紐圧痕文をもつもの (37～41)

37～41 は組紐圧痕文と貼付帯が組み合わさったもの。37 の口唇断面は半円状で、縄により刻まれる。38 は口縁に高い頂部を有し、貼付帯に沿って棒状工具による刺突列が見られる。39 は貼付帯の上部から押し潰すように短縄文が施される。40 は組紐圧痕文の間に、やや幅広の丸軸に巻いた絡条体圧痕文が施され、施文が重複する部分も見られる。いずれも胎土は緻密で砂を多く含む。

C 絡条体圧痕文をもつもの (42～44)

42 は丸軸に巻いた絡条体圧痕文が横位あるいは斜位に施され、これに沿って縄端による刺突列が見られる。地文は LR 斜行縄文である。43・44 は貼付帯と組み合わさったもの。43 は絡条体が斜めに交錯し、鋸歯状になっている。44 は非常に細い絡条体圧痕文が横位に施されるもので、貼付帯との間に無文帯が見られる。43 は縄端、44 は棒状工具により貼付帯が刻まれる。胎土は砂礫を多く含む。

D 縄文を主要な文様とするもの (45～53)

I 群 b-1 類と比較すると、縄文がより細密で整っている。45・46・48 は LR と RL の羽状縄文、47・49・50 は LR の斜行縄文、51 は LR と RL の縄文、52・53 は LR+RL の結束羽状縄文が施される。口唇は 45 が縄、46・47 が縄によって刻まれる。口唇断面は 45 が角状、46・47 はやや丸みを帯びる。45・46・48～50 は縄文帯の間に縄端による刺突列が見られる。45・46・53 の底部は張り出しが見られ、短縄文が施されている。胎土は 45 が黄白色火山灰、46・47・53 が砂、48・51 が細砂、49・50・52 が砂礫を多く含む。

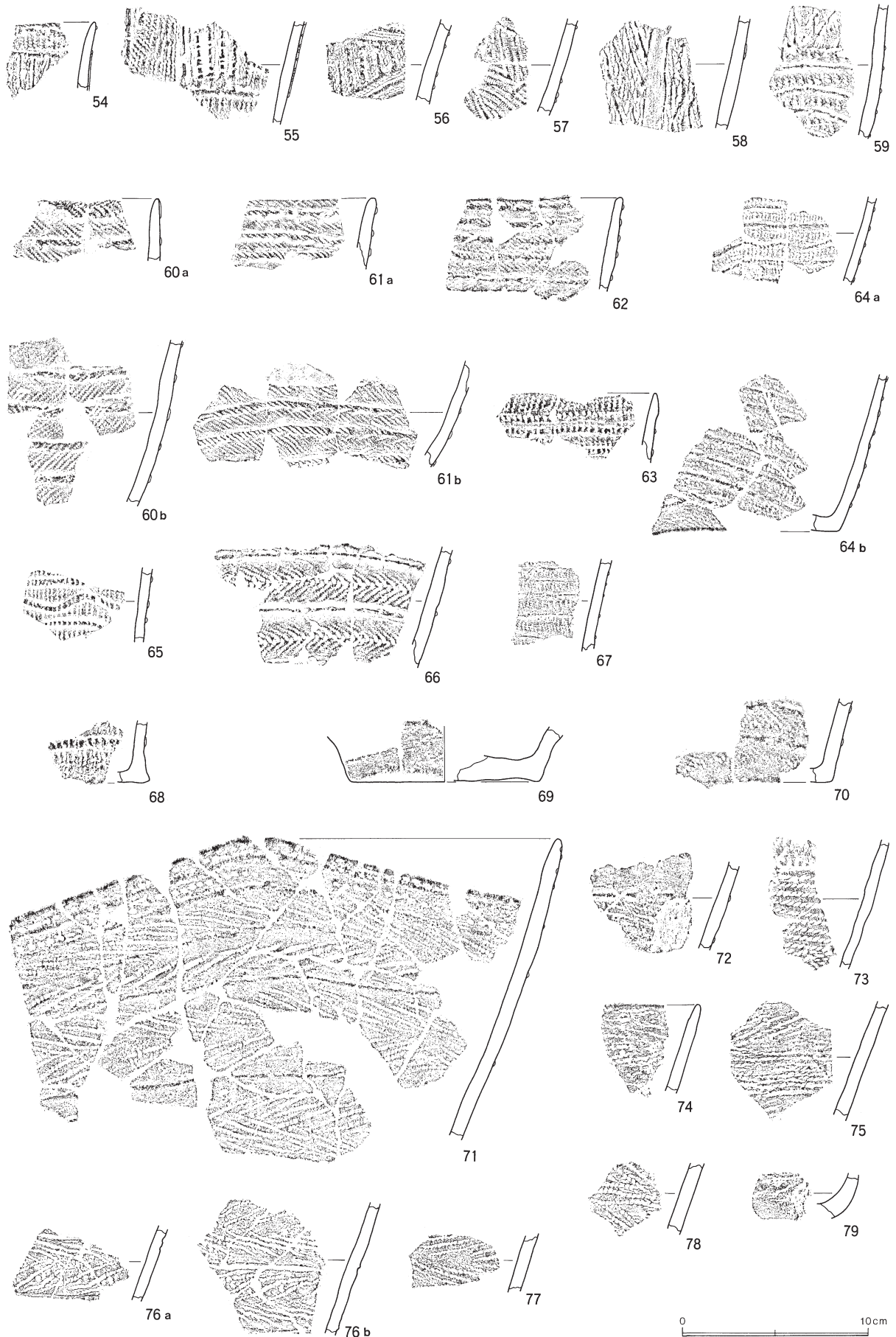
I 群 b-3 類 (図 V-28 / 別表 VI-15・16 / 図版 38・39)

A 縦位と横位の細貼付帯が組み合わさったもの (54～59)

54～56 は縦位と横位の細貼付帯の組み合わせにより格子状の文様帯が作り出されるもの。細貼付帯の間は、54・55 が短縄文、56 が縄線文により充填される。54 は口縁部で、口唇断面は尖りぎみである。55 は細貼付帯が縄によって刻まれる。57 は斜位あるいは横位の細貼付帯の間を、角軸に巻いた細い絡条体圧痕文が充填されている。58・59 は縦位あるいは斜位の細貼付帯が細かく枝状に配されるもの。58 は細貼付帯の間に縄線文が縦位に施されるが、無文の部分も見られる。59 の下部では横位の細貼付帯の間に短縄文が施される。いずれも胎土は緻密で細砂を多く含む。

B 横位の細貼付帯が巡るもの (60～70)

60～62 は横位の細貼付帯を巡らせた後、非常に細い RL 斜行縄文が施すもの。63～65 は細貼付帯の間を短縄文で充填するもの。これらの細貼付帯は押し潰されて扁平になっている。60～63 の口唇断面は尖りぎみである。63 は細貼付帯の下部に縄端による刺突列が見られる。64 は胴部が膨らむ器形と推測され、底部は丸みを帯びる。66 は細貼付帯の間に RL+LR の結束羽状縄文が施され、細貼付帯の上下に粘土



図V-28 包含層出土の土器 (5)

紐を押圧した際の整形痕が残っている。67は磨滅により不鮮明であるが、微隆起線が横位に配されている。68～70は底部。68は貼付帯がやや太く、わずかに張り出しが見られる。中茶路式の古手に属する可能性がある。69は上げ底ぎみである。いずれも胎土は緻密で、60・61・66・70は細砂、62・67は砂礫、63・68・69は黄白色火山灰、64・65は砂を多く含む。

I 群 b - 4 類 (図 V - 28 / 別表 VI - 16 / 図版 39)

A 微隆起線が見られるもの (71～73)

71の口唇断面は尖りぎみで、波状口縁を呈する。口縁部には棒状工具の先端による刺突が2列見られる。外面には微隆起線と組み合わせて自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。72は撚糸文、73は縄文が横走ぎみに施される。胎土は緻密で、71・73は細砂、72は砂を多く含む。

B 微隆起線が見られないもの (74～79)

74・75は撚糸文が横走ぎみに施されるもの。74の口唇断面は角状で、やや内傾する。76～78は自縄自巻の原体による羽状縄文が施されるもの。76は羽状縄文の間に沈線文が見られる。79は底部。形状は丸底と推測され、撚糸文が見られる。いずれも胎土は緻密で細砂を多く含む。

縄文時代前期の土器

II 群 a - 1 類 (図 V - 29 / 別表 VI - 16 / 図版 39・40)

A 横走縄文のもの (80～88)

いずれも口縁部から底部まで横走する R L 縄文が施されている。口唇断面は80が角状、81～84が半円状である。内面がナデ調整され滑らかになっている。焼成はもろく、内外面の剥落が著しい。胎土に繊維・細砂を含む。

B 斜行縄文のもの (89～91)

89 a・bは同一個体。L R 縄文が斜め方向に施される。口唇断面は角状である。胎土は緻密で繊維・細砂・黄白色火山灰を含む。90は不整な R L 縄文で、施文後になでられて条が部分的に潰れている。91は底部で L R 縄文が施されるが、外面が剥落している。90・91の胎土はもろく、繊維・砂礫を含む。

C 羽状縄文のもの (92・93)

92は L R と R L の原体を用いた不整な羽状縄文が施される。93は L R と R L の斜行縄文が重複する。いずれも、縄端による圧痕が見られ、施文後に外面がなでられている。胎土は繊維・砂礫を多く含む。

II 群 b 類 (図 V - 29 / 別表 VI - 16 / 図版 40)

円筒土器下層式に相当するもの (94～97)

94～96は胴部。97は底部。いずれも横走する撚糸文が施される。胎土は繊維を多く含む。

縄文時代中期の土器

III 群 b - 1 類 (図 V - 30 / 別表 VI - 16 / 図版 41)

A 半截竹管状工具の凹面による施文が見られるもの (98～100)

98 a～dは同一個体。98 aは口縁の山形突起より粘土紐を2本貼り付け、二又に下りる貼付帯を作り出している。貼付帯上には半截竹管状工具の凹面を用いた刺突列が見られ、篋状工具による刻みがある。98 bには貼付帯が剥落した痕跡が見られ、口縁と平行して横走していたと推測される。器面には L R 斜行縄文が施され、4列の突引文が残存する。99 a～cは同一個体。小突起に粘土紐を貼り付け、口唇と口縁に凹面の刺突を施している。100は口縁の小突起より垂下する貼付帯が見られ、口唇、口縁、貼付帯に凹面の刺突を施す。内面にも地文と同一原体の縄文が横方向に施される。

B 半截竹管状工具の凸面による施文が見られるもの (101・102)

101 は地文に R L 斜行縄文を施し、口縁部に垂下する突起を貼り付けている。口唇と突起は工具の先端により刻まれ、器面には突引文が 3 列巡る。『北埋調報 168』の図 VI-1-52-264 (182 P) と同一個体である。102 は口縁より二又に下りる貼付帯を有する。口唇に 2 列、貼付帯に 1 列の連続刺突文が施される。口縁部の外面は剥落が著しい。胴部には L R 斜行縄文が施されている。胎土は白色火山灰を微量含む。

C 無文のもの (103)

103 は小突起から垂下する耳状貼付を有し、爪先による整形痕が見られる。胎土は細砂を多く含む。

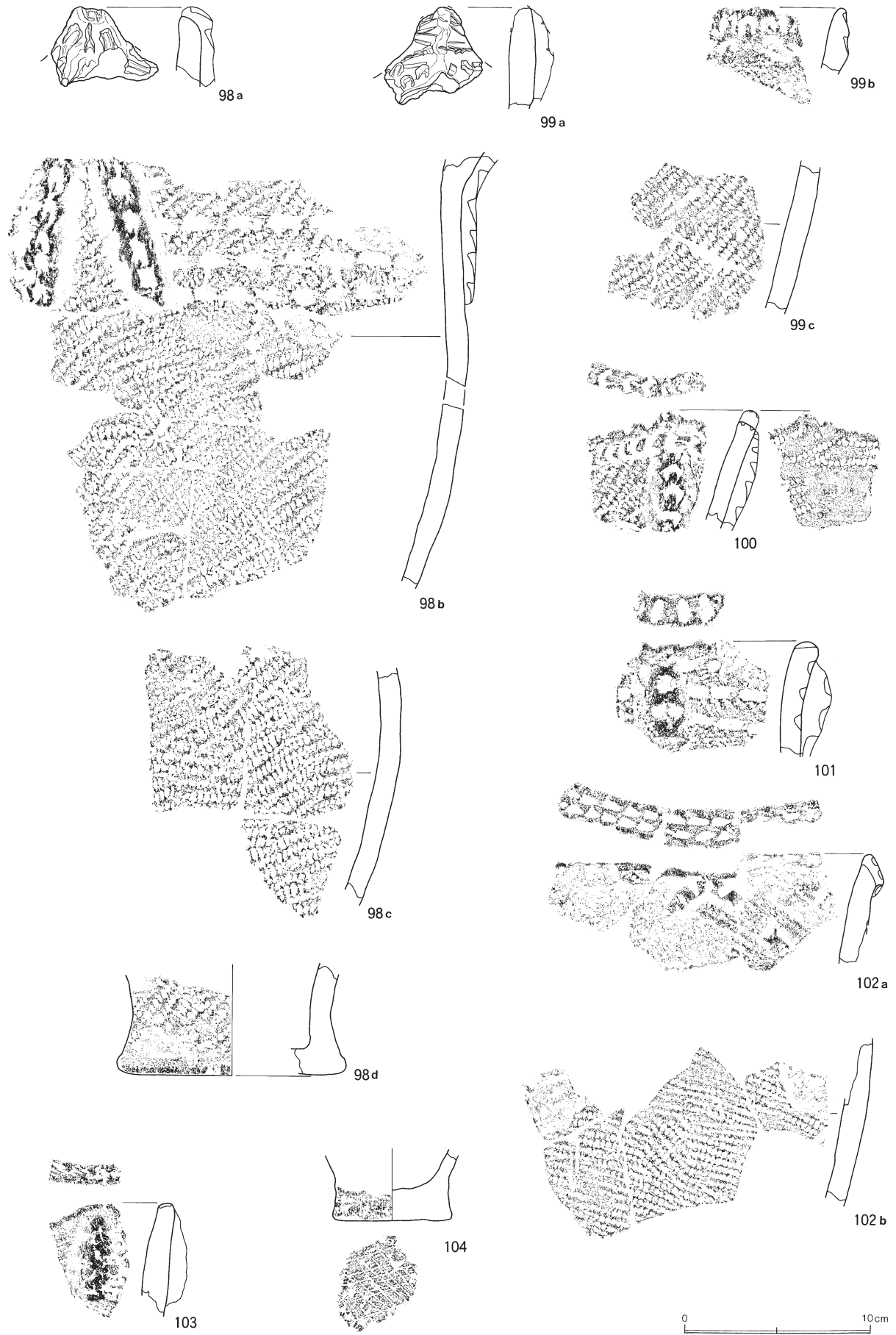
D 底部 (104)

104 は底面に 2 方向からの細い沈線により格子状の文様が施される。周縁にも縦方向の沈線が見られる。胎土は砂礫を多く含む。

(芝田)



図 V - 29 包含層出土の土器 (6)



図V-30 包含層出土の土器 (7)

(2) 石器等

包含層からは樹林部分で 3441 点、町道部分で 4387 点、表面採集 259 点の合計 8087 点の石器が出土し、その内 86 点を図示した。図示遺物の選択にあたっては、器種細別の特徴を代表するものの抽出に努めた。図示した遺物はフレイク・礫・礫片を除く 558 点の石器全体の約 17% である。

フレイク・礫・礫片を除く石器の内訳は、石鏃が 193 点と最も多く、R フレイク 80 点、スクレイパー 70 点が次ぐ。以下、ピエス・エスキーユ 56 点、つまみ付きナイフ 32 点、石錐 24 点、石核 20 点、砥石 15 点、たたき石 13 点、石斧原材 10 点、原石 10 点、石斧片・すり石各 8 点、石槍又はナイフ 6 点、凹石 5 点、石斧・両面調整石器各 2 点、石錘・加工痕のある礫各 1 点と続く。フレイク・礫・礫片・原石を除く重量で見ると上位は礫石器が占め、すり石 4.08kg、たたき石 3.88kg、砥石 2.09kg、石斧原材 1.02kg、凹石 0.88kg で、次いでスクレイパー 0.45 kg、石錘 0.42kg、R フレイク 0.36kg、石斧 0.28kg、つまみ付きナイフ 0.19kg、石核・石斧片各 0.14 kg、ピエスエスキーユ 0.21 kg、石鏃 0.12 kg、石槍又はナイフ・加工痕のある礫各 0.10 kg、石錐 0.08 kg、両面調整石器 0.02kg となる。

石材では黒曜石が 4625 点と多く、次いで緑色泥岩 67 点、頁岩 60 点、砂岩 56 点、玉髓 6 点、「蛇紋岩」5 点、珪岩 3 点、チャート 4 点、安山岩・凝灰岩・粘板岩・片麻岩各 2 点、泥岩・礫岩各 1 点、その他未分類（礫・礫片分）・不明 3251 点と続く。しかし、重量では砂岩が 9.95kg と圧倒的で、黒曜石の 1.35kg、緑色泥岩の 1.34kg が次ぐ。

分布の濃淡を見ると、町道部分に濃い。なお、地形の変化がグリッド数字ラインに沿っているため、以下数字ラインで分布を示す指標とする。石器全体では、11・12、16～19、69・70、74～77、79～84 ラインで各ライン 100 点以上の石器が出土している。

出土層位で多いのは、V 層下 3640 点、VI 層上 1831 点で、これに VI 層 708 点、VI 層中 269 点、VI 層下 287 点を加えると全体の 83% となる。出土層位と土器との対応関係に基づけば、大多数は縄文時代早期後半の石器と考えられる。

剥片石器群

石鏃（図 V—31 / 別表 VI—18 / 図版 42 / 掲載番号 1～25）

総数 193 点出土し、25 点図示した。細別では、無茎鏃が 123 点と大半を占め、有茎鏃は 23 点ある。無茎鏃の中でも三角形を呈するものが 65 点と多く、次いで柳葉形のものが 44 点、五角形のものが 11 点ある。石材別では黒曜石が 189 点と最も多く、頁岩が 3 点、粘板岩が 1 点。層位では V 層下が 124 点と最多で、VI 層上 23 点が次ぎ、VI 層 13 点、V 層中 11 点、VI 層中 8 点と漸減する。細別ごとの出土層位に差はない。分布は町道部分で樹林部分の実数で約倍出土しており、特に 11・12 ライン、15～18 ラインに濃い。

①無茎で柳葉形を呈するもの：側縁の膨らみが体部中央に位置するもの（1・2）と体部上半に位置するもの（3・4）に分けられる。前者にはさらに長身のもの（1）、単身のもの（2）がある。ほとんどが欠損品で各細別の点数を呈示するにはいたらないが、側縁の膨らみが体部中央に位置する短身のものが最も多い。分布は、ほぼ調査区全域だが、特に 11・12・17・18・83・84 ラインに多い。

②無茎で五角形を呈するもの：基部が僅かに凹むもの（5）、基部が凹むほか両側が内湾し「魚の尾鰭」状を呈するもの（6）がある。樹林部分の 79～83 ラインに濃く分布する。

③無茎で三角形を呈するもの：基部の形状により平基（7～10）、平基で長軸に対し基部の辺が直交しないもの（11）、凹基（12・13）、その他に分けられる。多いのは平基で 50 点、凹基は 8 点、基部が長軸と直交しないものが 4 点。平基としたもののうち逆刺部をわずかに突出させるもの（10）も半数ほどみられる。側縁は湾曲するものが多く、直線的なものが少ない。7 は粘板岩を素材に、その周縁を調整したもの。

樹林部分にも分布するが、町道部分の5～7ライン、11～18ラインが主。

有茎鏃は数が少ないが、凸基が18点、平基が5点ある。

①有茎凸基：長さ3cm以上、厚さ0.5cm以上の大形のもの(17～19)が5点で、いずれも町道部分の3～15ラインからの出土。17は基部が明瞭でないもの。長さの半分以上を基部が占めるもの(25)は1点ある。22～24は長さ3cm以下、厚さ0.5cm以下で基部が長さの3分の1程度のもの。分布は、ほぼ調査区全域だが、ほとんどが66～75ラインに分布し、14～16ラインにもある。24はスペード形に作られている。

②有茎平基：少ないが、21のように逆刺を切り取ったような形態のものもある。大きさはやはり長さ3cm以下、厚さ0.5cm以下。15・18・19・74ラインに分布。

以上のほかに無茎鏃には、細身の紡錘形を呈するもの(14)、紡錘形のもの(15)、滴形のもの(16)がある。14は基部側3分の1より先端側で先端方向からの、基部側ではやや粗雑ながら基部方向から平行剥離で調整を行う。15・16はやや湾曲した横長剥片を素材に、周縁を調整するもの。また、細別できなかったものは47点あるが、いわゆる未成品でやはり町道部分に多く分布する。

石槍又はナイフ(図V—31/別表VI—18/図版42/掲載番号26～30)

総数6点出土し、5点図示した。細別では有茎のもの4点、木葉形のもものが2点。石材は黒曜石が4点、頁岩が2点。有茎のものはV層下から、木葉形のものVI層上から出土。12・16・69・70・76ラインに分布。

26～28は、有茎凸基のもの。先端側の形態を、26・27では二等辺三角形になるように調整しており、28では篋状になるように調整している。27の先端は凸状を呈し、先鋭ではない。図示しなかったものは有茎で、基部側の欠損品。基部上半から体部にかけては周縁のみ調整している。

29・30は、木葉形を呈するもの。29は素材背面左側に刃部とするための連続した剥離が見られ、基部側は素材背面調整後、素材腹面両側からM字上に抉るように剥離している。糸懸かりを意図したものと考えられる。30は背面に礫面を持つ横長剥片を素材に周縁を調整したもの。先端側を折損する。

石錐(図V—31/別表VI—18/図版42/掲載番号31～37)

総数24点出土し、7点図示した。細別では周縁のみ加工のもものが6点と最も多く、次いで機能部を作出するものと剥片の形状を利用したもの、両面調整により全面に剥離が見られるものが各4点、つまみ付きナイフを転用したものと、基部側に抉りを持つものが各2点、棒状のもの、剥片の一端に機能部を作出するものが各1点。石材別では黒曜石22点、頁岩が2点。層位別ではV層下が11点と最も多く、VI層上8点が次ぐ。つまみ付きナイフを転用したものは、VI層からのみ出土。分布は、ほぼ調査区全域。

31は棒状のもの。両端を機能部としたようで図の下端は潰れ、図の上端には先端から槌状に剥離した面が2面見られる。また断面を丸みのある三角形に調整しているが、体部中央の一面には抉り状の剥離を施している。

32は周縁のみ加工したものであるが、背面側は全面調整されている。

33は剥片の一端に機能部を作出したもの。横長剥片の末端部を調整することで機能部とし、素材のまま未調整の部分をつまみにしている。

34は機能部を作出しているもので、機能部は両面を、つまみ部は周縁を加工している。機能部先端は回転により磨耗している。

35は基本的に剥片の形状を利用し、機能部周辺を両面調整したものであるが、基部側に抉り状の加工をしている。

36は素材を両面調整することで機能部を作出しているもの。

37はつまみ付きナイフを転用したもので、刃部を再加工して細長い機能部を作出している。

つまみ付きナイフ（図V—32／別表VI—18／図版42・43／掲載番号38～49）

総数32点出土し、12点図示した。全て縦長のもので、加工による細別では両面を調整するもの3点、背面のみ調整するもの14点、背面全面加工で、腹面一側縁を調整するものが6点、つまみ部の破片9点がある。石材別では黒曜石が25点で、頁岩が7点。層位ではV層下が17点と最も多く、V層中7点、VI層上6点。背面全面加工で腹面一側縁を調整するものはVI層上で4点、V層下で1点出土している。ほかは全面加工のものがVI層、周縁加工のものがV層中に多い。全体の分布は町道部分に偏るが、背面全面加工で腹面一側縁を調整するものは樹林部分にやや多い。

両面を調整するものは、全面調整するもの2点、周縁のみ調整するもの1点に分けられる。39・40は刃部が三角形状を呈する。

背面全面加工で、腹面一側縁を調整するものは、左側縁の腹面を調整するものに限られる。刃部の形状は、41のように槍先状を呈するもの、42・43のように方形を呈するものがある。なお、42・43はメノウ質頁岩を石材としている。

背面のみ調整するものは、全面加工するもの2点、周縁のみ加工するもの12点に分けられる。形状は素材の形状によっているため多様であるが、45・46のように半月状を呈するものが6点、47のようにつまみ部と刃部の軸線が斜行するものが2点ある。

つまみ部の破片としたものは、49のように刃部を折れ調整により切り離れた後、つまみ部側が残されたもの。

スクレイパー（図V—32・33／別表VI—18／図版43／掲載番号50～68）

総数70点出土し、19点図示した。細別では篋状石器2点、ラウンドスクレイパー4点、エンドスクレイパー13点、サイドスクレイパー39点、挟入石器10点、破片2点である。石材は頁岩が篋状石器1点、サイドスクレイパー6点あるほかは、全て黒曜石。層位ではV層下が34点と最も多く、次いでVI層上が13点、V層中が10点。エンドスクレイパー・ラウンドスクレイパーともV層下に多く、篋状石器はVI層上に限られる。なお、V層上・中では挟入石器2点を除きサイドスクレイパーのみが出土している。分布は町道部分に偏るが、特に5・6・11～19・76～79・81～83ラインにやや多い。ただ、エンドスクレイパーは2～6ラインと82～84ラインで主に出土し、ラウンドスクレイパーは70・82・84ラインからのみ出土している。篋状石器は数も少ないが76・79ラインからのみ、挟入石器は6・7・11・18・79・80・85と他の器種の分布が薄い地点から出土している。なお、ラウンドスクレイパー・エンドスクレイパーの分布する範囲は低地への境界付近にあたる。

50・51は篋状石器。50は撥形のもので、腹面には使用によるとみられる光沢が観察される。調整は背面のみで、刃部には端部からの再加工の剥離が見られる。59は五角形状のもので、横長剥片を素材に両面調整を施す。調整は腹面では基部と刃部、背面では周縁に至る。

52・53はラウンドスクレイパー。52は腹面に刃部を形成するもの。53は右側縁に円礫面を持ち、加工はなされていないが形態からラウンドスクレイパーとした。図示していない残りの2点の内、1点は背面に刃部を持つ52に類似したもの。もう1点は背面に円礫面を持ち、背面周縁及び腹面基部に剥離を加えたもの。

54～56はエンドスクレイパー。刃部の位置により素材末端のもの7点、素材打面側のもの3点、素材

側縁のもの3点に分けられる。54は素材側縁に刃部を持つもので、素材末端に円礫面、素材右側縁に折断面をもつ。55は素材末端に刃部を持つもので、打面に角礫面を持つ。側縁のうち右は背面、左は腹面に加工を施す。また打面側両側縁には抉りが見られ、つまみ付きナイフを再加工した可能性がある。56は素材打面側に刃部を持つもので、素材末端に円礫面を持つ。

57～59は抉入石器。抉りの入る面により片面のみの加工7点、抉りが2ヶ所あり片面のみの加工と両面からの加工もつもの2点、両面からの加工1点に分けられる。57・59は片面のみの加工で抉りが作られるもの。57は背面に円礫面を持ち、両側縁は潰れている。基部側は折断されている。抉り部分の腹面には使用による線条痕が無数に見られる。59は磨耗したサイドスクレイパーの右側縁の一端に抉りを入れたもの。58は側縁の一端に両側からの加工で抉りを入れたもの。抉り部は潰れている。なお、抉り部腹面の線条痕は未掲載のものにも見られる。

60～68はサイドスクレイパー。加工部位と刃部の形状から背面の側縁に弧状の刃部をもつもの8点、背面の側縁に直線状の刃部をもつもの6点、腹面に直線状の刃部をもつもの4点、その他に分けられる。60は横長剥片を素材に末端の背面と打面側の両面を弧状の刃部とするもの。右側は折断している。63は縦長剥片の背面右側縁を弧状の刃部とするもの。64は横長剥片の右側縁を両面調整し直線状の刃部とするもの。65は縦長剥片の背面左側縁を直線状の刃部とするもの。67は横長剥片の背面を全面加工、左側縁腹面を調整し、主に素材末端を直線状の刃部とするもの。68は縦長剥片の左側縁背面を直線状の刃部とするもの。末端側は折断されている。61・62は縦長剥片の背面右側縁を内湾した刃部とするもの。61の打面側は折断後、槌状剥離がなされる。66は縦長剥片の背面両側縁に調整を施し、右側縁は直線状、左側縁は内湾した刃部とするもの。

両面調整石器 (図V—33 / 別表VI—18 / 図版43 / 掲載番号69)

総数2点出土し、1点図示した。69は、両面を粗く調整し、断面凸レンズ状にしている。先端部とみられる側を折損する。黒曜石製で球顆を持ち、光沢が強い石質。未掲載のものは黒曜石製で、欠損品。

ピエス・エス・キーク (楔形石器) (図V—33 / 別表VI—18 / 図版43 / 掲載番号70～71)

総数56点出土し、3点図示した。細別では剥片素材で対向する二側縁に剥離が見られるものが26点、剥片素材で対向する四側縁に剥離の見られるものが30点ある。石材では黒曜石が55点、頁岩が1点。層位ではV層下が30点と最も多く、VI層で9点、VI層上で7点、V層上で5点出土している。分布は特に偏らないが、5・12・14～16・18・70・76・80・81・83・84ラインにやや多い。

70は対向する二側縁に剥離が見られるもの。71は対向する四側縁に剥離が見られるもの。

Rフレイク

総数80点出土した。今回図示したものはない。石材では黒曜石が73点、頁岩7点。層位ではV層下36点が多く、VI層上16点、V層中12点が次ぐ。分布は町道部分にやや多く、5・6・11・12・17・18・69・70・76・78・79・83・84ラインの6か所に集中する。

フレイク

総数4258点出土した。今回図示したものはない。石材別では黒曜石が4171点と最も多く、次いで緑色泥岩が52点、頁岩30点、玉髓3点、粘板岩・チャート各1点。層位ではV層下1739点が多く、VI層上1373点、VI層296点、VI層下262点、VI層中216点、V層中203点、V層上105点と続く。分布は樹林

部分のほうが2456点と多いが、全体を見ると11・12、15～18、69・70、75～77、82・83の5か所の各ラインに集中する。緑色泥岩については12・16ラインに集中している。

黒曜石のフレイクは大半が破片で、石器素材になりうるものは少ない。ただ、ピエス・エスキューの使用に伴う薄手のもの、石器刃部形成に関わるものが少量つつ含まれる。また緑色泥岩のフレイクは石斧製作に関わるものである。

石核 (図V—33 / 別表VI—18 / 図版43 / 掲載番号72～74)

総数21点出土し、3点図示した。細別では、扁平な剥片などの素材の両面を作業面とし、最終形態がディスク状をなすもの9点、打面と作業面を頻繁に入れ替えるもので、最終形態がサイコロ状を呈するもの10点、その他に分けられる。石材は全て黒曜石。層位ではV層下10点が多く、V層中5点、VI層上4点。分布は町道部分に偏る。

72・73はディスク状をなすもので、74はサイコロ状をなすもの。72は角レキを素材に、作業面を二面に固定してその周縁を打面に剥片を剥離している。剥離作業では長さ2cm弱、幅2.5cm前後で末端が蝶番状になる剥片三枚以上が得られている。73は剥片を素材に、腹面を主たる作業面とし、背面は打面調整程度の加工がなされる。74は角礫を素材に、両面と小口面一面を作業面とし、打面と作業面を数回入れ替えながら剥片剥離を行っている。

磨製石器群

石斧 (図V—33 / 別表VI—18 / 図版44 / 掲載番号75・76)

総数2点出土し、図示した。いずれも町道部分のV層下から出土している。75は「蛇紋岩」製で、刃部側を欠損している。擦り切りによる整形後、全面を研磨している。76は緑色泥岩の円礫を素材に、敲打による整形後、ほぼ刃部のみを研磨している。刃部は片刃の偏刃で、偏った側の刃部は磨耗している。

石斧片 (図V—34 / 別表VI—18 / 図版43・44 / 掲載番号77・78)

総数8点出土し、2点図示した。なお、ほかに2点、図版43 下列に示した(詳細はⅧ章3節2項参照のこと)。整形法の分かるものはない。刃部側の破片4点、基部側の破片1点、体部の破片が3点。石材では緑色泥岩4点、「蛇紋岩」4点。層位ではV層下から3点、VI層・VI層上から各2点、Ⅲ層から1点。分布は樹林部分地区に偏っている。

77は緑色泥岩の刃部側の破片。刃部は片刃。片面に非研磨面の凹みがみられることから礫ないし剥片を敲打後研磨し整形したものとみられる。78は「蛇紋岩」製の刃部側破片。薄手のもので、両刃とみられる。

石斧原材 (図V—34 / 別表VI—18 / 図版44 / 掲載番号79)

総数10点出土し、2点(接合)図示した。石材は全て緑色泥岩。層位ではV層下とVI層上で各4点、V層中とVI層で各1点。分布は町道部分で点在するほか71ラインで接合して1個体になる4点が出土している。79は棒状の円礫に敲打による整形を加えたもの。整形途中で折損したものである。図示しなかったものには大形の剥片を素材にしているものが3点ある。

礫石器群

石錘（図V—34／別表VI—18／図版44／掲載番号80）

総数1点出土し、図示した。安山岩の扁平な円礫を素材に、長軸両端両面に打ち欠きを加えたもの。出土層位はV層下。

たたき石（図V—34／別表VI—18／図版44／掲載番号81）

総数13点出土し、1点図示した。石材は砂岩が11点と最多で、1点は片麻岩とみられるもの。層位はV層下6点、V層中・VI層上で各3点、V層上から1点。81は円礫の各面に敲打痕が見られるもの。ほかの未実測品は扁平な円礫の側面、棒状礫の端部などに敲打痕がみられるもの。

凹石（図V—34／別表VI—18／図版44／掲載番号82）

総数5点出土し、1点図示した。石材は全て砂岩製。層位はVI層上から3点、V層下から2点。全て樹林部分からの出土。82は扁平な棒状礫の両面に2か所づつ凹みが見られるもの。図示していない1点の凹みは顕著ではない。

すり石（図V—34／別表VI—18／図版44／掲載番号83・84）

総数8点出土し、2点図示した。石材は6点が砂岩で、安山岩、泥岩が各1点。層位ではV層下で5点、V層中で2点、VI層で1点。町道部分にやや多い。83・84のほか図示していないものも全て断面が三角形を呈するすり石。1点機能面が敲打のままのものが含まれる。8点中5点が欠損品。

砥石（図V—34／別表VI—18／図版44／掲載番号85・86）

総数15点出土し、2点図示した。石材は全て砂岩。層位はV層下で13点、V層中・VI層上各1点。85は長さ約6cmのもので、一面には広く、もう一面は部分的に砥面が見られる。86は円礫を打ち欠きにより形態を整えたもので、各面に機能面が見られる。未掲載のものは小さく割れたもの。

加工痕のある礫片

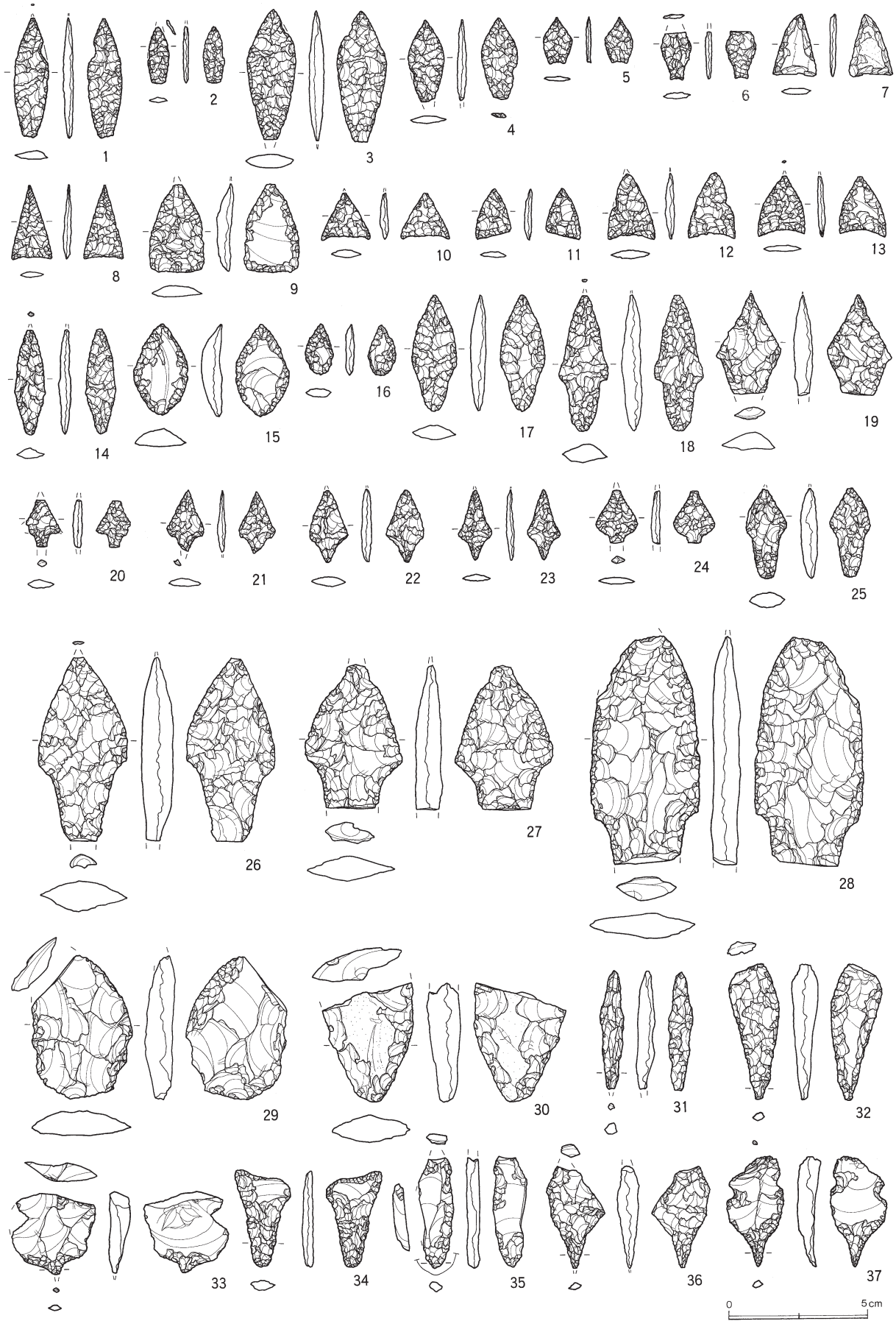
1点出土したが、図示していない。石材は凝灰岩。わずかに円礫面を残し、全面に敲打痕が見られるもの。

自然遺物

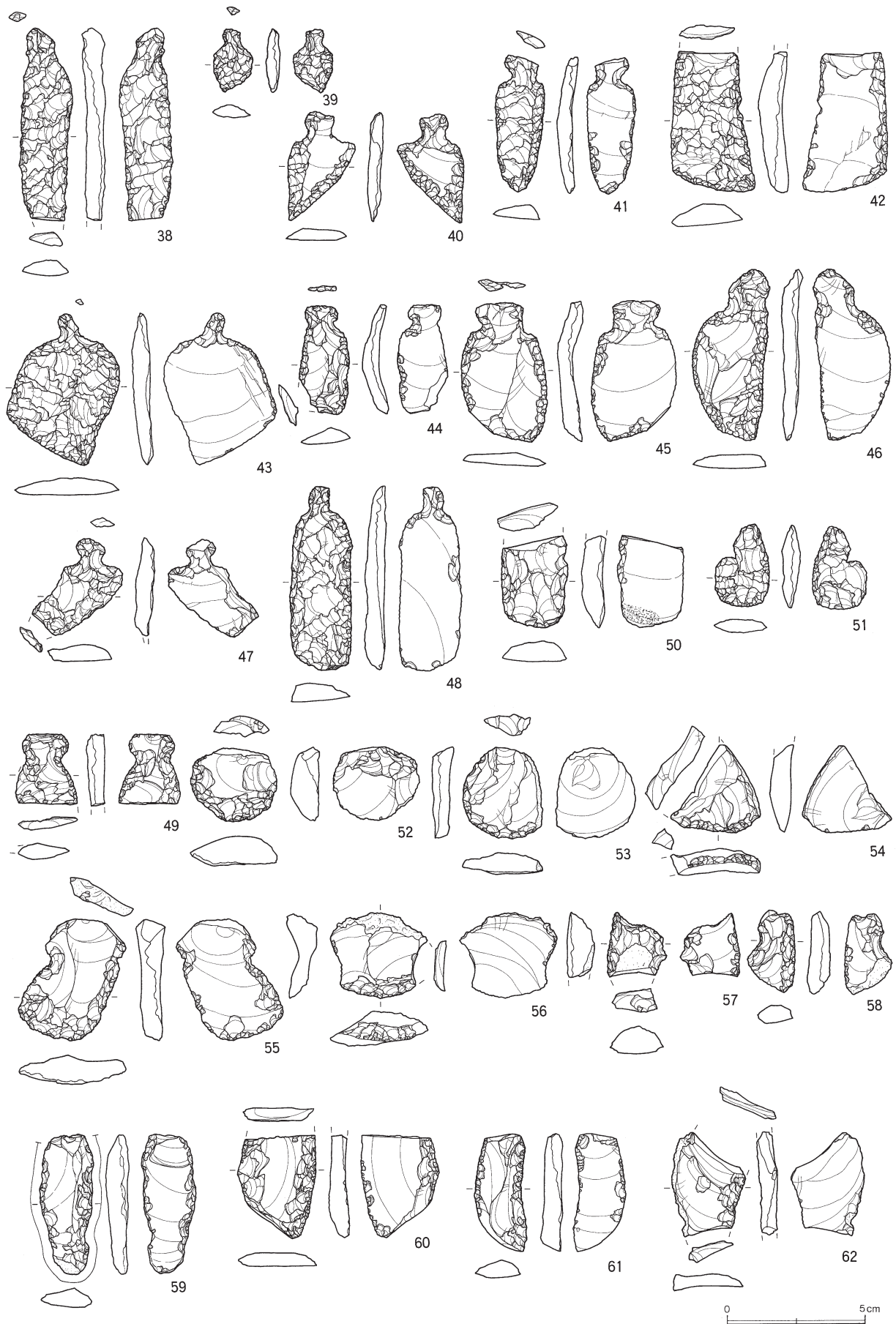
礫・礫片

礫が2401点、礫片が870点出土した。層位ではV層下の点数が多い。分布では町道部分が多い。

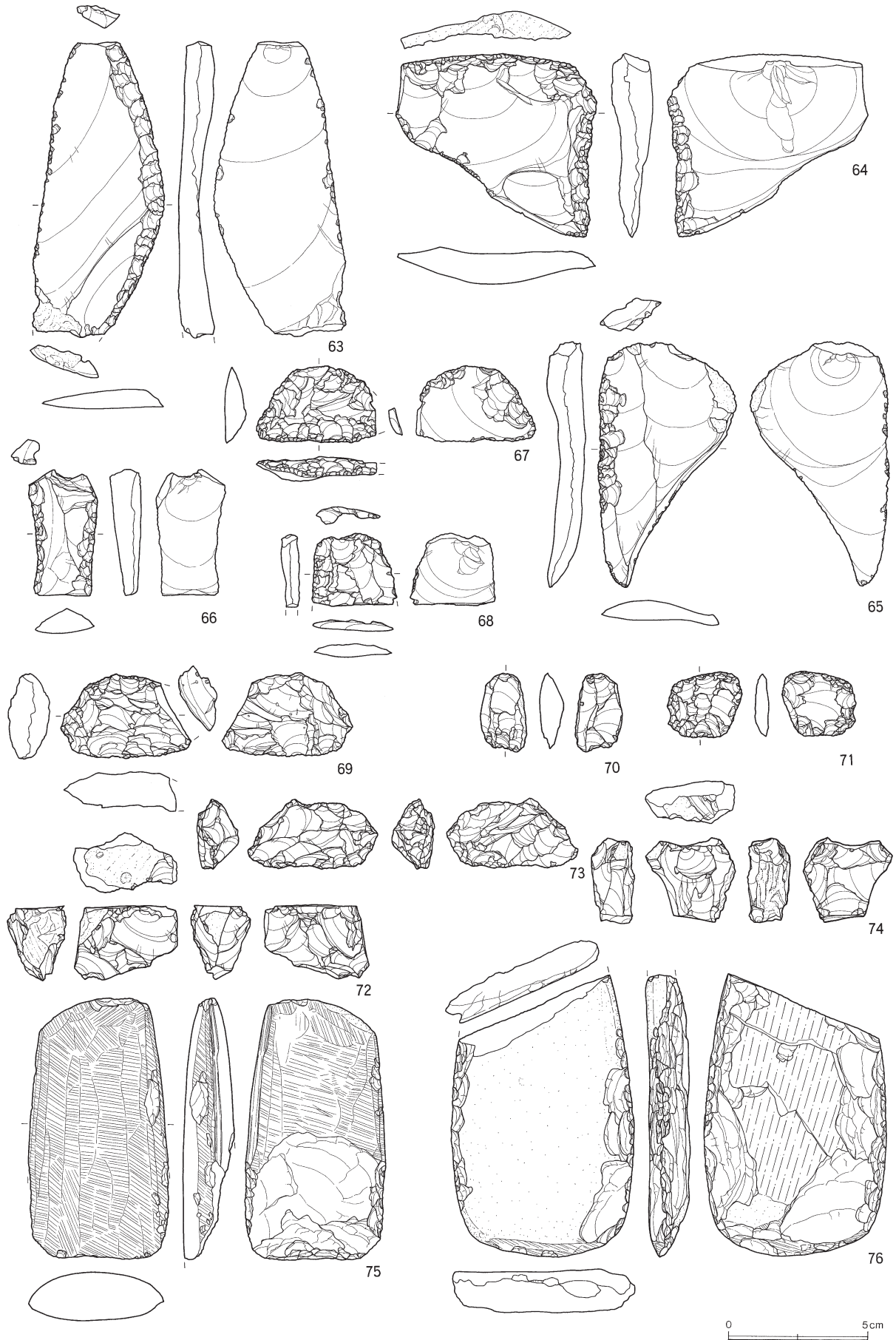
（福井）



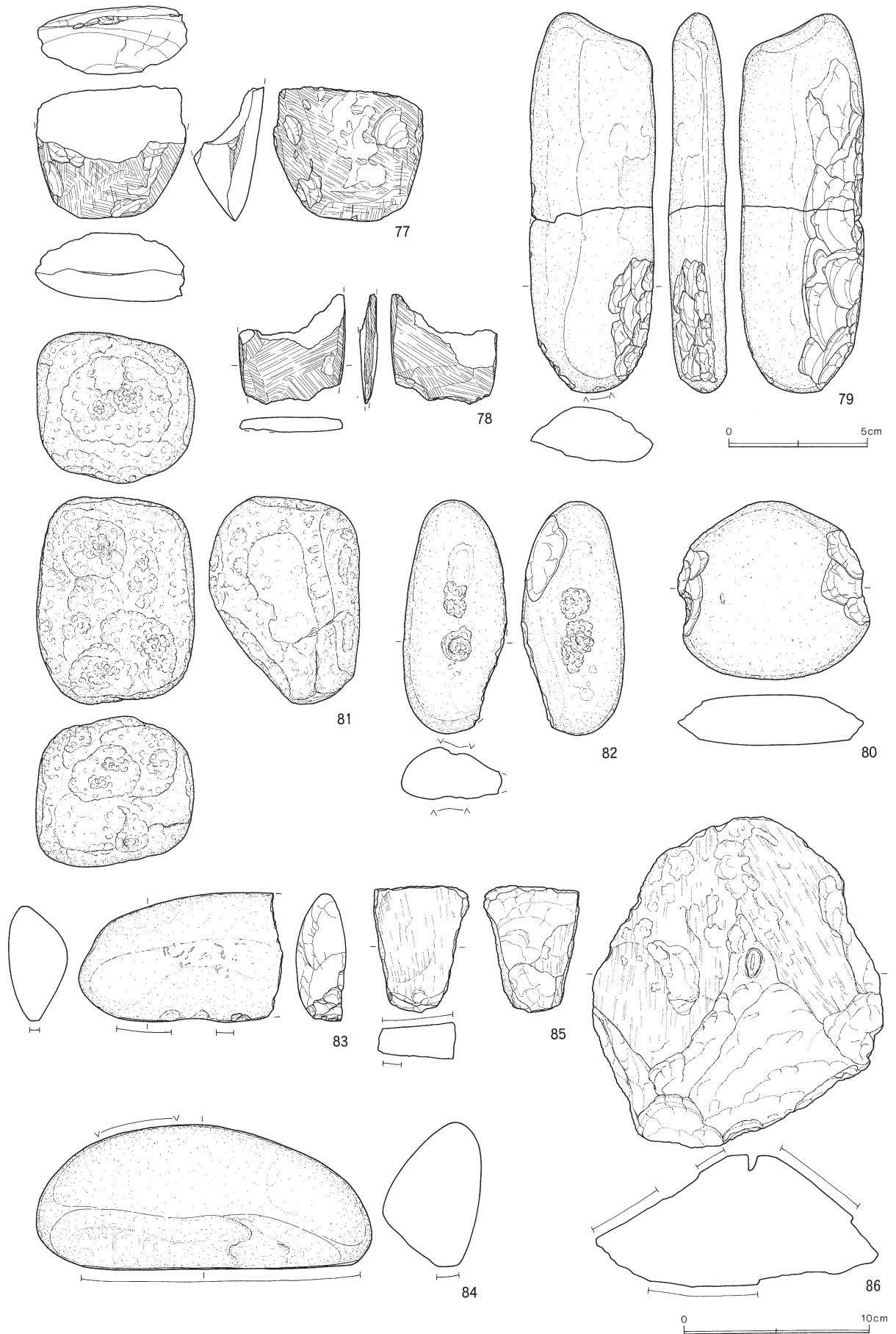
図V-31 包含層出土の石器 (1)



図V-32 包含層出土の石器 (2)

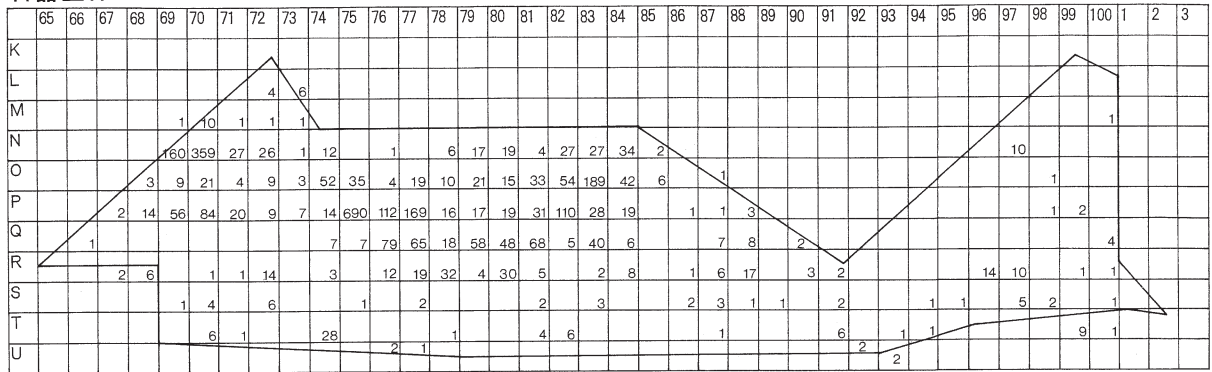


図V-33 包含層出土の石器 (3)

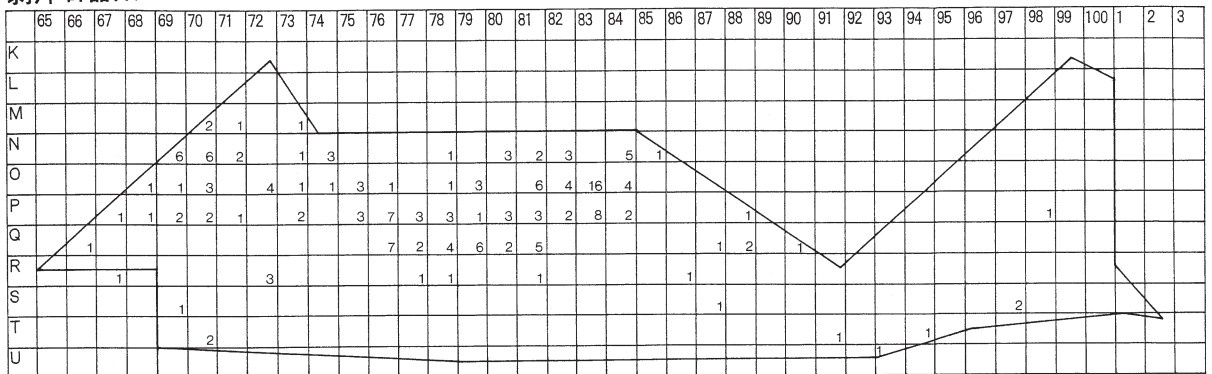


図V-34 包含層出土の石器 (4)

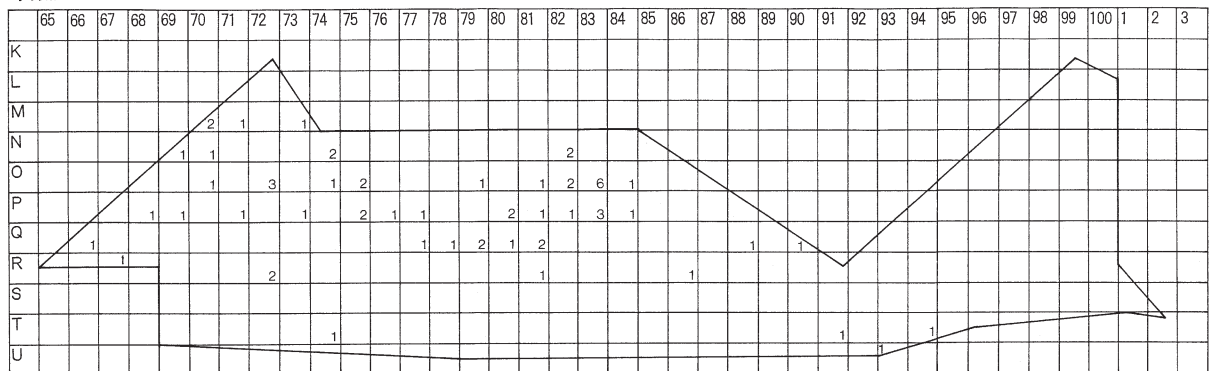
石器全体



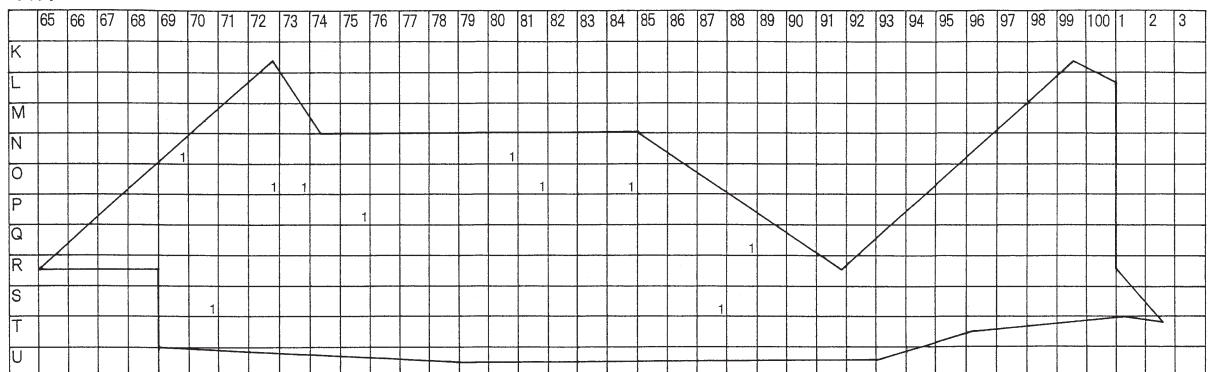
剥片石器類



石鏃

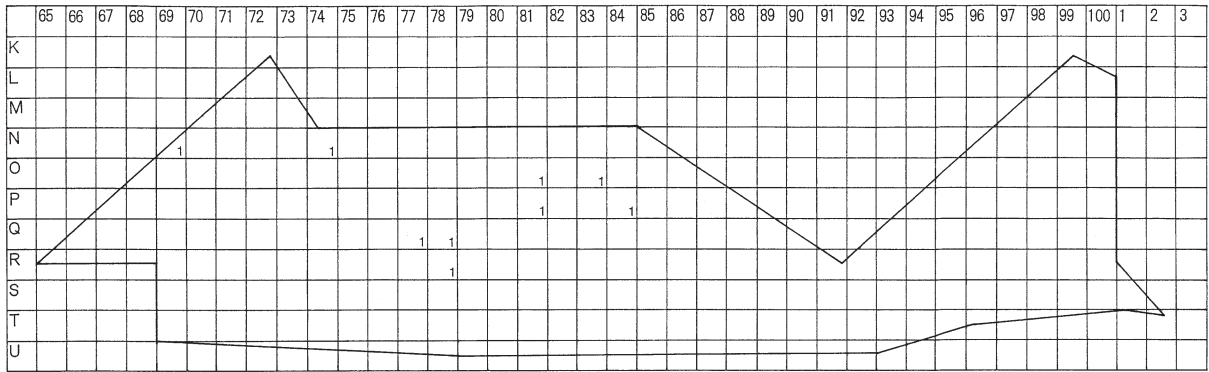


石錐

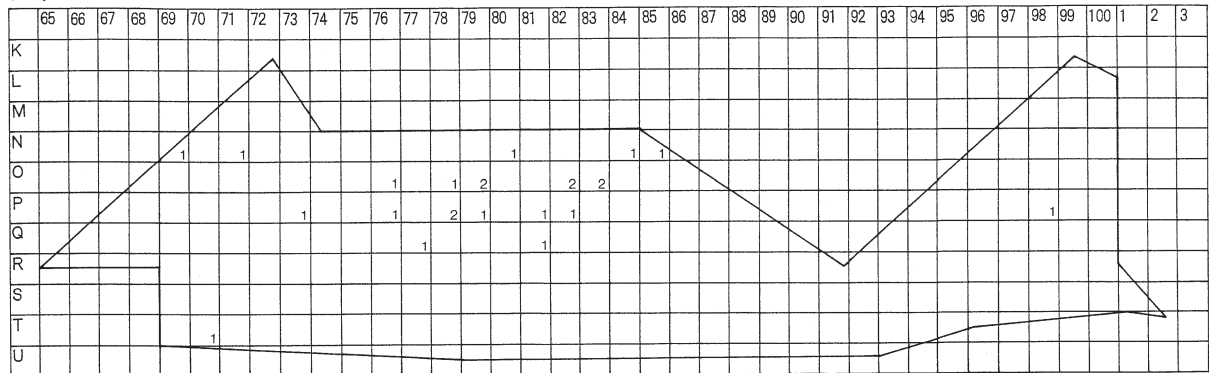


図V-35 包含層出土石器分布図(1)

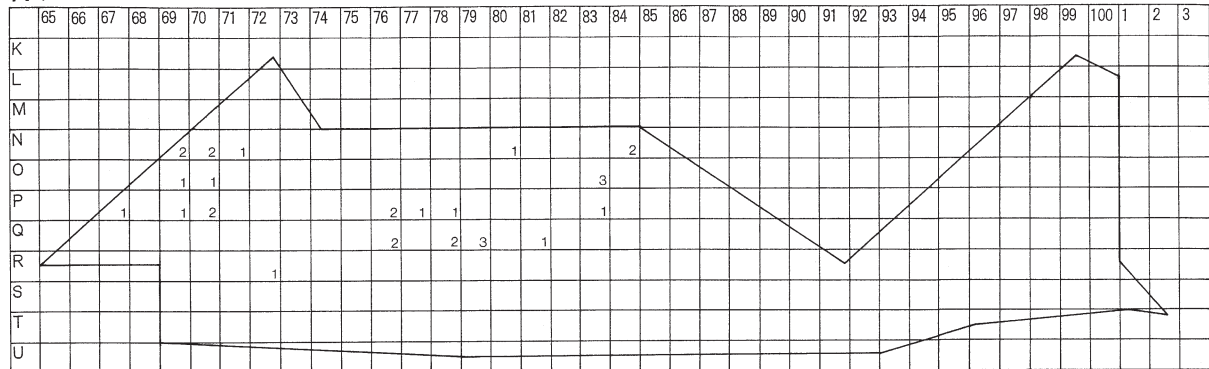
つまみ付きナイフ



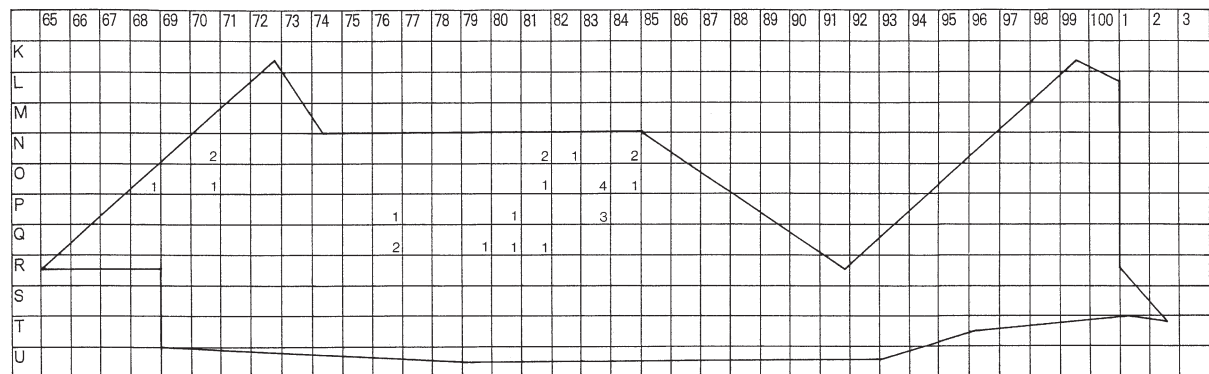
スクレイパー



Rフレイク

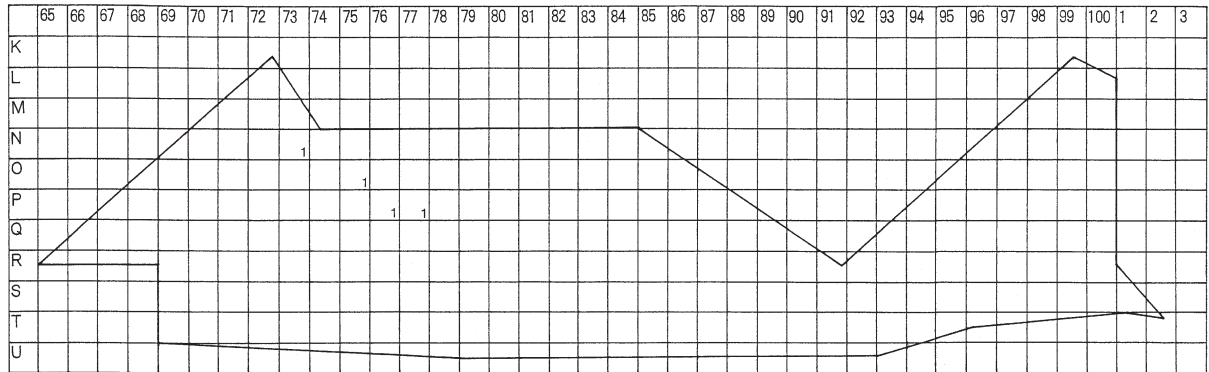


ピース・エスキュー

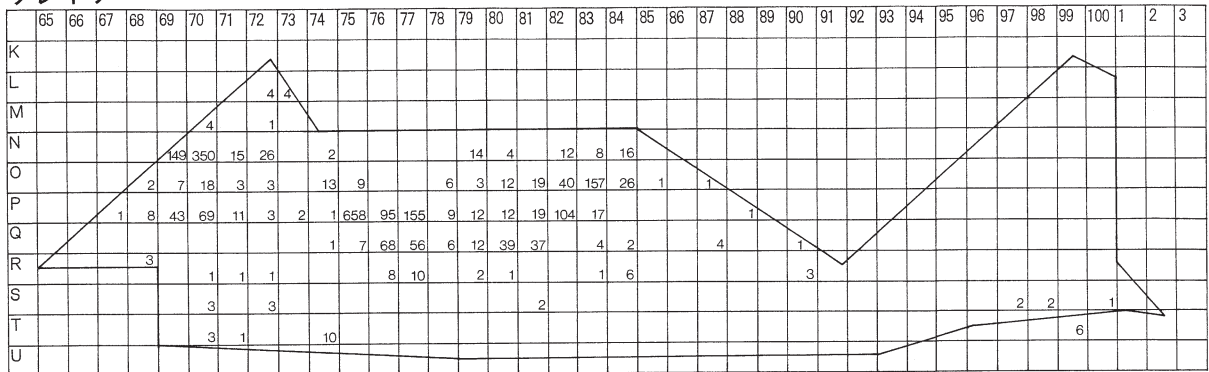


図V-36 包含層出土石器分布図(2)

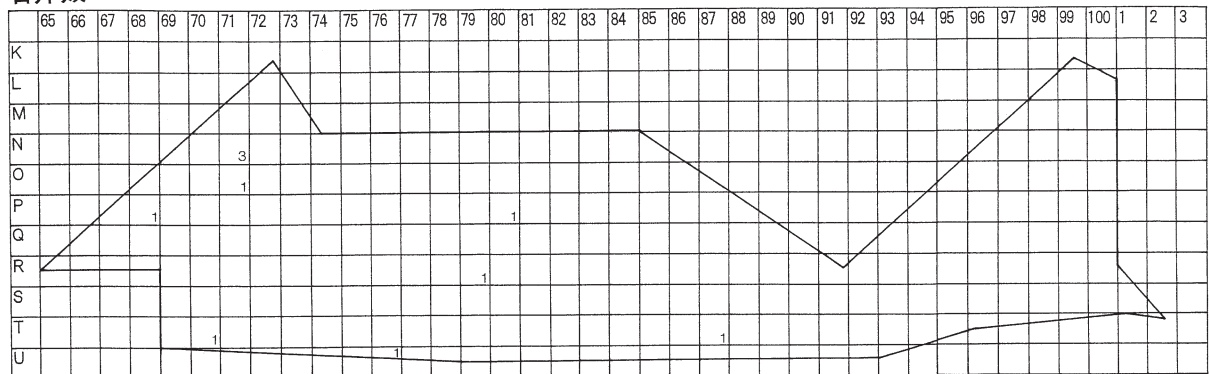
石核・原石



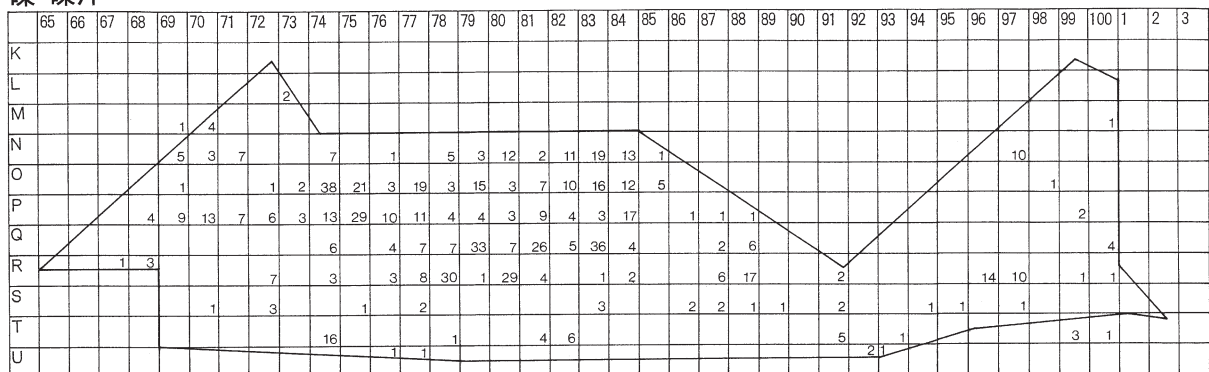
フレイク



石斧類

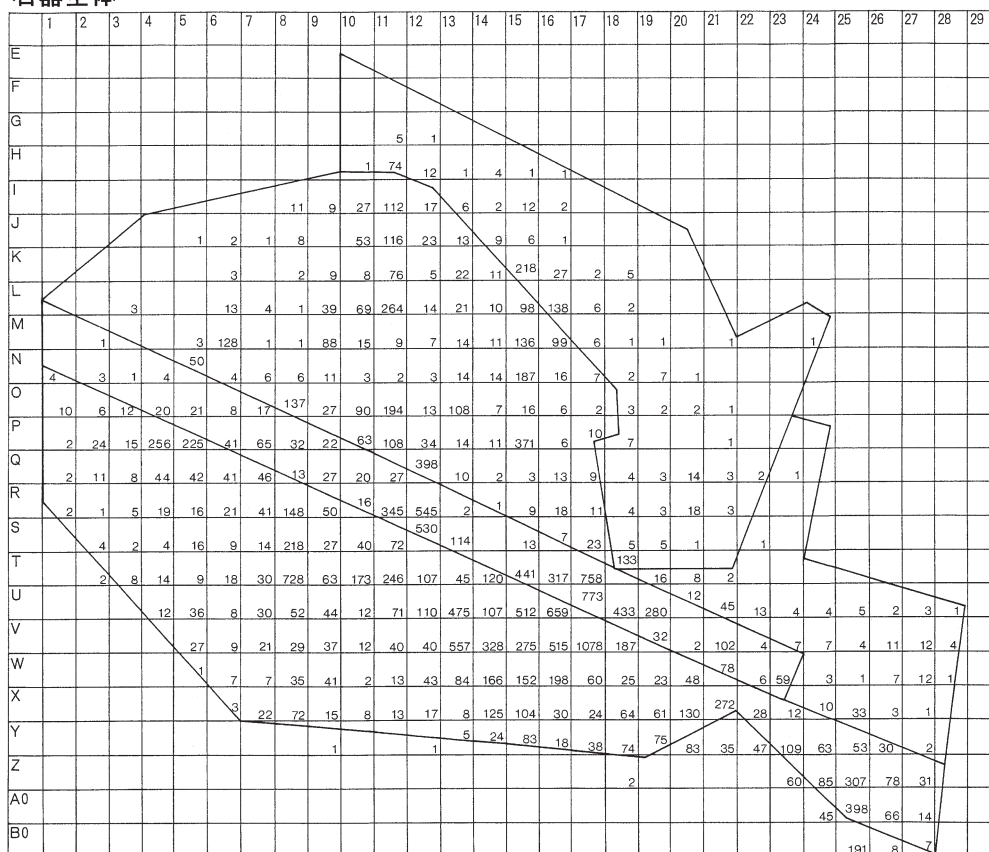


礫・礫片

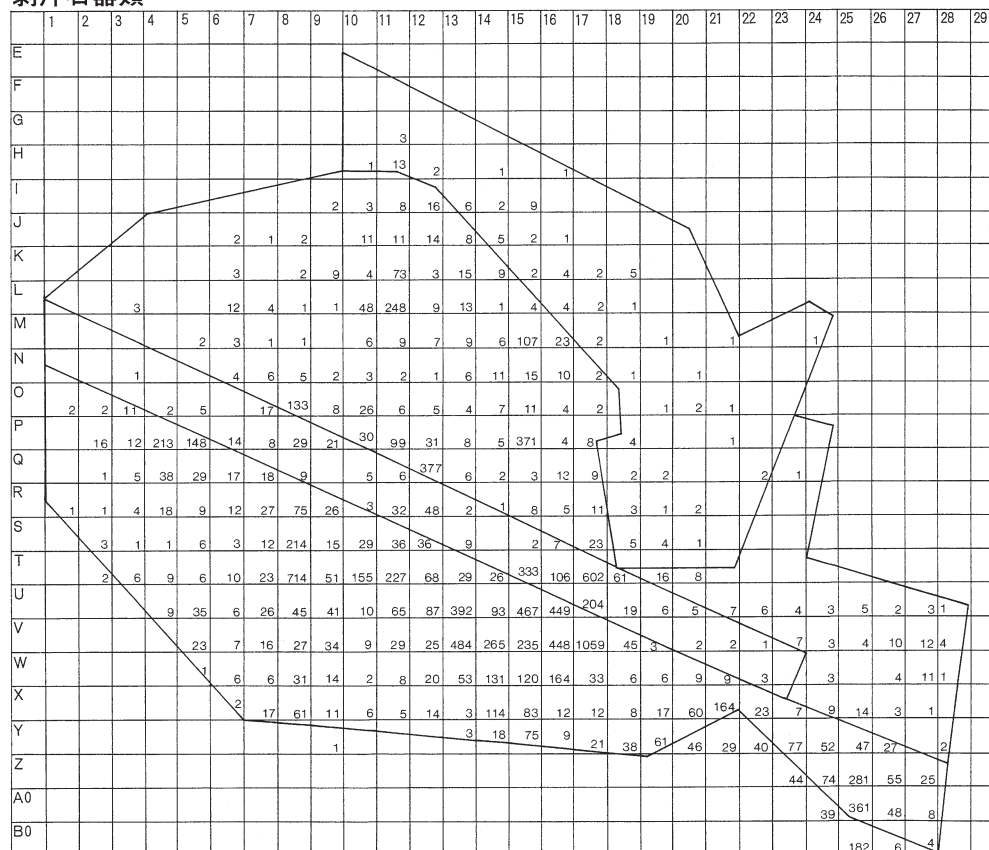


図V-37 包含層出土石器分布図(3)

石器全体

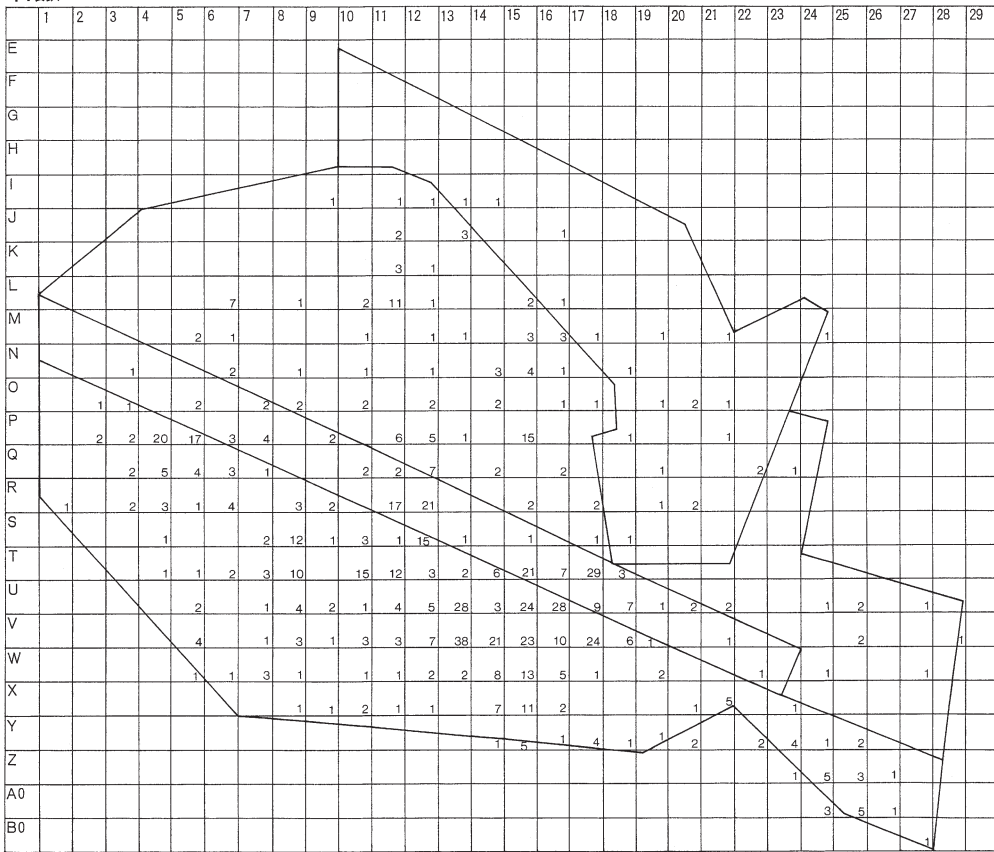


剥片石器類

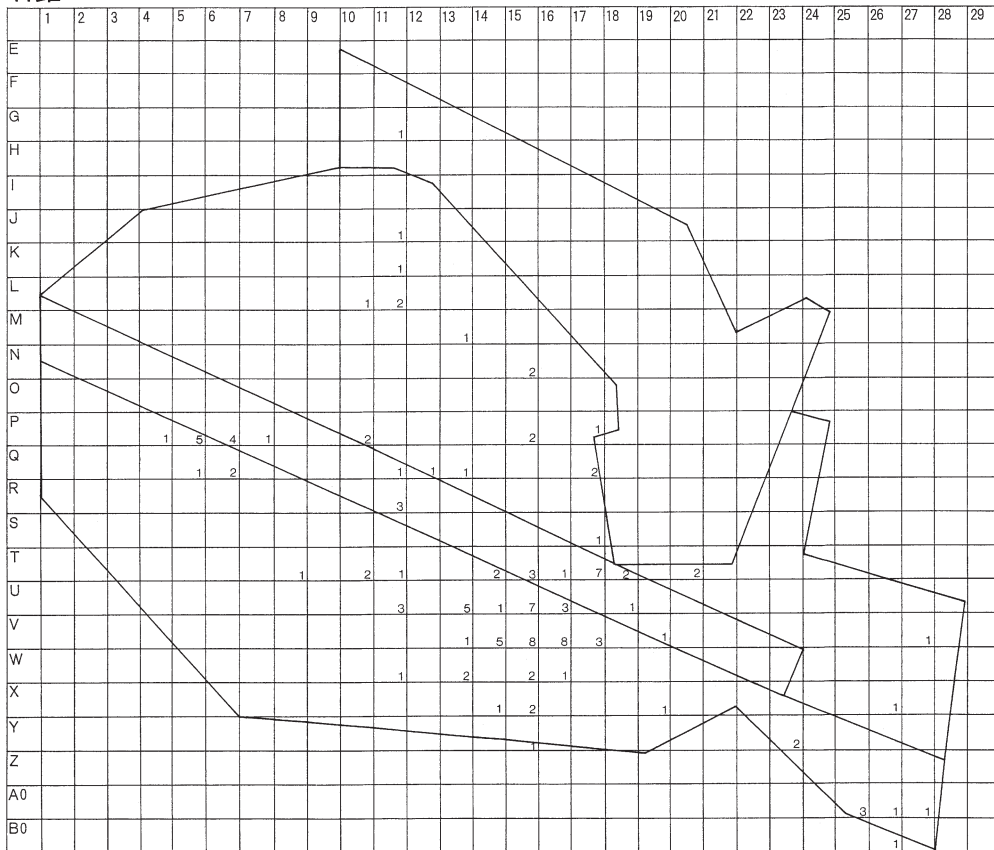


图V-38 包含層出土石器分布图(4)

石鏃

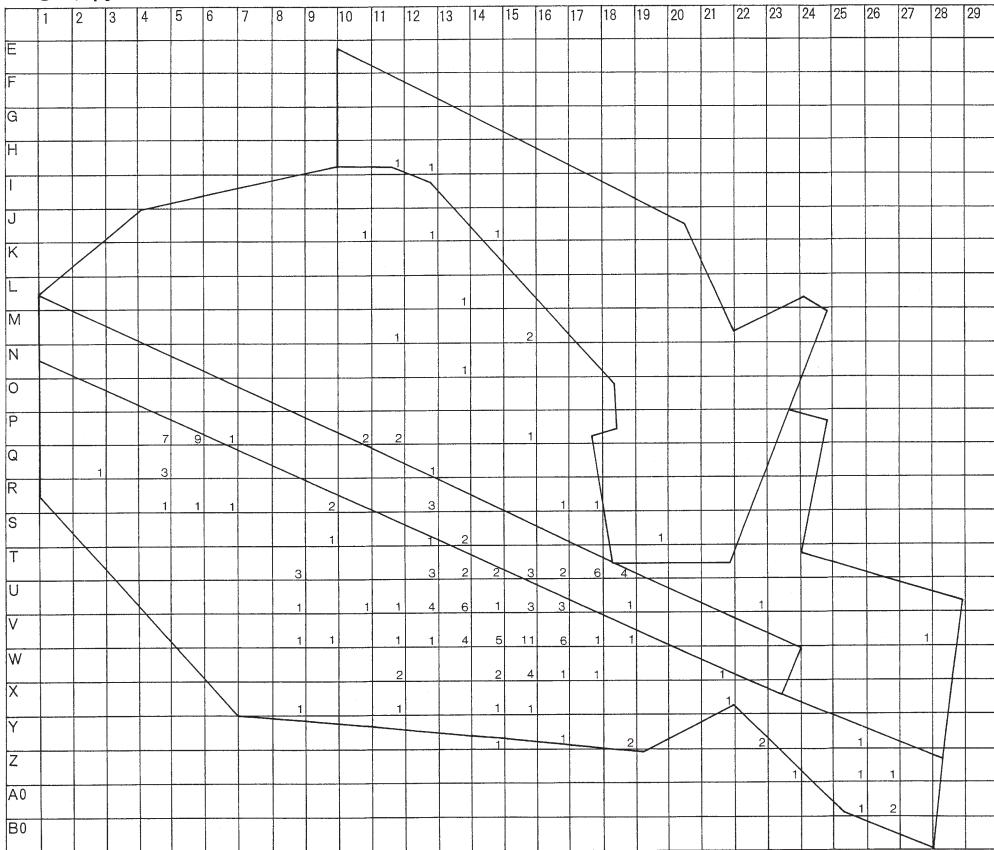


石錐

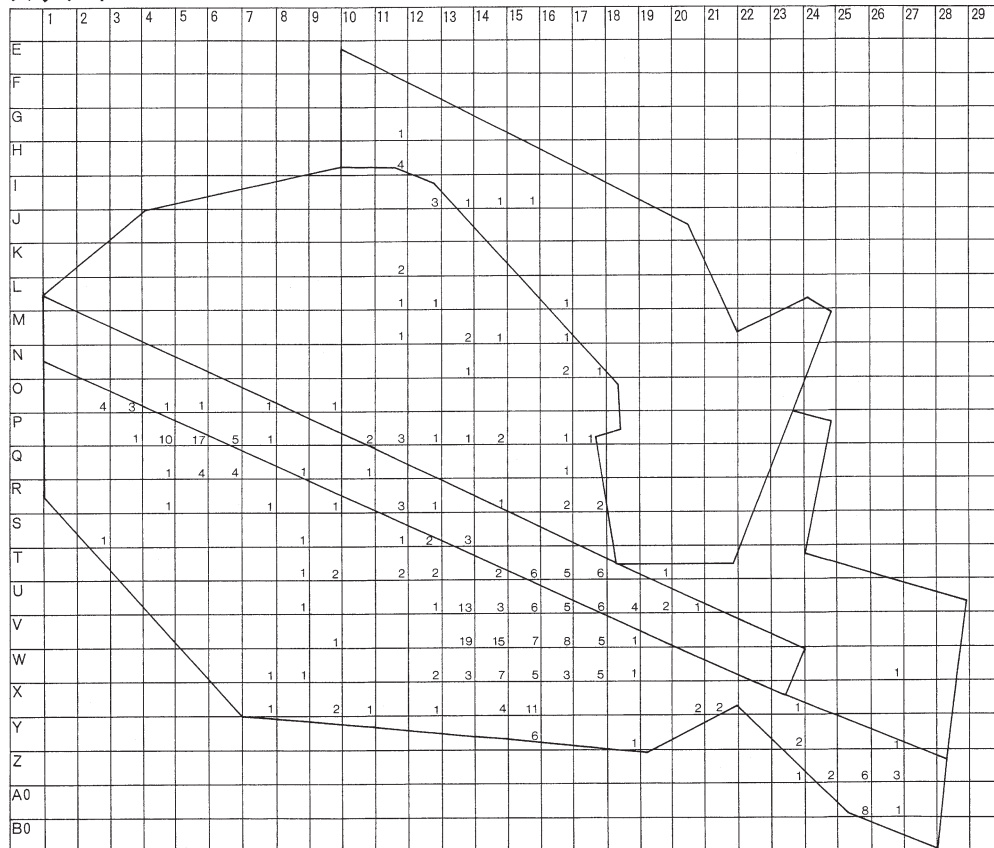


図V-39 包含層出土石器分布図(5)

つまみ付きナイフ

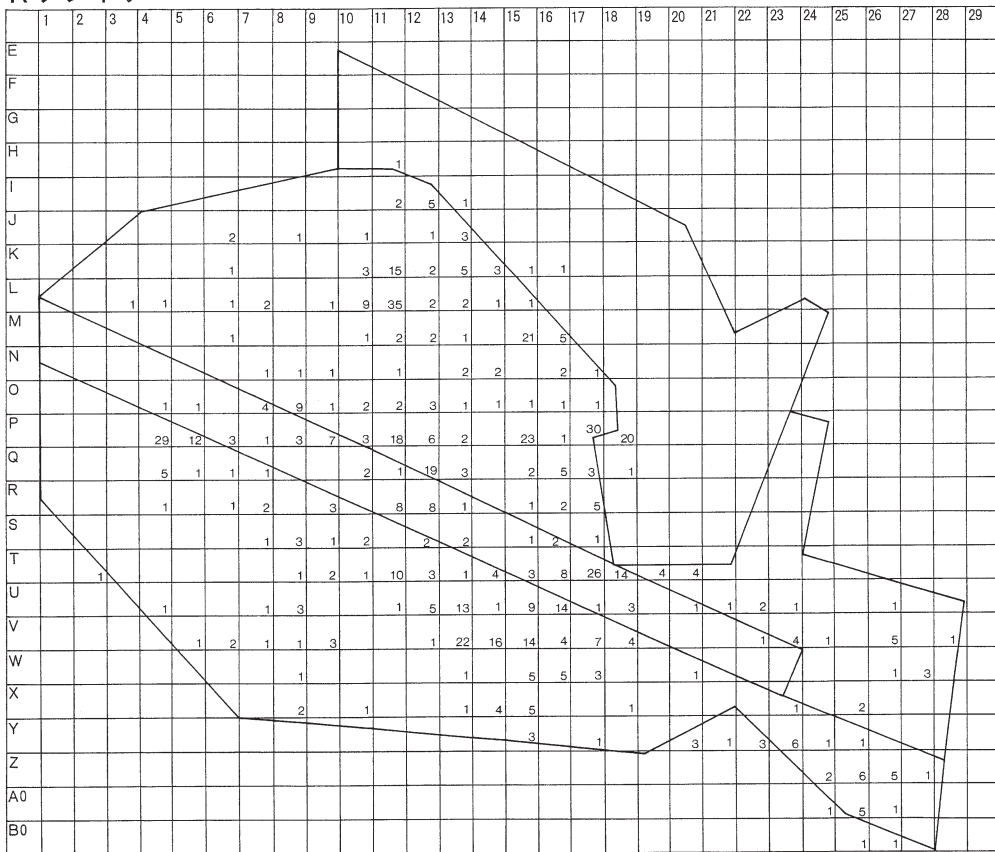


スクレイパー

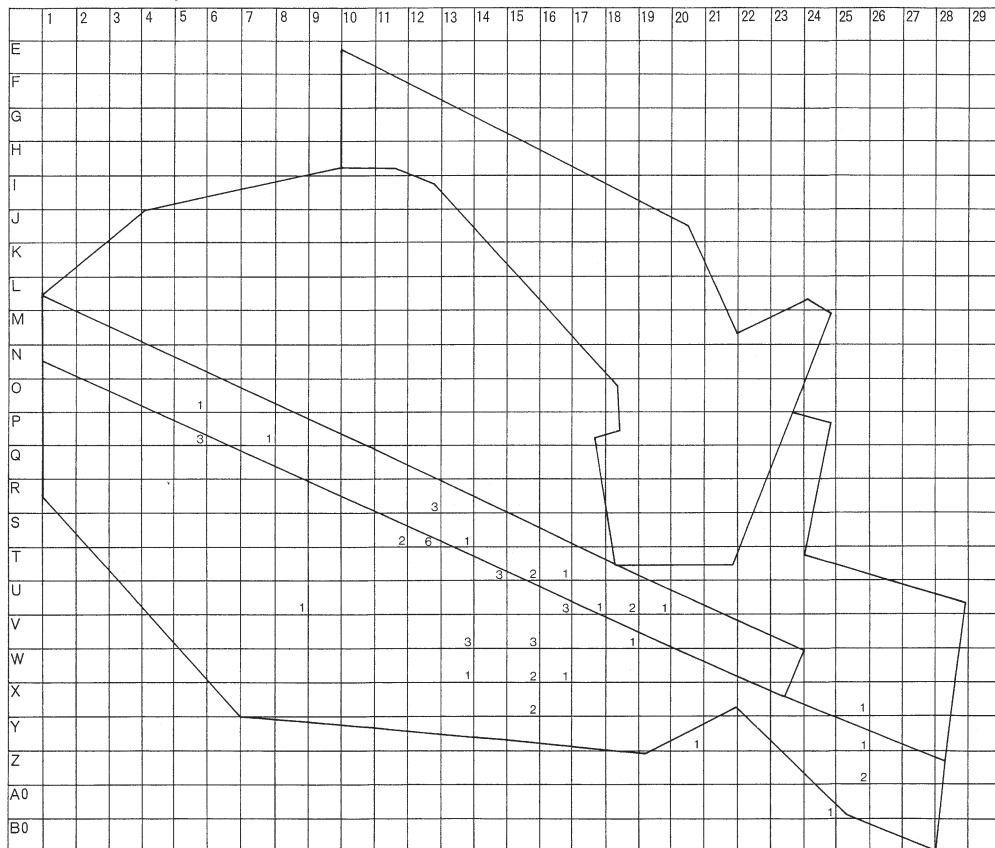


図V-40 包含層出土石器分布図(6)

Rフレイク

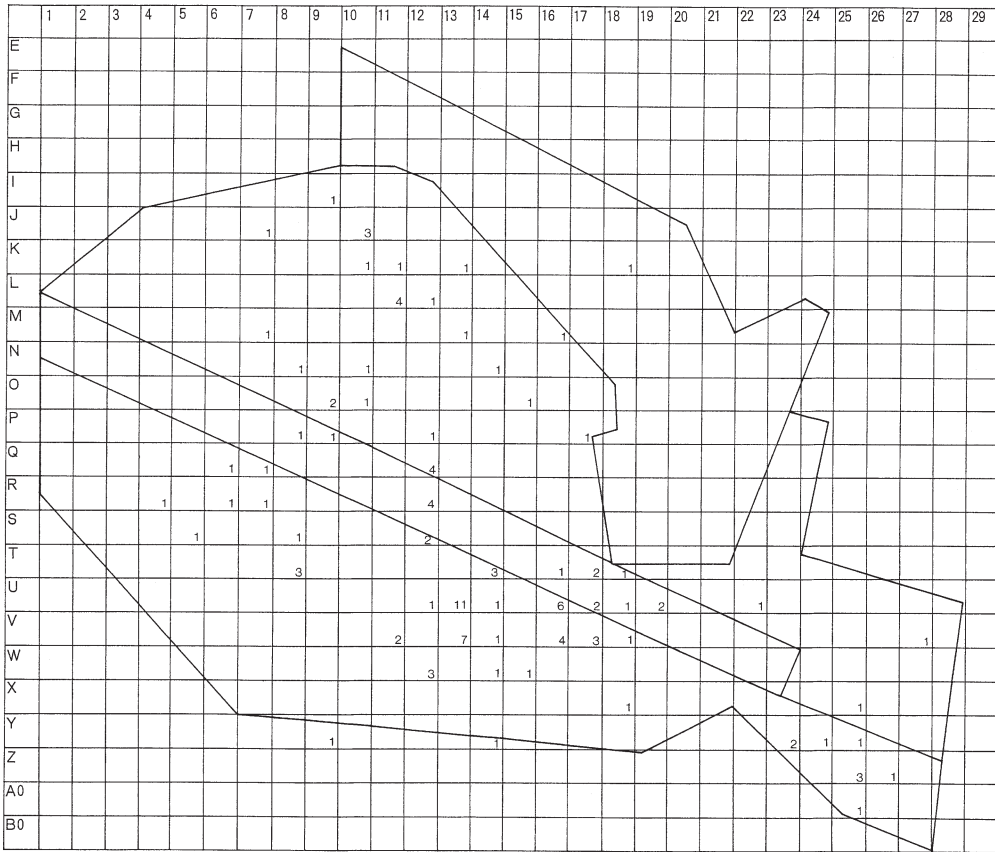


ピース・エスキーユ

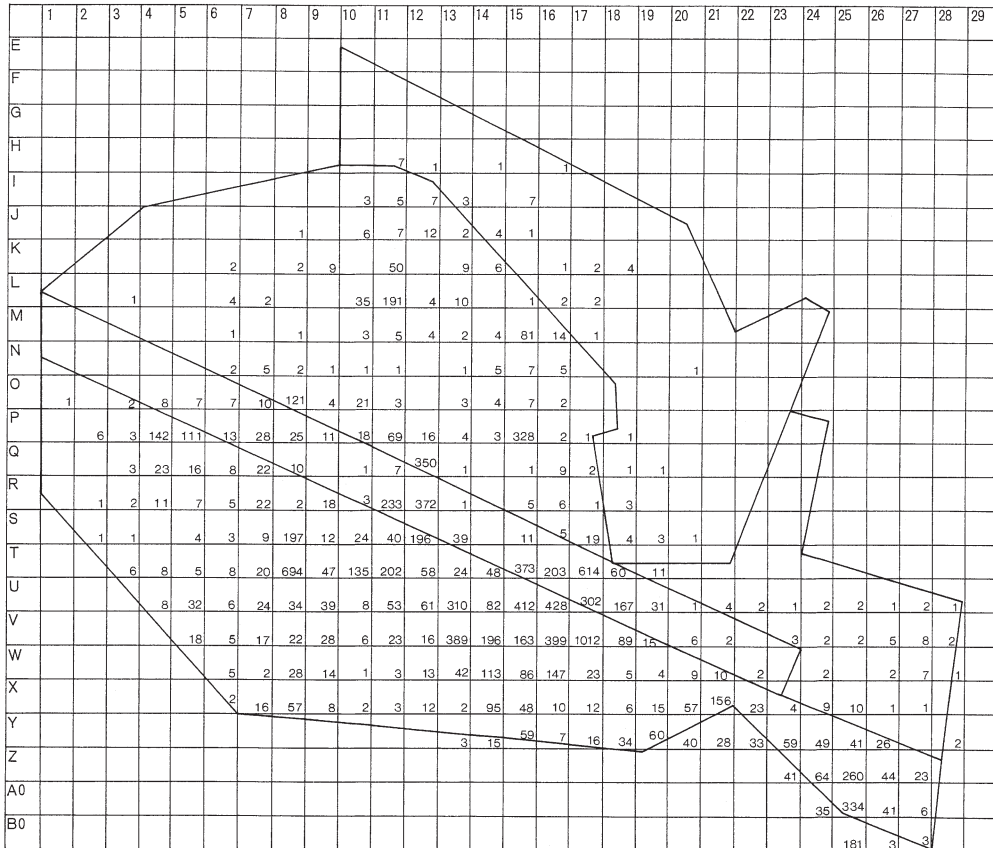


図V-41 包含層出土石器分布図(7)

石核・原石

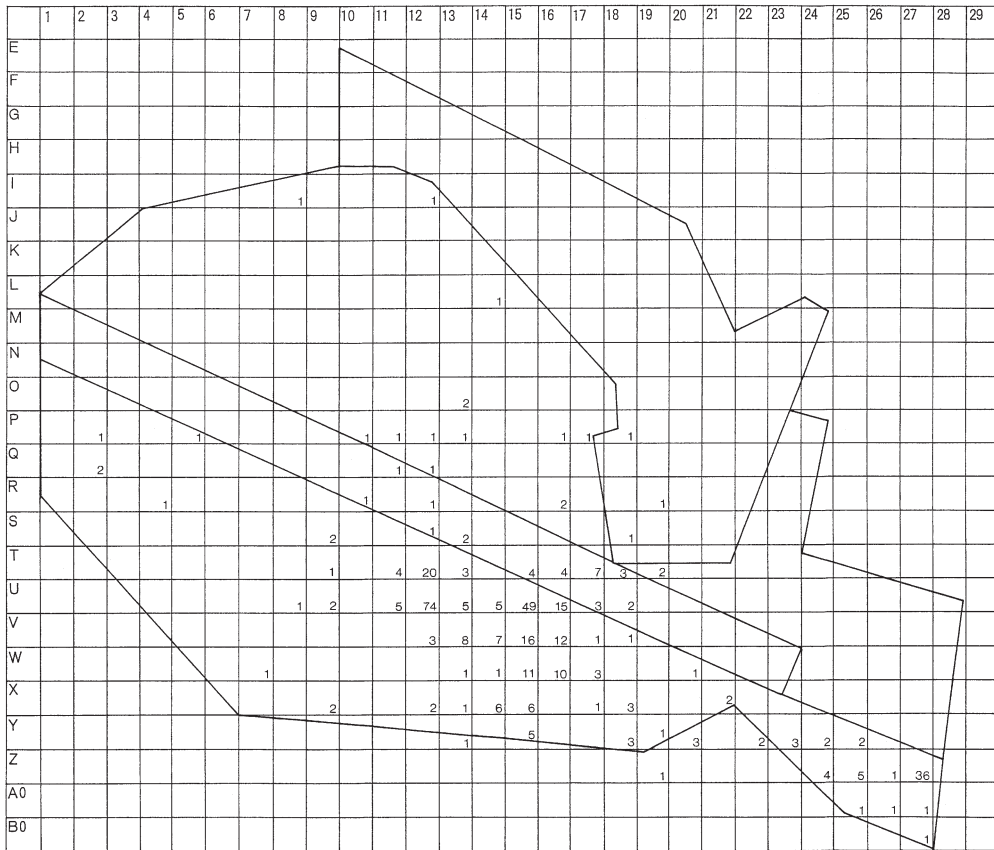


フレイク

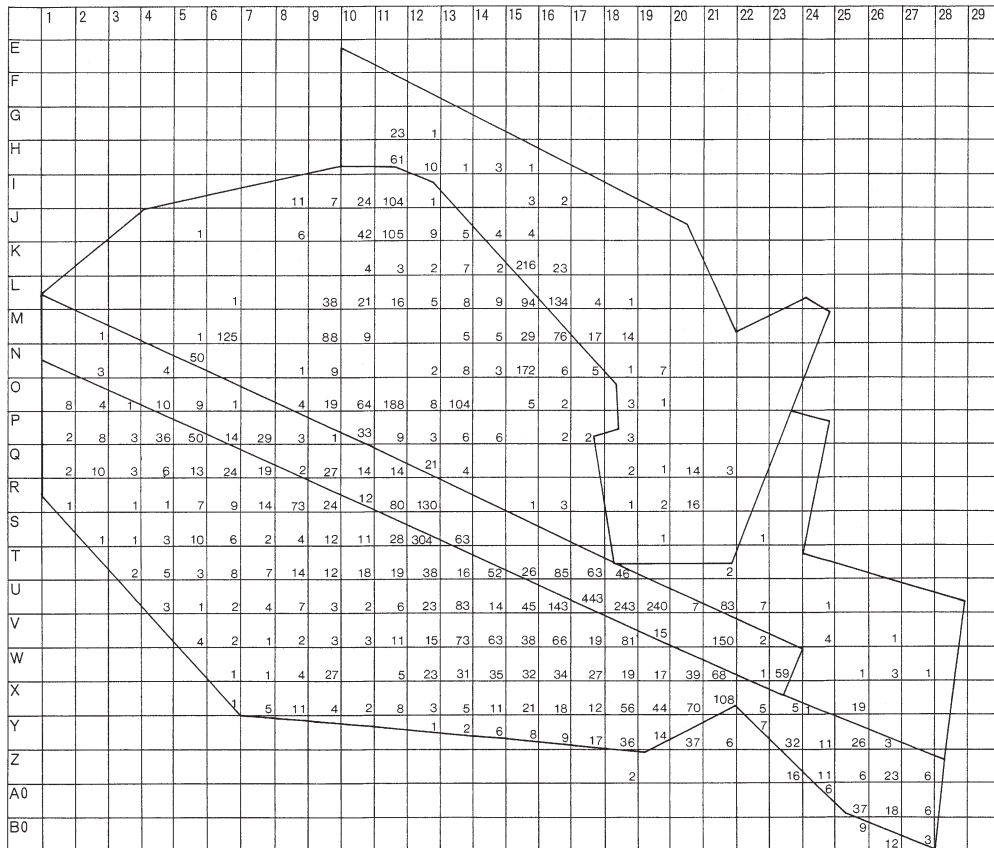


図V-42 包含層出土石器分布図(8)

石斧類



礫・礫片



図V-43 包含層出土石器分布図(9)

表V-1 宮戸4遺跡層位別出土石器一覧

分類	樹林部分						遺跡下部分						小計	表採	総計													
	Ⅳ層上	Ⅳ層下	Ⅴ層上	Ⅴ層中	Ⅴ層下	Ⅵ層上	Ⅵ層中	Ⅵ層下	Ⅶ層上	Ⅶ層中	Ⅶ層下	Ⅷ層上				Ⅷ層中	Ⅷ層下	不明										
石鏃	細葉形	1					8	1				2	17	2		24		44										
	五角形						4	1	1							11		11										
	五角			5			2	1								10		10										
	有葉平葉			5			3	1								10		65										
	有葉平葉			6			1	3								10		18										
	特殊			1												1		5										
	細分不明															3		3										
	石鏃計			6			4	1								35		47										
	有意	1		31			22	7	1	1						63		128										
	有意			2			2									2		4										
石槍ナイフ			2			2									2		2											
石槍ナイフ計			2			2									4		6											
石鏃	頂縁加工			2			2								2		2	6										
	機能部作出			2			2								2		2	6										
	両面調整			1			1								1		4	4										
	つまみ取用						3								3		1	4										
	持ち取り						1								1		2	2										
	剥片															2		2										
	製作目出し															1		1										
	剥片形状						1								1		4	4										
	棒状															3		4										
	石鏃計			3			7									10		24										
	両面頂縁						1									1		1										
	両面全面						1									1		2										
	背面全面						1									1		12										
背面全面						3									3		9											
背面左側縁						1									1		2											
背面右側縁						1									1		2											
背面全面・背面左側縁						4									4		5											
つまみ付きナイフ計			1			1									1		5											
つまみ付きナイフ			1			1									1		9											
スクレイパー	鑿状石器			4			4								4		1	5										
	ラウンドスクレイパー			3			1								3		6	13										
	エンドスクレイパー			3			1								3		7	10										
	挿入石器			3			3								3		3	10										
	サイドスクレイパー			4			5								4		29	39										
	細分不明															10		2										
	スクレイパー計			10			13								25		70											
	両面調整石器			2			1								2		2											
	ピエス・エスキュー			6			5								11		30											
	二側縁			7			2								9		17											
	ピエス・エスキュー計			2			2								4		26											
Rフレイク			2			2								2		30												
フレイク			18			12								30		80												
石核	2		4		613	12	1350	198	255	3	1	2456	22	6	87	199	1126	284	23	18	7	1	19	1782	10	4258		
	ディスク状			1			1					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	
	ナイコロ状											1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	
	細分不明											2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	石核計			1			1					3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	21	
	石斧						1					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	石斧片						3					6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
	石斧原材						4					4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
	石鏃											1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	たたき石						2					3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	凹石						2					3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	すり石						2					2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	砥石						8					1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
	加工痕のある礫片																											
	礫			9	2	40	241	9	196	25	6	1	520	85	13	106	214	921	227	46	1	1	1	1	1	1	1	26
礫片			1	2	2	94	9	125	7	2	5	250	19	21	107	341	118	10	10	10	10	10	10	10	10	10	616	
不明																												2
総計	1	5	9	3	64	8	1039	35	1758	239	269	10	1	3441	135	21	225	572	2602	673	73	20	18	1	47	4387	259	8087

VI 別表一覧

別表VI-1 米原4遺跡検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	グリッド	検出層位	規模 (m)	長軸方向	時期
P-7	土坑	L45 a	VII層	1.15×1.02/0.90×0.83/0.22	—	縄文時代早期後半
P-8	〃	L53 c、L54 b	VI層上位	(1.51)×(1.19)/ (1.16)×(1.11)/0.32	—	〃
TP-9	Tピット	K46 b・c	VII層	1.52×1.04/1.76×0.17/1.16	N-33°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
F-24	焼土	K43 c、L43 d	VI層	0.34×0.18/0.04	—	縄文時代早期後半
F-25	〃	K44 b	V層下位	0.54×0.52/0.10	—	縄文時代前期前半
F-26	〃	K44 c	〃	0.52×0.49/0.08	—	〃
F-27	〃	K44 b	VI層	0.39×0.37/0.06	—	〃
F-28	〃	L44 d	V層下位	0.47×0.40/0.05	—	〃
F-29	〃	L44 a	〃	0.63×0.38/0.04	—	〃
F-30	〃	K44 a・d	V層下位	0.44×0.39/0.05	—	〃
F-31	〃	L44 b	〃	0.24×0.20/—	—	〃
F-32	〃	K44 d	VI層	0.52×0.43/0.07	—	縄文時代早期後半
F-33	〃	L53 d	〃	0.37×0.10/0.05	—	〃
F-34	〃	L53 b	V層下位	0.53×0.45/0.05	—	縄文時代前期前半
F-35	〃	L52 c	〃	0.42×0.34/0.11	—	〃
F-36	〃	L53 b	〃	(0.32)×0.29/0.09	—	〃
F-37	〃	I41 d	〃	0.34×0.28/0.04	—	〃
F-38	〃	J40 d	〃	0.47×0.30/0.05	—	縄文時代中期後半
F-39	〃	J42 d	〃	0.47×0.34/(0.07)	—	縄文時代早期後半～前期前半
F-40	〃	〃	VI層	0.35×0.30/0.06	—	〃
F-41	〃	I42 c	〃	0.48×0.32/0.05	—	〃
F-42	〃	H46 a	V層下位	0.48×0.34/0.08	—	縄文時代後期初頭
F-43	〃	H46 b	〃	0.65×0.45/0.02	—	〃
F-44	〃	〃	〃	0.28×0.22/0.03	—	〃
F-45	〃	H45 c	VI層	(0.40)×0.67/0.07	—	縄文時代早期後半～中期後半
F-46	〃	G45 c	V層下位	0.42×0.26/0.14	—	縄文時代中期後半
F-47	〃	I43 b、J43 a	〃	0.63×0.59/0.12	—	〃
F-48	〃	G46 b	〃	0.59×0.38/0.10	—	〃
S-3	集石	L45 b	〃	0.91×0.76	—	縄文時代前期前半

別表VI-2 米原4遺跡遺構出土掲載土器一覧

図番号	接合状況 遺物番号・層位・点数	同一個体破片	分類	図版番号	備考
図IV-2-1	P-7-1 覆土2×1		I b-1	図版6	
図IV-2-2	P-7-2 覆土2×3		I b-1	図版6	
図IV-2-1	TP-9-1 覆土2×1		III b-3	図版6	
図IV-2-2	TP-9-2 覆土2×1		I b-1	図版6	
図IV-2-3	TP-9-3 覆土2×1		II a-1	図版6	

別表Ⅵ-3 米原4遺跡包含層出土掲載土器等一覧

図番号	接合状況 遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数	分類	図版 番号	備考
図Ⅳ-8-1 a	K-45-b-31V下×2、K-45-d-3VI×1、K-45-d-8VI×7 合計10点	K-44-a-44VI×1、 K-44-b-121VI×1、 K-44-c-82VI×25、 K-45-a-12V下×2、 K-45-a-26V下×32、 K-45-a-31VI×3、 K-45-a-33VI×11、 K-45-b-5V下×1、 K-45-b-31V下×36、 K-45-d-8VI×6 合計118点	I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-1 b	K-45-a-26V下×5				
図Ⅳ-8-1 c	K-44-c-74VI×1、K-45-a-26V下×1、K-45-b-3V下×2 合計4点				
図Ⅳ-8-1 d	K-45-a-26V下×1、K-45-b-31V下×5 合計6点				
図Ⅳ-8-1 e	K-45-b-31V下×6				
図Ⅳ-8-2	L-43-a-21V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-3	M-49-a-3V下×1	M-49-a-3V下×1	I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-4	L-48-b-4攪乱×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-5	L-43-a-7V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-6	L-43-a-18V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-7	L-42-c-11VI×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-8	J-42-b-16VI×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-9	L-42-c-8V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-10	L-54-c-11V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-11	L-54-b-5V下×2		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-12	L-43-c-35V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-13	L-44-a-103VI×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-14	J-41-b-21V下×3	J-42-b-21V下×1、J-41-d-24VI×1 合計2点	I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-15	L-43-c-39VI×1	K-44-b-101V下×2、L-43-c-22V下×2 合計4点	I b-1	図版7	No.16と同一
図Ⅳ-8-16	L-43-a-25V下×1		I b-1	図版7	No.15と同一
図Ⅳ-8-17	L-44-c-51V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-18	L-44-b-43V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-19	L-43-a-25V下×1	L-44-d-17VI×1	I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-20	L-42-b-1VI×1	J-42-b-16VI×2	I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-21	L-43-b-25V下×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-22	K-45-a-36VI×1、L-43-c-19V下×1 合計2点		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-23	L-42-c-11VI×1		I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-24	J-40-c-1V下×1	J-40-c-1V下×1	I b-1	図版7	
図Ⅳ-8-25	H-41-d-10V下×1、H-42-b-11VI×1、H-42-c-6VI×2、 H-42-d-1VI×2、I-42-d-1攪乱×1、I-42-d-25VI×1 合計8点		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-26	K-45-b-2V中×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-27	K-45-c-14V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-28	L-54-c-11V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-29	H-42-c-1V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-30	L-43-b-3V中×1	L-43-b-25V下×1、L-44-d-47V下×1、 H-50-b-2不明×1 合計3点	I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-31	M-46-b-2V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-32	R-78-a-1V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-33	L-43-c-22V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-34	L-45-d-10V下×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-35	L-53-b-6V中×1		I b-2	図版7	
図Ⅳ-8-36	F-24-1VI×3		I b-1	図版6	焼土F-24
図Ⅳ-8-37	F-24-1VI×1		I b-1	図版6	焼土F-24
図Ⅳ-8-38	K-44-d-40V下×1		Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-8-39	J-40-d-12V中×1		Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-8-40	H-42-c-16V下×1、I-42-d-11V下×1 合計2点	H-42-c-16V下×2、I-42-d-5V下×1、 I-42-d-9V下×1 合計4点	Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-8-41	H-45-c-33V下×1	G-46-a-6V下×1、I-42-d-9V下×1、 I-42-d-23V下×1 合計3点	Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-8-42	H-42-b-20V下×1、I-42-a-3V中×1 合計2点	I-42-a-6V下×2、I-42-b-6V下×1 合計3点	Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-9-43	L-51-b-3V中×5、L-51-b-8V下×7、 L-51-c-9V中×4 合計16点		Ⅱ a-1	図版10	
図Ⅳ-9-44 a	H-44-a-5V下×1、H-44-c-10VI×1、H-44-c-27V下×1 合計3点	F-43-b-1V下×1、F-43-b-8V下×1、 G-42-b-3V下×1、G-42-d-2V下×1、 G-43-a-10V下×1、G-43-a-13V×1、 H-41-b-1V下×2、H-41-c-1V中×1、 H-41-c-4V×1、H-42-b-20V下×2、 H-43-d-3V下×1、H-44-c-27V下×3、 H-44-d-4V下×2、H-45-a-1V下×1、 H-45-b-4V中×1、H-45-c-11V下×2、 H-46-a-14V下×1、H-46-c-2V下×1、 I-41-d-7V下×2、I-41-d-31V下×1、 J-40-d-2V下×1 合計28点	Ⅱ a-1	図版10	
図Ⅳ-9-44 b	G-45-b-12V下×1、H-41-b-1V下×4、H-41-c-12V中×1、 H-41-c-13V下×3、H-41-c-25V下×2、H-43-b-11V下×1、 H-44-c-27V下×1、H-45-a-6V下×1、H-45-a-12V下×1 合計15点				
図Ⅳ-9-45	K-47-a-1攪乱×1、L-44-d-36V下×1 合計2点		Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-9-46	L-44-d-36V下×1		Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-9-47	K-45-b-4V下×1		Ⅱ a-1	図版8	
図Ⅳ-9-48	K-44-c-62V下×1		Ⅱ a-1	図版8	

図番号	接合状況 遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数	分類	図版 番号	備考
図IV-9-49	K-44-b-49V中×1、K-44-b-67V下×4 合計5点		II a-1	図版8	
図IV-9-50	H-44-c-27V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-51	L-45-b-24V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-52	G-42-b-3V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-53	L-44-b-45V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-54	L-44-b-45V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-55	L-44-c-31V中×1		II a-1	図版10	
図IV-9-56	H-43-c-9V下×2		II a-1	図版10	
図IV-9-57	L-44-b-11V中×1、L-44-b-85VI×1、 L-44-d-40V下×2 合計4点		II a-1	図版10	
図IV-9-58	L-44-c-48V下×1		II a-1	図版10	
図IV-9-59	L-43-d-28V下×1		II a-1	図版10	
図IV-9-60	K-44-b-4V上×1		II a-1	図版8	
図IV-9-61	L-45-a-16V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-62	L-44-c-48V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-63	L-44-b-72V下×1		II a-1	図版8	
図IV-9-64	L-44-c-17V中×1		II a-1	図版8	
図IV-9-65 a	I-42-b-3V下×1	I-42-a-3V中×2、I-42-a-5V下×2、 I-42-a-6V下×3、I-42-b-3V下×4、 I-42-b-4V下×7、I-42-b-6V下×16、 I-42-b-11V中×1、I-42-b-23V下×1、 I-42-b-27V上×1 合計37点	II a-1	図版9	
図IV-9-65 b	I-42-b-4V下×2				
図IV-9-66 a	L-44-c-28V中×1、L-44-c-31V中×2、 L-44-c-48V中×1 合計4点	K-44-c-11V中×1、K-44-c-68V下×2、 K-44-d-40V下×4、L-44-b-45V下×1、 L-44-c-31V中×1、L-44-d-27V中×1、 L-44-d-36V下×2、L-45-b-16V中×2、 L-45-b-23V下×6、未注記×10 合計30点	II a-1	図版9	
図IV-9-66 b	L-45-b-16V中×1、L-45-b-23V中×1 合計2点				
図IV-10-67 a	J-41-a-20V下×1、J-41-b-1V下×5 合計6点	J-40-c-3V下×1、J-41-a-20V下×23、 J-41-b-1V下×11、J-41-b-4V下×1、 未注記×6 合計42点	II a-1	図版11	
図IV-10-67 b	J-41-a-20V下×2、J-41-b-1V下×2、 J-41-b-4V下×1 合計5点				
図IV-10-67 c	J-41-a-20V下×1、J-41-b-1V下×13、 J-41-b-18V下×1、未注記×1 合計16点				
図IV-10-68	G-47-c-7V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-69	F-45-d-3V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-70	I-41-b-6V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-71	H-41-c-4V×1		II a-1	図版9	
図IV-10-72	H-42-c-16V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-73	H-41-c-13V下×1	I-41-b-12V下×1	II a-1	図版9	
図IV-10-74	K-44-c-62V下×1、K-44-d-34V下×1 合計2点		II a-1	図版9	
図IV-10-75	H-41-c-25V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-76	F-44-d-1V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-77	L-44-a-75V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-78	K-44-c-62V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-79	L-44-d-10V中×1		II a-1	図版9	
図IV-10-80	K-44-c-62V下×1		II a-1	図版9	
図IV-10-81	K-44-c-79V中×3		II a-1	図版9	
図IV-10-82 a	K-44-c-59V下×1		II a-2	図版11	
図IV-10-82 b	K-44-c-59V下×1				
図IV-10-83 a	L-45-b-30V下×1		II a-2	図版11	
図IV-10-83 b	L-44-d-46不明×1				
図IV-10-84	K-44-c-88V下×1		II a-2	図版11	
図IV-10-85	F-28-1×1		II a-1	図版6	焼土F-28
図IV-10-86	F-34-2V下×1		II a-1	図版6	焼土F-34
図IV-10-87	F-44-1 風倒木痕×1		II a-1	図版6	焼土F-44
図IV-10-88	F-44-1 風倒木痕×1		II a-1	図版6	焼土F-44
図IV-11-89 a	J-40-c-4V下×2		II b	図版12	
図IV-11-89 b	J-40-a-7V下×1			図版12	
図IV-11-89 c	J-41-a-7V下×1			図版12	
図IV-11-90	J-41-d-26V下×1		II b	図版12	
図IV-11-91 a	G-45-b-6V中×2、G-45-c-11V中×2、 G-45-c V中×1、G-45-d-5V中×8、 G-45-d-13V下×25、G-45-d-16VI×3、 G-46-a-7V下×2、G-46-b-4V中×1 合計44点	G-45-c-11V中×1、G-45-c-15V下×3、 G-45-d-1V中×1、G-45-d-5V中×5、 G-45-d-13V下×19、G-45-d-16VI×1、 G-46-a-7V下×2、G-46-b-4V中×3、 G-46-b-10V下×2 合計37点	III b-2	図版12	
図IV-11-91 b	G-45-d-13V下×1、G-46-b-10V下×1 合計2点				
図IV-11-91 c	G-45-d-13V下×2				
図IV-11-92	L-45-b-4V中×2		III b-2	図版12	
図IV-11-93	F-43-b-2V下×1		III b-2	図版12	
図IV-11-94 a	I-41-c-21V下×3	I-41-b-3V中×1、I-41-c-5V下×12、 I-41-c-21V下×6、I-41-c-25V下×2、 I-41-c-27V下×2、I-41-d-3V下×1、 I-41-d-8V下×3、I-41-d-21V下×4、 I-41-d-22V下×1 合計32点	III b-2	図版12	
図IV-11-94 b	I-41-c-21V下×1				
図IV-11-94 c	I-41-c-21V下×1				
図IV-11-94 d	I-41-c-2V中×1				
図IV-11-94 e	I-41-d-21V下×1				

図番号	接合状況 遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数	分類	図版 番号	備考	
図IV-11-95	J-43-d-18V下×1		Ⅲb-2	図版12		
図IV-11-96	K-45-d-7VI下×1		Ⅲb-2	図版12		
図IV-11-97	K-45-c-2V中×1		Ⅲb-2	図版12		
図IV-11-98	L-46-b-5V中×1		Ⅲb-2	図版12		
図IV-11-99	K-44-a-9V中×1		Ⅲb-2	図版12		
図IV-11-100	I-43-b-1V中×1		Ⅲb-2	図版12		
図IV-11-101a	I-41-a-5V下×1、I-41-a-10V下×1、 I-41-a-17V下×1、I-41-b-3V中×2、 I-41-c-5V下×1	I-41-a-17V下×1、L-42-c-17V下×1	Ⅲb-2	図版13		
図IV-11-101b	I-41-a-18V下×1、I-41-c-5V下×1		合計2点			
図IV-11-102	G-43-a-11V下×1	G-43-a-11V下×1、L-52-b-1V中×1	合計2点	Ⅲb-2	図版13	
図IV-12-103a	G-45-c-22V下×1、G-46-b-10V下×2		合計3点			
図IV-12-103b	G-45-c-15V下×4、G-45-c-22V下×1、 H-45-a-7V下×1、H-45-b-11V下×2	G-45-b-6V中×1、G-45-c-11V中×77、 G-45-c-15V下×56、G-45-c-20V中×1、 G-45-c-22V下×7、G-45-c-31V上×18、 G-45-c-32V中×3、G-45-c-33V下×2、 G-45-d-13V下×1、G-46-a-4V中×42、 G-46-a-7V下×11、G-46-b-1V中×1、 G-46-b-4V中×42、G-46-b-10V下×29、 G-46-b-11V×5、G-46-c-5V中×10、 G-47-b-1V中×1、H-45-a-7V下×1、 H-45-a-8V下×1、H-45-b-11V下×7、 H-45-b-12攪乱×1、H-45-d-6V下×25、 H-45-d-20V下×1、H-46-a-26V下×1、 H-46-c-4V下×2、H-46-c-5V下×1、 H-46-d-11V中×9、H-46-d-17V下×5、 K-45-b-4V下×2、L-52-c-16V下×1、 未注記×2	合計8点	Ⅲb-3	図版13	
図IV-12-103c	H-45-b-11V下×1、H-45-d-6V下×1		合計2点			
図IV-12-103d	G-45-c-11V中×1、G-45-c-20V中×1		合計2点			
図IV-12-103e	G-45-c-11V中×2、G-45-c-15V中×1		合計2点			
図IV-12-103f	G-46-b-10V下×1、G-46-c-5V中×10、 H-46-d-11V中×4、H-46-d-17V下×3		合計18点			
図IV-12-104	K-45-b-3V中×1、K-45-c-9V下×1		合計2点	Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-105	L-43-c-23V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-106	L-45-c-20VI×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-107	M-49-a-5V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-108	表探-9×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-109	I-42-b-5V下×2			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-110	J-45-c-2V中×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-111	J-42-c-1V中×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-112	L-44-c-36V中×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-113	K-44-d-21V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-114	J-40-d-4V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-115	K-44-c-10V中×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-116	L-43-a-10V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-117	L-52-b-6V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-118	G-42-c-7V中×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-119	L-45-a-33VI×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-120	H-42-b-21V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-121	I-43-b-1V中×1	L-44-d-7V中×2		Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-122	L-44-c-36V中×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-123	K-44-a-30V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-12-124	K-44-b-8V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-13-125a	H-41-c-24V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-13-125b	I-42-b-1攪乱×2、I-42-b-5V下×1	I-42-a-1V下×2、I-42-a-7V下×2、 I-42-b-1攪乱×2、I-42-b-5V下×3	合計9点	Ⅲb-3	図版14	
図IV-13-126	I-42-a-4V下×1			Ⅲb-3	図版14	
図IV-13-127a	L-52-b-6V下×3、L-52-b-10V下×5		合計8点			
図IV-13-127b	L-52-b-10V下×1	L-52-b-1V中×2、L-52-b-6V下×10、 L-52-b-10V下×16、L-52-b-13VI×3、 L-52-b-15攪乱×1、L-52-c-16V下×1、 L-52-c-32V下×1、L-53-b-4V中×1	合計35点	Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-127c	L-52-b-10V下×1、L-52-b-13VI×1		合計2点			
図IV-13-127d	L-52-b-10V下×1					
図IV-13-128	I-44-d-1V上×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-129a	I-42-c-6V下×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-129b	I-42-b-1攪乱×2、I-42-c-6V下×1		合計3点	Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-130	J-42-a-1V下×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-131	J-43-d-11V下×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-132	L-45-a-11V中×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-133	G-45-c-28VI×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-134	J-41-d-6V下×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-135	G-42-b-2V下×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-136	G-46-c-1V中×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-137	H-46-a-4VI×2			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-138	L-51-c-10V中×2			Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-139	H-42-d-3V中×1、I-41-c-5V下×1		合計2点	Ⅲb-3	図版15	
図IV-13-140	K-49-c-10V中×1			Ⅲb-3	図版15	
図IV-14-141	K-43-d-10V下×1			Ⅲb-3	図版16	
図IV-14-142	G-45-c-11V中×1			Ⅲb-3	図版16	
図IV-14-143	H-46-a-16VI×1			Ⅲb-3	図版16	

図番号	接合状況 遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数	分類	図版 番号	備考
図IV-14-144 a	H-46-a-15V下×2	G-43-b-5V下×1、G-43-b-8V中×1、 G-43-b-14V下×2、G-43-c-3V中×2、 H-43-a-8V上×1、H-44-a-1V中×1	Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-144 b	G-43-b-8V中×1、G-43-c-3V中×1、 H-43-d-6V中×1 合計3点				
図IV-14-145	L-46-b-1H-1掘上土×1		Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-146	I-41-c-2V中×1、I-41-c-5V下×3、 I-41-c-21V下×1、I-41-d-8V下×1、 I-41-d-22V下×1 合計7点	I-41-b-3V中×4、I-41-b-11V下×1、 I-41-b-12V下×1、I-41-b-13V下×1、 I-41-b-22VI×1、I-41-c-2V中×3、 I-41-c-5V下×77、I-41-c-21V下×29、 I-41-c-25V下×4、I-41-c-27V下×10、 I-41-d-2V中×1、I-41-d-3V中×5、 I-41-d-8V下×56、I-41-d-21V下×7、 I-41-d-31V下×1、I-45-a-5V下×1 合計202点	Ⅲ b-3	図版17	
図IV-14-147	L-51-c-10V中×4		Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-148	L-52-b-6V下×1	L-52-b-6V下×14、L-52-b-11V中×1、 未注記×1 合計16点	Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-149	L-40-d-3攪乱×1、L-42-c-16V下×1、 L-42-d-1V下×1、L-43-a-23V下×1 合計4点	L-42-c-1攪乱×1、L-42-c-9V下×1 合計2点	Ⅲ b-3	図版17	
図IV-14-150	I-42-c-10V中×1、J-42-a-1V下×1、 J-42-a-12V下×1 合計3点	I-42-b-1攪乱×1、I-42-b-25V下×2、 I-42-c-1V下×1 合計4点	Ⅲ b-3	図版17	
図IV-14-151	H-45-d-6V下×1、H-46-d-11V中×1 合計2点		Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-152	H-45-d-6V下×1		Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-153	L-43-d-6V中×1	K-43-c-4V下×1、L-43-d-20V下×1 合計2点	Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-154	K-43-d-11V下×1		Ⅲ b-3	図版16	
図IV-14-155	K-44-a-9V中×1		Ⅲ b-3	図版17	
図IV-14-156	I-41-a-6V下×1		Ⅲ b-3	図版17	
図IV-14-157	I-42-a-7V下×1、I-42-b-25V下×1、 I-42-c-1V下×1 合計2点	J-43-d-1V中×1	Ⅲ b-3	図版17	
図IV-14-158	H-43-a-3V下×1		Ⅲ b-3	図版17	
図IV-15-159 a	H-45-b-13攪乱×3、H-45-c-12V下×1 合計4点	G-43-b-2V上×1、G-43-b-4V下×9、 H-45-b-8V下×1、H-45-b-13V下×3、 H-45-c-12V下×36、H-45-c-20V下×7、 H-45-d-19V下×20、H-45-d-?V下×1、 I-45-a-1V下×1、I-45-a-3V下×1、 I-45-a-5V下×1、I-45-a-6V中×4、 I-45-a-11V下×12、未注記×5 合計105点	IV a	図版18	
図IV-15-159 b	H-45-d-19V下×3				
図IV-15-159 c	H-45-b-13攪乱×1				
図IV-15-159 d	H-45-c-12V下×2				
図IV-15-159 e	I-45-a-11V下×4				
図IV-15-160	I-43-c-7V下×1		IV a	図版18	
図IV-15-161	H-43-b-2V下×1		IV a	図版18	
図IV-15-162	K-45-a-31VI		円盤状土製品	図版18	
図IV-15-163	H-46-a-2V中		焼成粘土塊	図版18	

別表VI-4 米原4遺跡包含層出土掲載石器一覧

掲載 番号	分類	細分類	グリッド	遺物 番号	層位	寸法 (cm)			重量 (g)	石材	その他
						長さ	幅	厚さ			
1	石鏃	2a	G42c	17	V下位	3.20	1.31	0.34	1.4	黒曜石 1	
2	石鏃	2a	F44c	5	VI	4.30	1.79	0.55	3.2	黒曜石 2	
3	石鏃	3a	H41c	18	V下位	1.85	1.65	0.29	0.6	黒曜石 1	
4	石鏃	3a	K44c	54	V下位	1.93	1.79	0.25	0.6	黒曜石 1	
5	石鏃	3a	L44b	71	V下位	2.40	1.95	0.30	0.9	黒曜石 1	
6	石鏃	3a	I43d	4	V下位	2.61	1.90	0.31	1.2	黒曜石 1	
7	石鏃	3a	L44d	34	V下位	2.68	1.90	0.54	2.0	黒曜石 1	
8	石鏃	3a	K44d	30	V下位	2.70	1.00	0.27	0.8	黒曜石 1	
9	石鏃	3b	L44c	49	V下位	1.95	1.55	0.20	0.6	黒曜石 1	
10	石鏃	3b	L44a	36	V中位	2.20	1.75	0.27	0.8	黒曜石 1	
11	石鏃	3b	H41c	10	VI下位	2.40	2.08	0.43	1.6	黒曜石 1	
12	石鏃	3b	K44c	75	VI	2.30	2.18	0.28	1.1	黒曜石 1	
13	石鏃	3b	K44b	113	VI	2.63	1.50	0.20	0.8	黒曜石 3	
14	石鏃	3b	L44a	65	V下位	2.55	1.50	0.36	1.1	黒曜石 1	
15	石鏃	5a	J43d	4	V中位	3.95	1.65	0.33	1.1	頁岩	
16	石鏃	5b	H46a	6	V中位	3.80	2.09	0.42	2.4	黒曜石 2	
17	石鏃	5b	K44b	29	V中位	2.80	1.25	0.33	0.8	黒曜石 2	
18	石鏃	5c	L51c	19	V上位	2.50	1.71	0.43	1.0	黒曜石 2	
19	石鏃	5c	H44c	1	V中位	3.00	1.60	0.46	1.5	黒曜石 1	
20	石鏃	5c	L52c	6	V中位	3.30	1.70	0.44	1.7	黒曜石 2	
21	石鏃	5c	H45d	22	V下位	3.50	1.90	0.54	2.7	黒曜石 2	
22	石鏃	5	J43a	28	V中位	3.85	1.59	0.54	2.5	黒曜石 2	再加工?
23	石槍またはナイフ	1	G45c	23	V下位	4.10	2.10	0.66	4.0	黒曜石 2	再加工?
24	石槍またはナイフ	1	I41c	33	V下位	4.51	1.90	0.59	4.0	黒曜石 1	
25	石槍またはナイフ	1	I41b	6	V中位	5.99	2.30	0.75	8.0	黒曜石 2	
26	石槍またはナイフ	1	H41a	7	攪乱	6.95	2.50	0.97	12.3	黒曜石 2	
27	石槍またはナイフ	1	G46b	15	V下位	5.48	2.05	0.69	5.4	黒曜石 2	
28	石槍またはナイフ	1	K44a	14	V中位	4.70	2.25	0.57	3.8	黒曜石 2	微細剥離痕
29	石槍またはナイフ	1	I43c	25	V中位	4.25	2.20	0.64	4.4	黒曜石 2	
30	石槍またはナイフ	1	J42a	21	V中位	5.47	2.69	0.51	5.5	黒曜石 2	
31	石槍またはナイフ	1	G45c	21	V中位	4.80	2.80	0.88	6.9	黒曜石 2	
32	石槍またはナイフ	1	K43c	52	V下位	5.00	2.85	0.54	4.9	黒曜石 2	
33	石槍またはナイフ	1	L53b	14	V下位	5.80	3.10	0.73	8.2	黒曜石 2	
34	石槍またはナイフ	1	J43a	24	V上位	5.55	2.30	0.62	5.0	黒曜石 2	
35	石槍またはナイフ	1	F44b	4	V下位	7.50	3.70	1.20	21.3	黒曜石 2	
36	石槍またはナイフ	1	G45d	8	V下位	8.60	3.70	0.77	14.1	黒曜石 3	
37	石槍またはナイフ	2	L52c	5	V中位	8.30	3.79	0.85	25.9	黒曜石 1	接合
38	石錐	1	L44b	31	V中位	4.80	3.07	0.98	7.8	黒曜石 1	一部風化
39	石錐	1	L51b	7	V中位	3.41	2.95	0.97	5.4	黒曜石 1	
40	石錐	1	K44c	17	V中位	2.40	2.94	0.62	2.2	黒曜石 1	
41	石錐	9	K44d	36	V下位	3.70	1.45	0.44	2.5	黒曜石 1	
42	石錐	2	K44b	51	V中位	3.30	1.10	0.68	2.0	黒曜石 3	錐部磨耗
43	石錐	2	I44a	18	V下位	2.50	0.90	0.56	1.2	黒曜石 3	
44	石錐	2	I41d	28	V下位	3.60	0.98	0.45	1.6	黒曜石 1	錐部磨耗
45	石錐	2	L44c	9	V中位	5.45	1.80	0.42	4.0	黒曜石 2	
46	石錐	9	I44a	9	V中位	5.95	2.28	0.69	6.4	黒曜石 1	転用?
47	石錐	9	I41a	22	V下位	5.10	1.95	0.57	4.6	黒曜石 1	転用?
48	つまみ付きナイフ	1	L43c	28	V下位	6.92	3.30	0.78	13.4	黒曜石 2	一部風化
49	つまみ付きナイフ	1	I41d	29	V下位	6.81	2.20	0.69	12.1	黒曜石 3	
50	つまみ付きナイフ	1	I42a	25	V中位	6.24	4.96	0.95	19.8	黒曜石 2	
51	つまみ付きナイフ	1	L54b	6	V中位	6.50	3.85	0.52	7.3	頁岩	
52	つまみ付きナイフ	2	H42c	4	V下位	6.94	3.07	0.77	13.8	黒曜石 1	
53	つまみ付きナイフ	2	I42c	13	V下位	5.20	2.00	0.67	7.7	黒曜石 1	
54	つまみ付きナイフ	3	L44b	53	V下位	6.80	2.70	0.52	7.4	黒曜石 1	
55	つまみ付きナイフ	3	K44c	31	V下位	6.30	3.20	0.74	11.6	黒曜石 1	
56	つまみ付きナイフ	3	H42d	5	V中位	7.50	2.00	0.72	8.8	黒曜石 3	
57	つまみ付きナイフ	3	K44c	64	V下位	6.93	2.65	0.60	11.2	黒曜石 1	
58	つまみ付きナイフ	3	H42c	11	V下位	5.53	2.35	0.65	7.8	黒曜石 3	
59	つまみ付きナイフ	3	L44d	52	V下位	5.60	3.01	0.63	8.8	黒曜石 1	一部風化
60	つまみ付きナイフ	3	I43a	4	V下位	6.00	3.30	0.84	12.4	黒曜石 1	
61	つまみ付きナイフ	3	F43c	5	V下位	6.20	2.70	0.80	10.8	黒曜石 1	
62	つまみ付きナイフ	4	L44a	116	V中位	6.30	3.00	0.70	10.0	黒曜石 1	曇り
63	つまみ付きナイフ	3	K44c	5	V上位	4.55	2.40	0.59	7.8	緑色泥岩	
64	スクレイパー	1	J41d	15	V下位	5.40	3.00	0.73	11.1	黒曜石 3	

掲載 番号	分類	細分類	グリッド	遺物 番号	層位	寸法 (cm)			重量 (g)	石材	その他
						長さ	幅	厚さ			
65	スクレイパー	4	I43c	17	V中位	5.00	3.69	1.34	20.6	黒曜石 2	
66	スクレイパー	4	L45a	39	V中位	7.20	2.15	0.86	12.4	黒曜石 2	
67	スクレイパー	4	I41a	23	V下位	7.00	3.20	1.46	23.7	黒曜石 2	
68	スクレイパー	4	J41a	12	V下位	8.78	3.00	0.98	18.4	黒曜石 2	
69	スクレイパー	4	L44c	12	V中位	6.10	2.20	0.54	8.1	頁岩	
70	スクレイパー	4	L44d	28	V下位	4.25	2.59	0.85	8.7	頁岩	
71	スクレイパー	4	I43b	6	V中位	6.39	4.55	1.25	36.3	珪質頁岩	
72	スクレイパー	4	I41a	25	V下位	4.90	6.59	1.55	43.0	黒曜石 2	
73	ピエス・エスキュー		J42d	7	V中位	2.08	2.20	0.70	3.6	黒曜石 1	
74	ピエス・エスキュー		L43d	4	V上位	2.00	2.39	0.71	3.7	黒曜石 1	
75	石斧	2	H46a	21	V下位	14.70	4.60	3.00	302.1	緑色泥岩	
76	石斧	2	H45a G45b	3 3	V中位	8.64	5.50	2.80	222.3	泥岩	接合
77	石斧	3	H46d	1	V上位	8.40	4.40	1.41	90.0	片岩	
78	石斧	3	L53b	3	V上位	10.24	4.01	1.41	86.1	泥岩	
79	石斧	5	I41d	4	V中位	8.91	2.69	0.60	26.2	片岩	
80	石斧	5	K44c	52	V下位	4.46	1.96	0.44	5.7	緑色泥岩	
81	たたき石	1	L44c	10	V中位	14.75	5.54	4.02	463.7	砂岩	被熱?
82	たたき石	1	K43c	5	攪乱	14.40	4.63	3.06	277.3	砂岩	
83	たたき石	2	G45c	26	V下位	8.86	6.75	2.25	139.2	砂岩	
84	たたき石	2	G45c	8	V下位	8.97	5.72	2.02	146.8	砂岩	黒色物質 付着
85	たたき石	4	H43b	9	V下位	7.80	7.88	5.50	460.2	砂岩	
86	すり石	6	L52c	43	V下位	8.46	13.88	6.00	998.0	花崗岩	
87	すり石	1	H41c	7	V下位	10.50	15.73	8.15	2.0	泥岩	
88	すり石	1	L44a	18	V中位	7.73	14.24	6.80	1034.0	砂岩	一稜は 被熱後使用
89	すり石	1	L44a	93	V	9.25	17.80	5.90	1242.0	砂岩	
90	すり石	1	K44b	42	V中位	5.58	11.50	4.76	403.6	砂岩	
91	すり石	2	K44d	14	V中位	8.70	12.95	5.07	690.0	砂岩	
92	すり石	2	I44b	8	V下位	6.80	8.78	1.60	138.8	砂岩	
93	すり石	2	L45b	3	V中位	5.00	13.55	2.00	217.1	砂岩	
94	すり石	2	L44b	35	V中位	7.65	9.94	3.41	385.0	片麻岩	
95	砥石	1	L44a	89	V	6.00	5.00	2.86	68.6	砂岩	
96	砥石	1	G46b	6	V中位	8.10	8.20	1.70	22.4	スコリア	
97	砥石	2	K44d	49	V下位	14.06	9.98	2.81	399.4	砂岩	
98	台石	1	G45c	3	V上位	23.38	16.14	9.10	5100.0	砂岩	

別表VI-5 米原4遺跡層位別出土石器等点数一覧

分類	細分類	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅴ層			Ⅵ層	H-1 掘り上げ土	不明	風倒 木痕	撓乱	総計
					上位	中位	下位						
石鏃	2					1							1
	2a						1	2					4
	2b							1		1			2
	3a					1	15	30	6				52
	3b					1	10	25	7				43
	4	1					1	2				1	5
	5a						1						1
	5b						5	3					8
	5c					2	8	13	2			1	26
	8						9	10	4				23
	未成品					2	15	33	9			1	61
	小計	1				6	65	118	30		3	1	226
石槍またはナイフ	1					3	12	12	4			1	32
	2						1						1
	8					4	3	5	1				13
	未成品					1	2						3
	小計					8	18	17	5			1	49
石錐	1						4	4	1				9
	2					1	4	7	2				14
	9						2	2					4
	小計					1	10	13	3				27
つまみ付きナイフ	1						1	4					5
	2							2					2
	3					1	2	10	1				14
	4						1						1
	8					1	3	6					10
	9							2					2
	小計					2	7	24	1				34
スクレイパー	1							1					1
	2							2					2
	3			1									1
	4						12	20	1			1	34
	8					1	7	7	3			1	19
	小計			1		1	19	30	4			2	57
ビエス・エスキュー					2	2	1					5	
Rフレイク					7	47	79	14				147	
Uフレイク					5	28	47	5			2	87	
フレイク・チップ		4			82	701	1,563	303	3	70	1	33	2,760
石核							3	2		1			6
原石							2						2
剥片石器群総計		5	0	1	114	902	1,894	365	4	73	2	40	3,400
磨製石斧	2					1	1	1					3
	3					2		1					3
	4							2					2
	5							1					1
	8						8	6					14
	未成品						3	2			1	1	7
	小計					3	12	13			1	1	30
打ち欠き片					24	20	73	7	4	1		4	133
原材							2					1	3
磨製石器群総計					30	44	101	7	4	1	2	7	196
たたき石	1						3	2					5
	2						5	12				1	18
	3							2					2
	4							1					1
	8						2	1					3
	小計						10	18				1	29
すり石	1	1		1	1	9	30	2					44
	2				1	5	4						10
	3						1						1
	6						1						1
	8						1						1
	小計	1		1	2	14	37	2					57
砥石	1			1		2							3
	2				1	1	6	2					10
	8			8		7	45	1					61
	小計			9	1	10	51	3					74
台石	1				1	1							2
	8					2							2
	小計				1	3							4
石皿	8				1	1						2	
加工痕のみられる礫						8	9			1			18
礫石器群総計		1		10	4	46	116	5		1		1	184
礫・礫片		14	5	139	255	2,652	2,544	1,508	36	18		33	7,204
総計		20	5	150	400	3,632	4,642	1,885	44	93	3	80	10,984

別表VI-6 宮戸4遺跡 樹林部分検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模 (m)	長軸方向	時期
TP-26	Tピット	P76c・d	VI層上位	1.60×0.85/1.70×0.22/1.45	N-87°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-27	Tピット	P72d、P73a	VI層上位	2.60×0.80/2.58×0.20/1.50	N-126°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-28	Tピット	P67b	VI層上位	2.15×0.70/2.40×0.21/1.55	N-37°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-29	Tピット	Q77c、Q78b	VI層上位	1.83×0.67/2.30×0.21/1.26	N-50°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-30	Tピット	P77b、P77c	VI層上位	2.52×0.70/2.75×0.20/1.45	N-23°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-31	Tピット	S81b・c、T81a・d	VI層上位	2.93×0.88/2.55×0.16/1.25	N-74°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-32	Tピット	O75a・b・c・d	VI層	1.76×1.26/1.68×0.24/1.49	N-89°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-33	Tピット	O73d、O74a、O74d	VII層	2.22×0.76/2.86×0.17/1.37	N-26°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-34	Tピット	T89d、T90a	VI層上位	2.86×1.09/2.81×0.16/1.26	N-48.5°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-35	Tピット	N97b・c	VI層上位	1.58×0.74/1.21×0.24/1.39	N-16.5°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-36	Tピット	O69c、O70a・b	VI層上位	3.00×0.87/2.94×0.27/1.50	N-75°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-37	Tピット	T83a・d	VI層上位	2.98×0.81/2.80×0.17/1.52	N-81°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-38	Tピット	S76a・d	VI層上位	2.82×0.77/2.79×0.12×1.50	N-45°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-39	Tピット	O69b・c、P69d	VI層上位	2.95×0.53/3.16×0.24/1.24	N-11°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-40	Tピット	R95c・d、R96a・b	VI層上位	2.22×0.51/2.28×0.12/1.42	N-54.5°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-41	Tピット	S71c、T71d、S72b、T72a	VI層上位	3.16×0.86/2.87×0.23/1.65	N-22°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-42	Tピット	S86a～d	VI層上位	1.73×(0.80)/1.47×0.57/1.25	N-40°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-43	Tピット	S85c、S86b・c	VI層上位	2.98×(1.26)/2.77×0.20/1.54	N-36°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-44	Tピット	R96a・b・c・d	VI層上位	1.85×0.65/2.18×0.26/1.52	N-60.5°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-45	Tピット	O96a	VIII層相当	2.22×0.79/1.64×0.24/1.08	N-3°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-46	Tピット	Q98d、Q99a	VI層上位	1.87×0.64/1.91×0.26/1.05	N-18°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-47	Tピット	S95a・d	VIII層上位	1.01×0.40/0.82×0.14/0.32	N-10.5°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-48	Tピット	R78a・b	VI層上位	1.40×0.50/1.30×0.14/0.98	N-57°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-49	Tピット	N99c、N100b、O99d、O100a	VIII層上位	1.16×0.67/0.99×0.21/0.92	N-77°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-50	Tピット	T95a	VI層上位	2.02×1.25/1.74×0.60/1.00	N-89°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-51	Tピット	O96b	VIII層上位	(0.60×0.95/0.67×0.60/0.56)	N-25°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-53	Tピット	S97a～d	VI層上位	2.30×1.00/2.54×0.32/1.60	N-90°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-54	Tピット	Q86a・d	VI層上位	1.66×0.96/1.40×0.16/1.25	N-38°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-55	Tピット	T100d、T1a	VI層上位	2.00×1.22/1.87×0.28/1.65	N-89°-E	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-56	Tピット	R85d	VI層上位	2.00×0.75/2.00×0.15/1.20	N-31°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
F-45	焼土	R70d	VI層上位	0.20×0.20/0.06		縄文時代早期後半
F-46	焼土	N70c	VI層上位	0.46×0.37/0.12		縄文時代早期後半
F-47	焼土	N70b・c	VI層上位	0.76×0.57/0.20		縄文時代早期後半
F-48	焼土	P71b	VI層上位	(0.29)×0.15		縄文時代早期後半
F-49	焼土	N69a	VI層上位	0.29×0.28/0.10		縄文時代早期後半
F-50	焼土	Q78a・D	VI層上位	0.67×0.53/0.17		縄文時代早期後半
F-51	焼土	N71d	VI層上位	0.78×0.56/0.12		縄文時代早期後半
F-52	焼土	O72b	VI層上位	0.33×0.22/0.12		縄文時代早期後半

別表VI-7 宮戸4遺跡 町道部分検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模 (m)	長軸方向	時期
TP-18	Tピット	U15b、U16a	VI層上位	2.81×0.63/2.99×0.25/0.61	N-21°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-52	Tピット	S14a・d	VI層上位	2.33×0.53/2.41×0.17/0.74	N-32°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
TP-57	Tピット	P7b・c	VI層上位	2.27×0.65/2.43×0.20/0.96	N-11°-W	縄文時代中期後半～後期初頭
F-53	焼土	T15b	V層下位	0.38×0.28/0.99		縄文時代早期後半～前期前半
F-54	焼土	T16c	V層下位	0.67×0.63/0.14		縄文時代早期後半～前期前半
F-55	焼土	R11a	V層下位	0.53×0.40/0.07		縄文時代早期後半～前期前半
F-56	焼土	R11d	V層下位	0.38×0.37/0.06		縄文時代早期後半～前期前半
F-57	焼土	R11d	V層下位	0.54×0.41/0.08		縄文時代早期後半～前期前半
F-58	焼土	S12c	V層下位	0.55×0.40/0.11		縄文時代早期後半～前期前半
F-59	焼土	R12b、S12a	V層下位	0.53×0.51/0.08		縄文時代早期後半～前期前半

別表VI-8 宮戸4遺跡樹林部分遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	点数
T P-26	覆土2	礫・礫片	礫片	3
	覆土10	礫・礫片	礫片	7
	覆土11	礫・礫片	礫片	2
	合計			12
T P-29	覆土4	礫・礫片	礫	1
	合計			1
T P-30	覆土1	石器	フレイク	1
	覆土2	石器	フレイク	3
	合計			4
T P-32	覆土1	礫・礫片	礫	2
	合計			2
T P-33	覆土1	石器	ピース・エス・キーユ	1
	合計			1
T P-35	覆土1	土器	I b-3	1
	合計			1
T P-36	覆土1	石器	フレイク	1
	覆土2	礫・礫片	礫片	1
	覆土3	石器	フレイク	1
			石鏃	1
合計			4	
T P-41	覆土1	石器	フレイク	5
	合計			5
T P-53	覆土14	礫・礫片	礫	4
	合計			4
T P-55	覆土1	土器	I b-4	58
		石器	フレイク	3
	覆土3	土器	I b-4	2
	合計			63
T P-57	覆土	土器	I b-3	5
		礫・礫片	礫	42
合計			47	
F-46		石器	フレイク	2
	合計			2
F-47		石器	フレイク	2
		石器	フレイク	2
	合計			4
F-50	覆土1	石器	フレイク	2
		土器	I b-2	2
	合計			4

別表VI-9 宮戸4遺跡町道遺構出土遺物一覧

遺構名	層位	遺物名	分類	点数
F-53	焼土1層	石器	フレイク	2
	合計			2
F-54	V層下	土器	II a	1
		石器	フレイク	74
			Rフレイク	1
			石鏃	2
			石鏃片?	1
			石錐	1
			石鏃片	1
			つまみ付ナイフ片	1
			石鏃未成品	1
			石斧未成品	1
			礫・礫片	礫
合計			85	
総合計			241	

別表VI-10 F-54 出土掲載土器一覧

掲載番号	図番号	接合状況	同一個体破片	分類	図版番号
		遺物番号・層位・点数	遺物番号・層位・点数		
1	V-5	F-54-1 V下×1		II a-1	33

別表VI-11 TP-35 出土掲載土器一覧

掲載番号	図番号	接合状況	同一個体破片	分類	図版番号
		遺物番号・層位・点数	遺物番号・層位・点数		
1	V-13	TP-35-1 覆1×1		I b-3	33

別表VI-12 TP-55 出土掲載土器一覧

掲載番号	図番号	接合状況	同一個体破片	分類	図版番号
		遺物番号・層位・点数	遺物番号・層位・点数		
1	V-18	TP-55-1 覆1×2	TP-55-1 覆1×56、 S-100-c-1 VI×2、 T-100-d-1 VI×3 合計61点	I b-4	33

別表VI-13 宮戸4遺跡 層位別出土土器点数一覧（総計）

分類	III層	V層				VI層	風倒 攪乱	表採 排土	層位 不明	合計
		上位	中位	下位	不明					
縄文時代早期										
I群b-1類		7	54	916	2	155			1	1135
I群b-2類	1	49	57	781		621	1		1	1511
I群b-3類	14	4	75	720	53	133	2	1		1002
I群b-4類			8	388	3	200	1		6	606
I b細分不明	1	1	10	227		87	1		2	329
縄文時代前期										
II群a類	1	8	349	240		33	2			633
II群b類			6	6						12
縄文時代中期										
III群b類	10	58	151	50		23				292
分類不明				1						1
合計	27	127	710	3329	58	1252	7	1	10	5521

別表Ⅵ-14 宮戸4遺跡包含層出土掲載土器一覽(1)

掲載番号	図番号	接合状況		分類	図版番号		
		遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数				
1	V-24	R-77-d-7V下×4、R-78-a-7VI×2、R-78-b-1V下×2	合計8点	I b-1	33		
2	V-24	N-69-c-7VI×1、Q-79-d-2V下×1、Q-80-b-1V下×2、 Q-81-d-1V下×1、Q-82-a-2VI×1、R-77-a-8VI×1、 R-77-d-1VI×13、R-77-d-3V下×5、R-78-a-1V上×4、 R-80-a-1V下×9、R-80-a-4V下×1、R-80-b-1V下×1、 R-80-c-6VI×2、R-80-d-1V下×1、R-80-d-2V下×7、 R-80-d-3VI×3、R-80-d-6V下×3	合計56点	I b-1	33		
3	V-25	U-19-a-19V下×1、V-19-b-1V下×1	合計2点	U-18-d-19VI下×2、V-19-b-14V下×1	合計3点	I b-1	34
4	V-25	U-18-d-6V中×1				I b-1	34
5a	V-25	S-15-b-4V下×13		S-15-b-4V下×32、S-15-b-7V下×10、T-14-a-16V下×3、 U-17-c-39V下×1、V-18-d-9V下×1、未注記×17	合計64点	I b-1	34
5b	V-25	S-15-b-4V下×4					
6a	V-25	U-17-a-27VI×2		T-16-d-2V下×1、U-17-a-24VI×1、U-17-a-27VI×19、 U-17-c-3V中×4、U-17-c-27VI×13、U-17-c-38VI×1、 U-17-c-39V下×2、U-18-a-15V下×1、U-18-b-6V下×2、 U-18-d-6V中×1、V-18-a-23VI×1	合計46点	I b-1	34
6b	V-25	U-17-a-27VI×2					
7	V-25	P-72-b-1V下×10		O-72-a-1VI×13、O-72-a-4VI上×1、O-72-c-3VI×2、 P-72-b-1V下×4、P-72-b-3VI×1	合計21点	I b-1	34
8	V-25	V-19-c-4V下×1		U-18-a-17V下×1、U-19-a-14V下×1、V-15-1-不明×1	合計3点	I b-1	34
9	V-25	V-22-b-1V下×1		V-21-b-3V下×2、V-21-b-5V下×1、V-21-d-2V下×1、 V-22-b-1V下×1、V-22-b-4VI×2、W-22-a-3V中×1、 W-22-b-1V下×1	合計9点	I b-1	34
10	V-25	T-14-a-16V下×3		S-15-b-4V下×9、S-15-b-7V下×2、T-14-a-16V下×3、 T-14-10VI上×3	合計17点	I b-1	34
11	V-25	T-14-15V下×1				I b-1	34
12	V-25	U-16-a-13V下×1		S-15-b-4V下×2、S-15-b-7V下×2、U-18-a-15V下×3、 U-18-b-6V下×54、U-20-b-3V中×1、U-18-c-6V下×49、 U-18-c-9V下×1、U-18-c-21V下×10、U-18-d-6V中×5、 U-18-d-19VI下×1、V-18-a-8V中×1、V-18-a-14V下×4、 V-18-a-16VI×1、V-18-a-17V下×3、V-18-a-23V下×6、 V-18-d-15V下×6、V-19-c-2Ⅲ×1、W-20-d-5V下×1	合計152点	I b-1	34
13a	V-25	V-18-a-17V下×1、V-18-d-23VI×1	合計2点	U-17-a-27VI×1、U-18-a-15V下×1、U-18-b-11V下×1、 U-18-d-6V中×3、V-18-a-8V中×9、V-18-a-14VI×2、 V-18-a-17V中×10、V-18-d-23V下×4	合計31点	I b-1	35
13b	V-25	V-18-a-17V下×5					
13c	V-25	V-18-a-15V下×1、V-18-a-16VI×1、V-18-a-23VI×1	合計3点				
13d	V-25	V-18-a-14V下×1、V-18-a-16VI×2、V-18-a-23VI×1	合計4点				
14	V-25	N-70-c-4VI×1		O-70-c-1V下×2、O-70-a-3V下×1、O-70-d-1V下×1	合計4点	I b-1	34
15	V-25	U-17-a-27VI×1		V-18-d-23V下×1		I b-1	34
16a	V-25	V-22-a-2V上×1		U-20-a-1V下×1、V-21-d-2V下×1		I b-1	34
16b	V-25	V-22-a-2V上×1			合計2点		
17	V-25	V-18-d-21V下×3				I b-1	35
18	V-25	U-17-c-39V下×2		U-17-c-38VI×1未注記2点		I b-1	34
19	V-25	U-18-a-15V下×1		U-18-a-15V下×2、U-18-d-6V中×5	合計5点	I b-1	35
20a	V-25	S-99-b-1VI×9		S-99-b-2VI×2、T-99-c-2VI×1	合計3点	I b-1	35
20b	V-25	S-99-b-2VI×1					
21a	V-26	U-17-c-18V上×2		U-17-a-7V上×1、U-17-c-3V中×1、U-17-c-18V上×2		I b-1	35
21b	V-26	T-16-c-18V下×1、T-17-a-9V中×1	合計2点			I b-1	35
21c	V-26	V-18-d-15V下×1					
21d	V-26	U-17-a-27VI×2			合計4点		
22	V-26	U-17-c-27VI×1				I b-1	35
23	V-26	Q-81-b-3V下×4、Q-81-b-7V下×3	合計7点	N-80-a-5VI上×2、P-82-b-1V下×1、Q-81-c-4VI上×1	合計4点	I b-1	36
24	V-26	P-71-b-1VI×1		N-71-c-3VI×2、N-71-c-6VI×1	合計3点	I b-1	36
25	V-26	T-14-a-16V下×1				I b-1	36
26	V-26	U-17-d-18V下×1		U-18-a-15V下×2、V-18-a-8V中×1、V-18-a-14V下×2、 V-18-a-17V下×1、V-18-d-15V下×1	合計7点	I b-1	36
27	V-26	P-71-b-11VI×1		N-72-b-1VI×6未注記6点		I b-1	36
28	V-26	V-21-d-2V下×1				I b-1	36
29	V-26	R-81-a-2V下×2		R-81-a-2V下×5		I b-1	36
30	V-26	O-74-b-8VI×1、O-74-b-11VI×1	合計2点	O-70-d-2VI×1、O-70-d-3VI×1、O-72-c-3VI×1、 O-74-a-8VI×7、O-74-b-5V下×2、O-74-b-9VI×4、 O-74-b-11VI×2、O-74-b-31V上×1、P-76-a-3V下×1、 未注記31点	合計52点	I b-1	36
31	V-27	V-22-b-4VI×1		V-21-b-5V下×1、V-22-a-2V上×1	合計2点	I b-2	36
32	V-27	P-6-b-1V下×1		P-9-b-1V下×1、Q-9-d-3V下×1	合計2点	I b-2	36
33	V-27	O-5-c-1V下×1		O-5-c-1V下×1、P-5-d-5VI×1、P-6-d-1VI×1、 P-7-b-8VI×1、Q-7-d-1VI×1、Q-9-d-3V下×1、 P-9-b-2V下×1	合計7点	I b-2	36
34	V-27	R-77-d-3V下×4		R-76-d-1VI×1、R-77-d-3V下×19、未注記5点	合計25点	I b-2	36
35	V-27	O-74-b-9VI×1		O-74-a-2V下×1、O-74-a-5VI×1、O-74-a-8VI×1、 O-74-b-8VI×4、O-74-b-9VI×5、O-74-b-11VI×8、 O-74-c-6VI×2、O-74-c-3V下×2、未注記2点	合計26点	I b-2	36
36	V-27	R-10-d-1VI×3				I b-2	36
37	V-27	V-18-a-17V下×1		T-14-a-16V下×4、U-18-a-15V下×1、U-18-d-15V中×1	合計6点	I b-2	36
38a	V-27	O-76-a-3VI×1、O-76-b-3VI×1	合計2点	O-70-c-2VI×1、O-76-a-2VI×1、O-76-a-3VI×6、 O-76-b-1VI×7、O-76-b-2VI×6、O-76-b-3VI×5、 O-76-c-2VI×5、P-76-a-3V下×1、P-76-a-4VI×1、 P-76-b-4V下×1、P-76-d-1V下×1、P-76-d-5VI×1、 P-78-a-3V下×2	合計38点	I b-2	36
38b	V-27	O-76-b-1VI×1、O-76-c-2VI×2	合計3点				

表VI-15 宮戸4遺跡包含層出土掲載土器一覽(2)

掲載番号	図番号	接合状況		分類	図版番号
		遺物番号・層位・点数	同一個体破片 遺物番号・層位・点数		
39	V-27	P-73-a-1VI上×1、P-73-a-3VI上×3、P-73-a-5VI中×1 合計5点	N-71-c-3VI×3、N-72-b-1VI×2、O-70-c-5VI×1、 O-72-d-6VI×1、O-76-b-3VI×1、O-76-c-2VI×1、 O-76-c-2VI×1、P-69-b-3VI×1、P-69-c-11VI×1、 P-73-a-1VI×3、P-73-a-3VI×19、P-73-a-5VI×3、 P-73-c-1VI×2、P-73-d-1VI×2、P-73-d-3VI×1、 P-76-a-4VI×1、P-76-c-10V下×1 合計44点	I b-2	36
40	V-27	O-70-a-1VI×1、O-70-c-5VI×2、P-69-c-5VI×1、 P-69-d-3VI×1 合計5点	O-70-a-4VI×2、O-70-b-1VI×2、O-70-d-2VI×1、 O-70-d-3VI×1、P-69-a-2VI×5、P-69-c-1V下×2、 P-69-c-6VI×4、P-69-d-1V下×3、P-69-d-3VI×4、 P-70-d-5VI×3、P-71-a-1VI×1、P-71-a-2VI×1、 P-71-a-6V中×1 合計30点	I b-2	36
41	V-27	O-74-b-8VI×1、O-74-b-11VI×4 合計5点	O-72-c-6VI上×1、O-72-d-6VI上×2、O-73-b-1VI上×1、 O-74-a-6V下×1、O-74-b-5V下×5、O-74-b-8VI上×3、 O-74-b-9VI中×3、O-74-b-11VI上×11、O-74-c-5VI上×2、 O-74-c-6VI上×2、未注記11点 合計42点	I b-2	36
42a	V-27	R-81-a-2V下×4	Q-80-a-8VI×1、R-77-d-1VI×1、 R-77-d-3V下×1、R-81-a-2V下×40、未注記9点 合計52点	I b-2	36
42b	V-27	R-77-d-3V下×1、R-78-a-5V下×1、R-78-d-1V上×1 合計3点			
43	V-27	T-14-a-16V下×2	T-14-a-16V下×7	I b-2	36
44	V-27	U-18-a-15V下×1		I b-2	37
45a	V-27	R-77-d-3V下×3	Q-77-c-2VI×1、Q-78-a-1V下×1、Q-78-a-2VI×1、 Q-78-b-2V下×2、Q-78-c-6VI×1、Q-82-a-2VI×1、 R-77-d-1VI×2、R-77-d-3V下×84、R-78-a-1V上×4、 R-78-b-2VI×4、R-78-c-1V上×2、R-78-c-3VI×2、 R-78-c-4VI×1、R-78-d-1V上×4、R-78-d-2VI×1、 R-78-d-5VI×2、R-79-a-1V下×3、R-79-d-2V下×1、 R-80-d-4VI×3 合計120点	I b-2	37
45b	V-27	R-77-d-1VI×2、R-77-d-3V下×3 合計5点			
45c	V-27	R-77-d-1VI×1、R-77-d-3V下×5 合計6点			
46a	V-27	U-17-c-39V下×7	T-14-10VI×2、U-17-a-6V中×1、U-17-c-39V下×39、 U-17-d-18V下×4、U-17-d-27VI×1未注記8点 合計55点	I b-2	37
46b	V-27	U-17-c-39V下×11			
47	V-27	S-12-c-3V下×2	R-12-b-42VI×1、S-12-a-10V下×1、S-12-c-3V下×5、 S-12-d-8V下×3、T-14-10VI×1 合計11点	I b-2	37
48	V-27	R-78-d-5VI×1、R-80-a-1V下×1 合計2点	P-78-b-1VI×1、Q-77-c-2VI×1、R-77-d-3V下×2、 R-78-a-1V上×4、R-78-a-5V下×1、R-78-b-1VI×4、 R-78-b-2VI×3、R-78-d-1V上×1、R-79-a-2VI×1、 R-80-a-1V下×2、R-80-a-4V下×2 合計22点	I b-2	37
49	V-27	O-75-d-7VI×1、P-74-b-2V下×1、P-76-d-5VI×1 合計3点		I b-2	37
50	V-27	S-12-c-13V下×9	R-10-d-1V下×2、S-12-a-10V下×1、S-12-a-11V下×2、 S-12-b-14V下×1、S-12-d-1V中×4、S-12-d-8V下×10、 S-12-c-2V下×1、S-12-c-3V下×42、S-15-b-4V下×8、 S-15-b-12V中×11、T-14-a-16V下×3 合計85点	I b-2	37
51	V-27	R-81-a-2V下×9	N-81-a-5V上×1、P-83-d-1V下×2、R-80-d-2V下×7、 R-80-d-4VI×1、R-81-a-2V下×22 合計33点	I b-2	38
52	V-27	R-81-a-2V下×4	P-82-c-2V下×1、Q-80-c-2V下×1、Q-81-a-3V下×2、 Q-81-c-1V下×2、Q-81-c-3V下×8、Q-81-c-4VI×2、 Q-81-b-3V下×27、Q-81-b-5V下×1、R-81-a-2V下×2、 R-81-b-7V下×8、R-81-d-1V下×1 合計55点	I b-2	37
53a	V-27	T-14-a-16V下×1	S-12-b-1V中×1、S-12-d-8V下×2、T-14-a-13V下×3、 T-14-a-15V下×18、T-14-a-16V下×7、T-14-10VI×9 合計40点	I b-2	38
53b	V-27	T-14-a-13V下×2			
54	V-28	S-12-a-11V下×1	R-11-c-1V下×1、R-12-b-5V中×2、R-12-b-30V下×1、 R-12-b-43VI×1、R-12-c-18V下×1、S-12-a-11V下×2、 S-12-c-2V下×1、S-12-c-18V下×1 合計10点	I b-3	38
55	V-28	U-17-a-7V中×1、U-17-a-39VI×1 合計2点	R-12-b-30V下×1、U-17-a-7V中×4、U-17-a-16III×4、 U-17-a-19V上×1、U-17-a-25VI×1、U-17-b-13V下×2、 U-17-c-26VI×1 合計14点	I b-3	38
56	V-28	S-2-b-1VI×1	P-5-d-1V下×4	I b-3	38
57	V-28	S-12-c-18V下×2	S-12-b-30V下×1、S-12-c-2V下×5、S-13-b-4V下×1、 S-13-d-3V下×1、T-12-d-1V中×1、U-17-a-20V下×1、 U-19-a-15VI×1、U-19-d-9V下×1 合計12点	I b-3	38
58	V-28	Q-9-d-2V下×1		I b-3	38
59	V-28	S-13-c-4V下×2	S-12-b-4V下×1、S-12-c-2V下×3、S-12-c-13V中×1、 S-12-d-1V中×2、S-13-b-1V中×2、S-13-c-4V下×1 合計10点	I b-3	38
60a	V-28	T-14-a-2V中×1、T-14-1V×1 合計2点	S-13-c-4V下×3、T-14-1V×23、T-14-a-2V中×2、 T-14-a-15V下×2、U-17-b-13V下×5、U-17-c-26VI×1 合計36点	I b-3	38
60b	V-28	S-12-b-30V下×1、S-12-c-18V下×5 合計6点			
61a	V-28	S-12-c-2V下×1	R-7-b-9VI×1、R-12-b-14V下×1、R-12-b-21V下×1、 R-12-b-30V下×5、R-12-b-43VI×1、S-12-c-2V下×3、 S-12-c-18V下×1、S-12-d-1V中×2、S-12-d-8V下×2 合計16点	I b-3	38
61b	V-28	S-12-c-2V下×2、S-12-c-18V下×1 合計3点			
62	V-28	P-84-c-1V下×1、P-84-d-1V下×5 合計6点	O-84-c-2V下×3、P-84-d-1V下×4 合計7点	I b-3	38
63	V-28	T-16-a-9V下×1、U-17-b-13V下×1 合計2点	T-16-c-19V下×1、U-14-b-13V下×1、U-16-a-4V下×1、 U-17-a-19V上×1、U-17-b-10III×2、U-17-b-13V下×1、 U-17-d-2V中×1、U-19-b-13V下×2、U-19-d-9V下×1、 U-21-b-1V下×2、V-21-a-5V下×1 合計14点	I b-3	38
64a	V-28	R-87-a-1V下×4	O-77-d-1V下×1、P-84-d-1V下×1、Q-83-c-1V下×5、 R-87-a-1V下×24、R-87-a-3V下×6、R-87-b-1V下×51、 R-87-b-2V下×5 合計93点	I b-3	38
64b	V-28	R-87-a-1V下×1、R-87-b-1V下×3、R-87-b-2V下×2 合計6点			
65	V-28	S-100-d-1VI×1、S-2-a-1VI上×1 合計2点	S-2-a-1VI×1、S-100-a-1VI×1、S-100-d-1VI×1、 S-100-d-4VI×9 合計12点	I b-3	38
66	V-28	U-16-a-12V下×5、U-16-a-29V下×1、U-16-d-2VI×1 合計7点	T-16-b-13V下×7、T-16-c-19V中×4、T-16-c-23VI×3、 U-16-a-4V下×1、U-16-a-12V下×1 合計16点	I b-3	38
67	V-28	O-75-d-3V下×1	S-76-c-1V下×2	I b-3	39
68	V-28	T-98-d-1VI×1	P-86-d-1VI×1、T-98-c-1VI×2 合計3点	I b-3	39
69	V-28	T-14-1V×6	T-14-1V×8	I b-3	39

表VI-16 宮戸4遺跡包含層出土掲載土器一覽(3)

掲載番号	図番号	接合状況	同一個体破片	分類	図版番号
		遺物番号・層位・点数	遺物番号・層位・点数		
70	V-28	S-12-a-11V下×1、S-12-d-8V下×1 合計2点	R-12-b-5V中×2、R-12-b-14V下×1、S-12-a-11V下×11、S-12-a-19V下×1、S-12-b-30V下×1、S-12-c-2V下×5、S-12-c-3V下×1、S-12-d-8V下×3 合計25点	Ib-3	39
71	V-28	V-19-b-2V下×25、V-19-b-3V下×12 合計37点	V-19-b-2V下×163、V-19-b-3V下×6 合計169点	Ib-4	39
72	V-28	N-79-c-4VI×2	N-79-c-2V下×2、N-79-d-5VI×6、P-67-c-3VI×6 合計14点	Ib-4	39
73	V-28	N-70-b-2VI×3	N-70-b-1V下×2、P-68-c-2V下×1、P-70-c-1VI×2、P-71-b-2VI×1、P-76-b-1V下×1 合計7点	Ib-4	39
74	V-28	Q-10-c-1V下×1	P-6-b-7V×1	Ib-4	39
75	V-28	V-19-b-2V下×1	V-19-a-4V中×3	Ib-4	39
76a	V-28	Q-73-d-1VI×1、Q-74-a-3VI×2 合計3点	P-74-b-1V下×29、P-74-d-1V下×7、Q-73-d-1VI×48、 Q-74-a-3VI×6、Q-74-a-4VI×1、未注記×117点 合計208点	Ib-4	39
76b	V-28	P-74-b-1V下×1、P-74-c-2V下×3 合計4点			
77	V-28	U-19-c-10V下×1	V-18-d-2V中×2、V-19-a-4V中×1 合計3点	Ib-4	39
78	V-28	T-100-d-1VI×1	T-100-d-1覆1×58、S-100-c-1VI上×2、T-100-d-1VI×3 合計63点	Ib-4	39
79	V-28	N-82-c-1V下×1	N-82-c-1V下×1	Ib-4	39
80a	V-29	T-18-b-15V中×10、T-18-b-19V中×10、U-16-a-14V下×1、 U-18-a-17V下×1、U-19-b-3V下×1 合計23点	T-16-d-5V下×2、T-18-b-3V中×1、T-18-b-15V中×75、 T-18-b-19V中×68、T-18-c-8V中×1、U-18-d-8V中×2、 U-19-a-16V下×1、U-19-a-21V下×3、V-19-b-2V下×1、 V-19-b-3V下×35、未注記×84 合計273点	IIa-1	40
80b	V-29	T-18-b-15V中×2、U-19-b-3V下×1 合計3点			
81	V-29	T-18-b-15V中×1		IIa-1	39
82	V-29	U-16-a-6V下×1、U-16-d-1V中×1 合計2点		IIa-1	39
83	V-29	R-10-a-1V下×1		IIa-1	39
84	V-29	O-5-d-3VI×1	P-5-a-1V下×2、P-6-b-2VI×1 合計3点	IIa-1	39
85	V-29	S-12-c-12V中×1	S-11-d-1V下×1、T-17-a-7V下×1、U-16-a-14V下×1 合計3点	IIa-1	40
86	V-29	T-17-c-11V下×1		IIa-1	40
87	V-29	T-15-c-12V下×1	T-15-a-11VI×1、T-15-c-8V下×5、T-15-d-1V下×5、 T-16-c-6V下×1、T-16-d-2V下×1、U-16-a-14V下×1 合計14点	IIa-1	40
88	V-29	T-18-c-8V中×1	U-18-a-4V下×2、U-18-a-17V下×1、U-18-b-13V下×1、 U-18-c-7V下×1、U-18-c-20V下×2、U-18-d-8V下×3 合計10点	IIa-1	40
89a	V-29	U-18-d-8V中×1、V-20-2V下×1 合計2点			
89b	V-29	V-20-2V下×2	U-18-a-17V下×1、V-20-2V下×1 合計2点	IIa-1	40
90	V-29	O-72-c-1V下×1		IIa-1	40
91	V-29	P-68-c-1V下×3	P-68-c-1V下×7、未注記×21点 合計28点	IIa-1	40
92	V-29	P-75-d-2VI×1		IIa-1	40
93	V-29	R-77-d-6V下×1		IIa-1	40
94	V-29	U-18-d-9V中×2	T-16-d-5V下×1	IIb	40
95	V-29	Q-9-c-1V下×1		IIb	40
96	V-29	U-17-b-16V下×1	T-16-d-2V下×1、U-16-a-1V下×1、U-16-c-2V下×1、 U-17-a-5V中×1、未注記1点 合計5点	IIb	40
97	V-29	T-18-b-7V中×1、U-17-d-19V下×1 合計2点	U-17-b-14V下×1	IIb	40
98a	V-30	V-18-a-9V中×1			
98b	V-30	V-18-a-7V中×3、V-18-a-9V中×6、U-17-c-18V上×1、 U-18-b-14V下×3 合計13点	R-18-b-31V下×1、S-12-a-3V中×1、U-17-a-3V中×1、 U-17-a-4VI×5、U-17-c-3V中×4、U-17-c-18V上×6、 U-18-b-2V中×5、U-18-b-14V下×3、V-18-a-1V中×3、 V-18-a-6V中×1、V-18-a-7V中×1、V-18-a-9V中×22 合計53点	IIIb-1	41
98c	V-30	U-17-c-18V上×1、V-18-a-9V中×3 合計4点			
98d	V-30	V-18-a-9V中×4			
99a	V-30	U-20-c-5V下×1			
99b	V-30	U-20-b-4V中×1	U-19-d-7V下×1、U-20-b-4V中×4、V-19-d-2V上×2、 V-20-a-1V中×3、V-20-c-2V上×2 合計12点	IIIb-1	41
99c	V-30	U-20-b-4V中×5			
100	V-30	R-12-c-11V中×1	R-12-b-16V下×1、S-12-d-2V下×2 合計3点	IIIb-1	41
101	V-30	U-17-c-24VI×1	U-17-c-18V上×4	IIIb-1	41
102a	V-30	U-17-c-3V中×1、U-17-c-18V上×1、U-18-b-2V中×1 合計3点	U-16-c-3V上×1、U-17-a-1III×1、U-17-a-20VI×1、 U-17-c-2V下×2、U-17-c-3V中×16、U-17-c-7V上×1、 U-17-c-15III×5、U-17-c-18VI×12、U-17-d-1V中×1、 U-17-d-3V中×1、U-17-d-7V上×4、U-17-d-9III×1、 U-17-d-19V下×2、U-18-b-2V中×2、U-18-b-14V下×1 合計51点	IIIb-1	41
102b	V-30	U-17-c-3V中×2、U-17-d-7V上×1、U-17-d-19V下×1 合計4点			
103	V-30	P-6-c-2V下×1	P-5-c-1V下×1、P-6-c-2V下×1 合計2点	IIIb-1	41
104	V-30	V-19-d-1V上×1		IIIb-1	41

別表VI-17 宮戸4遺跡遺構出土掲載石器一覧

図	写真	掲載番号	地区	遺構名	番号	層位	分類	細分類	石材	石質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
V-4	33	1	樹林	TP-33	1	覆土1	ビエス・エスキュー	二辺	黒曜石	シマ	28.6	30.7	7.6	7.23	被熱
V-6		1	樹林	TP-36	4	覆土3	石鏃	未製品	黒曜石	シマ	23.2	14	2.5	0.79	
		2	樹林	F-54	7	V層下	石鏃	未製品	黒曜石	シマ	24.6	24	3.2	1.21	被熱
V-17		3	樹林	F-54	13	V層下	石鏃	棒状	黒曜石	シマ	31.7	11.3	4.9	1.65	被熱
		4	樹林	F-54	12	V層下	石鏃	三角平基	黒曜石	シマ	20.6	14.7	3.6	1.06	被熱

別表VI-18 宮戸4遺跡包含層出土掲載石器一覧

図	写真	掲載番号	地区	グリッド	番号	層位	分類	細分類	石材	石質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
V-30	42	1	樹林	U 93 d	1	V層上	石鏃	柳葉形	黒曜石	シマ	42.8	12.2	3.5	1.57	
		2	道路	R 11 b	8	V層下	石鏃	柳葉形	黒曜石	シマ	20.3	7.7	1.8	0.24	
		3	樹林	P 83 b	2	VI層上	石鏃	柳葉形	黒曜石	シマ球	46.8	17.8	5.0	3.64	
		4	樹林	Q 79 b	2	V層下	石鏃	柳葉形	黒曜石	シマ	29.3	13.0	3.0	1.01	
		5	樹林	N 82 c	4	VI層上	石鏃	五角形	黒曜石	モヤ	16.2	9.9	1.9	0.28	
		6	樹林	N 82 c	2	V層下	石鏃	五角形	黒曜石	モヤ	16.9	10.5	2.2	0.35	
		7	樹林	P 69 a	1	V層下	石鏃	三角平基	粘板岩		21.9	15.1	2.2	0.81	
		8	樹林	Q 90 c	1	VI層上	石鏃	三角平基	黒曜石	モヤ	26.4	14.4	2.8	0.64	
		9	道路	S 12 c	23	V層下	石鏃	三角平基	黒曜石	モヤ	31.6	19.7	5.3	3.10	
		10	樹林	R 86 d	1	VI層上	石鏃	三角平基	黒曜石	モヤ	16.1	17.5	2.8	0.55	
		11	道路	T 15 b	10	V層下	石鏃	三角平基	黒曜石	シマ	15.9	12.4	2.4	0.45	
		12	道路	V 21 c	3	V層下	石鏃	三角凹基	黒曜石	モヤ	23.0	17.0	3.3	0.94	
		13	樹林	O 74 a	7	V層下	石鏃	三角凹基	黒曜石	モヤ	20.4	16.8	2.5	0.72	
		14	道路	T 14 b	6	V層下	石鏃	特殊	黒曜石	朱	37.6	10.8	4.3	1.34	
		15	道路	W 22 a	2	III層	石鏃	特殊	黒曜石	モヤ	32.7	19.5	5.9	3.22	
		16	道路	T 16 c	11	V層下	石鏃	特殊	黒曜石	シマ	18.2	10.1	2.9	0.55	
		17	道路	S 15 b	2	V層下	石鏃	有茎凸基	黒曜石	シマ	41.7	16.2	5.6	2.97	被熱
		18	道路	T 15 d	8	V層下	石鏃	有茎凸基	黒曜石	シマ球	49.0	17.8	7.3	4.62	
		19	道路	N 3 b	1	VI層上	石鏃	有茎凸基	黒曜石	シマ	36.0	22.8	6.6	4.12	
		20	道路	U 19 b	7	V層中	石鏃	有茎平基	黒曜石	シマ	16.7	12.2	3.4	0.50	
		21	道路	U 18 b	18	V層下	石鏃	有茎平基	黒曜石	シマ球	21.8	13.1	2.7	0.51	
		22	樹林	M 70 b	1	V層下	石鏃	有茎凸基	頁岩		26.0	13.8	3.5	1.04	
		23	樹林	P 68 d	1	V層下	石鏃	有茎凸基	黒曜石	シマ	25.0	12.0	2.9	0.50	
		24	樹林	O 75 c	1	V層下	石鏃	有茎凸基	黒曜石	シマ球	18.8	14.9	3.3	0.74	
		25	樹林	P 73 a	4	VI層上	石鏃	有茎凸基	黒曜石	シマ	31.9	15.0	5.8	2.20	
		26	樹林	S 69 d	1	V層下	石槍・ナイフ	有茎	頁岩		66.4	32.3	11.7	19.52	被熱
		27	道路	T 16 c	20	V層下	石槍・ナイフ	有茎	黒曜石	モヤ	51.9	35.2	8.9	13.25	
		28	道路	P 76 c	2	V層下	石槍・ナイフ	有茎	黒曜石	シマ球	82.2	38.5	9.2	32.62	
		29	樹林	N 70 b	3	VI層上	石槍・ナイフ	木葉形	黒曜石	シマ	51.3	36.7	10.1	18.57	
		30	樹林	Q 76 a	3	VI層上	石槍・ナイフ	木葉形	頁岩		43.0	32.7	11.6	14.98	
		31	道路	T 17 a	1	III層	石鏃	棒状	頁岩		42.3	8.7	6.5	2.41	
		32	樹林	O 84 c	7	V層下	石鏃	周縁加工	頁岩		48.5	17.2	9.3	7.19	
		33	道路	P 4 a	3	V層下	石鏃	剥片一端作り出し	黒曜石	モヤ	28.7	28.7	7.6	4.85	
		34	道路	T 15 b	11	V層下	石鏃	機能部作出	黒曜石	シマ	34.7	20.2	3.4	1.84	被熱
		35	道路	R 11 d	4	V層下	石鏃	挟りあり	黒曜石	朱	38.9	12.1	3.7	2.35	
		36	樹林	O 72 c	4	VI層上	石鏃	両面調整	黒曜石	モヤ	37.1	20.9	7.4	3.73	
		37	道路	P 7 a	2	VI層	石鏃	つまみ転用	黒曜石	朱	38.5	20.5	7.3	3.72	
	38	道路	V 18 a	20	V層下	つまみ付きナイフ	両面全面	黒曜石	朱	68.7	18.8	6.6	10.01		
	39	樹林	S 97 b	1	VI層上	つまみ付きナイフ	両面全面	黒曜石	モヤ	22.8	14.1	4.9	1.25		
	40	道路	R 12 b	17	V層下	つまみ付きナイフ	背面周縁	黒曜石	シマ	40.2	23.8	4.3	3.59		
	41	樹林	Q 78 b	4	VI層上	つまみ付きナイフ	背面全面腹面左縁	頁岩		48.3	17.9	4.2	4.82		
	42	樹林	R 78 d	4	VI層上	つまみ付きナイフ	背面全面腹面左縁	頁岩	メノウ質	50.0	29.8	8.4	12.49		
	43	樹林	P 84 c	3	VI層上	つまみ付きナイフ	背面全面腹面左縁	頁岩	メノウ質	46.9	35.9	5.9	12.10		
	44	樹林	Q 77 a	1	V層下	つまみ付きナイフ	背面周縁	黒曜石	朱	39.4	17.9	5.2	3.79		
	45	道路	T 17 b	12	V層下	つまみ付きナイフ	両面周縁	黒曜石	シマ	51.1	30.3	5.1	8.81		
	46	道路	U 18 b	17	V層下	つまみ付きナイフ	背面周縁	黒曜石	モヤ	61.7	26.4	5.5	9.70		
	47	道路	P 5 d	3	V層下	つまみ付きナイフ	背面全面	頁岩	メノウ質	36.2	31.7	5.9	5.48		
	48	樹林	O 83 c	8	V層下	つまみ付きナイフ	背面全面	頁岩		66.5	22.1	7.1	12.96		
V-31	43	49	道路	U 16 a	26	V層中	つまみ付きナイフ	つまみ片	黒曜石	シマ	25.5	22.6	6.1	3.28	
		50	樹林	O 76 a	4	VI層上	スクレイパー	鋭状石器	頁岩		32.9	24.1	7.5	7.65	光沢あり
		51	樹林	O 79 d	3	VI層上	スクレイパー	鋭状石器	黒曜石	モヤ	30.1	19.9	6.6	3.11	
		52	樹林	O 82 d	1	V層下	スクレイパー	ラウンド	黒曜石	シマ	26.4	31.2	9.4	8.52	
		53	樹林	N 84 c	1	V層下	スクレイパー	ラウンド	黒曜石	朱	32.5	30.3	7.2	6.62	
		54	樹林	O 83 c	10	VI層上	スクレイパー	エンド	黒曜石	シマ	31.6	31.2	8.3	7.45	
		55	道路	U 19 a	24	V層下	スクレイパー	エンド	黒曜石	モヤ	45.3	29.1	10.8	12.44	
		56	道路	O 4 a	2	V層下	スクレイパー	エンド	黒曜石	モヤ	30.6	35.3	13.6	8.79	
		57	樹林	O 79 d	1	VI層上	スクレイパー	挟入石器	黒曜石	モヤ	23.2	21.4	9.3	5.10	
		58	道路	P 7 b	2	V層下	スクレイパー	挟入石器	黒曜石	シマ	30.0	16.5	8.2	3.81	
		59	道路	U 18 d	17	VI層中	スクレイパー	挟入石器	黒曜石	シマ	50.5	19.6	7.6	7.23	磨耗
		60	道路	T 16 c	12	V層下	スクレイパー	サイド	黒曜石	朱	28.0	38.1	6.1	7.95	
V-32		61	道路	Q 10 b	3	V層下	スクレイパー	サイド	黒曜石	灰	42.1	18.8	6.6	5.52	
		62	道路	P 6 c	3	V層下	スクレイパー	サイド	黒曜石	シマ	32.0	34.4	6.9	5.82	
		63	樹林	N 71 c	1	V層下	スクレイパー	サイド	頁岩		104.4	43.5	9.4	47.01	
		64	道路	U 17 c	16	III層	スクレイパー	サイド	黒曜石	シマ球	62.2	71.7	11.8	49.52	
		65	道路	T 17 c	7	III層	スクレイパー	サイド	頁岩		84.8	50.1	12.2	37.23	
		66	道路	T 16 b	5	V層下	スクレイパー	サイド	頁岩	メノウ質	45.1	25.1	10.0	11.79	
		67	道路	S 13 a	3	V層中	スクレイパー	サイド	黒曜石	朱	26.2	43.0	7.8	8.98	
		68	道路	T 17 b	6	V層中	スクレイパー	サイド	黒曜石	シマ	25.7	30.6	5.0	4.86	
		69	樹林	Q 76 c	1	VI層崩壊木炭	両面調整石器		黒曜石	シマ球	42.2	32.9	13.2	17.61	
		70	樹林	O 84 d	2	V層下	ビエス・エスキュー	二側縁	黒曜石	シマ	28.4	16.2	9.7	4.12	
		71	樹林	N 81 c	1	V層上	ビエス・エスキュー	四側縁	黒曜石	モヤ	26.6	23.4	5.4	3.70	
		72	道路	T 16 b	6	V層下	石核	ディスク状	黒曜石	シマ	36.5	27.6	21.8	16.72	
		73	道路	T 14 b	13	VI層上	石核	ディスク状	黒曜石	シマ	46.4	23.8	15.5	12.96	
		74	樹林	P 77 b	9	VI層上	石核	サイコロ状	黒曜石	シマ球	29.5	32.2	15.3	13.35	
		75	道路	U 18 b	7	V層下	石斧	擦り切り	(蛇紋岩)		93.0	49.5	17.8	125.01	被熱
		76	道路	Q 11 c	1	V層下	石斧	敲打	緑色泥岩		101.2	65.5	13.9	152.93	

表VI-19 米原4遺跡Tピット属性表

遺構名	平面形状 確認面	上端規模		下端規模		深さ	長軸方向	分類	備考
		長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)				
TP-1	長楕円形	2.82	0.90	2.64	0.18	0.98	N-8°-E	B	平成12年度
TP-2	楕円形	2.82	1.10	2.45	0.26	1.14	N-8°-W	C ₁	平成12年度
TP-3	長楕円形	3.26	1.11	2.54	0.20	1.27	N-68°-E	B	平成12年度
TP-4	長楕円形	2.56	0.51	2.55	0.24	0.90	N-8°-W	B	平成12年度
TP-5	長楕円形	2.36	0.57	2.24	0.21	1.04	N-27°-W	B	平成12年度
TP-6	楕円形	1.58	0.64	1.38	0.27	0.84	N-0°-W	C ₁	平成12年度
TP-7	溝状	3.01	0.30	2.85	0.17	0.72	N-20°-E	A	平成12年度
TP-8	楕円形	1.71	1.08	1.75	0.32	1.26	N-17°-W	C ₁	平成14年度
TP-9	長楕円形	1.52	1.04	1.76	0.17	1.16	N-33°-W	B	平成15年度

表VI-20 宮戸4遺跡Tピット属性表

遺構名	平面形状 確認面	上端規模		下端規模		深さ	長軸方向	分類	備考
		長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)				
TP-1	長楕円形	1.95	0.82	1.93	0.19	1.11	N-21°-W	B	平成12年度
TP-2	楕円形	1.86	0.95	1.97	0.33	1.70	N-8°-W	C ₁	平成12年度
TP-3	楕円形	1.71	0.72	1.99	0.23	1.72	N-2°-E	C ₁	平成12年度
TP-4	長楕円形	1.73	0.85	1.80	0.14	1.60	N-19°-E	B	平成12年度
TP-5	楕円形	1.57	0.83	1.07	0.21	1.50	N-68°-W	D ₁	平成13年度
TP-6	楕円形	1.81	1.12	1.65	0.40	1.17	N-6°-W	D ₂	平成13年度
TP-7	楕円形	1.49	0.86	1.12	0.25	1.33	N-82°-W	D ₁	平成13年度
TP-8	楕円形	1.54	0.85	1.22	0.24	1.30	N-72°-W	D ₁	平成13年度
TP-9	楕円形	(1.39)	0.91	1.17	0.26	1.40	N-20°-W	D ₁	平成13年度
TP-10	楕円形	1.56	0.93	1.10	0.25	1.40	N-19°-E	D ₁	平成13年度
TP-11	溝状	3.57	0.70	4.36	0.28	1.13	N-8°-E	A	平成13年度
TP-12	溝状	(2.95)	0.68	2.45	0.14	1.20	N-6°-E	A	平成13年度
TP-13	長楕円形	2.60	0.93	2.17	0.19	1.14	N-4°-W	B	平成13年度
TP-14	溝状	2.65	0.72	2.31	0.10	1.12	N-17°-E	A	平成13年度
TP-15	長楕円形	2.07	0.75	1.93	0.17	0.83	N-40°-W	B	平成13年度
TP-16	溝状	3.40	0.47	3.04	0.18	0.91	N-52°-W	A	平成13年度
TP-17	長楕円形	2.54	(0.73)	2.75	0.23	1.13	N-25°-W	B	平成13年度
TP-18	長楕円形	2.81	0.63	2.99	0.25	0.61	N-21°-W	B	平成13・15年度
TP-19	長楕円形	3.00	0.66	—	—	0.92	N-84°-E	—	平成14年度
TP-20	長楕円形	2.33	0.72	2.05	(0.18)	1.32	N-57°-W	B	平成14年度
TP-21	溝状	3.27	0.90	3.38	(0.22)	1.12	N-46°-W	A	平成14年度
TP-22	楕円形	(1.80)	0.70	1.47	0.35	0.79	N-21°-E	D ₁	平成14年度
TP-23	楕円形	1.40	0.65	1.09	0.19	0.68	N-88°-E	C ₁	平成14年度
TP-24	楕円形	1.25	0.98	0.73	0.24	1.06	N-14°-W	D ₁	平成14年度
TP-25	楕円形	1.80	0.60	1.66	0.51	0.99	N-7°-E	D ₁	平成14年度
TP-26	楕円形	1.60	0.85	1.70	0.22	1.45	N-87°-E	C ₁	平成15年度
TP-27	長楕円形	2.60	0.80	2.58	0.20	1.50	N-126°-E	B	平成15年度
TP-28	長楕円形	2.15	0.70	2.40	0.21	1.55	N-37°-W	B	平成15年度
TP-29	長楕円形	1.83	0.67	2.30	0.21	1.26	N-50°-W	B	平成15年度
TP-30	長楕円形	2.52	0.70	2.75	0.20	1.45	N-23°-W	B	平成15年度
TP-31	溝状	2.93	0.88	2.55	0.16	1.25	N-74°-E	A	平成15年度
TP-32	楕円形	1.76	1.26	1.68	0.24	1.49	N-89°-E	C ₁	平成15年度
TP-33	溝状	2.22	0.76	2.86	0.17	1.37	N-26°-E	A	平成15年度
TP-34	溝状	2.86	1.09	2.81	0.16	1.26	N-48.5°-W	A	平成15年度
TP-35	楕円形	1.58	0.74	1.21	0.24	1.39	N-16.5°-W	D ₁	平成15年度
TP-36	長楕円形	3.00	0.87	2.94	0.27	1.50	N-75°-W	B	平成15年度
TP-37	溝状	2.98	0.81	2.80	0.17	1.52	N-81°-W	A	平成15年度
TP-38	溝状	2.82	0.77	2.79	0.12	1.50	N-45°-W	A	平成15年度
TP-39	長楕円形	2.95	0.53	3.16	0.24	1.24	N-11°-E	B	平成15年度
TP-40	溝状	2.22	0.51	2.28	0.12	1.42	N-54.5°-W	A	平成15年度
TP-41	長楕円形	3.16	0.86	2.87	0.23	1.65	N-22°-W	B	平成15年度
TP-42	溝状	1.73	(0.80)	1.47	0.57	1.25	N-40°-W	A	平成15年度
TP-43	長楕円形	2.98	(1.26)	2.77	0.20	1.54	N-36°-W	B	平成15年度
TP-44	楕円形	1.85	0.65	2.18	0.26	1.52	N-60.5°-W	C ₁	平成15年度
TP-45	楕円形	2.22	0.79	1.64	0.24	1.08	N-3°-E	C ₁	平成15年度
TP-46	楕円形	1.87	0.64	1.91	0.26	1.05	N-18°-W	C ₁	平成15年度
TP-47	楕円形	1.01	0.40	0.82	0.14	0.32	N-10.5°-E	C ₁	平成15年度
TP-48	楕円形	1.40	0.50	1.30	0.14	0.98	N-57°-W	C ₁	平成15年度
TP-49	楕円形	1.16	0.67	0.99	0.21	0.92	N-77°-E	D ₁	平成15年度
TP-50	楕円形	2.02	1.25	1.74	0.60	1.00	N-89°-E	D ₂	平成15年度
TP-51	楕円形	(0.60)	(0.95)	(0.67)	(0.60)	(0.56)	N-25°-E	—	平成15年度
TP-52	長楕円形	2.33	0.53	2.41	0.17	0.74	N-32°-W	B	平成15年度
TP-53	楕円形	2.30	1.00	2.54	0.32	1.60	N-90°-E	C ₂	平成15年度
TP-54	楕円形	1.66	0.96	1.40	0.16	1.25	N-38°-W	C ₁	平成15年度
TP-55	楕円形	2.00	1.22	1.87	0.28	1.65	N-89°-E	C ₁	平成15年度
TP-56	長楕円形	2.00	0.75	2.00	0.15	1.20	N-31°-W	B	平成15年度
TP-57	長楕円形	2.27	0.65	2.43	0.20	0.96	N-11°-W	B	平成15年度

VII 自然科学的手法による分析

1 宮戸4遺跡出土「ヒスイ」製遺物の産地分析

藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこかの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということ調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこかの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2, 3, 4)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例⁵⁾が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉は北海道勇払郡鵠川町に位置する宮戸4遺跡出土の縄文時代早期の「ヒスイ」製磨製石斧1個について産地分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊⁴⁾で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違い

の影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を計り、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。⁵⁾

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産⁶⁾、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛驒産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これでほぼつくされていると思われる。これら原石の原産地を図1に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム (Na)、アルミニウム (Al)、珪素 (Si) などの軽元素⁷⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、ストロンチウム (Sr) である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム (K)、チタニウム (Ti)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、ルビジウム (Rb)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)、ニオブウム (Nb)、バリウム (Ba)、ランタニウム (La)、セリウム (Ce) の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛驒の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛驒、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するとき有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛驒産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと同様に区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイ

の代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2～3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表1-1、2に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表2の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図2はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、表2-2の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定

される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および*印の引佐産ヒスイの分布の一部が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si 比と Sr/Fe 比を指標とすることにより（図3）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si 比と Mg/Si 比を各原産地の原石について分布を示すことにより（図4）、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

宮戸4遺跡出土の石斧の分析結果

出土石斧の比重が2.9（アルキメデス法）で、硬玉より少し軽くまた、硬玉の主成分であるナトリウムの含有量も非常にすくないことから軟玉系と推測される。この石斧の分析できた含有元素の結果を表3に示した。

この石斧の原産地を明らかにするために、これら分析値を各原産地の原石の元素比量 Sr/Fe 対 Zr/Sr の分布範囲と比較すると、石斧は日高、飛騨の範囲に入り、それぞれ入った産地のヒスイの可能性を示す（図2）。また、Sr/Fe 対 Ca/Si でも石斧は日高、飛騨の範囲に入った（図3）。また Na/Si 対 Mg/Si の判定図4でも、日高、飛騨の重なる範囲に入っている。これら判定図と判定基準表1、2の比重の範囲および Ba 元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を満たした玉の産地として、日高産ヒスイを使用した石斧と同定し、結果を表4に示した。

結 論

今回分析した宮戸4遺跡出土の石斧は比重が日高ヒスイでも、軽い部類に入り、比重に重点において厳密に判定すれば、比較的比重の重い宝石としての半透明様の日高ヒスイとは異なる。判定図2, 3, 4で共通して入る元素比分布範囲は日高、飛騨ヒスイで、Ni/Feの含有量をみると、0.042で日高と飛騨産ヒスイの平均値からのズレは0.82σと1.6σになり、日高産ヒスイ系により近いと言える。これら判定条件に従えば、石斧は日高ヒスイにともなって生成された変成岩と推測し、図1に示した。

参考文献

- 1) 茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』, 14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina (1992)、Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録 No. 18:11-15
- 7) 河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石磁物鉱床学雑誌 22:195-201

図1 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布図

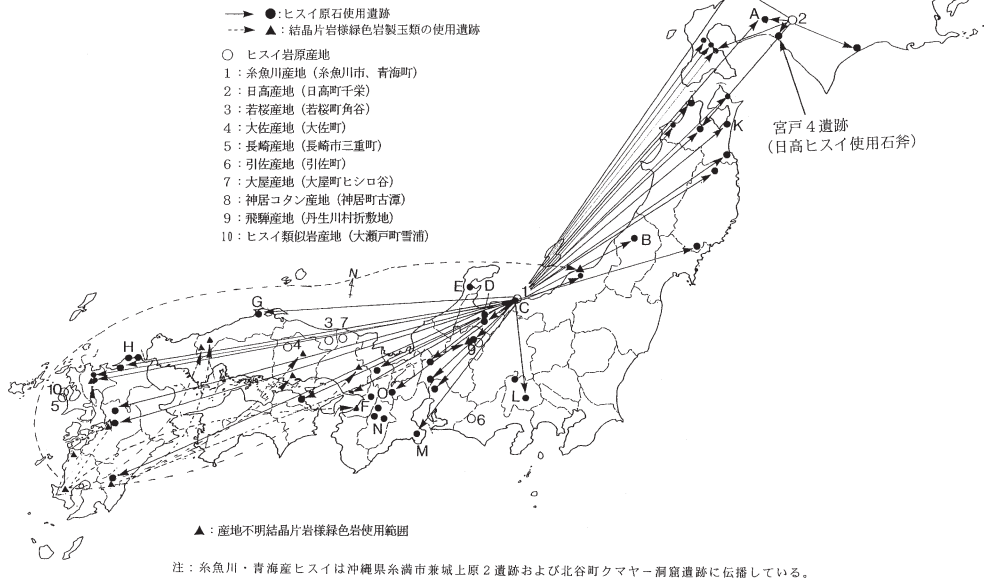


表1 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準 (1)

原産地名	分析 個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00~3.35	0.01~0.17	0.01~0.56	0.15~30	0.00~2.94	0.72~27.6
若桜産	12	3.12~3.29	0.01~0.91	0.03~0.59	3.45~47	0.00~0.25	4.33~43.4
大佐産	20	2.85~3.17	0.01~0.07	0.00~1.01	3.18~61	0.00~12.4	3.47~28.8
長崎産	3	3.16~3.23	0.01~0.14	0.17~0.33	0.02~0.06	4.30~16.0	
日高産	22	2.98~3.29	0.00~0.01	0.00~0.02	0.00~0.37	0.00~0.063	5.92~51.6
引佐産	8	3.15~3.36	0.04~0.04	0.00~0.03	0.03~0.33	0.00~0.018	36.3~65.9
大屋産	18	2.96~3.19	0.03~0.08	0.04~0.16	1.08~79	0.02~0.48	0.95~4.81
神居コタン産	9	2.95~3.19	0.02~0.49	0.09~0.17	0.04~0.22	0.12~0.85	2.22~17.3
飛騨産	40	2.85~3.15	0.01~0.04	0.00~0.00	0.02~0.10	0.00~1.24	12.7~28.8
ミャンマ産	26	3.15~3.36	0.02~0.14	0.01~0.26	0.09~2.5	0.01~23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND: 検出限界以下の濃度

表2 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準 (2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素 (各元素が確認できた個体数の百分率)							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	100%
長崎産	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	tr	ND	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND: 検出限界以下 tr: 検出確認

表3 宮戸4遺跡出土のヒスイ製石斧の元素分析値と比量の結果

遺物	分析 番号	元素分析値の比量										遺物	分析 番号	元素分析値の比量						試料 比重	試料 重量				
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe			Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr	Rb/Sr			Y/Sr			
石斧	92487	0.036	2.117	0.02	0.02	17.754	0.01	0.001	0.005	0.042	0.029	石斧	92487	0.033	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.900	6.52064
JG-1		0.030	0.169	0.09	1.32	2.307	0.18	0.002	0.011	0.000	0.401	JG-1 ^{a)}		0.798	0.05	6.02	0.00	0.00	0.77	0.15					

a): 標準試料. Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the JGS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192.

表4 宮戸4遺跡出土のヒスイ製石斧の原産地分析結果

遺物	分析 番号	各分類基準による判定						総合判定
		図2判定	図3判定	図4判定	比重&基準(2)	Ni/Fe判定 ^{a)}		
石斧	92487	HK, HD	HK, HD	HK, HD	HK, OS, OY, KM, HD	HK	日高系	

IT: 糸魚川 WK: 若桜 OS: 大佐 NG: 長崎 HK: 日高 IN: 引佐 OY: 大屋

KM: 神居コタン HD: 飛騨

a): Ni/Fe比は日高産地および飛騨産地に同時に帰属された遺物の分類指標

(飛騨産原石、42個の平均値±標準偏差) Ni/Fe=0.091±0.030

(日高産原石、14個の平均値±標準偏差) Ni/Fe=0.065±0.028

石斧: 出土位置: 包含層N70、層位: VI層 (縄文時代早期)

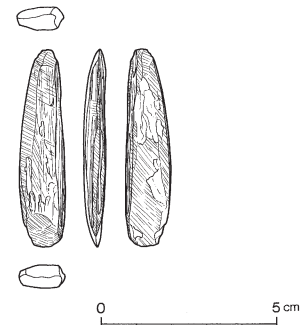


図6 分析試料

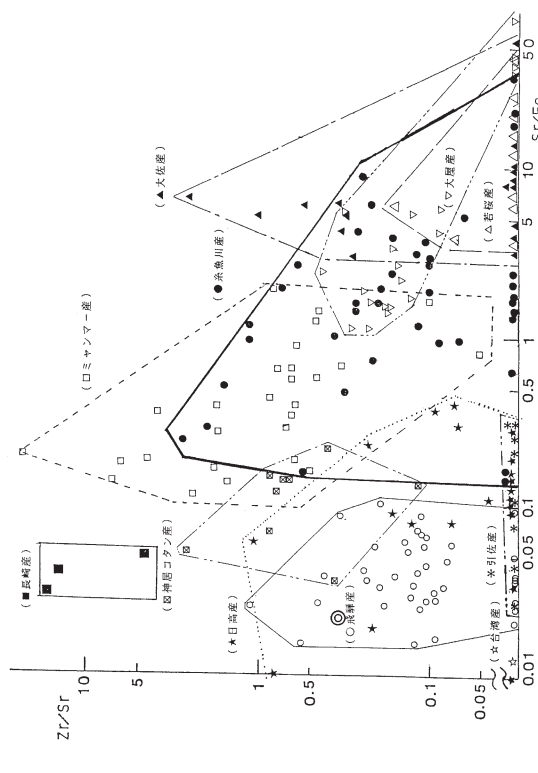


図2 ヒスイ原石と石片の元素比値Zr/Sr/Sr/Feの分布
◎:岩手4選跡出土石片(92487)

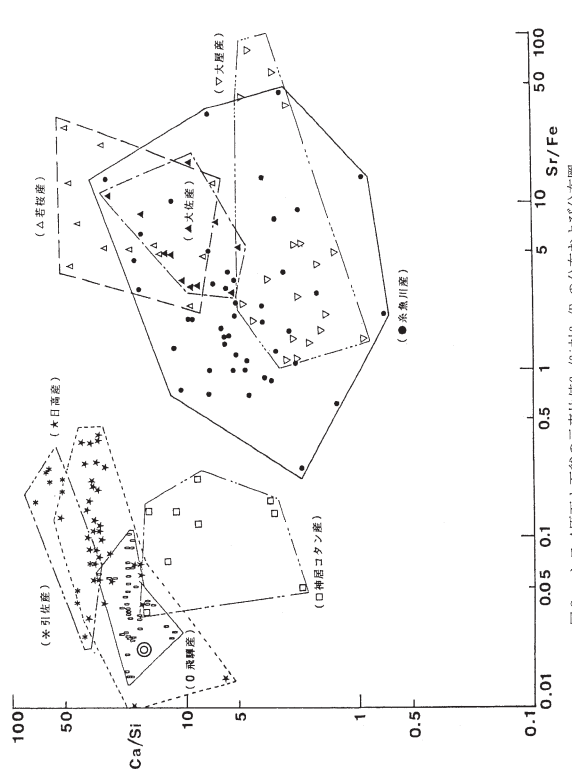


図3 ヒスイ原石と石片の元素比値Ca/Si/Sr/Feの分布および分布
◎:岩手4選跡出土石片(92487)

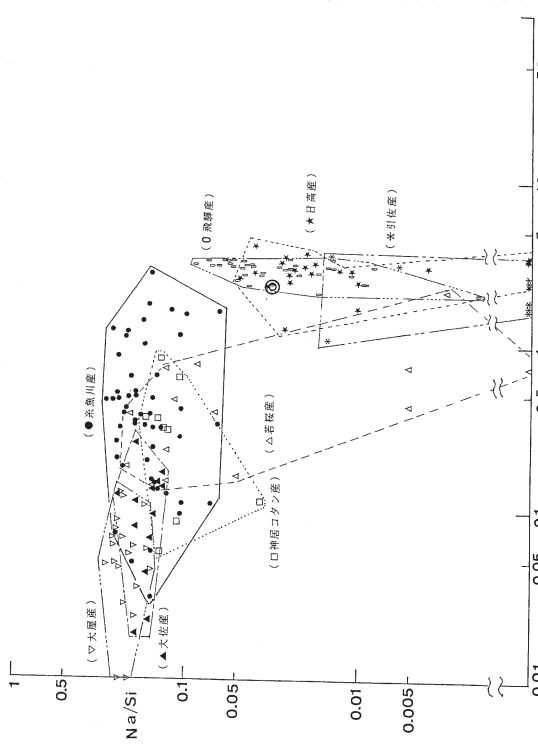
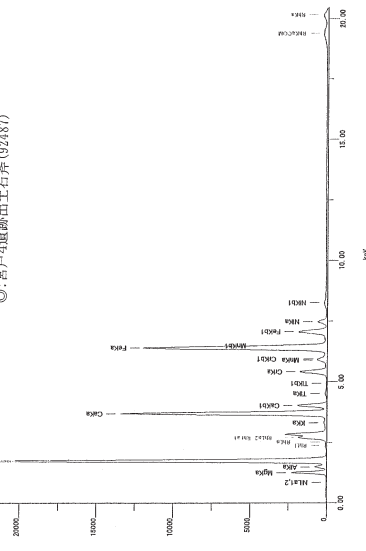


図4 ヒスイ原石と石片の元素比値Na/Si/Mg/Siの分布および分布
◎:岩手4選跡出土石片(92487)



測定日時: 2003年12月 2日11時 7分33秒
電圧: 30.0kV 電流: 0.117mA 分析機: 日立 2000sec 真空: Vac

Num	元素 / 化学式	WT (%)	at (mol%)	測定値	標準値
1	12 MgO	21.3610	29.9756	0.156696	0.4144
2	13 Al2O3	2.8002	51.5536	0.005186	0.1565
3	14 SiO2	52.1111	27.8771	0.004916	0.0049
4	19 K2O	0.0813	0.0383	0.000845	0.0489
5	20 CaO	12.8886	13.0009	0.1591633	199406
6	21 TiO2	0.0949	0.0450	0.000467	0.0429
7	24 Cr2O3	0.0049	0.0024	0.0002186	0.0210
8	25 MnO	0.1606	0.1280	0.0021886	6371
9	26 Fe2O3	5.4150	1.9182	0.0693421	215604
10	28 NiO	0.1937	0.1467	0.002133	10500
				積分値	
				23816	
				6790	
				27920	
				730	
				0.000845	
				199406	
				0.0429	
				6371	
				215604	
				10500	

図5 原産地分析測定試料蛍光X線分析結果

2 宮戸4遺跡放射性炭素年代測定

(株) 地球科学研究所

報告内容の説明

未補正14C年代 (y BP) : (同位体分別未補正) 14C年代 “measured radiocarbon age”
試料の 14C/12C 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前 (BP) かを計算した年代。

14C年代 (y BP) : (同位体分別補正) 14C年代 “conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比 (13C/12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C/12C の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。
試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に基準化することによって得られる年代値である。
(Stuiver, M. and Polach, H.A. (1977) Discussion: Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19 を参照のこと)
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

$\delta^{13}\text{C}$ (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(13\text{C}/12\text{C})[\text{試料}] - (13\text{C}/12\text{C})[\text{標準}]}{(13\text{C}/12\text{C})[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372 である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中 14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース (“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)) により約 19000yBP までの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP 以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit” compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results.”

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析
Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

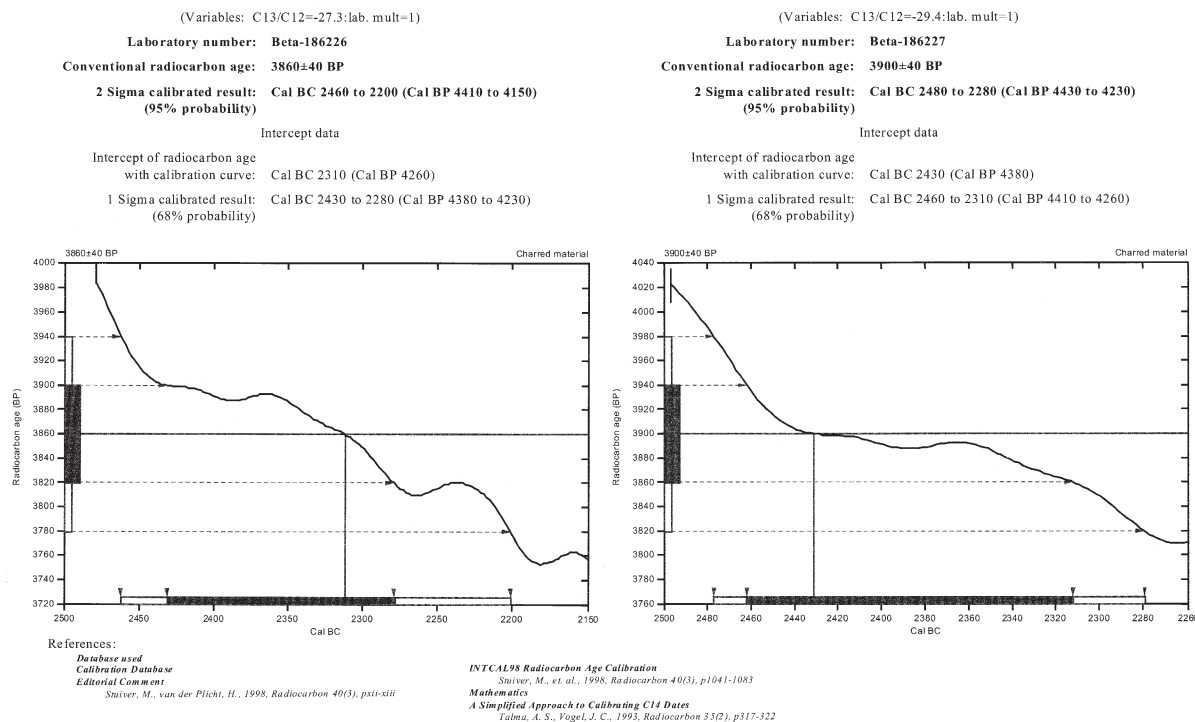
分析機関 BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

試料データ	未補正 ¹⁴ C年代(y BP) (measured radiocarbon age)	δ 13C(permil)	14C年代(y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta- 186225	29760 ± 400	-25.3	29760 ± 400
試料名 (23912) MIYA4-2			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 186226	3900 ± 40	-27.3	3860 ± 40
試料名 (23913) MIYA4-3			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			
Beta- 186227	3970 ± 40	-29.4	3900 ± 40
試料名 (23914) MIYA4-4			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material acid/alkali/acid			

表 1 ¹⁴C年代測定結果

試料番号	試料種類	測定法	採取地点	採取層位	重量(乾:g)	推定時期(yBP)
MIYA4-2	炭化材	AMS	TP-32壁面	Spfl直下	0.15	40,000
MIYA4-3			TP-35	覆土4	0.04	4,000
MIYA4-4			TP-32	覆土下位	0.08	4,000

表 2 ¹⁴C年代測定試料一覧



¹⁴C年代の暦年代較正

3 宮戸4・米原4遺跡の種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

米原4遺跡、宮戸4遺跡は、共に北海道鶴川町を流れるイモッペ川の右岸に面した、傾斜地に立地している。これらの遺跡からは、縄文時代中前期～後期を中心とした遺構・遺物が検出されている。宮戸4遺跡ではH-2土器囲い炉、米原4遺跡では点在する焼土について、浮遊選別を実施し、炭化物が多数回収されている。今回はこれら炭化物の種実同定を行い、当時の植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

試料は、宮戸4遺跡6点、米原4遺跡16点の計22点である。それぞれの袋には粒径別に3袋(2.0mm、1.0mm、0.425mm)入っているため、66袋存在する。それぞれの袋には炭化物が入っているが、一部現生と思われる植物根が入っている試料もある。試料の詳細は結果と併せて記す。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種実を同定・抽出する。

3. 結果

宮戸4遺跡の結果を表1に、米原4遺跡の結果を表2に示す。分析の結果、種実は検出されなかった。炭化物のほとんどは炭化材であり、0.425mmの画分の中に、土壌菌核(sclerotia)が若干みられる程度である。

4. 考察

今回の結果からは、種実遺体が検出されなかった。当社がこれまで行った北海道内各遺跡の炭化種実同定結果

表2 米原4遺跡の種実同定結果

試料名	出土地点	時代	篩径	同定結果
米原4-1	F-14	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			2.0	
			1.4	
米原4-2	F-15	縄文時代後期初頭	0.425	菌核(+)
			2.0	
			1.4	
米原4-3	F-16	縄文時代後期初頭	0.425	菌核(+)
			2.0	
			1.4	
米原4-4	F-18	縄文時代後期初頭	0.425	菌核(+)
			2.0	
			1.4	
米原4-5	F-18	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-6	F-18	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-7	F-19	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-8	F-19	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-9	F-19	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-10	F-19	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-11	F-20	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-12	F-20	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-13	F-22	縄文時代中期後半	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-14	F-22	縄文時代中期後半	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-15	F-23	縄文時代中期後半	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
米原4-16	F-23	縄文時代中期後半	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	

表1 宮戸4遺跡の種実同定結果

試料名	出土地点	時期	篩径	同定結果
宮戸4-1	H-2 土器片囲い炉	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
宮戸4-2	H-2 土器片囲い炉	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
宮戸4-3	H-2 土器片囲い炉	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
宮戸4-4	H-2 土器片囲い炉	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
宮戸4-5	H-2 土器片囲い炉	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	
宮戸4-6	H-2 土器片囲い炉	縄文時代後期初頭	2.0	菌核(+)
			1.4	
			0.425	

+: 破片等を含み正確な個数が不明なもの

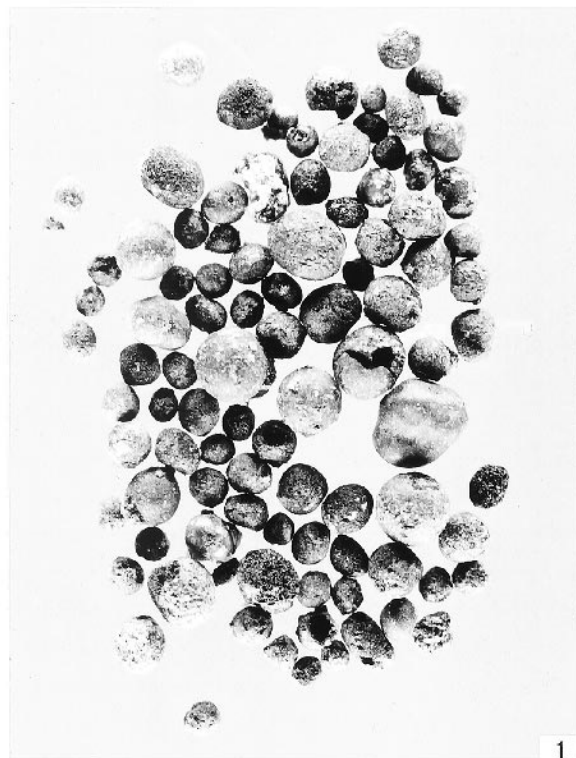
+: 破片等を含み正確な個数が不明なもの

をみると、縄文時代ではクルミの破片が得られることが多く、道南ではクリの炭化種実も得られている（未公表試料）。また、これまで縄文時代の遺跡からヒエ属やソバ属の種実が検出されたという報告がある（吉崎, 1992）。今回ほとんどの試料から検出された菌核は、土壌中に見られる外生菌根菌の休眠孢子である。加戸ほか（2000）によれば、土壌中の菌核は大きさが0.2-7mmとばらつきが大きく、土壌1gあたり10個程度含まれており、根系密度が濃いところほど多いとされる。また、内部は多孔質壁構造と中空構造からなり、多孔質構造には細菌様粒子の存在が確認されている（渡邊ほか, 2001）。このように、菌核は土壌に普通に含まれているものであるため、環境などの指標にはなりにくいと考えられる。今後の課題としては、焼土の灰像分析や、炭化材同定などを行って、燃料材からみた植物利用状況等を検討することがあげられる。

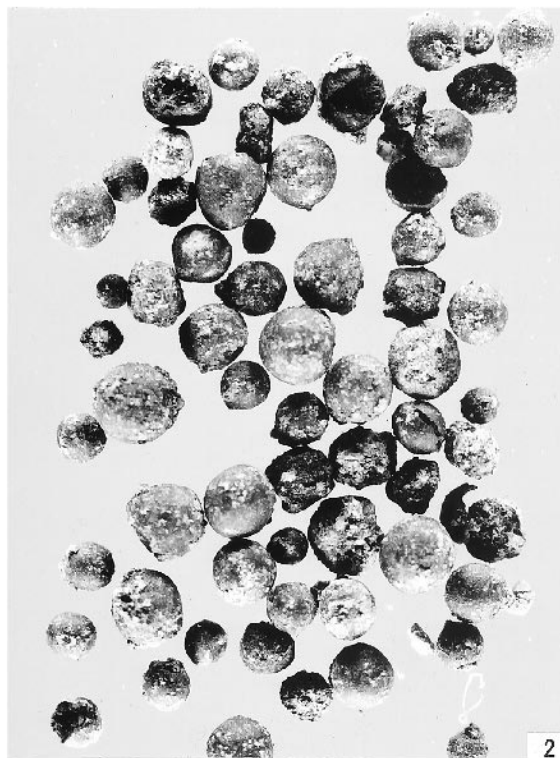
引用文献

- 吉崎 昌一, 1992, 古代雑穀の検出. 考古学ジャーナル, 355, 2-14.
 加戸 卓・渡邊 眞紀子・藤嶽 暢英・太田 寛行, 2000, 妙高燕土壌断面における菌核の分布と科学組成. 日本土壌肥料学会講演要旨集, 46, 35.
 渡邊 眞紀子・藤嶽 暢英・太田 寛行, 2001, 土壌から検出される菌核様粒子の形態と化学組成の比較. 日本土壌肥料学会講演要旨集, 47, 127.
 山田吾郎, 2003, 環境の変化を古代の植物から探る. 2003年度日本文化財科学会公開講演会要旨, 考古学の最前線—科学が語る北海道の古代—, 45 - 50.

図版1 炭化物



1. 菌核(宮戸4-6)



2. 菌核(米原4-12)

2mm

VIII まとめ

1 米原4遺跡

米原4遺跡は、平成12・14・15年度の三次にわたって、延べ4,376 m²が調査された。遺構は竪穴式住居跡5軒、土坑9基、Tピット9基、焼土45カ所、集石3カ所、遺物は土器21,322点、石器等38,891点が検出されている。ここでは、調査結果を遺跡の形成という観点からとりまとめておく。

縄文時代早期後半 沢部分で土坑(P-7)と焼土(F-24・32)が調査されている。調査区南側の浅い沢地形内にも土坑(P-8)と焼土(F-33)がある。土器では東釧路Ⅲ式、コッタロ式とみられるものが多く、他の東釧路式系(東釧路Ⅱ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式)はわずかである。

縄文時代前期前半 沢部分にあたるK・L-44区で、焼土が6カ所検出されている(F-25~31)。この部分から出土した土器はⅡ群a-1類(綱文式)が半数以上を占め、石器では三角形の石鏃、つまみ付きナイフ、断面三角形のすり石等が数多く出土している。この時期に炉の検出されない住居跡が多いことを考慮すると、F-25~31の焼土は屋外炉と推測される。石鏃未成品や多数のフレイク・チップも得られていることから、周囲では剥片石器の製作も行なわれたのであろう。焼土は、調査区南側の浅い沢地形内でも3カ所検出されている(F-34~36)。この他、被熱したとみられる礫片85点のまとまりもある(S-3)。

縄文時代前期後半 Ⅱ群b類土器は少なく、この時期とみられる遺構は検出されていない。

縄文時代中期中葉 Ⅲ群a類土器はわずかである。サイベ沢Ⅶ式や、大木8a式とみられる土器片が報告されている(どちらも北埋調報185に図示)。この時期とみられる遺構は検出されていない。

縄文時代中期後葉 遺跡の主体となる時期で、住居跡5軒(H-1~4・6)等が検出されている(H-2は風倒木痕により形態が判然としないため、以下の記述では除く)。各住居跡には規模の差が顕著に認められ、それぞれの床面積を計測すると、H-1が27.54 m²、H-6が11.03 m²、H-3が5.32 m²、H-4が3.44 m²である。大型のH-1は小型のH-4に比べ8倍近い広さがある。立地は沢を挟んで南北に分かれており、沢より南側の段丘縁にはH-1、H-3が、そこからさらに南へ40 mほど離れてH-6が位置する。沢より北側の段丘縁にはH-4がある。

遺物は、沢より南側にあるH-1、H-3、H-6の床面や覆土から、石器製作に関連する遺物が多く出土している。そのうち磨製石斧に関わるものは、緑色泥岩を石材とするものが大部分である。住居跡別の点数は、H-1で125点、H-3で124点、H-6で334点を数え、とりわけ磨製石斧を整形する際に生じる「打ち欠き片」が大半を占める。黒曜石のフレイク・チップには、剥片石器の素材や調整の際に生じたものがあり、H-1で513点、H-3で154点、H-6で1,067点が得られている。これらの遺物から、H-1、H-3、H-6は、磨製石斧や剥片石器の製作場所と推測される。一方、沢より北側にあるH-4では、石斧原材が1点、フレイク・チップが6点出土した程度で、他の住居跡のように石器製作が行われたとは考え難い。なお、磨製石斧に関連する遺物は包含層からも1,982点出土している。住居跡での出土状況や、前期前半の遺物が主体となる沢部分では少ないことからみて、これらの大半は中期後葉のものであろう(H-6の周辺ではV層下位にまで及ぶ削平のため点数が少ない)。

住居跡の時期を土器型式でみると、H-4、H-6は、床面とみなされる位置で出土した土器から柏木川式期であろう。H-1、H-3では、詳しい時期の決め手となるような土器の出土状況はなかったものの、H-6のように石器製作に関わる遺物が多く得られていることから、柏木川式期、もしくは北筒式期

のいずれかである。

H-4、H-6は、ともに柏木川式期と推定されるが、前述したように、石器製作に関わる遺物点数に大きな開きがある。その差を集落における役割の違いと捉えることもできるが、その前提となる同時性は、柏木川式土器が型式内で細分されていないこともあって、確定できない。またH-4のように小型の住居跡は、同じく柏木川式期とみられる恵庭市中島松1遺跡（松谷1992）、苫小牧市美沢11遺跡（北埋調報44）、同市静川21遺跡（佐藤他1992）等でも数多く検出されている。この時期にそうしたものが多いことも合わせて、今後の検討課題として挙げておきたい。

この時期の他の遺構には、土坑（P-1～6）、焼土（F-1～13・22・23・38・46～48）、集石（S-1・2）がある。集石のうち、S-1は石組み炉の可能性のあるもの、S-2は被熱したとみられる礫・礫片851点がまとまっていたものである。土器は柏木川式、北筒式ともに多く、合わせて土器全体の半数を占めている。

縄文時代後期初頭 Tピット（TP-1～9）が9基検出されている。形態の類似を根拠として中期後半から後期初頭の時期とみられるが、本遺跡では中期後半に集落が営まれていることや、本書の「V 宮戸4遺跡」で報告されているTP-32で3,900±40（B.P.）、TP-35で3,860±40（B.P.）という放射性炭素年代測定値（AMS法）が得られているため、後期初頭と考える方が妥当であろう。IV群a類土器は少ないが、タブコブ式期とみられる焼土のまとまりが検出されている（F-15～19・42～44）。焼土に伴う炭化材の放射性炭素年代測定値（AMS法）は、3,520±40（B.P.）である（北埋調報185）。

縄文時代後期中葉 IV群b類土器はごくわずかで、手稲式の破片が報告されている（北埋調報153に図示）。この時期とみられる遺構は検出されていない。

縄文時代晩期中葉・後葉 V群土器はわずかであるが、中葉から後葉の時期とみられるものが2個体復原されている（北埋調報185に図示）。この時期とみられる遺構は検出されていない。

米原4遺跡は、町道の整備等により包含層の失われていた部分も多かったが、上述したような成果も得られている。遺構数・遺物点数には時期的な偏りが認められ、その中で主体となる時期は縄文時代中期後葉である。住居跡や包含層から多数出土した磨製石斧の製作に関連する遺物は、他の遺跡と比べた場合、本遺跡の内容を特徴づけるものである。また、礫・礫片が石器等の半数以上を占め、被熱したとみられるものも多い。S-2・3のように、それらが集積された状況も確認されており、本遺跡の特徴の一つであることを付け加えておく。（山中）

表Ⅷ-1 米原4遺跡出土土器等点数一覧

	I b	II a	II b	III a	III b	IV a	IV b	V c	土製品	粘成粘土塊	不明	合計
12年度	2,700	1,990	545	88	7,504	76	4		5	2	1	12,915
14年度	254	725	1	3	1,269	300		85	1		431	3,069
15年度	810	1,567	5		2,641	178			1	2	141	5,345
合計	3,764	4,282	551	91	11,414	554	4	85	7	4	573	21,329

表Ⅷ-2 米原4遺跡出土石器等点数一覧

	石鏃	石槍・ナイフ	石錐	つまみ付きナイフ	スクレイパー	ビエス・エスキュー	R・Uフレイク	石核	原石	フレイク	石斧	たたき石	すり石	北海道式石冠	扁平打製石器	砥石	台石	石皿	加工痕のみられる礫	礫・礫片	合計
12年度	315	448	38	44	130	14	782	71		7,962	2,348	182	167	10	2	123	71			10,784	23,491
14年度	59	26	5	10	21		95	1		678	100	1	10			17			14	3,368	4,405
15年度	226	49	27	34	57	5	234	6	2	2,760	196	29	57			74	4	2	18	7,204	10,984
合計	600	523	70	88	208	19	1,111	78	2	11,400	2,644	212	234	10	2	214	75	2	32	21,356	38,880

2 米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡のTピット群

平成12年度から始まった米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡の調査で計98基のTピットを検出した。

米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡という別々の遺跡名が付いてはいるが、遺構の立地や分布、遺物の組成などから同一面に展開されている一つの遺跡として捉えることができる。すなわちイモッペ川流域の丘陵部付近に構築されたTピット群である。

Tピットの立地については、調査範囲のほぼ全体で検出されている。北側に行くほど濃い分布が見られるが、標高約20m付近の尾根上のほぼ平坦な所から緩やかに傾斜する斜面上、さらに低地部に至る丘陵の末端まで構築されている。特に宮戸3遺跡と宮戸4遺跡の樹林部分から多く検出され、沢地形を意識した配置が読み取れる。

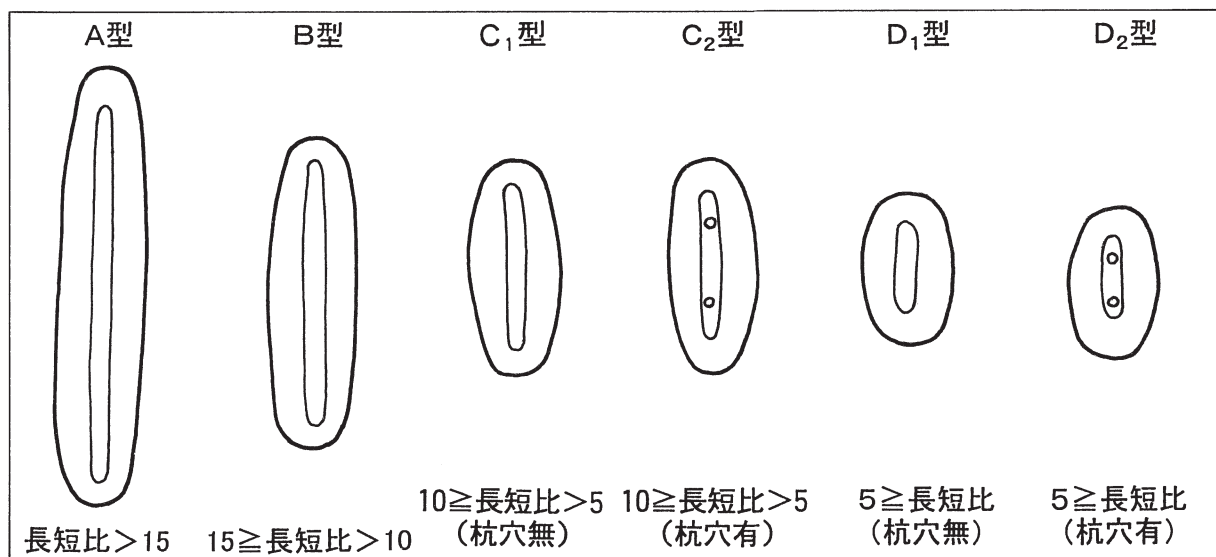
形態分類に際しては、いわゆる「苦東分類基準」(大泉1987)を参考にし、図VIII-1で示したTピットの形態分類模式図(芝田 北埋調報168)を基に加筆し、検討した。

Tピットは崩落によって上部の形態が壊れているものが多いことから、坑底部の長短比を基に分類した。長短比15より大きいものをA型とし、以下5単位毎にB型、C型、D型とした。さらに坑底面に杭跡の認められるものをそれぞれC₂型、D₂型に分類した。(図VIII-1 Tピットの形態分類模式図)。ただし、長短比によっては形態の異なるものが同じ分類に属する結果になる事も考えられる。長短比による分類については一律に判断できるものではないが、おおまかな形態差を見極める手段として採用した。(別表VI-19 米原4遺跡Tピット属性表・別表VI-20 宮戸4遺跡Tピット属性表・第VIII章第2節表VIII-3 宮戸3遺跡Tピット属性表参照。)

A型は細長く、溝状に近い形を呈したもので、これに対しD型は小型でやや丸みを帯びた楕円形である。

両者の中間に属するものをB型とC型に位置づけた。

検出した98基のうち、A型に属するものは15基。B型に属するもの33基。C₁型に属するもの28基。C₂型は1基。D₁型は16基。D₂型に属するものは3基。不明2基となっている。



図VIII-1 Tピットの形態分類模式図

A型に分類したものは米原4遺跡で1基あるほかはすべて宮戸4遺跡樹林部分から宮戸3遺跡にかけての沢地形沿いに構築されている。

B型に分類されるものは調査区のほぼ全域に見られるが樹林部分南端の尾根上にはない。長短比からみるB型とC型、C型とD型の分類上の差は僅かなものも含まれ、米原4遺跡A地区に見られるTP-1・2・3の関係や、S地点のTP-1～4などは本来同類のものとして判断できると考えられる。

C1型は宮戸4遺跡の樹林部分南端の尾根上から低地部を抜け、宮戸3遺跡まで沢筋を囲むように構築されている。C2型(TP-53)は樹林部分の尾根上標高約25m付近から検出した。

D1型とD2型は主に宮戸4遺跡の斜面部分と樹林部分の境にある尾根を巻き込むように配置されている。D1型とD2型の検出状況は他の分類のものとは明らかに配置が異なり、斜面部分と樹林部分の境界にある尾根の周辺にはほぼ限られている。

検出された98基のうち、重複関係の認められたものは宮戸3遺跡のわずか2例だけである。

TP-12(C1類)がTP-15(D1類)より古く、TP-17(B類)がTP-24(C1類)より古い。しかし、重複関係が2例だけでは明らかな形態による時期差などを推定するには至らない。

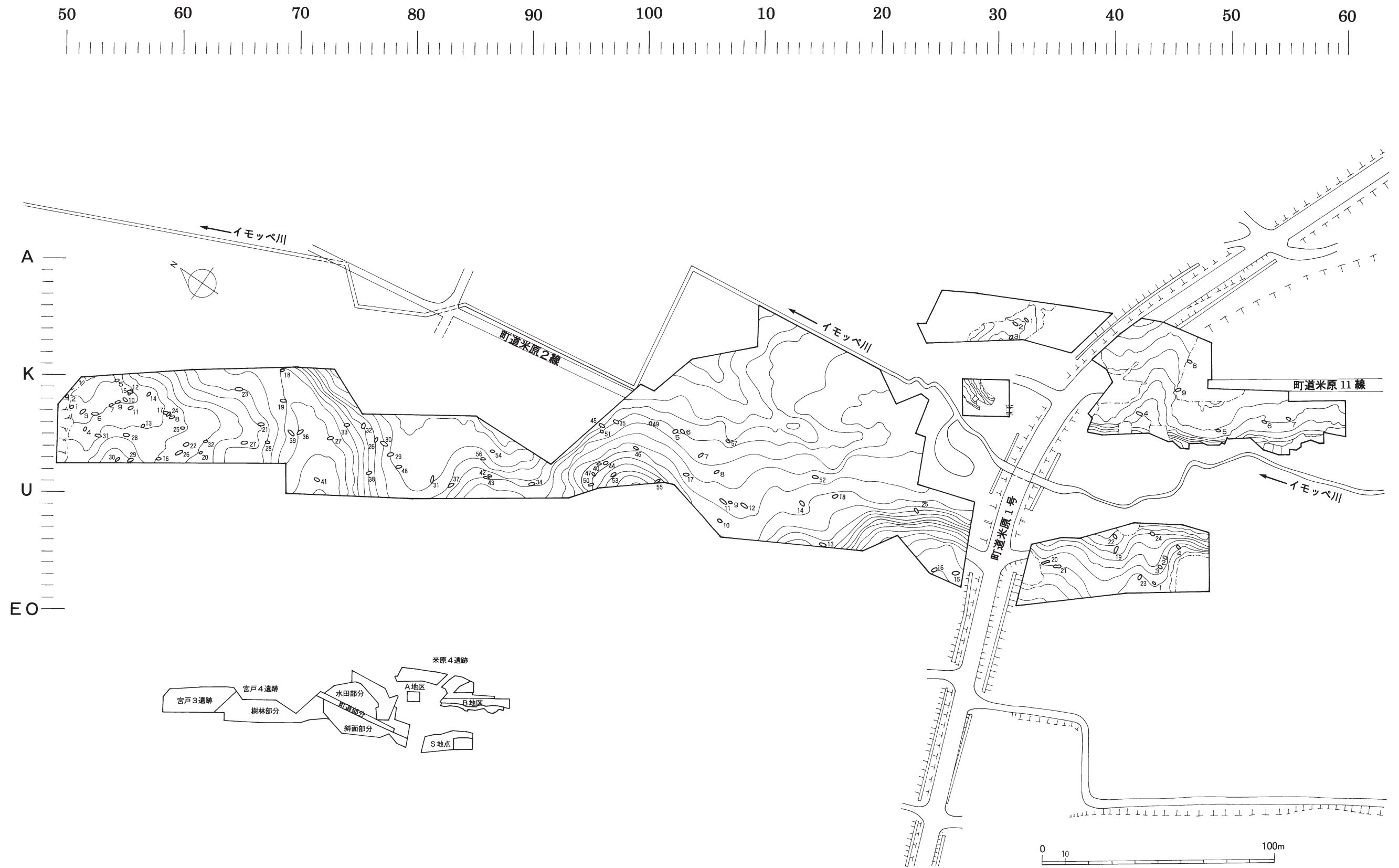
今回D型に分類したやや坑底面の広い小判型を呈するタイプのものがある区域に集中して見られた事は特色として挙げられる。ただしこれがTピットの目的の違いや時代の違いというような結論に結びつくかどうかは慎重を要する問題である。

構築年代については今年度調査を行ったTP-32(C1類)とTP-35(D1類)の底部から採取した炭化物を用いて放射性炭素年代測定(AMS法)を行なった。その結果TP-32は3900±40(yBP)、

TP-35は3860±40(yBP)という値を示した(Ⅶ章第2節参照)。この結果から見た遺跡の全体像についてはⅧ章第4節を参照されたい。(笠原)

表Ⅷ-3 平成12年度宮戸3遺跡Tピット属性表

遺構名	平面形状 確認面	上端規模		下端規模		深さ	長軸方向	分類	備考
		長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)				
TP-1	楕円形	1.56	0.59	1.71	0.28	1.12	N-52°-W	C1	
TP-2	楕円形	1.09	0.22	1.32	0.21	0.58	N-46°-W	C1	
TP-3	長楕円形	3.42	1.23	3.42	0.24	1.32	N-72°-W	B	
TP-4	楕円形	2.39	0.99	1.79	0.26	1.08	N-73°-W	C1	
TP-5	楕円形	1.80	1.17	1.54	0.44	1.28	N-66°-W	D1	
TP-6	長楕円形	3.12	1.38	2.74	0.21	1.51	N-14°-W	B	
TP-7	楕円形	2.88	1.37	2.56	0.32	1.22	N-48°-W	C1	
TP-8	長楕円形	3.05	1.23	2.95	0.26	1.28	N-38°-W	B	
TP-9	長楕円形	2.53	0.73	2.14	0.18	1.12	N-63°-W	B	
TP-10	楕円形	1.82	0.86	1.44	0.18	0.94	N-6°-W	C1	
TP-11	長楕円形	2.88	1.09	2.28	0.21	1.27	N-55°-W	B	
TP-12	楕円形	2.78	0.95	2.54	0.26	1.31	N-0°-W	C1	
TP-13	楕円形	1.66	1.08	1.10	0.22	1.12	N-78°-W	D2	
TP-14	楕円形	1.87	1.04	1.61	0.28	1.10	N-90°-W	C1	
TP-15	楕円形	2.48	1.30	1.32	0.46	1.22	N-79°-W	D1	
TP-16	長楕円形	2.50	1.45	2.42	0.17	1.51	N-38°-W	B	
TP-17	長楕円形	3.02	1.33	3.23	0.23	1.30	N-43°-W	B	
TP-18	楕円形	2.98	1.09	1.62	0.17	1.60	N-46°-W	C1	
TP-19	楕円形	3.14	1.05	2.90	0.42	1.16	N-34°-W	C1	
TP-20	楕円形	1.79	0.97	1.53	0.36	1.07	N-62°-W	D1	
TP-21	溝状	3.24	0.68	3.30	0.20	1.36	N-17°-W	A	
TP-22	長楕円形	2.48	0.67	2.46	0.19	1.00	N-58°-W	B	
TP-23	長楕円形	2.63	1.01	2.95	0.22	1.08	N-34°-W	B	
TP-24	楕円形	1.73	1.02	1.60	0.26	1.20	N-90°-W	C1	
TP-25	楕円形	1.41	0.84	1.44	0.30	1.18	N-60°-W	D1	
TP-26	楕円形	3.24	1.07	3.00	0.30	1.33	N-45°-W	C1	
TP-27	溝状	3.36	0.98	2.98	0.13	1.18	N-46°-W	A	
TP-28	楕円形	2.80	1.24	1.79	0.36	1.41	N-17°-W	D1	
TP-29	楕円形	2.60	0.99	1.88	0.25	1.54	N-70°-W	C1	
TP-30	楕円形	1.75	0.74	1.46	0.20	0.85	N-82°-W	C1	
TP-31	長楕円形	2.96	0.65	3.00	0.21	1.09	N-45°-W	B	
TP-32	楕円形	1.48	0.68	1.53	0.33	0.94	N-63°-W	D1	



図Ⅷ-2 米原4遺跡・宮戸3遺跡・宮戸4遺跡Tピット分布図

3 石器から見た宮戸4遺跡

(1) 組成について

宮戸4遺跡では平成13年度調査の斜面部分及び水田部分包含層から13,403点、平成13年度調査の遺構から3,634点、平成14年度調査のS地点及び水田部分包含層から15,569点、平成14年度調査の遺構から10,898点、平成15年度調査の樹林部分包含層から3,441点、平成15年度調査の町道部分包含層から4,387点、平成15年度調査の表採で259点、平成15年度調査の遺構から170点、総計51,761点の石器類が出土している。また調査区が接する平成12年度調査の宮戸3遺跡の石器類は17,086点である。以上、4カ年にわたるイモツペ川南西の丘陵縁辺の調査範囲から計68,847点の石器類が出土したことになる。

これら石器類の時期は、縄文時代早期、前期、中期、後期の可能性があるが、土器の出土量から見て大半は早期後半に帰属するものと推測される。特に今年度の調査区は、V層中部までを重機で除去しての調査となったため、早期後半の石器の組成を反映しているものと考えられる。その根拠の一つに過年度の調査区においては、数点ながら北海道式石冠や扁平打製石器が出土しているものの、今年度の調査区においては全く出土していないことが挙げられる。

さて、石器の記載と重複するが、今年度の調査区で得られたフレイク・礫以外の石器の比率についてみると、点数では、石鏃34.5%、Rフレイク14.4%、スクレイパー10.1%、ピエス・エスキーユ10.1%、つまみ付きナイフ5.7%、石錐4.3%で79%を占め、石斧類は3.6%、礫石器はすり石、たたき石、凹石、砥石合わせて7.3%と非常に少ない。ただ重量では、すり石27.8%、たたき石26.4%、砥石14.2%、石斧類9.8%、凹石6.0%と礫石器、磨製石器で約84%となる。それでも、これらの総重量で約12kgに過ぎず、礫石器の重量としては少ないといえる。

次に比較として縄文時代早期後半のいくつかの遺跡における石器の点数比を見る。

- ① 深川市納内6丁目付近遺跡：中茶路式期の集落。住居跡27軒、土坑、焼土、遺物集中からなる。石器は台石56.1%、たたき石9.3%、R・Uフレイク9.7%、石鏃8.9%、スクレイパー3.7%、すり石3.4%、石斧2.3%の比率で遺構・包含層から出土している。台石は同一母岩の467点が集計されたため、点数比で大きな率を占めている。この同一母岩を計算に入れなければ石鏃に次ぐ点数となる。
- ② 千歳市キウス7遺跡：コッタロ式期の集落。住居跡9軒、土坑6基、焼土からなる。石器は、石斧類17%、砥石17%、石鏃10%、R・Uフレイク9%、たたき石9%、すり石7%、台石・石皿5%の比率で包含層から出土している。ただ、石鏃の38%が有茎鏃で、後期の土器が22%包含層に含まれることから、コッタロ式期の単純な組成ではない。
- ③ 苫小牧市静川8遺跡：東釧路Ⅲ・コッタロ・中茶路式期の集落。住居跡37軒、土坑、焼土からなる。石器は、石鏃14%、たたき石14%、すり石13%、砥石11%、削器11%、つまみ付きナイフ10%、石錐9%、石斧5%、石槍4%、石皿・台石2%の比率で遺構から出土している。
- ④ 苫小牧市ニナルカ遺跡：東釧路Ⅲ～コッタロ式期の土坑、焼土、貝塚からなる包蔵地。石器はたたき石23%、石錘18%、石鏃15%、石斧12%、スクレイパー10%、つまみ付きナイフ4%、北海道式石冠3%、すり石3%の比率で包含層から出土している。北海道式石冠、石錘、石皿は土器の分布も含め、前期の所産とされる。
- ⑤ 千歳市美々7遺跡：東釧路Ⅳ式期の集落。住居跡6軒、土坑22基、焼土4か所からなる。石器は石鏃22%、Rフレイク20%、つまみ付きナイフ15%、砥石4.9%、すり石4.5%の比率で包含層から出土している。

- ⑥ 千歳市美沢3遺跡：東釧路IV式期の集落。住居跡13軒、土坑26基、焼土33か所からなる。石器は石鏃28%、Rフレイク24%、スクレイパー8.3%、石斧類8.4%、つまみ付きナイフ9.6%、砥石5.8%、石皿・台石3.9%、すり石2.9%、たたき石2.5%の比率で包含層から出土している。
- ⑦ 苫小牧市美沢3遺跡：中茶路式期の土坑群の後背地。石器は石鏃39.1%、石斧12.0%、Rフレイク11.4%、スクレイパー10.3%、つまみ付きナイフ9.8%、石皿・台石4.6%の比率で包含層から出土している。
- ⑧ 苫小牧市柏原27遺跡：東釧路IV式期の包蔵地。石器は石鏃34.2%、つまみ付きナイフ20.7%、スクレイパー18.9%、石斧9.9%、すり石・砥石4.5%、石錘3.6%、たたき石2.7%の比率で包含層から出土している。
- ⑨ 苫小牧市静川5遺跡：中茶路式期の土坑墓、土坑、焼土からなる墓域か。石鏃23.9%、スクレイパー17.4%、つまみ付きナイフ11.5%、すり石11.0%、たたき石10.2%、石皿・台石9.4%、砥石7.8%、石斧6.4%の比率で包含層から出土している。

以上からすると、集落では礫石器の比率が、石鏃やスクレイパー、つまみ付きナイフ、Rフレイクなどほぼ同率であるが、集落から外れると石鏃の点数比が約3割になり、礫石器の比率が急激に下がる様子が分かる。したがって、今年度の調査区の石器組成は、集落から離れた狩猟・採集といった活動によって形成された遺跡と位置付けることができる。石器の点数比からは、狩猟活動に伴う石器製作、捕獲した獲物の解体や獣皮の処理、骨角の加工がなされ、その活動のための石器を製作し、遺棄したものと考えられる。また、石核やフレイクの大きさを検討すると、それらは小さく、総重量も軽いことから、集落で剥片剥離を行い、ある程度製品化した石器を持ち込み、遺棄した結果が今年度の調査区の出土状況となったものとみられる。なお、石斧については一部原石を持ち込み、製作を行っている。

(2) 「蛇紋岩」製磨製石斧の石材について

石材は、礫以外についてみたが、点数では黒曜石が4625点と多く、緑色泥岩67点、頁岩60点、砂岩56点、玉髓6点、「蛇紋岩」5点、珪岩3点、チャート4点、安山岩・凝灰岩・粘板岩・片麻岩各2点、泥岩・礫岩各1点と続く。一方、フレイク・礫以外の重量では砂岩が9.95kgと圧倒的で、黒曜石の1.35kg、緑色泥岩の1.34kgが次ぐ。

黒曜石については、フレイク、Rフレイク以外の375点、1,169gを対象に石質を見た。結果、①縞の入るもの、②モヤの入るもの、③梨肌のもの、④花十勝、⑤球顆の入るもの、⑥その他に分けることができた。その点数と重量は、①152点、393g、②136点、335g、③3点、5g、④27点、104g、⑤53点、323gで、重量からすると①・②・⑤についてはほぼ同量とみられる。これらの原産地については、過年度の分析例からすると①～④は白滝・十勝産、⑤は赤井川産と考えられる。ただ、⑤には1点光沢の強いものが含まれる。そうすると85%が白滝・十勝から、14%が赤井川からもたらされたものと想定される。

「蛇紋岩」については、写真だけ掲載の2点(図版43下列)の石斧片についてEDS(エネルギー分散型X線マイクロアナライザ)で元素の定性分析を行った。結果、2点とも珪素のほかに、カルシウムとマグネシウムを主とし、アルミニウムや鉄を微量含む透輝石の特徴が現れた。これに関連して、平成13年度樹林部分の試掘調査(N70グリッド)で出土した「ヒスイ」製磨製石斧の石材の同定も行った。肉眼では片状構造を持ち、白色地に緑色の部分が見られ、クロム鉄鉱とみられる鉱物が含まる「日高ヒスイ」の可能性が考えられた。「日高ヒスイ」と各地のヒスイ輝石との比較は藁科氏に行っていたが、その結果は「日高ヒスイ」に成分では近いものの、比重はやや軽いもので、「日高ヒスイ」に伴って生成された変成岩の可能性が高いという結果を得ている(VII章第3節参照)。

「日高ヒスイ」と呼ばれるのものは、クロムを1%含む透輝石で、蛇紋岩とロディン岩との境界に沿って生成されている。その確認は、1966年日高町千栄（ちさか）を流れる、沙流川支流千露呂（ちろろ）川のさらに支流、ペンケユクトラシナイ川でなされたもので、ほかにも、クロム透輝石は、旭川市神居古潭においてもみられるという。「日高ヒスイ」とは異なる軟玉（ネフライト）は、北海道内では穂別町鶴川上流や三石町に、ヒスイ輝石（ジェダイト）は北海道では旭川市神居古潭に産する。

これまで藁科氏の分析によって「日高ヒスイ」製とされた遺物は、余市町大川遺跡で晩期前葉の勾玉1点、千歳市美々4遺跡で後期中葉の垂飾2点、青森市三内丸山遺跡で中期の北盛土出土の垂飾1点、青森市朝日山遺跡で晩期の勾玉2点、浦幌町平和遺跡で早期の石斧形垂飾1点が確認されているに過ぎない。なかでも浦幌町平和遺跡で出土した石斧形の装飾品は、早期前半の住居跡から出土したもので、ほかに流紋岩製とされる基部が穿孔された磨製石斧が5点出土している。基部が穿孔された磨製石斧（有孔石斧）は、北海道の縄文時代早期の各時期において見られるが、類例としては苫小牧市静川8遺跡、静川14-B遺跡、静川22遺跡、恵庭市ユカンボシE5遺跡、長万部町富野3遺跡、オバルベツ2遺跡、函館市中野B遺跡、中野A遺跡、梁川町遺跡、松前町白坂遺跡第8地点、伊達市牛舎川右岸遺跡、赤井川村日の出10遺跡、芦別市滝里4遺跡、女満別町豊里（石刃）遺跡、網走市嘉多山4遺跡、湧別町湧別市川II遺跡、中富良野町本幸I遺跡、浦幌町共栄B遺跡、羅臼町トビニウス川南岸遺跡、清水町東松沢遺跡、豊頃町高木1遺跡、釧路市桜ヶ岡2遺跡などで知られる。

このほかに縄文時代早期においては分析された以外にも肉眼観察で白色地に緑色の部分が見られ、片状構造を持つ石材を用いた磨製石斧が複数みられる。管見では、今年度報告される森町倉知川右岸遺跡や恵庭市柏木川13遺跡、既報告の中野A遺跡などで確認できる。倉知川右岸遺跡出土品については藁科氏に分析を依頼し、宮戸4遺跡出土品と同様の結果が出ている。一方、柏木川13遺跡出土品については、アースサイエンス社加藤孝幸氏の肉眼鑑定によりクロム透輝石を含むロディン岩と鑑定された。また、滝里4遺跡出土早期中葉「蛇紋岩」製石斧について、80点を藁科氏に分析を依頼した資料もマグネシウム、カルシウム、鉄を主とする石材で、成分組成は透緑閃石に近いものと思われる。

これまで挙げてきた磨製石斧の石材はこれまで道内の遺跡報告書の多くにおいて「蛇紋岩」とされてきたものである。しかし、従来「蛇紋岩」とされた石材は、岩石学的には蛇紋岩ではなく、透輝石、ロディン岩、角閃石、透閃石、透緑閃石などで結晶片岩の範疇に入るものである。以上のことからすると、縄文時代早期において「蛇紋岩」とされる変成岩類を用いた磨製石斧や装飾品が生産されるが、その一部にはクロム透輝石（日高ヒスイ）を含むものがあることができる。恐らく、磨製石斧の石材にロディン岩などを用いるために石材採取をした際、澄んだ緑色を呈する部分（日高ヒスイなど）を持つ石材も得られ、そのような石材を小型石斧や装飾品に用いることが行われていたのであろう。

（3）石器の分布にみる活動の差

樹林部分については、69・70ラインの丘陵上平坦面、75～77ラインの丘陵斜面、82・83ラインの低地部平坦面の3か所の石器の集中区に大きく分けられた。この濃淡は、フレイクをはじめ、石鏃、Rフレイク、ピエスエスキューの分布にも見られる。しかし、石錐や礫石器は他の石器の分布の薄いエリア、つまみ付きナイフやスクレイパーはやや北東の低地側、石核は丘陵斜面、石斧類は全く傾向が異なる丘陵側にそれぞれ分布する。中でも、つまみ付きナイフとスクレイパーは、丘陵上平坦面にはほとんど分布しない。調査区が接する同時期の宮戸3遺跡の石器の分布は、65ライン付近低地部に舌状に突き出す丘陵平坦面及び52ライン付近の低地部に集中するが、そこでは、つまみ付きナイフ、スクレイパー、ピエスエスキュー、石斧、礫石器が低地部にほとんど分布しないという濃淡を示している。したがって、宮戸4遺

跡樹林部分と宮戸3遺跡では低地部での活動がやや異なっていたと推測される。宮戸3遺跡では定型的な石器を用いない便宜的な活動、宮戸4遺跡ではより計画的な石器製作や、捕獲した獲物の解体、獣皮の処理、骨角の加工が行われたと考えられる。また、丘陵側では木材の調達や食用植物の採集も行われたものとみられる。さらに、丘陵平坦面では焼土が多く確認されたことから、キャンプ地として機能していた可能性がある。

町道部分については、過年度調査の水田部分、斜面部分を合わせてみると、斜面部分のP-5・6、Q~T-10~12、T~W-13~17の3か所に剥片石器の集中と焼土が見られる。ほとんどの器種がこれに類似する濃淡をもつが、フレイクやRフレイクについては水田部分にも広く分布している。また丘陵平坦部のZ~B0-25においてフレイク、Rフレイク、スクレイパー、石斧の集中がみられる。礫石器については樹林部分と異なりW~Y-13~17においてすり石、台石が多く見られ、南西側の丘陵平坦部に集落が存在する可能性を示唆している。

(4) 石鏃、スクレイパーの細分と出土状況

石鏃は、無茎で柳葉形のもの、無茎で五角形のもの、無茎で三角形のもの、有茎凸基のもの、有茎平基のもの、その他に細分できた。主となる分布も細分ごとに異なり、柳葉形のは11・12・15~19・74~79・80~84ラインに、五角形のは79~83ラインに、三角形のは5~7・11~18・69・70ラインに、有茎凸基のは14~16ラインに分布している。各細分が伴う土器の時期は、柳葉形のは東釧路Ⅲ式・コッタロ式・中茶路式、五角形のは東釧路Ⅳ式、有茎のうち長さ3cm以上の大形のもの、長さの半分以上を茎部が占めるものは前期~中期、有茎のうち長さ3cm以下の小型のものは中期~後期のものとみられる。また三角形のものは、平基のものが東釧路Ⅳ式期前後、凹基のものが前期前半に伴うものと考えられる。ほかに粘板岩製の三角形鏃が今年度はV層下から1点出土した(図V-31-7)。粘板岩製や片岩製の三角形鏃は、鶴川町米原・宮戸遺跡群の調査では、平成12年度調査の米原3遺跡ではⅢ層及びV層中から3点、米原4遺跡B地区ではⅢ層から1点、平成13年度調査の宮戸4遺跡ではⅢ層から1点出土している。同様のものは、続縄文時代後北式期の土器に伴って早来町安平A遺跡、苫小牧市タブコブ遺跡、ニナルカ遺跡、千歳市オサツ2遺跡、江別市萩ヶ丘遺跡などで出土している。ただ、ニナルカ遺跡では出土土器の90%が早期東釧路Ⅲ~コッタロ式の2B層から1点片岩製三角形鏃の出土が報告されている。

スクレイパーは、筐状石器、ラウンドスクレイパー、エンドスクレイパー、サイドスクレイパー、抉入石器に細分できた。筐状石器は、ヘラ形スクレイパー、石べらとも称され、宮戸4遺跡では今年度樹林部分で2点、平成13年度斜面部分で6点以上、平成14年度S地点で1点以上出土している。平成13・14年度分は図示した遺物についてのみであるが、撥形か五角形状を呈する。同様の石器についてはユカンボシE8遺跡の報告でまとめられているが、刃部も含め両面調整するもの、背面を全面調整し、腹面は両側縁を調整するものに大別できそうである。

ラウンドスクレイパー・エンドスクレイパーは、今年度17点、平成13年度斜面部分で17点以上、平成14年度S地点で2点、水田部分で20点出土している。今年度の調査区での出土状況からするとグライ化した土層で特徴的に出土しており、これらの石器の使用に水が密接に関わっているものと考えられる。

抉入石器は、今年度10点、平成14年度水田部分で1点出土している。器種として目立たないため、過年度の調査では認識されなかったものとみられる。今年度の調査区では、他の器種の分布が薄い地点で出土しており、独立的な機能が想定される。(福井)

4 イモッペ川流域の遺跡群について－4年間の調査の総括－

平成12～15年度、鶴川町の米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡が調査された。これらの遺跡はイモッペ川両岸にあり、地番や調査行程の都合により分かれて掲載されているが、調査結果からも明らかなように一つの遺跡群を形成する。ここでは主に遺構と土器の分布を手がかりとして、イモッペ川流域の遺跡群の形成について考察し、4年間の調査を総括する。以下、時期の順に述べる。

縄文時代早期

宮戸3遺跡で、前半の貝殻条痕文土器群に属するムシリ1式(1)が出土した。すべて同一個体の破片である。出土地点は北側の縁辺部なので、分布が調査範囲外の低位部分へ広がる可能性がある。

後半の時期は、遺跡群全体で多数の遺構・遺物が確認されている。特に焼土は121か所検出されており、その大半が早期後半～前期前半の所産と考えられる。宮戸4遺跡斜面部分で検出された住居跡H-1(コッタロ式期)、焼土F-22・23、フレイク・チップ集中FC-1(中茶路式期)からは炭化したクルミ・ドングリが出土している。東釧路Ⅱ式(2)は米原4遺跡、宮戸4遺跡斜面部分でごく少数出土しており、この段階では活動の痕跡は希薄である。しかし、次の東釧路Ⅲ式以降の段階では、遺跡群全体に展開する。東釧路Ⅲ式(3～5)とコッタロ式(6・7)は器形や施文などに類似する点が多く、漸移的に変化する一群を形成すると推測される。同様にコッタロ式から中茶路式(8～10)、そして次の東釧路Ⅳ式(11・12)への移行も漸移的であったと考えられ、貼付帯などに中間的な特徴を示すものが出土している。分布の濃淡を比較すると、東釧路Ⅲ式の要素が強い一群は、南側の米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸4遺跡斜面・町道部分に多く、コッタロ式の要素が強い一群は、北側の宮戸3遺跡、宮戸4遺跡樹林部分に多い。中茶路式・東釧路Ⅳ式は個体数が非常に少なくなり、特に米原4遺跡ではいずれも破片数点が得られているだけである。分布は、中茶路式が宮戸4遺跡水田・町道部分および樹林部分のイモッペ川旧河道に近い低位部分、東釧路Ⅳ式は宮戸3遺跡の台地上、宮戸4遺跡斜面部分にややまとまりが見られる。宮戸4遺跡出土の石器等にも早期後半に特有な組成が見られ、Ⅷ章第3節に福井による考察がある。

表Ⅷ-4 遺跡別遺構数一覧

	住居跡	土坑	Tピット	土器片 囲い炉	石囲い炉	焼土	フレイク・ チップ集中	礫集中	合計
米原3	2	1				12			15
米原4	5	8	9		1	48		2	73
宮戸3			32			2			34
宮戸4	1		57	1		59	1	4	123
合計	8	9	98	1	1	121	1	6	245

表Ⅷ-5 遺跡別土器出土点数一覧

	I a	I b	II a	II b	III a	III b	IV a	IV b	IV c	V c	VI	VII	不明	合計
米原3		1460	20	721	545	2579	510			119	21		8	5983
米原4		3764	4282	551	91	11414	554	4		85			573	21322
宮戸3	32	1798	320											2150
宮戸4		26150	8273	171	250	3554	4230		1	53	1	99	693	43475
合計	32	33172	12895	1443	886	17547	5294	4	1	257	22	99	1274	72930

表Ⅷ-6 遺跡別石器等出土点数一覧

	剥片石器類	剥片・石核類	磨製石器類	礫石器類	礫・礫片	土製品	石製品	合計
米原3	211	3090	260	433	1468	1		5463
米原4	1489	12610	2644	749	21388	11		38891
宮戸3	74	258	17	50	734			1133
宮戸4	2273	27429	702	457	20890	20	5	51776
合計	4047	43387	3623	1689	44480	32	5	97263

縄文時代前期

前半の時期は、早期後半に引き続き多くの焼土が形成される。宮戸4遺跡S地点では、沢地形の内部に被熱した礫・礫片を主体とする礫集中が3か所見られ、周辺の焼土とともに調理などの際の熱処理に関連するものと推測される。縄文丸底・尖底の土器群に属する綱文式(13・14)や静内中野式が遺跡群全体より出土している。宮戸3遺跡、宮戸4遺跡では綱文式、米原3遺跡、米原4遺跡では静内中野式の特徴を示す個体が多い。

後半は、植苗式(17)が米原3遺跡、米原4遺跡より多数出土している。また、円筒土器下層式(15・16)が、米原4遺跡A地区、宮戸4遺跡斜面・町道部分より散発的に出土する。

縄文時代中期

前葉は、米原3遺跡、米原4遺跡B地区で、円筒土器上層式、萩ヶ丘1式(18)が出土している。特に米原3遺跡では萩ヶ丘1式が多く、この時期の主体部であった可能性がある。

中葉は、宮戸4遺跡S地点で萩ヶ丘2式(19)、米原4遺跡B地区で、東北南部に由来する大木8a式相当の破片(20)が出土している。また、天神山式(21・22)が米原4遺跡A地区、宮戸4遺跡斜面・町道部分南側の台地上という比較的狭い範囲より出土する。

後葉は、米原4遺跡B地区で柏木川式期の集落が営まれる。住居跡5軒を中心に、同時期の土坑や焼土、礫集中が検出された。(Ⅷ章第1節で、山中が特定の住居跡に石器製作に関連する遺物が多い点に着目し、集落における役割の相違を指摘している。)柏木川式(23)は、対岸の宮戸4遺跡S地点、斜面部分でも多く出土している。

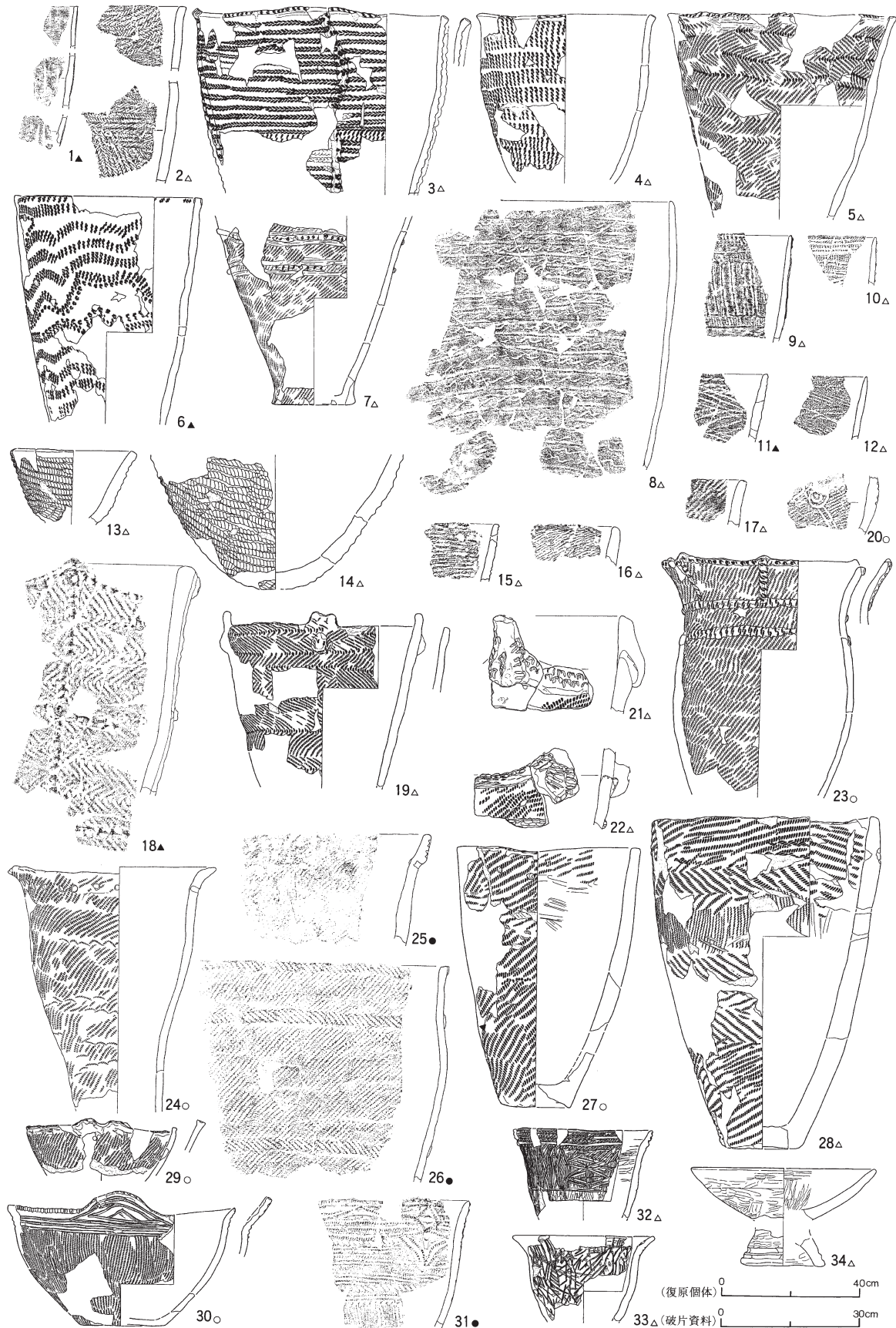
中期末葉～後期初頭には、米原3遺跡で集落が営まれる。集落の主体だったと推測される平坦部が削平されているが、住居跡2軒などが検出された。H-1は北筒式期、H-2は余市式期の所産で、いずれも石囲い炉を伴う。住居の形態が近似することから、この2軒はほぼ同時期に連続して居住していた可能性が高い。北筒式(24・25)の分布は、米原3遺跡のほか、米原4遺跡に多い。米原4遺跡B地区では、北筒式の出土点数が遺構時期の主体である柏木川式よりも上回っている。宮戸4遺跡ではS地点から少数出土する程度で、斜面部分より北側では出土していない。

米原4遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡では合計98基のTピットが検出された。イモツペ川の旧河道へ下る沢地形を意識して設けられており、配列をなすものも見られる。北側(宮戸3遺跡側)へ近づくほど濃密な分布を示す。宮戸4遺跡のTピットについては、平成13・14年度に中間的な考察を行った(北埋調報168・北埋調報185)。その中で、花粉分析や植物珪酸体分析による古環境復元の結果なども踏まえ、米原4遺跡の柏木川式期の集落が廃絶して開けた土地となった後、米原3遺跡で集落を営んでいた北筒式～余市式期の人々が、より下流域へ来てTピットを構築したのではないかと推論した。今年度、宮戸4遺跡樹林部分で検出されたTピット2基の底部より採取した炭化物を用いて、放射性炭素年代測定(AMS法)を行ったところ、 $3,860 \pm 40$ (y B P)、 $3,900 \pm 40$ (y B P) という値を示した(Ⅶ章第2節参照)。この測定結果は、昨年度考察したTピットの構築年代である中期末葉～後期初頭に概ね当てはまる。これまでにイモツペ川流域で検出されたTピット群の全体像については、Ⅷ章第2節で笠原が形態分類を主眼に論考している。

縄文時代後期

初頭は、米原3遺跡で余市式(26)が多く出土する。しかし、他の遺跡では宮戸4遺跡S地点と斜面部分でわずかに出土する程度で、非常に希薄な分布を示す。

前葉は、米原3遺跡、米原4遺跡、宮戸4遺跡の広い範囲でタプコプ式(27・28)が出土する。宮戸4遺跡S地点では、土器片囲い炉が1か所検出された。タプコプ式期の土器片囲い炉については、昨年度、



図Ⅷ-3 イモツペ川流域の遺跡群で出土した土器

(●：米原3遺跡、○：米原4遺跡、▲：宮戸3遺跡、△：宮戸4遺跡)

分布・形態・編年・時期などについて考察した（北埋調報 185）。分布を見ると、宮戸 4 遺跡斜面部分の南西側から S 地点にかけての台地上に特に多い。宮戸 4 遺跡水田部分・斜面部分の低位部分ではほとんど出土していない。遺構と遺物の分布から推測すると、宮戸 4 遺跡 S 地点の南側調査範囲外にタプコプ式期の主体部がある可能性が高い。米原 4 遺跡 B 地区北東側の沢地形内では、当該期に形成されたと見られる焼土群が検出されている。放射性炭素年代測定（AMS 法）では、宮戸 4 遺跡の土器片囲い炉が $3,660 \pm 40$ (y B P)、米原 4 遺跡 B 地区の焼土が $3,520 \pm 40$ (y B P) という数値が得られた。いずれも従来の編年より新しい時期に相当する点が注目される。

縄文時代晩期

米原 3 遺跡、米原 4 遺跡、宮戸 4 遺跡斜面部分で後葉の土器が少数得られている。米原 4 遺跡 B 地区より出土した 2 個体 (29・30) は、大洞 C 2 式～大洞 A 式に相当するものである。いずれの遺跡でも出土範囲が狭く、個体数も少ない。

続縄文時代

当該期の遺構は確認されなかった。宮戸 4 遺跡樹林部分の試掘坑より前葉の大狩部式の破片 1 点が出土した。出土地点は発掘調査より除外されたため詳細は不明である。また、米原 3 遺跡で中葉の後北 B 式 (31) が少数出土している。

擦文時代

宮戸 4 遺跡 S 地点で楔形列点文、綾杉状刻線文が施された深鉢 (32・33)、水田部分で高坏 (34) が出土した。いずれも小型の個体で、限定された地点からの出土できわめて少数であることから、遺跡の主体的な遺物ではなく、移動などの際に外部より持ち込まれた可能性が高い。

アイヌ文化期

当該期の遺構・遺物は確認されていない。遺跡群よりも下流域（現在の宮戸小学校付近）に大きなコタンがあったとの記録が残っている。

まとめ

イモッペ川流域の遺跡群の特徴は、縄文時代早期から擦文時代までの長い期間にわたり、消長はあるものの、人間の活動の痕跡が残されていることである。

縄文時代早・前期の集落は調査範囲内では確認されなかったが、土器の分布から推し量ると、南西外側の段丘上に主体部が存在する可能性がある。この時期はイモッペ川流域の広い範囲で、植物食料の採集を中心とした生業活動が行われたと推測される。遺構・遺物の分布の変化は、人々が生業活動を行う範囲を時期によって重点を移してきたことに起因すると考えられる。

縄文時代中・後期はイモッペ川を臨む段丘上の縁辺部に集落が形成される。早・前期と比較して、土器の分布が時期によって明確に濃淡が分かれる。この特徴が顕著なのは、中期末葉～後期初頭の北筒式・余市式の時期である。米原 3 遺跡に主体部があり、Tピットを仕掛けるためにやや離れた下流へ進出するが、活動の痕跡は米原 4 遺跡、宮戸 4 遺跡 S 地点までである。エゾシカ猟を効果的に進めるために、居住域と狩猟域とを区分していたものであろう。

晩期～続縄文時代以降は、花岡遺跡、鶴川盛土墳墓群などに見られるように、鶴川の本流に近い低位の段丘面あるいは河口付近へ、居住域および活動の主体が移っていったと考えられる。

(芝田)

写 真 図 版

米原 4 遺跡		図版 1 ~ 22
宮戸 4 遺跡	樹林部分	図版 23 ~ 30
	町道部分	図版 31・32
	出土遺物	図版 33 ~ 44



1. 調査風景（南東から）



2. 調査区完掘（北西から）

図版 2



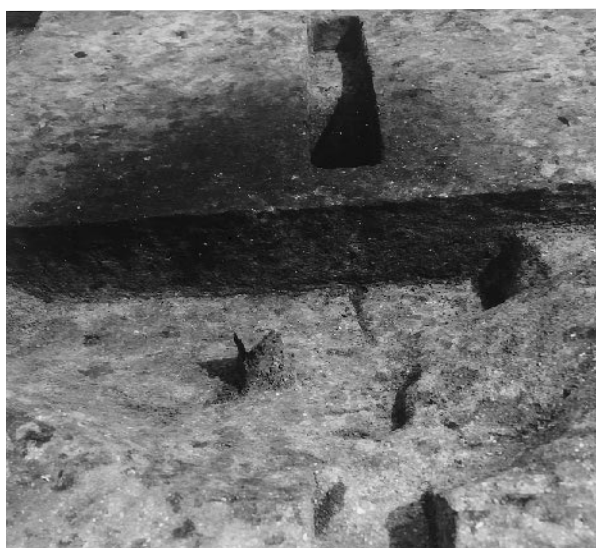
1. 調査風景（西から）



2. 調査区完掘（西から）



1. 土層断面 (西から)



2. P-7 土層断面 (南西から)



3. P-7 完掘 (南西から)



4. P-8 土層断面 (東から)

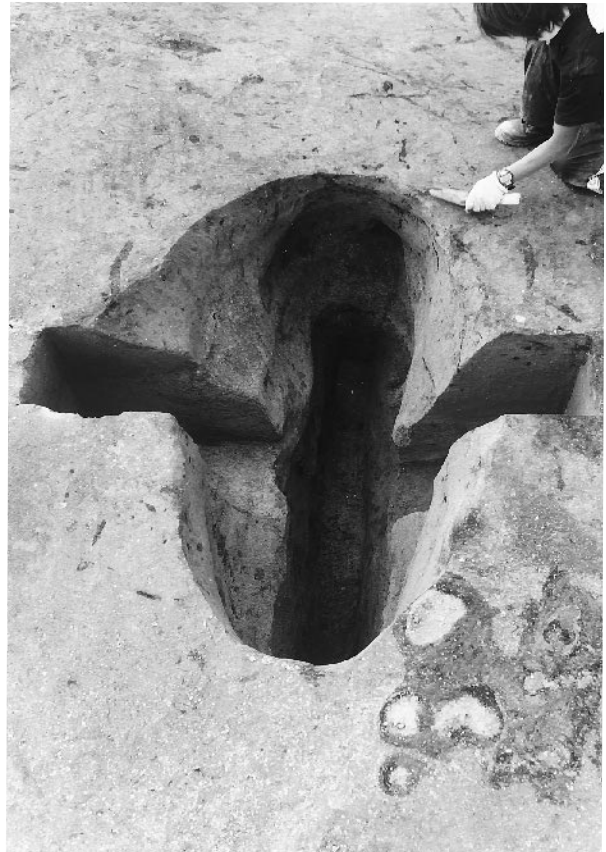


5. P-8 完掘 (南西から)

図版 4



1. TP-9 土層断面 (南東から)



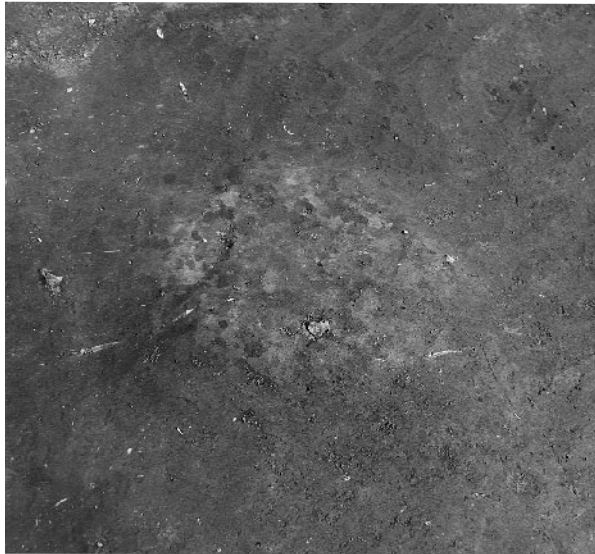
2. TP-9 完掘 (南東から)



3. S-3 検出 (南東から)



4. S-3 土層断面 (東から)



1. F-26 検出 (北から)



2. F-26 土層断面 (南から)



3. F-37 検出 (北から)



4. F-37 土層断面 (南から)

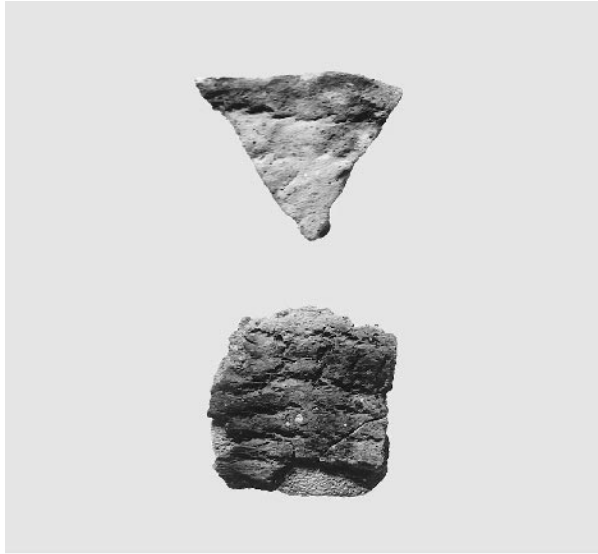


5. F-45 検出 (南東から)

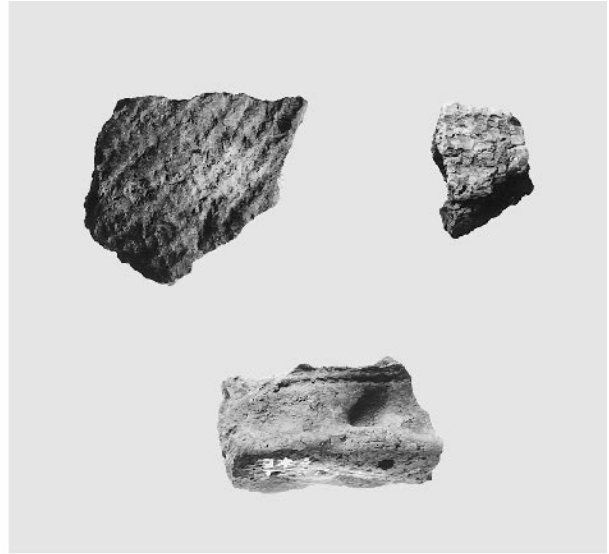


6. F-46 土層断面 (西から)

図版 6



1. P-7 出土の土器



2. TP-9 出土の土器



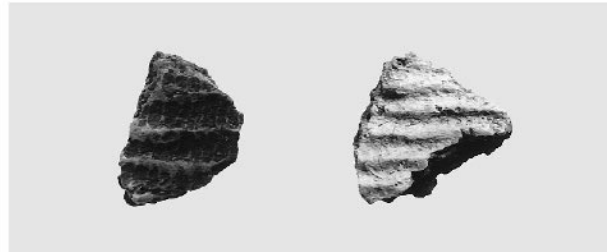
3. F-24 出土の土器



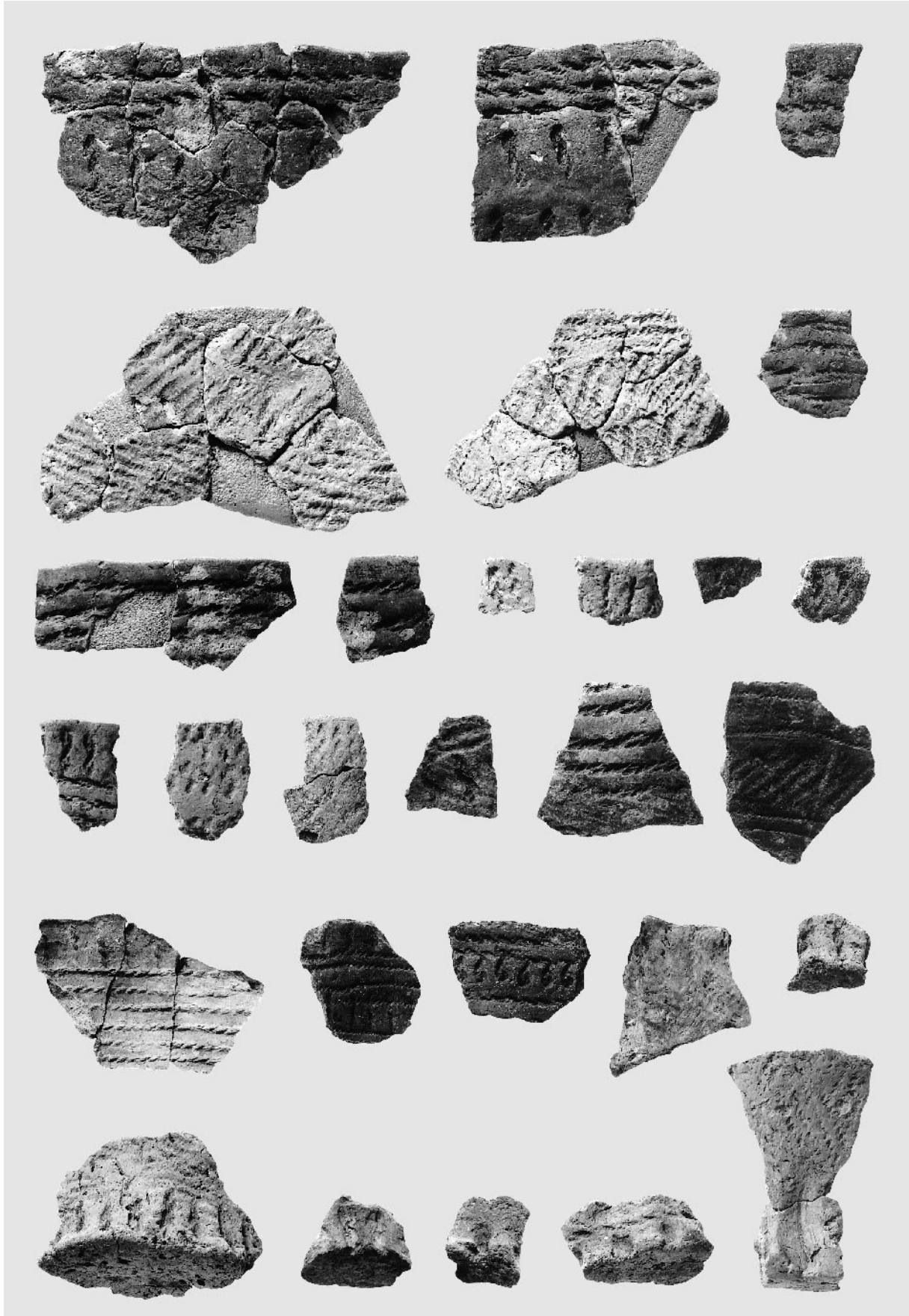
4. F-28 出土の土器



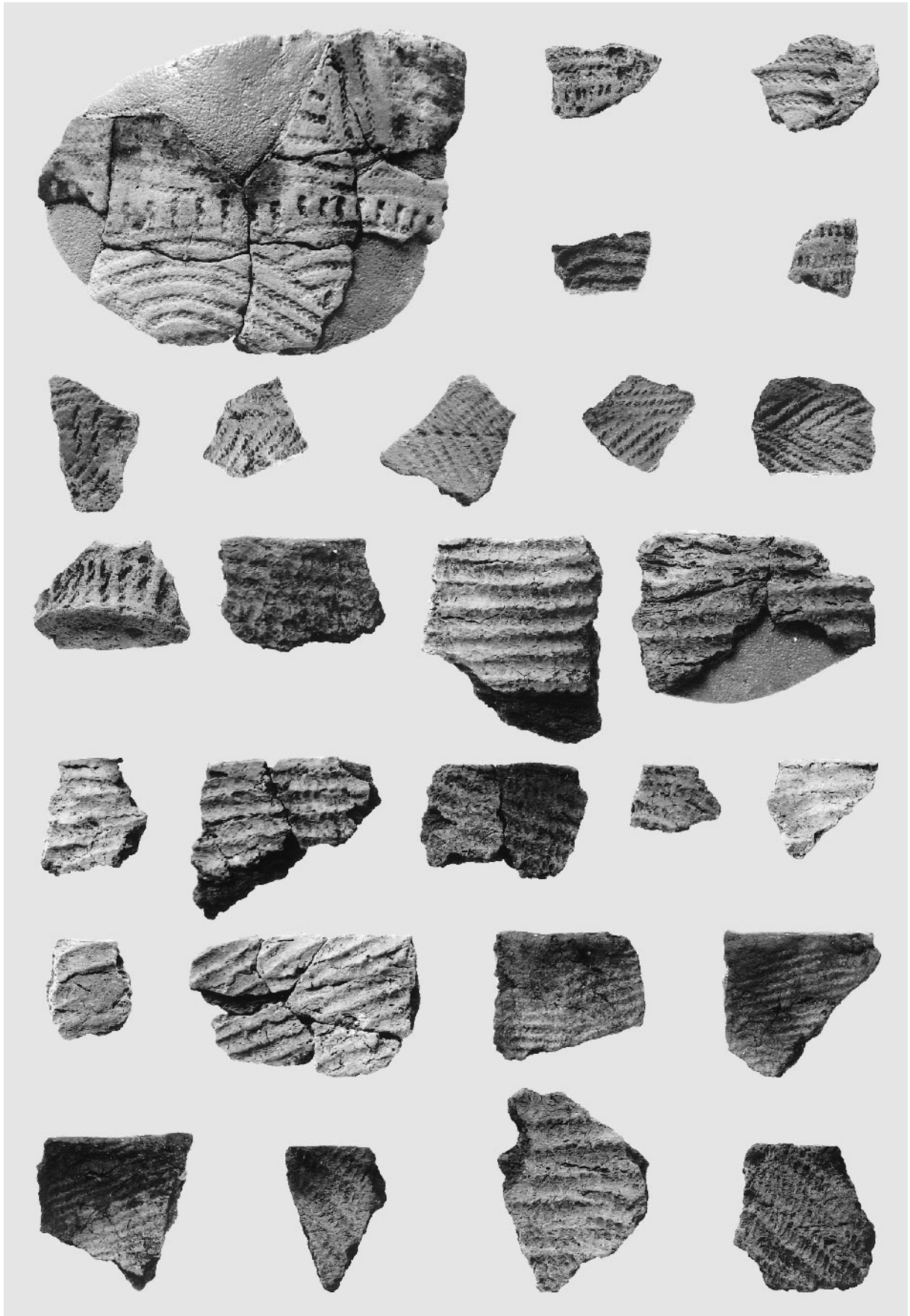
5. F-34 出土の土器



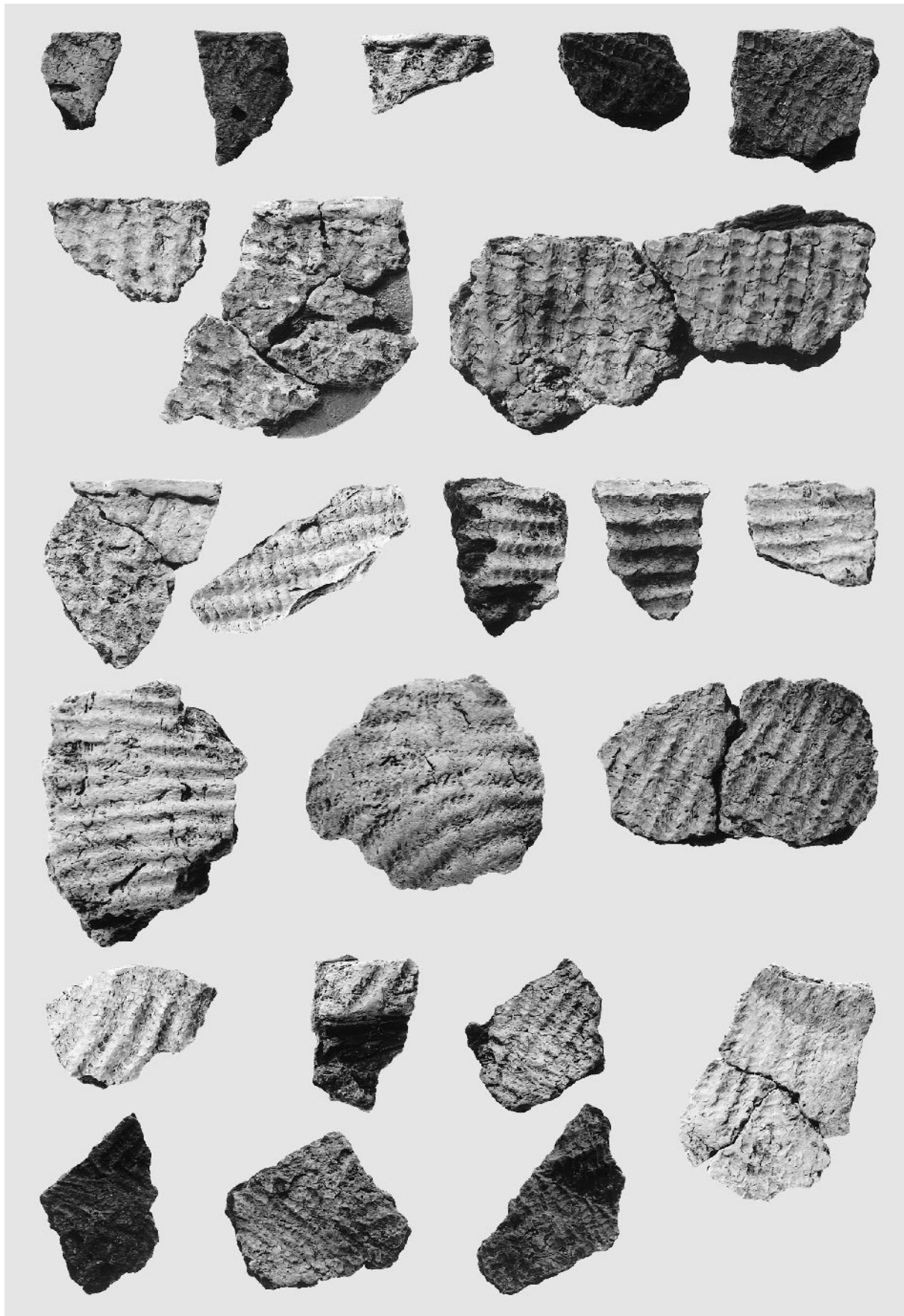
6. F-44 出土の土器



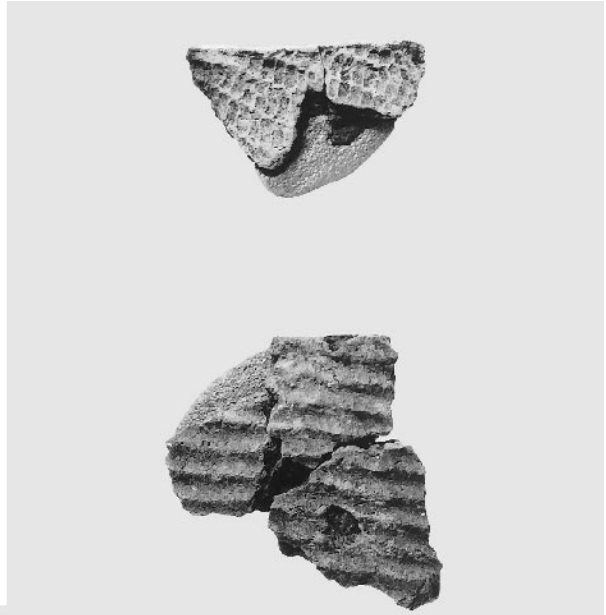
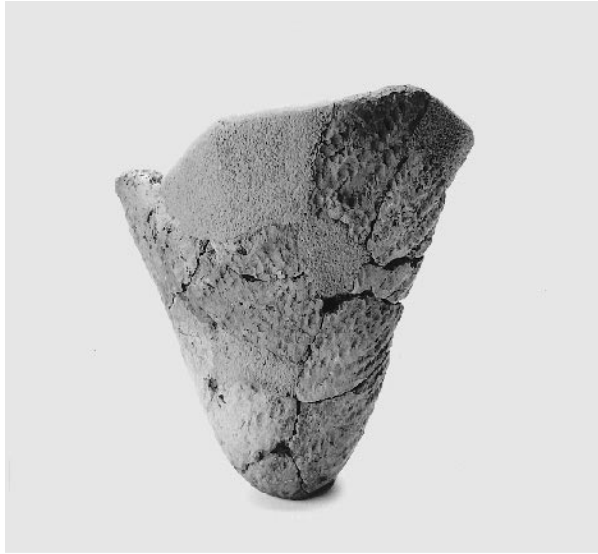
1. 包含層出土の土器 (1)



1. 包含層出土の土器 (2)



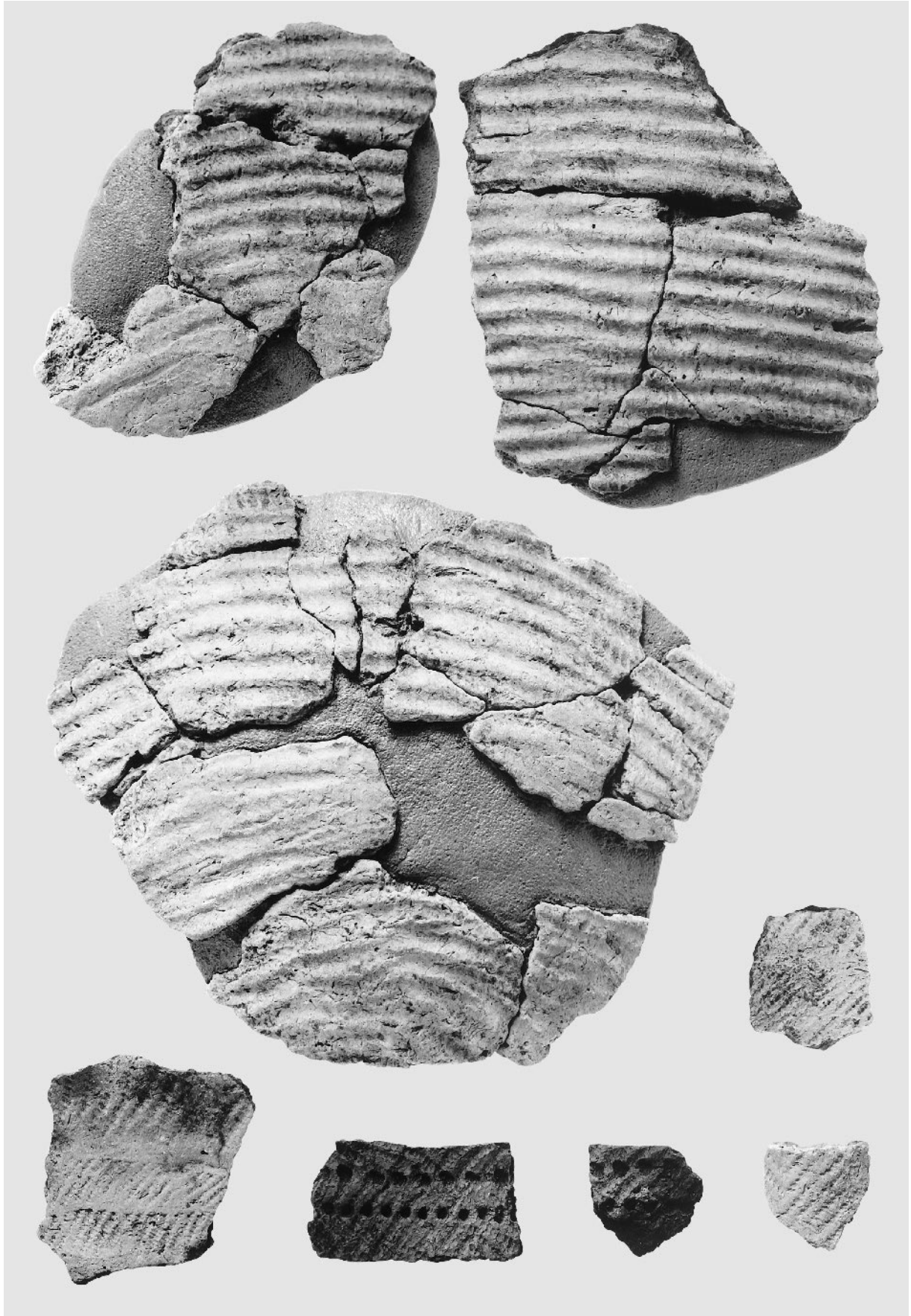
1. 包含層出土の土器 (3)



1. 包含層出土の復元土器 (図IV -9-43)



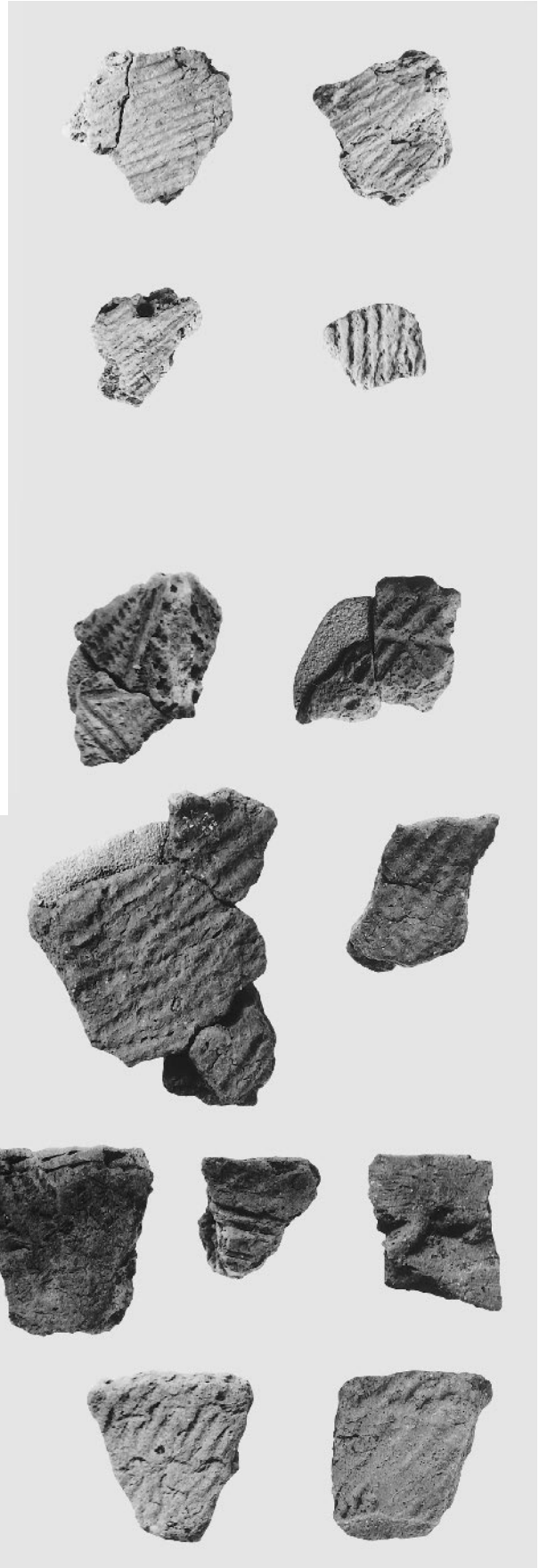
1. 包含層出土の土器 (4)



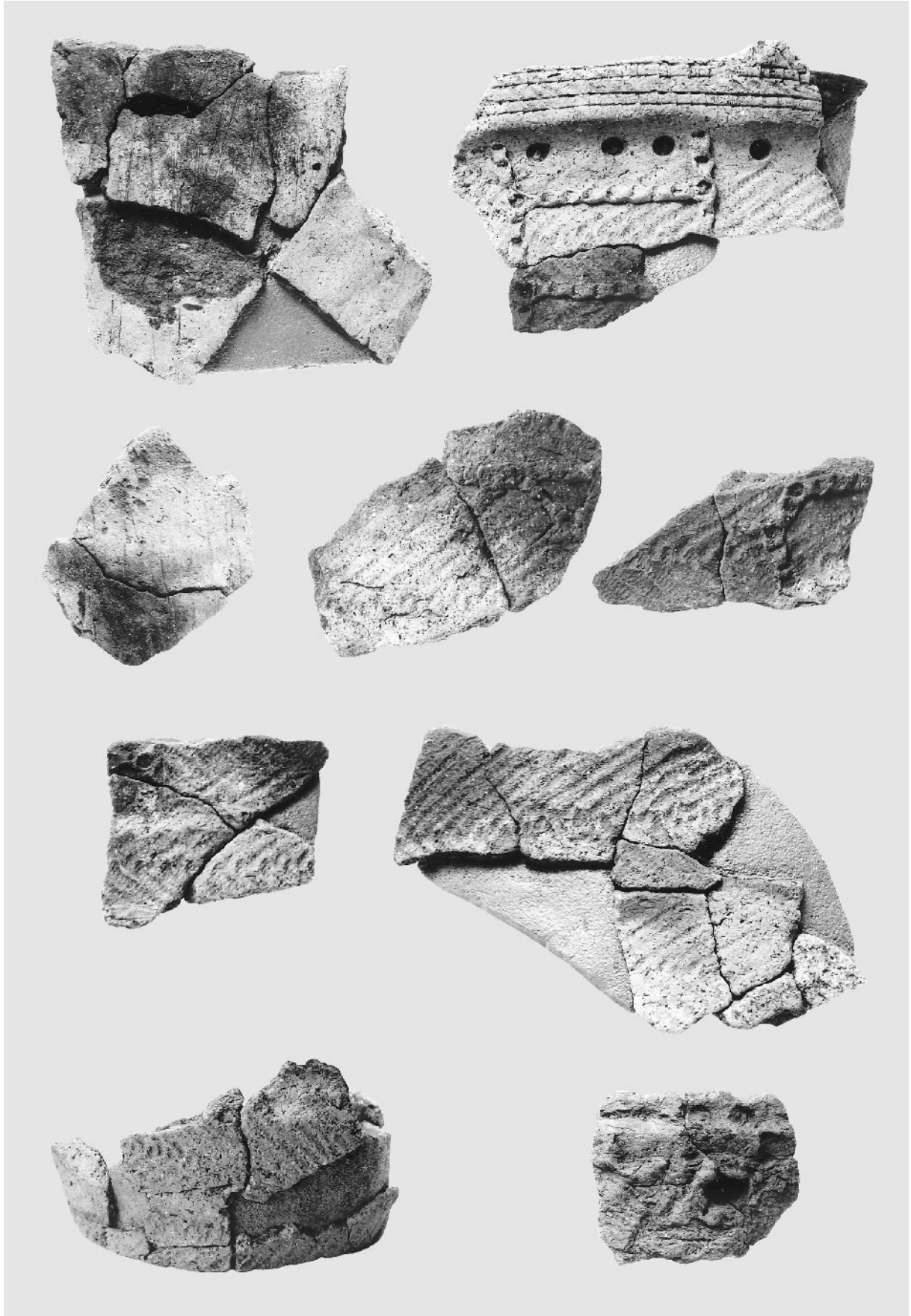
1. 包含層出土の土器 (5)



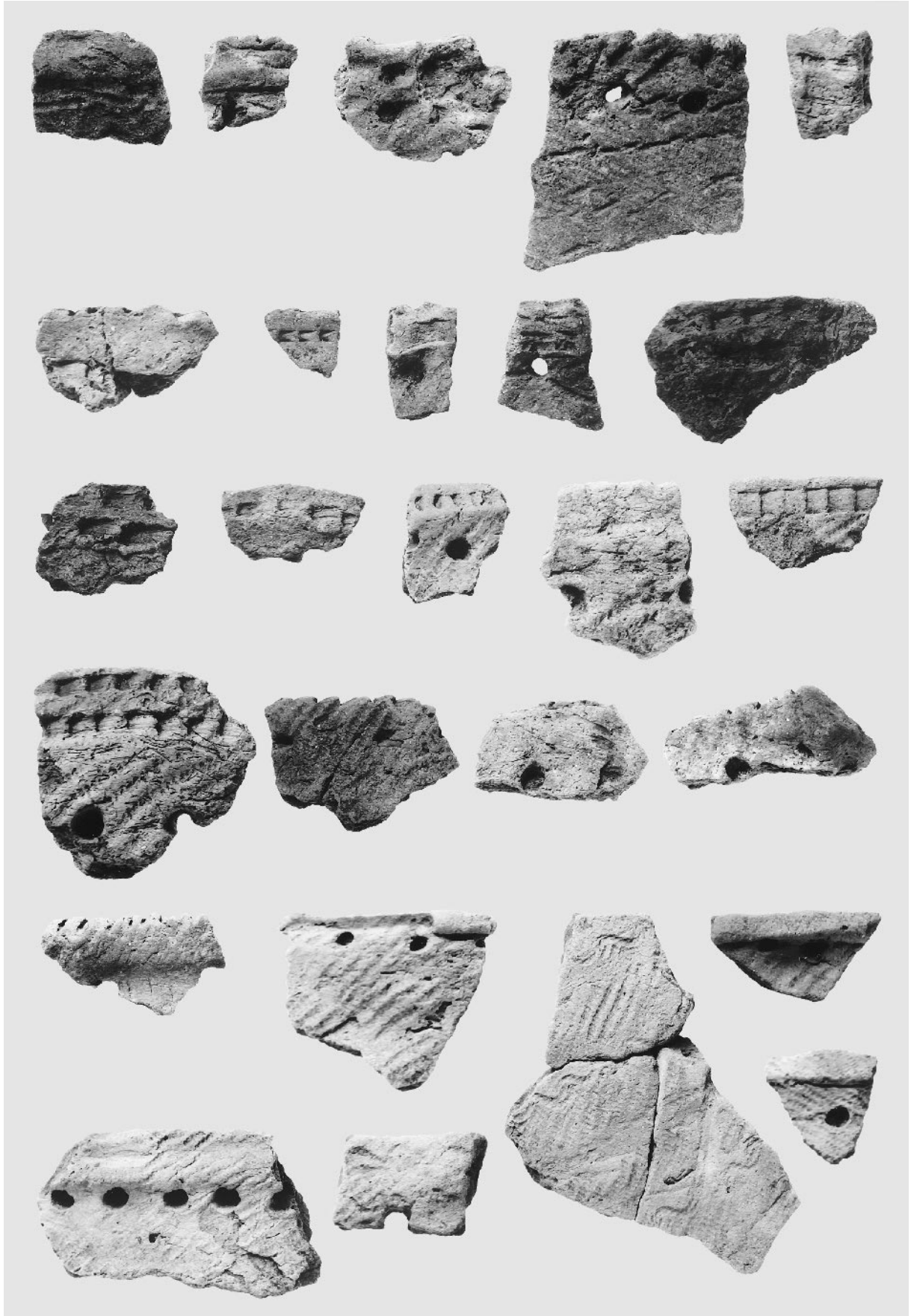
1. 包含層出土の復元土器 (図IV-11-91a)



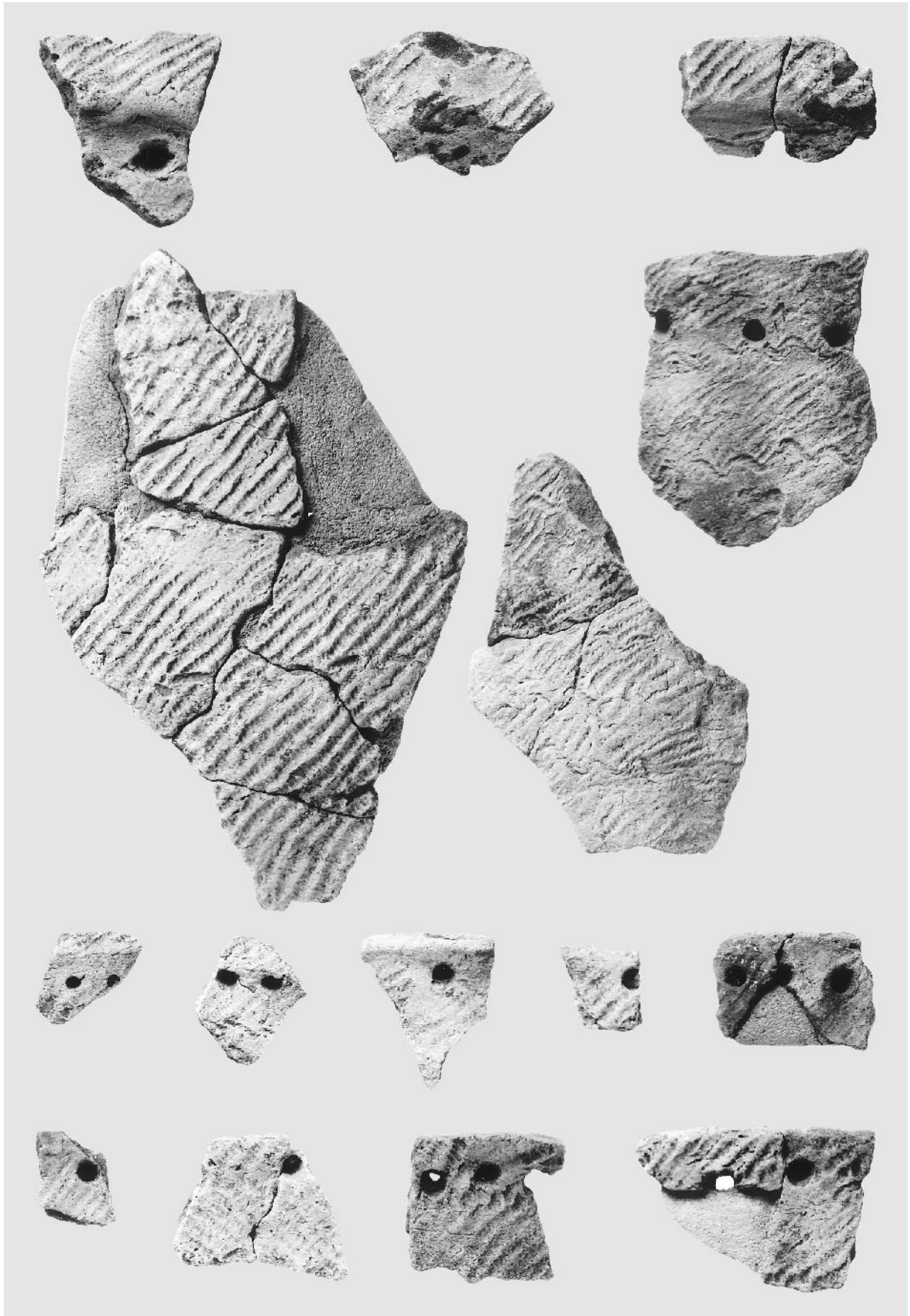
2. 包含層出土の土器 (6)



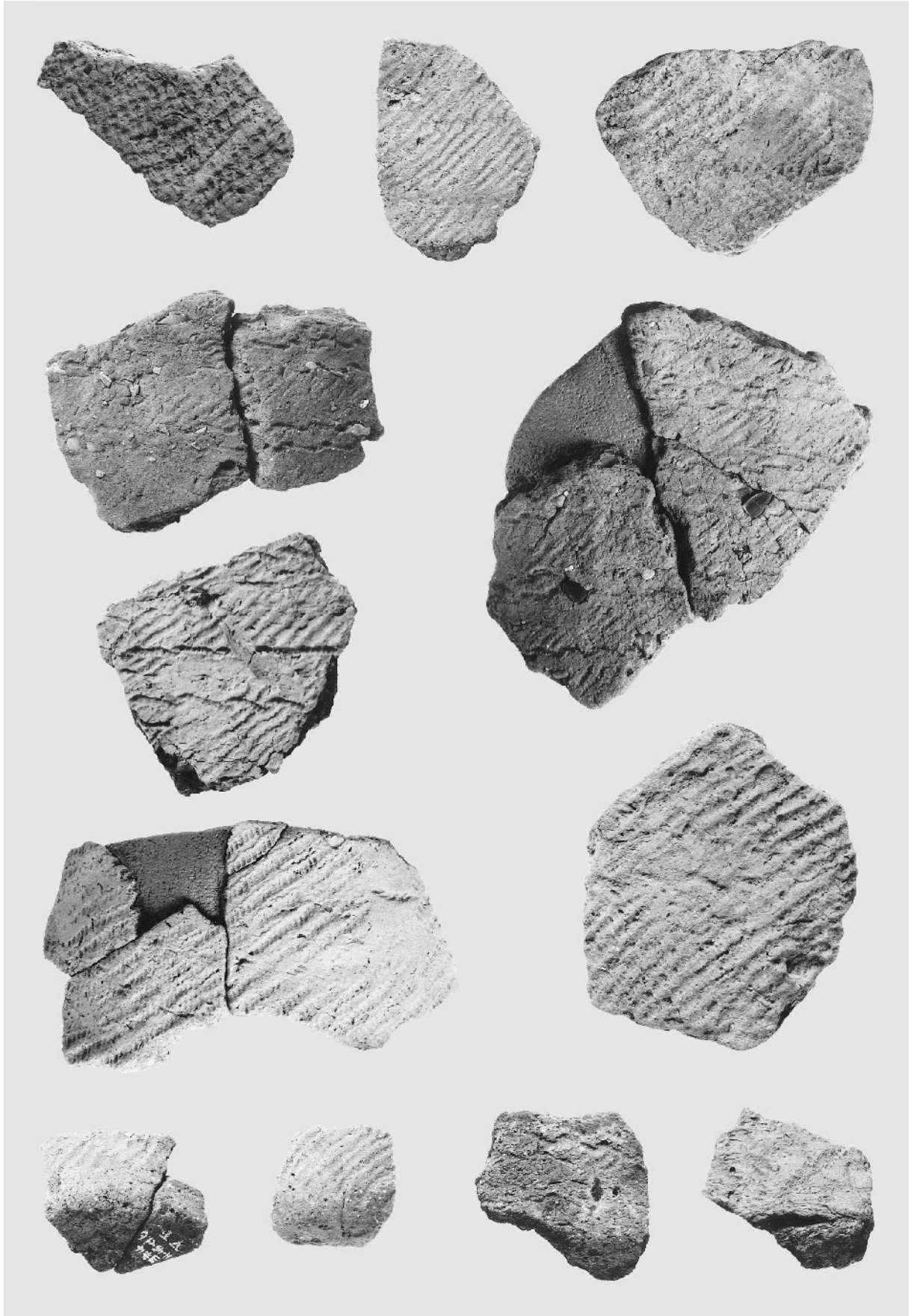
1. 包含層出土の土器 (7)



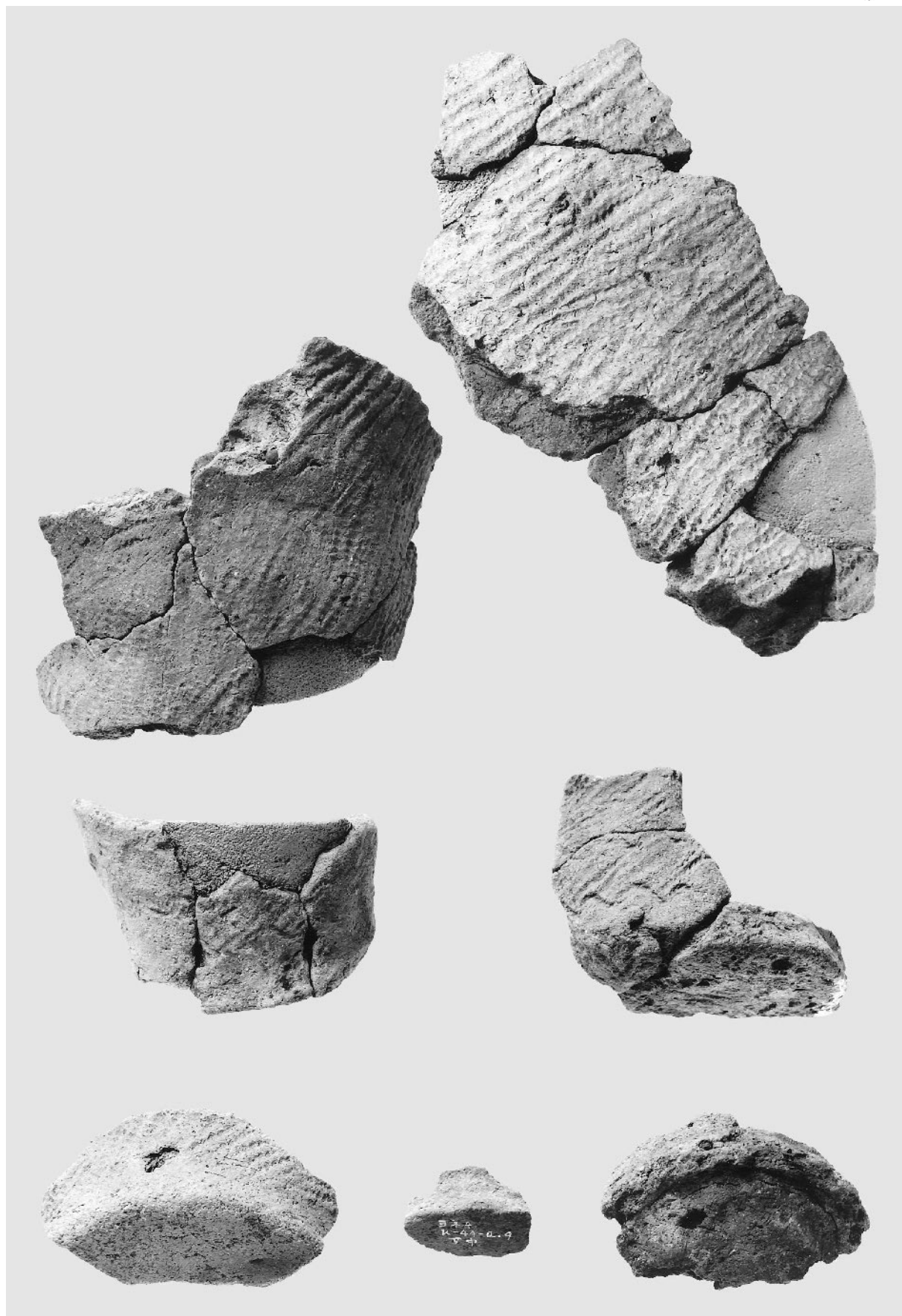
1. 包含層出土の土器 (8)



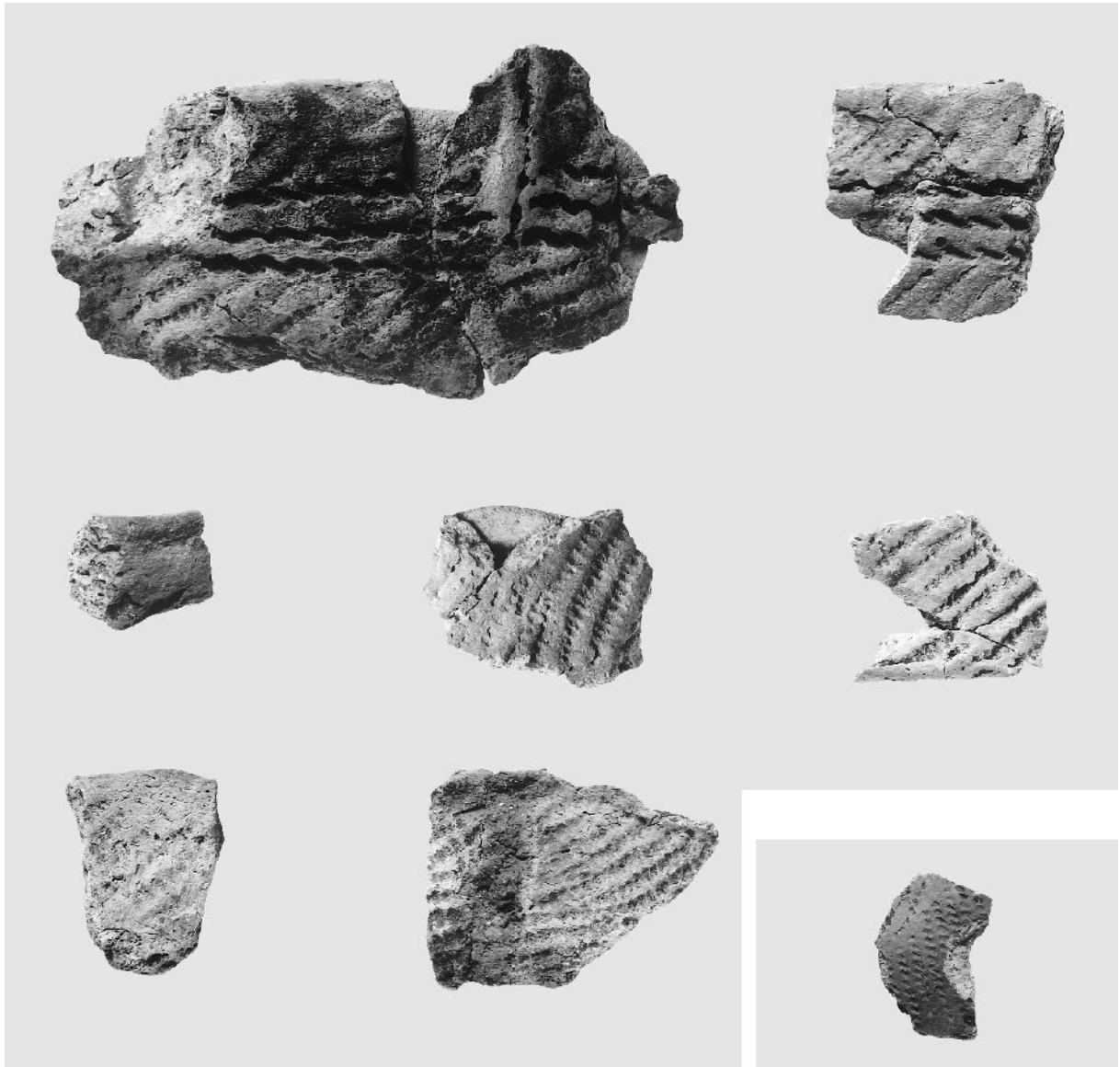
1. 包含層出土の土器 (9)



1. 包含層出土の土器 (10)



1. 包含層出土の土器 (11)

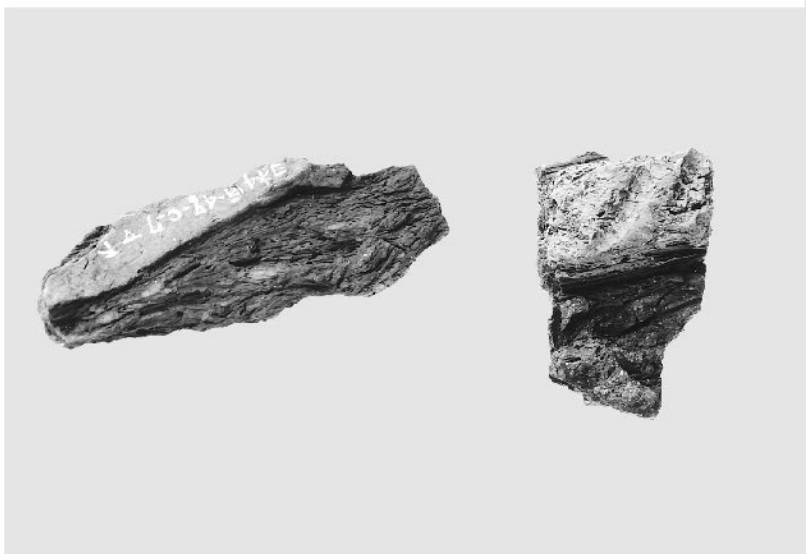


1. 包含層出土の土器 (12)

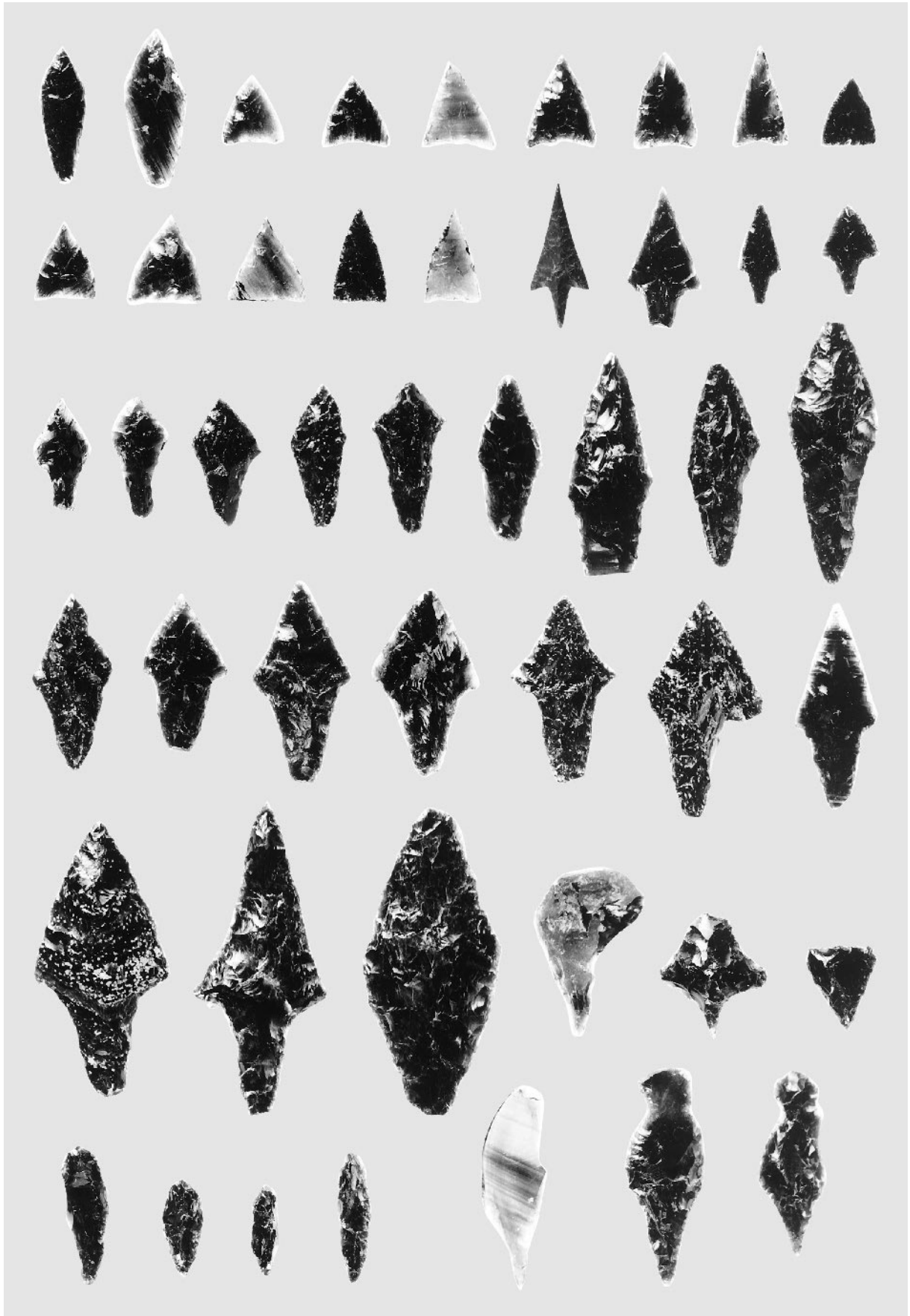
2. 包含層出土の土製品



3. 包含層出土の焼成粘土塊



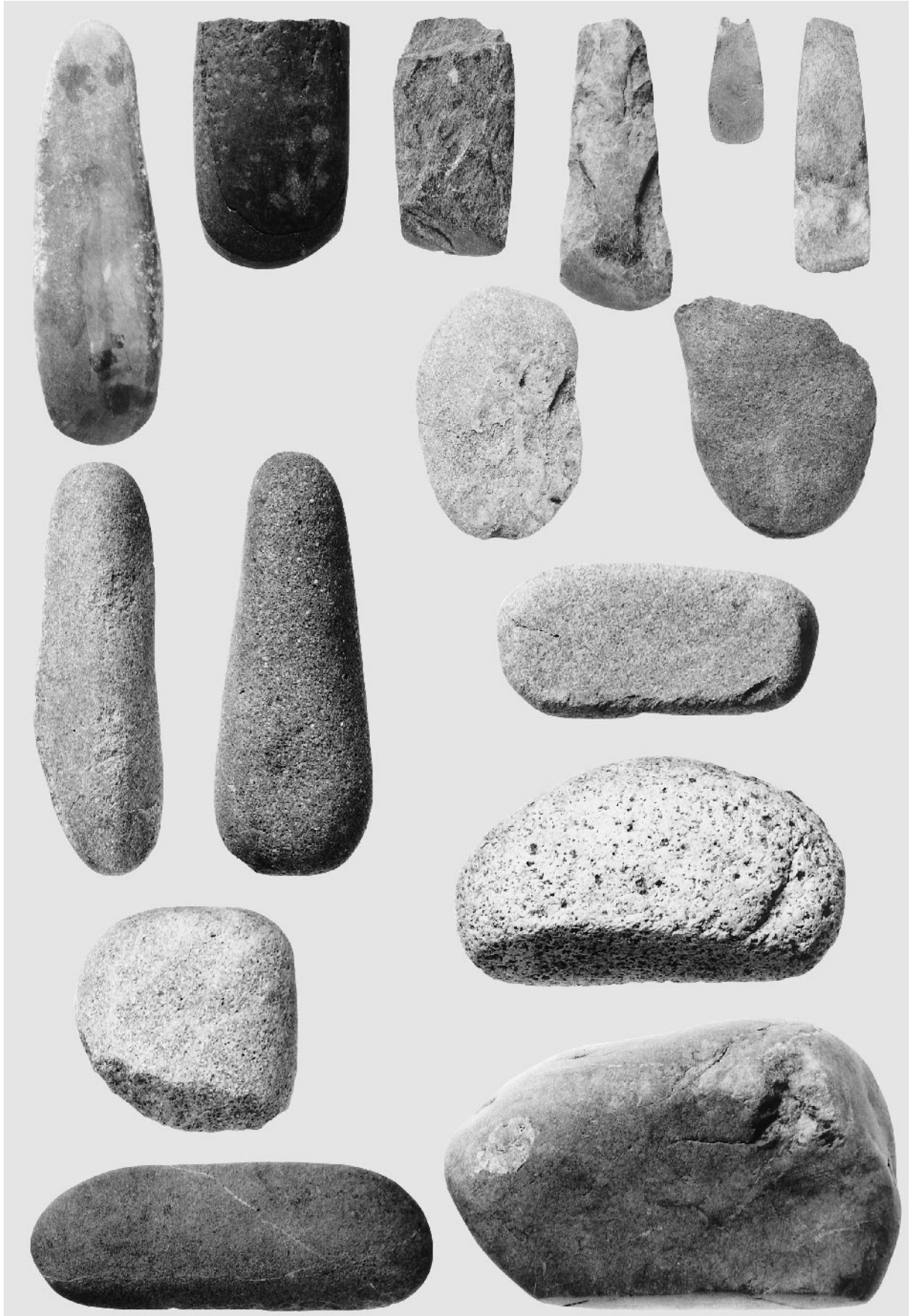
4. 胎土に混和される繊維 (Ⅱ群 a 類)



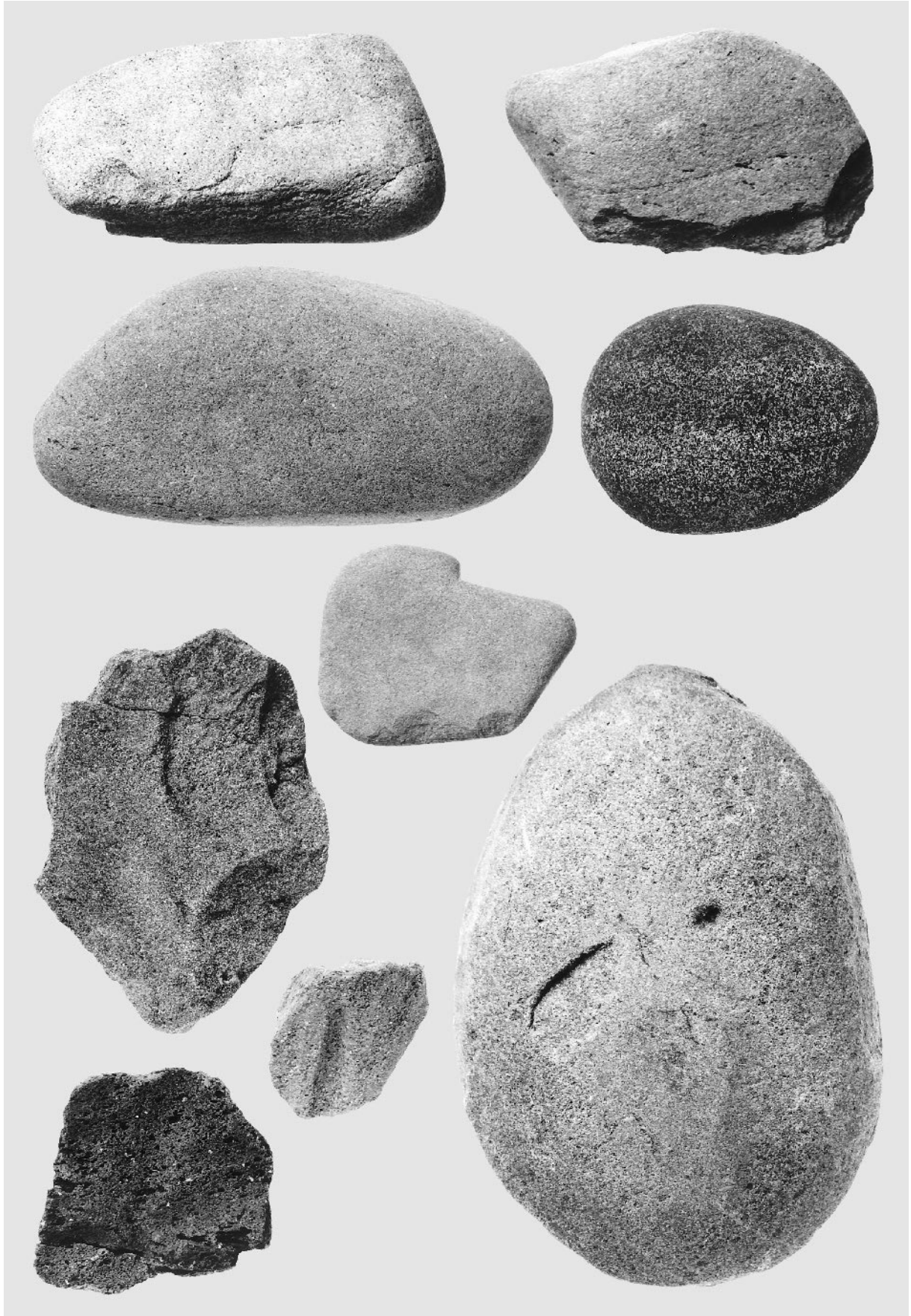
1. 包含層出土の石器 (1)



1. 包含層出土の石器 (2)



1. 包含層出土の石器 (3)



1. 包含層出土の石器 (4)



1. 調査区全景（西から）



2. 調査風景（東から）



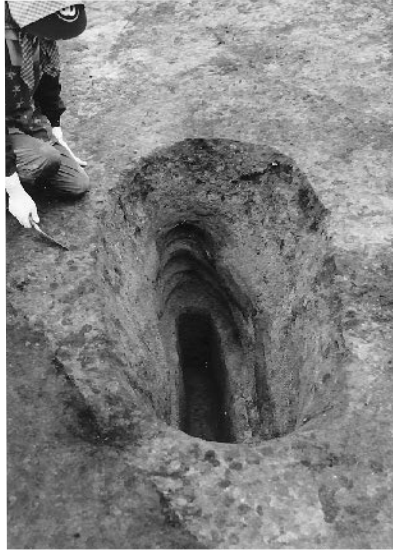
1. 調査状況（北から）



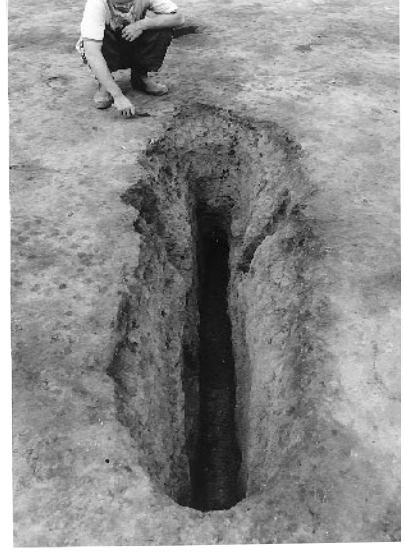
2. 調査区完掘（西から）



1. TP-26 土層断面(南西から)



2. TP-26 完掘 (東から)



3. TP-27 完掘 (東から)



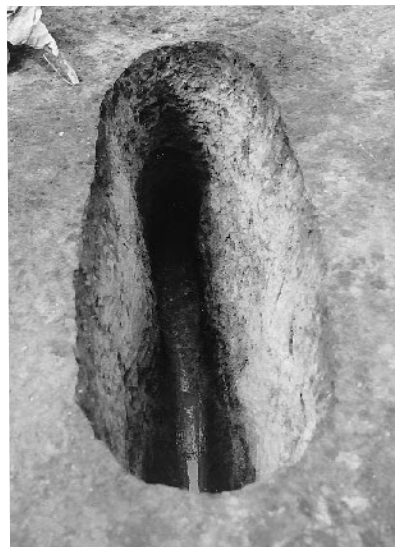
4. TP-28 土層断面(東から)



5. TP-28 完掘 (東から)



6. TP-29 土層断面(東から)



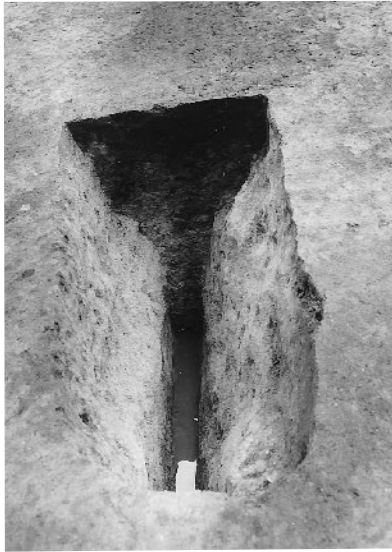
7. TP-29 完掘 (東から)



8. TP-30 土層断面(南東から)



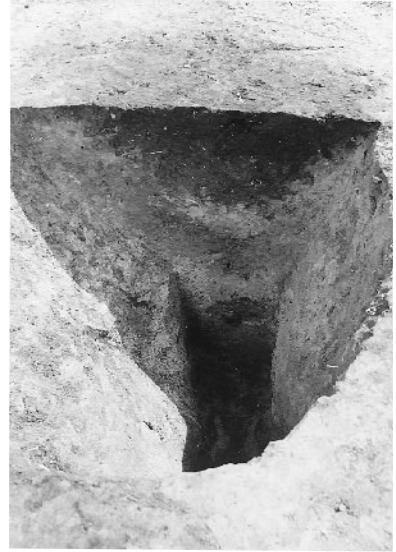
9. TP-30 完掘 (南東から)



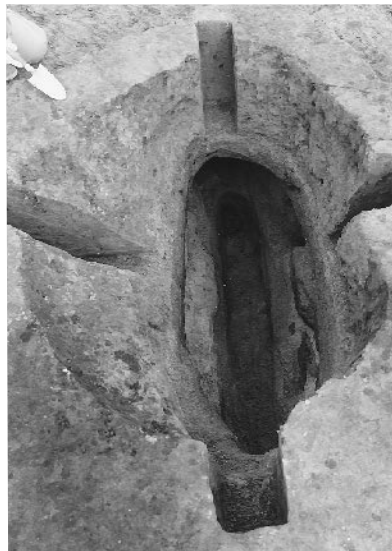
1. TP-31 土層断面 (西から)



2. TP-31 完掘 (西から)



3. TP-32 土層断面 (西から)



4. TP-32 完掘 (西から)



5. TP-33 土層断面 (東から)



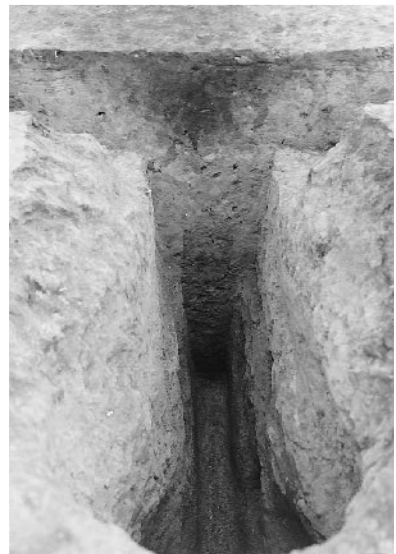
6. TP-33 完掘 (南東から)



7. TP-34 土層断面 (東から)



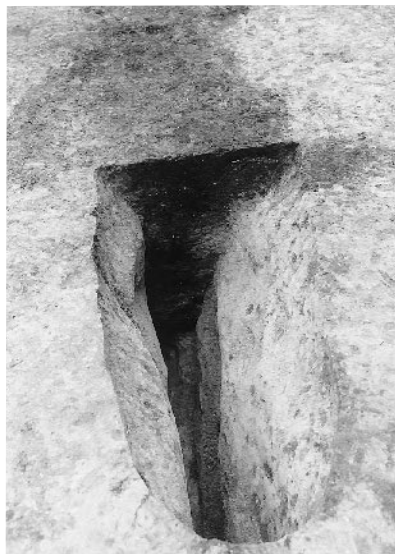
8. TP-34 完掘 (西から)



9. TP-36 土層断面 (西から)



1. TP-36 完掘 (東から)



2. TP-37 土層断面 (西から)



3. TP-37 完掘 (西から)



4. TP-38 土層断面 (東から)



5. TP-38 完掘 (東から)



6. TP-40 土層断面 (東から)



7. TP-40 完掘 (東から)



8. TP-41 土層断面 (東から)



9. TP-41 完掘 (東から)



1. TP-42, 43 完掘 (西から)



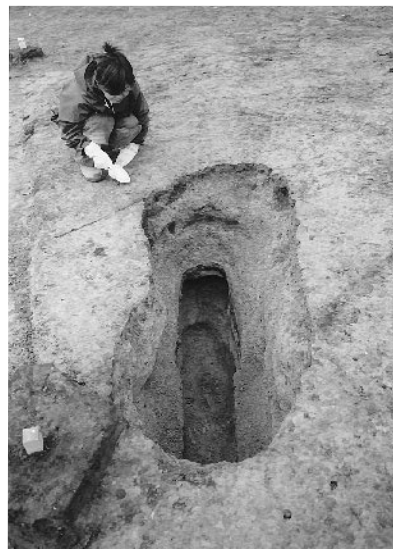
2. TP-44 土層断面(東から)



3. TP-44 土層断面(東から)



4. TP-46土層断面 (南東から)



5. TP-46 完掘 (西から)



6. TP-47 土掘断面(南から)



7. TP-47 完掘 (南から)



8. TP-42 土層断面(東から)



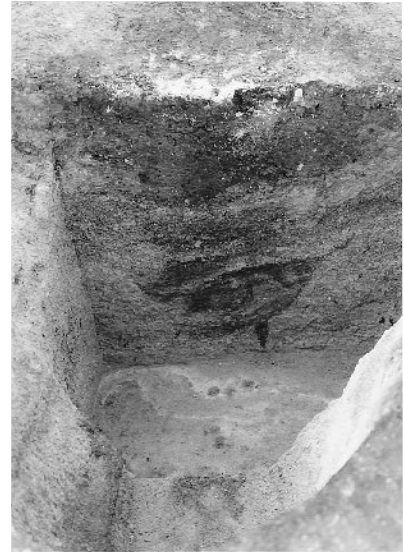
9. TP-48 完掘 (東から)



1. TP-49 土層断面 (南西から)



2. TP-49 完掘 (北東から)



3. TP-50 土層断面(北東から)



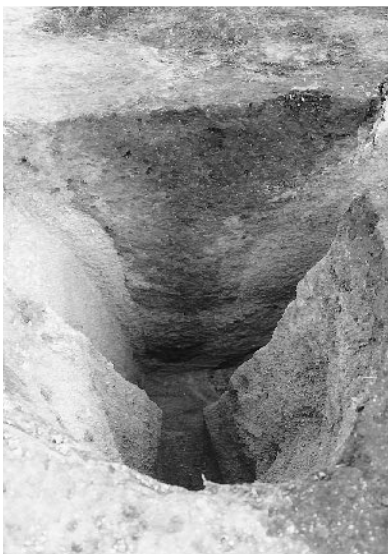
4. TP-50 完掘 (南西から)



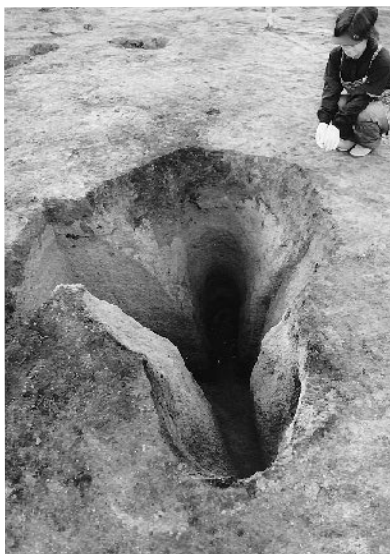
5. TP-50 杭跡 (南西から)



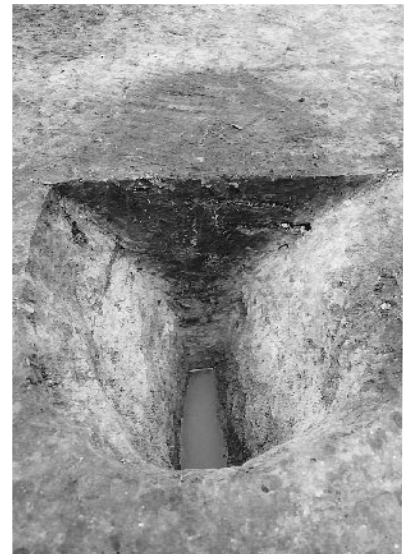
6. TP-50 杭跡断面(南東から)



7. TP-53 土層断面 (南西から)



8. TP-53 完掘 (北東から)



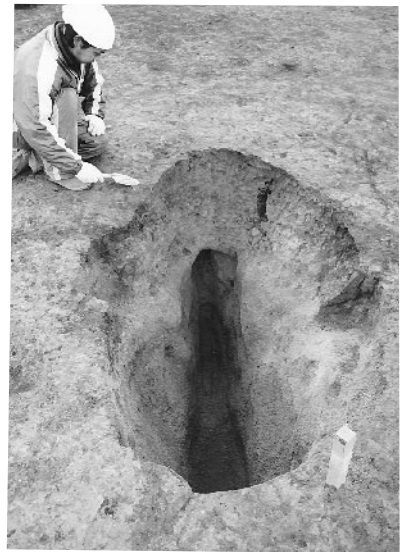
9. TP-54 土層断面(東から)



1. TP-54 完掘 (東から)



2. TP-55 土層断面 (北東から)



3. TP-55 完掘 (北東から)



4. TP-56 土層断面 (東から)



5. TP-56 完掘 (東から)



6. Tピット配列状況 (東から)



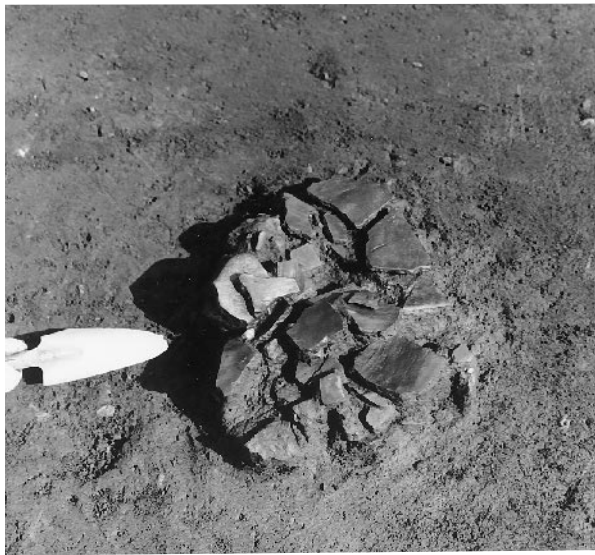
7. Tピット配列状況 (北から)



1. 町道部分調査風景（西から）



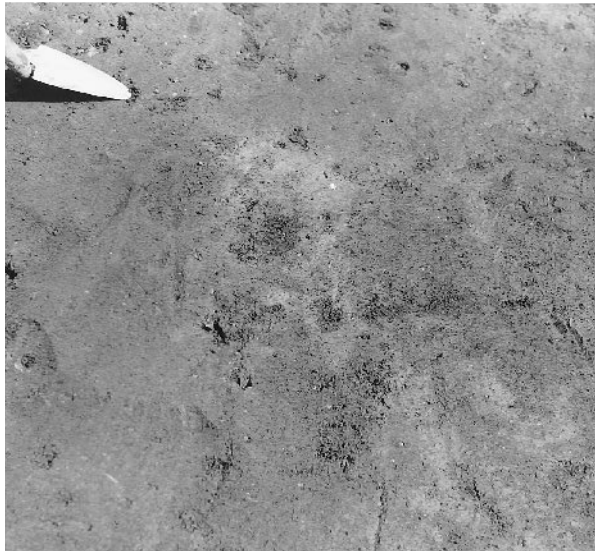
2. 町道部分調査風景（南西から）



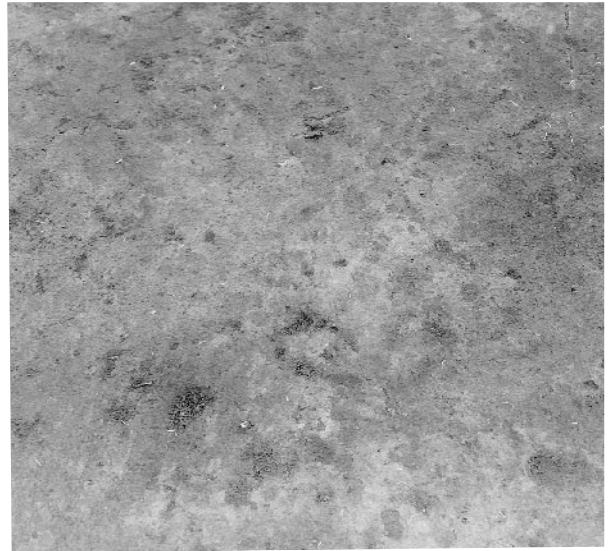
1. V層下位遺物出土状況（西から）



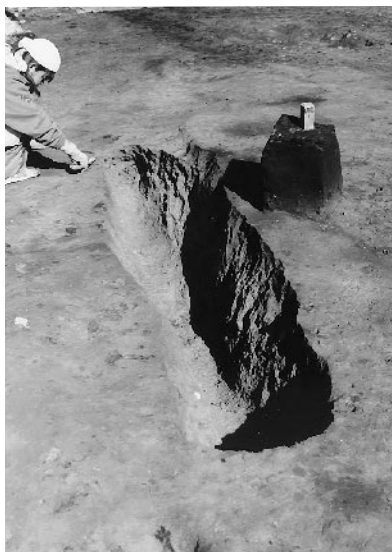
2. V層下位遺物出土状況（西から）



3. F-53 検出（西から）



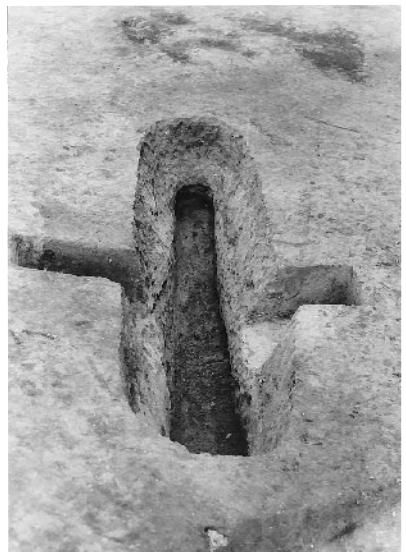
4. F-59 検出（西から）



5. TP-18 完掘（南から）



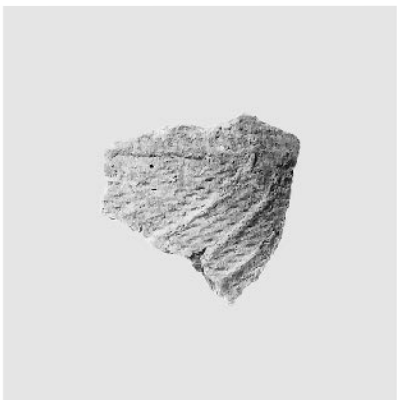
6. TP-52 完掘（北から）



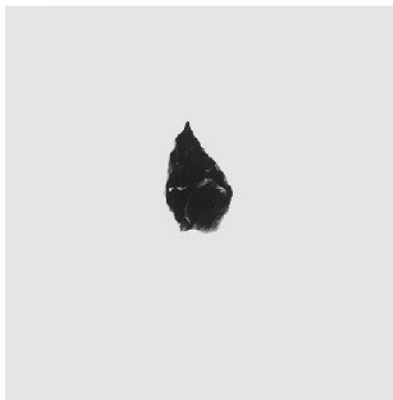
7. TP-57 完掘（南東から）



1. TP-33 出土の石器



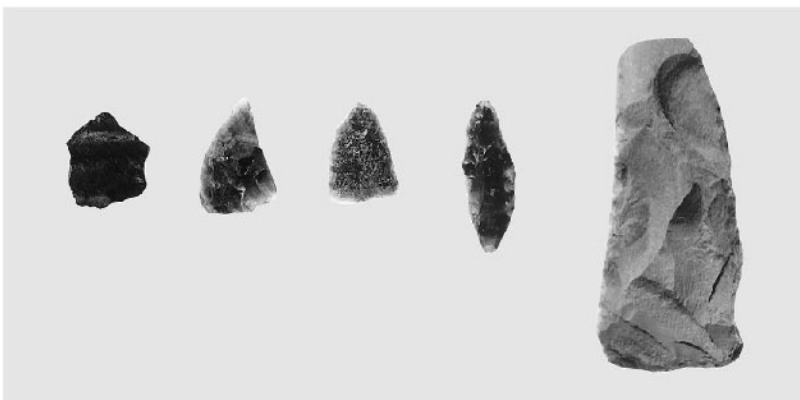
2. TP-35 出土の土器



3. TP-36 出土の石器



4. TP-55 出土の土器



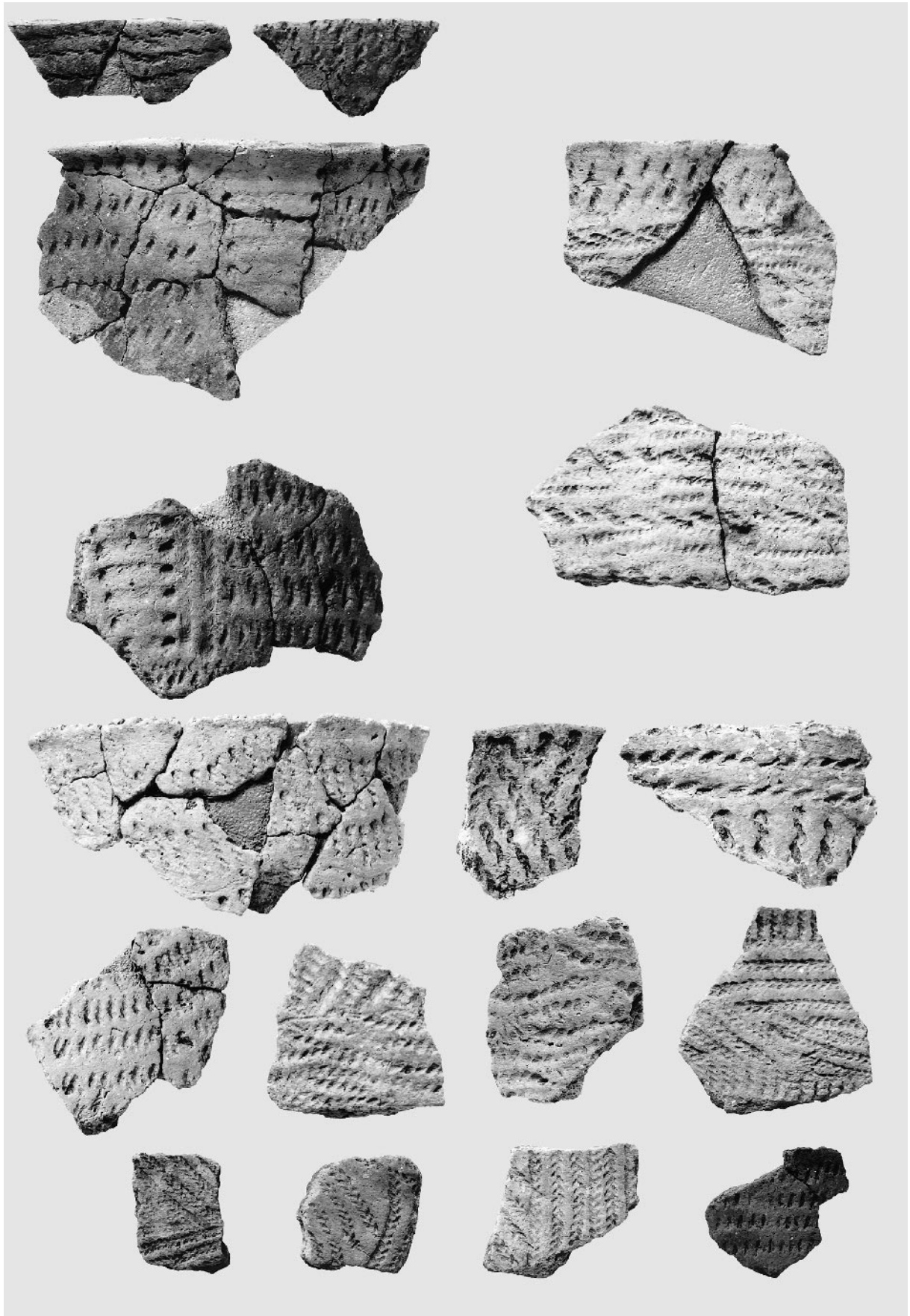
5. F-54 出土の遺物



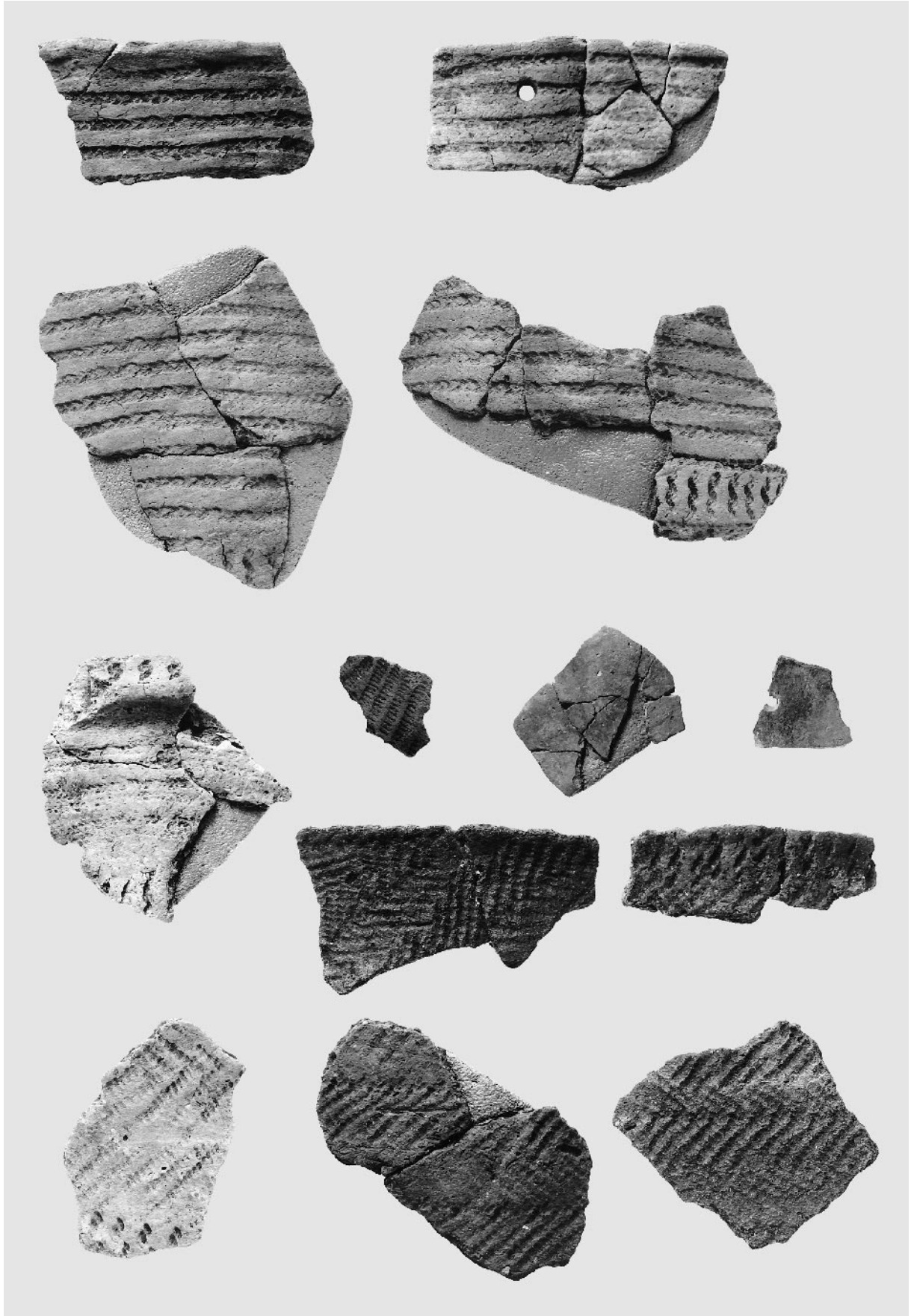
6. 包含層出土の復元土器 (図V-24-2)



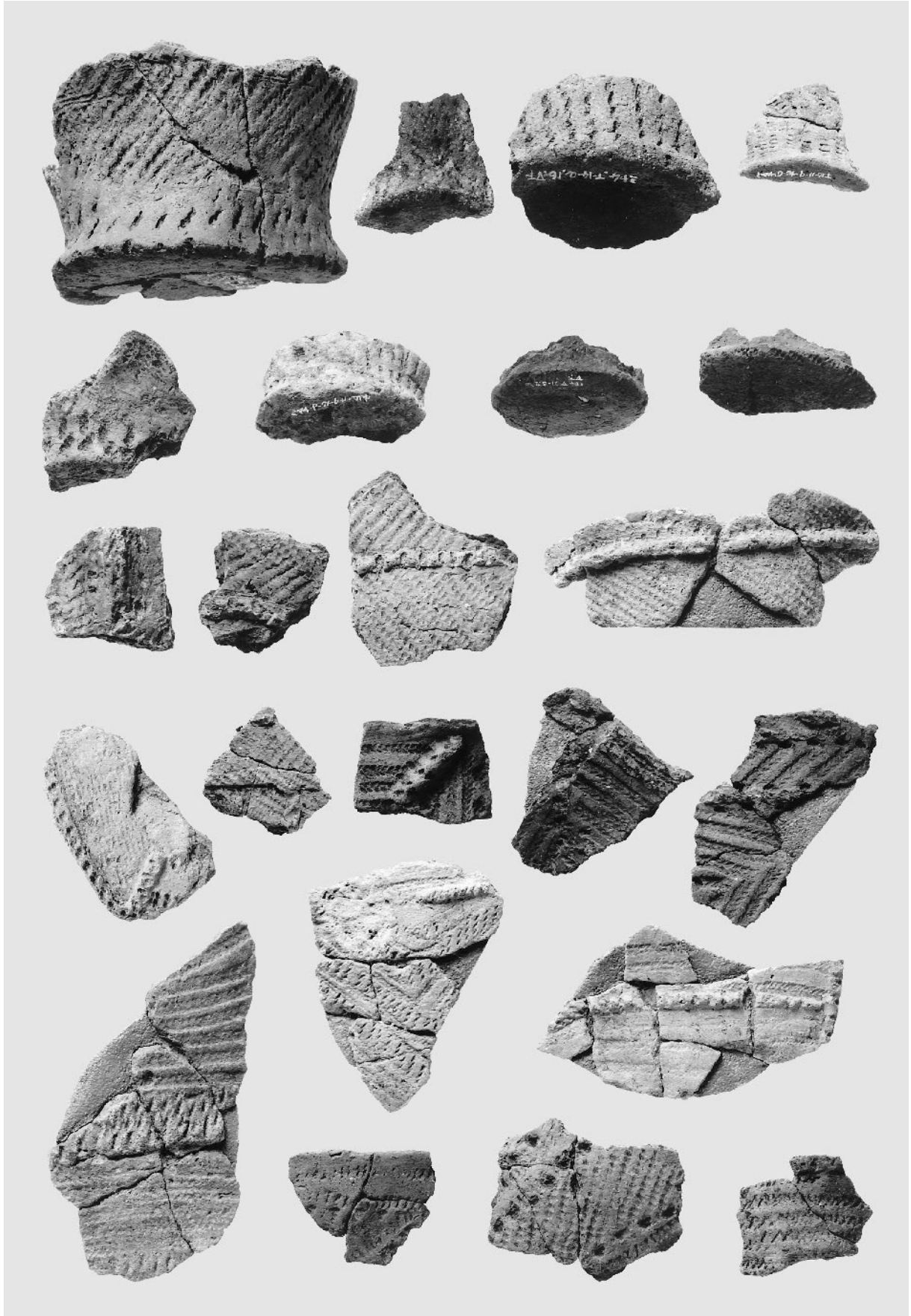
7. 包含層出土の復元土器 (図V-24-1)



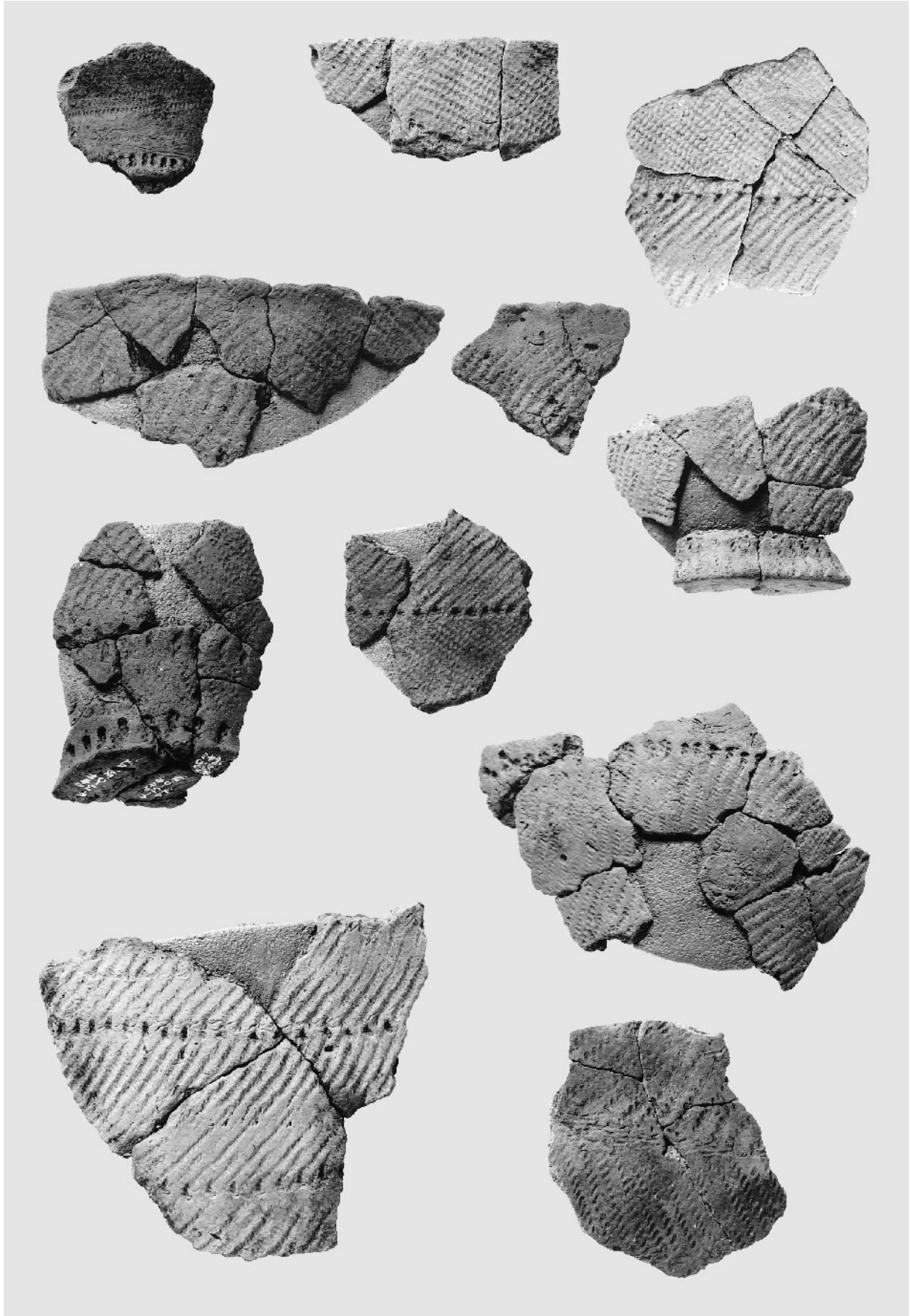
1. 包含層出土の土器 (1)



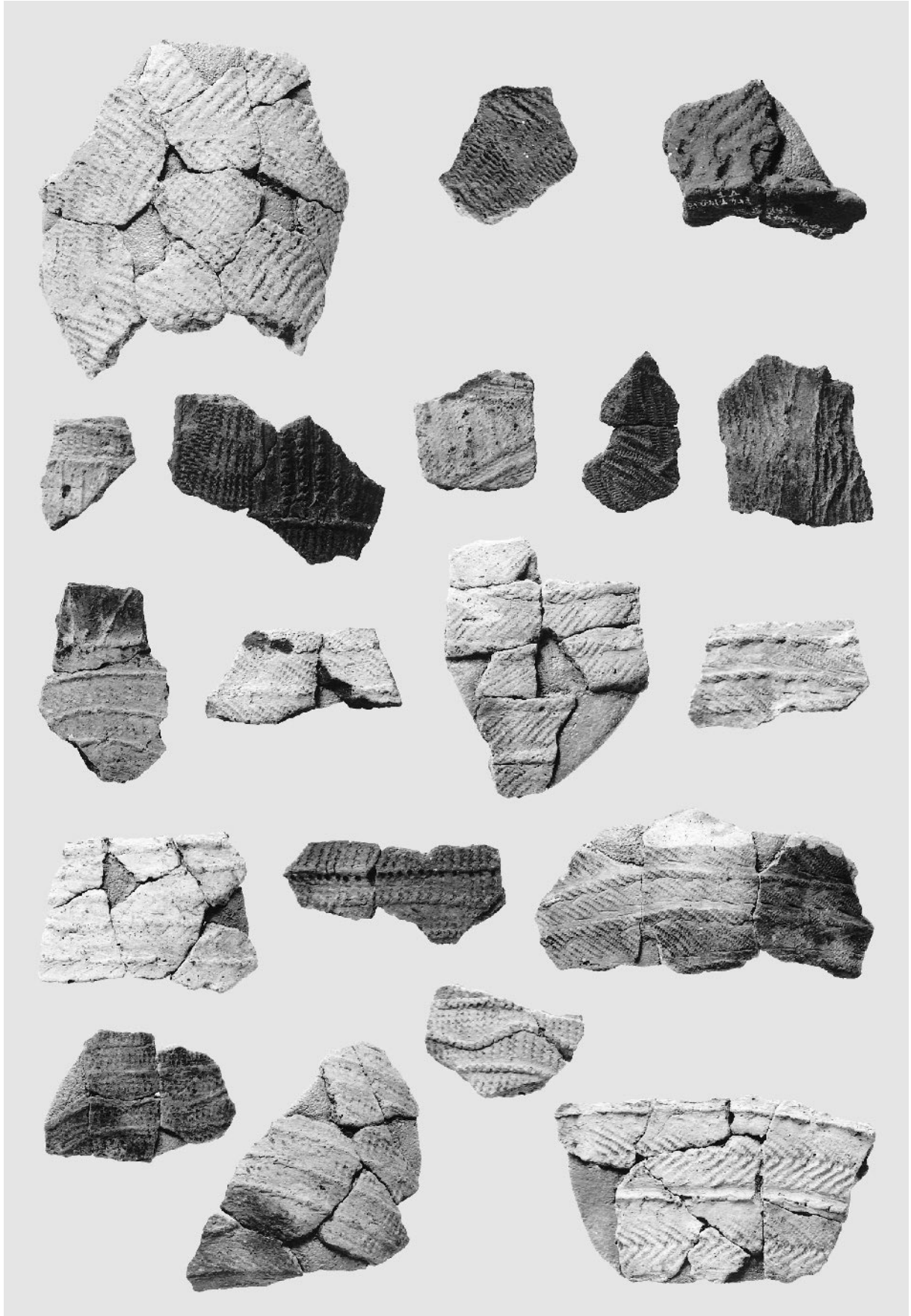
1. 包含層出土の土器 (2)



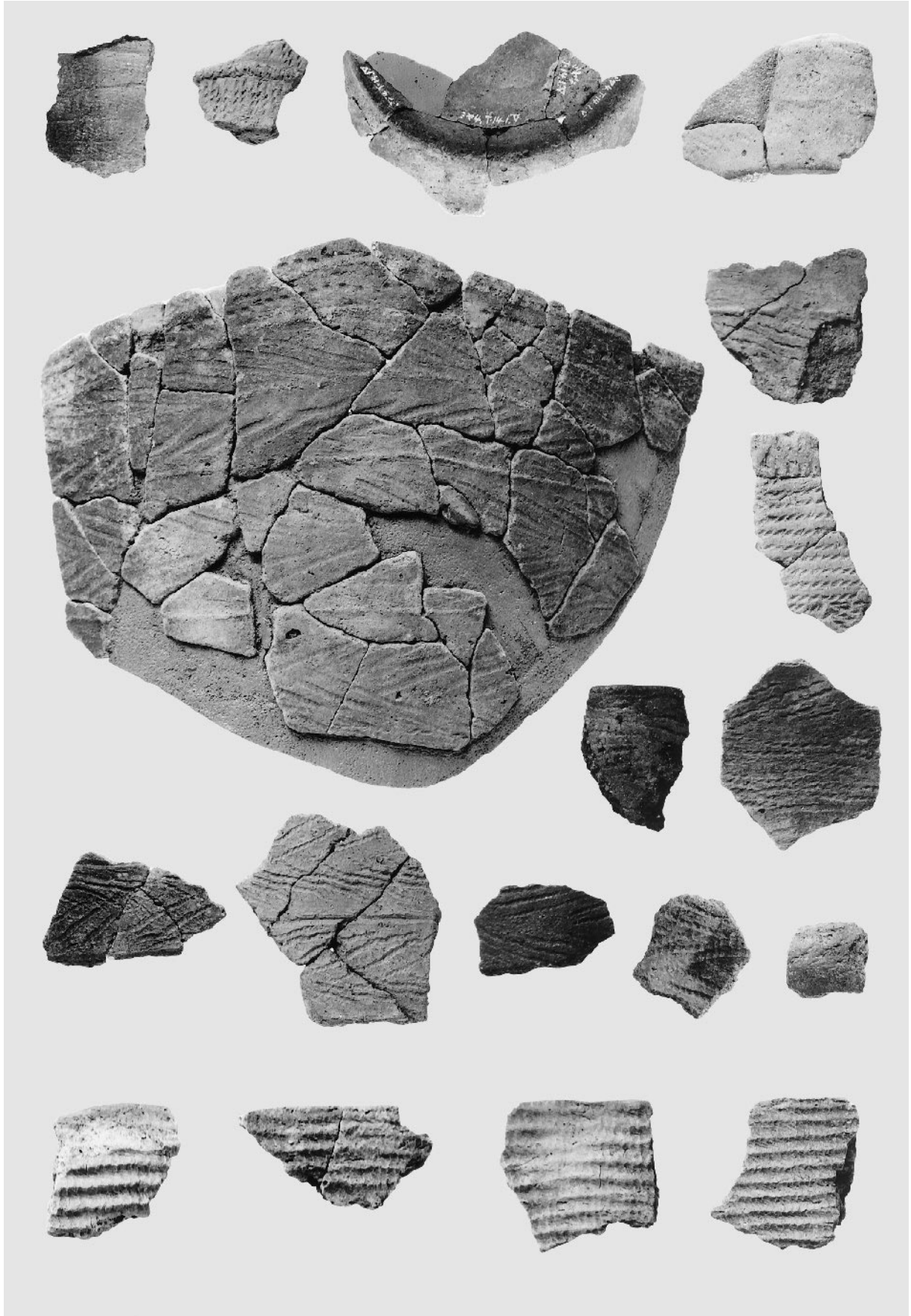
1. 包含層出土の土器 (3)



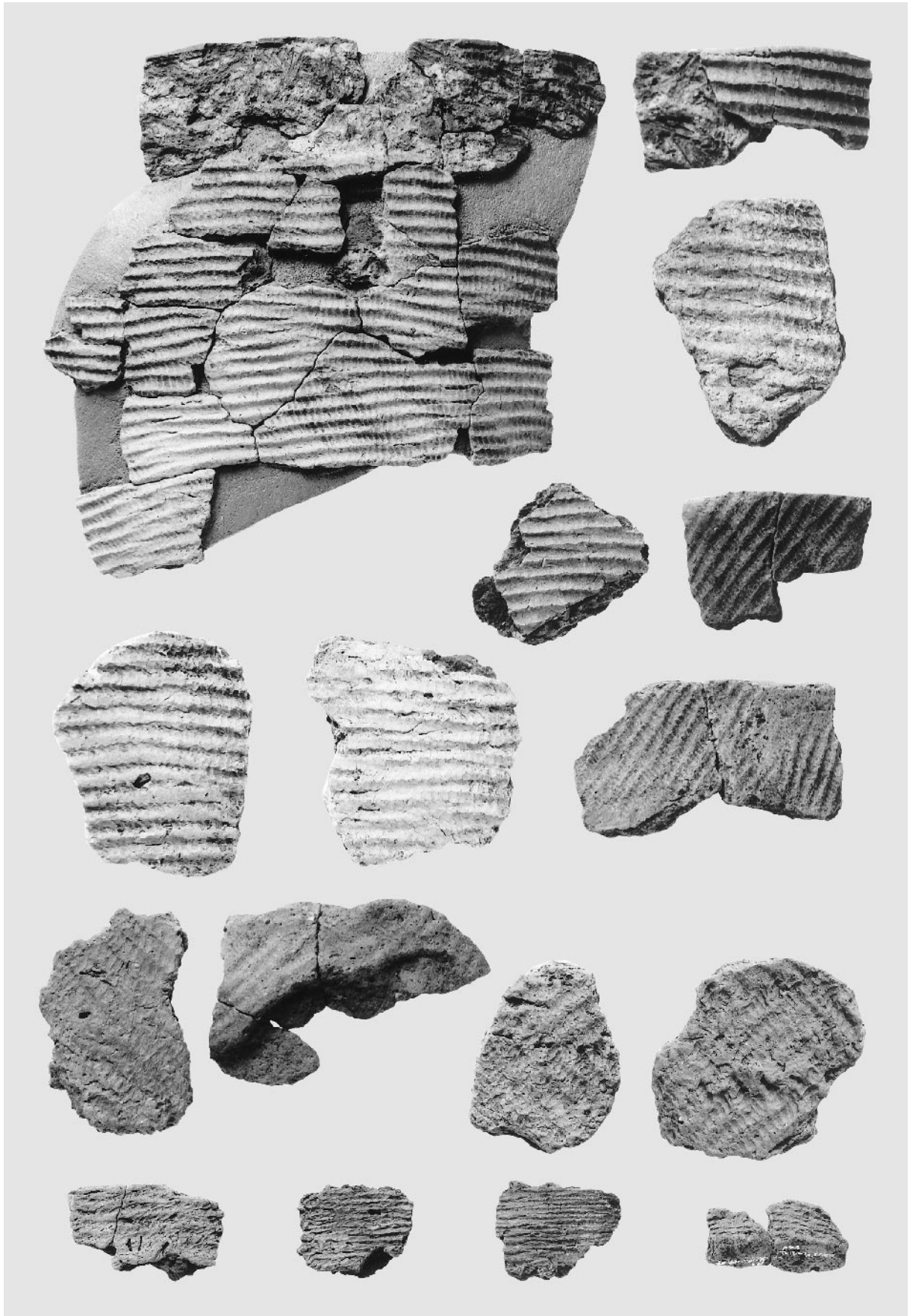
1. 包含層出土の土器 (4)



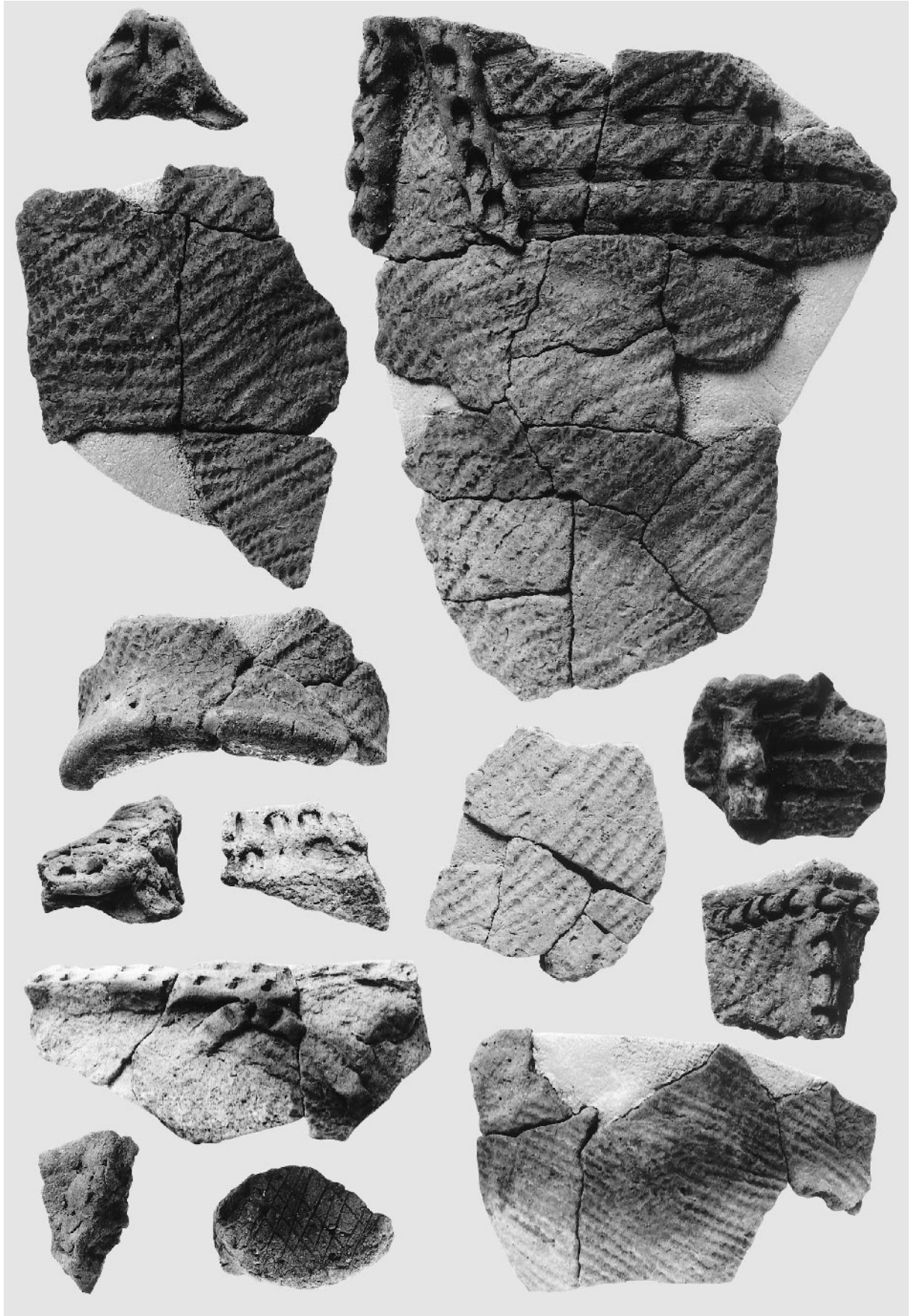
1. 包含層出土の土器 (5)



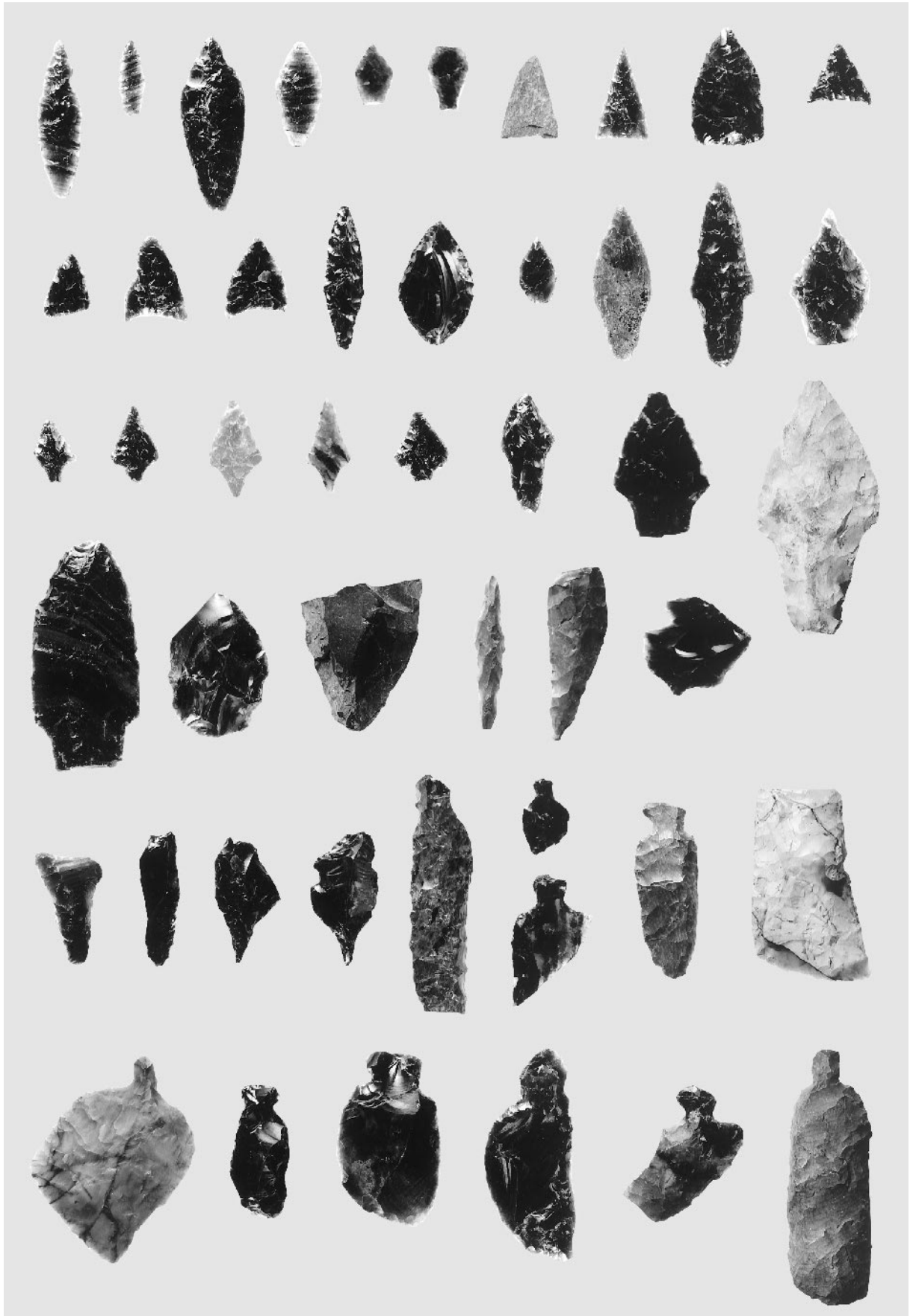
1. 包含層出土の土器 (6)



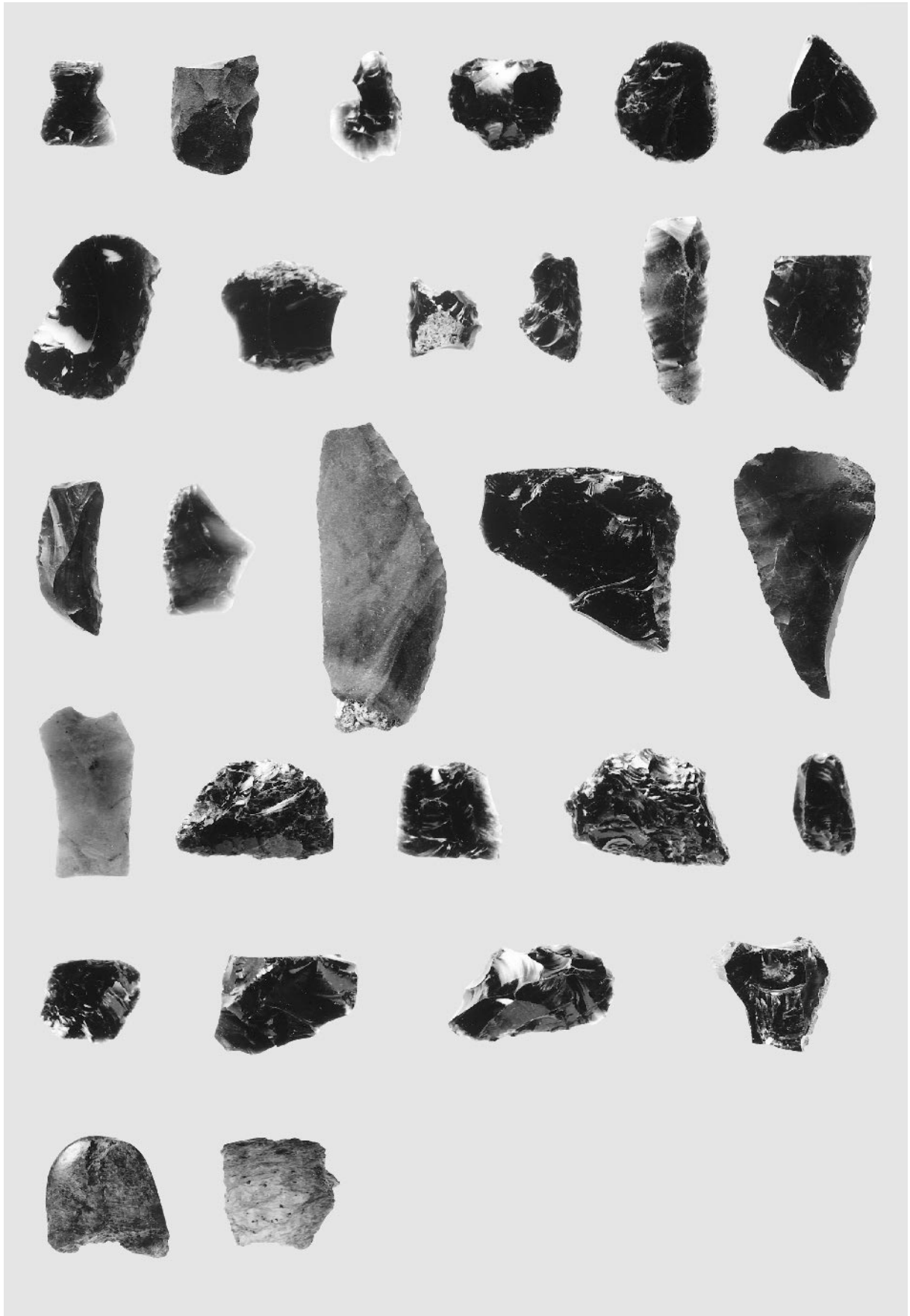
1. 包含層出土の土器 (7)



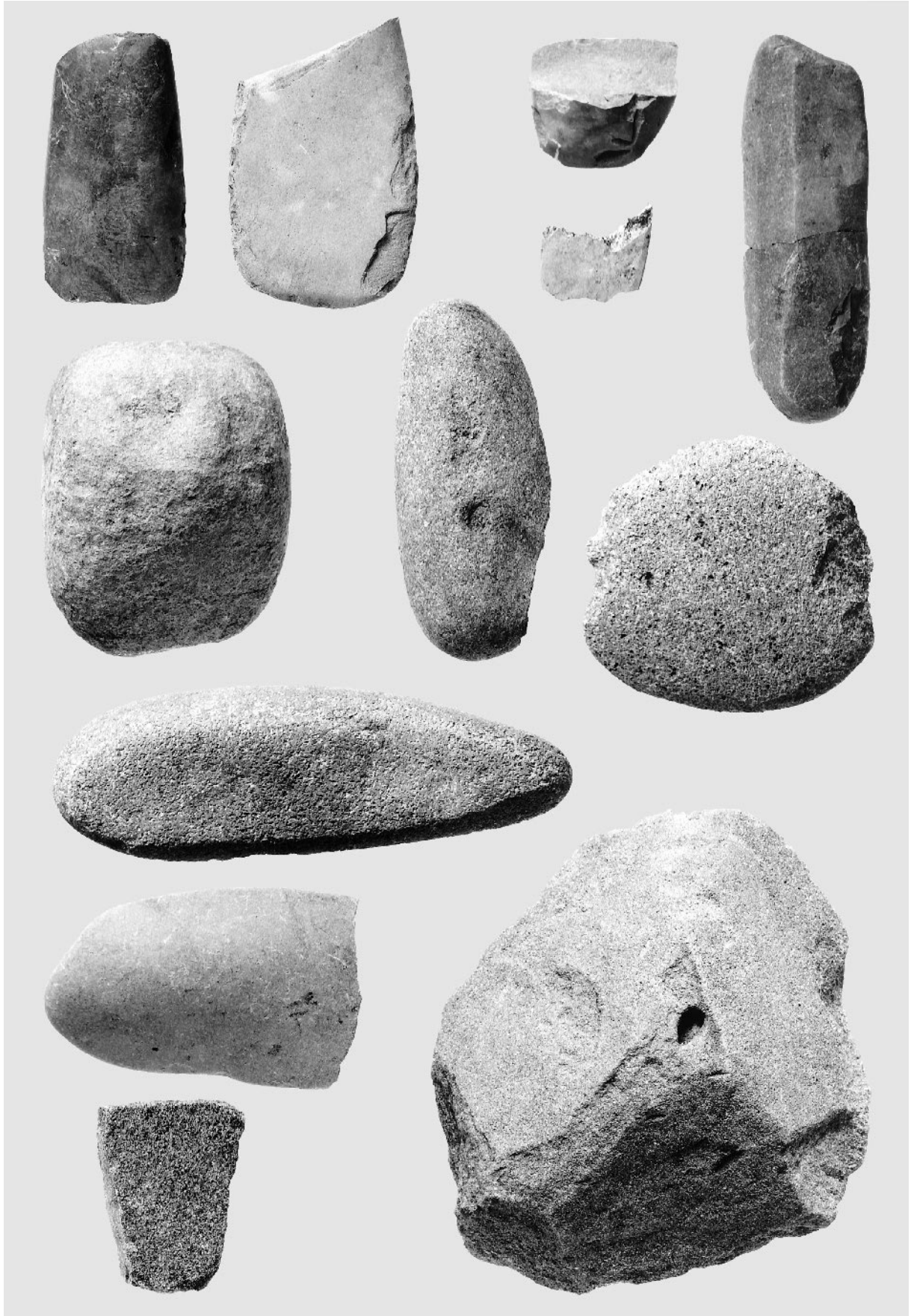
1. 包含層出土の土器 (8)



1. 包含層出土の石器 (1)



1. 包含層出土の石器 (2)



1. 包含層出土の石器 (3)

引用・参考文献

- 青柳文吉 1988「北海道出土のヒスイ製玉について」『北海道考古学』24
- 赤石慎三 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ』苫小牧市教育委員会
- 赤石慎三・中岡利泰 2000『油駒遺跡』えりも町教育委員会
- 稲葉勝男 1961「鵠川流域の遺跡遺物について」『北海道地方史研究』43号
- 上屋純一・佐藤幾子 1998『カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』
恵庭市教育委員会 1989『ユカンボシE 8遺跡』
- 遠藤龍敏 2000『南の里2遺跡・南の里14遺跡・南の里15遺跡』北広島市教育委員会
- 犬養哲夫 1952「北海道の鹿とその興亡」『北方文化研究報告』7
- 今村啓爾 1983「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究2 生業』雄山閣
- 宇田川洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
- 大泉博嗣 1987「第2節 遺構の分類 落とし穴」『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会
- 扇谷昌康 1977『鵠川町遺跡分布調査報告書』鵠川町教育委員会
- 扇谷昌康 1979『日高門別の先史遺跡』門別町教育委員会
- 扇谷昌康・島田健一 1988『沙流郡のアイヌ語地名Ⅰ』門別町郷土史研究会
- 大島直行・瀬川拓郎 1982『札内台地の縄文時代集落址』登別市教育委員会
- 大泰司 統 2002「切り合うTピット」『北海道考古学』38
- 大沼忠春 1981 a 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66-4
- 大沼忠春 1981 b 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』17
- 大沼忠春 1986 a 「道南の縄文前期土器群の編年について（Ⅱ）」『北海道考古学』22
- 大沼忠春 1986 b 「施文原体の変遷—東釧路式土器」『季刊考古学』17 雄山閣
- 大沼忠春 1989「北筒式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 大沼忠春 1993「北海道東部の円筒土器文化」『考古学ジャーナル』362
- 大場利夫・扇谷昌康 1964「勇払郡鵠川遺跡」『北方文化研究報告』19
- 大橋 毅・西澤千鶴ほか 2000『芽室町 小林遺跡—第5次発掘調査報告書—』芽室町教育委員会
- 川内 基 1995『西舎6遺跡発掘調査概要報告書』浦河町教育委員会
- 川内谷 修 1995『ペサウンコツ遺跡Ⅱ』門別町教育委員会
- 川内谷 修 1998『シノタイⅡ遺跡』門別町教育委員会
- 工藤肇・兵藤千秋ほか 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』苫小牧市教育委員会
- 小島朋夏 1999「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』35
- 小山正忠・竹原秀雄 1997『新版標準土色帖 1997年度版』
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985『ユオイチャシ遺跡・ポロモイチャシ遺跡・二風谷遺跡』北埋調報 26
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1987『千歳市 ママチ遺跡Ⅲ』北埋調報 36
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1988『パンケナイ川流域の遺跡群Ⅱ』北埋調報 44
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1989 a 『深川市 納内6丁目付近遺跡』北埋調報 55
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1989 b 『美沢川流域の遺跡群Ⅺ』北埋調報 58
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町 栄町5遺跡』北埋調報 66
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1991『美沢川流域の遺跡群Ⅻ』北埋調報 69
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1992『美沢川流域の遺跡群Ⅼ』北埋調報 77
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1993『美沢川流域の遺跡群Ⅽ』北埋調報 83
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1994『千歳市オサツトー1遺跡・キウス7遺跡』北埋調報 90
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 a 『パンケナイ川流域の遺跡群Ⅲ』北埋調報 95
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 b 『千歳市 オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』北埋調報 96
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996『千歳市 キウス7遺跡(3)』北埋調報 105
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 a 『千歳市 キウス5遺跡(6) B地区・C地区』北埋調報 126
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 b 『千歳市 キウス7遺跡(5)』北埋調報 127
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 c 『恵庭市 ユカンボシE 10遺跡』北埋調報 129

- (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 a 『千歳市 ユカンボシE 7 遺跡』北埋調報 132
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 b 『千歳市 ユカンボシC 15 遺跡 (2)』北埋調報 133
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 c 『千歳市 キウス4 遺跡 (4) A 2 地区』北埋調報 135
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2001 a 『千歳市 キウス4 遺跡 (7) Q 地区』北埋調報 152
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2001 b 『鶴川町 米原3 遺跡・宮戸3 遺跡・米原4 遺跡』北埋調報 153
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2001 c 『千歳市 キウス4 遺跡 (8) F 地区・G 地区』北埋調報 157
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 a 『鶴川町 宮戸4 遺跡』北埋調報 168
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 b 『白老町 虎杖浜2 遺跡 (2)』北埋調報 172
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2002 c 『千歳市 チブニー1 遺跡・チブニー2 遺跡』北埋調報 173
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 a 『千歳市 キウス4 遺跡 (9)』北埋調報 180
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 b 『鶴川町 米原4 遺跡 (2)・宮戸4 遺跡 (3)』北埋調報 185
- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 c 『厚真町 浜厚真3 遺跡』北埋調報 186
- 佐々木利和編・山田秀三監修 2000 『北海道の地名—アイヌ語地名の研究— 別巻』草風館
- 札幌市教育委員会 1975 『札幌市文化財調査報告書Ⅺ』
- 佐藤一夫ほか 1976 『植苗貝塚』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・宮夫靖夫ほか 1984 『タプコプ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・宮夫靖夫ほか 1988 『ショップ遺跡』三石町教育委員会
- 佐藤一夫・宮夫靖夫ほか 1995 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・宮夫靖夫ほか 1998 『柏原27・ニナルカ・静川5・6 遺跡』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1986 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1987 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1990 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1992 『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤肇ほか 1997 『柏原5 遺跡』苫小牧市教育委員会
- 佐藤孝則 1983 「北海道における溝状ピットの自然科学的検討」『十勝考古』6
- 佐藤孝則 1986 「動物生態学からみた溝状ピットの機能」『北海道考古学』22
- 佐藤宏之 2000 『北方狩猟民の民族考古学』北海道出版企画センター
- 佐藤宏之 1998 「陥し穴の土俗考古学」『縄文式生活構造』同成社
- 更科源蔵 1966 『アイヌ語地名解—北海道地名の起源—』北書房
- 鈴木道之助 1991 『石器入門事典—縄文—』柏書房
- 高橋 理・田村俊之 1990 『イヨマイ6 遺跡における考古学的調査 (2)』千歳市教育委員会
- 高橋 理 1996 「余市式土器再考」『北海道考古学』32
- 高橋正勝・直井孝一ほか 1982 『萩ヶ岡遺跡』江別市教育委員会
- 竹田輝夫・大島秀俊ほか 1997 『大谷地貝塚と五十嵐鐵—余市式土器をめぐって—』小樽先史懇話会
- 田才雅彦 2001 『豊川1 遺跡』厚真町教育委員会
- 田才雅彦・宗像公司ほか 2002 『米原5 遺跡』鶴川町教育委員会
- 谷岡康孝・小柳リラコ 1996 『夕張市 十三哩遺跡・滝の上4 遺跡』北海道文化財保護協会
- 田村俊之・高橋 理ほか 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会
- 鶴丸俊明・豊原熙司 1989 『北海道平取町 イルエカシ遺跡』平取町教育委員会
- 鶴丸俊明・川内 基 1990 『北海道平取町 額平川2 遺跡』平取町教育委員会
- 戸刈賢二・土屋 篁 2000 『北海道の石』北海道大学図書刊行会
- 土肥研晶 1996 『川端遺跡・川端2 遺跡』由仁町教育委員会
- 永田方正 1984 『初版 北海道蝦夷語地名解』復刻版 草風館
- 並木正男・林雅彦 1998 「有孔垂玉の分析報告書」『大船C 遺跡』南茅部町教育委員会
- 西 幸隆 1996 「東釧路Ⅲ式」『日本土器事典』雄山閣
- 西田 茂 1993 「ふたたび東釧路Ⅱ式土器について」『考古論集』潮見 浩先生退官記念論文集
- 西田 茂 1995 「東釧路Ⅱ式土器について」『北海道考古学』31
- 西脇対名夫・宗像公司 2001 『鯉沼2 遺跡』厚真町教育委員会
- 野村崇・宇田川洋編 2001 『新北海道の古代1 旧石器・縄文文化』北海道新聞社

長谷川徹 1987『エサンヌップ4遺跡』門別町教育委員会
 長谷山隆博・阿部千春 1989『エサンヌップ2遺跡・エサンヌップ3遺跡』門別町教育委員会
 番場猛夫 1972「北海道のいわゆる「日高ヒスイ」について」『鉱山地質』22
 番場猛夫 1980「北海道日高千栄クロム透輝石ヒスイ」『宝石学会誌』Vol. 7 No. 1
 日高山脈館 2001『日高山脈館運営事業報告書』第2号
 兵藤千秋 2001『北海道勇払郡鶴川町 米原3遺跡』鶴川町教育委員会
 ペドロジスト懇談会編 1984『土壌調査ハンドブック改訂版』
 北海道立地下資源調査所 1984『北海道鉱物誌』
 前田正憲 1991『ショップ遺跡』三石町教育委員会
 松浦武四郎著・高倉新一郎校訂・秋葉實解説 1985「武加和誌 上・中・下」『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中』北海道出版企画センター
 松浦武四郎著・秋葉實解説 1988「附録 東西蝦夷山川地理取調図編輯 川筋取調図」『武四郎蝦夷地紀行』北海道出版企画センター
 町田 洋・新井房夫 2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会
 松谷純一 1992『中島松1遺跡・南島松4遺跡・南島松3遺跡・南島松2遺跡』恵庭市教育委員会
 宮島 宏 2003「ひすいを科学する」『ヒスイ文化フォーラム2003』
 宮夫靖夫 1999「東釧路式土器の分類と編年について」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』1
 宮夫靖夫 2000「苫東遺跡群における集落の様相」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』2
 宮夫靖夫 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群VI』苫小牧市教育委員会
 宮夫靖夫・工藤肇ほか 2002 a『苫小牧東部工業地帯の遺跡群VII』苫小牧市教育委員会
 宮夫靖夫・工藤肇ほか 2002 b『苫小牧東部工業地帯の遺跡群X』苫小牧市教育委員会
 鶴川町史編纂委員会 1987『鶴川町史』鶴川町
 目黒吉明 1995「住居の炉」『縄文文化の研究8 社会・文化』雄山閣
 森岡健治・長田佳宏 1999『平取桜井遺跡』平取町教育委員会
 森岡健治・長田佳宏 2002『シリ3遺跡』平取町教育委員会
 森田知忠・遠藤香澄 1984「Tピット論」『北海道の研究1 考古篇I』清文堂
 森 秀之 1997『カリンバ4遺跡』恵庭市教育委員会
 森 秀之 1999『カリンバ4遺跡』恵庭市教育委員会
 山田秀三 1972『北海道の川の名』増補版 モレウ・ライブラリー
 吉田正明 1999『西舎5遺跡発掘調査概要報告書』浦河町教育委員会
 渡辺俊一・工藤肇ほか 1992『静川37遺跡』苫小牧市教育委員会
 渡辺俊一 1997『恵庭市 ユカンボシE10遺跡』恵庭市教育委員会
 藁科哲男・東村武信 1987「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要』第6号
 藁科哲男・東村武信 1994 a「朝日山遺跡出土の玉類の産地分析」『朝日山遺跡III』青森県教育委員会
 藁科哲男・東村武信 1994 b「大川遺跡出土の硬石製勾玉の産地分析」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
 藁科哲男・東村武信 1996「美々4遺跡出土の玉類の産地分析」『調査年報』8（財）北海道埋蔵文化財センター
 藁科哲男 1996「滝里4遺跡出土の磨製石器の原材料の蛍光X線分析による非破壊定性分析結果」『滝里遺跡群VI』（財）北海道埋蔵文化財センター
 藁科哲男 1999「三内丸山遺跡出土ヒスイ製玉類、玉材の産地分析」『史跡三内丸山遺跡年報』3
 藁科哲男 2001「平和遺跡出土ヒスイ製石斧形垂飾の産地分析」『浦幌町立博物館紀要』創刊号

報告書抄録

ふりがな	むかわちよう よねはらよんいせきさん みやとよんいせきさん							
書名	鷓川町 米原4遺跡(3)・宮戸4遺跡(3)							
副書名	日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第202集							
編著者名	遠藤香澄・笠原 興・芝田直人・福井淳一・山中文雄							
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL 011-386-3231							
発行年月日	西暦2004年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "			
よねはらよんいせき 米原4遺跡	ほっかいどうゆうふつぐんむかわちよう 北海道勇払郡鷓川町 あぎよねはら 字米原400-5ほか	01582	J-14-42	42° 33' 43"	141° 59' 3"	20040801 ~ 20041031	1,090	
みやとよんいせき 宮戸4遺跡	ほっかいどうゆうふつぐんむかわちよう 北海道勇払郡鷓川町 あぎみやと 字宮戸180-1ほか	01582	J-14-40	42° 33' 56"	141° 59' 3"	20040801 ~ 20041031	5,940	高規格道路 建設に伴う 事前調査
はまあつまさんいせき 浜厚真3遺跡	ほっかいどうゆうふつぐんあつまちよう 北海道勇払郡厚真町 あぎはまあつま 字浜厚真525-1ほか	01581	J-13-72	42° 36' 36"	141° 51' 37"	20040414 ~ 20040418	414	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
米原4遺跡	遺物包含地	縄文時代 中期・前期・早期	土壇 2 Tピット 1 焼土 25 集石 1	縄文土器 5,345点(東釧路Ⅲ式、コッタロ式、綱文式、春日町式、柏木川式、北筒式、余市式、タブコブ式) 石器等 10,954点(石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、ピエス・エスキューユ、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石・石皿、礫・礫片、フレイク、焼成粘土塊、土製品)				
宮戸4遺跡	遺物包含地	縄文時代 早期・前期・中期	Tピット 32 焼土 15	縄文土器 5,590点(東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式、綱文式、天神山式) 石器等 8,252点(石鏃、石錐、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、ピエス・エスキューユ、石核、石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、砥石、石錘、礫・礫片、フレイク、石製品)				
浜厚真3遺跡	遺物包含地	縄文時代 後期	Tピット 17	縄文土器		Tピット群		

附編 厚真町浜厚真3遺跡の調査

1 調査要項

事業名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

調査者：北海道教育委員会

遺跡名：厚真3遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-13-72）

所在地：勇払郡厚真町字浜厚真525-3

調査面積：414 m²

調査期間：平成15年4月14日～4月18日

整理期間：平成15年12月1日～平成16年2月28日

2 調査体制

調査主体 北海道教育委員会 教育長 相馬 秋夫

調査員	北海道教育庁生涯学習部文化課文化財調査グループ	主査	長沼 孝	（発掘担当者）
	同	主任	藤原 秀樹	（発掘担当者）
	同	主任	宗像 公司	（発掘担当者）

調査協力者（財）北海道埋蔵文化財センター 第1調査部第4調査課 文化財保護主事 山中 文雄
厚真町教育委員嘱託職員 乾 哲也

作業員 6人

3 調査に至る経緯

日高自動車道は苫小牧市から浦河町に至る延長120kmの高規格幹線道路で、昭和63年に着工され、平成10年10月には苫小牧ICから沼ノ端ICを通り厚真ICまでが開通し、その後はその先の鶴川ICまでの供用開始に向けた工事が行われていた（平成15年8月に鶴川ICまで供用開始）。

日高自動車道関係の埋蔵文化財保護のための事前協議書は、平成5年6月に北海道開発局室蘭開発建設部から北海道教育委員会に提出された。それを受けた北海道教育委員会は、同年8月に所在調査を実施し、さらに平成8年8月以降、厚真町、鶴川町、門別町の遺跡について試掘調査を行った。

浜厚真3遺跡における試掘調査は、平成8年8月、平成13年6月に北海道教育委員会によって実施され、その結果、約2,600m²の埋蔵文化財包蔵地が確認された。工事計画の変更が困難なため、平成15年に（財）北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、記録保存することとしていた。しかし、平成14年7月に調査計画の変更を行わなければならない事態が生じ、浜厚真3遺跡の発掘調査を実施することとなった。また、調査面積は当初2,600m²であったが、Tピット群の広がり確認され、最終的には3,390m²の調査が行われた。しかし、調査期間内に調査区内の電柱の移設を行うことができず、一部未調査区域が残ることとなった。未調査区域については、平成15年度に埋文センターが行うこととしていたが、工事工程上発掘調査を平成15年4月中に終了しなくてはならない事態となり、室蘭開発建設部と北海道教育委員会が協議した結果、埋文センターの協力を得て北海道教育委員会が調査を実施することとなった。

なお、埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知（文化財保護法第57条の3）は、平成15年4月1日付けで室蘭開発建設部長から提出されている。

4 調査概要

(1) 発掘区の設定

発掘区は平成14年度に設定したものを復元した。平成14年度の発掘区は、道路本線の2点の側点を基準点として設定されたもので、北東-南西方向のラインをアルファベットの大文字、北西-南東方向のラインを数字で示した(北埋調報186)。発掘区の区画は5m四方で、呼称は北西隅のライン交点で示した。例えばMラインと35ラインの交点の南東側がM35区ということになる。平成14年度の調査は、ラインで示すとD~Q、25~48の範囲で、今回の調査はH~Q、32~36の範囲である。

調査時の発掘区復元は、まず未調査区域に残存していたN35、J35の杭を基準に既調査区域に36ラインのH~Pを打設し、その後、調査の進行やTピットの確認状況に応じて必要な区域に杭またはピンポールを設置する形とした。

なお、層位については昨年度調査時のものをそのまま用いている。

(2) 調査・整理の方法

調査は、まず平成14年度調査時に確認して調査未了となっていた3基のTピット(TP-94・136・137)の位置と状況を確認し、調査手順を検討することから始めた。前述したように未調査区域に残存していた杭を基準に発掘区復元に必要な杭を打設してから重機による表土などの除去を行った。Tピットの構築面はVa層の黒色土中と考えられるが、効率よい確認を行うため、表土からVI層ないしVII層の上面までを重機で除去した。また、重機による表土等の除去は、確認済のTピットの位置と地形を考えて、



図1 遺跡の位置

(国土地理院発行の5万分の1地形図「鶴川(平成11年)」を複製して縮小)

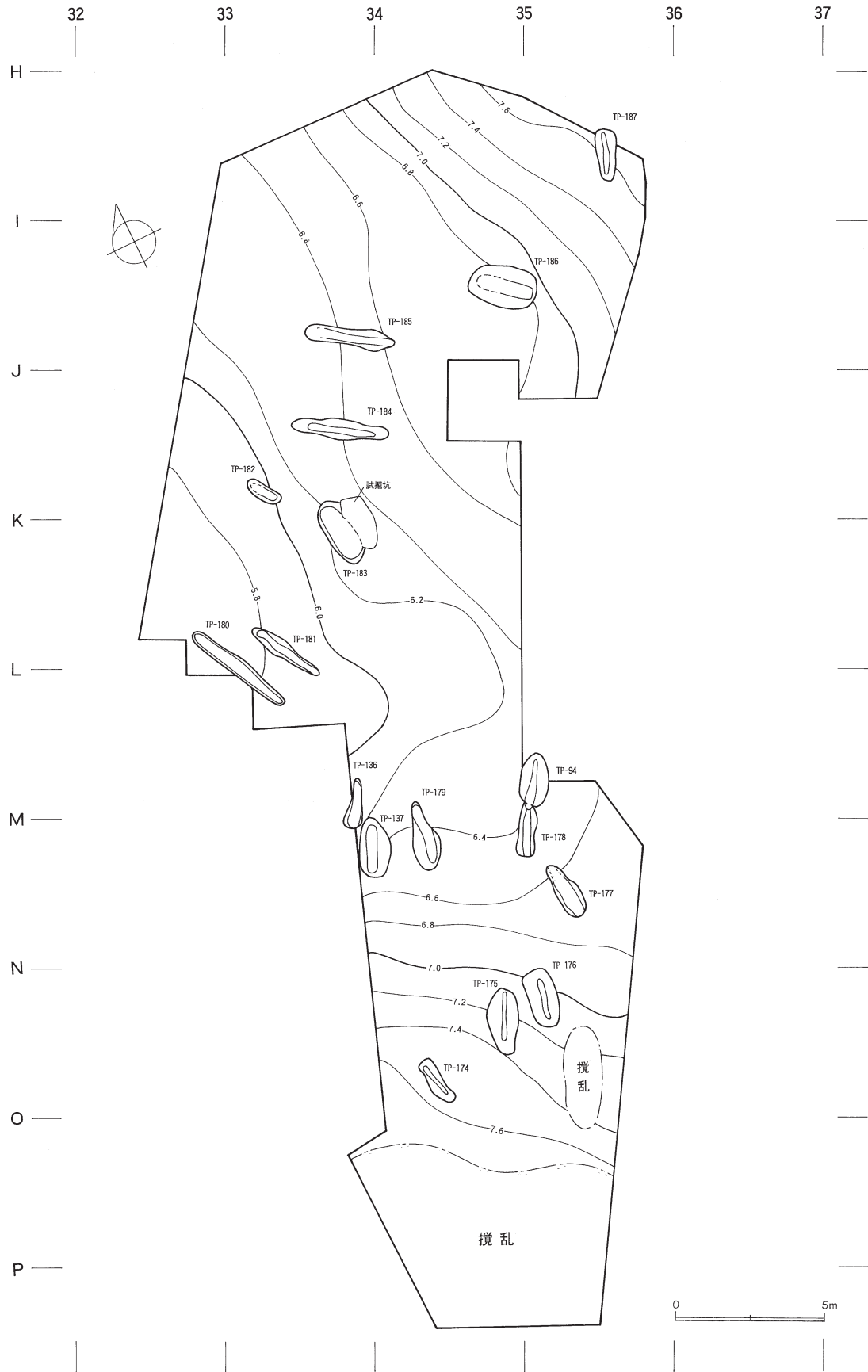


図2 遺構配置図(1)

Mラインを境にH～M（南側）とM～P（北側）の二つのブロックに分けて調査を進めた。南側はMライン付近の確認済3基のTピットを傷めないように配慮して、表土等除去の排土を西側に移動しながら調査区外に運搬した。北側も南側同様に西側に排土を運搬した。当初、調査は南側M～Pラインと北側J～Hラインの離れた小山状のブロック部分だけであったが、重機による表土等の除去を進める中で、J～LラインでもTピットが確認されたので、結果的に調査範囲が広がり、H～Pライン、32～36ラインの範囲となった。Tピットは平面形を確認した後、短軸方向に2分割し、掘り下げ、土層断面の写真撮影・実測、掘り下げ、完掘撮影、平面・断面実測などの手順で調査を進めた。なお、北側で確認されたTP-182・185の2基については、平面形を確認した後、西側部分を重機でトレンチ掘開する調査方法を採用した。また、TP-136・137・177・180・181・183・184の7基については、ピット内が冠水したため、その部分の土層の観察などは十分できなかったが、掘り下げは可能な限り行った。

整理作業は、調査を担当した調査員が図面の整理・素図作成を行い、遺構図のトレース・図版作成などは、埋文センターの整理作業の中で進めた。

（3）調査結果の概要（図2～4）

最終的に414㎡の調査を行い、14基の新たなTピットを確認し、既に確認されていた3基と合わせて17基のTピットの調査を完了した。結果的に平成14年度調査区の西側（26～34ライン）と東側（35～48ライン）の間を埋めることとなり、平成14年度確認・調査の173基と合わせて187基のTピットが発見されたことになる。遺物は、重機による調査中に発見された土器片2点のみで、縄文時代中期と晩期のものである。

17基のTピットは平面形からみると、楕円形と溝状の二つのタイプがある。楕円形のタイプは2基（TP-183・186）で、全体状況が分かるTP-186は底面が長方形に掘り込まれ、杭跡とみられる小ピットが6ヵ所ある。冠水のため、実測できなかったTP-183は底面の長方形の掘り込みは確認できたが、杭跡の存在は確認できなかった。しかし、TP-186同様に打ち込みの杭が存在した可能性が強い。2基は8.5mの間隔があるが、平成14年度調査のTP-9・100・168（9・100はC型と分類されている）と組み合わせられて北東-南西方向に3～7mの間隔で直線的に配列している。

溝状のタイプは15基（TP-94・136・137・174～182、184、185、187）で、長さの上から大きく大中小の三つに分けられる。大型は長さが3m以上の3基（TP-180・184・185）とそれに次ぐ1基（TP-181）の合計4基で、北東-南西方向に弧状に連なる。平成14年度調査の東側のTP-75と西側のTP-102・135・167（75はA1-L型と分類されている）などと長軸方向が同じで、連なりとなる可能性がある。中型は長さが1.7m前後の5基（TP-94・136・174・178・187）と2m前後の5基（TP-137・175～177・179）の合計10基で、TP-187以外は調査区の南側に隣接して分布する。長軸方向と分布のまとまりからTP-94・136、TP-178・179・137、TP-177・176・175・174の3列に分けられ、平成14年度調査のB型の分布と配列傾向が一致する。小型は長さが1m以下の1基（TP-182）のみで、大型の4基と分布・配列・長軸方向などが一致している。

今回行われた調査で発見された17基のTピットは平成14年度調査のTピット群と形態・大きさの傾向は一致している。配列については東西の調査区の間隙を埋めることができ、楕円形タイプの配列状況など、平成14年度の調査成果を補強することができた。（長沼）

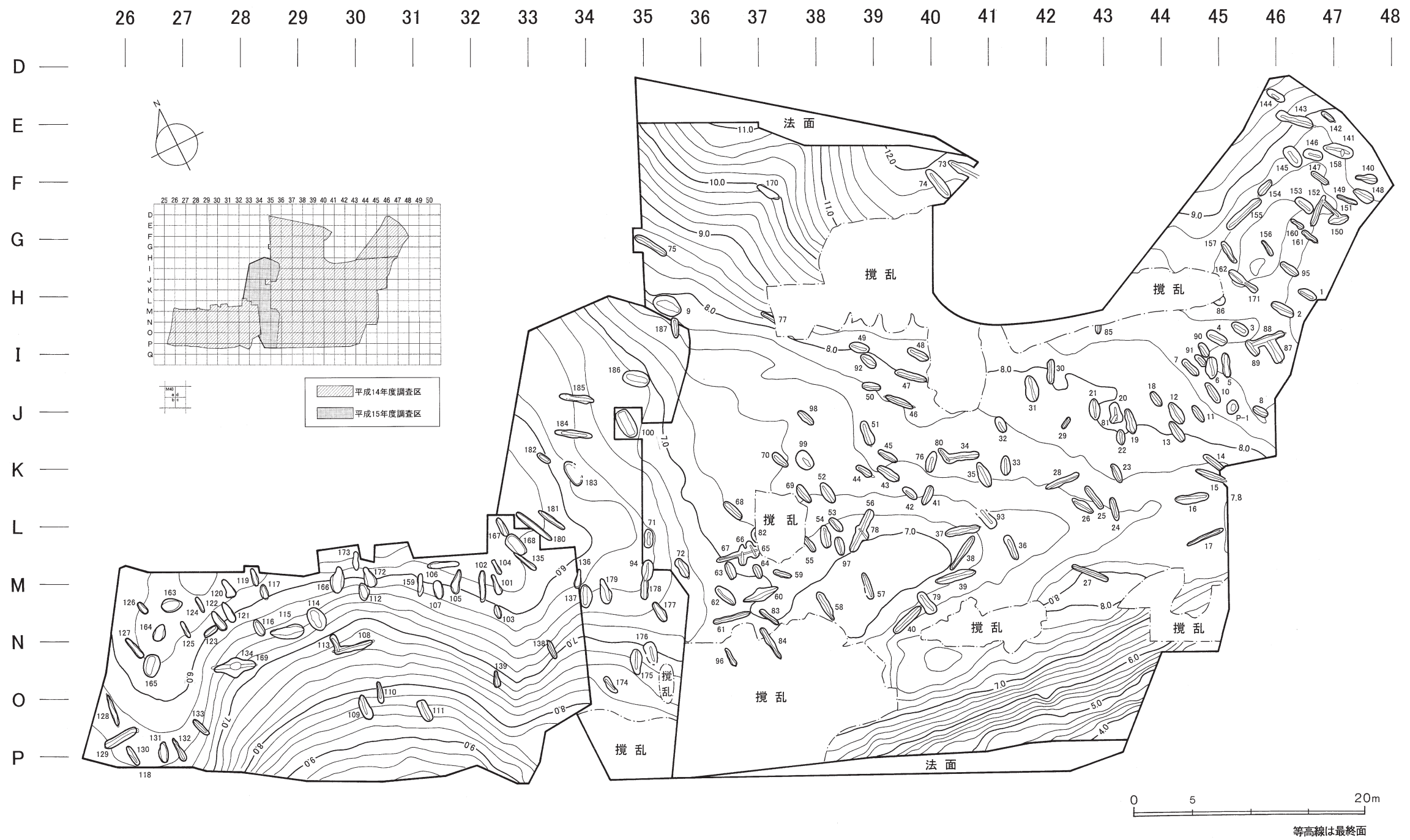


図-3 遺構配置図 (2)

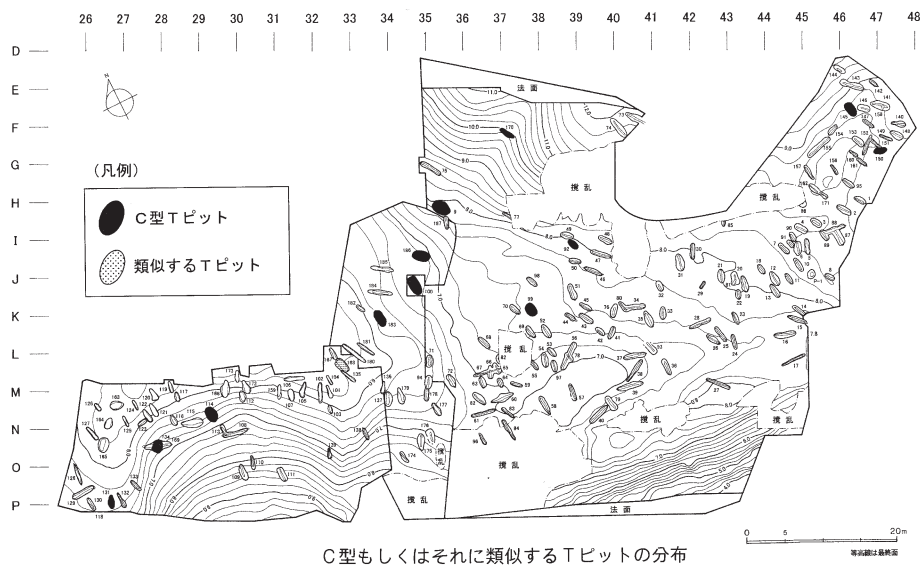
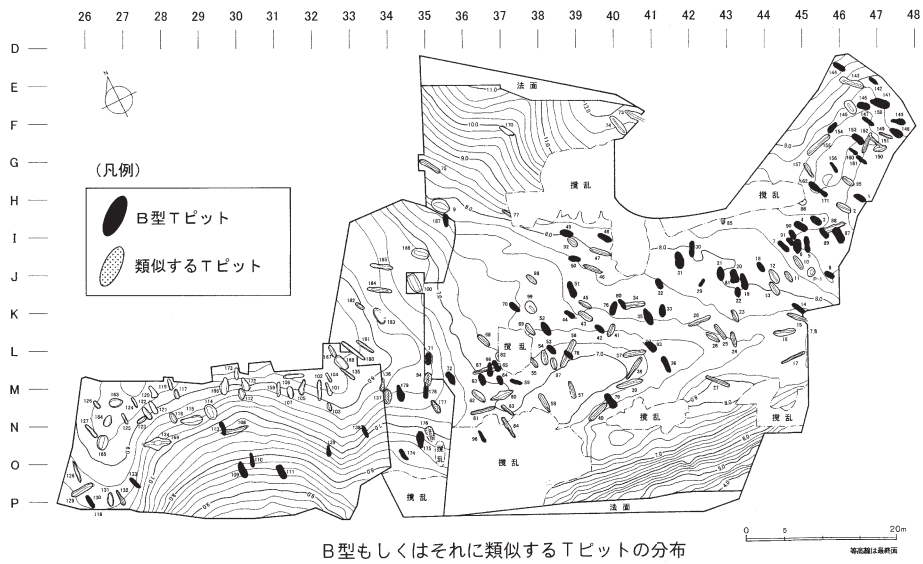
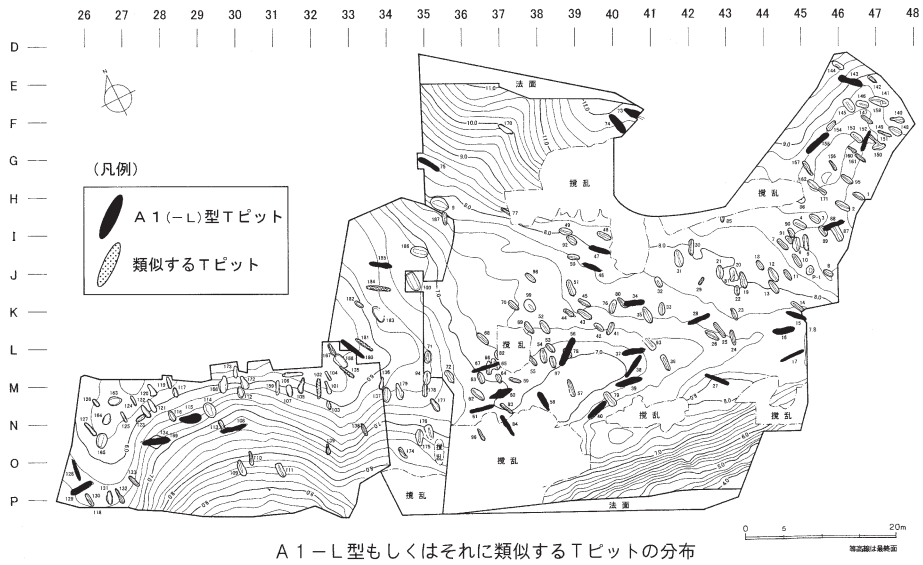


図4 形態別Tピットの分布

5 検出された遺構

TP-94 (図5 表2 図版2-2)

北向きの斜面下部に位置する。中央部分から北東側は平成14年度に調査されている(北埋調報186)。南東端はTP-178と重複しており、先後関係は覆土の平面・断面での観察から本Tピットが新しい。形態は長径(底面)1.58mの溝状を呈し、底面はおおむね平坦である。杭の痕跡などはみられなかった。底面が幅広の部分もあるが、長径などから「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」で分類された(以下、苫東分類)B1型のTピットに相当する。(山中)

TP-178 (図5 表2 図版3-7・8)

北向きの斜面下部に位置する。北東端はTP-94と重複しており、先後関係は覆土の平面・断面での観察から本Tピットが古い。形態は長径(底面)1.6m程度の溝状を呈し、底面は北東側(斜面下方)へむかって次第に浅くなる。杭の痕跡などはみられなかった。底面長短比は7程度と推測され、苫東分類のB1型に相当する。(山中)

TP-136 (図5 表2 図版2-3・4)

北向きの斜面下部に位置する。平成14年度に一部が調査されている。TP-137と上部が重複しており、断面での観察から本Tピットが新しい(北埋調報186)。両者の検出された部分は土壌の凍結が著しかったため、重複状況を平面で観察することはできなかった。湧水のため底面は検出できなかったが、それより上位の形態から長径(底面)1.5m前後の溝状を呈するTピット(苫東分類のB型)と想定される。(山中)

TP-137 (図5 表2 図版3-1・2)

TP-136の南側に位置し、平成14年度に南西側の一部が調査されている。平成14年度の調査ではTP-136と上部が重複しており、断面での観察から本Tピットが古い。さらにTP-136から掘り上げられた土によって上部が埋め戻された可能性が考えられている(北埋調報186)。今回調査された部分でも掘り上げ土とみられる覆土(覆土1層)が確認され、覆土2層まで自然に埋没した時点で埋め戻された可能性がある。湧水のため底面は検出できなかったが、それより上位の形態から長径(底面)1.5m前後の溝状を呈するTピット(苫東分類のB型)と想定される。(山中)

TP-174 (図6 表2)

調査区南側の平坦部に位置する。上部は過去に掘削され消失していた。底部の平面形は溝状で、苫東分類のB1型に相当する。(宗像)

TP-175 (図6 表2 図版3-3・4)

北向きの斜面に位置し、長軸は傾斜にほぼ直交する。底部の平面形は溝状を呈する。壁面は北東端がややオーバーハングする。苫東分類のB1型に相当する。(宗像)

TP-176 (図6 表2)

北向き緩斜面に位置する。一部に電柱やアンカーの攪乱を受けている。Ⅷ層中に掘り込まれており、覆土はこのパミスの崩落を主体としている。そのため、壁面・底面はパミスの色調やしまりのわずかな違いから判断した。崩落により坑口部が広がり楕円形で、底面は溝状のものである。苫東分類のC1型に相当する。(藤原)

TP-177 (図7 表2 図版3-5・6)

北向き緩斜面の裾部分に位置する。湧水により完掘はできなかったが、およその深さはピンポールを刺して推測した。床面はほぼ平坦と推測できたが、杭跡の有無は不明である。なお、ほぼ長軸方向に沿うように木根の攪乱がある。苫東分類のC型に相当する。(藤原)

TP-179 (図7 表2 図版3-9・4-1)

北向きの斜面下部に位置し、長軸は傾斜にほぼ直交する。底部の平面形は、ややS字状に湾曲。壁面は、本来ほぼ垂直に立ち上がっていたと思われるが、VII a・b層の崩落により、中段部が抉れた形状を示している。苫東分類のB1型に相当する。(宗像)

TP-180 (図8 表2 図版4-2・3・5)

沢地形部分のくぼ地に位置する。そのため、20cmほど掘り下げた段階で湧水により調査不能となった。おおよその深さはピンポールを刺して推測した。今回調査区域内では最も長いものである。上位の形態から苫東分類のA1型に相当すると推測される。(藤原)

TP-181 (図8 表2 図版4-4・5)

調査区中央部の低位平坦部に位置する。底面は湧水のため検出できなかったが、湧水面からの深さは約50cmと考えられる(ピンポール差し込みによる推定)。壁面は、北西側端部がややオーバーハンクする。確認面の平面形態から、苫東分類のB型に相当すると考えられる。(宗像)

TP-182 (図8 表2)

調査区中央部の低位平坦部に位置する。湧水処理のため、北西部端部付近の底部をバックホーにより掘削した。壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。確認面の平面形態から、苫東分類のC型に相当すると考えられる。(宗像)

TP-183 (図8 表2 図版4-6・7)

西向きに斜面に位置し、長軸は傾斜に平行する。一部が試掘調査時のトレンチにより切られていた。底面は湧水のため検出できなかったが、湧水面からの深さは約50cmと考えられる(ピンポール差し込みによる推定)。壁面は、全体的に底部付近でややオーバーハンクする。確認面の平面形態から、苫東分類のC型に相当すると考えられる。(宗像)

TP-184 (図9 表2 図版4-8・9)

西向きに斜面に位置し、長軸は傾斜にほぼ直交する。底面は湧水のため検出できなかったが、湧水面からの深さは約40cmと考えられる(ピンポール差し込みによる推定)。壁面は、東端がややオーバーハンクする。確認面の平面形態から、苫東分類のB型に相当すると考えられる。(宗像)

TP-185 (図9 表2 図版5-1・2)

西向き緩斜面に直行するように位置する。平面形を確認した後、重機を用いて半裁した。底面は平坦部が不明瞭で短い。壁面は緩やかに立ち上がるように構築されており、オーバーハンクが著しい。推測した底面規模からは苫東分類のB1型に相当するが、上位の形状からA1型に近いものと推測される。(藤原)

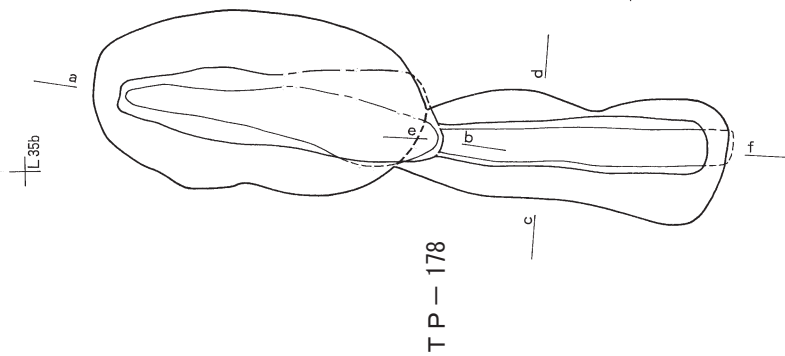
TP-186 (図10 表2 図版5-3~5)

西向き緩斜面に平行するように位置する。平面形は隅丸長方形で、底面はより直角に近い隅丸となっている。他の溝状のTピットに比べて浅い。一部掘り過ぎてしまった部分もあるが、底面は平坦で、6本の杭穴が確認できた。杭穴の配列は不規則で、先端が尖った杭を打ち込んだと推測される。苫東分類のC2型に相当する。(藤原)

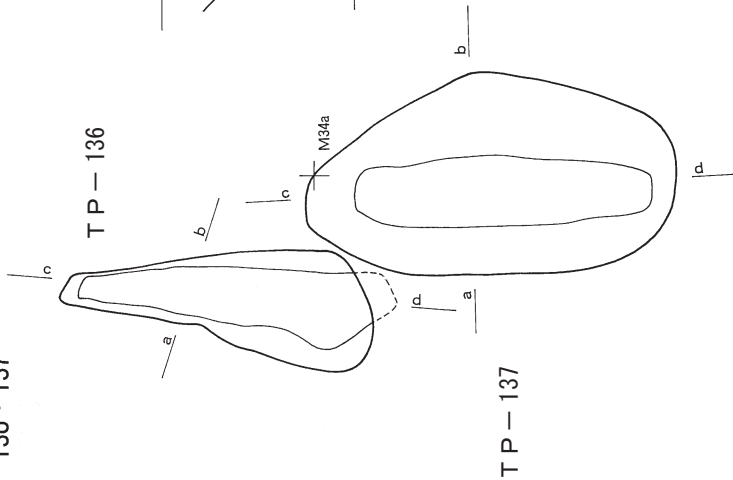
TP-187 (図10 表2 図版5-6・7)

南向きの斜面中部に位置する。形態は長径(底面)1.4mの溝状を呈し、底面は平坦である。杭の痕跡などはみられなかった。覆土は壁面などの崩落により自然に堆積したと判断される。長軸両端はオーバーハンクが著しい。底面長短比は7で苫東分類のB1型に相当する。(山中)

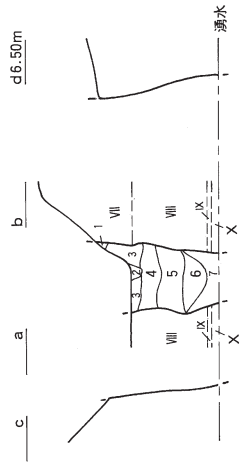
TP-94・178



TP-136・137

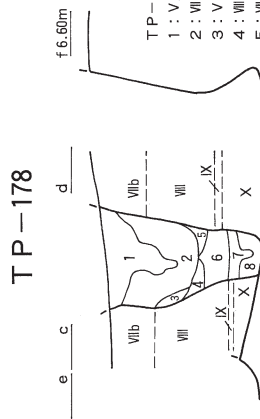


TP-136



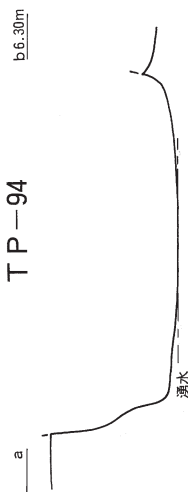
- TP-136
- 1: 黒褐色土>黄褐色軽石 軟~堅
 - 2: 黒色土+黄褐色軽石 軟
 - 3: 黒色土>黄褐色軽石 軟
 - 4: 黄褐色土・軽石>黒褐色土 軟
 - 5: 黒色土>黄褐色軽石 軟
 - 6: 黒褐色土>黄褐色土・軽石 軟
 - 7: 黒色土+黄褐色土・軽石の互層 軟

TP-178

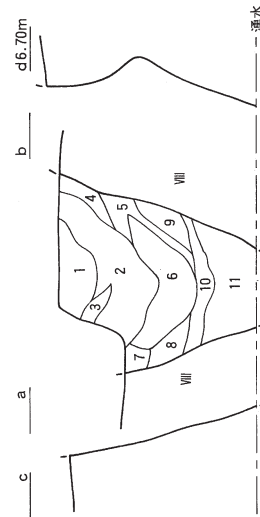


- TP-178
- 1: V主体 軟
 - 2: VIIb>V 軟
 - 3: V+VII しょう~軟
 - 4: VII主体 軟
 - 5: VIIb主体 軟
 - 6: V主体 軟
 - 7: VIIb主体 軟
 - 8: V>X しょう~軟

TP-94



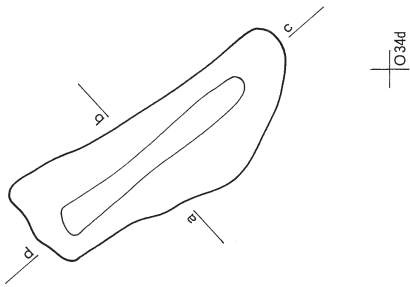
TP-137



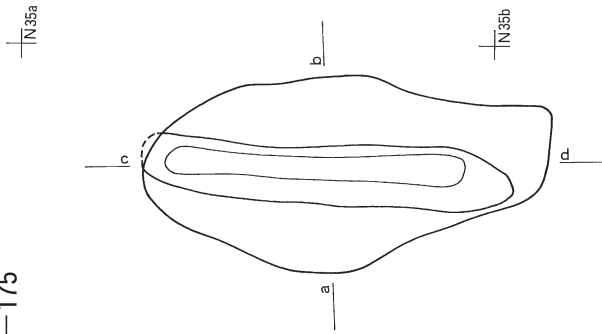
- TP-137
- 1: 黄褐色軽石主体 軟
 - 2: 黄褐色土・軽石+暗褐色土 軟
 - 3: 黒色土>黄褐色軽石 軟
 - 4: 黄褐色土・軽石>暗褐色土 軟
 - 5: 黄褐色土・軽石>暗褐色土 軟
 - 6: 黄褐色土・軽石>黒褐色土 軟
 - 7: 黒褐色土>黄褐色軽石 軟
 - 8: 黒色土>黄褐色軽石 軟

図5 TP-94・178・136・137

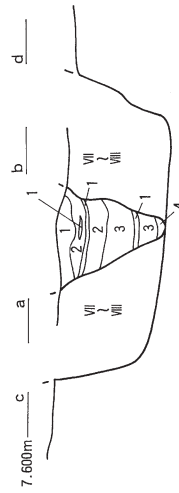
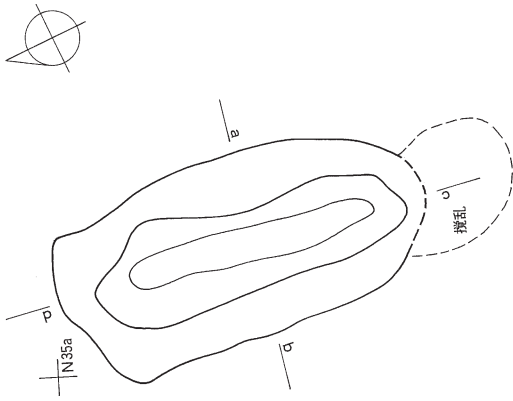
TP-174



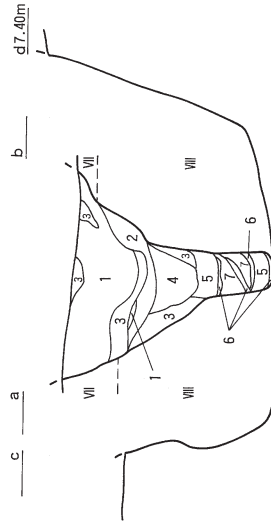
TP-175



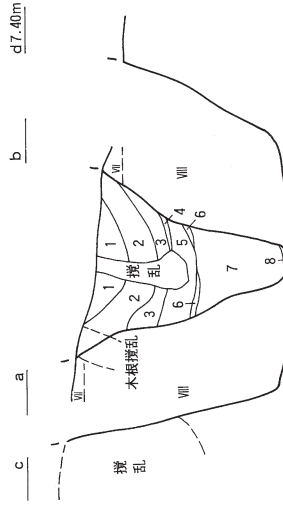
TP-176



- TP-174
- 1: 黒褐色土
 - 2: 黄褐色バミス
 - 3: 灰白色バミス
 - 4: 灰白色バミス



- TP-175
- 1: 黒褐色土
 - 2: 黒色土
 - 3: 灰白色バミス
 - 4: 黄褐色バミス
 - 5: 灰白色バミス
 - 6: 黒色土
 - 7: 黄褐色バミス

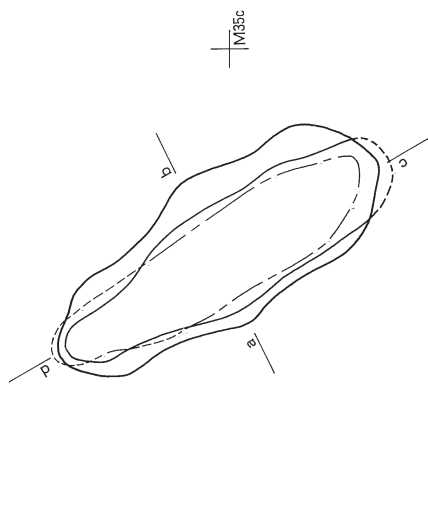


- TP-176
- 1: 黒褐色土
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 褐色硬石
 - 4: 暗褐色土
 - 5: 3と同じ
 - 6: 4と同じ
 - 7: VIII (粒径大)
 - 8: VIII



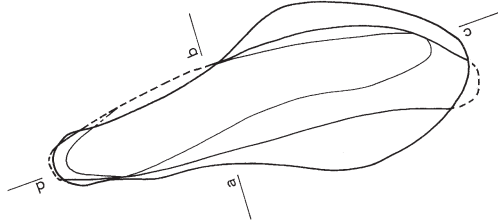
図6 TP-174~176

TP-177



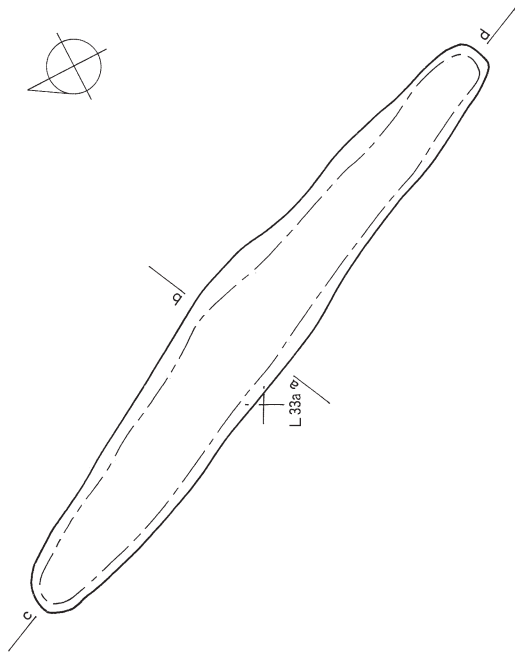
M35c

TP-179

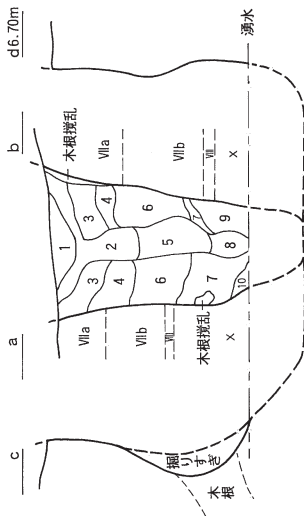


M34d

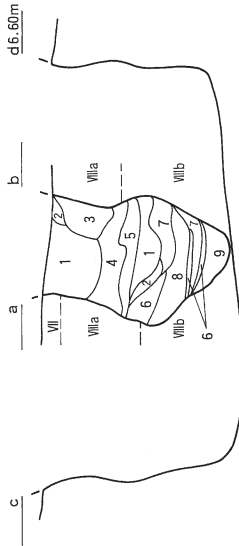
TP-180



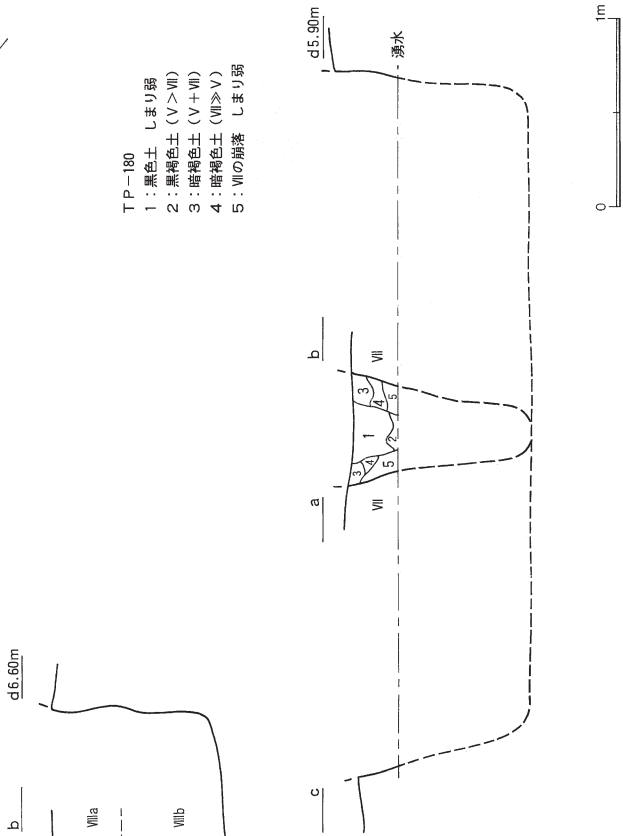
L.33a



- TP-177
- 1: 黒褐色土 しまり弱
 - 2: 暗褐色土 ≧ III 木根攪乱
 - 3: 黒褐色土 ≧ III
 - 4: 暗褐色土 (V+VII)
 - 5: 黒褐色土と暗褐色土の互層 木根攪乱
 - 6: 黒色土 ≧ 黒色土
 - 7: VIIbの崩落
 - 8: VIIbの崩落 ≧ 黒色土
 - 9: VIIbの崩落 ≧ 黒色土
 - 10: Xの崩落 しまりなし



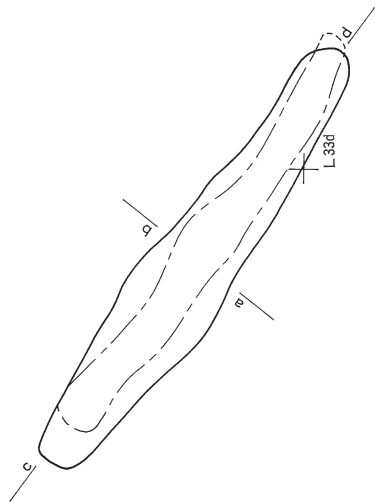
- TP-179
- 1: 暗褐色土 ≧ 灰白色パミス
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 黄褐色ローム しまりなし
 - 4: 黒色土 ≧ 黄褐色パミス
 - 5: 暗褐色土 + 黄褐色パミス
 - 6: 黒色土 ≧ 黄褐色ローム粒
 - 7: 灰白色パミス しまりなし
 - 8: 黄褐色パミス しまりなし
 - 9: 黒色土 + 黄褐色パミス



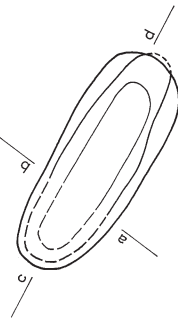
- TP-180
- 1: 黒色土 しまり弱
 - 2: 黒褐色土 (V > VII)
 - 3: 暗褐色土 (V+VII)
 - 4: 暗褐色土 (VII ≧ V)
 - 5: VIIの崩落 しまり弱

図7 TP-177・179・180

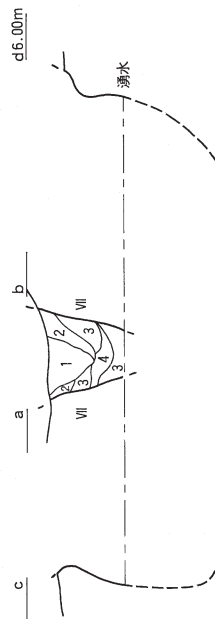
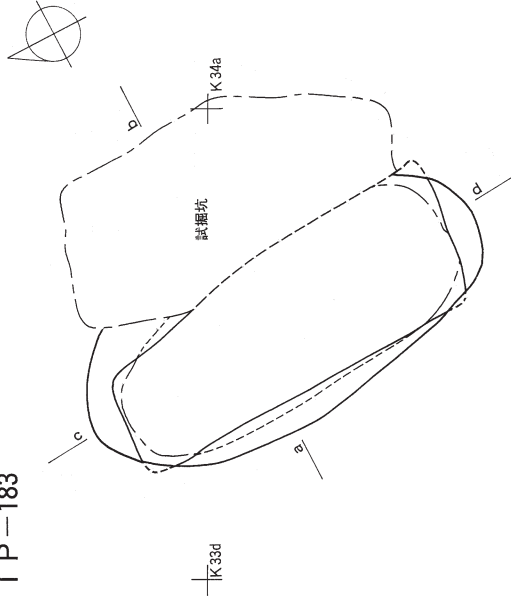
TP-181



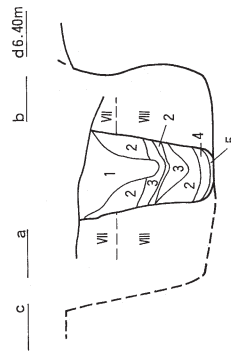
TP-182



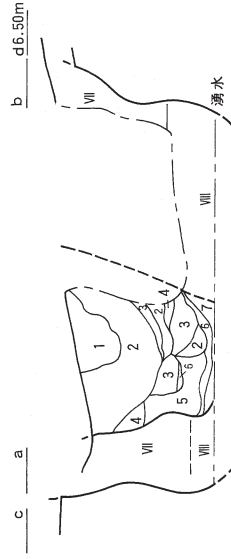
TP-183



- TP-181
- 1: 黒色土
 - 2: 暗褐色土
 - 3: 黄褐色ローム
 - 4: 黒色土



- TP-182
- 1: 黒色土>灰白色バミス
 - 2: 暗褐色土>黄褐色バミス
 - 3: 黒色土>灰白色バミス
 - 4: 赤褐色バミス(酸化)
 - 5: 黒色土

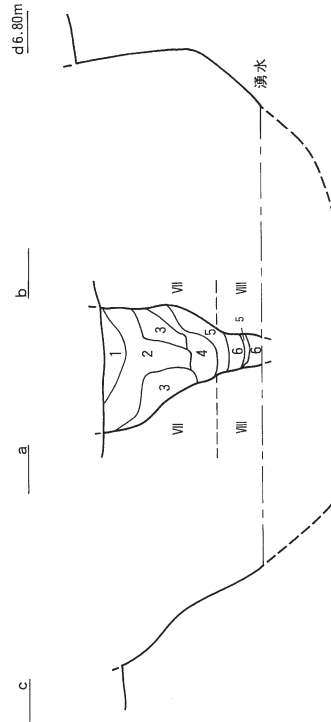
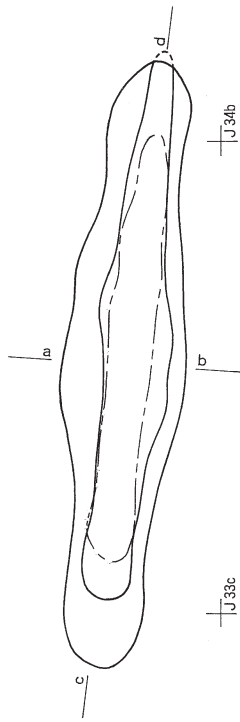


- TP-183
- 1: 黒色土>灰白色バミス
 - 2: 暗褐色土>灰白色バミス
 - 3: 暗褐色土>ローム粒・灰白色バミス
 - 4: 暗褐色土>ロームブロック
 - 5: 黄褐色ローム
 - 6: 黒色土 粘性あり
 - 7: 黄褐色バミス しまりなし



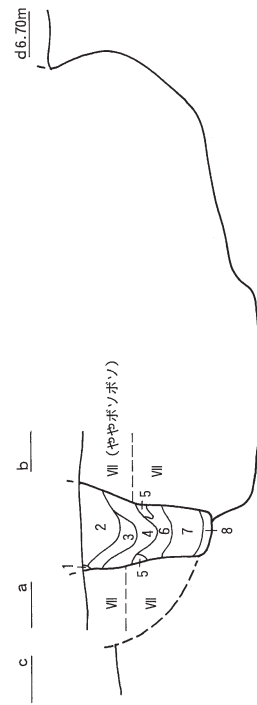
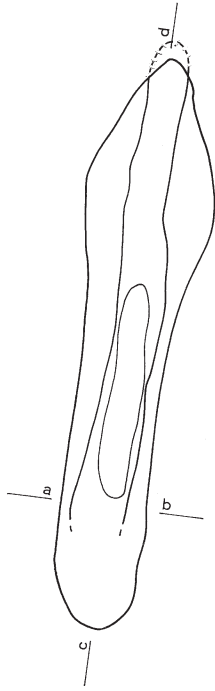
図8 TP-181~183

TP-184



- TP-184
- 1: 黒色土>バミス 堅
 - 2: 暗褐色土>バミス・ローム 堅
 - 3: 黄褐色ローム>黄褐色バミス
 - 4: 黒色土>ローム
 - 5: 黄褐色バミス>黒色土
 - 6: 黒色土>黄褐色バミス

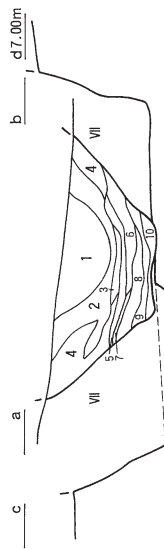
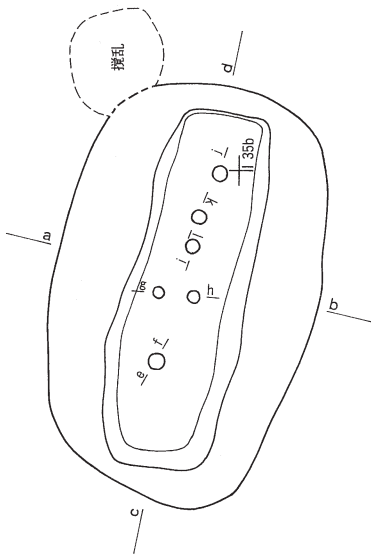
TP-185



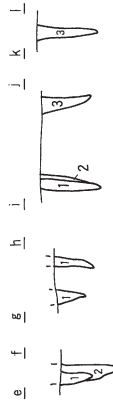
- TP-185
- 1: VIIの崩落 ボソボソ
 - 2: 黒色土
 - 3: 黒色土>ロームアブロック
 - 4: 黒褐色土+ロームアブロック
 - 5: 褐色土 (VII>V)
 - 6: 暗褐色土 (V+VII)
 - 7: 褐色土 (VII>V)
 - 8: 黒色土 しまりなし

図9 TP-184・185

TP-186

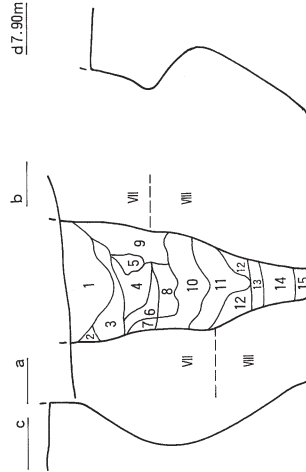
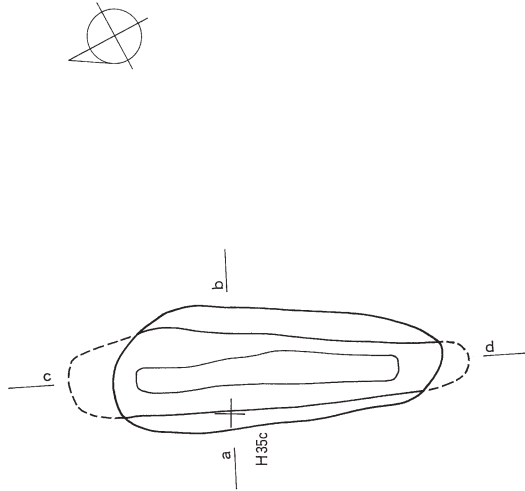


- TP-186
- 1: 暗褐色土>ロームブロック
 - 2: 黒褐色土>ロームブロック
 - 3: 褐色土 (汚れたVII)
 - 4: 暗褐色土 (V+VII) ポソボソ
 - 5: 黒色土>ローム
 - 6: 暗褐色土>ロームブロック
 - 7: 褐色土 (VII)
 - 8: 黒褐色土>ハマス
 - 9: 褐色土>ハマス
 - 10: 黒褐色土>>ハマス



- TP-186 杭跡
- 1: 黒色土>ローム
 - 2: V+VII しまり強
 - 3: 暗褐色土 ポソボソ

TP-187



- TP-187
- 1: V主体 堅
 - 2: VII主体 堅
 - 3: VII>V 堅
 - 4: V主体 軟
 - 5: V+VII 軟
 - 6: VII>V 軟
 - 7: VII主体 軟
 - 8: V>VII 軟
 - 9: VII主体 堅
 - 10: VII主体 軟
 - 11: VII主体 軟 (VII層中に混じる部分的な砂層の崩落)
 - 12: VII主体 軟
 - 13: V+VII しょう軟
 - 14: VII>V しょう軟
 - 15: V+VII しょう軟



図10 TP-186・187

6 包含層出土の土器 (図 11 表 1 図版 5-8)

包含層からは2点の土器が出土した。1はⅢ群b-1類に相当する萩ヶ岡3式土器である。RL斜行縄文施文後、半截竹管状工具による縦方向の押引文が施されている。厚手で胎土に少量の繊維、砂、海綿骨針が入っている。2はⅤ群に相当する晩期の土器であるが、詳しい型式名は不明である。LRの縄文がやや縦行気味に施文されている。薄手で内面は縦方向に調整され平滑である。

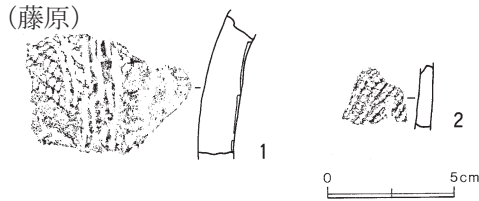


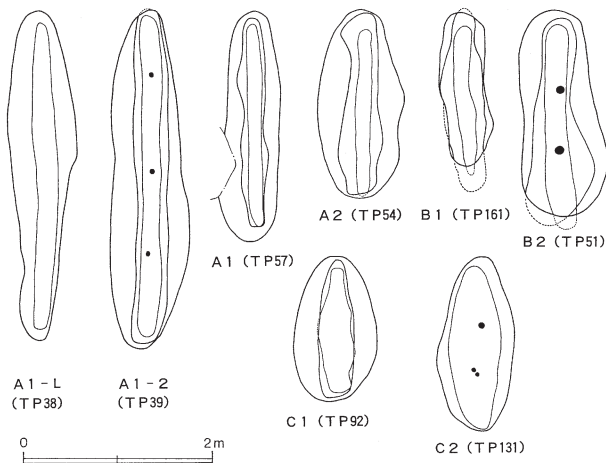
図 11 包含層出土の土器

表 1 包含層掲載土器一覧

掲載番号	発掘区	遺物番号	層位	破片点数	分類
1	M34 a	1	V a	1	Ⅲ b 1
2	I 35 a	1	V a	1	V

表 2 Tピット一覧 TP番号の()付きは「湧水あり」

図	図版	TP番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面/底面	確認面規模 (m)		底面規模 (m)		長さ (m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類
						長径	短径	長径	短径						
5	2-2	(94)	L34 c, L35 b	VII b	長楕円形/溝状	1.78	0.99	1.58	(0.33)	0.66	N-36° -E	0	178 → 94	(4.8)	B 1
5	2-4-5	(136)	L33 c, M33 d	VII~VIII	溝状/-	(0.92)	(0.36)	(0.98)	(0.28)	(1.34)	N-37° -E	-	137 → 136	-	-
5	4-2-2	(137)	M33 d	VII~VIII	長楕円形/-	1.96	1.07	(1.58)	(0.38)	(1.05)	N-21° -E	-	137 → 136	-	-
6	-	174	N34b, N34c	VII~VIII	長楕円形/溝状	1.66	0.75	1.22	0.18	0.62	N-13° -W	0		6.8	B 1
6	4-4-5	175	M34c, N34d	VII	長楕円形/溝状	2.17	1.04	1.60	0.21	1.25	N-25° -E	0		7.6	B 1
6	-	176	N35a	VII	長楕円形/溝状	2.01	1.00	1.35	0.28	1.19	N-12° -E	0		4.8	B 1
7	4-6-7	(177)	L35 c, M35 c	VII	長楕円形/-	1.97	0.82	(2.07)	(0.43)	(1.05)	N-3° -W	0		-	-
5	4-8-9	178	L34 c, L35 b, M34 d, M35 a	VII	溝状/溝状	(1.75)	0.70	(1.56)	0.21	0.84	N-29° -E	0	178 → 94	(7.4)	B 1
7	4-0 5-2	179	L34c, M34d	VII	長楕円形/溝状	2.27	0.95	2.03	0.40	1.17	N-6° -E	0		5.1	B 1
7	5-2-4 6	(180)	K32 c, K33 b, L33 a	VII	溝状/-	3.74	0.58	-	-	(1.08)	N-25° -W	-		-	A 1
8	5-5-6	(181)	J33a, J33b, J33c	VII	溝状/-	2.67	0.52	-	-	(0.52)	N-28° -W	-		-	A 1
8	-	182	J33b	VII	長楕円形/長楕円形	1.28	0.53	-	0.25	0.53	N-37° -W	-		-	-
8	5-7	(183)	J33c, K33d	VII	長楕円形/-	2.31	(1.00)	-	-	(0.93)	N-5° -W	-		-	-
9	5-8-9	(184)	J33a, J33b, J34a	VII	長楕円形/-	3.22	0.69	-	-	1.37	N-57° -W	-		-	-
9	6-2-2	185	I33 d, I34 b	VII	溝状/溝状	3.05	0.70	1.15	0.18	1.12	N-56° -W	0		6.4	A 1
10	6-4-6	186	I34 c・d, I35 a・b	VII	隅丸長方形/隅丸長方形	2.24	1.38	1.83	0.70	0.63	N-52° -W	6		2.6	C 2
10	6-7-8	187	H35 a・b・c・d	VII	溝状/溝状	1.76	0.66	1.40	0.20	1.31	N-23° -E	0		7.0	B 1



Tピット分類基準
 A型：長短比が9以上のもの
 A 1：長径2m以上
 A 1-L：長径2.4m以上
 A 1-2：杭跡のあるA 1型
 A 2：長径2m未満
 B型：長短比が5~8のもの
 B 1：杭跡なし
 B 2：杭跡あり
 C型：長短比が4以下のもの
 C 1：杭跡なし
 C 2：杭跡あり
 D型：長さ1m、幅0.2m前後の小規模なタイプで、深さ0.5m以下のもの

図 12 Tピットの分類



1. 調査区全景（西から）



2. 調査風景（西から）

図版 2



1. 遺跡完掘（東から）



2. TP-94 完掘（南西から）



3. TP-136 土層断面（南西から）



4. TP-136 完掘（南西から）



1. TP-137 土層断面 (南西から)



2. TP-137 完掘 (南西から)



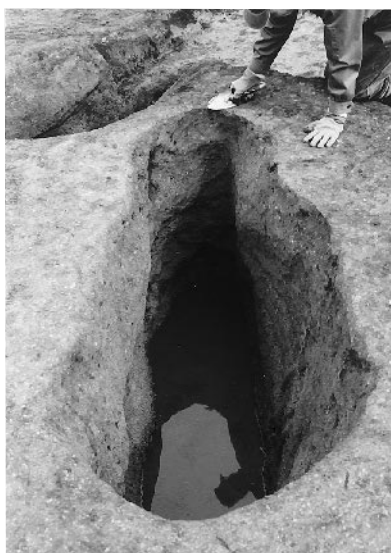
3. TP-175 土層断面 (南から)



4. TP-175 完掘 (南から)



5. TP-177 土層断面(南西から)



6. TP-177 完掘 (南から)



7. TP-178 土層断面 (南西から)



8. TP-178 完掘 (南西から)



9. TP-179 土層断面 (南から)

図版 4



1. TP-179 完掘 (南から)



2. TP-180 土層断面 (東から)



3. TP-180 完掘 (南から)



4. TP-181 土層断面 (南西から)



5. TP-180・181 完掘 (東から)



6. TP-183 完掘 (南東から)



7. TP-184 土層断面 (西から)



8. TP-184 完掘 (西から)



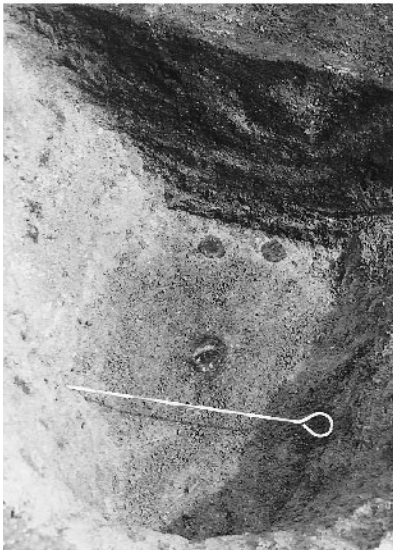
1. TP-185 土層断面 (北西から)



2. TP-185 完掘 (北西から)



3. TP-186 土層断面 (南西から)



4. TP-186 杭穴検出 (南西から)



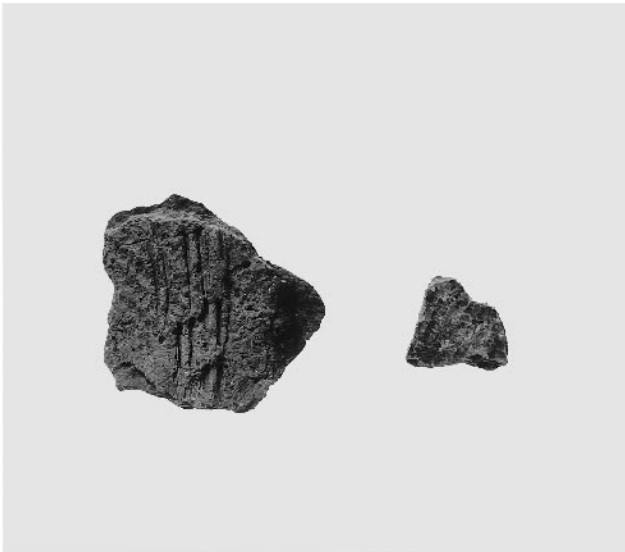
5. TP-186 完掘 (北西から)



6. TP-187 土層断面 (南西から)



7. TP-187 完掘 (南から)



8. 包含層出土の土器



1. 平成 14 年度調査区全景（南西から）



2. 平成 14 年度完掘（西から）

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第202集

鷓川町 米原4遺跡(3)・宮戸4遺跡(3)

—日高自動車厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成16年3月26日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地-1

TEL(011)386-3231 FAX(011)386-3238

[E-mail]mail@domaibun.or.jp

[URL]http://www.domaibun.or.jp

印刷 株式会社 須田製版

〒063-8603 札幌市西区二十四軒2条6丁目

TEL(011)621-0275 FAX(011)642-8189